

瀬戸大橋建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告 I

羽佐島遺跡 (I)

本文編

1984・1

香川県教育委員会
本州四国連絡橋公団

羽佐島遺跡(Ⅰ) 正 誤 表

頁	訂 正 箇 所	誤	正
63	上から14行目	1184	1183
70	実測図85		削 除
288	上から9行目	321~358・ 362~394	321・325~374
〃	上から10行目	359~361	322~324
290	上から11行目	331	335
〃	下から9行目	322・331	326・335
359	第37表中	玻 離 質 安 山 岩	玻 璃 質 安 山 岩
393	下から11行目	石 錐	石 鐘
413	下から12行目	半 載	半 載
419	30番観察欄	ファースト フレイス	ファーストフレイク
420	70番観察欄	打 痕	打 点
		基端部に盤状剥片の打痕の一部を残す。	背面は盤状剥片の打面からなる。
421	85番		すべて削除
430	319番観察欄	刃 部	刃 部
446	731番観察欄	風 端	先 端
454	946番観察欄	形要剥離	主要剥離面
455	973番観察欄	先端は尖らない	先端は尖る
456	1006番観察欄	主要剥離面を刃部側に施し、大きな打面を残す。	腹面には主要剥離面と打面をもつ。
457	1016番観察欄	鋭 い。	尖 る。
458	1046番観察欄	刃 部	刃 部
459	1077番観察欄	底面上半部	背面上半部
〃	1086番観察欄	側面か二次調整	側面か。二次調整
〃	1087番観察欄	内 部	刃 部

頁	訂 正 箇 所	誤	正
460	1115番観察欄	基部より小剥離	基部より小剥離
480	75・76間に挿入		76.59.60.37.30.14.40、 26.7.サヌカイト、削器。 対応する側辺部の上端部には自然面を残す。左図の上端と左側縁に調整を施す。
〃	番 号 欄	76~86	77~87
485	21・24番石質欄	玻 璃 質 安 山 岩	サヌカイト
487	40番観察欄	2面より、	2面よりなり、
490	113番観察欄	細かい翼状剥片	細かい。翼状剥片
523	番 号 欄	321~357 358~361	325~361 321~324
〃	359番石質欄	玻 璃 質 安 山 岩	サヌカイト
533	39番観察欄	打面移転	打面転移
540	第66表 1	接 器	削 器
〃	2	削 器	接 器
〃	7	削 器	楔状石器
〃	第67表 6	矢柄研磨器	矢柄研磨器

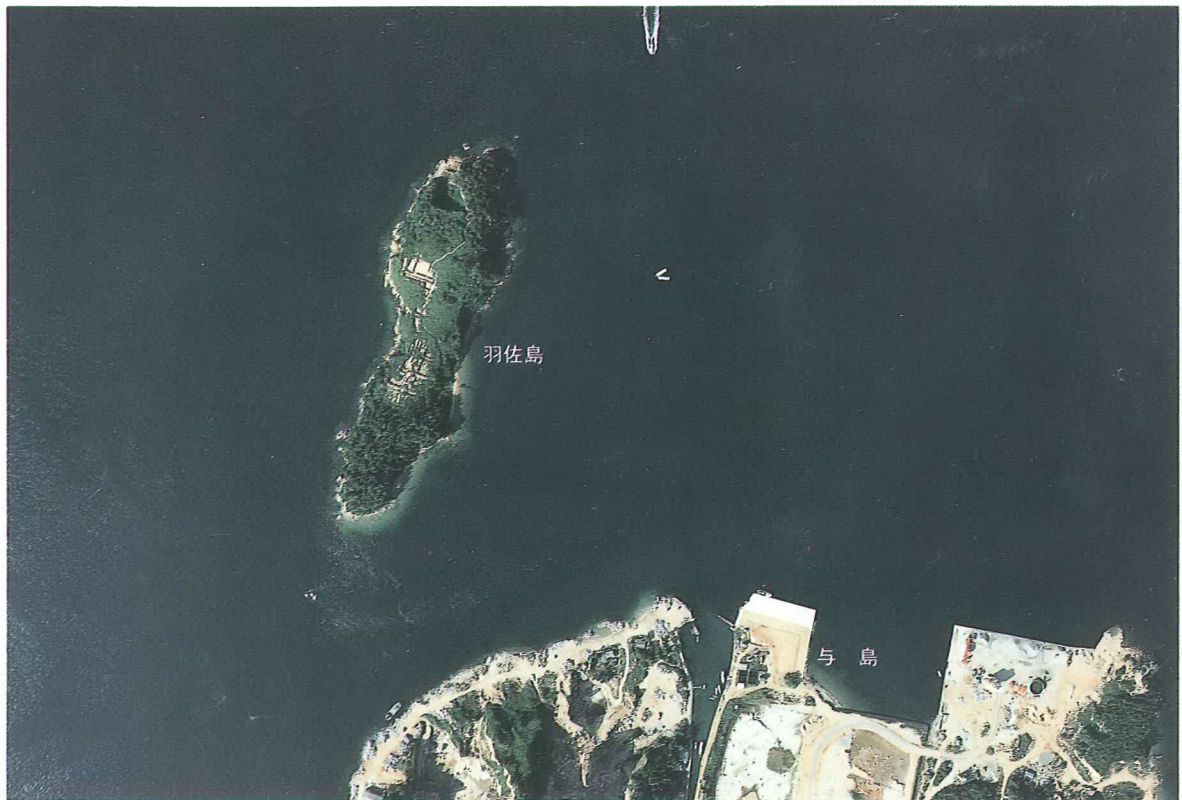
瀬戸大橋建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 I

羽佐島遺跡 (I)

本文編

1984・1

香川県教育委員会
本州四国連絡橋公団

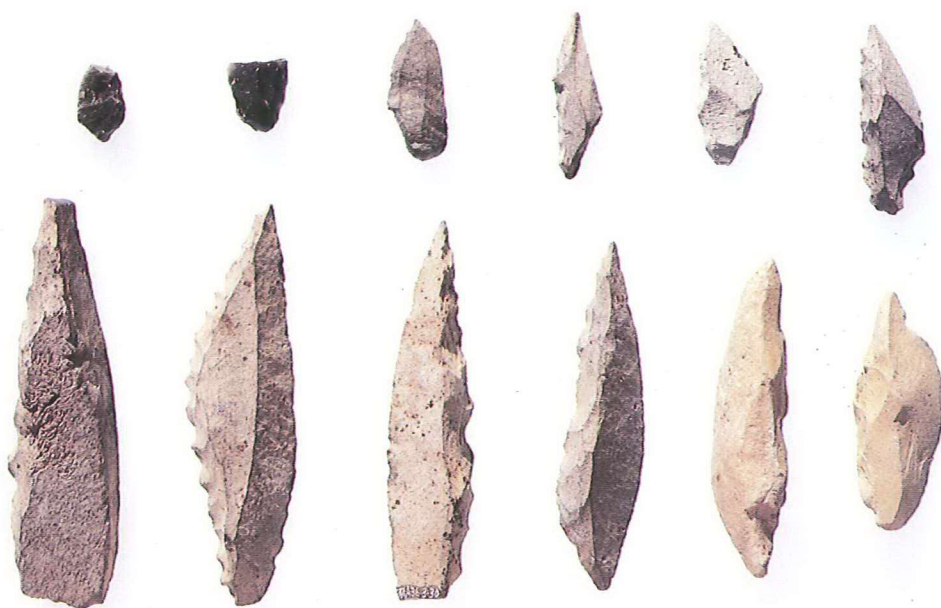


羽 佐 島 全 景



羽佐島遺跡発掘調査風景

卷首図版



羽佐島遺跡出土石器（ナイフ形石器）



羽佐島遺跡出土石器（翼状剝片石核・尖頭器・舟底形石器・
細石核・スポール・彫器）

卷首図版



羽佐島遺跡出土石器（矢柄研磨器・有舌尖頭器・石槍）



羽佐島遺跡出土土器（押型文土器・弥生土器・輸入磁器・緑釉土器）

序

瀬戸大橋建設工事に伴う埋蔵文化財の調査は、昭和51年に予備調査に着手以来すでに8年を経えておりますが、その間櫃石島・与島・岩黒島・羽佐島4島で9万㎡にわたって発掘し、多大の成果をあげてまいりました。

このような調査の成果は逐次報告書にして刊行してまいる計画であります。このたびは昭和53・54年度に実施した羽佐島遺跡についてその成果をまとめ『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』の第1冊目として刊行するはこびとなりました。

羽佐島遺跡では25万点にのぼる旧石器時代の各種遺物が出土し、西日本でも有数の旧石器時代遺跡として注目されるようになりました。本書には、そうした膨大な旧石器時代資料のほか、縄文時代から中世に至るまでの調査の成果も収録されています。本書が埋蔵文化財の保護のために広く活用されることを願ってやみません。

最後に、この調査について長期間にわたっていろいろご援助、ご協力をいただいた本州四国連絡橋公団第二建設局・同児島工事事務所・同坂出工事事務所・坂出市教育委員会をはじめとする地元関係者各位に心より感謝申し上げます。

香川県教育委員会

教育長 吉岡典威

例 言

- 1 本書は、昭和53・54年度に瀬戸大橋建設に伴って実施した坂出市与島町羽佐島遺跡の発掘調査報告書（本文編・図版編の2分冊）である。

なお、出土遺物その他調査資料の本格的な整理業務は、昭和56～58年度にかけて行った。

- 2 発掘調査及び資料整理業務は、本州四国連絡橋公団より委託を受けて香川県教育委員会文化行政課が実施した。

昭和58年度の調査組織は、下記のとおりである。

総 括 課 長	遠 藤 啓	調査担当 係 長	秋 山 忠
課長補佐	林 茂	主任技師	渡 部 明 夫
副 主 幹	松 本 豊 胤	〃	藤 好 史 郎
庶 務 係 長	下 河 芳 樹	技 師	小 西 正 行
主 査	加 納 覚	〃	真 鍋 昌 宏
		〃	西 岡 達 哉
		嘱 託	安 藤 一
		〃	坂 口 淳 子

なお、昭和52年度の予備調査以来、発掘調査及び資料整理には松本豊胤の指導のもとに、次の職員が当たった。

昭和52年度予備調査	廣 瀬 常 雄 ・ 大 山 真 充
昭和53年度発掘調査	牟 礼 良 典 ・ 斉 藤 賢 一 ・ 唐 木 裕 志
	山 本 哲 也 ・ 大 砂 古 直 生 ・ 白 本 清
	西 村 尋 文 (以上転出)
	渡 部 明 夫 ・ 藤 好 史 郎 ・ 大 山 真 充
昭和54年度発掘調査	竹 下 和 男 ・ 白 本 清 ・ 町 川 義 晃
	西 村 尋 文 ・ 中 西 昇 (以上転出)
	渡 部 明 夫 ・ 藤 好 史 郎
昭和56～58年度資料整理	渡 部 明 夫 ・ 坂 口 淳 子 ・ 玉 城 一 枝 (転出)

- 3 本書の執筆は、第2章1・3を秋山忠が分担したほかは、渡部明夫が担当した。編集は秋山忠、渡部明夫、真鍋昌宏が行った。
- 4 調査の実施や整理、報告に際して、下記の方々から多大なご協力、ご教示を受けた。記して深く謝意を表したい。

与島瀬戸大橋対策協議会、同自治会、櫃石島瀬戸大橋対策協議会、同自治会、本四公団児島工事事務所、麻生優、小林達雄、小野昭、春成秀爾、松藤和人、柳田俊雄、古市光信、大津忠彦、行田裕美、清水宗昭、橘昌信、西村尋文、二宮忠司、丹羽野裕、古森政次、麻柄一志、安川豊史、山口讓治、石神怡

目 次

第1章 遺跡の立地と環境	
第2章 調査の経過	
第1節 調査に至る経過	13
第2節 調査の経過と発掘の方法	14
1. 調査の経過	14
2. 発掘の方法	21
第3節 整理作業の経過	23
第3章 層序と遺構	
第1節 土層序と遺物の出土状態	27
1. 土層	27
2. 遺物の出土状態	28
第2節 遺構と遺構出土遺物	55
1. 遺構	55
2. 出土遺物	58
第4章 遺 物	
第1節 旧石器時代の出土遺物	59
1. ナイフ形石器	59
2. 舟底形石器	147
3. 尖頭器	153
4. 彫器	154
5. スポール	165
6. 石錐	167
7. 削器・搔器	169
8. 楔状石器	171
9. 二次調整ある剝片	187
10. 横長剝片石核	190
11. 翼状剝片	252
12. 横長剝片	288
13. 大形剝片	322
14. 縦長剝片石核	322
15. 縦長剝片	339
16. 細石核	359
17. 細石刃	362
18. 叩き石	363
第2節 縄文時代以降の出土遺物	390
1. 石鏃	390
2. 縄文時代の石器	393
3. 土器類・その他	401
第5章 おわりに	411
石器観察表	418

挿 図 目 次

(遺跡の立地と環境)

第1図 備讃瀬戸の位置……………	1
第2図 備讃瀬戸の島々と羽佐島の位置……………	2
第3図 坂出市周辺の旧石器時代遺跡分布図(1)……………	6
第4図 坂出市周辺の旧石器時代遺跡分布図(2)……………	7
第5図 羽佐島遠景……………	8

(調査の経過)

第6図 羽佐島遺跡予備調査グリッド配置図……………	15
第7図 羽佐島発掘風景……………	16
第8図 羽佐島地形図及びグリッド配置図……………	19～20
第9図 発掘風景……………	21
第10図 羽佐島遺跡発掘調査区……………	22
第11図 旧石器の実測作業……………	24
第12図 遺物の写真撮影……………	26
第13図 遺物実測図のトレース……………	26

(層序と遺構)

第14図 B 1～B 20西壁土層実測図……………	29～30
第15図 B 21～B 25西壁及び A 26-1～A 38-1 東壁土層実測図……………	31～32
第16図 A 37-1・A 38-1 付近の調査風景……………	33
第17図 A 37-1・A 38-1 遺物出土状態実測図(1)……………	34
第18図 A 37-2 第18面(最終面) 遺物 出土状態実測図……………	34
第19図 A 37-1・A 38-1 土層及び遺物出土状態 実測図(2)……………	35～36
第20図 B 21土層及び遺物出土状態実測図……………	37～38
第21図 A 6-1～A 6-3 土層及び遺物 出土状態実測図……………	39～40
第22図 B 6・C 6-1・C 6-2 土層及び 遺物出土状態実測図……………	41～42
第23図 A 36-1～A 36-2 土層及び遺物出土 状態実測図……………	43～44
第24図 A 36-3～A 36-5 土層及び遺物出土 状態実測図……………	45～46
第25図 A 6-1～C 6-2 包含層下部遺物 出土状態実測図……………	47～48
第26図 A 1-1～A 4-3・B 1～B 4 包含	

層下部遺物出土状態実測図……………	47～48
第27図 B 15～B 21・C 15-1～C 20-1 包含層下部遺物出土状態実測図……………	49～50
第28図 A 35-1～A 38-5 包含層下部 遺物出土状態実測図……………	51～52
第29図 A 33-1 第3層上面のピット……………	55
第30図 C 10-1 南東ピット実測図……………	56
第31図 C 10-1 南東ピット周辺出土石器 (第4層下部)……………	57
第32図 C 10-1 南東ピット出土遺物実測図……………	58
(遺物)	
第33図 ナイフ形石器実測図(1)……………	65
}	}
第115図 ナイフ形石器実測図(83)……………	147
第116図 舟底形石器実測図(1)……………	149
}	}
第119図 舟底形石器実測図(4)……………	152
第120図 尖頭器実測図(1)……………	155
}	}
第128図 尖頭器実測図(9)……………	163
第129図 彫器実測図……………	164
第130図 スポール実測図(1)……………	166
第131図 スポール実測図(2)……………	167
第132図 石錐実測図(1)……………	168
第133図 石錐実測図(2)……………	169
第134図 削器・搔器実測図(1)……………	172
}	}
第144図 削器・搔器実測図(11)……………	182
第145図 楔状石器実測図(1)……………	183
}	}
第148図 楔状石器実測図(4)……………	186
第149図 二次調整ある剥片実測図(1)……………	188
}	}
第151図 二次調整ある剥片実測図(3)……………	190
第152図 翼状剥片石核及び横長剥片石核 の剥離角度分布図……………	195
第153図 翼状剥片石核剥離角度分布図……………	195

第154図	横長剥片石核剥離角度分布図	195	第354図	羽佐島出土土器・土製品実測図(4)	410
第155図	横長剥片石核実測図(1)	196	第355図	細石核素材の作製工程図(想定復元)	413
}			第356図	石器計測基準図	417
第211図	横長剥片石核実測図(57)	252			
第212図	翼状剥片剥離角度分布図	254			
第213図	翼状剥片実測図(1)	255			
}					
第246図	翼状剥片実測図(34)	288			
第247図	横長剥片剥離角度分布図	290			
第248図	横長剥片実測図(1)	291			
}					
第278図	横長剥片実測図(31)	321			
第279図	大形剥片実測図	324			
第280図	縦長剥片石核実測図(1)	325			
}					
第193図	縦長剥片石核実測図(14)	338			
第294図	縦長剥片実測図(1)	341			
}					
第312図	縦長剥片実測図(10)	359			
第313図	細石核実測図(1)	364			
}					
第325図	細石核実測図(13)	376			
第316図	細石刃実測図(1)	377			
}					
第330図	細石刃実測図(5)	381			
第331図	叩き石実測図(1)	382			
}					
第338図	叩き石実測図(8)	389			
第339図	石鏃分類模式図	391			
第340図	石鏃実測図(1)	394			
}					
第347図	石鏃実測図(8)	401			
第348図	縄文時代の石器実測図(1)	402			
第349図	縄文時代の石器実測図(2)	403			
第350図	古銭拓影図	406			
第351図	羽佐島出土土器実測図(1)	407			
}					
第353図	羽佐島出土土器実測図(3)	409			

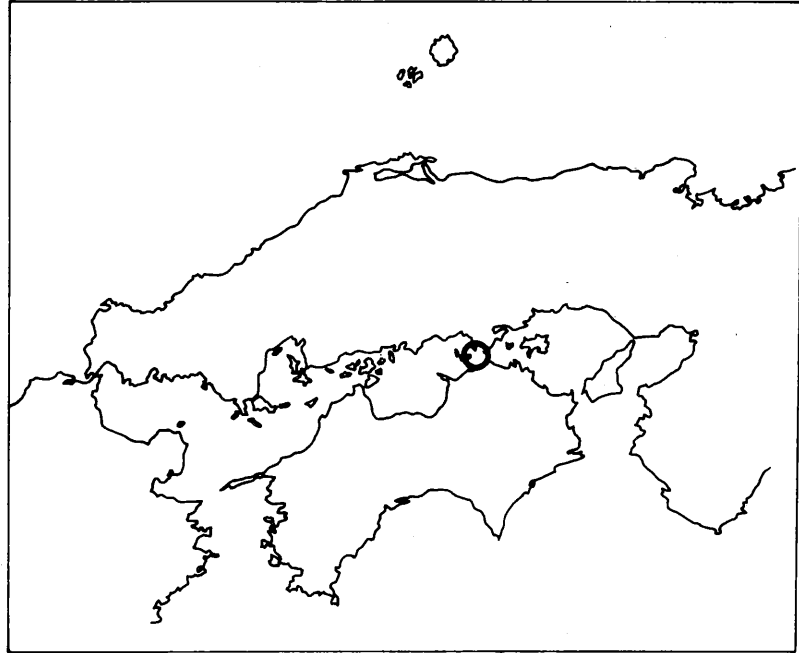
表 目 次

(遺跡の立地と環境)	
第1表 坂出市周辺の旧石器時代遺跡地名表……9～10	
(調査の経過)	
第2表 昭和58年度羽佐島遺跡の整理作業経過……25	
(層序と遺構)	
第3表 B6・B21・A37-1・A38-1の出土 遺物数とその内訳……28	第32表 横長剥片の長幅比 ……289
第4表 遺物出土数一覧表……53	第33表 横長剥片の剝離角度分布表 ……290
第5表 黒曜石製遺物出土分布表……54	第34表 縦長剥片石核出土分布表 ……322
第6表 黒曜石製遺物器種別出土分布表……54	第35表 縦長剥片出土分布表 ……339
第7表 玻璃質安山岩製遺物出土分布表……54	第36表 縦長剥片の長幅比 ……339
第8表 玻璃質安山岩製遺物器種別出土分布表……54	第37表 細石核出土分布表 ……359
(遺物)	
第9表 ナイフ形石器出土分布表……59	第38表 細石刃剝離痕の長幅比 ……361
第10表 国府型ナイフ形石器出土分布表……60	第39表 細石刃出土分布表 ……362
第11表 横長剥片・縦長剥片利用のナイフ形石器 出土分布表……60	第40表 細石刃の長幅比 ……363
第12表 ナイフ形石器の長幅比……61	第41表 叩き石出土分布表 ……381
第13表 国府型ナイフ形石器の長幅比……62	第42表 叩き石の長さ・重さの分布表 ……381
第14表 横長剥片利用のナイフ形石器の長幅比……63	第43表 石鏃出土分布表 ……390
第15表 ポイント状ナイフ形石器(仮称)の長幅比……64	第44表 石鏃の長幅比 ……392
第16表 舟底形石器出土分布表 ……148	第45表 押型文土器出土分布表 ……401
第17表 舟底形石器の長幅比 ……148	第46表 緑釉土器出土分布表 ……404
第18表 尖頭器出土分布表 ……153	第47表 流紋岩製遺物出土分布表 ……411
第19表 彫器・スポール出土分布表 ……165	第48表 ナイフ形石器観察表 ……418
第20表 横長剥片石核出土分布表 ……191	第49表 舟底形石器観察表 ……469
第21表 翼状剥片石核・横長剥片石核の長幅比 ……193	第50表 尖頭器観察表 ……471
第22表 翼状剥片石核の長幅比 ……194	第51表 彫器観察表 ……475
第23表 横長剥片石核の長幅比 ……194	第52表 スポール観察表 ……476
第24表 横長剥片石核における剥片剝離痕の長幅比 194	第53表 石錐観察表 ……477
第25表 翼状剥片剝離痕の長幅比 ……194	第54表 削器・搔器観察表 ……478
第26表 横長剥片剝離痕の長幅比 ……194	第55表 楔状石器観察表 ……482
第27表 翼状剥片石核の剝離角度分布表 ……195	第56表 二次調整ある剥片計測表 ……485
第28表 横長剥片石核の剝離角度分布表 ……195	第57表 横長剥片石核観察表 ……486
第29表 翼状剥片出土分布表 ……252	第58表 翼状剥片観察表 ……502
第30表 翼状剥片の長幅比 ……253	第59表 横長剥片計測表 ……517
第31表 翼状剥片の剝離角度分布表 ……254	第60表 大形剥片計測表 ……524
	第61表 縦長剥片石核観察表 ……525
	第62表 縦長剥片計測表 ……528
	第63表 細石核観察表 ……532
	第64表 細石刃計測表 ……536
	第65表 叩き石観察表 ……538
	第66表 C10-1南東ピット出土遺物計測表 ……540
	第67表 縄文時代の石器計測表 ……540
	第68表 石鏃計測表 ……541

第1章 遺跡の立地と環境

羽佐島遺跡は、備讃瀬戸の小さな無人島である羽佐島に所在する。地籍は「香川県坂出市与島町羽佐島」である。

瀬戸内海のほぼ中央部を占める備讃瀬戸には、本島・広島をはじめとした塩飽諸島が浮ぶが、その東部には、岡山県鷲羽山の南から櫃石島・岩黒島・羽佐島・与島・小与島・三ツ子島・沙弥島・瀬居島などが南北に並び、香川県坂出港に至る。羽佐島は坂出港から北へ約8 km、鷲羽山から南へ約4 kmほど離れ、与島の北西0.2 kmに位置する。約0.8 km北には岩黒島があり、約1.5 km西には本島が位置している。



第1図 備讃瀬戸の位置

羽佐島は南北約500 m、東西約150 m、面積0.03 km²ほどの規模を持ち、島内の北には標高32 m、南には標高22 mの低い頂部があって、中央部が鞍部となる低丘陵性の無人島である。島の東側と南側にわずかに砂浜が形成されているほかは、ほとんどが岩礁性の海岸となっている。全島は花崗岩と、それを覆う薄い風化土壌からなり、水源は存在しない。調査前には、島の南部は松林であったが、鞍部から北側の頂部にかけては、ササ・ススキ・クズなどで覆われていた。

島内では近世初期に畑作を行っていた記録があり、^{註(1)}昭和初期には鞍部に人が居住し、戦後の一時期にも採石や畑作が行われていたことを伝える。これを裏付けるかのように、島内南部の松の樹齢は20～30年を越えず、今回の調査によって鞍部から家屋跡と思われる整地跡・日用の陶磁器・戦前の銅貨などが検出されたほか、調査区北部では旧耕作土と思われる土壌が認められた。

備讃瀬戸の海底地形をみると、大部分は水深20～30 m以内の海底からなるが、与島の南側から東に向かって部分的に50 mを越える深みが続く。鷲羽山と櫃石島との間や、岩黒島と羽佐島の間とその東西、本島と牛島との間には30 mを越える深みが存在する。しかし、これのほとんどは潮流によって抉られたものと考えられているので、海水面が低下した旧石器時代の羽佐島は、平原状の盆地を東西に分断する丘陵頂部の一つであったと考えて良い。

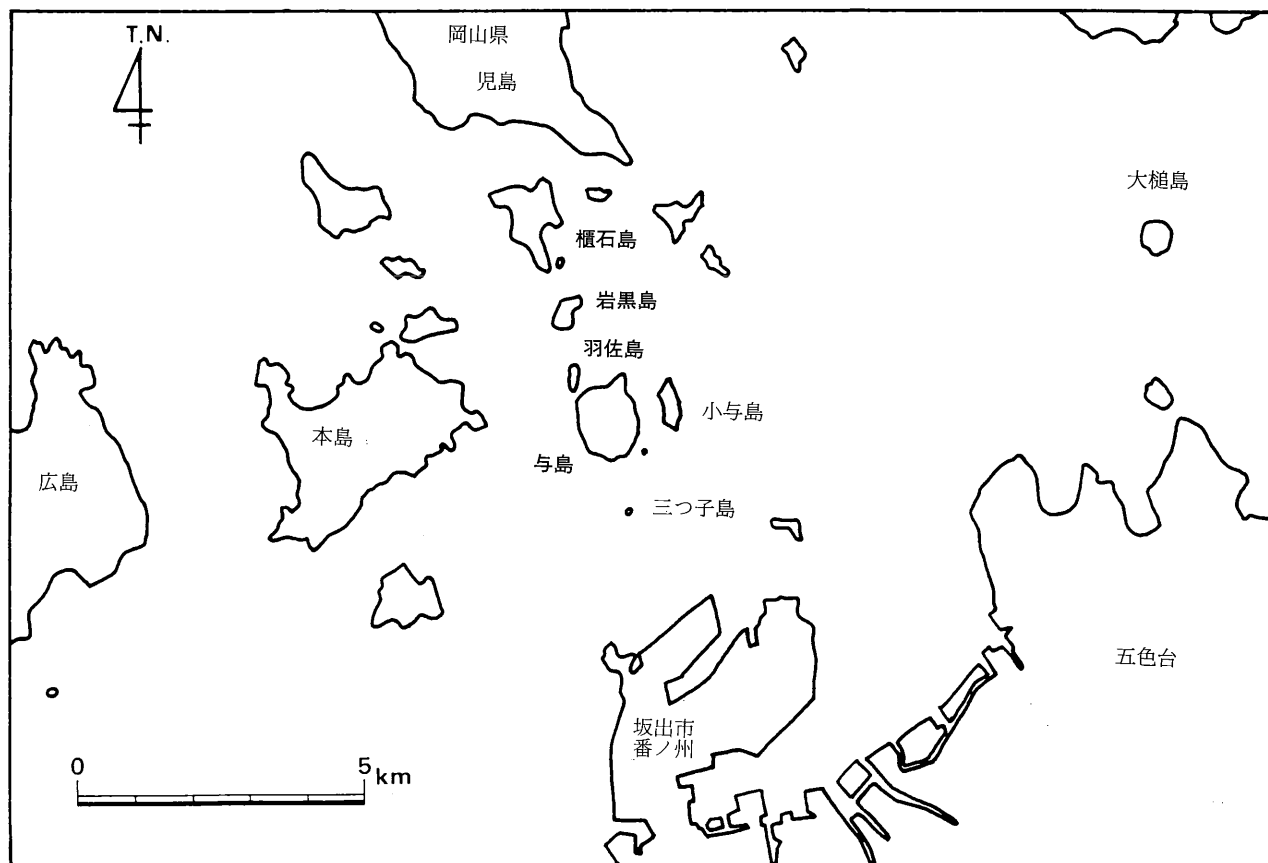
備讃瀬戸周辺の海底の地層をみると、一般に深いところでも海面下150 m前後で基盤岩の花崗岩・花崗閃緑岩に達し、その上に新世代第三紀末期から第四紀洪積世前期にかけて三豊層群が堆積し、さらに洪積世中期以後と考えられる大槌島層・洪積世後期ウルム氷河期の槌ノ戸瀬戸層・

沖積世の番ノ州層が堆積する。地点によって堆積層の内容は一定しないが、一般に三豊層群は海面下60~80mより下にほぼ水平に堆積し、番ノ州層は平均して20~30mの厚さを持つと共に、水深40~50mを越えて存在することはあまりないとされている。

羽佐島周辺では、鷲羽山から与島の南にかけて基盤の花崗岩が南北に続き、その東西には番ノ州層が広がっている。また、与島の南から東へのびる帯状の深みの縁辺部には、三豊層群や大槌島層・小規模な槌ノ戸瀬戸層などがみられ、与島の西側から櫃石島の西側にかけて南北に続く20~30m前後の深みや、岩黒島と羽佐島の東の深みには大槌島層や、部分的に槌ノ戸瀬戸層がみられる。^{註(2)}

こうした海底の深みや、その傾斜面からはナウマン象や野牛などの化石骨が漁網によって大量に引き揚げられているが、その多くは三豊層群上部か大槌島層など、比較的古い時期の洪積層からのものと考えられている。^{註(3)} しかし、なかには小豆島釈迦ヶ鼻沖で得られたナウマン象の牙製品のように明らかな人工品もあり、瀬戸大橋建設工事に伴って徳島県小鳴門海峡海底からサヌカイト製の石核・剥片・搔器ないし尖頭器が出土しているので、^{註(4)} 備讃瀬戸の海底からも今後さらに、島嶼部の旧石器時代遺跡との関連がより具体的に解明できる遺物が発見されるものと思われる。

羽佐島に旧石器時代の遺跡が存在することは、川畑迪氏によって1971年に確認されたが、備讃瀬戸にはそれまでに多くの旧石器時代遺跡が知られていた。



第 2 図 備讃瀬戸の島々と羽佐島の位置

この地域では、すでに戦前から岡山県鷲羽山遺跡や香川県与島東方遺跡などで旧石器時代のサヌカイト製石器が採集されていたが、当時は一般に日本に旧石器時代が存在しないと考えられていたことや、採集品が研究者の目にふれる機会を持たなかったことから、これらが正当に評価されることはなかった。与島小学校には、当時小学校に勤務されていた東山丈夫氏らが、1933年に与島東方遺跡で採集したサヌカイト製ナイフ形石器などが現在でも保管されている。

備讃瀬戸地域での本格的な旧石器時代研究は、相沢忠洋氏による群馬県岩宿遺跡の発見の影響のもとに、戦後の1951年以後、鎌木義昌氏を中心にして開始された。^{註(5)}

鎌木氏はこの地域における初めての旧石器時代遺跡の発掘調査として、1954年に岡山県鷲羽山遺跡の発掘調査を行い、丘陵尾根上から花崗岩風化土の旧石器時代遺物包含層を検出した。そして、第3層に多い大形縦長剝片を鷲羽山I、第2層の尖頭器を鷲羽山II、表土層のナイフ形石器を鷲羽山III、さらに同層の細石刃・細石核を鷲羽山IVとしてとらえ、旧石器の編年作業を開始した。^{註(6)} ついで鎌木氏は香川県井島遺跡の発掘調査を実施し、表土層及び第2層から出土した小形横剝刃器を井島第一群石器とし、表土層及び表採で得られた細石刃・細石核を井島第二群石器として、これらを鷲羽山遺跡の尖頭器より新しく位置づけた。そして、宮田山タイプのナイフ形石器を尖頭器と井島第一群石器との間におき、井島第二群石器の後に石鏃を主とする石器群を想定して、さらに押型文土器群へと続く編年案を作成した。^{註(7)}

井島遺跡の発掘調査に基づいた編年案は、その後、香川县城山遺跡の採集資料にみられるハンドアックスを備讃瀬戸最古の石器として追加したうえで、1957年に瀬戸内地方の旧石器編年として発表されている。^{註(8)} また、同年及び翌年には大阪府国府遺跡の発掘調査が行われ、これによって国府型ナイフ形石器の製作技法である瀬戸内技法が解明されることになった。^{註(9)}

この頃になると備讃瀬戸における旧石器時代研究も活発となり、遺跡・遺物の紹介や発掘報告が相次いだ。

遺跡・遺物の紹介では、1959年に川畑迪氏が国分台遺跡・城山遺跡をはじめ、櫃石島・与島・小与島・沙弥島遺跡や、瀬居島十ノ石遺跡・聖通寺山遺跡・茶白山遺跡・笠山遺跡・福ノ宮遺跡・雄山(東麓)遺跡・北峯(タンベ池)遺跡など、香川県坂出市の主要な旧石器時代遺跡とその採集品を紹介する^{註(10)}と共に、西川宏・杉野文一氏は岡山県宮田山西地点の石器を紹介した。^{註(11)} また、鎌木氏は1960年に城山遺跡採集の石器を紹介したが、この中で、鷲羽山IとIIの間に翼状剝片石器を入れ、これまで尖頭器に後続するとしていた小形半月形刃器を除くなど、さきの編年を若干修正している。^{註(12)}

遺跡の発掘とその報告をみると、1959年には岡山大学を中心に香川大学・香川県文化財保護協会などによって国分台遺跡が発掘調査され、膨大な旧石器時代遺物が出土している。さらに、1961年には高橋邦彦氏によって、与島西方遺跡・東方遺跡の発掘報告がなされ、^{註(13)} 翌年には鎌木氏によって兵庫県太島遺跡の調査内容がまとめられた。調査では、第3地点の第3層から横長剝片・縦長剝片利用の小形ナイフ形石器を主体とする石器が出土したが、鎌木氏はこれらを井島I型石器と認定したうえで、井島I型石器の純粋層を確認できたと評価した。そして、中部瀬戸内地方の石器編年表の中で、翼状剝片石器である城山III型石器を宮田山型石器とし、尖頭器の前に位置づけている。^{註(14)}

以上の状況のもとで、1965年に『日本の考古学』1が刊行され、それまでの研究の総括がなされた。このなかで、鎌木義昌・高橋護氏はほぼ従来の主張によりながらも、岡山県堅場島遺跡の発掘調査の結果などから、国府型ナイフ形石器と宮田山型ナイフ形石器をはじめて分離し、尖頭器は

宮田山型ナイフ形石器と井島 I 型石器に併行するとしている。この結果、瀬戸内地方の石器は、敲打器から縦長刃器、国府型ナイフ形石器、宮田山型ナイフ形石器、井島 I 型石器、井島 II 型石器へと変遷が考えられることになった。^{註(15)}

鎌木・高橋氏による研究は、その後の瀬戸内地方の旧石器研究の基礎となった。これ以後、瀬戸内地方の旧石器文化の体系的な研究はなく、両氏の研究成果に立脚しながら、あるいは両氏の研究成果を再検討することによって個別問題の深化をはかろうとする傾向が強い。

鎌木・高橋氏の研究が公表された直後には活発な研究はみられず、いくつかの採集資料が公表された程度である。ただ、この中で櫃石島採集の石器を公表した間壁葎子氏は、これまで不定形横剥ぎ剥片から作られたとされていた宮田山型ナイフ形石器の問題を取り上げ、その素材となる剥片が交互剥離の横長剥片石核から得られたとする考えを示して注目された。^{註(16)}

1973年には香川県坂出市与島東方遺跡^{註(17)}と瀬居島十ノ石遺跡^{註(18)}の発掘調査内容が報告された。両者とも小規模な発掘であったが、与島東方遺跡からは縦長剥片・尖頭器・有舌尖頭器などが出土し、十ノ石遺跡からはナイフ形石器などを出土している。しかし、与島東方遺跡では縦長剥片と尖頭器がともに第 2 層から出土し、土器も伴出するなど、遺物の出土に混乱が認められた。そして、これらの遺物を出土した包含層は、いずれも二次的に移動・堆積したものと考えられており、丘陵尾根上の花崗岩風化土層の不安定な事実が明らかにされている。

鎌木氏によって復元された瀬戸内技法は、奈良県と大阪府にまたがる二上山遺跡群の踏査記録が1974年に公表されたことによって、より精緻に分析・復元された。松藤氏はこの中で、瀬戸内技法には翼状剥片石核の素材となる盤状(板状)剥片を剥ぎ取る第 1 工程と、それに打面・石核調整を施したのち、連続して翼状剥片を剥離する第 2 工程、翼状剥片を加工してナイフ形石器を製作する第 3 工程が存在することを明らかにし、翼状剥片は盤状剥片に打面・石核調整を施したのち直接剥離されたとした。^{註(19)} 松藤氏はさらに1979年の『二上山・桜ヶ丘遺跡』において、第 1 工程の詳細な分析を行い、瀬戸内技法の研究を進めている。^{註(20)}

1976年には竹岡氏によってはじめて国分台遺跡群の本格的な紹介がなされた。^{註(21)} その後、竹岡氏は国分台遺跡群を中心にして、瀬戸内地方のナイフ形石器・瀬戸内技法の分析を発表している。^{註(22)}

一方、1977年には柳田氏によって、これまでの瀬戸内地方における石器の型式認定と層位に対して全面的な検討が行われた。その結果、花崗岩風化土層の層の形成過程や遺物の包含状態について不明な点が多く、遺物包含層に二次堆積層が認められること・石器編年が層位的な発掘事実によらない場合が多いこと・ナイフ形石器のうち、特に宮田山型ナイフ形石器の型式認定に疑問が残ることなどを指摘している。^{註(23)}

旧石器時代の遺跡調査については、1976年に大阪府津ノ江南遺跡で 3 地点に分れて出土した旧石器時代遺物の報告が行われた。^{註(24)} そして、1978年には大阪府郡家今城遺跡で検出された国府文化期のブロックの報告が行われて、^{註(25)} 瀬戸内地方の旧石器時代研究は新たな段階に入った。

1980年頃以後には、以前にも増して、瀬戸内地方の旧石器時代についてさまざまな研究が行われているが、^{註(26)} こうした状況のなかで、香川県では1976年の予備調査開始以来、瀬戸大橋建設に伴って島嶼部の旧石器時代遺跡が大規模に発掘調査された。各遺跡の調査は以下に略述するとおりである。

与島西方遺跡^{註(27)} (第 3 図16)

1977年9月から1978年2月まで予備調査が行われ、その結果、13,200m²を調査対象地区として、1977年12月から1982年1月まで本調査が実施された。調査地区は西方丘陵の北端部であるA地区から、尾根上を南に向って、B₁地区、B₂地区、C₁地区、C₂地区と設定された。

西方遺跡ではA地区とB₁地区に特に遺物が多く、各種のナイフ形石器や舟底形石器・削器・搔器・縦長剥片などを出土したが、尖頭器・細石刃などは少なかった。一方、C₂地区南端では細石刃・細石核がまとまって出土している。また、A地区から弥生時代中期後半の土器や、「神功開宝」が出土したことも注目される。

西方遺跡でも遺構はほとんど検出されなかったが、A地区第V層(羽佐島遺跡での第IV層に相当)に掘込まれたピットが3基知られている。ピットは直径0.5~1.5m、深さ15~30cmの深さで、ピット1とピット3では内部から花崗岩の礫が出土し、ピット3の礫は部分的に火を受けたものとみられている。遺構の性格は明らかではないが、旧石器時代よりのちの遺物は含んでいない。

羽佐島遺跡^{註(28)}(第3図15)

1977年10月に予備調査が行われ、1978年7月から1979年11月まで第1次調査が行われ、1983年7月から10月まで第2次調査が行われた。本書では、第1次調査を報告する。

岩黒島初田遺跡^{註(29)}(第3図13)

岩黒島南西の頂部を中心とする遺跡で、1982年7月に予備調査が行われ、1982年4月から8月まで本調査が実施された。与島西方遺跡や櫃石島花見山遺跡などに比べると遺物の出土は希薄であったが、小形ナイフ形石器や細石核などを出土している。

櫃石島花見山遺跡^{註(30)}(第3図5)

1976年9月から12月まで予備調査が行われ、細石核を多く出土したことで注目された。本調査は1979年7月から1980年5月まで行われ、約200点もの細石核を出土している。細石核はほとんどが玻璃質安山岩製であったが、ほかに黒曜石製の細石刃も出土しており、また、黒曜石製のナイフ形石器も少なくなかった。

サヌカイト製遺物には横長剥片利用の不定形ナイフ形石器・小形ナイフ形石器・尖頭器・縦長剥片などが多く、国府型ナイフ形石器や翼状剥片石核は少なかった。

櫃石島大浦遺跡^{註(31)}(第3図9)

1976年10月から12月まで予備調査を、1980年6月から12月まで本調査を行った。縦長剥片と、それを利用したナイフ形石器が多いことを特徴とし、他に横長剥片利用のナイフ形石器・縦長剥片石核・細石核・押型文土器などが多く出土している。一方、国府型ナイフ形石器や翼状剥片・翼状剥片石核はほとんどなく、また、縦長剥片や同石核・縦長剥片利用のナイフ形石器が下層から出土する傾向も確認できなかった。

櫃石島ヤケヤマ遺跡^{註(32)}(第3図8)

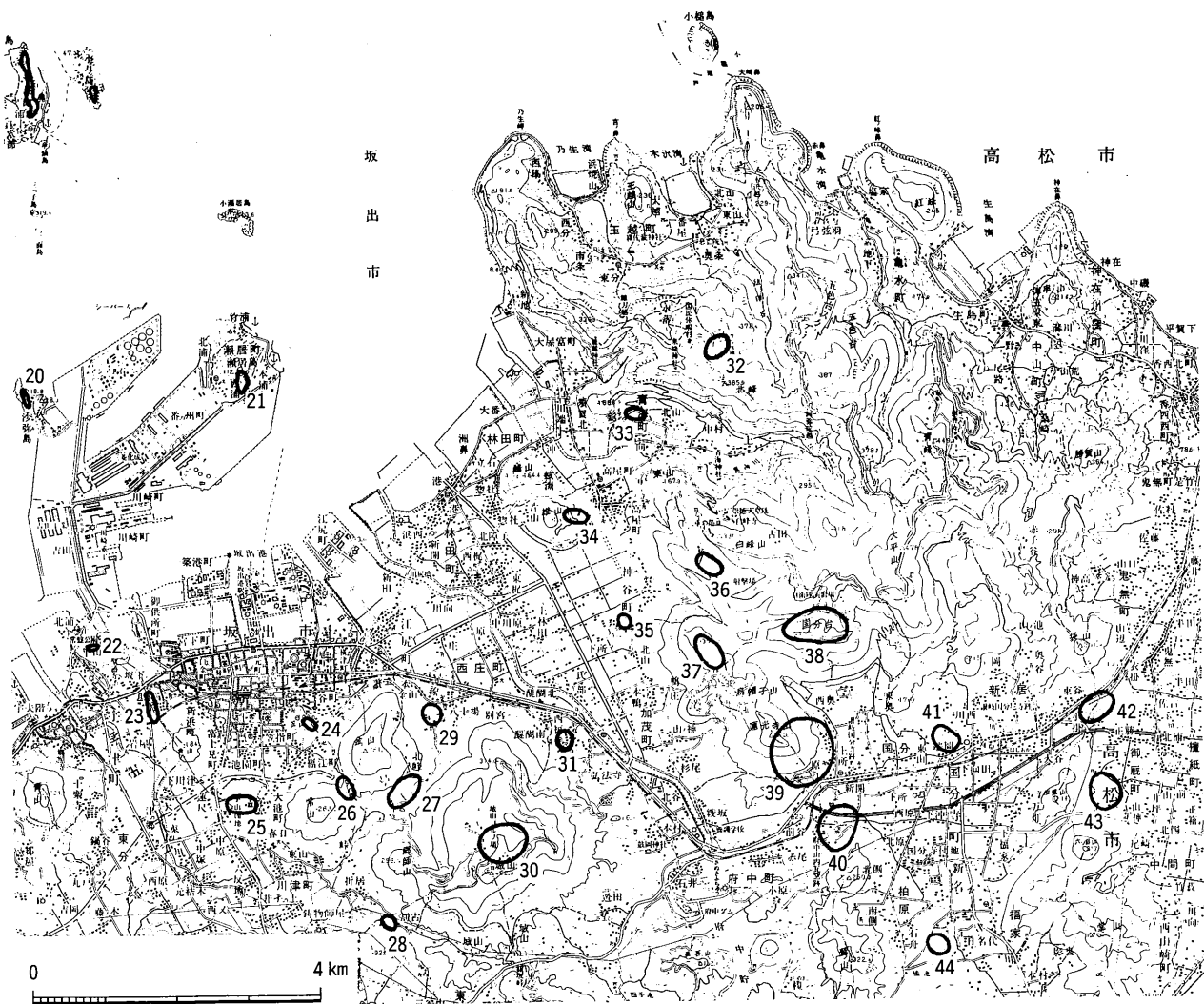
1976年10月から11月に予備調査を実施し、1982年4月から6月に本調査を実施した。遺物の出土は多くなかったが、各種のナイフ形石器をはじめ、尖頭器・スクレーパー・細石刃・横長剥片・横長剥片石核・縦長剥片・同石核・石鏃などが出土している。

櫃石島長崎通り遺跡^{註(33)}(第3図10)

1977年5月から7月まで予備調査を実施し、1982年5月から8月に本調査を行った。岩黒島初田遺跡・櫃石島ヤケヤマ遺跡と同様、遺物の出土は希薄である。ナイフ形石器・尖頭器・細石刃・細石核・横長剥片・横長剥片石核・縦長剥片・縦長剥片石核を出土したが、ナイフ形石器・横長



第 3 図 坂出市周辺の旧石器時代遺跡分布図 (1)



第 4 図 坂出市周辺の旧石器時代遺跡分布図 (2)

剥片・同石核には瀬戸内技法関係のものは少なかった。

瀬戸大橋建設に伴う海峡部の埋蔵文化財調査は、大部分が終了したものの、1983年度にも羽佐島遺跡の第二次調査が行われ、現在なお整理作業が進行中である。

香川県教育委員会によるこれまでの発掘調査によって、莫大な量の旧石器時代遺物が出土したものの、純粋な旧石器時代遺物包含層はまだ検出されていない。また、そうした層位の中で検出されたいくつかのピットについても、旧石器時代に属する確証は得られない。これは、島嶼部の旧石器時代遺跡が丘陵尾根上に立地しているので、遺跡地に堆積層がほとんど形成されなかったためである。各遺跡とも、基盤をなす花崗岩風化土が遺物包含層をなすが、部分的に旧石器時代の遺物しか含まない地点があっても、そこから出土した遺物のすべてが必ずしも一時期のものとは限らず、また、他の地点の土器を含む層と区別できないなど、層位的には遺物の混在が著しい。ただ、平面的にみれば、玻璃質安山岩製遺物やサヌカイト製彫器・同スポールなどのような出土点数の少ないものには、比較的まとまった分布を示すものがあり、ブロックの名残りとどめるものとも考えられる。^{註34)}

瀬戸大橋建設に伴う島嶼部の旧石器時代遺跡の調査は、各年度ごとに概要が随時公表されているが、これについては佐藤良二氏によって、サヌカイト製遺物の分析内容を中心とする批判が行われている。^{註(35)}

また、玻璃質安山岩を主体とする備讃瀬戸の細石刃文化については、鎌木義昌氏の先駆的な分析があるが、^{註(36)} この時点では資料が十分でなかった。しかし、今回の一連の発掘調査によって資料が著しく増大し、各概報の中で遺跡ごとの細石刃生産技術の復元が試みられると同時に、小野昭・西村尋文両氏によって全体的な検討も行われ、技法復元がかなり進んできた。^{註(37)}

以上のように、瀬戸大橋建設に伴う発掘調査によって、島嶼部の旧石器時代遺跡は徐々にその内容を明らかにしつつあるが、坂出市を中心とする地域の丘陵上には、川畑迪氏によってさらに多数の旧石器時代遺跡が確認されている(第3・4図及び第1表)。これらの遺跡のほとんどは発掘調査が実施されておらず、採集品の詳細な分析も十分に行われていないが、発掘調査された島嶼部の遺跡とは遺物のあり方の異なるものもあり、両者を含めたこの地域の旧石器時代研究は今後に待たれている。



第 5 図 羽佐島遠景 (与島西方遺跡より)

第1表 坂出市周辺の旧石器時代遺跡地名表

No	遺跡名	所在地	出土遺物																備考その他	註						
			ナイフ形石器	舟底形石器	スクレーパー	彫器	石錐	楔石	状器	尖頭器	叩き石	細石刃	細石核	翼状剥片核	翼剥片	状剥片核	横長剥片核	横剥片			長剥片	縦長剥片核	縦剥片	長剥片		
1	鷲羽山	岡山県倉敷市	○	○	○	○			○		○	○				○	○	○	○						38	
2	トビノス	香川県坂出市榎石島とびの巣	○																						39	
3	かいたく鼻	〃 〃 海床																						No.3～No.7の遺跡の採集資料は註39の文献に一括して紹介する。	40	
4	馬石・ぜにかみ石	〃 〃 馬石																							40	
5	花見山	〃 〃 ホウロク石	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					41	
6	王子神社東	〃 〃																							40	
7	宮崎鼻	〃 〃 宮崎鼻																							40	
8	ヤケヤマ	〃 〃 ヤケヤマ	○		○				○		○					○	○	○	○						42	
9	大浦	〃 〃 大浦通	○	○	○		○	○	○	○	○				○	○	○	○	○						43	
10	長崎通り	〃 〃 長崎通り	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						44	
11	歩渡島	〃 〃 歩渡																○								
12	岩黒北丘陵	〃 岩黒島															○									
13	岩黒初田	〃 〃	○	○							○	○			○	○	○								45	
14	初田東丘陵	〃 〃																○								
15	羽佐島	〃 与島町羽佐島	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						46	
16	与島西方	〃 〃 西方	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							47
17	与島東方	〃 〃 東方	○	○	○				○	○	○			○	○	○	○								48	
18	大洲	〃 〃 大洲	○	○											○	○	○								49	
19	小与島	〃 〃 小与島	○		○					○					○			○							50	
20	沙弥	〃 沙弥城山白石	○	○						○	○							○							50	
21	十ノ石	〃 瀬居町十ノ石	○	○	○											○	○	○							51	
22	聖通寺山	〃 綾歌郡宇多津町平山	○		○									○	○	○	○								50	
23	茶臼山	〃 坂出市八幡町田尾 綾歌郡宇多津町	○	○	○				○				△	○	△	○	○	○							50	
24	笠山	〃 坂出市福江町笠山	○		○				○						○	○		○							50	
25	鎌田池	〃 〃 〃 小山							○																	
26	ヒコシ峠	〃 〃 〃 木村ヒコシ峠							○									○								
27	金山奥池	〃 〃 〃 川津町峠			○											○		○								
28	割古池	〃 綾歌郡飯山町東坂元	○				○																			
29	八十八	〃 坂出市八十場																		○					大形両面加工石器	
30	城山	〃 〃 〃 西庄町城山	○	○	○				○	○				○	○	○	○	○							52	
31	福ノ宮	〃 〃 〃 西福寺福ノ宮	○						○																50	
32	タンベ池	〃 〃 〃 青海町北峰	○	○	○							○			○	○	○								50	
33	青海	〃 〃 〃							○																	
34	雄山	〃 〃 〃 高屋町塩口	○		○				○					○	○	○	○								50	
35	牛子山	〃 〃 〃 神谷町	○												○											
36	鞍谷池	〃 〃 〃	○		○				○					△	○						△					
37	明神原	〃 〃 〃 加茂町北山明神原	○						○							△	△									
38	国分台	〃 綾歌郡国分寺町国分台	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○						ビック・大形両面加工石器 チョッパー	
39	蓮光寺山	〃 〃 〃 〃	○		○	○								○	○	○	○	○	○						54	
40	前谷関ノ池	〃 〃 〃 〃 新名	○		○				○					○	○											
41	端岡山	〃 〃 〃 〃 端岡	○						○						○	○	○									
42	衣懸池	〃 〃 〃 〃 小掛	○		○									○	○	○	○								大形両面加工石器	
43	御厩池	〃 高松市御厩町池内	○		○										○		○									
44	兎子山	〃 綾歌郡国分寺町日名代	○		○				○			○			○		○								有舌尖頭器	

(△は転用された石器に認められるもの)

註

- (1) 「與嶋島方名よせ能帳」『香川叢書』2 1941によれば、天正18(1590)年当時、道珍と藤兵への2人が3畝20歩を耕作し、麦2斗7升6合を収穫していたことがわかる。
- (2) 坂東祐司監修・森合重仁編『香川県地学のガイド』1979
- (3) 註2および井尻正二編『大氷河時代』1979
- (4) 高橋正則・野々村拓也「小鳴門海峡海底下出土の石器」『旧石器考古学』26 1983 旧石器文化談話会
- (5) 鎌木義昌「瀬戸内沿岸における無土器文化の存否について」日本考古学協会第14回総会研究発表要旨 1954 日本考古学協会
- (6) 鎌木義昌「岡山県鷲羽山遺跡調査略報」『石器時代』3 1956
- (7) 鎌木義昌「香川県井島遺跡—瀬戸内における細石器文化—」『石器時代』4 1957
- (8) 鎌木義昌「西日本の無土器文化について—特に瀬戸内を中心として—」『私たちの考古学』13 1957 考古学研究会
- (9) 鎌木義昌「先縄文文化の変遷」『図説世界文化史大系』20 1960
- (10) 川畑迪「国分台無土器文化石器」『香川県文化財協会報』特別号4 1959 香川県文化財保護協会
- (11) 西川宏・杉野文一「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」『古代吉備』3 1959
- (12) 鎌木義昌「香川县城山遺跡出土の石器について」『古代学』8-3 1960 古代学協会
- (13) 高橋邦彦「坂出市与島町西方及び東方遺跡の調査報告」『香川県文化財協会報』特別号5 1961 香川県文化財保護協会
- (14) 鎌木義昌「無土器文化・縄文文化」『家島群島』1962
- (15) 鎌木義昌・高橋護「瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学』I 1965 河出書房
- (16) 間壁葎子「香川県坂出市櫃石島採集の石器」『倉敷考古館研究集報』4 1968 倉敷考古館
- (17) 松本豊胤「与島東方遺跡」1973 香川県教育委員会
- (18) 松本豊胤「瀬居町十ノ石遺跡調査概報」『文化財協会報』59 1973 香川県文化財保護協会
- (19) 松藤和人「瀬戸内技法の再検討」『ふたがみ』1974 学生社
- (20) 松藤和人「再び“瀬戸内技法”について」『二上山・桜ヶ丘遺跡』1979 奈良県教育委員会
- (21) 竹岡俊樹「国分台遺跡群」『日本の旧石器文化』3 1976 雄山閣
- (22) 竹岡俊樹「朱雀台遺跡におけるナイフ形石器の形態分析」『物質文化』29 1978 物質文化研究会
竹岡俊樹「瀬戸内技法再考—先土器時代石器群の分析—」『どるめん』26 1980
竹岡俊樹「瀬戸内海地方における石器群の変遷—瀬戸内技法複合の遺物の大きさに関する分析—」『旧石器考古学』21 1980 旧石器文化談話会
- (23) 柳田俊雄「瀬戸内東部及び近畿地方における旧石器時代研究の現状と問題点—特に研究過程における方法論をめぐって—」『プレリュード』20 1977 旧石器文化談話会
- (24) 大船孝弘・冨成哲也『津之江南遺跡発掘調査報告書』1976 高槻市教育委員会
- (25) 冨成哲也・大船孝弘『那家今城遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書11 1978 高槻市教育委員会
- (26) 詳述しないが旧石器文化談話会によって刊行されている『旧石器考古学』に多くの論文・資料紹介が公表されている。
- (27) 廣瀬常雄・大山真充「与島の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』II 1978 香川県教育委員会
秋山忠・牟礼良典・寒川知治「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報」I 1978 香川県教育委員会
牟礼良典・唐木裕志・藤好史郎・真鍋昌宏「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告」I 1979 香川県教育委員会
斉藤賢一・西村尋文「西方遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』IV 1981 香川県教育委員会
竹下和男・森本義臣・坂口淳子「与島西方遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』V 1982 香川県教育委員会
- (28) 大山真充「羽佐島の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』II 1978 香川県教育委員会
斉藤賢一・渡部明夫・山本哲也・大砂古直生「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報」II 1979 香川県教育委員会
渡部明夫・藤好史郎・白本清・中西昇・玉城一枝「羽佐島遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』III 1980 香川県教育委員会

- 渡部明夫「羽佐島遺跡の遺物整理」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』V 1982 香川県教育委員会
- (29) 廣瀬常雄「岩黒島の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』II 1978 香川県教育委員会
藤好史郎・玉城一枝・中本雅之「岩黒島初田遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』VI 1983 香川県教育委員会
- (30) 松本敏三「櫃石島第II調査地区(ホウロク石)」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』I 1977 香川県教育委員会
廣瀬常雄・真鍋昌宏・西村尋文「花見山遺跡ホウロク石地区第1次調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』III 1980 香川県教育委員会
林正弘・真鍋昌宏・西村尋文「花見山遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』IV 1981 香川県教育委員会
- (31) 松本敏三「櫃石島第III—北調査区(大浦浜)」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』I 1977 香川県教育委員会
齊藤賢一・東原輝明・町川義晃「大浦遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』IV 1981 香川県教育委員会
- (32) 松本敏三「櫃石島第III—北調査区(大浦浜)」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』I 1977 香川県教育委員会
安田和文・田村雅彦「ヤケヤマ遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』VI 1983 香川県教育委員会
- (33) 廣瀬常雄・大山真充「櫃石島の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』II 1978 香川県教育委員会
林正弘・野中寛文・坂口淳子「長崎通り遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』VI 1983 香川県教育委員会
- (34) 渡部明夫「羽佐島遺跡の遺物整理」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』V 1982 香川県教育委員会
- (35) 佐藤良二「備讃瀬戸地域の旧石器文化に関する二・三の問題」『旧石器考古学』24 1982 旧石器文化談話会
- (36) 鎌木義昌「西日本の細石刃文化」『歴史教育』13-3 1965
- (37) 小野昭「瀬戸内沿岸地方の細石器文化」『駿台史学』47 1979
西村尋文「中部瀬戸内地域における細石刃生産技術の検討」『旧石器考古学』26 1983 旧石器文化談話会
- (38) 山本慶一「鷺羽山遺跡の石器と土器」『倉敷考古館研究集報』6 1969 倉敷考古館
鎌木義昌「岡山県鷺羽山遺跡調査略報」『石器時代』3 1956
- (39) 秋山忠・廣瀬常雄「櫃石島第I調査区」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』I 1977 香川県教育委員会
- (40) 註16に同じ
- (41) 註30に同じ
- (42) 註32に同じ
- (43) 註31に同じ
- (44) 註33に同じ
- (45) 註29に同じ
- (46) 註28に同じ
- (47) 註10・13・27に同じ
- (48) 註10・13・17に同じ
- (49) 真鍋昌宏・白本清「大洲遺跡発掘調査概報」1982 香川県文化財保護協会坂出支部
- (50) 註10に同じ
- (51) 註10・18に同じ
- (52) 註10・12に同じ
- (53) 註10・21・22及び、柏井光彦・吉朝則富・増田一裕「香川県国分台採集の旧石器について」『プレリュード』20 1977 旧石器文化談話会 その他
- (54) 註21・22に同じ

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

「夢のかけ橋」ともいわれた瀬戸大橋（本州四国連絡橋児島・坂出ルート）の建設計画は、昭和45年7月本州四国連絡橋公団（以下、本四公団という）が設立されていよいよ具体化し、着工への見通しが得られた。昭和48年10月には建設・運輸両大臣による建設工事に係わる実施計画の認可があり、同年11月からの着工予定は石油危機に伴う政府の総需要抑制策によって一時延期となったものの、その後は早期着工に向けて活発な動きがみられるようになった。

この間、香川県教育委員会では、同ルートとなる海峡部の櫃石島・岩黒島・羽佐島・与島の四島内に旧石器時代から古代・中世にかけての各時代の多様な遺跡が数多く存在していることに十分留意し、それらの貴重な埋蔵文化財の取り扱いについて本四公団をはじめとする関係機関と積極的な協議を重ねた。以下、年次を追って主たる協議事項をたどってみる。

46年1月～2月

香川県企画部より架橋用地等関係調査の依頼を受け、架橋関係地区における埋蔵文化財分布調査を実施。埋蔵文化財包蔵地を「事業制限土地」に含めて本四公団に報告する。

47年11月

文化庁の指導により本四連絡橋関係諸県が架橋に係わる文化財の保護対策について協議。埋蔵文化財の分布調査・確認調査・発掘調査・調査費用等に関する連絡調整を図る。

48年2月

瀬戸大橋ルート関連公共事業調査に関係して、ルート沿いの海上部9.5km、陸上部1.5km、幅200mの範囲に所在する埋蔵文化財の分布・包蔵状況を本四公団に報告する。

48年5月

本四公団と文化庁の協議に基づいて作成された通達「本州四国連絡橋公団の建設工事の施行に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」を受ける。

48年10月

本四公団の建設工事の施行に伴い影響を被ると予想される遺跡とその内容・今後の取り扱い等について文化庁に報告する。

49年6月

本四公団第二建設局と本四連絡橋計画及び文化財の取り扱いについて協議。

これらの協議を通じて提示した四島内架橋関係用地の埋蔵文化財分布図は、従来の遺物採集や踏査によるところが多く、各遺跡の内容・広がり・遺物包含層の在り方などを適確に把握したものでなかった。そこで、架橋工事に先立ち遺跡の保存について調整を図るために、また本格的な発掘調査計画を立案するためにも、ぜひ試掘を主体とした予備調査を実施する必要があった。この点については本四公団もよく理解され、50年11月香川県企画部瀬戸大橋課を加えて、瀬戸大橋架橋に伴う埋蔵文化財予備調査の実施に関する協議を行った。予備調査の実施予定が架橋用地の買収や着工前のことであるため、調査対象地は借地によらなければならない、以

後借地事務等では瀬戸大橋課の協力を仰ぐことになる。そして51年5月、本四公団第二建設局より正式に「海峡部埋蔵文化財予備調査について」実施する旨の協議があった。これを受けて、51年6月1日付けで本四公団との間に「海峡部埋蔵文化財予備調査委託契約（そのⅠ）」を締結し、櫃石島より調査に着手した。

予備調査は、51年度と52年度の2ケ年にわたって、四島内の架橋計画路線沿線地区に所在する遺跡を中心とした調査対象地の100分の1程度の試掘区を設定して行うものであった。羽佐島における予備調査は、52年度の委託契約（そのⅡ）に基づいて52年9月22日～10月31日にかけて実施された。調査対象地は島の南丘陵のほぼ中央部を占める2,000㎡であり、そこで20㎡（2×2m・5ヶ所）の試掘を行ったが、予想を上回り旧石器時代を中心とする多数の遺物が出土した。

予備調査によって四島における当該地区の遺跡の内容や範囲をほぼ押えることができ、その結果本格的な発掘調査（本調査）を必要とする区域は四島合わせて約90,000㎡となった。このことは、『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』（Ⅰ）及び（Ⅱ）において公表した。

本調査は、52年11月1日付けで本四公団との間に締結した「海峡部埋蔵文化財発掘調査委託契約（その1）」によって与島西方遺跡から着手した。羽佐島遺跡の本調査は、53年度の委託契約（その2）に基づいて53年7月17日からとりかかり、年度末までに南・北丘陵間の尾根筋にあたる区域1,248㎡を発掘した。次いで、54年度の委託契約（その3）に基づいて54年11月16日までに、東・西側の斜面部で3,006㎡を発掘して現場調査を終了した。都合4,254㎡の調査で、予備調査での予測をはるかに越えた膨大な旧石器時代の遺物が出土している。

さて、こうした本調査の動きに対応して、53年4月調査の推進について必要な連絡事務をとり、調査器材や出土遺物の収納・整理等を行う「香川県教育委員会埋蔵文化財発掘調査坂出連絡事務所」（坂出市寿町1丁目・市民館敷地内）を設置した。しかし、当事務所は調査事業の進行に伴い収納遺物が急増して手狭になり、まとまった整理作業を行うことができない状況になっていった。このため、55年4月には旧鎌田共済会図書館（坂出市本町1丁目）へ移転し、職員のほかに常時12～13名（58年度は20名）の整理補助作業員が勤務することになった。さらに、56年4月から海峡部埋蔵文化財発掘調査担当職員が文化行政課文化財調査2係として、改めて係制のもとに位置づけられ、調査体制の拡充が図られたわけである。

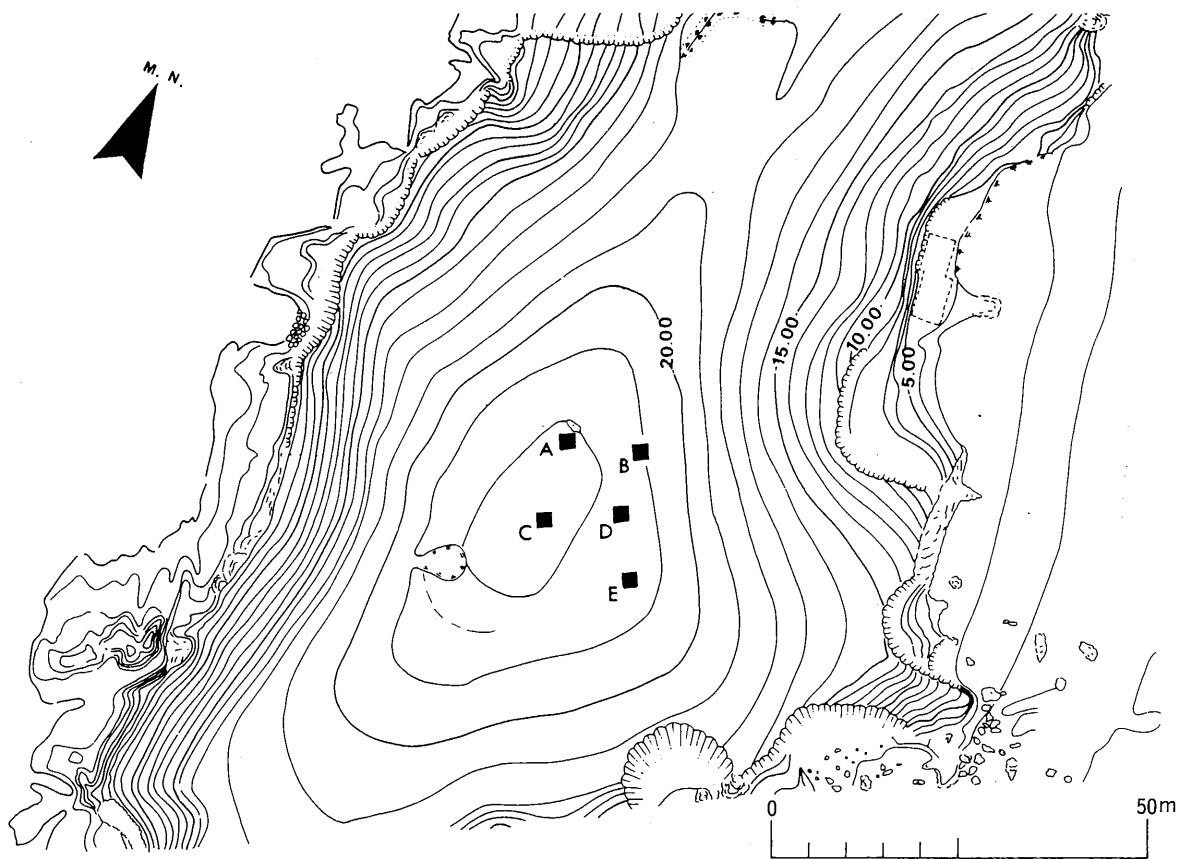
第2節 調査の経過と発掘の方法

1 調査の経過

羽佐島遺跡の発掘調査は、予備調査が先ず実施され、その成果に基づいて本調査が行われた。予備調査は昭和52年9月22日から10月31日まで行われ、本調査は昭和53年7月17日から54年11月16日まで実施された。日誌によって、調査の動きを以下に略述する。

〔予備調査〕

昭和52年		の予備調査は、南側の低いピークを中心とした2,000㎡を対象地として、その1%にあたる20㎡を発掘することとする。	
9月22日	初めて羽佐島に上陸する。交通の便のない無人島であることから、発掘予定地周辺にマムシ除けの薬剤を散布する。今回	10月4日	調査を開始する。調査予定地付近の伐採



第 6 図 羽佐島遺跡予備調査グリッド配置図

をして、 2×2 mの5つのグリッドを設定する。各グリッドの名称は第6図のとおりである。A・B・Dグリッドの発掘に着手し、第2層（本報告の第2・3層）から剥片や土器片の出土を確認する。

10月7日 各グリッドの発掘を継続する。多数の剥片と共にナイフ形石器・縦長剥片・石鏃などが出土。

10月24日 一時中断していた調査を再開する。多くのグリッドでは第3層（本報告の第4層）になると、上部からしか遺物は出土しないが、Aグリッドの第3層からは全く遺物が出土しなかった。

10月27日 各グリッドの第3層下部まで発掘を進め、遺物が出土しなくなる。Aグリッドは土層確認の深掘りを行ったのち、土層実測をして埋め戻す。地表下約70cmで花崗岩バイラン土の地山に達する。

A・B・D・Eグリッドからは64~100点の石器・剥片が出土したが、最高所中央のCグリッドからは269点が出土した。石器ではナイフ形石器が28点と最も多く、

他にスクレーパー・尖頭器・細石刃・石鏃がある。これらの石器・剥片はほとんどすべてサヌカイトであるが、Dグリッドから1点の黒曜石が出土したことは注目される。

10月31日 各グリッドの遺物出土状態図の作成・土層実測・写真撮影を終えて埋め戻す。本日で予備調査を終了する。予備調査によって、各グリッドから予想以上の旧石器時代遺物が出土した結果、羽佐島遺跡では南側ピークの上部を中心に濃密な遺物の包蔵が予想されるに至った。

〔本調査〕

昭和53年

7月17日 発掘調査用具・プレハブ資材等を島内に搬入し、本日より本調査を開始する。なお、本調査は予備調査の予定地と異なり、南側ピークの北側から鞍部を越え、北側ピークの南西斜面にかかる範囲に変更された。地形からみて発掘面積は4,200 m^2 程度と考えられる。

7月18日 昨日海岸に揚げた用具・プレハブ資材等

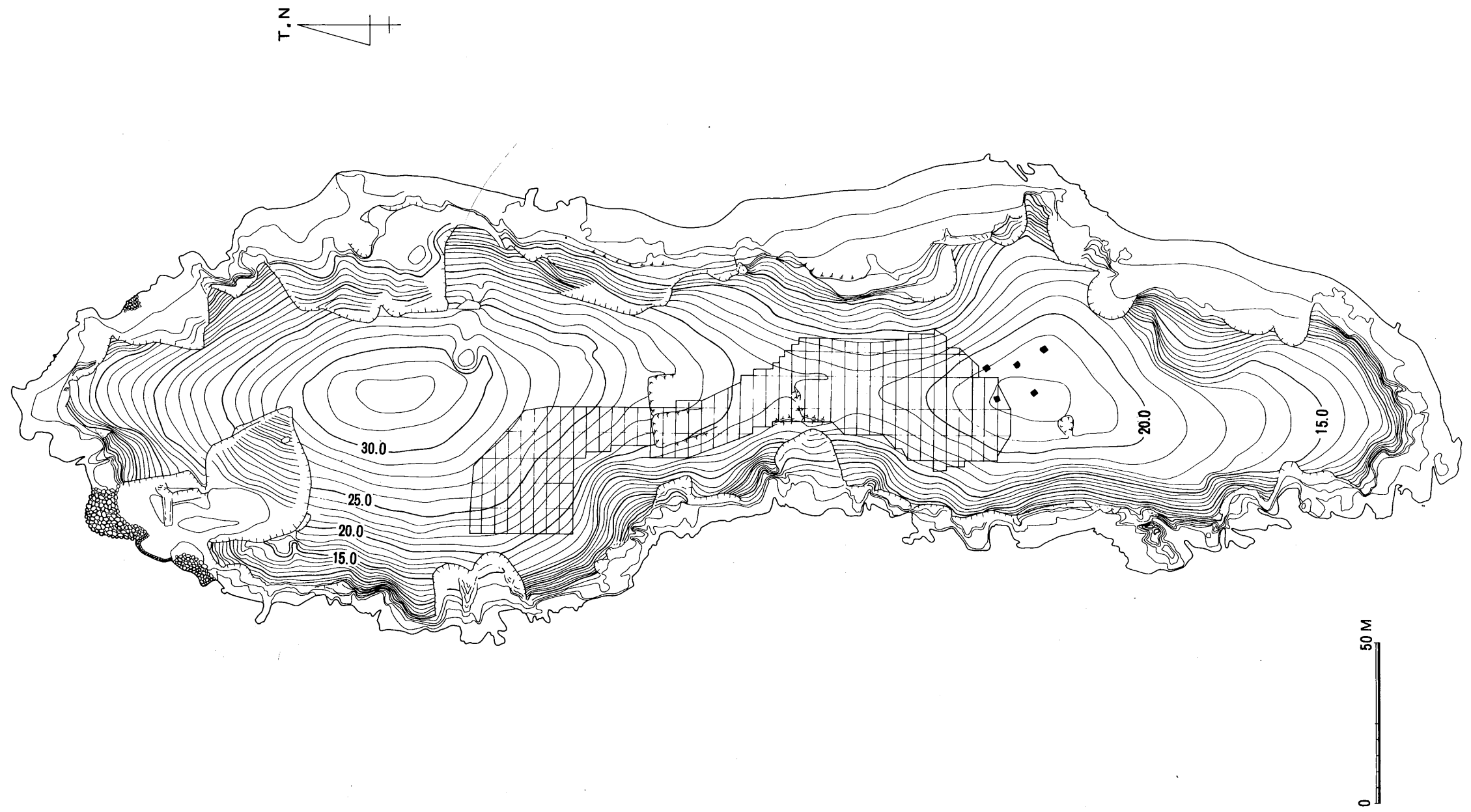
- を調査地区南の尾根に運び上げる。マムシ除けの薬剤を散布する。
- 7月19日 本日より伐採・草刈りを開始する。
- 7月25日 伐採・草刈りと併行して、尾根筋（B地区）に東西10m、南北4mのグリッドを設定する。調査区南端のグリッドをB1とし、北に向かってB2、B3、B4……と呼ぶ。なお、今回の調査では、西側斜面をA地区、東側斜面をC地区とした。A・C地区は調査の都合上、東西8m、南北4m単位とし、B地区のグリッドと規模が異なることになった。
- 7月29日 遺跡全体の遺物出土状態を早急に把握するため、B1、B6、B11……と5個のグリッドに1個の割合で北に向かって発掘を開始する。発掘にあたっては出土遺物すべての平面的な位置と標高を記録することとした。
- 8月1日 B1・B6・B11グリッドの発掘を継続する。各グリッドとも、遺物の出土がきわめて多い。発掘は深さ10cm程度を単位として遺物の検出・記録・取上げを順次繰返し、上から第1面、第2面、第3面……と呼ぶことにする。
- 8月9日 伐採・草刈りの進行と併行して、B列西側のラインを北へ延長し、38列まで南北の基本杭を打ち終える。
- 8月10日 B16の発掘を開始する。
- 8月11日 新たにB21の発掘を開始する。
- 8月23日 B21より、羽佐島遺跡としては初の細石核が出土する。A36-1の発掘を開始する。これで調査予定地の南北を縦断して遺物の出土状態を把握できることとなる。
- 8月30日 B11・B16の南北壁下を深掘りし、地山面を検出する。B1・B6・B11・B16の発掘の結果、1㎡あたり20～40点の多くの遺物が出土することがわかる。
- 9月7日 B地区での遺物の出土が濃密なため、4グリッド（16×20m）を単位として遺物の出土状態を面として把握することとする。B2～B5全体の発掘を開始。
- 9月16日 B7～B10全体の発掘を開始する。
- 9月22日 B2～B5の第1面の出土遺物を取上げる。B2～B4で300点前後、B5で141点の遺物が出土する。土器の出土も少ない。
- 9月27日 B26・A26-1・A31-1・A36-1の発掘を継続する。
- 10月8日 B21の発掘を終え、土層実測を行う。このグリッドからは細石核など、玻璃質安山岩製遺物を多く出土したが、検討の結果、土器・石鏃・国府型ナイフ形石器との混在



第7図 羽佐島発掘風景

- が著しく、文化層は認められなかった。
- 10月31日 B2～B5・B7～B10の第5面の遺物取上げを終り、この部分の発掘を終了する。
- 11月10日 発掘の終わったB2～B16の土層実測を行う。
- 11月15日 B12～B15の第1面の遺物取上げを行う。B15で緑釉土器と思われる小破片を検出する。なお、B12～B15・B17～B20・B22～B25の調査では、表土層及び第2層上部の遺物は2×2m単位で一括取上げを行ったので、緑釉土器は第2層からの出土である。
- 11月30日 B20東端でサヌカイト・チップの濃密な集中を確認する。なお、B16～B19では、昭和初期に建てられたと伝える建物に伴う整地跡が確認できた。
- 12月4日 遺物の出土がきわめて多いA36-1付近の状況を把握するため、A36-2～A36-5（斜面下部）の発掘を開始する。
- 12月18日 B15の第5面の遺物を取上げ、B地区（尾根筋）の発掘を終了する。遺物の出土は第4層上部までが多く、第4層下部は激減する。各層とも各時期の遺物の混在が著しく、文化層は認められなかった。
- 12月22日 A37-1・A38-1の第1面の出土遺物を取上げる。
- 昭和54年
- 1月10日 A37-2・A38-2の第1面の出土遺物を取上げる。なお、A37-1・2、A38-1・2は濃密な遺物の出土が予想されたため、すべての遺物の出土状態図を作成することとする。
- 1月22日 A32-1～A35-1の発掘を進める。
- 2月7日 A地区北部の調査と併行して、C地区（東側斜面）の発掘を開始する。C11-1・C11-2の第1面の遺物を取上げる。
- 2月13日 C6-1・C6-2の第1面の遺物を取上げる。
- 2月28日 A地区北部及びC地区の発掘を継続する。A26-1・A31-1・A36-1の土層実測を行う。31列以北では表土下に旧耕作土と思われる土層（第7・8層）が存在することを確認する。
- 3月1日 A1～A10の伐採・草刈りを行う。C5～C7の発掘において、混在の著しい第1・2層の遺物については2×2m単位で一括して取上げる。また、これ以後発掘を開始したグリッドについても、調査区南部・中央部の第1・2層と、調査区北部の第1・7・8層については遺物の混在が著しいため、部分的な例外を除いて同様の調査方法をとる。
- 3月5日 A6-1・A6-2・A6-3の発掘を開始する。この部分については、B6と同様、すべての遺物の出土状態を記録することとする。調査地区北部の発掘を継続する。
- 3月9日 C地区南部の第1・2層の遺物の一括取上げを進める。
- 3月14日 A地区においても（A2～A5）、第1・2層の遺物の一括取上げを開始する。
- 4月9日 昭和54年度の調査開始。C地区南部の発掘を継続する。
- 4月10日 3月の後半に一時中断していたA地区北部の発掘を再開する。
- 4月17日 A37～A42のグリッドを設定する。C地区での第1・2層の遺物取上げを終了する。
- 4月24日 C16-1・C16-2・A21-1・A21-2の発掘を終了する。A21～A35の第1・2層の遺物取上げをほぼ終了する。
- 5月1日 C地区の第3層以下の発掘と併行して、A39～A42の第1・7・8層の遺物取上げを進める。
- 5月16日 C3～C5の発掘を続ける。第1・2層の遺物を2×2m単位で取上げたのち、第3層以下の遺物は出土状態図を作成したが、第3層上面から数えて第4面となると遺物の出土は非常に少なくなる。
- 5月17日 雨のため発掘作業を中止し、出土遺物の水洗い・整理を行う。これによって、C3-1・C3-2第1・2層の取上げ遺物中から大形楕円押型文土器、C15-1から山形押型文土器が確認された。また、A5-1では黒曜石製細石刃を確認する。
- 5月18日 A37～A42の第1・7・8層の遺物取上げを終了する。
- 5月25日 C地区では10列以南の発掘が終りに近づく。C10-1南東部の第2・3面（第3層下部～第4層上部）で焼土を含む小ピットや炭化物が検出される。
- 5月29日 C10-1南東部の第4面（第4層下部）で長さ18.7cm以上の長大な石槍が出土する。
- 5月30日 C18-1第2面（第3層下部ないし第4層上面）で山形押型文土器が出土する。

- 6月8日 さきに石槍を検出したC10-1南東部で炭化物・無文土器片が集中することを確認するが、都合により発掘を一時中断する。
- 6月11日 C8-1でも押型文土器を検出する。
- 6月14日 C10-1南東部を除き、C地区の発掘が終りに近づいたため、A地区の発掘に主力をそそぐ。A2~A5で黒曜石・押型文土器片を数点ずつ検出する。黒曜石はA地区南部、押型文土器と玻璃質安山岩はA地区南部と鞍部に多い傾向が認められる。
- 6月22日 炭化物の集中するC10-1南東部は、セクション・ベルトを残して発掘することとする。
- 7月5日 C12~C15の第5面の実測・写真を終え、これでC10-1南東部を残してC地区の発掘を完了する。今回の発掘では、A地区西側斜面を残すのみとなる。
- 7月11日 A37-2・A38-2の最終面(第18面)の遺物取上げを終える。両グリッドとさきに発掘を終えたA37-1・A38-1からは、1㎡当り100~200点という羽佐島遺跡では最も濃密な遺物が出土した。しかしながら、地山直上まで無文土器が伴わない、旧石器時代の包含層は確認できなかった。ただ、第4層下部の地山直上付近から出土した無文土器は、島内出土の押型文土器と胎土・焼成が類似するので縄文時代でも古い時期に属する可能性が強いものと思われる。
- 7月17日 羽佐島調査一周年。雨のため発掘作業を中止する。
- 7月19日 C10-1南東部の炭化物集中箇所は地山に掘込まれた浅い落込みとなるようである。掘込みの埋土から投弾の可能性のある円礫が出土する。円礫は火を受けたためか赤変し、表面の風化が著しい。
- 7月24日 A36-3の第14面の遺物出土状態図を作成し、取上げる。A36列の発掘をほぼ終了する。
- 7月25日 A2~A5の発掘を終了する。
- 7月30日 A7~A10の発掘を終了する。A39以北の第3層以下の発掘を開始する。
- 8月7日 C地区西壁のセクション・トレンチを掘る。A27~A33の発掘を終了する。
- 8月11日 お盆のため発掘作業員が集まらず、16日まで室内で整理作業を行う。
- 8月24日 A地区北部の発掘を継続する。A36列と同じく、斜面下部では遺物が少なくなり、6列以下は発掘しないこととする。
- 9月25日 A11~A16に置いたB地区の排土を移動する。
- 9月27日 A11~A20にトレンチ基準杭を設定する。
- 10月4日 A11~A20の第1・2層の遺物を2×2m単位で一括取上げる。A1-1・A1-2の上の排土を移動する。
- 10月8日 A地区北部の発掘と併行して、A11~A20の第3層以下の発掘を開始する。C10-1南東部の掘込みは、セクションを残して発掘を終える。埋土から多数の炭化物・サヌカイト・土器細片が出土する。埋土の土層線引きを行うが、土層は水平な堆積を示さず、ブロック状の堆積となる。
- 10月12日 A地区北部の発掘を終了し、これでA1・A11~A20を残すのみとなる。A18-1第1面(第3層)から黒曜石製切出し形ナイフ形石器が出土する。
- 10月16日 A11~A20の発掘を継続する。この付近は他のグリッドと比べて遺物の出土がやや少ないようである。
- 10月20日 発掘済みの各グリッドの壁面の土層線引きを進める。
- 10月23日 発掘はA1-1・A1-2・A11-1を残すのみとなる。C10-1南東部の掘込みのセクション・ベルトを発掘し終わり、遺構の実測を行う。
- 10月24日 A1-1・A1-2・A11-1の掘下げを終わり、4,254㎡に及ぶ発掘はすべて終了する。A36以北の排土を発掘区に埋め戻す。
- 10月26日 グリッド各壁の土層線引き及び土層写真の撮影を進める。
- 10月31日 土層の実測・写真撮影を進めながら埋め戻しを行う。
- 11月7日 一応の埋め戻しを終える。
- 11月8日 土層実測を終え、現場での調査業務を完了する。
- 11月9日 発掘用具・ベルトコンベアーを現在発掘中の櫃石島大浦浜遺跡に運ぶ。出土遺物の一部を与島西方遺跡の現場事務所で水洗いする。
- 11月12日 現場事務所を解体し、海岸まで運ぶ。
- 11月16日 解体したプレハブ建物を羽佐島から撤収し、現場作業をすべて終了する。



第 8 図 羽佐島地形図及びグリッド配置図 (黒塗りは予備調査のグリッド)

2 発掘の方法

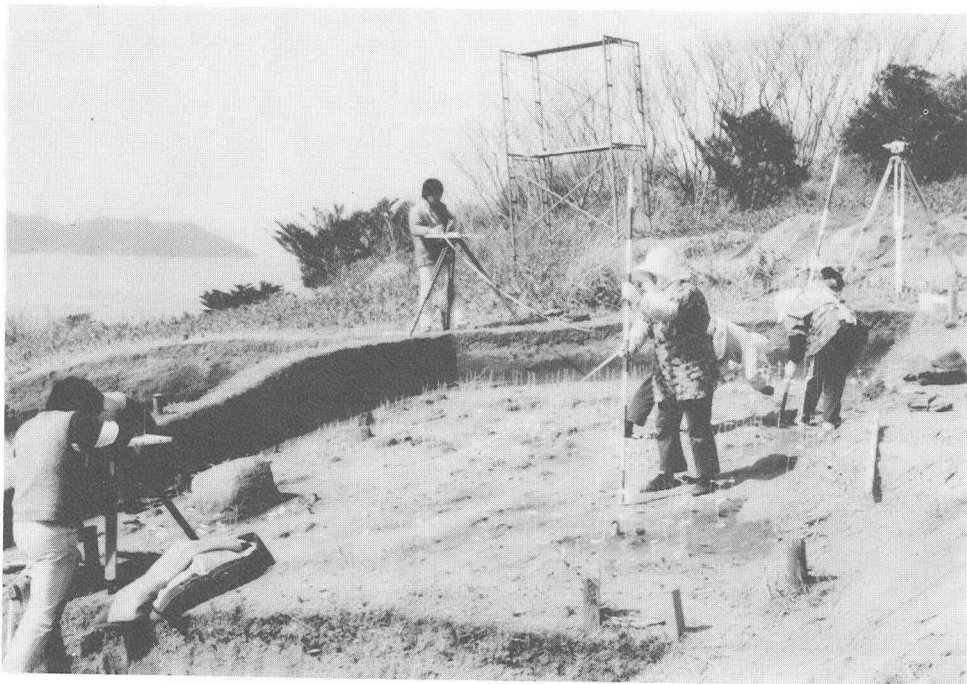
羽佐島遺跡での今回の調査対象地区は、南側ピークの北斜面から、北側ピークの南斜面に及ぶ工事区域である。島内西斜面を中心とし、尾根部分から一部東斜面を含む。予備調査では南側ピークの頂部を発掘したのみであるが(第6図)、ここからの出土遺物量は多く、旧石器時代の遺物包含層は尾根筋を中心にかなり広範囲に及ぶことが予想されたため、急斜面や斜面下部を除く工事予定地区は、全面発掘を前提として調査が開始された。

調査地区は地形から、西側斜面(A地区)・尾根筋(B地区)・東側斜面(C地区)に分け、全域にグリッドを設定して発掘することにした。そして、尾根筋(B地区)が約10m幅で南北に通ることから、グリッドの方位は正南北、正東西とし、B地区には南北4m、東西10mのグリッドを設定した。これに対してA地区とC地区は斜面であるため調査の便を考えて東西を8mとしたため、B地区と、A地区・C地区で大きさの異なる変形グリッドとなった。

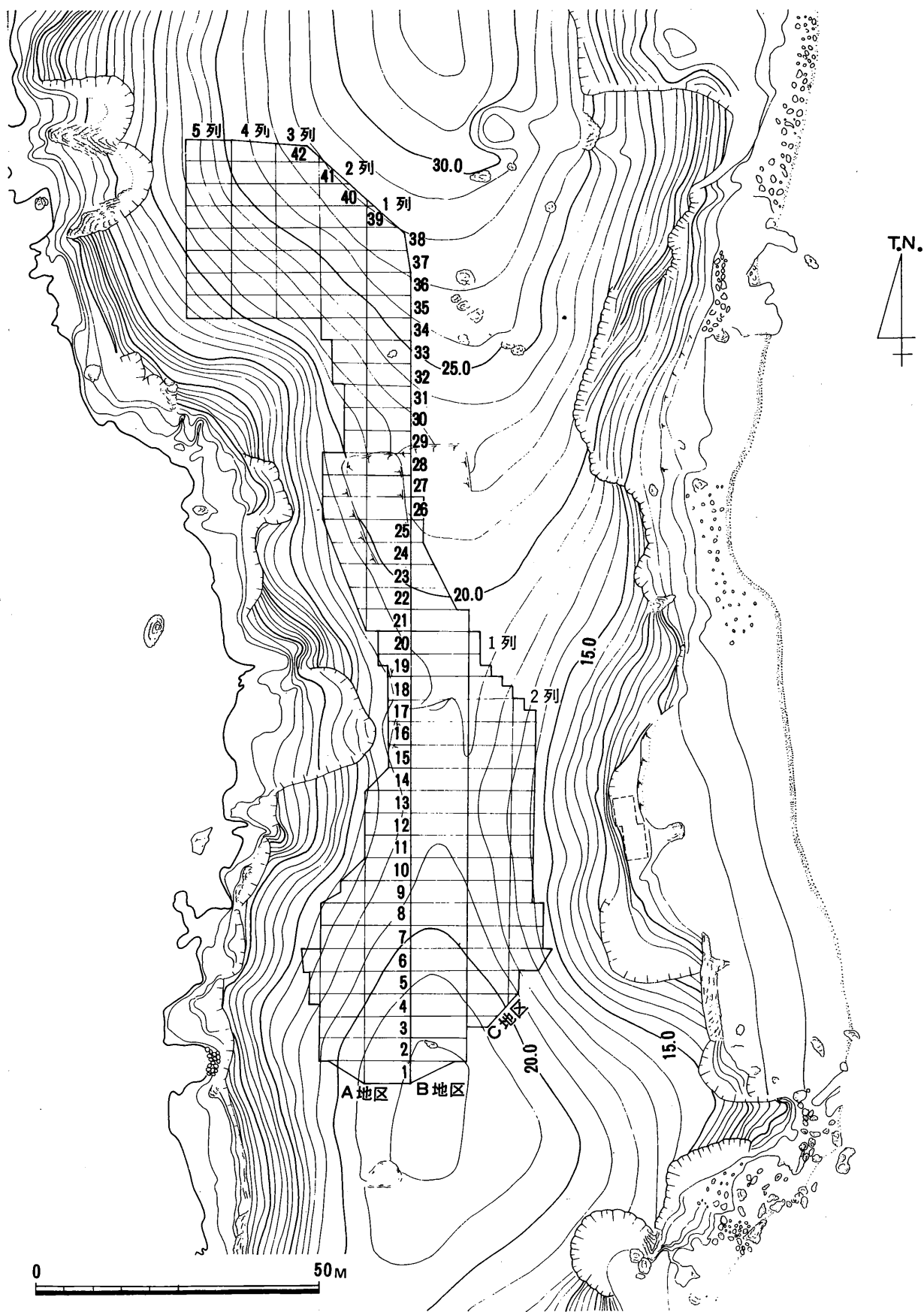
各グリッドは南端から北に向って番号を付し、さらに、A地区とC地区については尾根筋から下方に向って枝番号をつけてグリッドの呼称とした。したがって、B列南端のグリッドはB1、南端から15個目のグリッドはB15、その西隣りはA15-1、東隣りはC15-1、さらに東のグリッドはC15-2と呼ぶことになる。その結果、B列はB1～B26まで設定することができ、A列は北へ42列、西へ最高5列まで設定できた。C列は南北で3列から20列まで、東へ最高2列までである。こうしてグリッドを設定し、発掘された面積は畦部分を含めて4,254㎡である(第10図)。

発掘調査は、調査地区全体の遺物の出土状況をまず把握するため、B1～B26とA26-1～A36-1の東半分について、B1・B6・B11のように5列ごとに北に向って発掘を行った。発掘の初期には、10cm前後の深さを単位として順次掘下げ、掘下げ面ごとにすべての出土遺物の高さ(標高)と位置を記録したが、平面図は1/20、各遺物は点による標示とした。

この結果、調査予定地内のほぼ全域から、すべての層位において旧石器時代の遺物を主体と



第9図 発掘風景



第 10 図 羽佐島遺跡発掘調査区

する膨大な点数の遺物が表土以下比較的浅い遺物包含層から出土すること、その遺物は二次的な移動があり、包含層下部においても旧石器時代の遺物と共に土器片が出土することが確められた。

このため、層位的な発掘は意味をなさないのではないかとおもわれたが、特に遺物の出土が多いA36-1付近の状況をみるため、A32-1・A33-1・A34-1・A35-1・A36-2・A36-3・A36-4・A36-5・A37-1・A38-1・A37-2・A38-2の発掘を行い全出土遺物を記録することにした。一方これと併行して、こうした膨大な出土遺物、特に旧石器時代遺物を平面的に把握できる可能性もあることから、B地区においてさきに発掘しなかった4グリッドを一区画として発掘した。しかしながら、いずれの区画においても一面に遺物が出土し、群として把握することはできなかった。しかも第1層・第2層上部は土器の混在が特に著しいため、B12～B15・B17～B20・B22～B25においてはこの層の遺物は2×2mを単位として一括取上げを行った。なお、このグリッド内の小区画は、南北4m幅を二分して南(S)北(N)とし、東西も2m単位に区分して、A地区は東から、B・C地区は西からアルファベットの小文字を順次付して呼称した。したがって、B12南東の小区画はB12-e S、A6-2の北東の小区画はA6-2-a Nと呼称される。

調査は尾根筋(B地区)を優先し、その後斜面部(A・C地区)に移った。斜面部の調査では原則として、A・B地区において当初5列ごとに発掘したグリッドの東西のみ全遺物の出土状況を記録することとした。その他のグリッドでは、調査区南部～中央部は第1・2層の遺物を2×2m単位で取上げ、調査区北部は第1・7・8層までの遺物を2×2m単位で取上げて、それ以下の出土遺物についてのみ出土状態図を作成した。

この結果、出土遺物のすべてについて出土状態図を作成したグリッドはA地区については、6-1～6-3・21-1・21-2・26-1・26-2・31-1・32-1・33-1・34-1・35-1・36-1～36-5・37-1・37-2・38-1・38-2、B地区については、1～11・16・21、C地区については6-1・6-2・11-1・11-2となった。

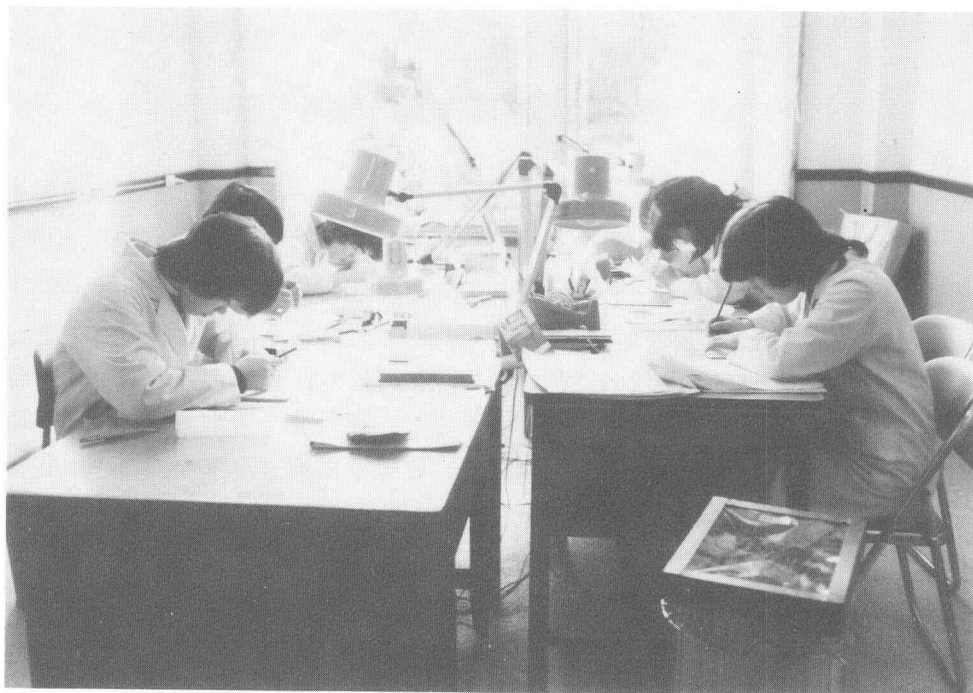
第3節 整理作業の経過

羽佐島遺跡の調査概要は、すでに昭和54年3月刊行の『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(II)羽佐島遺跡』(以下、概報という)及び55年3月刊行の『概報(III)塩浜遺跡・羽佐島遺跡・花見山遺跡・がんど遺跡・北浦遺跡』において報告している。前者は、53年7月17日～54年3月24日に至る発掘調査の概要をとりまとめたものであるが、なにしろ調査途中の時点であったにもかかわらず旧石器時代の遺物が数万点にのぼり、現場調査と併行した整理作業では、とても全遺物を観察する時間的な余裕がなかった。従って、遺物の資料化に不可欠な実測作業は、ごく一部の遺物に限られた。その意味で、まことに大づかみな調査の中間報告であったといわざるをえない。後者は、54年11月16日に羽佐島遺跡での調査対象地4,254m²を発掘完了したのに伴い、2ヶ年にわたる調査の経過や遺跡の概要を取上げたものである。しかし、そこでも最終的に250,000点以上に達した出土遺物の全体を系統的に整理し、観察することはほとんど不可能であった。このように『概報』作成時の遺物整理は、遺跡の全体的な傾向がとらえらる程度の作業にとどまっていた。

坂出連絡事務所における羽佐島遺跡の遺物整理作業が漸く軌道に乗り始めたのは、発掘調査

後1年を経た56年度に入ってからのことである。ちょうど海峽部埋蔵文化財発掘調査担当職員が文化財調査二係として位置づけられ、係内に整理作業を円滑に進めるため整理主任の分掌ができ、そのもとに羽佐島遺跡整理班（職員1名・整理補助作業員3～4名）を設けた。まず、膨大な遺物に目を通す基礎的な分類作業から取り掛かり、併せて一部の実測作業を行った。その際、把握できた主要な遺物として、ナイフ形石器約5,739点・舟底形石器57点・尖頭器165点・細石核72点・細石刃約190点・翼状剥片石核をふくむ横長剥片石核約1,390点・翼状剥片1,829点・縦長剥片1,759点・削器及び搔器約1,000点以上・叩き石163点・石鏃1,142点などがあげられる。たとえ、器種ごとにある程度の選別をして実測するにしても、職員のみでは消化できない点数である。そのため補助作業員の実測技量の養成に努めなければならなかった。なお、56年度整理作業の成果の一部は、57年3月刊行の『概報（V）西方遺跡・大浦浜遺跡・羽佐島遺跡の遺物整理』で紹介した。それは、旧石器時代最終末に編年される細石刃・細石核などに用いられた玻璃質安山岩や黒曜石に注目して、同石材で作られた羽佐島遺跡出土石器を取上げ、備讃瀬戸地域の旧石器時代最終末の石器の様相を明らかにしようと試みたものである。

57年度の整理業務では、櫃石島・与島等での現場調査と併行して如何に効率的な資料整理を進めていくかということが大きな課題であった。そのため、作業のシステム化（工程別の班編成作業）を図ることに重点をおき、作業室の配置や補助作業員の確保などに取り組んだ。しかし、職員（整理主任のほか現場調査の工程に即応させたローテーション方式による調査員）や常時12～13名の補助作業員による資料整理能力をはるかに越えた膨大な量の出土遺物が事務所に運び込まれ、整理作業の効率的な流れをなかなか実現できない状況にあった。そうした中で、58年10月に調査報告書の刊行を予定した羽佐島遺跡整理班には、4～5名の補助作業員を割り当て、とにかく年度内に実測作業を上げようと月別の目標をたてた。そして、4月中は補助作業員が正確で均質的な実測図を仕上げるための実測研修を重ねた。その成果は月を追って現れ、途中8月～10月にかけて『概報（VI）』（58年3月刊行）に掲載した櫃石島ヤケヤマ遺跡・長崎



第 11 図 旧石器の実測作業

通り遺跡の旧石器実測も手がけたことを考え合わせれば、ほぼ満足のできる作業結果を得た。58年3月末までの実測点数は、ナイフ形石器1,050点・舟底形石器30点・尖頭器30点・細石刃102点・石核類528点・翼状剝片310点・縦長剝片79点などを数える。

さて、58年度は本格的な整理業務を行う第1年目である。4月1日付けで本四公団との間で締結した「香川県側埋蔵文化財発掘調査委託契約(その1)」によって整理業務のスタートを切った。58年度契約は、従来の島嶼部調査を主体とした「海峡部埋蔵文化財発掘調査委託契約(その1～6)」に対して、調査資料の整理業務を取り扱ったものになっている。その整理業務については、これから61年度にかけて6分冊(各年度2分冊)からなる調査報告書を作成しようとするもので、羽佐島遺跡の調査報告は第1分冊にあたる。10月刊行が当初の予定である。できるだけ多くの遺物を正確に資料化して紹介することを念頭におきながらも、急ピッチで作業を進めなければならなかった。現場調査時の図面や前年度までの遺物実測図の点検、補充の遺物実測、遺物計測及び観察表の作成、遺物の分析と遺跡の内容把握、原稿執筆、遺物写真の撮影、各種図版のレイアウト・トレースの仕上げ、本文・図版編の編集……など、4月～10月末に至る整理作業の動向は図示したとおりである。なお、それらの整理作業には、主任技師渡部明夫を中心に、嘱託坂口淳子・補助作業員5名が当たった。

第2表 昭和58年度羽佐島遺跡の整理作業経過

経過 作業項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
調査図面・遺物の整理	■						
遺物実測図の点検	■	■					
補充の遺物実測	■	■	■	■			
遺物計測		■	■	■			
遺物レイアウト・トレース		■	■	■			
遺物の分析		■	■	■	■		
調査写真の抽出						■	
遺物写真の撮影					■	■	
遺物計測表・グラフ図の作成						■	
遺物観察表の作成						■	■
図版等の作成						■	■
原稿の執筆				■	■	■	■
本文編・図版編の編集							■

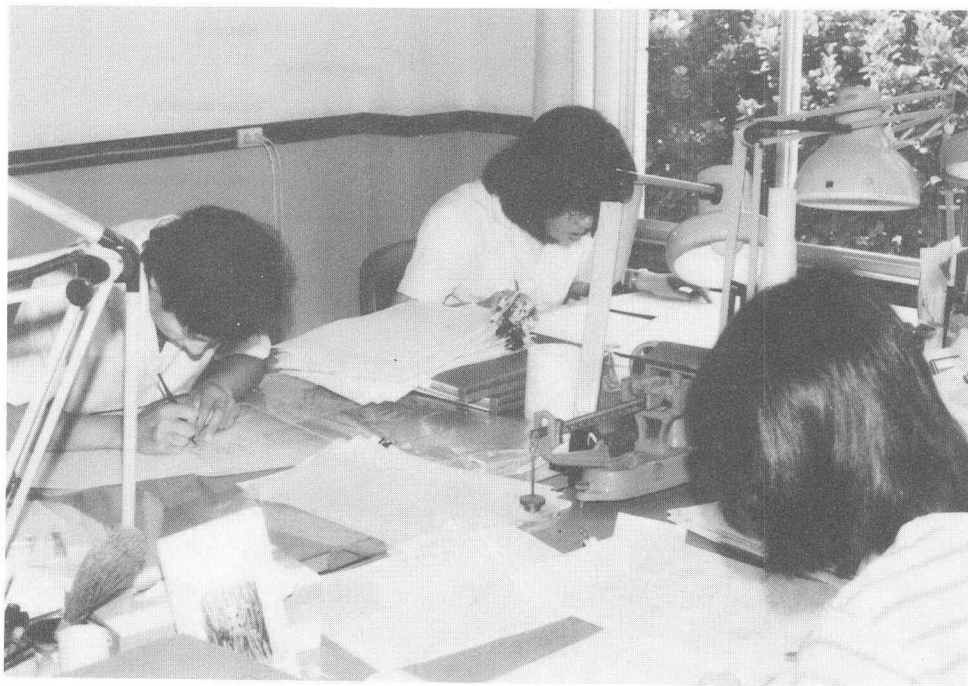
今、ここに『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告I羽佐島遺跡(I)』を刊行するはこびとなったが、思えば予備調査以来7年目、250,00点を越える出土遺物の取り組みにはつきりした段落がついたわけではない。見落した観察点や検討事項も多いだろうし、まだまだ資料化して十分に見極めていかなければならない遺物も多い。なによりも、調査研究を深めていく努力の不足が目立っているかもしれない。本書が、特に旧石器研究の一助になればまことに幸いではあるが、各方面からの積極的なご叱正・ご教示にも期待を寄せている。われわれ自身も、これを機に新たな出発点を見出していきたい。

羽佐島遺跡の整理作業に携わった補助作業員

菅一美，本莊潤子，米沢美枝子，赤田早由里，西村万知子，白本敦子，石川恵子
三野清美，上野浩美，大平倫子，杉村澄子，森加代子（以上退職者）
日下五十鈴，川田裕加子，戸川昌代，和泉美香子，西桶右子，徳井秀子，阿野晃子



第 12 図 遺物の写真撮影



第 13 図 遺物実測図のトレース

第3章 層序と遺構

第1節 土層序と遺物の出土状態

1. 土層

羽佐島遺跡は花崗岩からなる低丘陵性の島の尾根上や斜面上部に立地し、遺物はすべて花崗岩風化土から出土した。この遺物包含層である花崗岩風化土は他所から運ばれた堆積土ではないが、深さによって、また地点によって色調・硬度・土質に違いが認められる。調査の結果、土層序は、調査区南部（南北軸1～15）・中央部（16～28）・北部（29～42）で若干の違いがあることがわかった。

(1) 調査区南部の土層（第14・21・22図）

尾根部（B地区）の基本的な層序は、**第1層**・厚さ5cm前後の腐植土、**第2層**・10～15cmの淡灰褐色土、**第3層**・10～20cmの灰褐色土、**第4層**・厚さ40cm前後、灰色～暗褐色の硬質ブロックを含む黄褐色土、**第5層**・花崗岩パイラン土（地山）である。

また、斜面部（A・C地区）の一部には第3層と第4層との間に、**第6層**・黄褐色から暗褐色の土壌が10cm前後の厚さで認められる。

第1層は腐植の進んだ有機物を多く含む。地表に堆積した有機物が分解し、表土と混合したものである。

第2層は粒子が細かく、植物の根の作用などによる風化を強く受けている。

第3層は第2層より粒子が若干粗く、より硬質である。第2層ほど風化を受けていないのであろう。

第4層は、灰色～暗褐色の硬質ブロック土と、その間隙に黄褐色土が充填した層で、上層に比べてきわめて硬質である。この硬質ブロック土からは遺物の出土がきわめて少ないので、花崗岩がブロック状に分割されながら風化したままの状態を示すものとも考えられたが、少量ながら硬質ブロック土の中からも遺物の出土が認められ、特にC10-1南東部のピット内にはこの土も埋まり、炭化物をはじめ多くの遺物を出土したので、花崗岩の風化そのものではないものと思われる。

第5層は黄褐色の風化パイラン土で、遺物は全く出土しなかった。

第6層は黄褐色から暗褐色を呈し、第4層の硬質ブロック土の間隙を埋める土に類似する。土質は第3層に近い。

(2) 調査区中央部の土層（第14・15・20図）

B16～B26及びA26-1～A28-1の土層は、南部の土層ほど整然とせず、特に第3層以上において、層の切断や土盛りが著しい。その原因として、昭和初期に存在していたといわれる家屋や、戦後の採石関係の建物の建設による整地が考えられる。調査開始直後の伐採によって、この地域には、建物の敷地跡を示すと思われる平坦面がいくつか確認され、発掘によって、戦前の銅貨や陶磁器類が出土したので、この地区の土層の攪乱が最近行われたものであることは疑いない。ただ、第4層には最近の攪乱がほとんど及んでおらず、また、旧状をとどめる部分

での観察によれば、本来の土層は調査区南部と一致するようである。

(3) 調査区北部の土層 (第14・19・23・24図)

調査区北部の層序は、第1層・厚さ5cm前後の腐植土、第7層・厚さ10～20cmの暗褐色土、第8層・10cm前後の暗褐色土、第3層・10cm前後の灰褐色土、第4層・40cm前後の厚さをもち、灰色～暗褐色硬質ブロック土を含む黄褐色土、第5層地山へとつづく。

調査区北部の第3層は、一応南部の第3層からの連続と考えたが、南部の第6層が上部の第7層・第8層からのよごれの浸透を受けた可能性も否定できない。また、第7層と第8層は本来同一の層であるが、根の進入による硬度差で2層に分離した。いずれも有機質を多量に含み、粒子は細かく軟質で、黒色に近い色調である。両層とも戦後間もない頃まで行われていたという畑作土壌と思われる。第7層上部までは遺物をあまり含まないことは、それを裏付けるものであろう。

以上のように、羽佐島遺跡の土層序は、調査区の南部と北部で若干の違いを示すが、第4層は全てに広がっている。地表面から地山である第5層上面までの深さは、尾根部分で約50cm、斜面部の深いところでは1mを越す。各層とも基盤をなす花崗岩の風化土であり、後述するように、出土遺物は各層とも幅広い時代に属するものである。

2. 遺物の出土状態

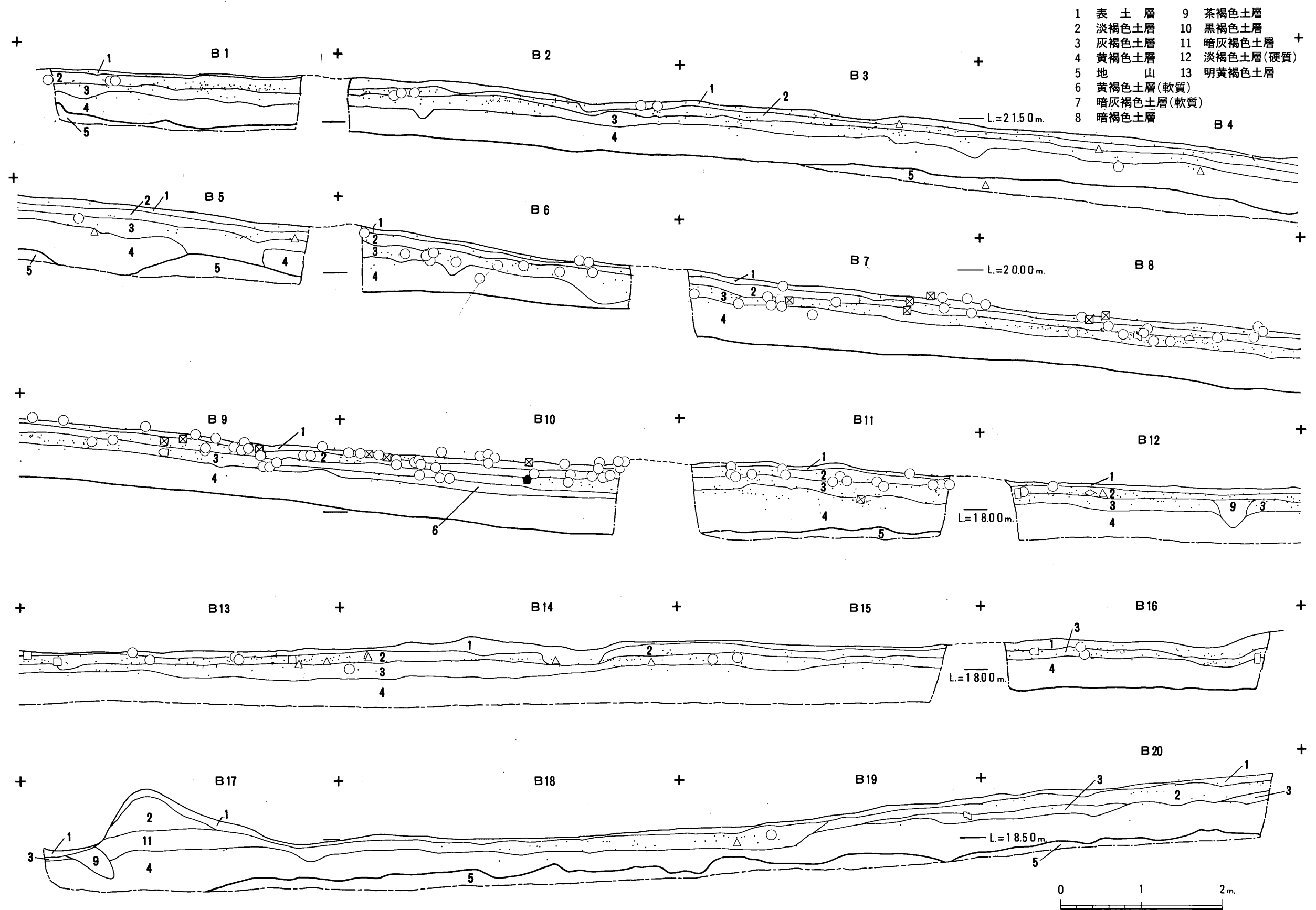
今回の発掘調査によって出土した遺物は膨大な点数に達する。出土遺物のうち、第1層と第2層について2×2m単位で取上げたものの点数は未確認であるが、出土状態を記録したものが約104,000点にのぼり、両者を加えると250,000点は下らないものと思われる。その大半は旧石器時代の遺物であった。

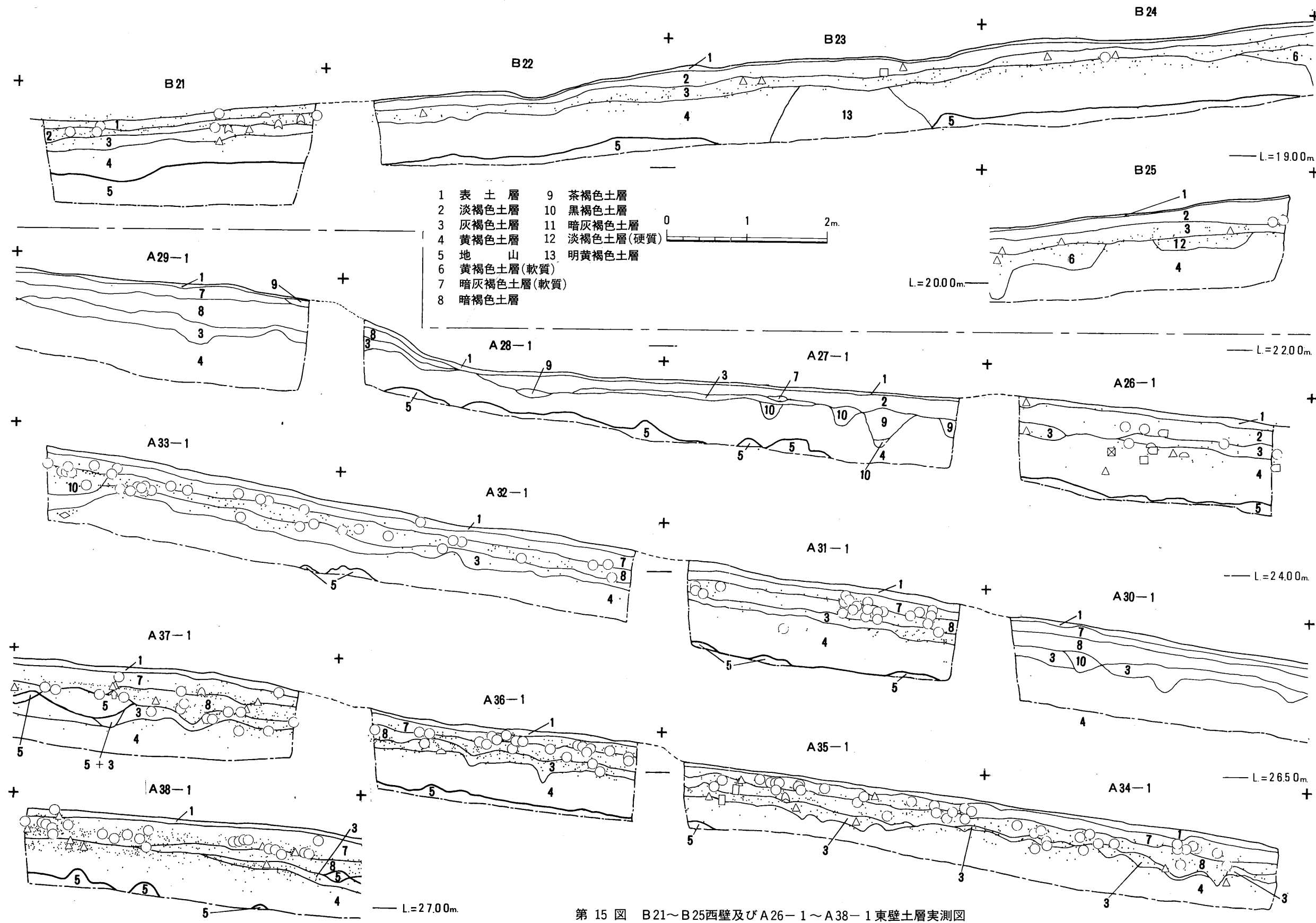
これらの遺物は調査地区の全域から濃密に出土したが、尾根筋(B地区)に比べて斜面下部は少なく、調査区南部・中央部に比べて北部に多いことが指摘できる。今回の調査で遺物出土が最も多かったのはA列の35-1～39-1・35-2～39-2など北部尾根筋寄りのグリッドで、特にA38-1では1㎡当り200点近くの遺物が出土している。ちなみに、B6・B21・A37-1・A38-1の出土遺物点数とその内訳は第3表のとおりである。

これに対して、調査区南部の尾根筋(B地区)では1㎡当り30～40点程度の出土であり、北部と比べるとかなり少ない。調査区中央部の尾根筋では部分的に多いB21を除くと、南部と同程度、もしくは若干少ない(第4表)。しかし、これは第1・2層の遺物を加えていないため、これを加えると南部と同程度の遺物が出土したことになる。

器種	グリッド			
	B 6	B21	A37-1	A38-1
サヌカイト 他の剥片・碎片	489	2,209	2,800	3,897
ナイフ形石器	17	58	141	150
舟底形石器	0	0	0	0
尖頭器	0	4	1	3
彫器	0	0	0	0
スボール	0	1	0	1
石錐	0	0	0	0
楔状石器	1	2	2	1
削器・搔器	5	7	15	25
調整痕ある剥片	0	3	3	1
横長剥片石核	2	14	31	46
翼状剥片	3	25	40	54
縦長剥片石核	1	5	3	6
縦長剥片	5	16	17	22
細石核	0	3	0	0
細石刃	0	7	3	2
石鎌	1	9	27	39
叩き石	0	1	5	3
玻璃質安山岩	0	22	6	9
黒曜石	0	0	0	0
凝灰岩	2	1	3	0
自然石・礫	97	248	148	205
土器	151	118	523	582
炭化物	6	17	3	0
出土総点数	780	2,770	3,771	5,046

第3表 B6・B21・A37-1・A38-1の出土遺物数とその内訳

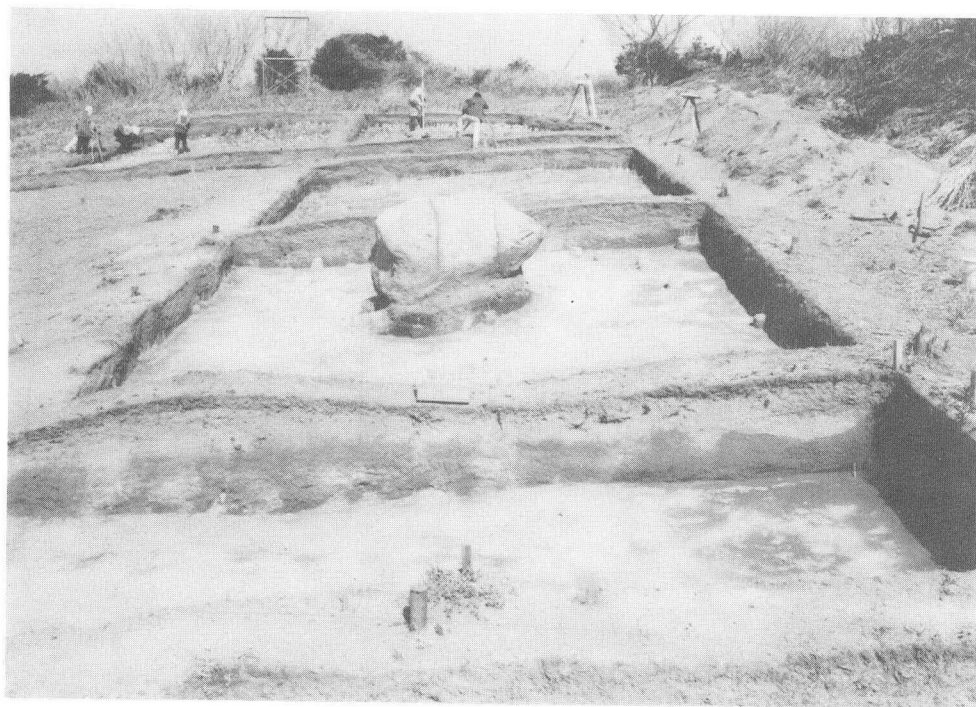




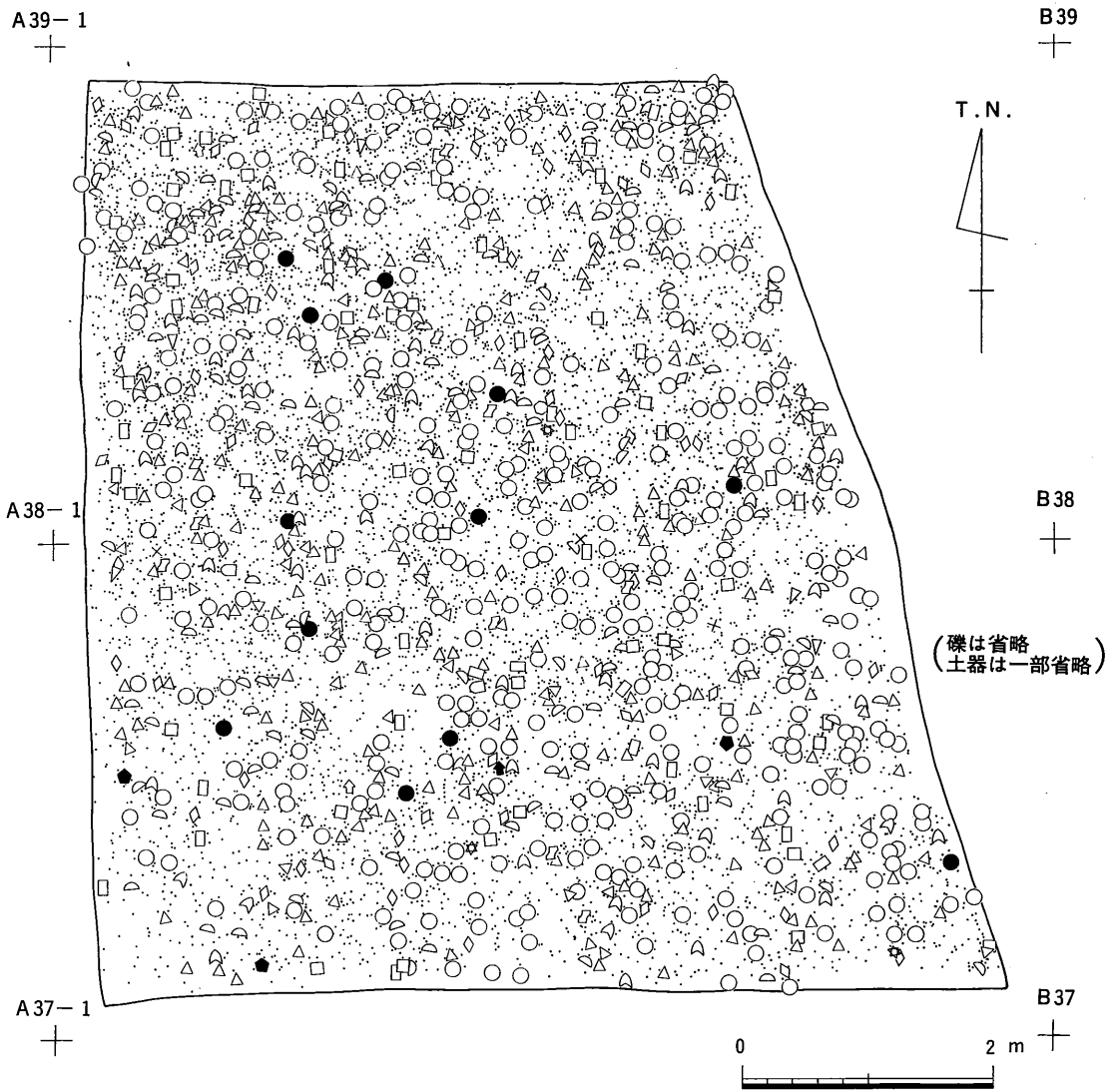
第 15 图 B21~B25西壁及A26-1~A38-1東壁土層实測图

凡 例

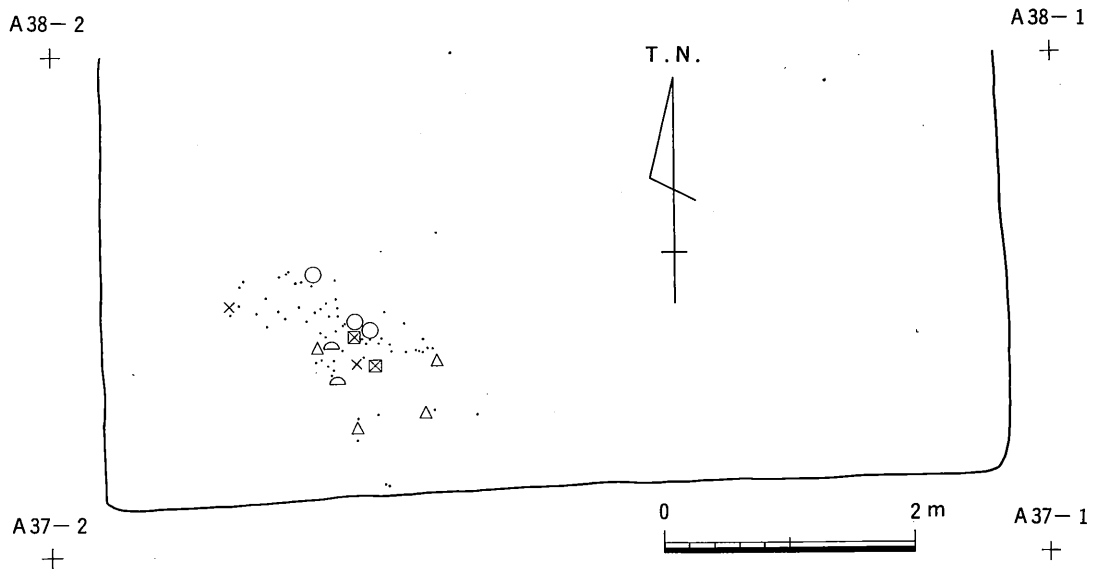
ナイフ形石器	△	縦長剥片	□
舟底形石器	▲	細石核	⬡
尖頭器	⬆	細石刃	▽
スポール	◀▶	石鏃	⤴
削器・搔器	□	叩き石	⬇
楔状石器	☆	玻璃質安山岩	●
調整痕ある石器	◻	黒曜石	⊗
石核	◇	流紋岩	⬠
翼状剥片	◐	自然石・礫	⊠
斜剥片	■	土器	○
縦長剥片石核	⬡	炭化物	×



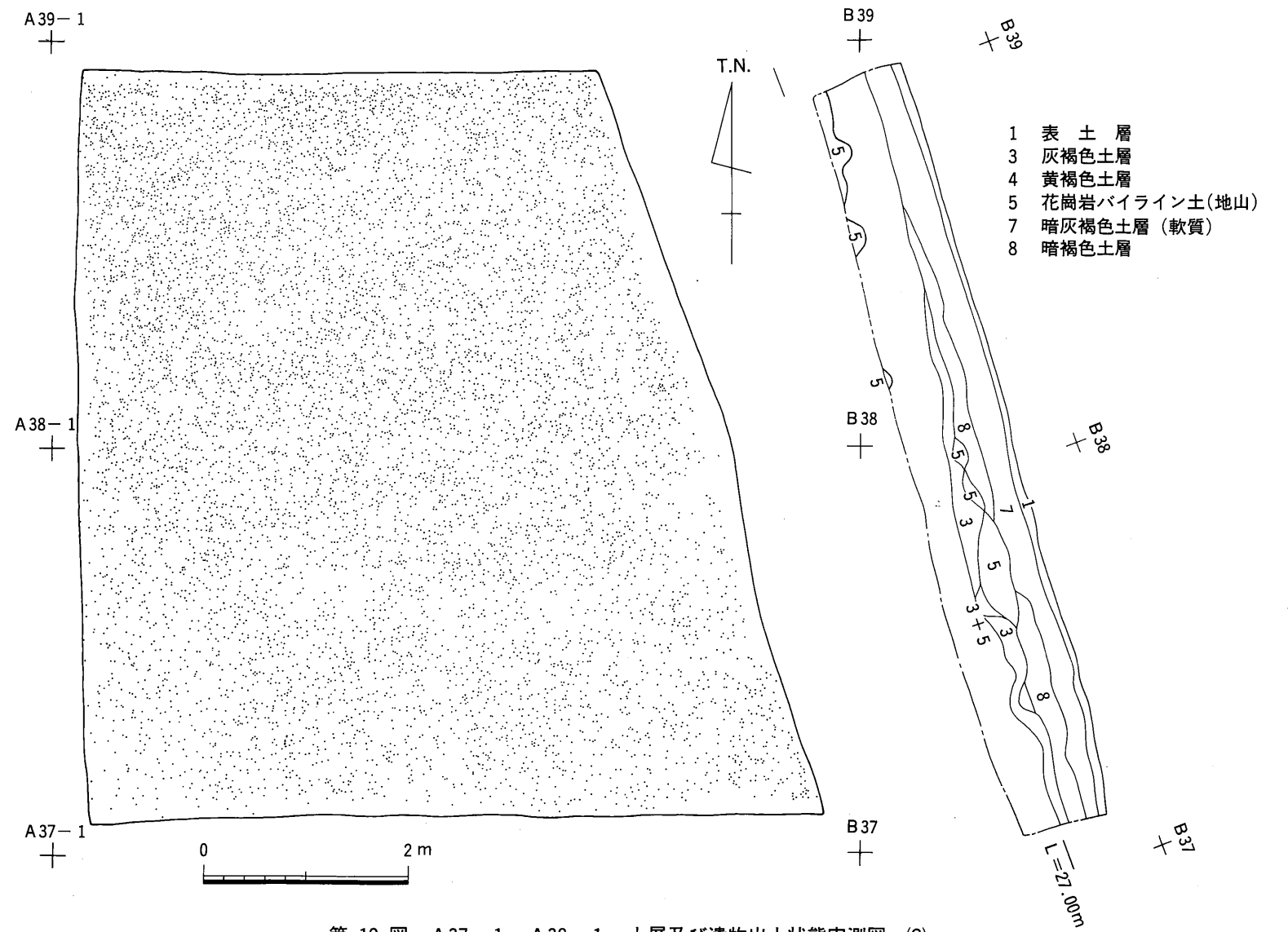
第 16 図 A37-1・A38-1 付近の調査風景



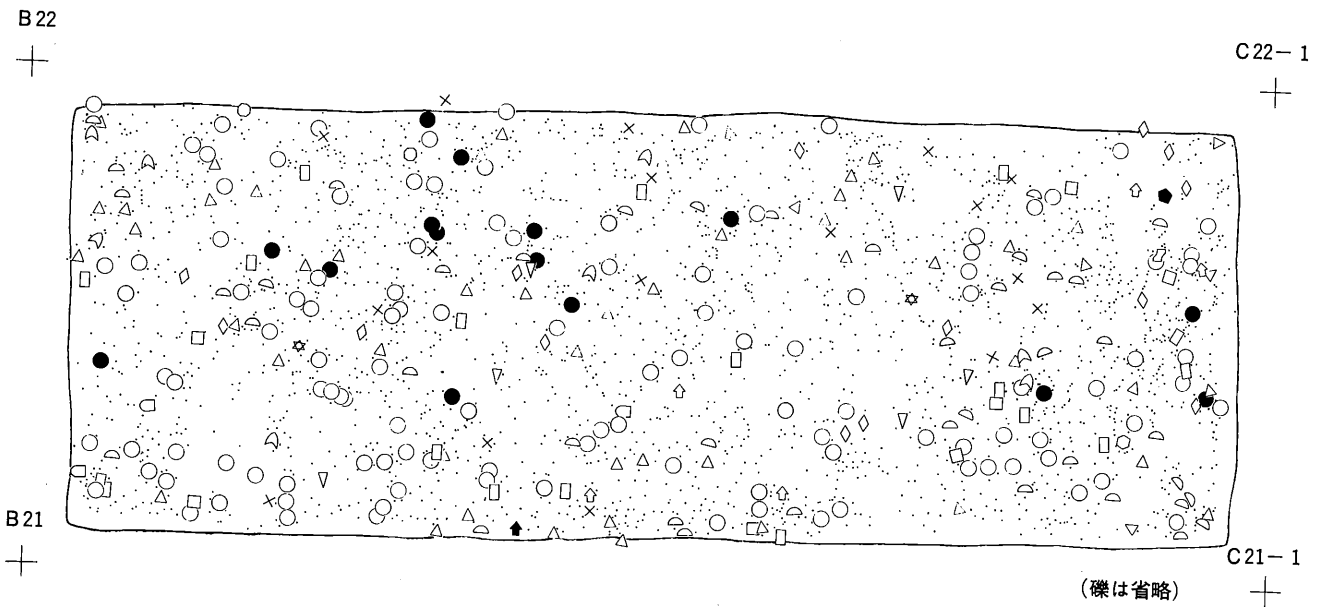
第 17 図 A37-1・A38-1 遺物出土状態実測図 (1)



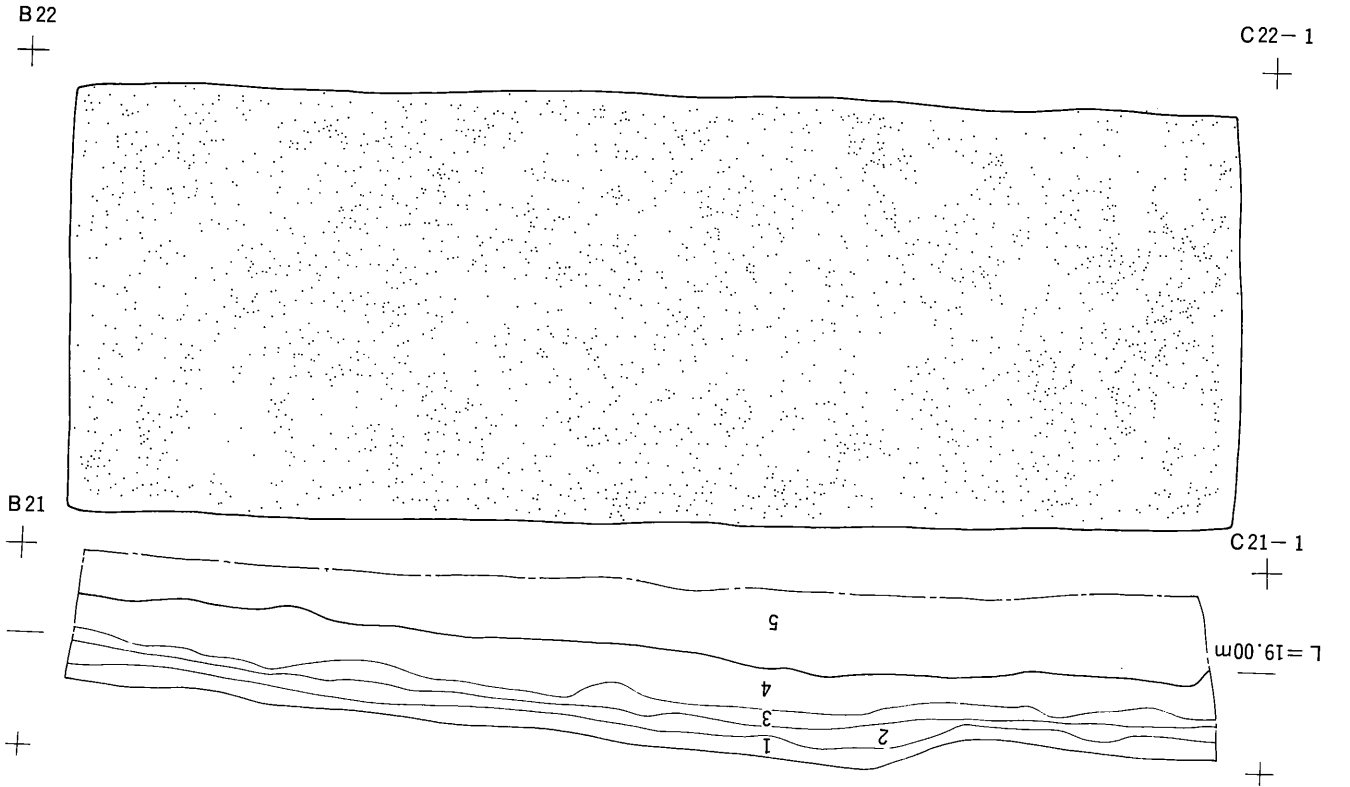
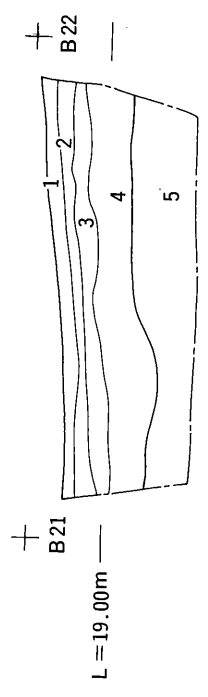
第 18 図 A37-2 第18面(最終面)遺物出土状態実測図



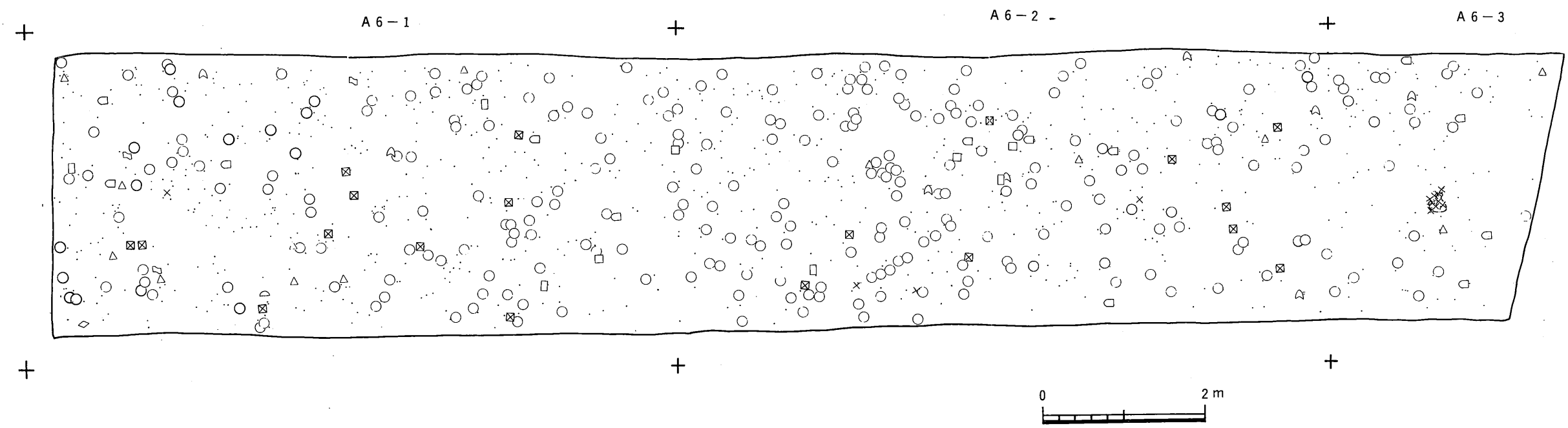
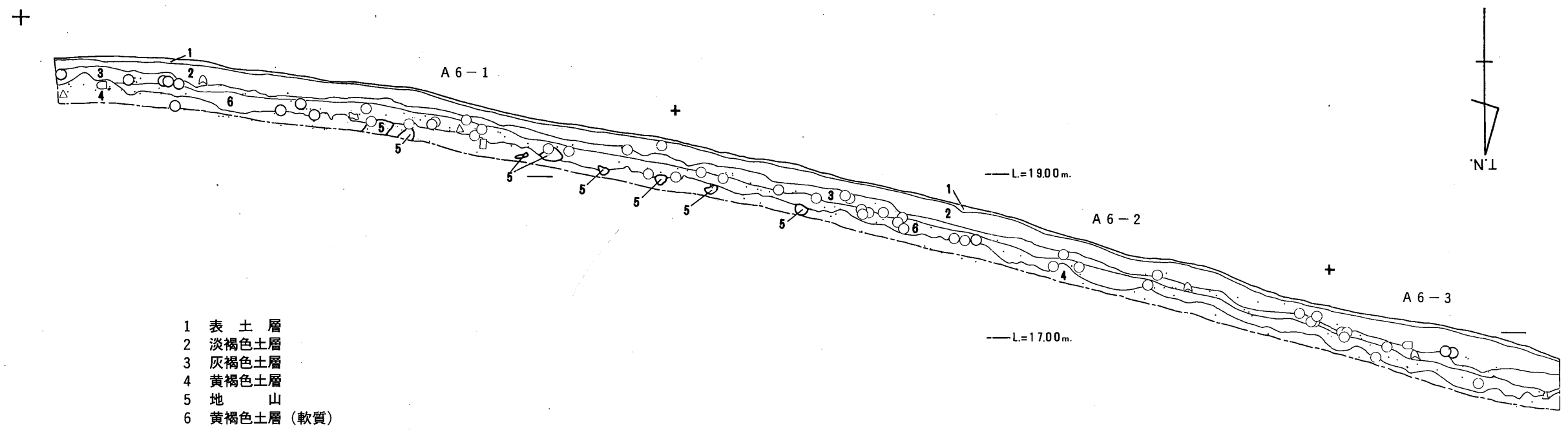
第 19 図 A37-1・A38-1 土層及び遺物出土状態実測図 (2)



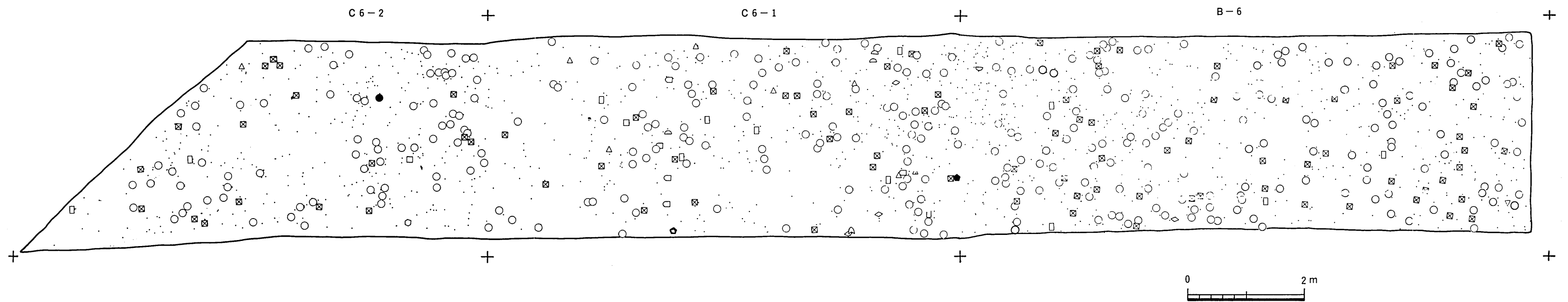
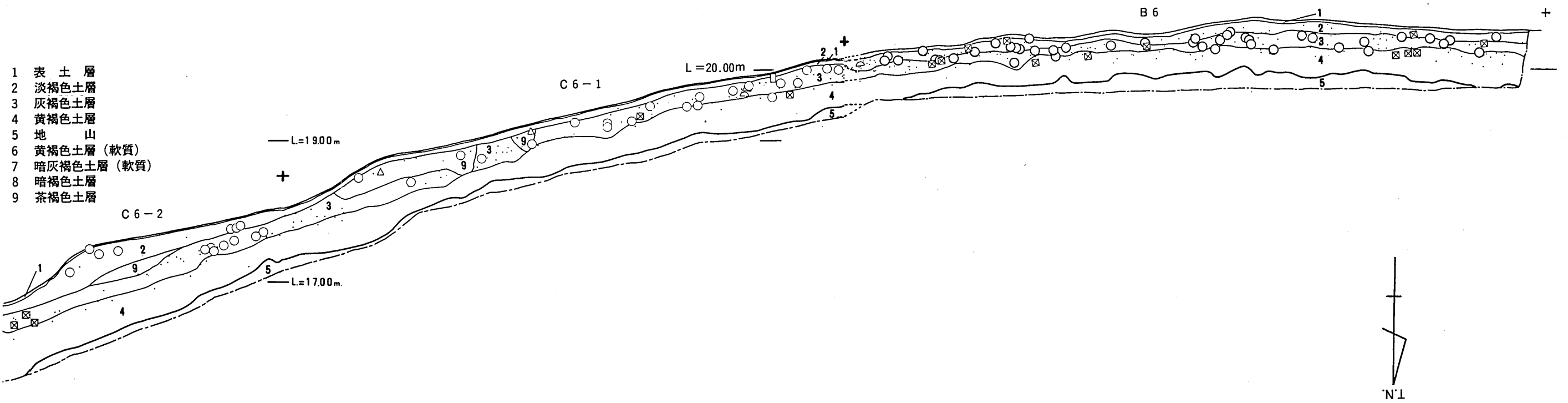
- 1 表土層
- 2 淡褐色土層
- 3 灰褐色土層
- 4 黄褐色土層
- 5 地山(花崗岩パイライン土)



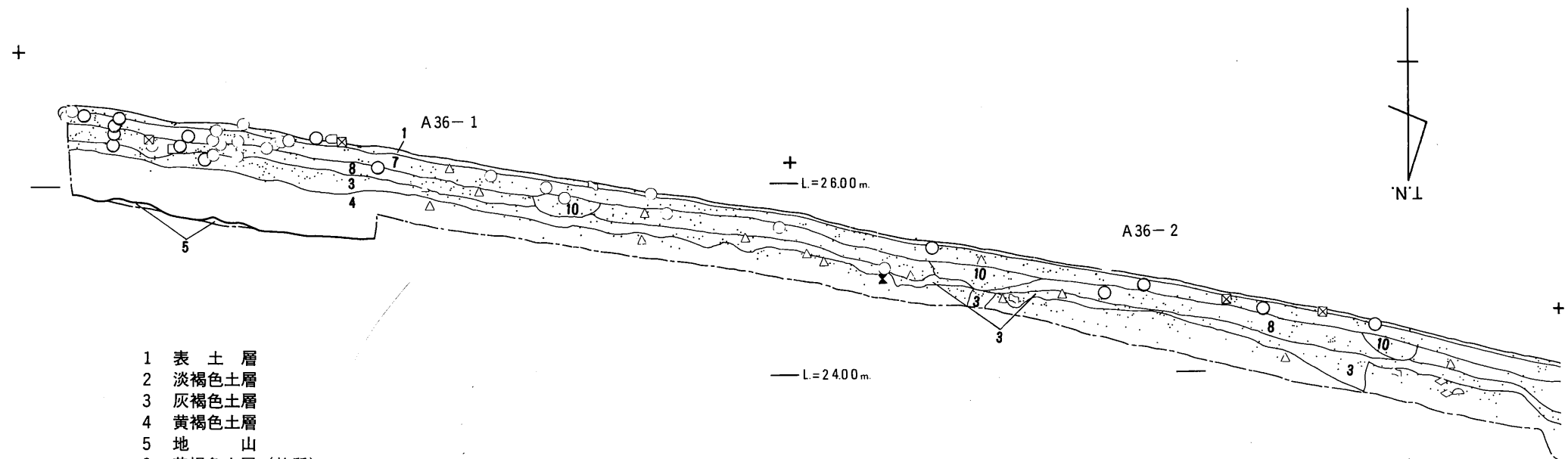
第 20 図 B21 土層及び遺物出土状態実測図



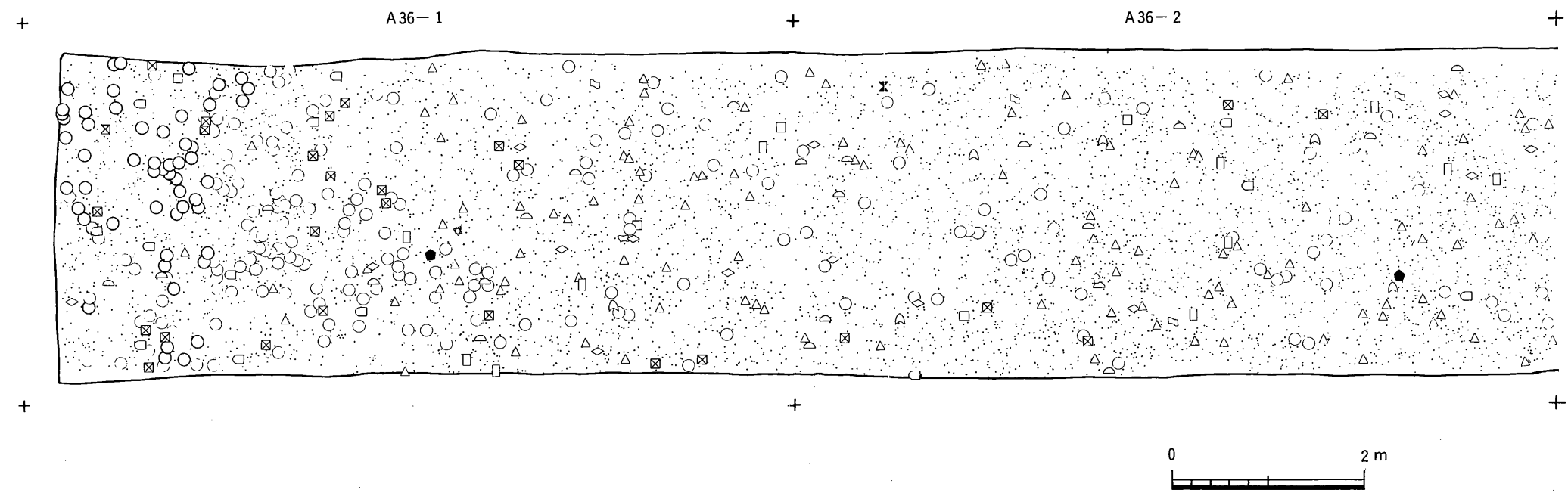
第 21 図 A6-1~A6-3 土層及び遺物出土状態実測図



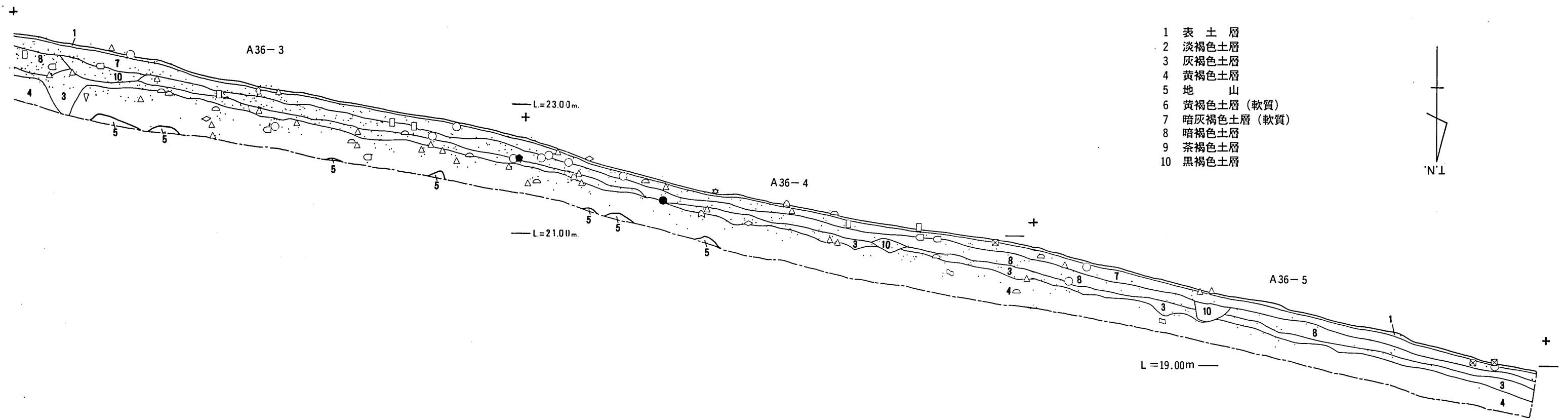
第 22 図 B6・C6-1・C6-2 土層及び遺物出土状態実測図



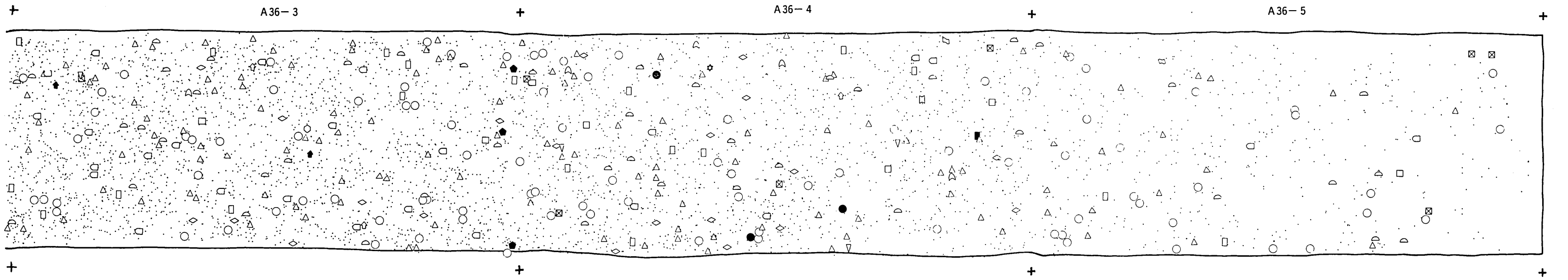
- 1 表土層
- 2 淡褐色土層
- 3 灰褐色土層
- 4 黄褐色土層
- 5 地山
- 6 黄褐色土層 (軟質)
- 7 暗灰褐色土層 (軟質)
- 8 暗褐色土層
- 9 茶褐色土層
- 10 黒褐色土層



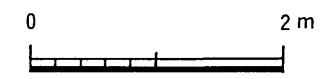
第 23 図 A36-1・A36-2 土層及び遺物出土状態実測図

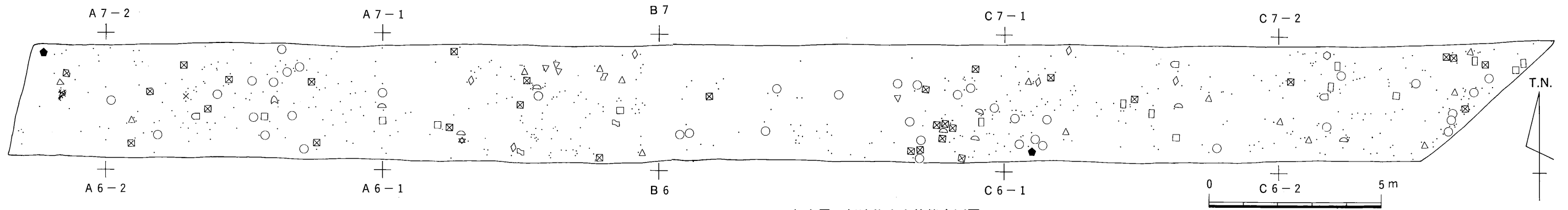


- 1 表土層
- 2 淡褐色土層
- 3 灰褐色土層
- 4 黄褐色土層
- 5 地山
- 6 黄褐色土層 (軟質)
- 7 暗灰褐色土層 (軟質)
- 8 暗褐色土層
- 9 茶褐色土層
- 10 黑褐色土層

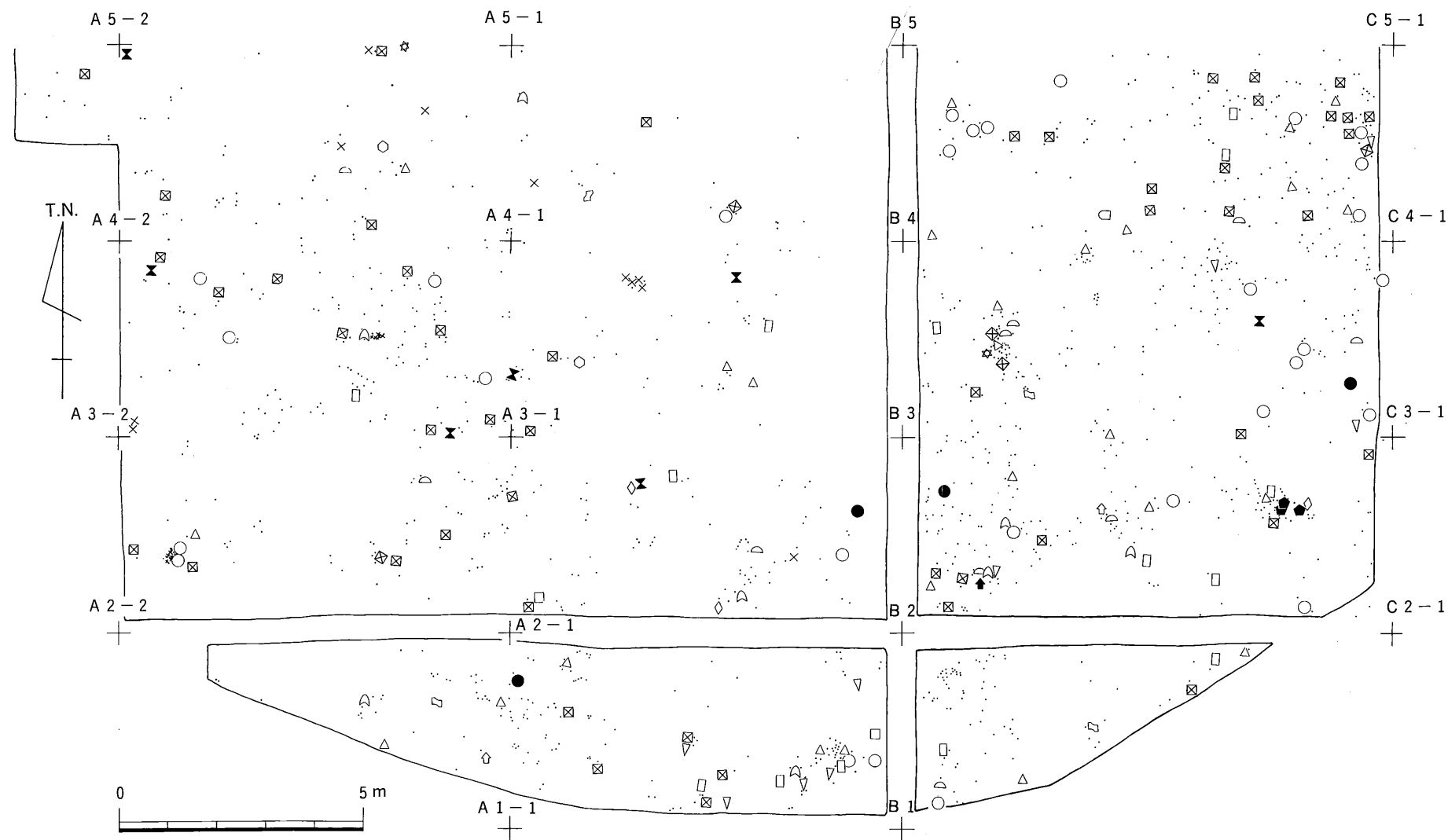


第 24 図 A36-3 ~ A36-5 土層及び遺物出土状態実測図

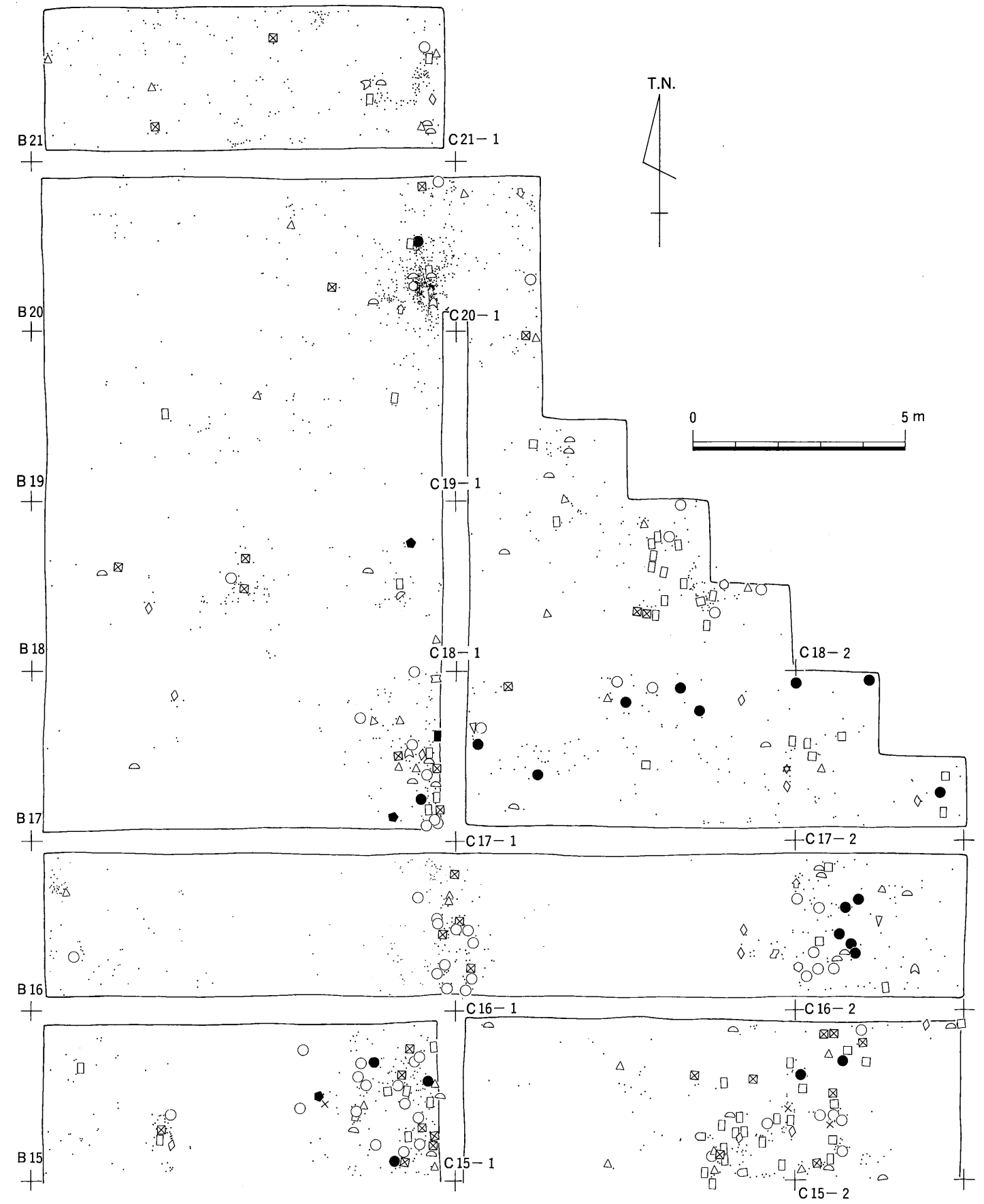




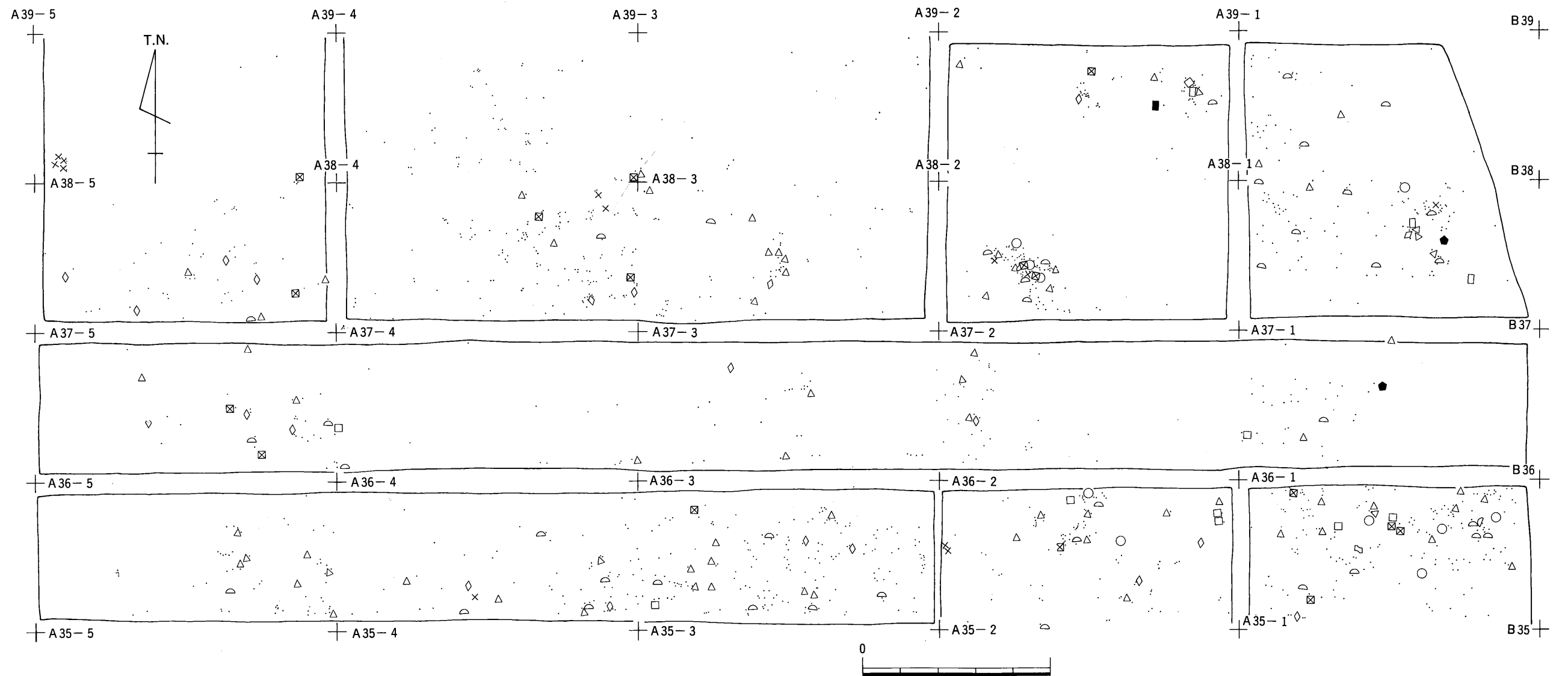
第 25 図 A 6-1~C 6-2 包含層下部遺物出土状態実測図



第 26 図 A 1-1~A 4-3, B 1~B 4 包含層下部遺物出土状態実測図



第 27 図 B15~B21, C15-1~C20-1 包含層下部遺物出土状態実測図



第 28 図 A35-1 ~ A38-5 包含層下部遺物出土状態実測図

遺物は、調査区全域にわたって第4層上部までに多かった。このうち第4層上面まで（調査区南部・中央部では第3層ないし第6層まで、北部では第3層まで）は、多数の旧石器時代遺物と共に、石鏃や古代・中世の土器、時には現代の陶磁器が出土し、旧石器時代の遺物は二次的に移動したことが明らかであった。これに対して第4層上部になると土器の出土は激減する。しかし、A37-2（第18図）では第4層下部の地山直上においてもサヌカイトの剥片や碎片・ナイフ形石器や翼状剥片などと共に土器がまとまって出土した。また、C10-1南東部の縄文時代と思われるピットは、第4層下部で炭化物の集中が目立ち始めたものの、掘り形が確認できたのは地山面においてであった。

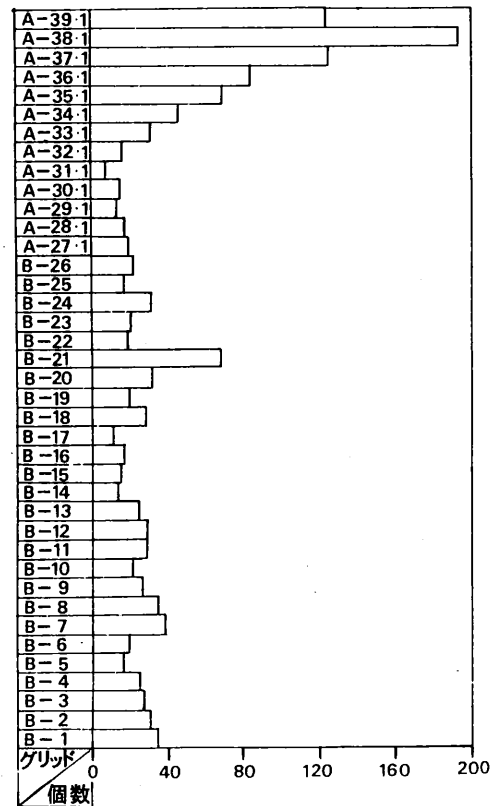
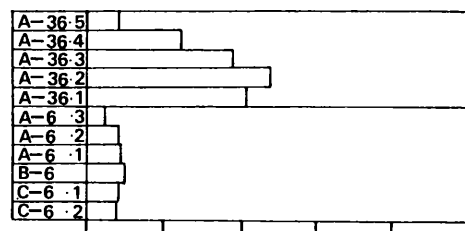
以上のことから、土器や石鏃が第4層の比較的下部まで出土する例が少ないものの、第4層が調査地区全体に広がっていることからすれば、羽佐島遺跡には旧石器時代の純粋な遺物包含層は存在しないといわなければならない。

旧石器時代の遺物は、出土層位を無視して出土状態をとらえようとすれば、多少の濃淡はあるものの、調査地区全体からほぼ途切れることなく出土し、遺物を平面的なまとまりとして把握することはできなかった（第21・22・23・24図）。表土層から第3層ないし第6層までの遺物についても同様である。これに対して、第4層ないしその下部になると地点によって遺物が集中する傾向が認められる（第25・26・27・28図）。B20の東端部はその最も顕著なもので、第3層下部から第4層にかけてサヌカイトの微小なチップを主体とする旧石器時代の遺物がまとまって出土した。しかし、この中には石鏃も含まれており、^{註(1)} また、これを除くと、規模があまりに小さいことや、石鏃・土器などの後世の遺物を含むことなどから、こうした遺物の集中をブロックと認定することはできなかった。

一方、玻璃質安山岩製遺物や黒曜石製遺物・スポールなど出土点数が少ないものについては、集中して出土する傾向を示すものがある。

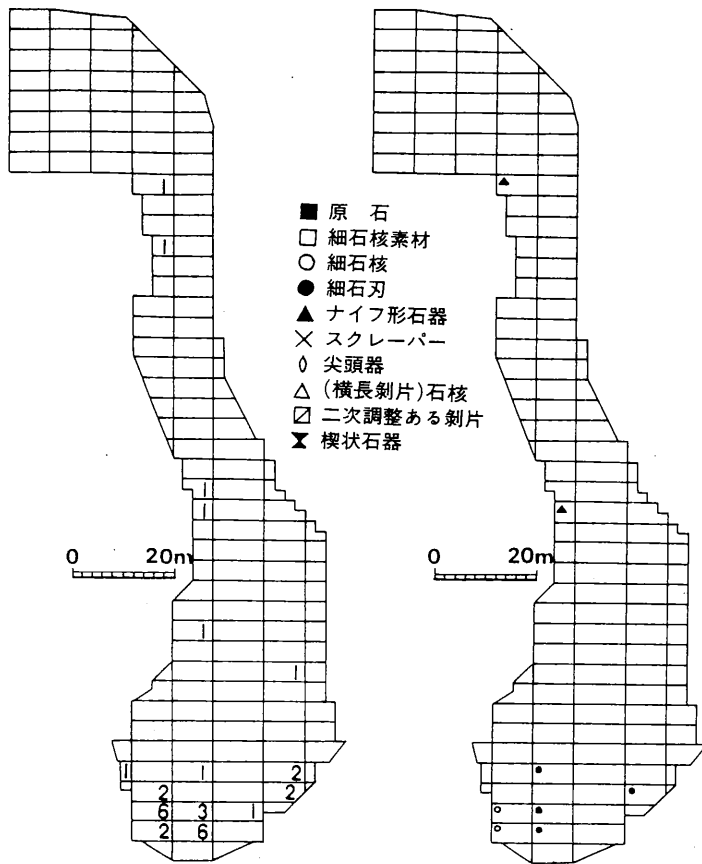
黒曜石製遺物は34点出土したが、2点の表採品を除くと、17点はA1-1・A1-2・A2-1・A2-2から出土しており、この範囲に集中する傾向がある（第5・6表）。黒曜石が集中する範囲は東西16m、南北18mほどの規模で、遺物分布は比較的散漫であり、出土層位も一定していなかった。しかしながら、後世の攪乱を受けながらも調査区南部に比較的まとまって出土したことは注目される。

出土グリッドの明らかな玻璃質安山岩は548点あり、大きくみると調査区南部・中央部・北部の3ヶ所に集中して検出された（第7・8表）。しかも、これらの3ヶ所の間には全く出土しな

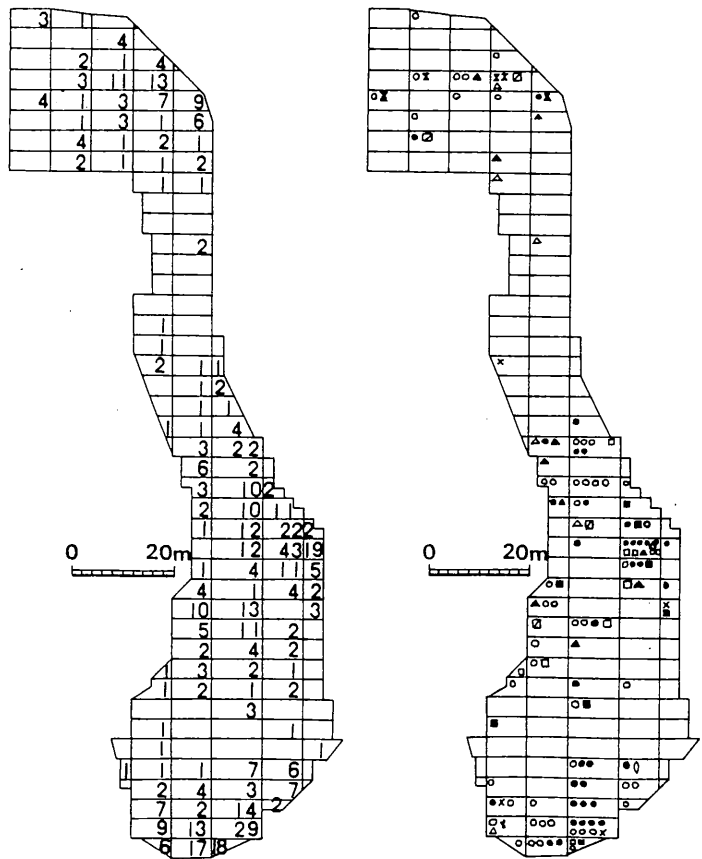


第4表 遺物出土数一覧表(m²単位)

(但し、B-12~15, 17~20, 22~25, A-27.1~30.1, 32.1~35.1, 39.1は表土層と第2層上部の遺物を含まない)



第 5 表 黒曜石製遺物出土分布表 第 6 表 同器種別分布表



第 7 表 玻璃質安山岩製遺物出土分布表 第 8 表 同器種別分布表

い部分がある。玻璃質安山岩が最も濃密に出土したグリッドはC16-1であり、43点出土している。これには、細石核素材2点・細石核2点・細石刃5点・ナイフ形石器1点と共に剥片・碎片がある。また、この周囲からは玻璃質安山岩製の遺物の出土が多く、C15-1やC17-1からは原石も出土しているので、C16-1付近で玻璃質安山岩製石器を製作したことはほぼ疑いないであろう。一方、調査区南部のB2グリッド付近も玻璃質安山岩製遺物が濃密に出土した。B1~B3・A1-1・A1-2からは約90点の出土があり、削器1点を含むほかは細石刃関係の遺物であった。この集中地点と黒曜石製遺物（細石刃関係の遺物を含む）の分布が一部重複していることは注目される。ほかに、B12・B13・A13-1や、B21・A39-2・A39-3も10点以上の出土があり、やや濃密な分布を示す。

玻璃質安山岩製遺物は、黒曜石製遺物と同じく出土層位は一定でないが、それにもかかわらず平面的にある程度まとまって出土することは、この集中単位が旧石器時代のブロックの痕跡を示している可能性がある。そのように考えれば玻璃質安山岩製遺物には、調査区南端部・B13付近・C17-1付近・B22付近・A39-2付近の5ヶ所のブロックの存在が想定でき、この中ではC17-1付近が最も濃密であり、中心的位置を占めることになる。

これに対して、サヌカイト製遺物はあまりに出土点数が多すぎて、

こうした集中傾向を捉えることは困難である。しかしながら、両面加工の素材を利用した彫器とスポールなどのような点数の少ない遺物の出土状態は、サヌカイト製遺物の本来のあり方を示唆するものとして注目される。

両面加工の素材を利用した彫器は今回の調査で3点出土したが、そのうち2点はA40-2・A41-5からの出土であった(第19表)。しかも、これに伴うと思われるスポールは21点あるが、縦長剥片の剥離工程における初期の剥片の可能性のあるものを除く14点はA35～A40の調査区北部から出土している。彫器の出土したA40-2の南に隣接するA39-2からは3点、その西のA39-3から2点あり、この付近への集中が著しい。したがって、両面加工の素材を利用した彫器は、この付近で製作されたと考えて良いであろう。また、第4章で述べるように、他のサヌカイト製石器の出土においても、いくつかの地点に集中する傾向を示すものも認められる。

以上のような結果を参考にすれば、調査地区全域からきわめて多く出土したナイフ形石器をはじめとする他のサヌカイト製石器も、もとはブロック状をなしていたものが、あまりに多くのブロックが重なって各ブロックの境界が不明瞭となり、それが後世の攪乱を受けて現在のような状態で各層に包含されることになったと思われる。

註(1)

この遺物集中箇所はこれまでほぼサヌカイトの碎片のみで構成されると考えていたが、今回の整理によって、翼状剥片3点・縦長剥片2点・縦長剥片石核1点・尖頭器1点・玻璃質安山岩1点・石鏃1点が確認できた。

第2節 遺構と遺構出土遺物

1. 遺構

検出された遺構はすべてピットであるが、その数は多くない。ほとんどが第3層上面で確認され、第4層上面で検出されたものは2例、地山に掘り込まれたものは1例しかなかった。

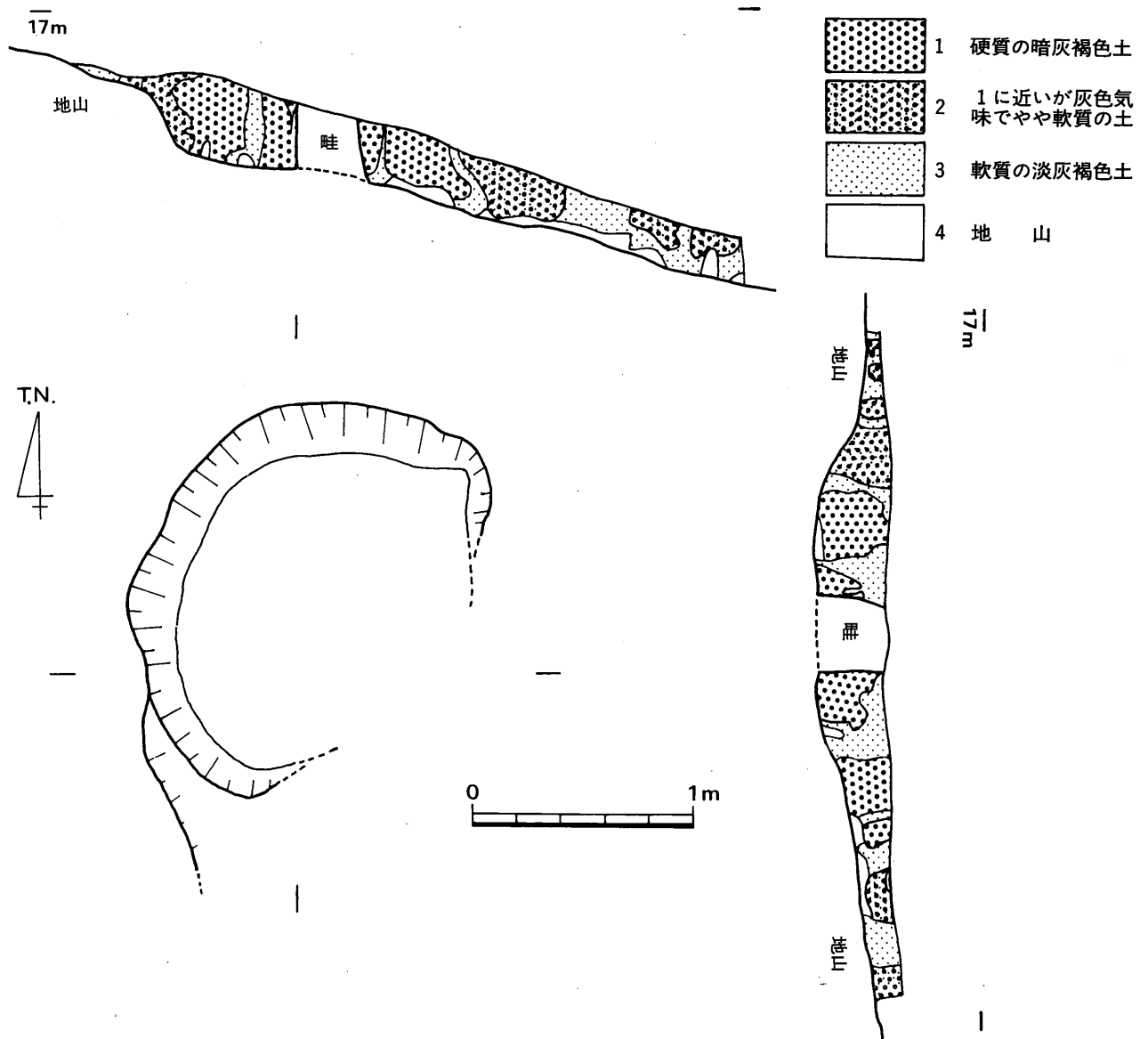
第3層上面で検出されたピットは直径20cm前後、深さ10～20cm程度の大きさで、柱穴としては浅く、組合せ関係も認められなかった(第29図)。第3層からは中世の土器も出土しているので、ピットの時期は中世以後に比定されるが、その性格は明らかでない。

C8-1・C10-1の第4層上面では、焼土塊を含む直径20～30cm、深さ10cm前後の小ピットが1例ずつ検出された。

一方、C10-1の南東端部では、地山に掘り込まれた浅い不整形円形のピットが検出された。第4層下部を発掘する段階



第29図 A33-1 第3層上面のピット



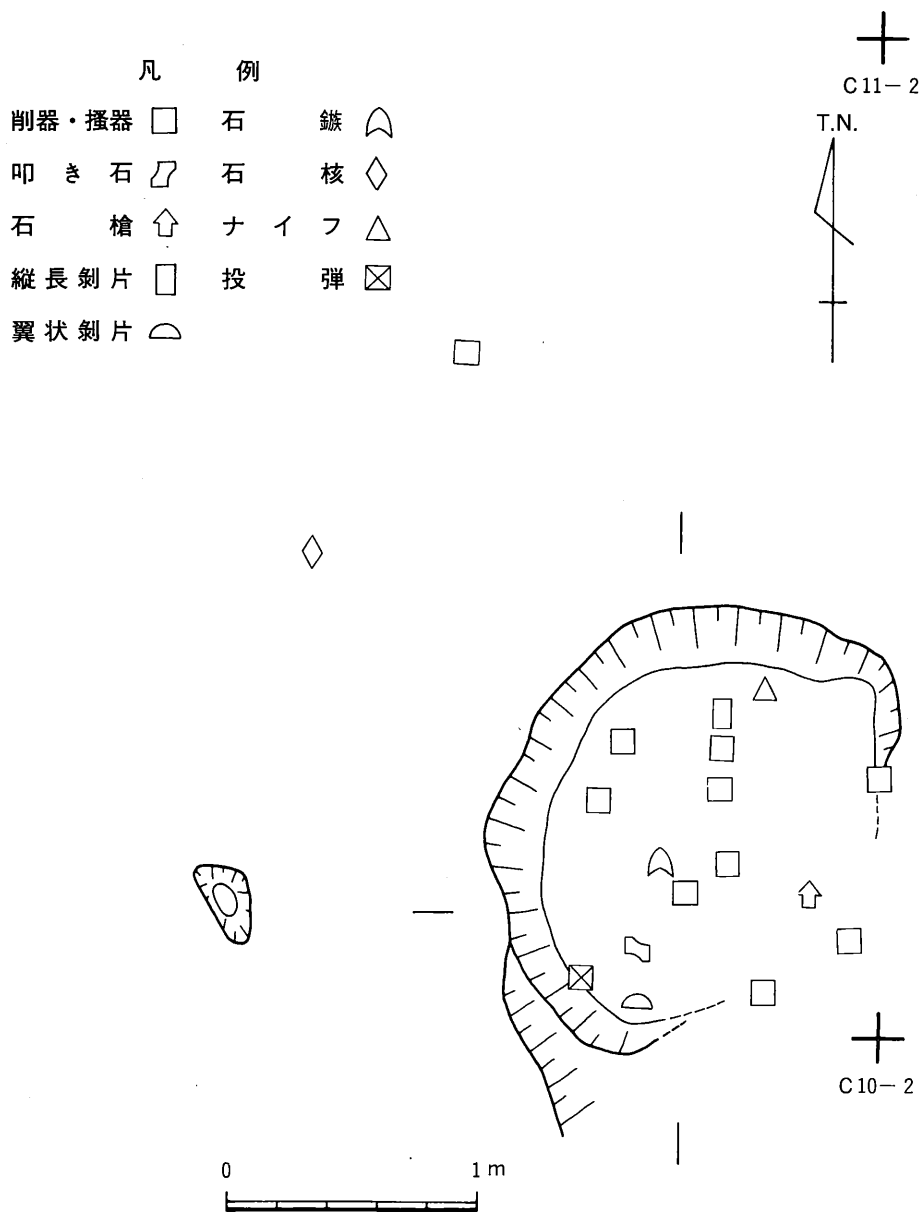
第 30 図 C10-1 南東ピット実測図

では掘り形は確認できなかったが、微小な炭化物がやや目立ち、長大な石槍や削器が出土したところから直交するセクション・ベルトを設定して発掘を行った。その結果、斜面下方である南東部で掘り形が消滅しているものの、復元すると長径約1.8m、短径約1.4m、深さ約25cmの不整楕円形ピットを検出することができた（第30図）。

ピットの埋土からは、2,500点を越える微小な炭化物が検出されたほか、土器片82点・サヌカイト片69点・削器3点・円形搔器1点・楔状石器1点・石鎌1点・礫3点が出土した。礫のうち1点は叩き石の破片と思われ、1点は投弾の可能性はある。土器片・サヌカイト片はほとんどが微小な破片である。

また、このピットの掘り形直上から長さ18.9cm以上の長大な石槍と削器4点・ナイフ形石器1点・縦長剥片1点・翼状剥片1点が出土したが、石槍と削器の一部はこのピットに伴う可能性が強いものと考えられる（第31図）。

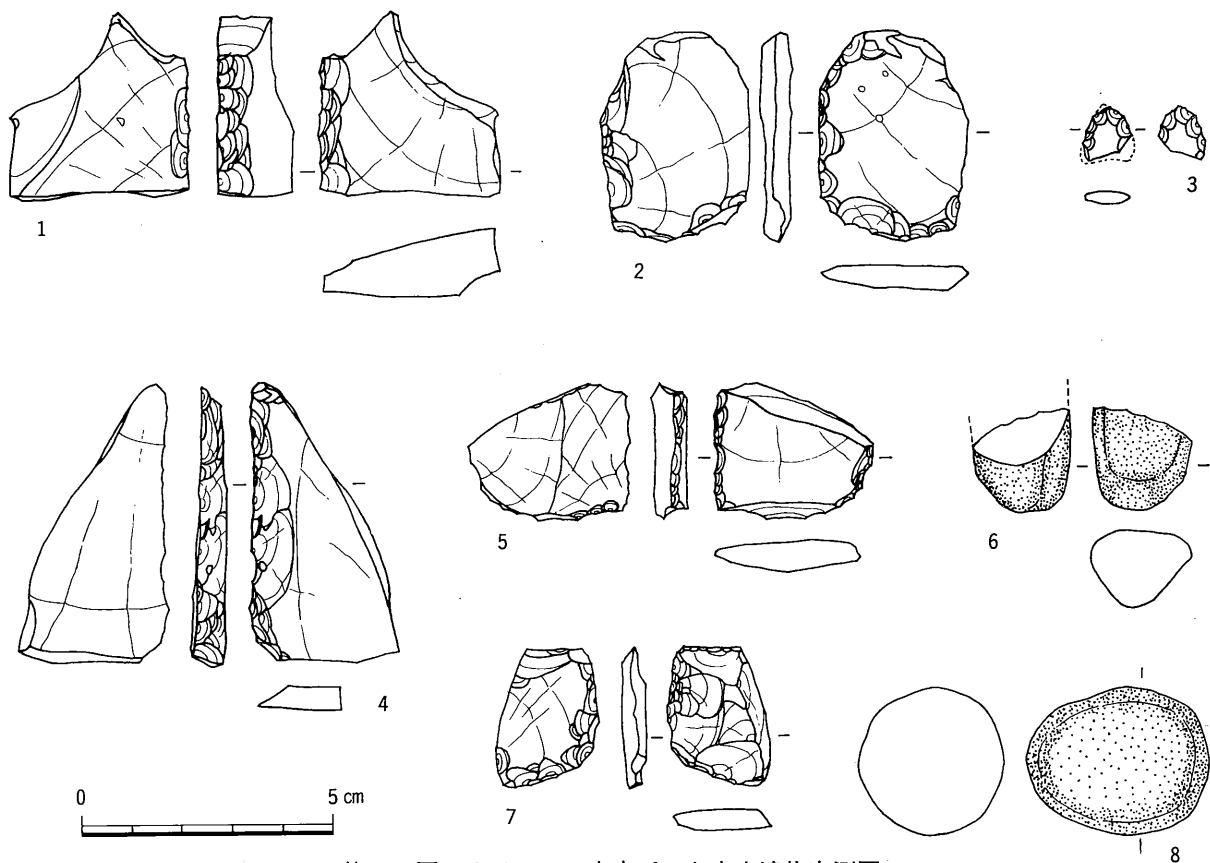
ピットの埋土から出土した土器片はすべて無文土器であり、時期を限定することはできな



第 31 図 C10-1 南東ピット周辺出土石器 (第 4 層下部)

かった。したがって、ピットの時期ははっきりしないが、埋土から石鏃が出土していることから、縄文時代以降に比定されることは明らかである。ただ、羽佐島遺跡で出土した時期のわかる縄文土器には押型文土器しかなく、ピット出土の無文土器の胎土がこれに類似することや、ピットの直上から出土した石槍には顕著な対向剝離が施されていることなどから、縄文時代早期までの時期に比定できる可能性は大きいものと思われる。

遺構の性格については、炭化物や火を受けたとみられる礫などの出土から、火の使用にかかわるものであることは疑いない。しかし、ピット中からは焼土が全く検出されず、埋土は性質の異なる土がブロック状をなしており、基本的には包含層の第 4 層のあり方と異ならない。埋土から出土した土器片のほとんどが微小な破片であることから、このピットが廃棄坑であることも考えることができよう。



第 32 図 C10-1 南東ピット出土遺物実測図

2. 出土遺物 (第32・351図)

ここで取上げるのは、炭化物の集中が顕著となり、セクション・ベルトを設定して掘下げを行った後一括出土した遺物である。

第351図1は、直線的に開く無文土器の口縁部で厚さ4～5mmの器壁を持ち、胎土には1～2mm大の砂粒をやや多く含む。内面は灰褐色を呈し、平滑に仕上げているが、暗灰褐色の外表面は風化のため調整は明らかでない。外面には直径2～3mmの浅い凹みがまばらに認められるが、これも刺突文かどうかははっきりしない。

第32図1・4・5は削器である。板状サヌカイトの一边ないし二辺に浅い調整を加えて刃部とする。4・5の調整は一方の面からのみ行われ、1は両面に及ぶが、片面の調整は粗雑である。

2は円形搔器と思われる。長円形に近い器体の三辺に調整が施されている。調整は浅く粗い。

3は薄い板状サヌカイトの周縁を加工した石鏃であるが、先端部と基部を欠失する。内部まで風化が進み、脆くなっている。

6は砂岩礫の破片で、棒状の叩き石の端部と思われる。赤変し、火を受けたことを示している。

7は楔状石器である。周縁を加工した素材を截断する。周縁の加工には部分的に階段状剝離が認められる。風化が著しい。

8は卵形をなす礫である。砂岩質であるが、粒子は6より細かい。これも火を受けて赤変し、風化が進んで、表面の大部分が剝落している。

第4章 遺物

第1節 旧石器時代の出土遺物

予備調査と2ケ年にわたる本調査において羽佐島遺跡から出土した遺物は膨大な点数に達する。推計ではあるが取上げた遺物は250,000点を下らないものと思われるが、そのうち少なくとも7割程度は旧石器時代の遺物と考えられる。

旧石器時代の遺物にはナイフ形石器をはじめとして、舟底形石器・尖頭器・彫器・スポール石錐・楔状石器・削器・搔器・細石刃・細石核・翼状剥片石核を含む横長剥片石核・翼状剥片・横長剥片・縦長剥片石核・縦長剥片・叩き石などと、多数の碎片がある。

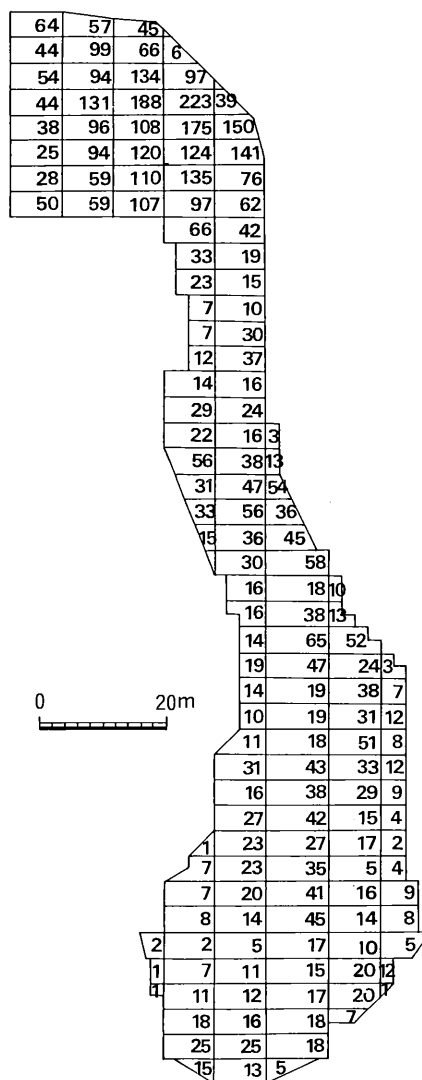
以上のうち、尖頭器・石錐・楔状石器・削器・搔器・叩き石・石核及び剥片の中には縄文時代及び弥生時代のものも含まれているが、出土状態からは時代を限定することができなかった。したがってこれらを含めると、ナイフ形石器が5,739点・舟底形石器57点・尖頭器165点・彫器5点・スポール21点・石錐13点・楔状石器106点・削器・搔器1,000点以上・細石刃約190点・細石核72点・横長剥片石核約1,390点・翼状剥片1,829点・縦長剥片石核417点・叩き石163点などがある。

これらの石器・石核・剥片・碎片は、サヌカイトを素材としたものが圧倒的に多い。サヌカイト以外には玻璃質安山岩が約550点、流紋岩と思われるものが約185点、黒曜石が34点、チャート・その他が約60点である。玻璃質安山岩と黒曜石は細石核・細石刃として用いられたものが多かったが、流紋岩と思われる石材には翼状剥片石核・ナイフ形石器・縦長剥片・石鏃などがあり、一方、チャートなどの石材には明確な石器は見当たらなかった。

1. ナイフ形石器 (第33図～第115図)

出土グリッドの明らかなナイフ形石器は5,739点出土した。そのうち完形品および8割以上残存するものが約34%、ほぼ5割から8割程度残存するものが約42%、ほぼ5割以下の破片が約24%である。^{註(1)}

ナイフ形石器はすべてのグリッドから出土したが、なかでも調査区北部に多かった。最も多く出土したのはA39-2の223点であるが、この付近には100点



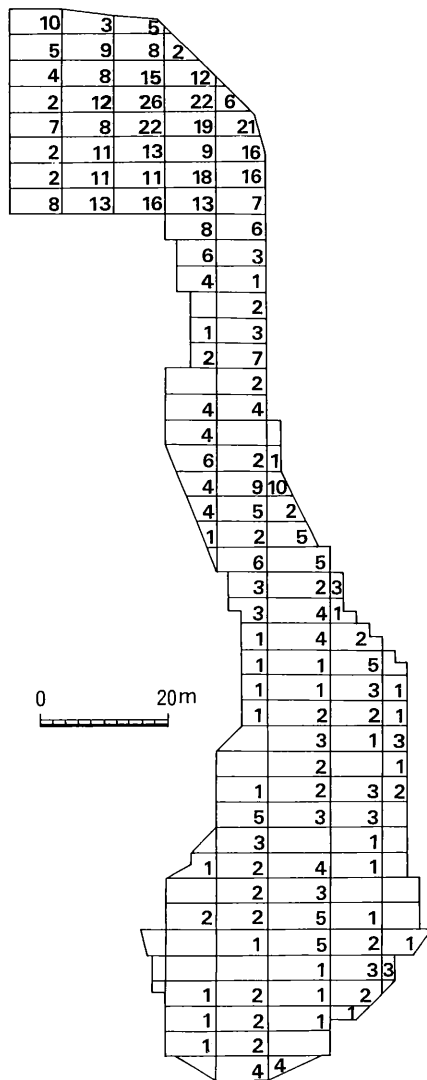
第9表 ナイフ形石器出土分布表

以上出土したグリッドが密集し、今回の調査地区の中ではナイフ形石器が最も集中する地点となっている。ちなみに、A35列以北からは3,239点のナイフ形石器が出土しているが、これは全体の約56%にあたる。

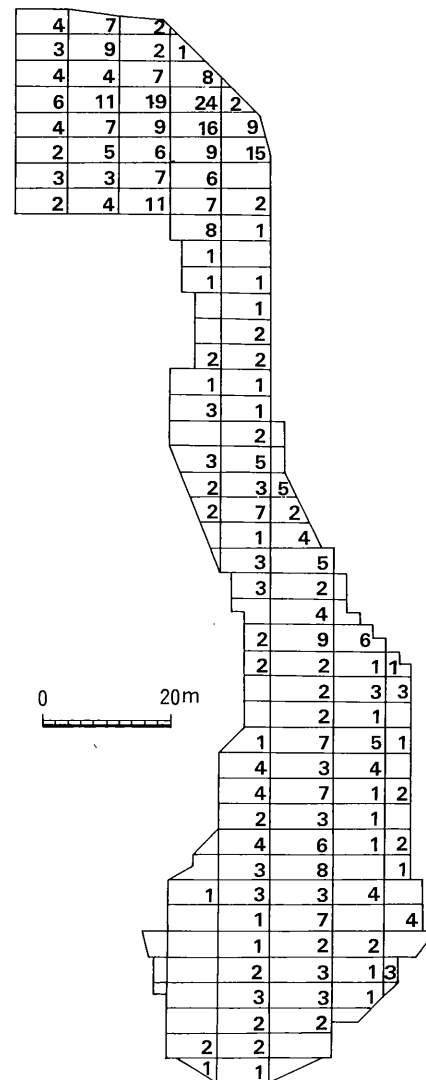
このように、A35列以北の調査区北部に出土が特に集中するのは、ナイフ形石器のほか、横長剥片石核（全体の約55.7%）・翼状剥片（全体の約56%）・石鏃（全体の約44.8%）などがあり、石鏃を除くとこれらは互いに密接に関係する遺物であることは注目される。

調査区北部以外をみると、やや希薄にはなるが、B21からA25-2にかけて、B18付近・B11～B13およびC14-1・B7～B9などにも集中する傾向が認められる。しかも、B21からA25-2の範囲や、B18付近・B7～B9は横長剥片石核と翼状剥片も集中し、また、B11～B13のうち、B12には横長剥片石核が多いことなど、ここでも三者の出土状態には密接な関連が認められるので、これらの地点でナイフ形石器を製作したことが想像される。

ただ、今回の調査で出土した完形品及び8割以上残存するナイフ形石器のうち、国府型ナイフ形石器と、翼状剥片以外の横長剥片や縦長剥片を利用したナイフ形石器^{註(2)}の出土状況を比較



第 10 表 国府型ナイフ形石器出土分布表



第 11 表 横長剥片・縦長剥片利用のナイフ形石器出土分布表

しても、集中箇所にも明確な違いはあらわれなかった（第10表・第11表）。

羽佐島遺跡から出土したナイフ形石器はほとんどがサヌカイト製であるが（第1図～第105図1171・1173～第106図・第108図～第115図）、玻璃質安山岩を用いたものが14点（第105図1172・第107図1183～1195）、流紋岩と思われる石材を用いたものが8点（第107図1196～1203）、黒曜石を用いたものが2点（第107図1204・1205）出土している。また、ナイフ形石器のほとんどは翼状剥片を含む横長剥片を素材としており、縦長剥片を素材とするものは非常に少なかった。ただ、黒曜石製ナイフ形石器は2点とも縦長剥片を用いたものであり、玻璃質安山岩製ナイフ形石器は14点中9点が縦長剥片を用いている。そして、両石材には翼状剥片を用いた国府形ナイフ形石器はみられない。一方、流紋岩と思われる石材には翼状剥片石核や国府型ナイフ形石器（1196・1197・1200のうち1196・1197はファースト・フレイクを用いたもの）があるが、縦長剥片を利用したものは出土していない。

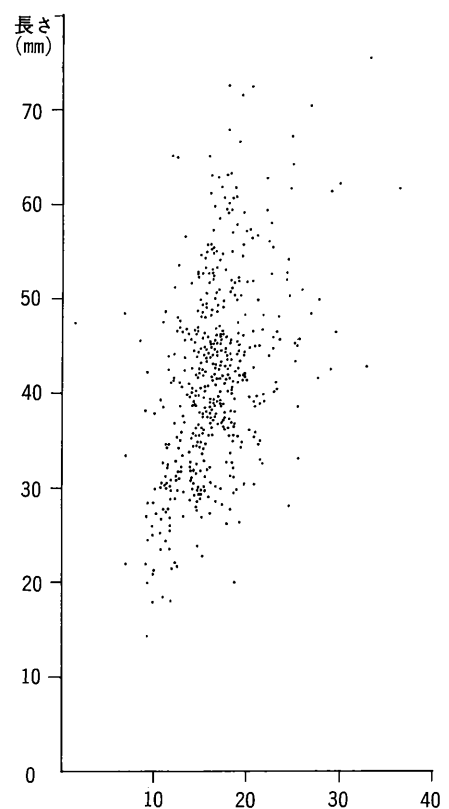
図示したナイフ形石器は、サヌカイト製については完形品ないしは約8割以上残存するものを主体としているが、サヌカイト製以外のナイフ形石器については出土したすべてである。

出土したナイフ形石器には典型的な国府型ナイフ形石器のほか、いわゆる宮田山型ナイフ形石器や、井島I型ナイフ形石器なども多く出土しているが、その区分は明確にし難い。

国府型ナイフ形石器は、一般に背面に大きなネガティブな面（翼状剥片の剥離痕）と底面を1面ずつ持ち、腹面は1面の主要剥離面からなっており、その打面部は主要剥離面側から丁寧な調整を施され、横断面は四角形を呈する。しかも、主要剥離面と背面のネガティブな剥離面とはふつう剥離方向・打点の位置がきわめて近く、底面は刃部と逆の方向から剥離されている。

これに対して、翼状剥片石核の形態や翼状剥片剥離時の状況・二次調整の程度によって、同じ国府型ナイフ形石器であっても、器体の大きさ・形態や背面のネガティブな剥離面の大きさ・数・打撃方向や打点の位置は必ずしも一定ではなく、同様に底面の有無及び数・剥離方向・腹面の構成や断面の形・二次調整の施し方などにもさまざまな変化が認められる。

しかも、横長剥片を用いたナイフ形石器においても、背面に横長剥片の剥離痕を持ち、腹面は一面の主要剥離面から構成され、その打面部に主要剥離面側から二次加工を施すものが多いため、これを国府型ナイフ形石器と厳密に区分することは困難である。さらに後述するように、横長剥片石核の一種である交互剥離石核の中には、生産された横長剥片から形態的には全く国府型ナイフ形石器と異なるナイフ形石器を製作することもできると考えられるので、羽佐島遺跡のように長期間にわたる多数のナイフ形石器が二次的に移動した状態で出土した場合には、ナイフ形石器の分類・編年は不可能な部分が生じて来よう。したがって、この地域におけるナイフ形石器の分類・編年は単純時期の遺跡・遺物群の検出とその重層的な発掘に待つとして、ここでは羽佐島遺跡出土のナイフ形石器の概要を簡単に紹介することにしたい。



第12表 ナイフ形石器の長幅比 (mm)

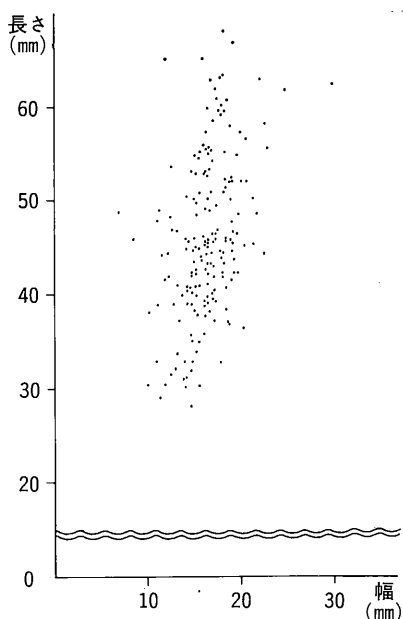
図示したナイフのうち、完形品の大きさをみると、長さ2 cm以下のものから7 cmを越えるものまでであるが、長さ約2.5 cmから約6.5 cm程度のもが多く、その中でも3～5 cm程度の長さのナイフ形石器が最も多い。長幅比は3：2から4：1までの間にほとんどが含まれる（第12表）。

1～83・148・452・456・919～924・927・929～943は石核の素材を剥離した際のポジティブな打瘤を持ったり、その部分に非常に近い剥片を用いたり、背面に自然面を持つナイフ形石器で、ファースト・フレイクか、あるいは剥離工程の初期の剥片を用いたナイフ形石器である。ファースト・フレイクでも底面に打点を持たないものは、底面が縦剥ぎ状にみえるものが多い。

26・36・920・935は自然面を直接加撃して石核素材を剥離し、その部分を底面としている。

14・22・27・60や、929・932～936・938・939は打面に自然面を持つことから打面調整が施されなかったことも考えられ、翼状剥片を用いなかった可能性が強いものと思われる。また、11・59・67や919以下の多くは横長剥片石核から剥離されたものであろう。

84～461の大部分は国府型ナイフ形石器と考えられる。典型的なもののほか、背面に複数のネ



第13表 国府型ナイフ形石器の長幅比

ガティブな剥離を持つもの、複数の底面を持つものなども少なくない。また、底面の剥離方向が刃部からなされたものや、基端・先端方向からなされたものもある。打面転移のみられる翼状剥片石核のなかには、底面の剥離が刃部側からなされた翼状剥片を生産することができるが、複数の底面を持ち、その一方ないし両方とも、刃部側あるいは基端先端側から剥離されたナイフ形石器（96・147・156・161・182・195・204・214・220・240・245～247・249・267・287・316・347）や切出し状を呈するナイフ形石器（120）などは翼状剥片を利用したものではない可能性が強い。また199・253は翼状剥片を用いているが、背面から二次加工を施しており通常の逆である。

ファースト・フレイクを含む翼状剥片から製作されたと思われるナイフ形石器の大きさをみると、長さは約3 cmから6 cm程度のもが多いが、その中でも3～3.5 cm、3.8～4.7 cm、5～6 cmのものに集中する傾向が認められる。長幅比は2：1～5：1で細長い形態を呈する。

462・464～548は背面のネガティブな剥離面が小さいものであり、549～643はネガティブな剥離面を持たないか、持っても痕跡程度しか残さない。翼状剥片の二次調整部分が拡大したために背面のネガティブな剥離面が小さくなったり、消滅したものとも考えられるが、横長剥片を利用したものが存在することも確実である。

644～649は腹面側と背面側の双方から二次加工が施されたナイフ形石器である。背面にネガティブな剥離面を持たず、断面が三角形を呈するものが多い。

ところで、背面にネガティブな剥離面を持たず、断面が三角形を呈するナイフ形石器や、腹面側と背面側の双方から二次調整が施されたナイフ形石器は、翼状剥片の背面のネガティブな剥離面を越えて二次調整を施したり、また、剥離が底面にまで達しなかった断面三角形の翼状剥片を用いることによって製作することができるが、製品としてのナイフ形石器としては国府型とは認められないので別のタイプとしなければならない。横長剥片石核において後述する

ように、交互剥離石核から剥離された横長剥片の中には、国府型ナイフ形石器と同形態のナイフ形石器を製作することが可能なものもあるので、ナイフ形石器の分類がただちに製作技法と結びつかないことを注意しておかなければならない。

650～918・1142～1152・1174・1175・1177～1179・1181・1182は小形の翼状剥片や典型的でない翼状剥片から製作することも可能であり、また、横長剥片から製作することも可能である。

944～1133は横長剥片を利用したナイフ形石器であると考えられる。背面に複数のネガティブな剥離面を持つものが多く、しかも各々の剥離方向が一定しないものが多い。また、主要剥離面と背面の剥離面の剥離方向も一定しない場合が多い。形態が整わず、二次調整も粗雑なものが少なくない。

1142～1152は横長剥片を利用した切出し形ナイフ形石器である。

1134～1140・1153～1173・1176・1180は縦長剥片を利用したナイフ形石器である。ただ、主要剥離面は縦剥ぎでも、背面は横剥ぎである場合が多く、縦長剥片石核から連続して剥離した縦長剥片を用いたものは少ないものと思われる。

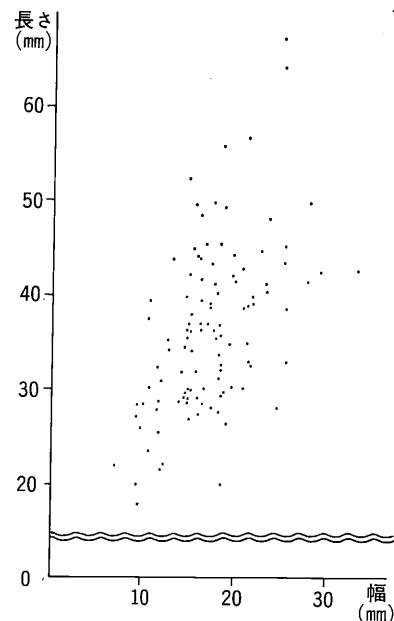
1172・1184～1195は玻璃質安山岩製のナイフ形石器で、14点のうち縦長剥片を利用したものが9点を占める。ほぼ4cm以下の小形品が多く、1187は最も小さく長さ1.855cmしかない。1183は主要剥離面の打面を残し刃部側縁辺の一部を主要剥離面から調整する。1187は横剥ぎ、1189・1191・1194・1195は縦剥ぎの切出し形ナイフ形石器である。1172・1192・1193は先端部の一辺と基部（1192は基部調整はない）を調整した縦剥ぎのナイフ形石器であるが、この種のナイフ形石器と切出し形ナイフ形石器の割合が大きいことを特徴とする。

1196～1203は流紋岩と思われる石材を用いたナイフ形石器で、この石材には翼状剥片石核（第210図394・395）も知られている。縦長剥片を利用したものは見当らず、1196・1197は翼状剥片のファースト・フレイクを利用したナイフ形石器である。1198・1200は国府型ナイフ形石器であり、1201も表面の剥落が著しいためはっきりしないが、国府型ナイフ形石器と思われる。1199は背面にわずかなネガティブな剥離面を残し、1202・1203は断面三角形で背面にネガティブな剥離面を持たない。

1204・1205は黒曜石製のナイフ形石器で、いずれも縦長剥片を利用した小形切出し形ナイフ形石器で、1204は長さがわずかに1.425cmしかない。

なお、944～1133・1142～1152などのように、横長剥片を利用したことが明らかなナイフ形石器の大きさをみると、2cm以下のものが存在すると共に5cmを越えるものはきわめて少なく、国府型ナイフ形石器に比べて小形化している。また、長幅比は3：2～5：1.5とやや幅広の傾向を示す（第14表）。

ナイフ形石器には刃部、あるいは刃部側に調整を施したものが少なくない。刃部側に顕著な調整を施し、これを基部とするものは切出し形ナイフ形石器と呼ばれているが、すでに国府型ナイフ形石器にあっても刃部側の基部をわずかに調整したものが存在している（89・115・122・125・145・291ほか）。また、国府型ナイフ形石器をはじめとして、刃部の中央部にのみ調整を施したものもある（24・



第14表 横長剥片利用のナイフ形石器の長幅比

94・95・99・191・195・204・240・245・272・370・399ほか)。

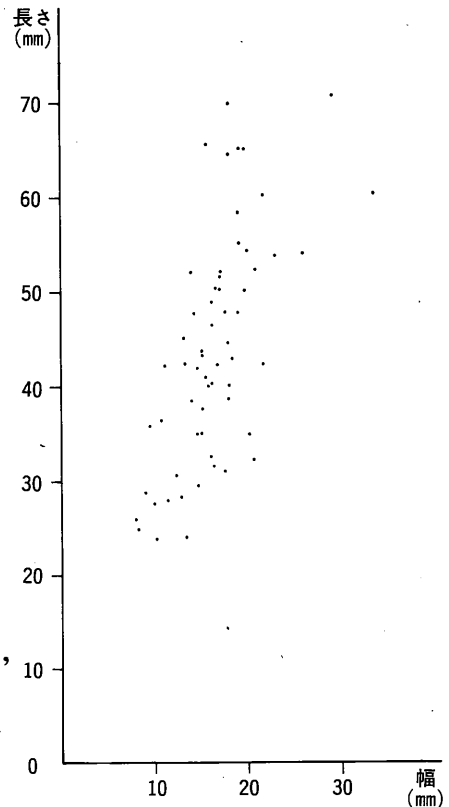
刃部の中央部に調整を施したナイフ形石器についてみると、底面、あるいは底面相当部分が複数の剝離面からなり、両者が境をなす稜付近に調整が施される場合が多いことからすると、主要剝離面の剝離に際してこの部分が突出するなどしたため、刃部を整形する目的があったものとも考えられる。しかしながら、一方では同様な場合に調整を施さないもの(165・214・303など)もあるので、刃部の中央に調整を施すことによって機能すべき部分とそうでない部分を明確にし、同時に調整部以下の基部の装着をより強固にする目的があったのではないかと考えることもできる。

一方、刃部側に調整を施すナイフ形石器の中でも最も多いのは、主要剝離面側から刃部先端に調整を加えるものである。第108図1219は断面三角形をなす細身の長大なナイフ形石器であるが、刃部は蝶番剝離となって切断機能には適さない。ところが先端はもともと細く尖っているにもかかわらず、主要剝離面側から細かな剝離を施し、きわめて鋭利に尖らしている。したがって、このナイフ形石器は切断する道具としての機能はなく、刺突する機能を持たせる目的で製作されたと考えられる。

ナイフ形石器の先端に調整が施されたもの(第108図～第115図)は多いが、そのほとんどすべてが主要剝離面側から行われており、これが一定の方式に従って実施されたものであることを示している。

調整は、A—ナイフ形石器の先端部のみ施したもの(1206～1221・1259・1260・1291・1292)、B—刃部の約半分ないしそれに近い部分に施したもの(1234～1247・1272・1289・1293・1294・1300・1303)、C—刃部のほぼ全体、あるいは全体に施したもの(333・1248～1258・1265～1271・1273～1276・1287・1290・1295～1299・1305)、D—刃部の先端と基部に施したもの(1222～1233・1262～1264・1288)がある。翼状剝片はA～Dのいずれにも認められるが、Aに多い。また、Dは相対的に器高が低いこと以外には舟底形石器と区分し難い内容を持つ。

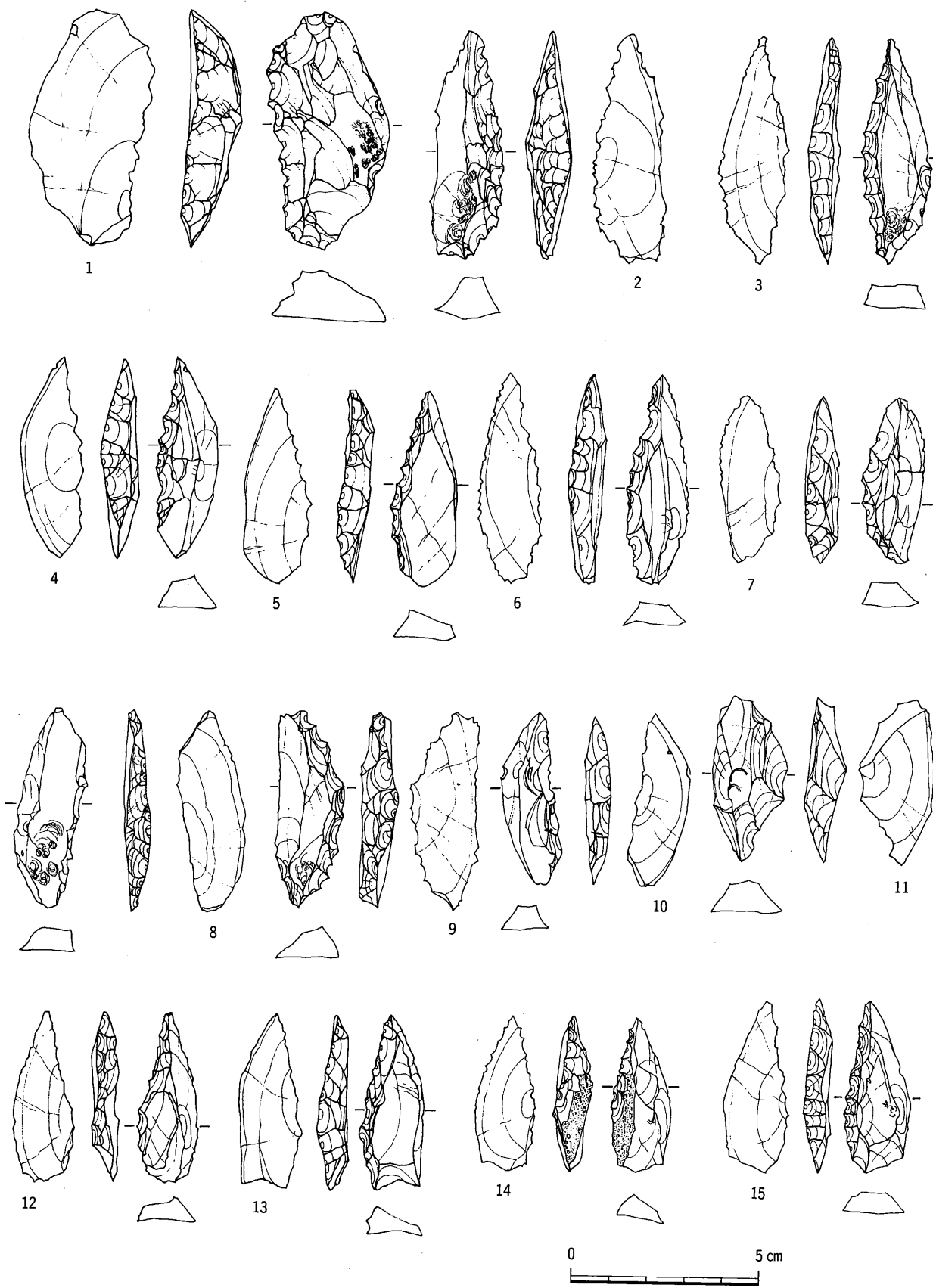
また、1283は背面全体を主要剝離面側から調整しており、片面加工の尖頭器とすべきかもしれない。1284は、一方の基部と先端部の一部を加工した縦長剝片利用のナイフ形石器であり、1285・1286は片側の両面に調整を加えたナイフ形石器である。



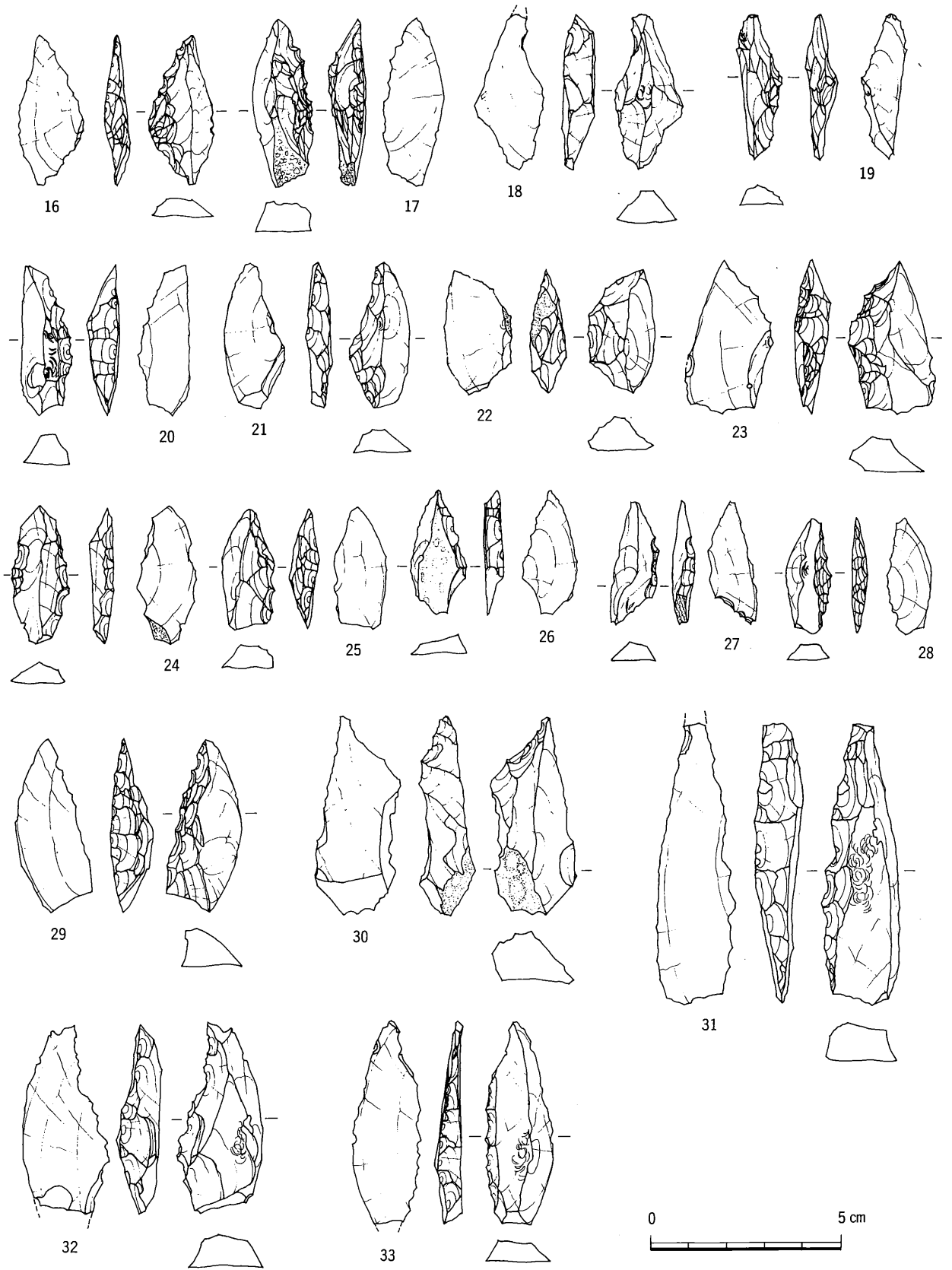
第15表 ポイント状ナイフ形石器(仮称)の長幅比

註

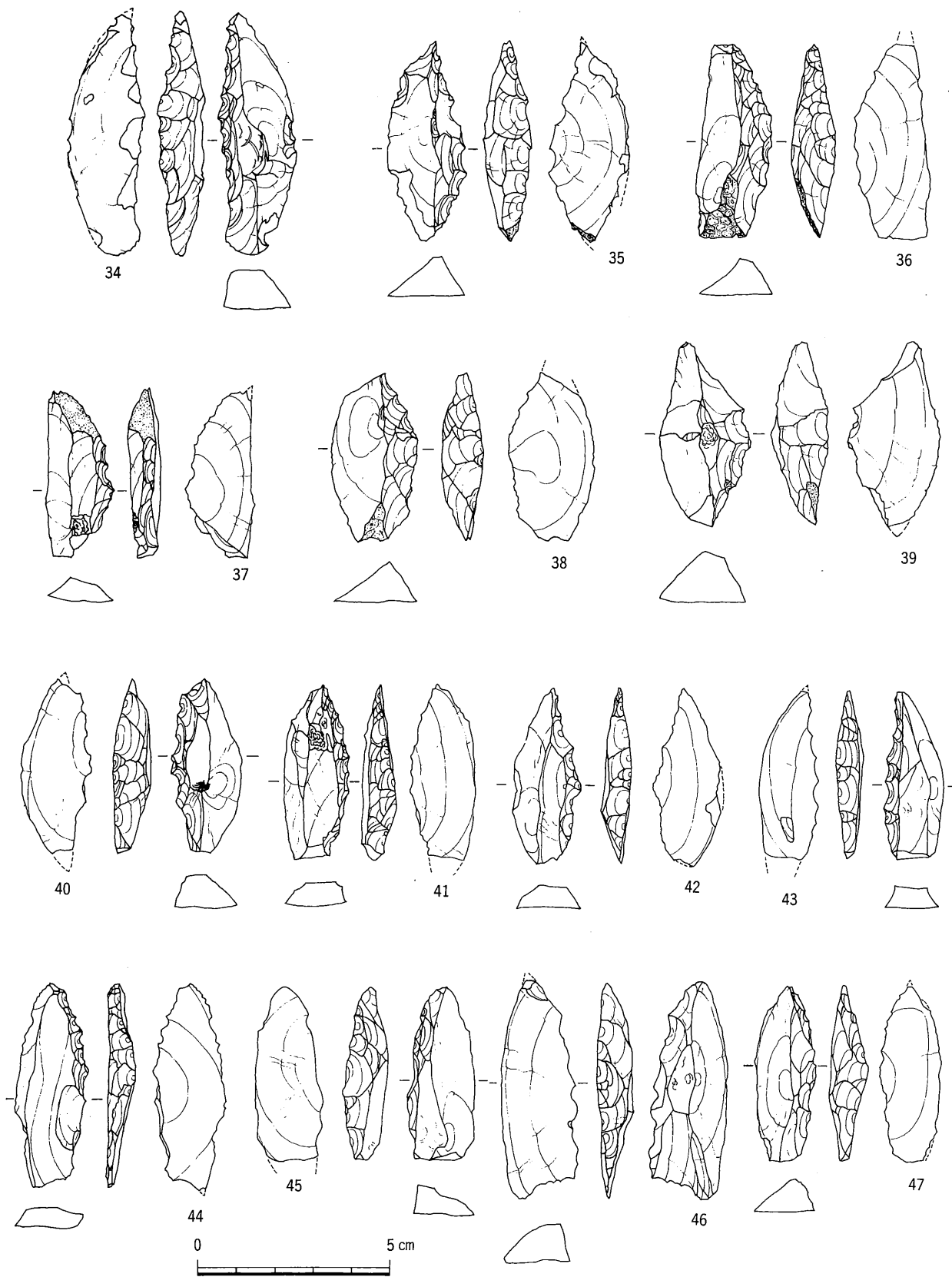
- (1) ここでいう完形とは、二次調整後に破損または切断等が認められないものであり、破損の程度は目分量の判断による。
- (2) ここでいう国府型ナイフ形石器とは本文中にあるように1～461の大部分とこれに類似したもの、横長剝片・縦長剝片利用のナイフ形石器とは944～1205の大部分とこれに類似したものを指す。



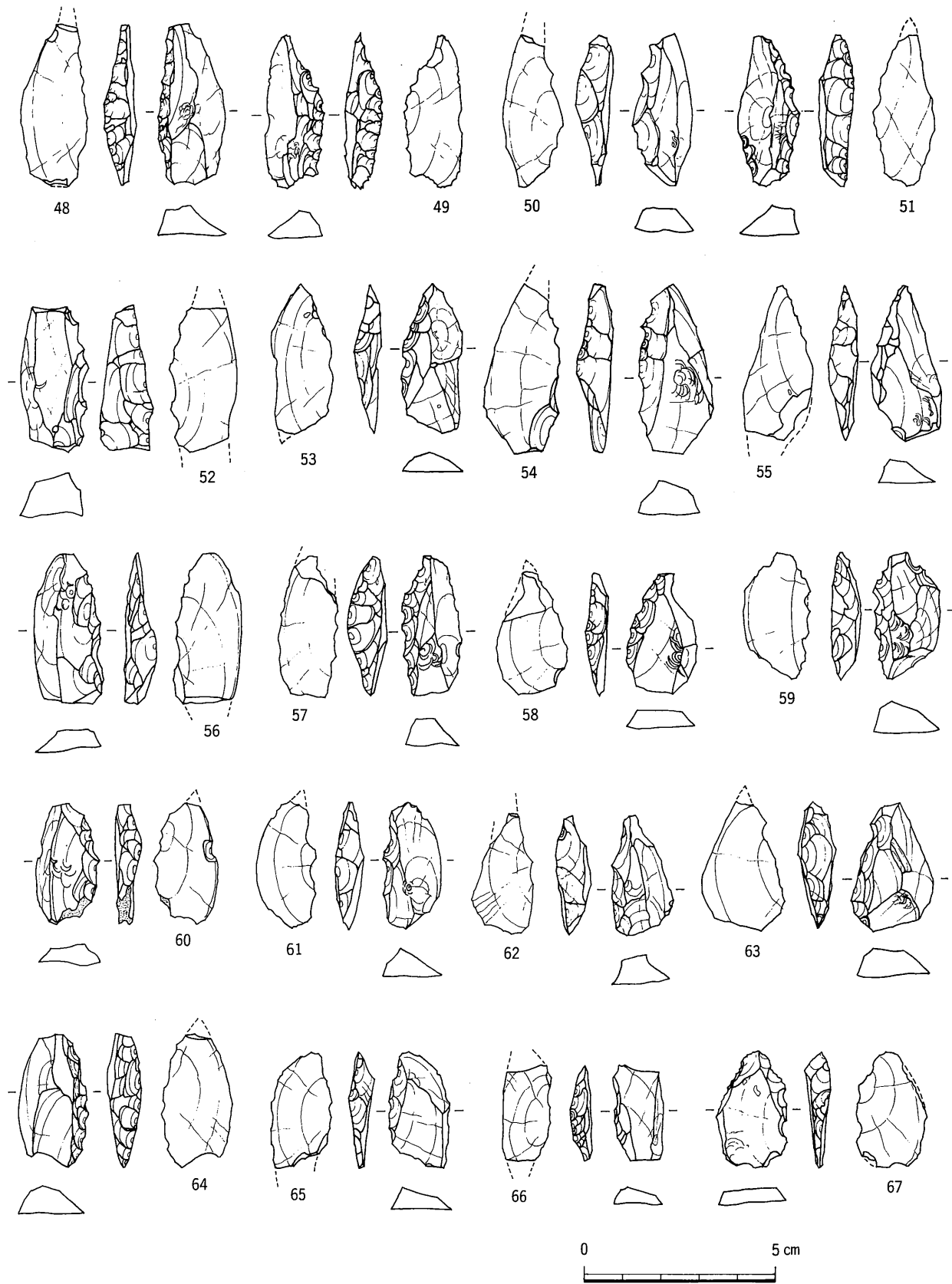
第 33 図 ナイフ形石器実測図 (1)



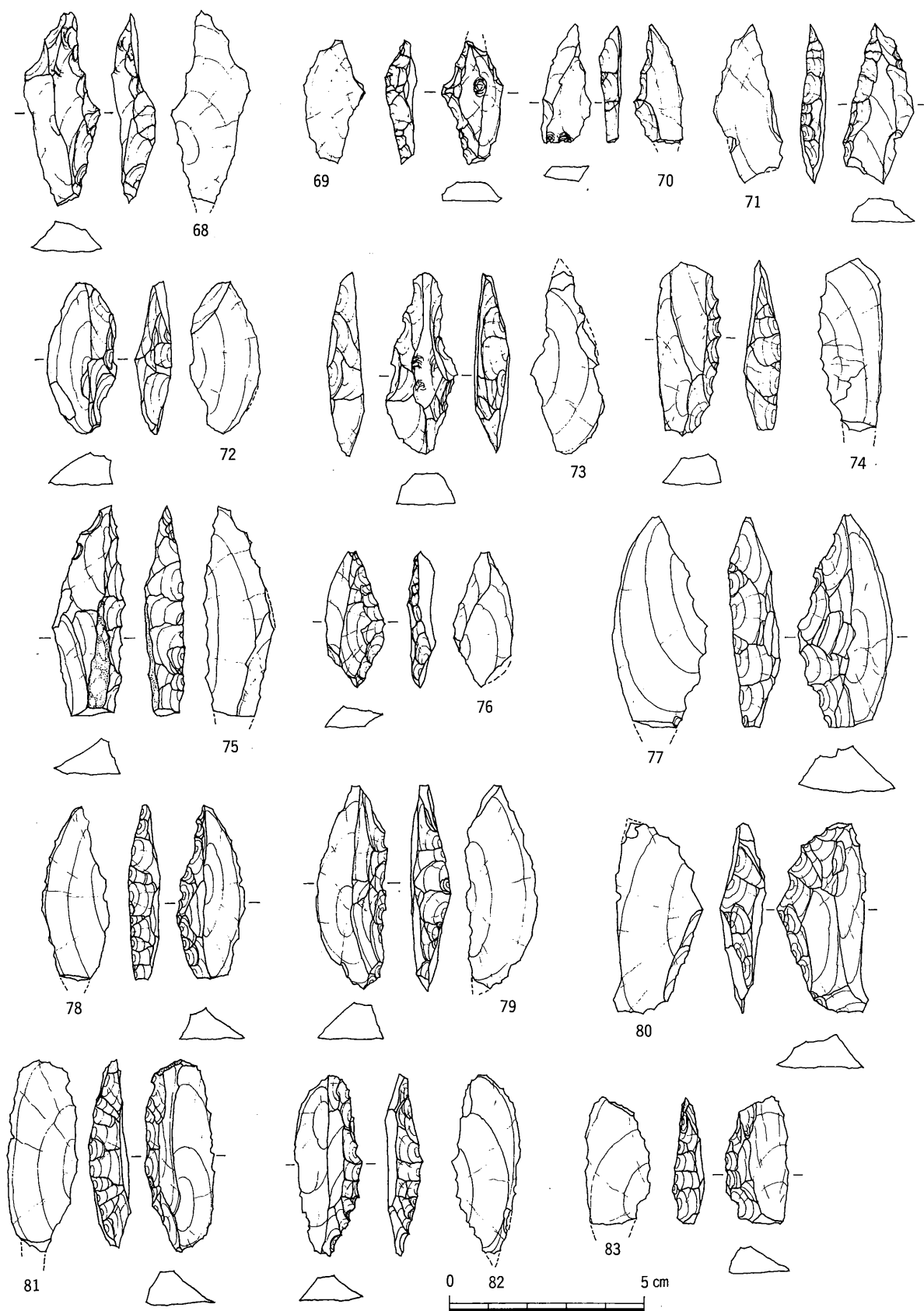
第 34 図 ナイフ形石器実測図 (2)



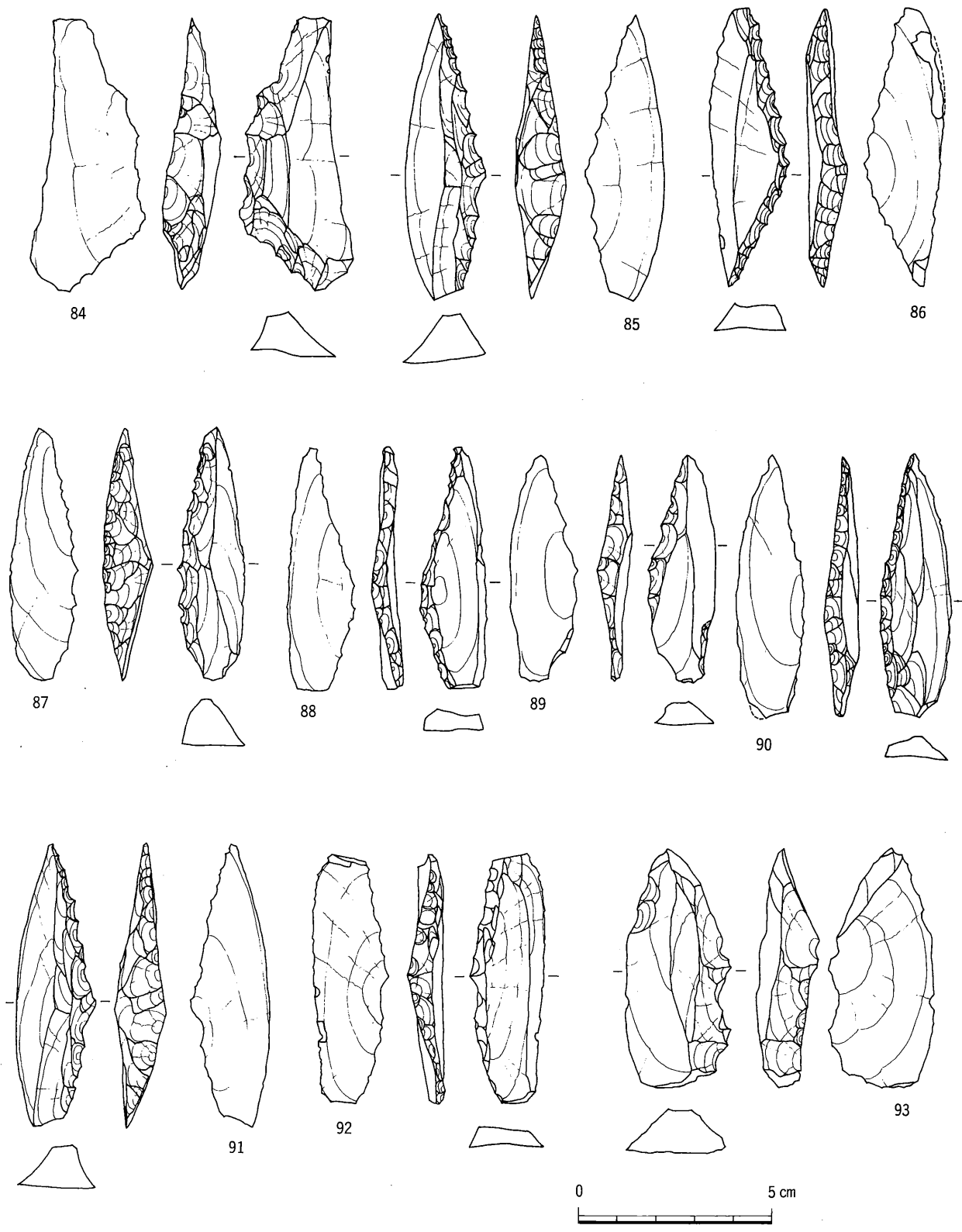
第 35 図 ナイフ形石器実測図 (3)



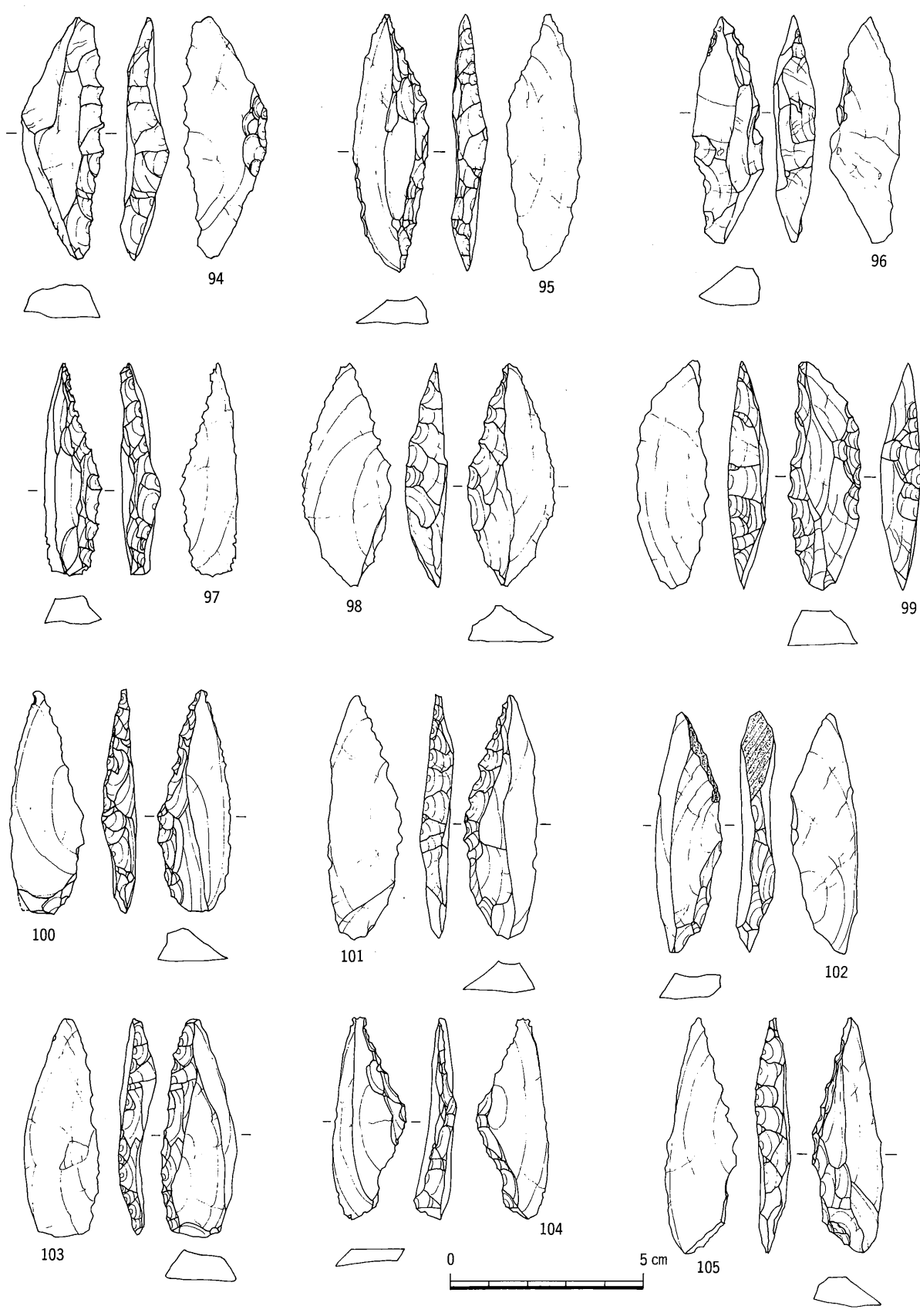
第 36 図 ナイフ形石器実測図 (4)



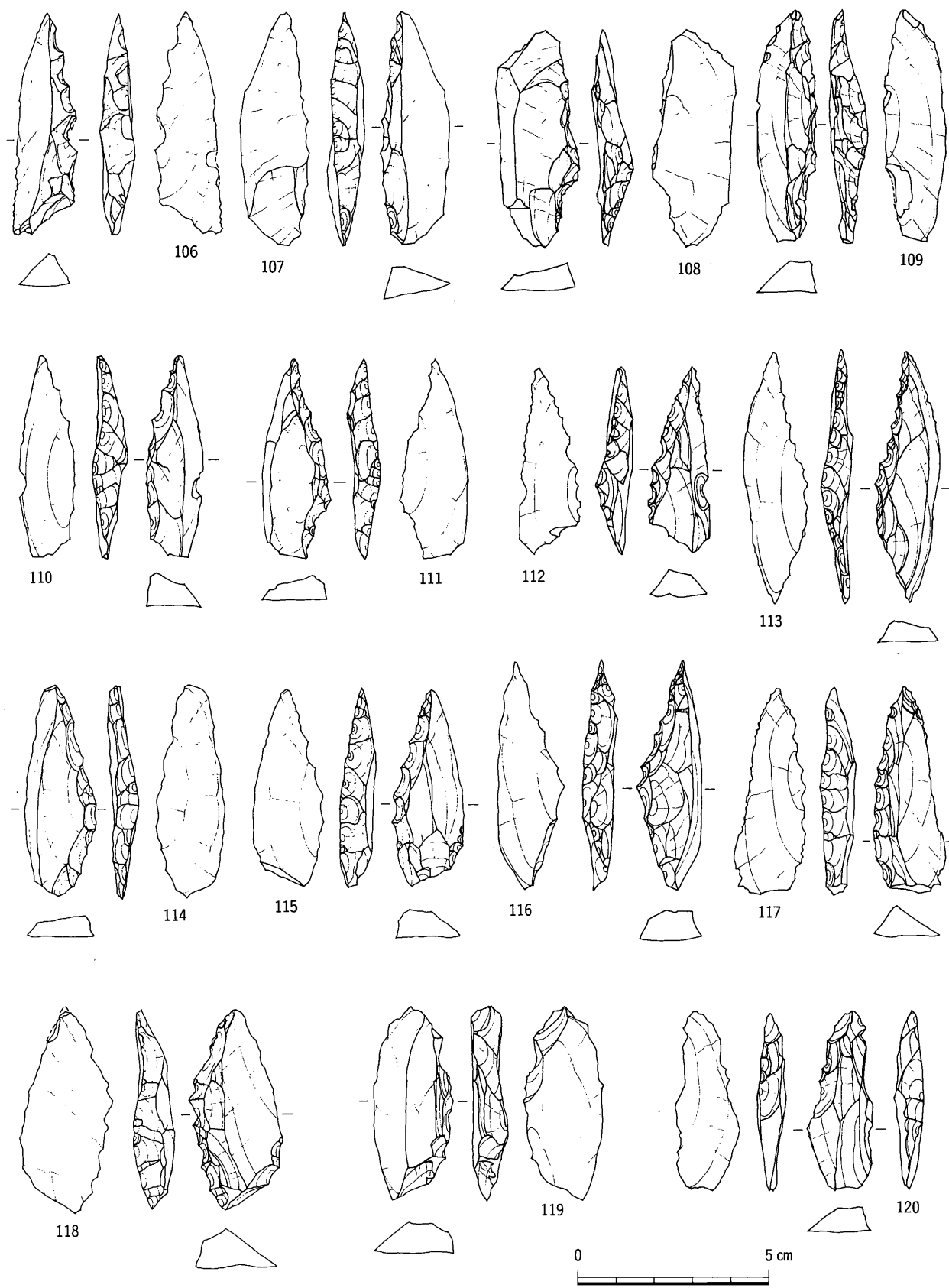
第 37 図 ナイフ形石器実測図 (5)



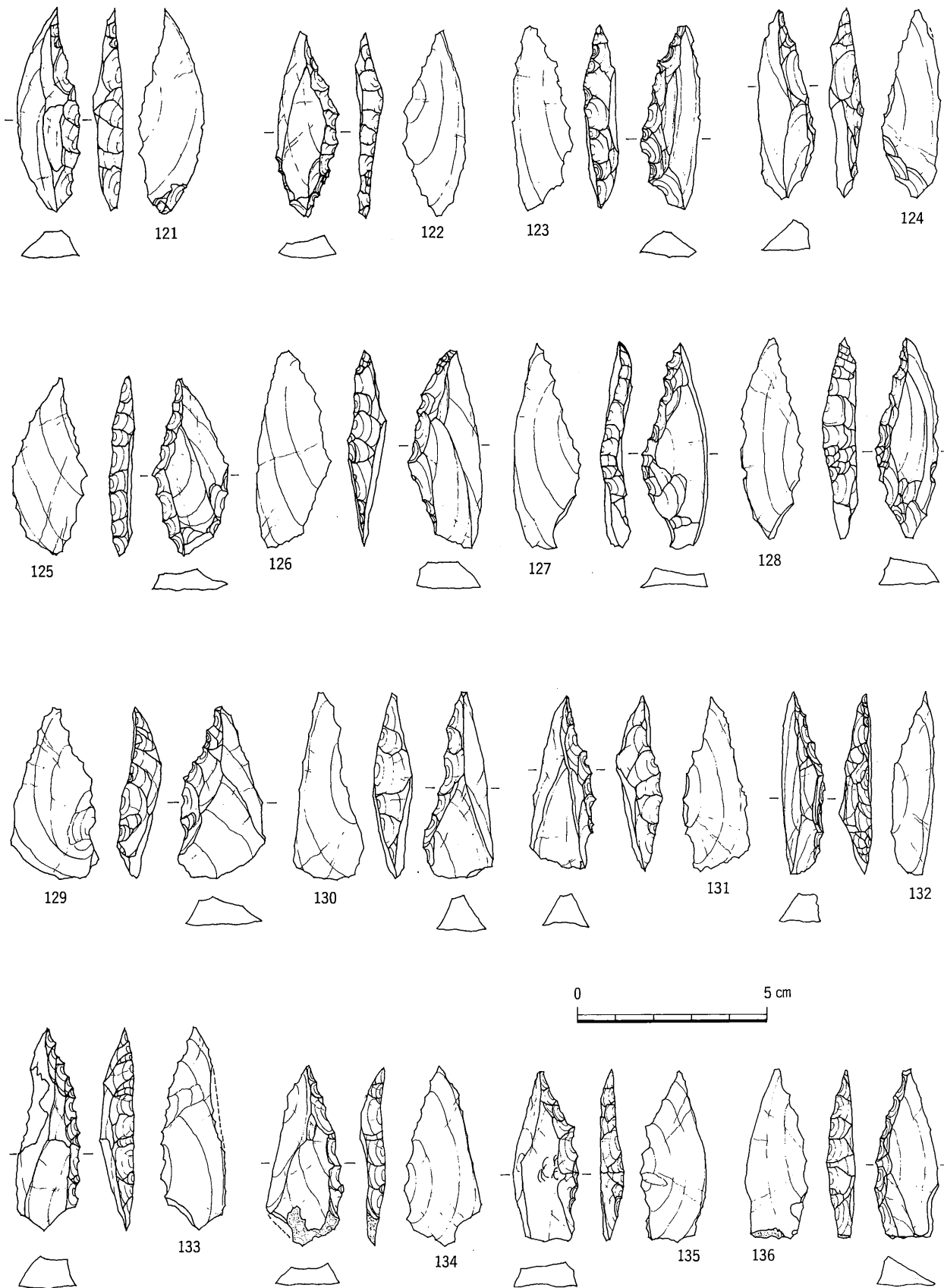
第 38 図 ナイフ形石器実測図 (6)



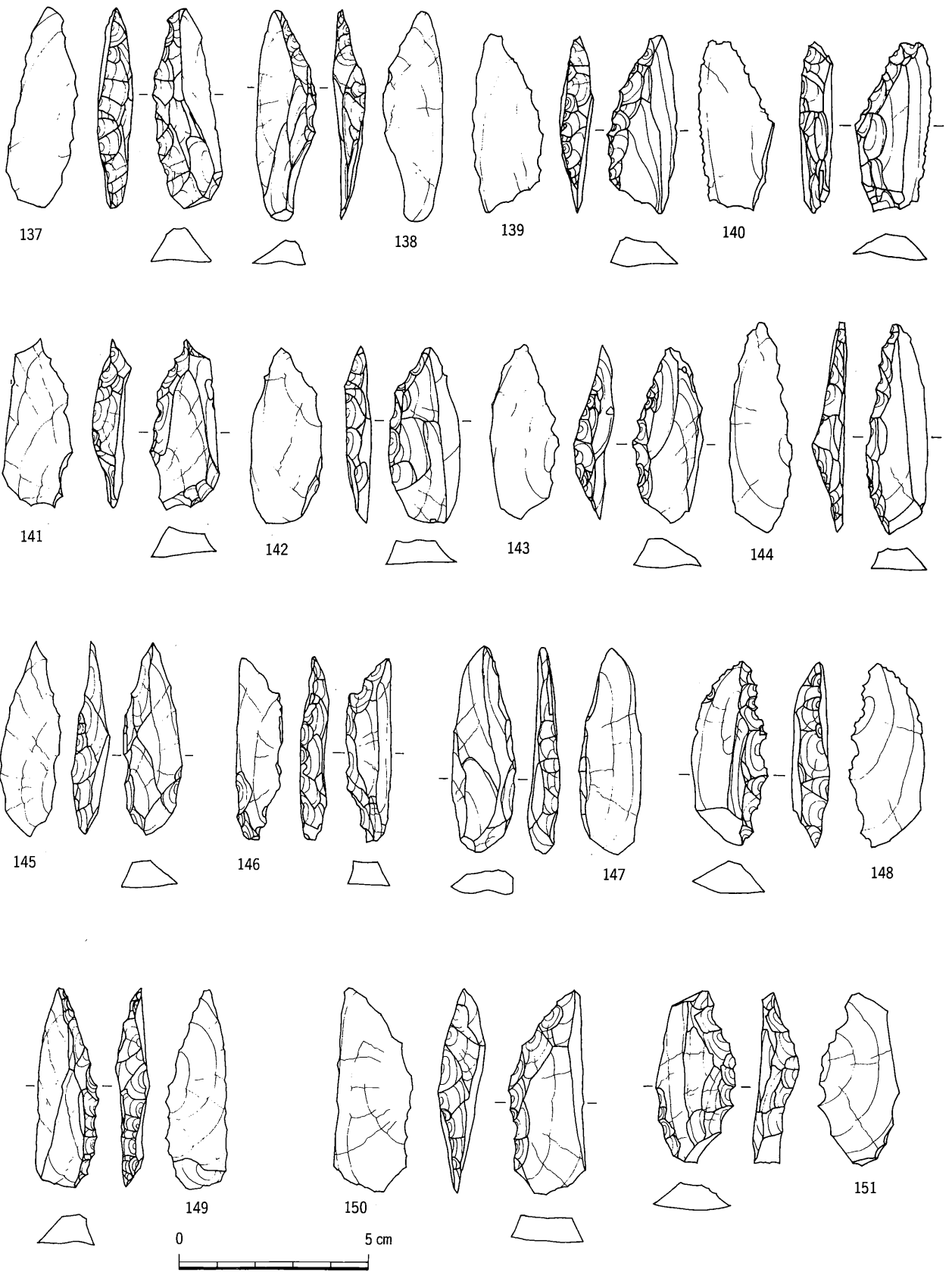
第 39 図 ナイフ形石器実測図 (7)



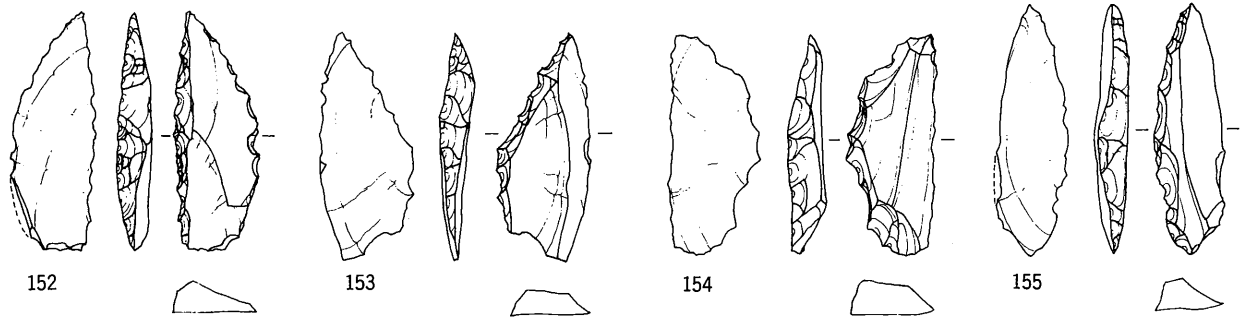
第 40 図 ナイフ形石器実測図 (8)



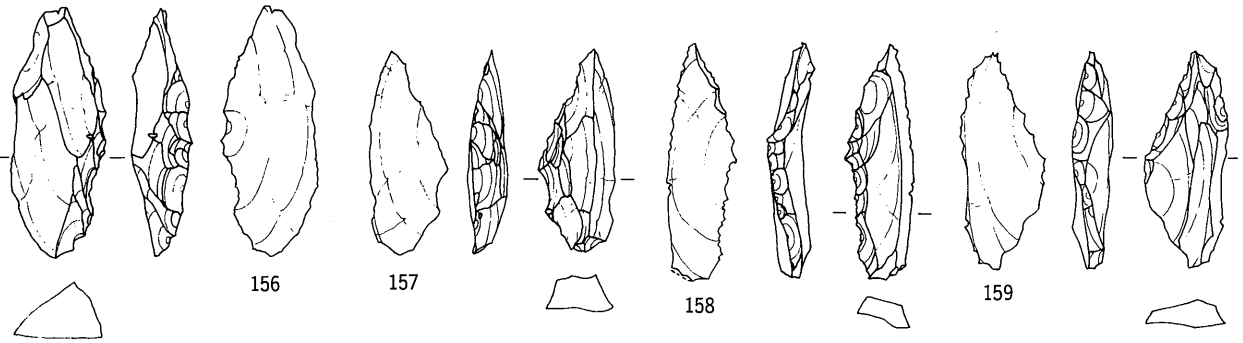
第 41 図 ナイフ形石器実測図 (9)



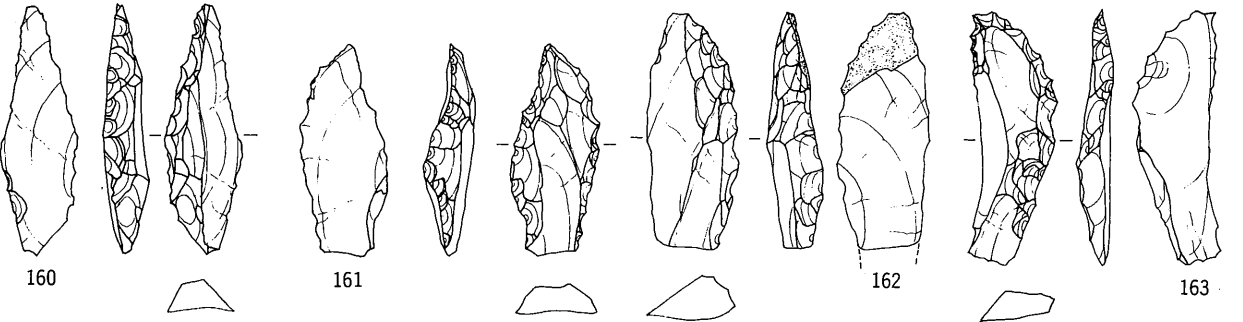
第 42 図 ナイフ形石器実測図 (10)



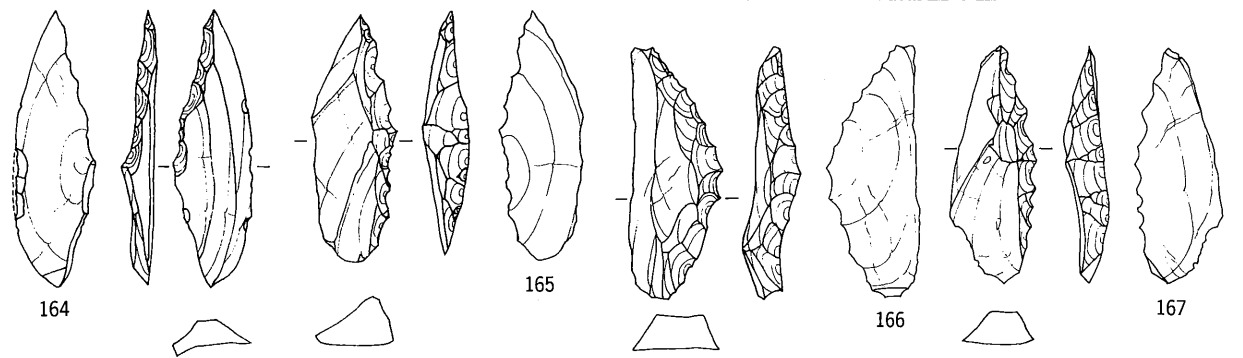
155



159

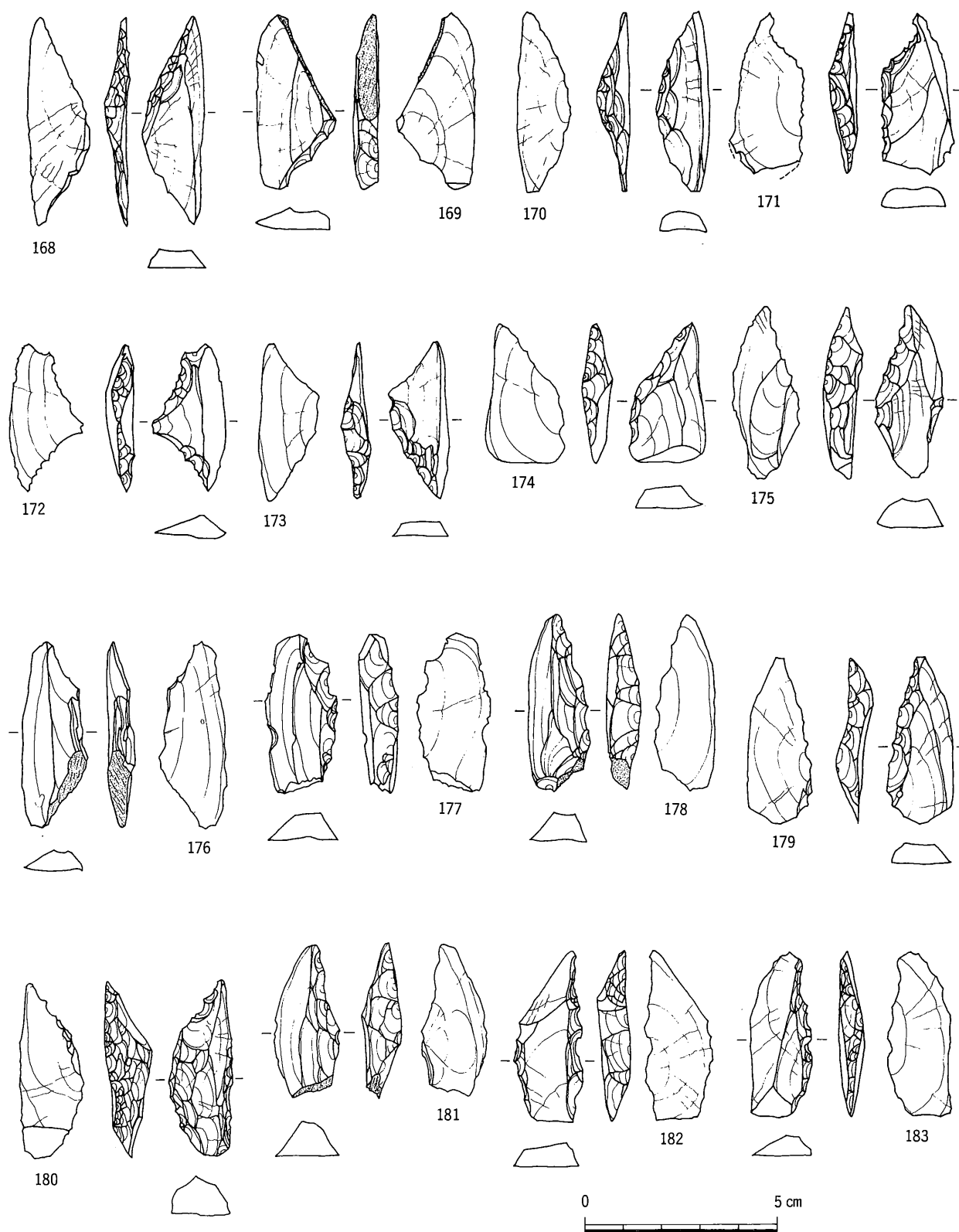


163

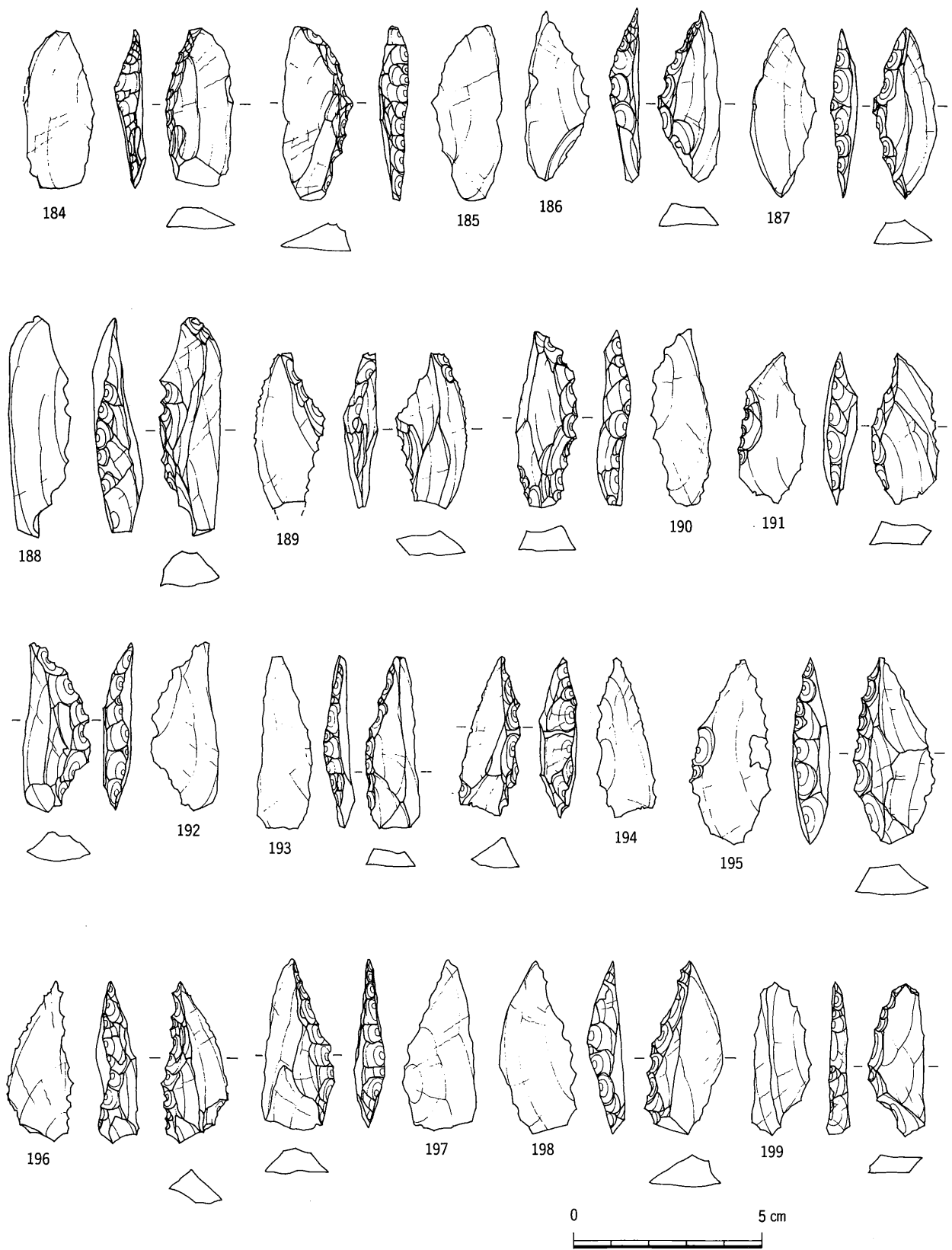


167

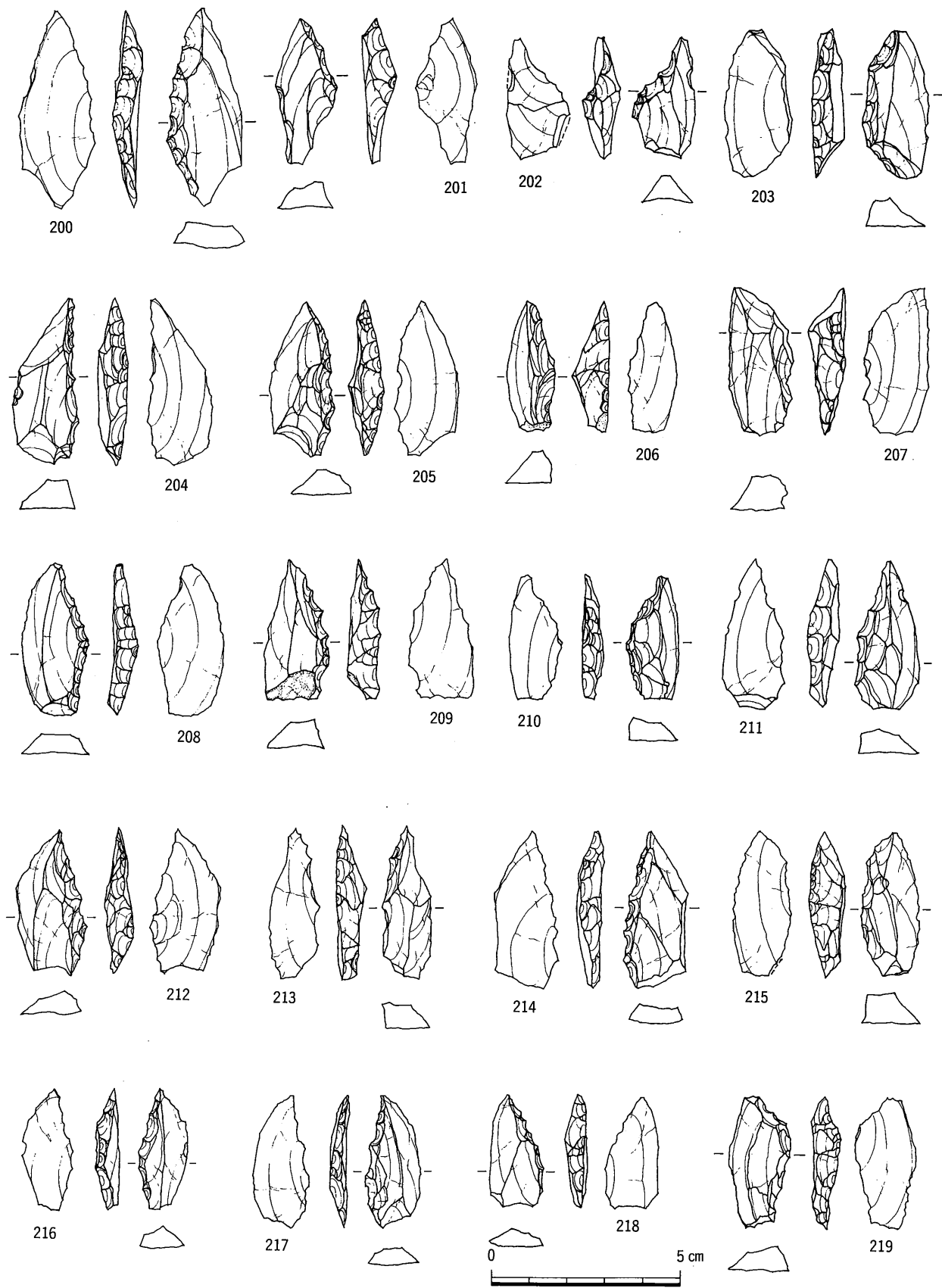
第 43 図 ナイフ形石器実測図 (11)



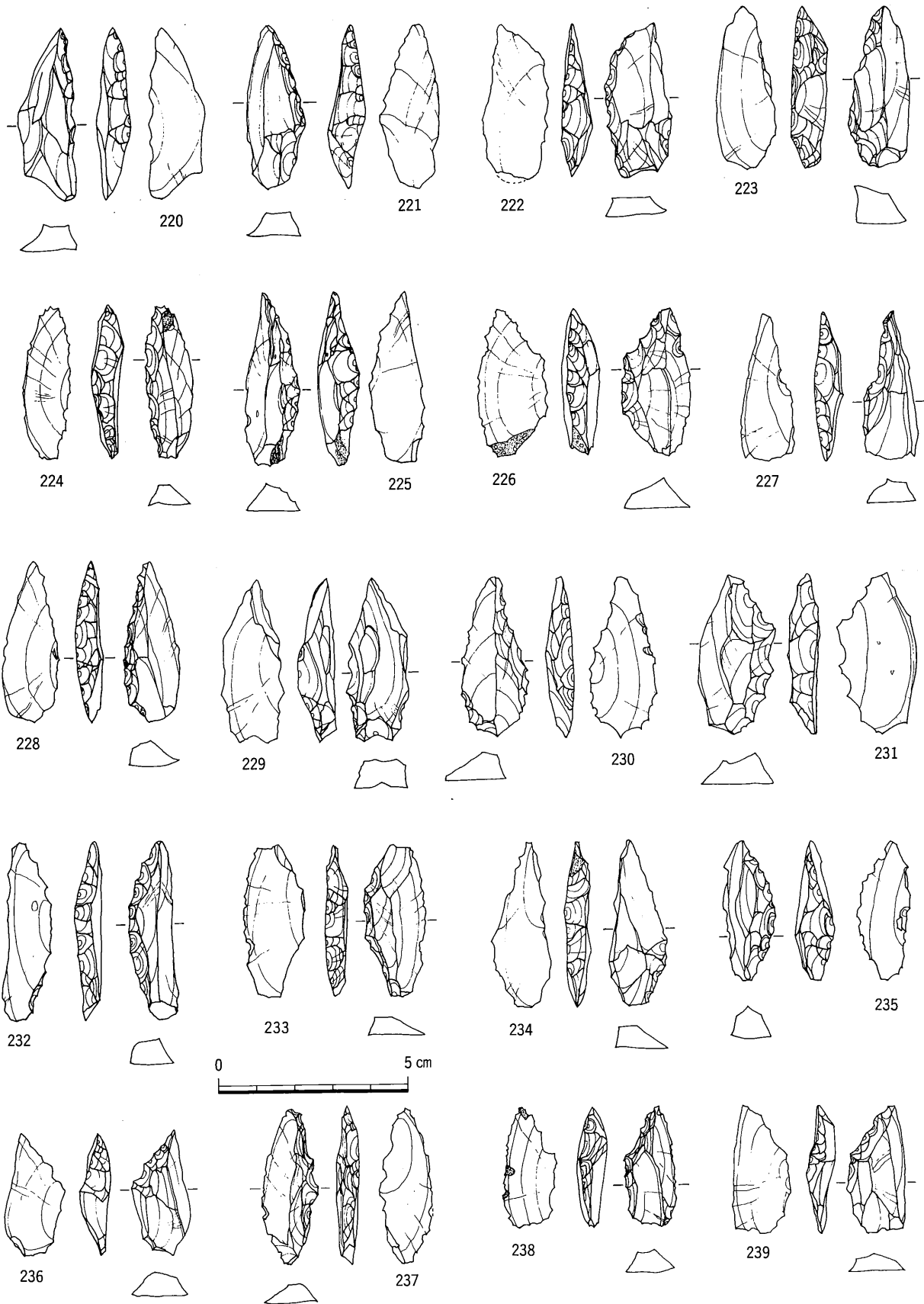
第 44 図 ナイフ形石器実測図 (12)



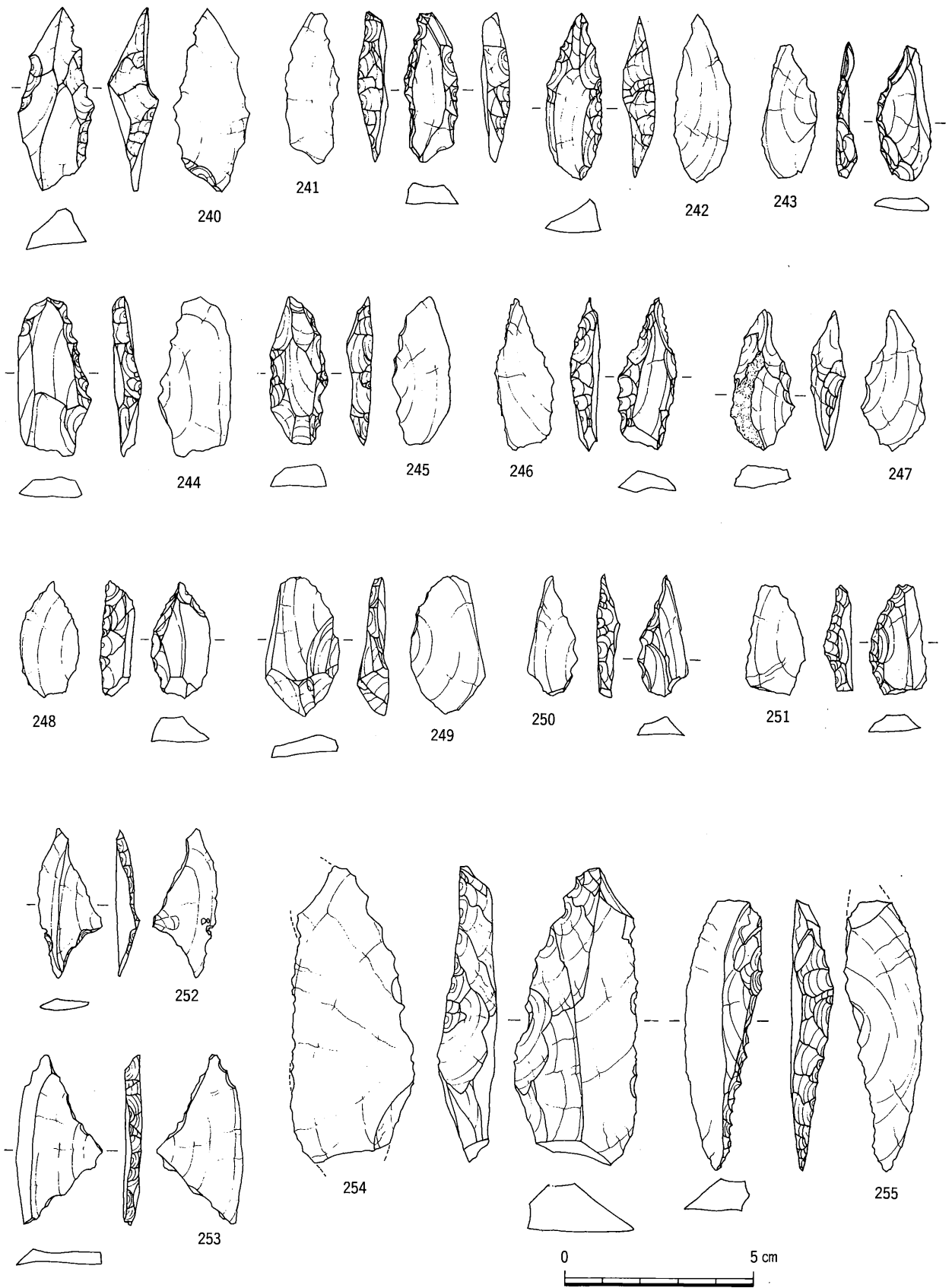
第 45 図 ナイフ形石器実測図 (13)



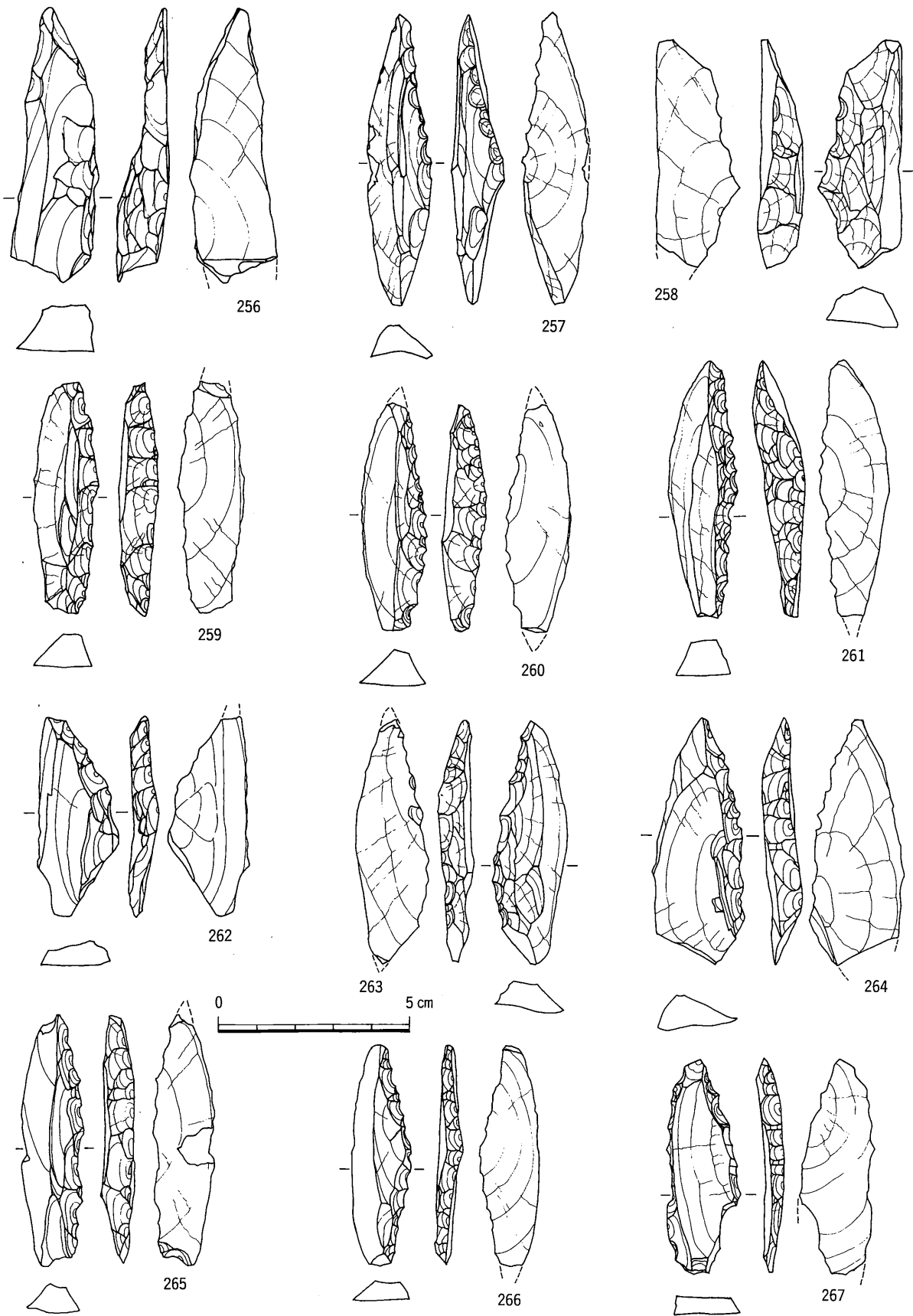
第 46 図 ナイフ形石器実測図 (14)



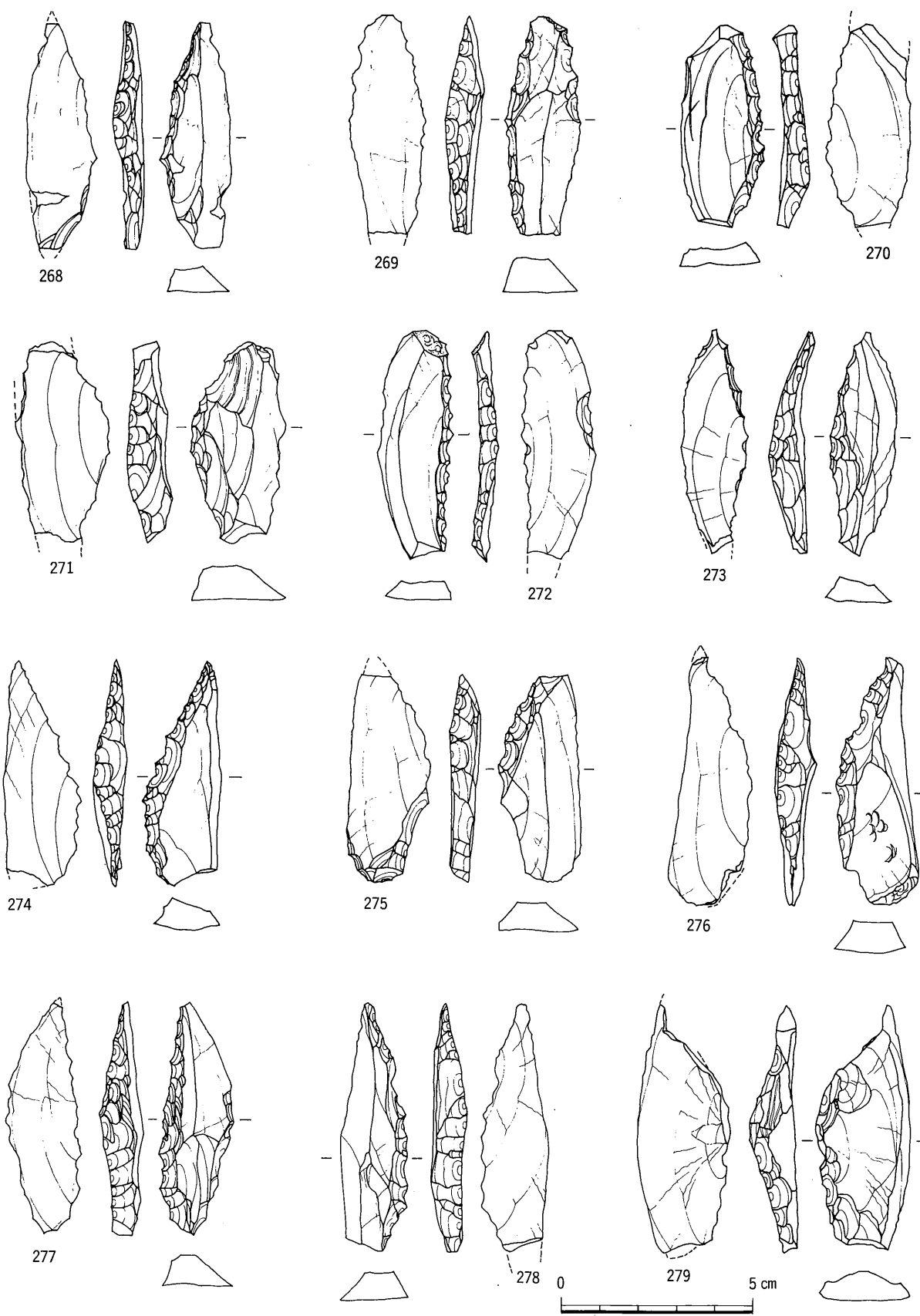
第 47 図 ナイフ形石器実測図 (15)



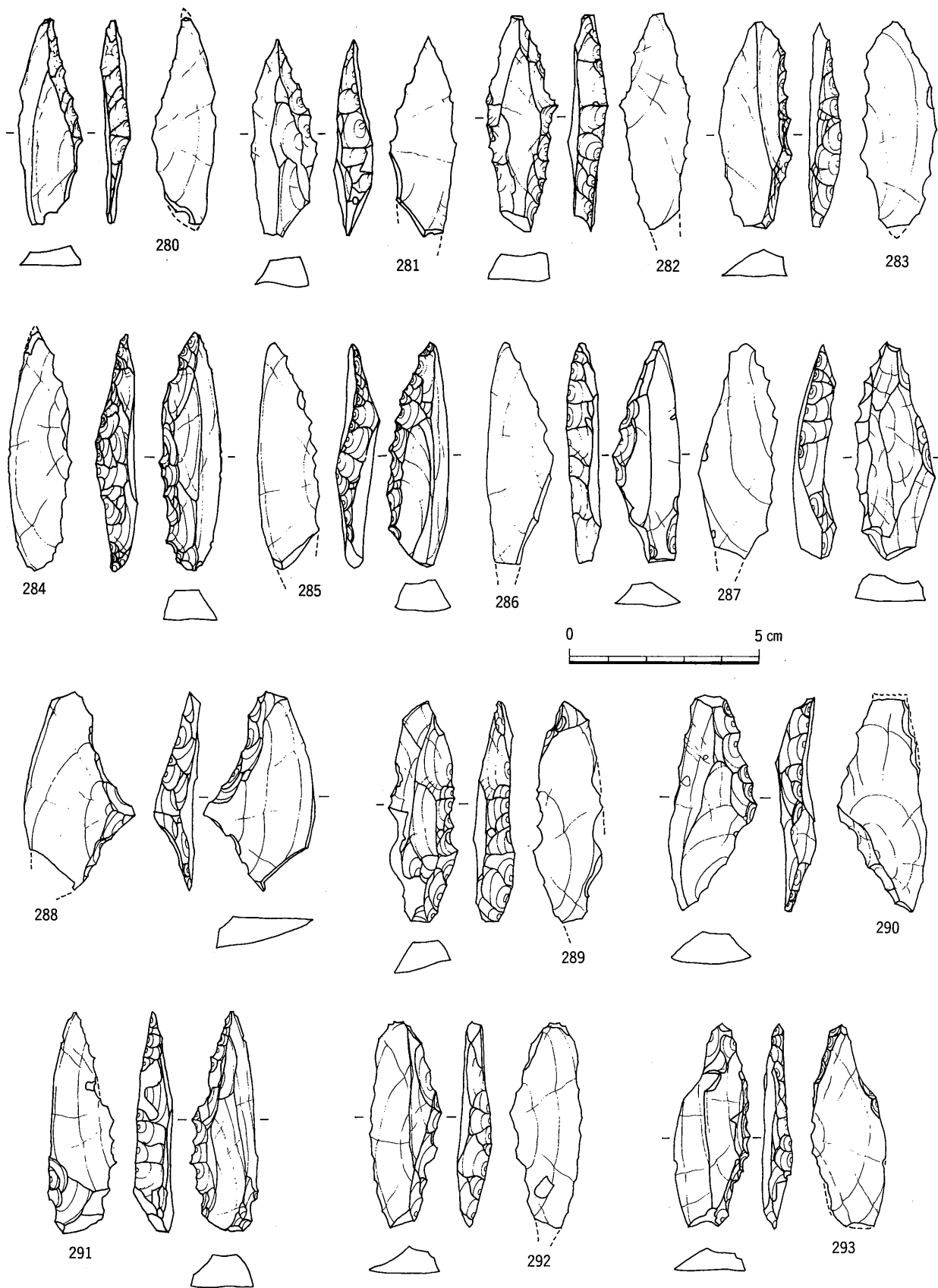
第 48 図 ナイフ形石器実測図 (16)



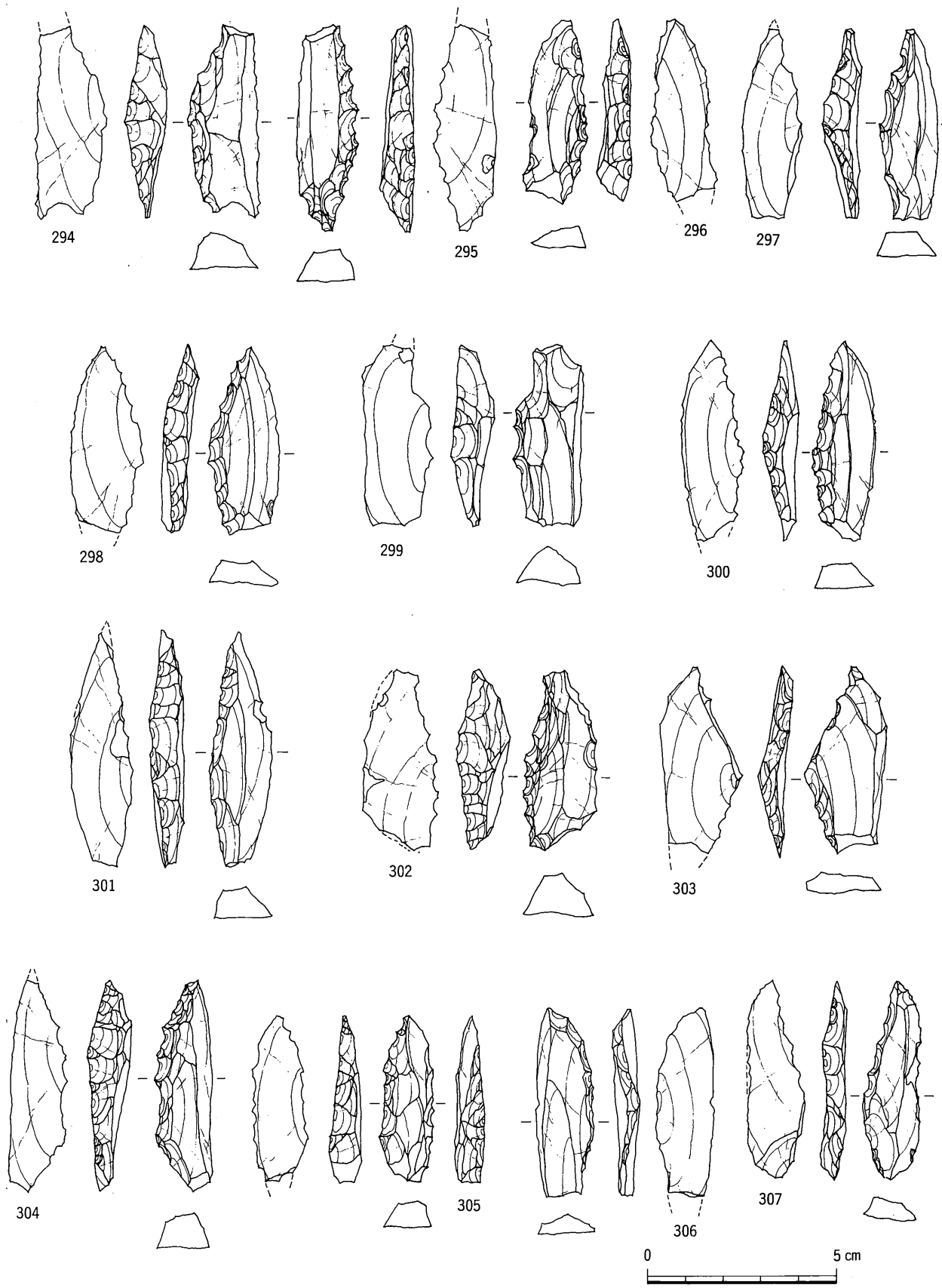
第 49 図 ナイフ形石器実測図 (17)



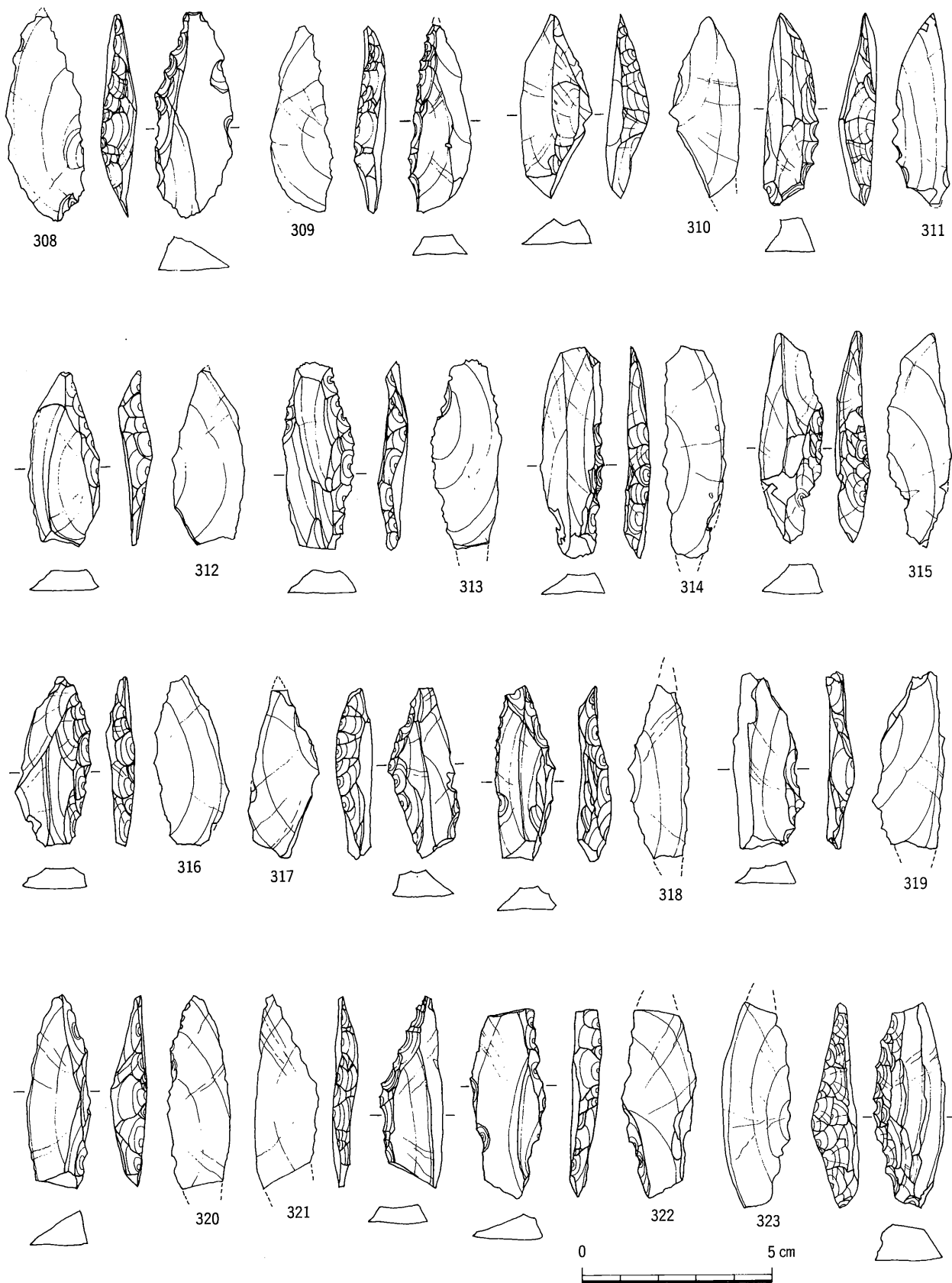
第 50 図 ナイフ形石器実測図 (18)



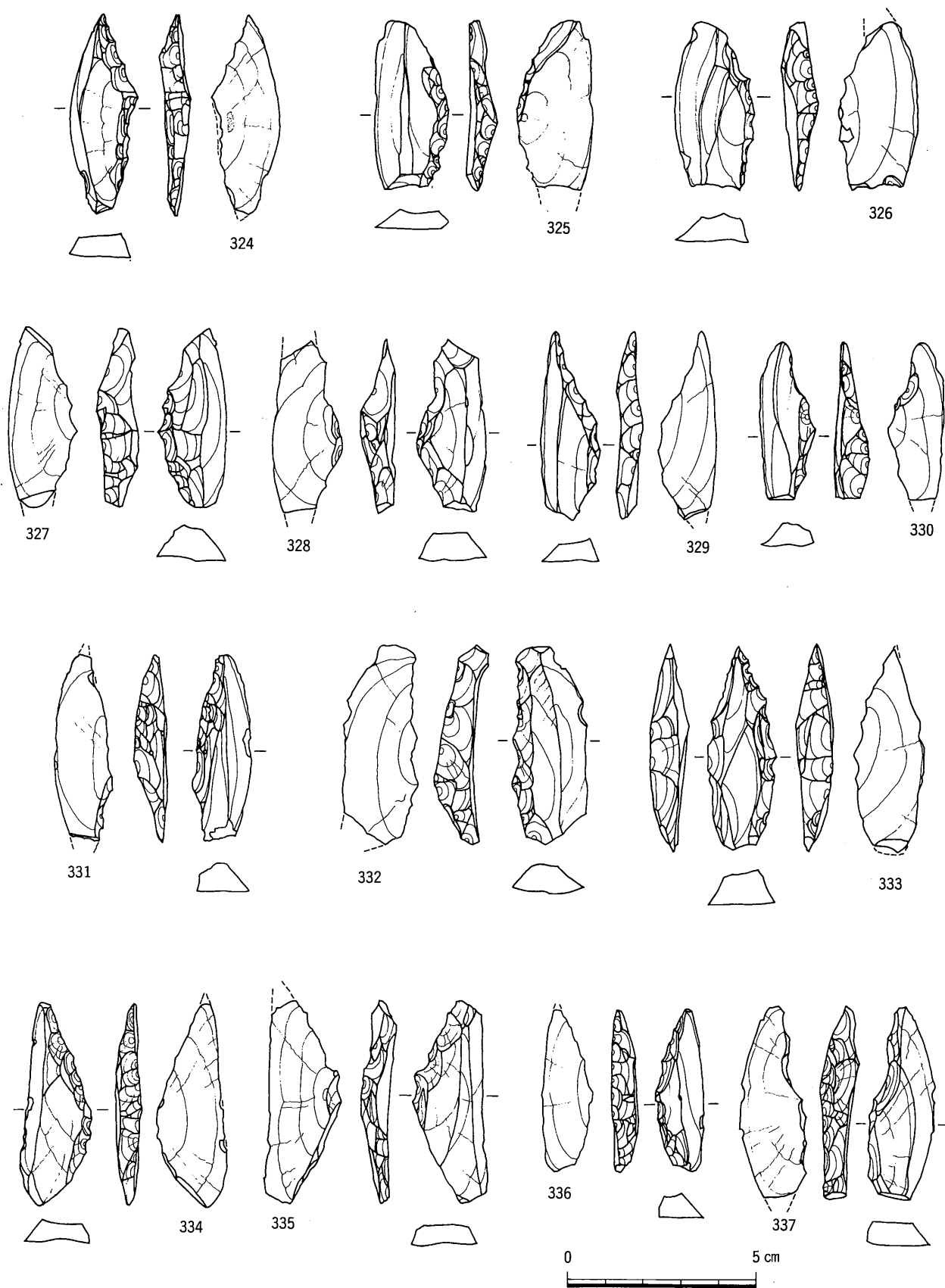
第 51 図 ナイフ形石器実測図 (19)



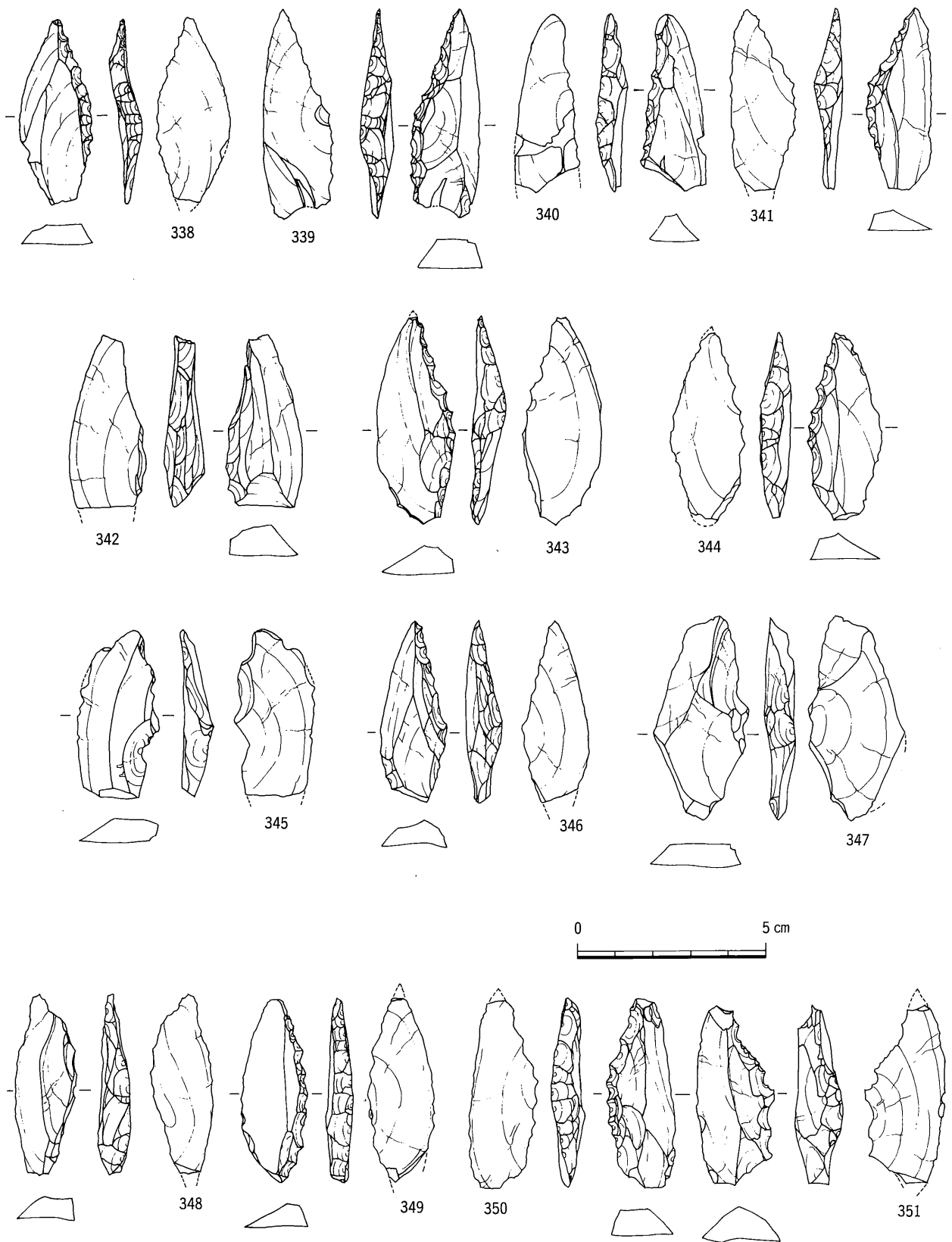
第 52 図 ナイフ形石器実測図 (20)



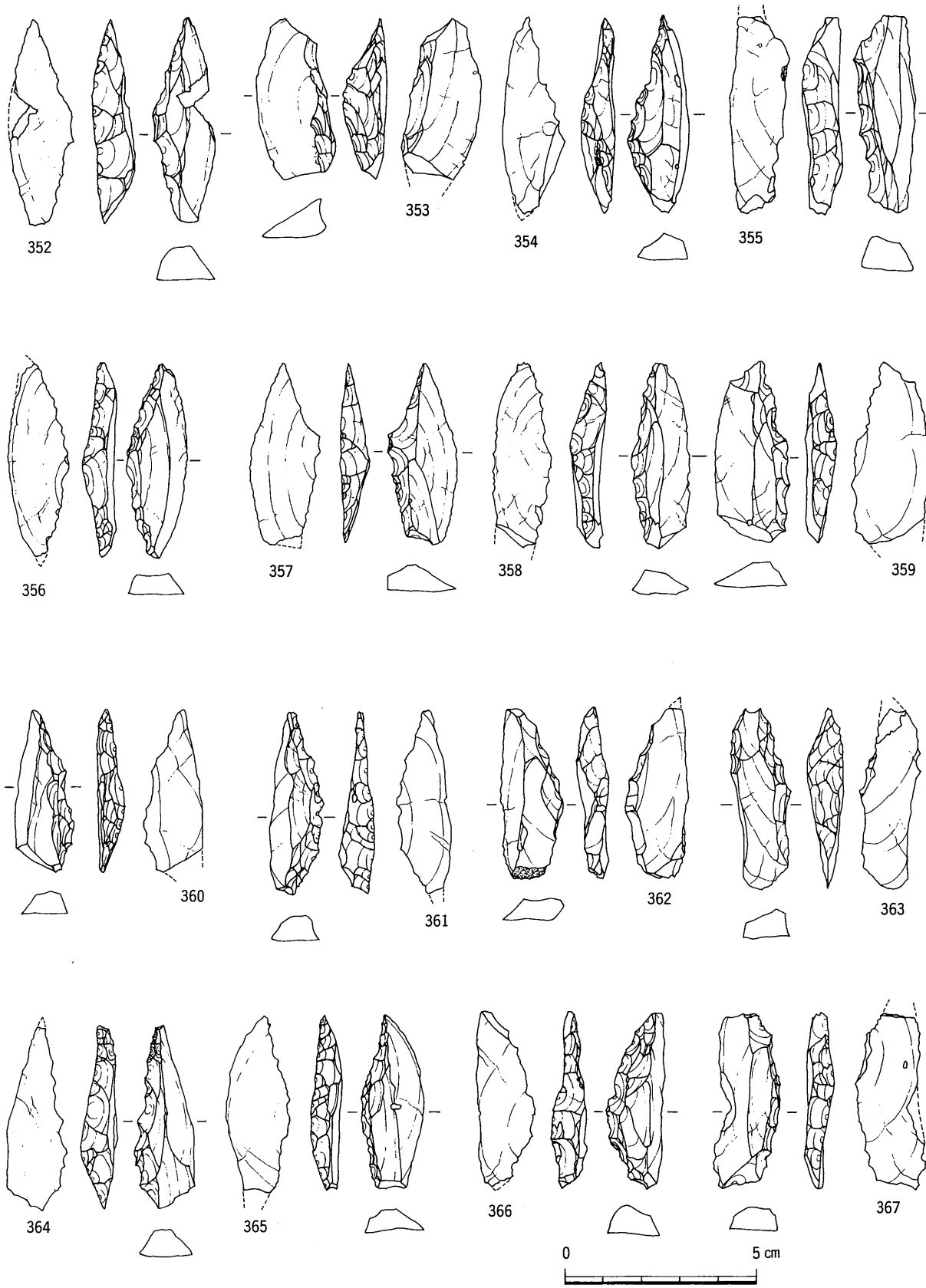
第 53 図 ナイフ形石器実測図 (21)



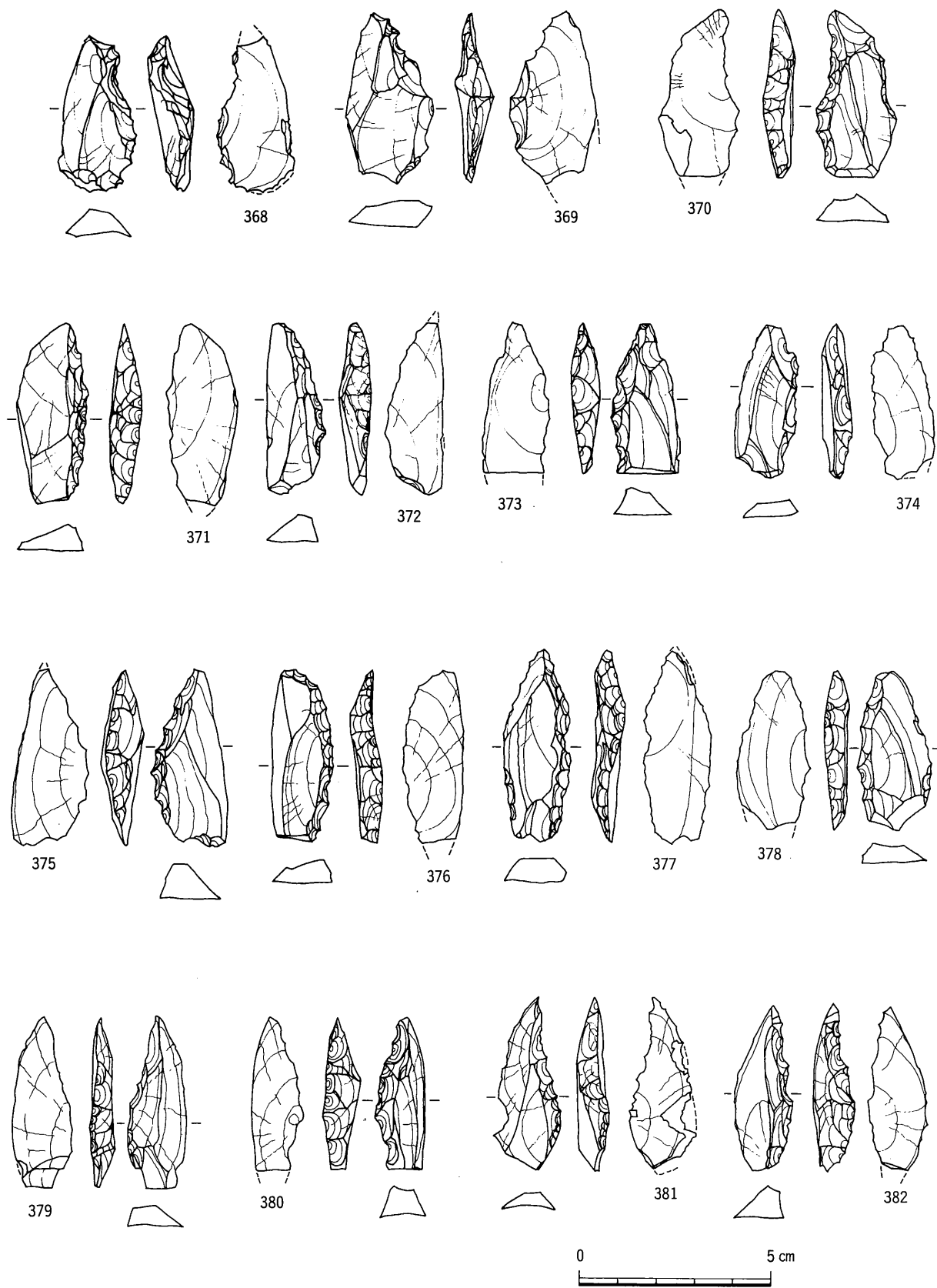
第 54 図 ナイフ形石器実測図 (2)



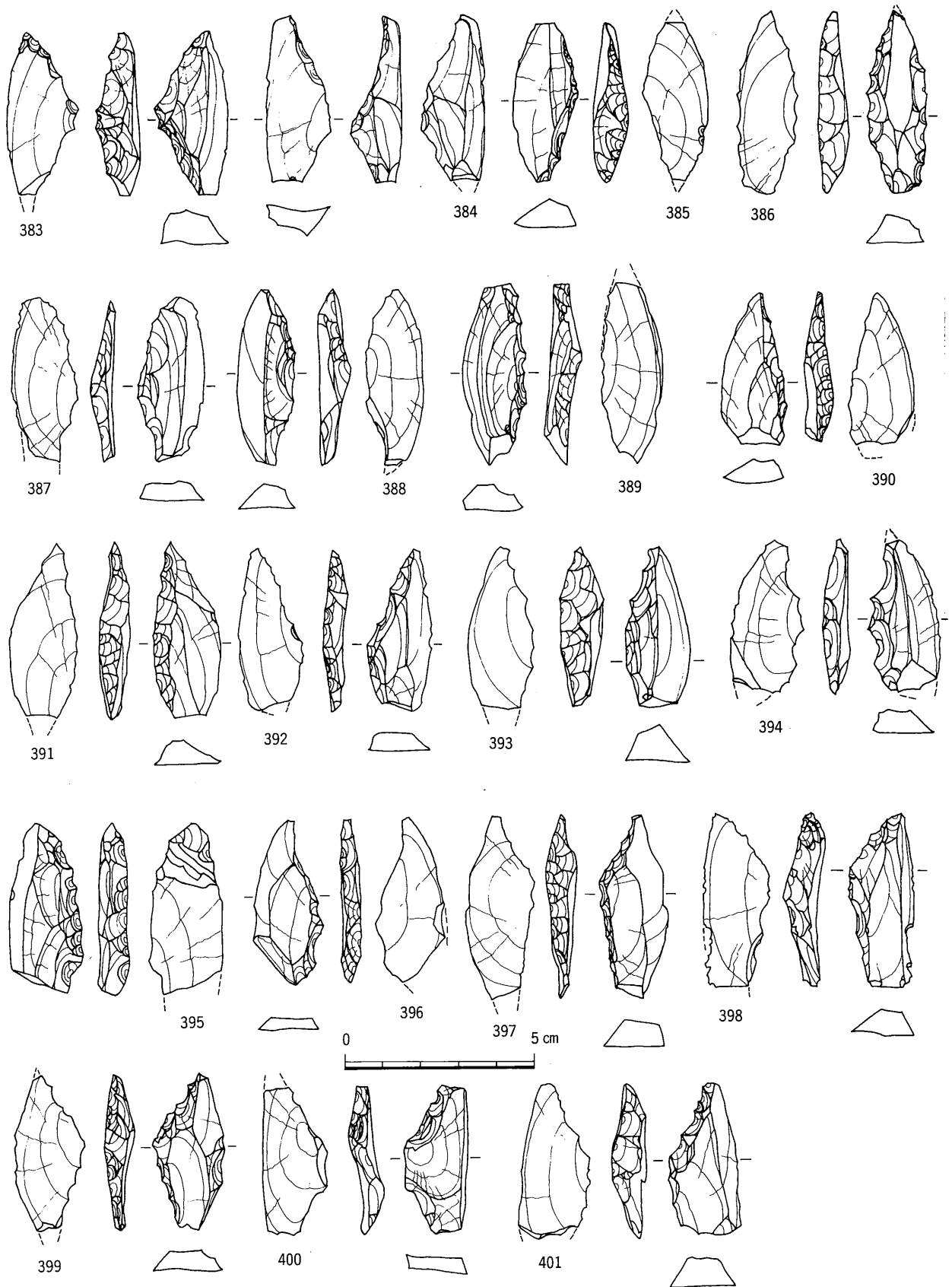
第 55 図 ナイフ形石器実測図 (23)



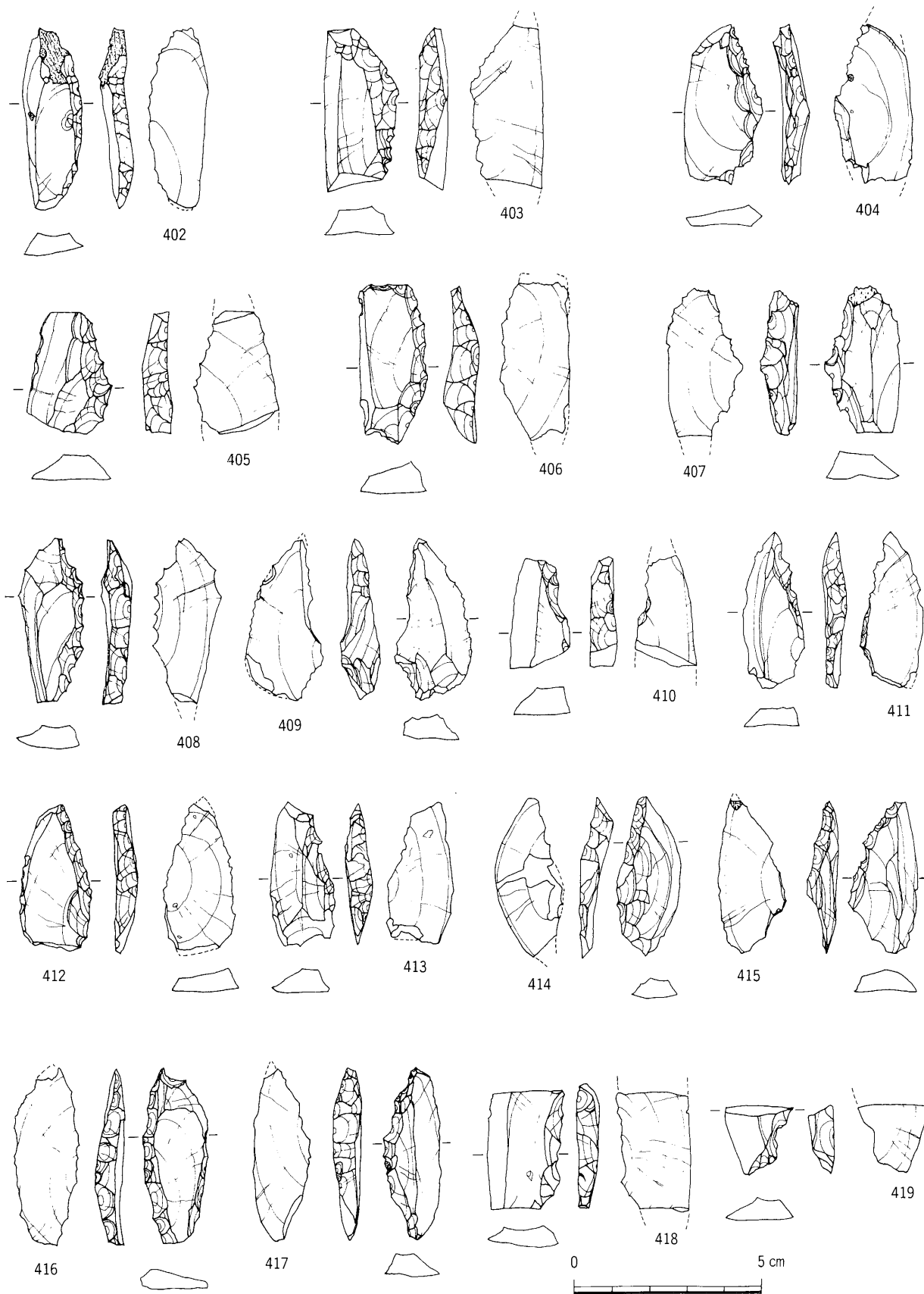
第 56 図 ナイフ形石器実測図 (24)



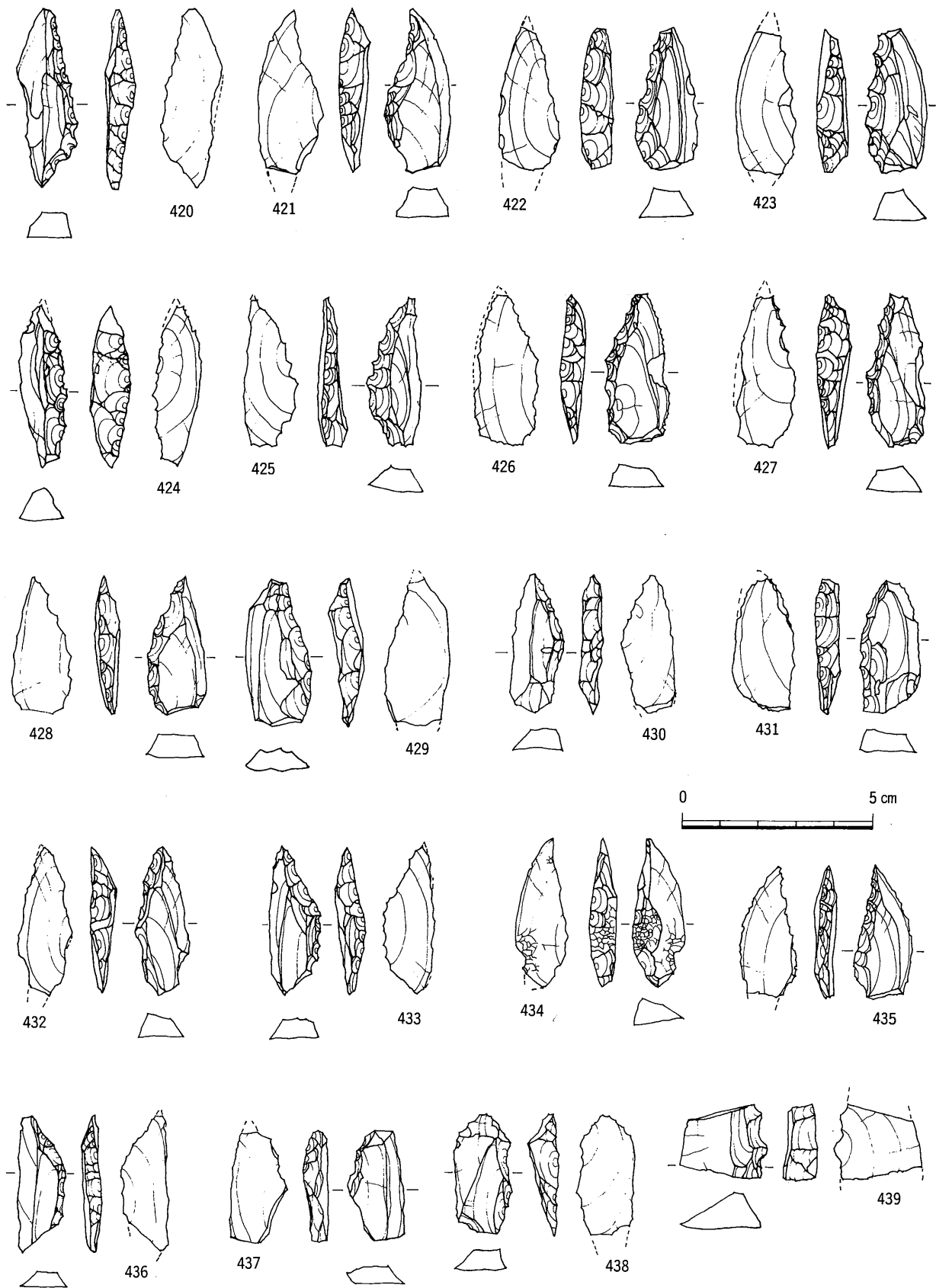
第 57 図 ナイフ形石器実測図 (25)



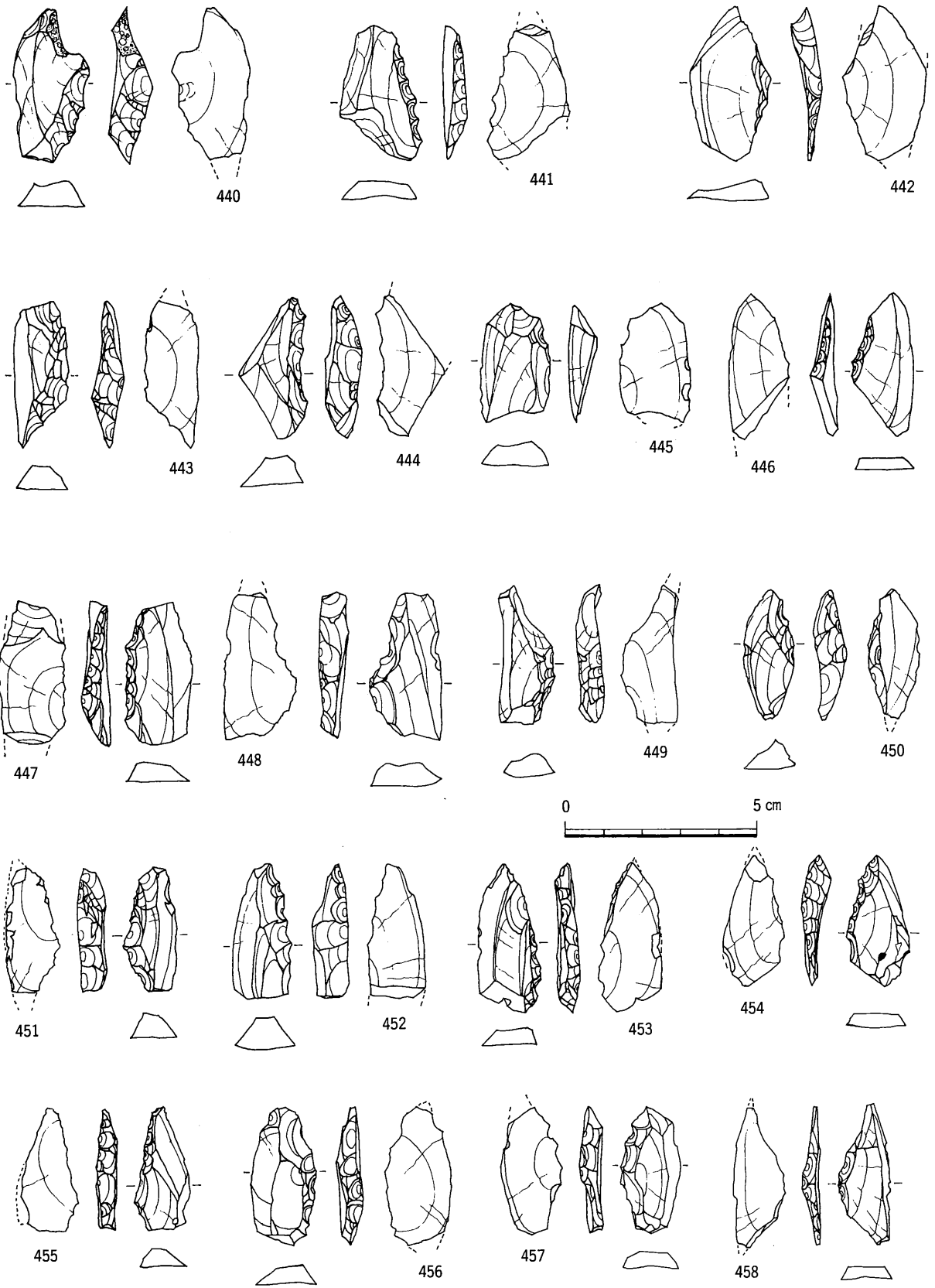
第 58 図 ナイフ形石器実測図 (26)



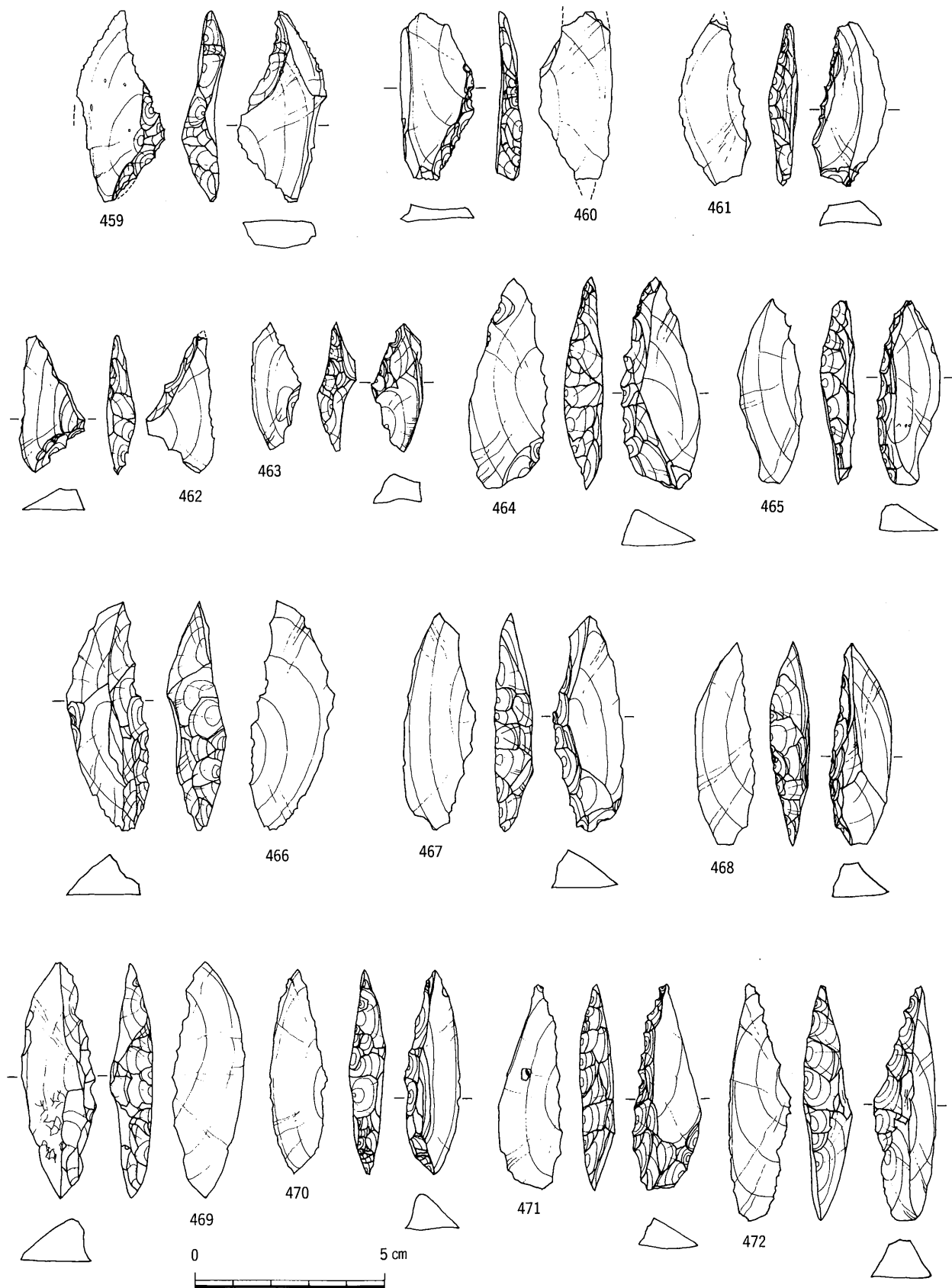
第 59 図 ナイフ形石器実測図 (27)



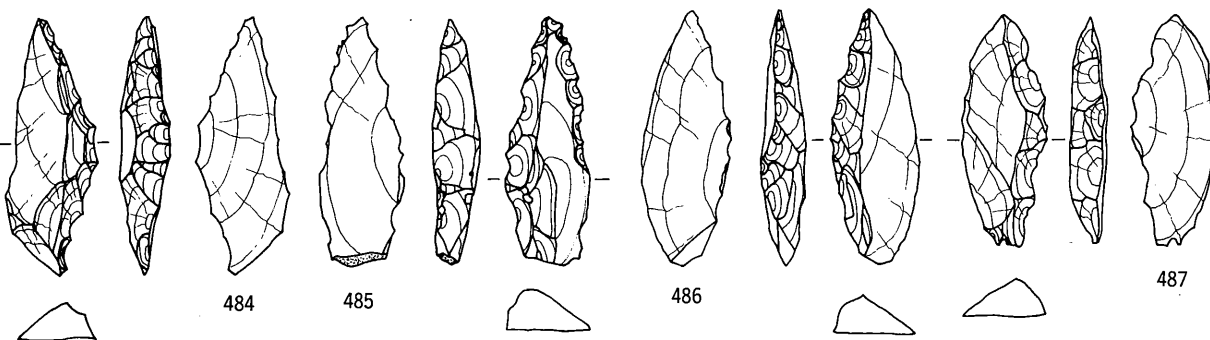
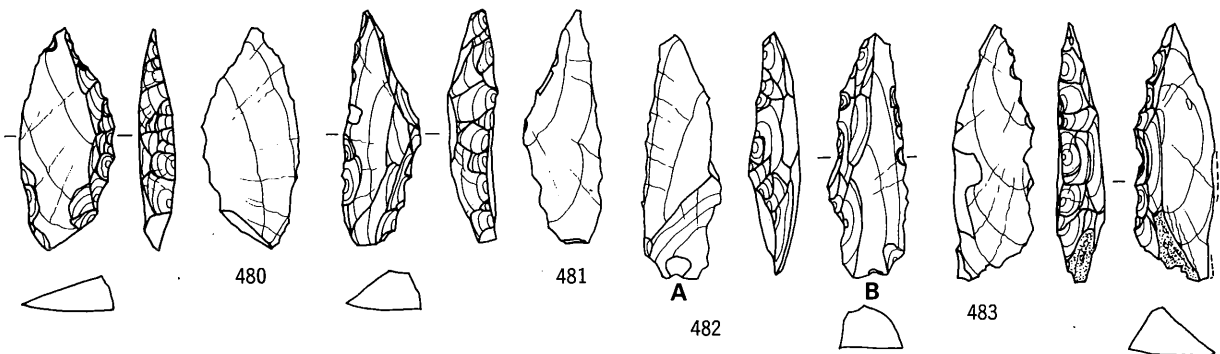
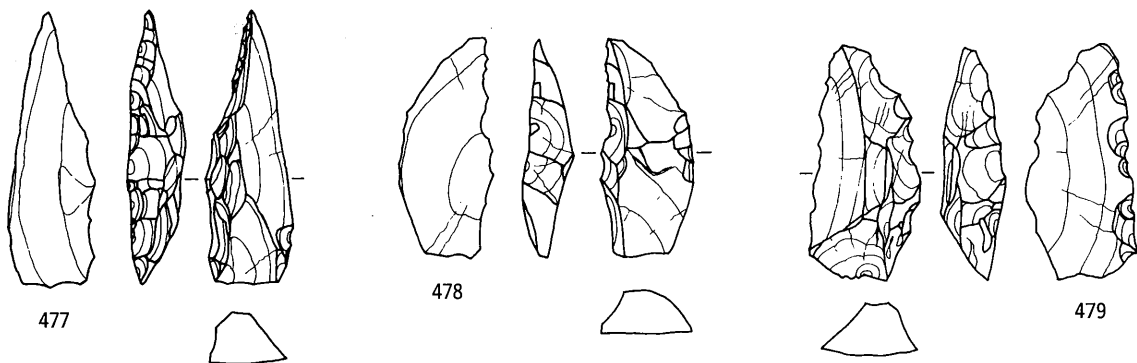
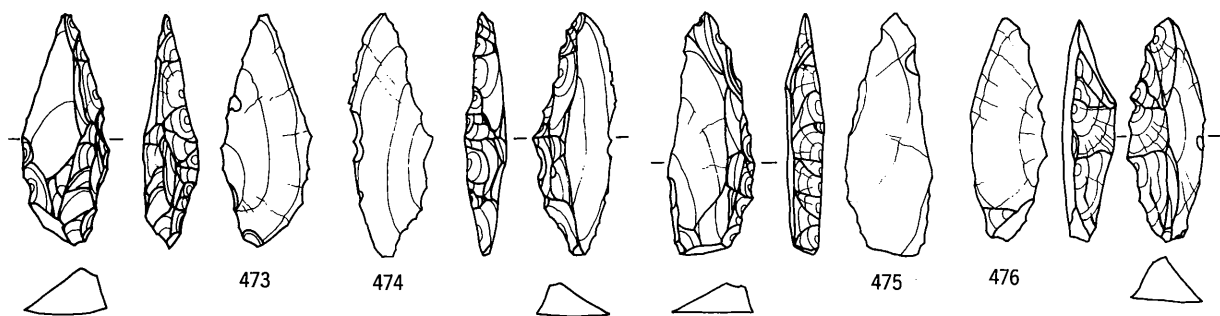
第 60 図 ナイフ形石器実測図 (28)



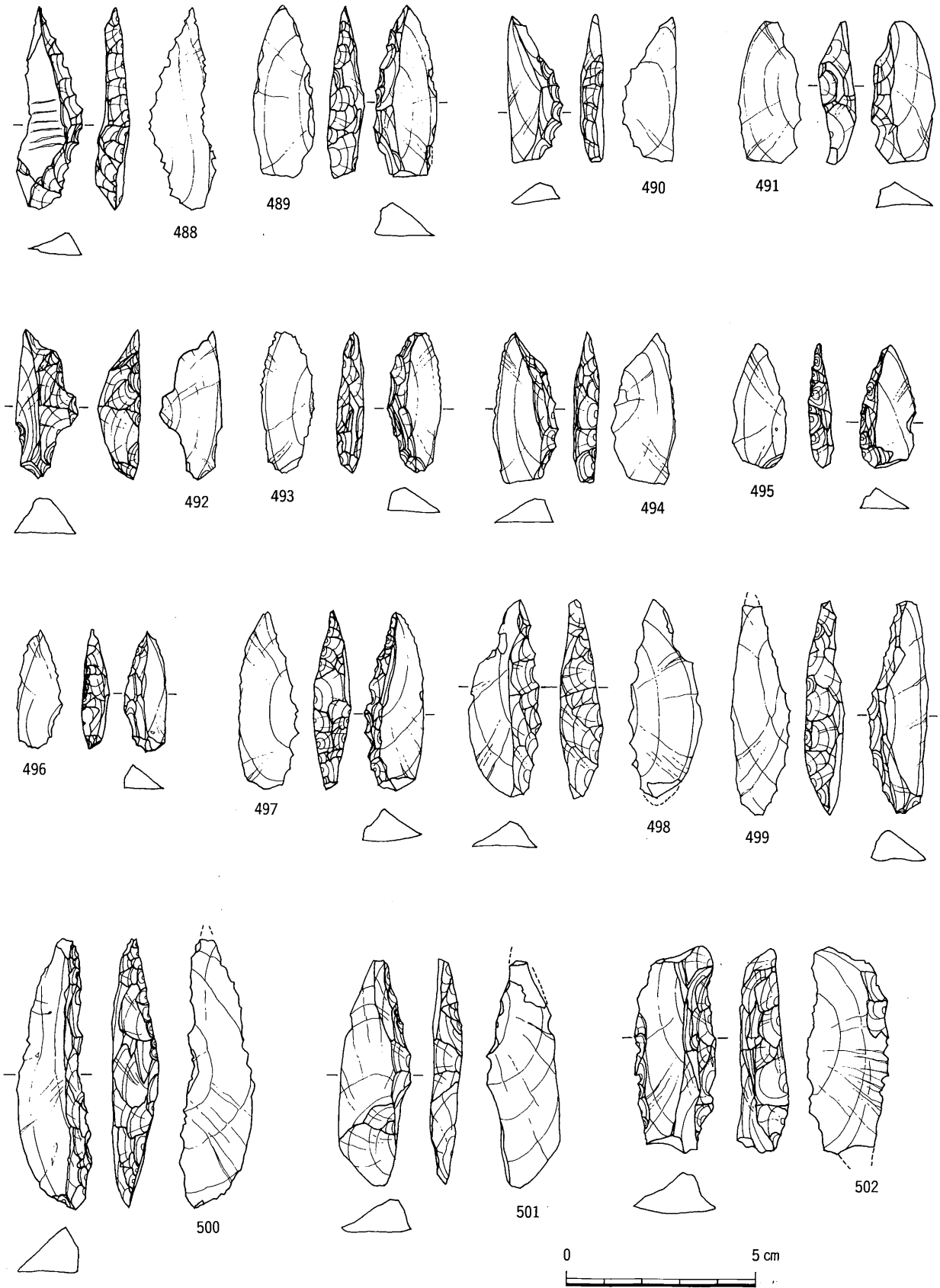
第 61 図 ナイフ形石器実測図 (29)



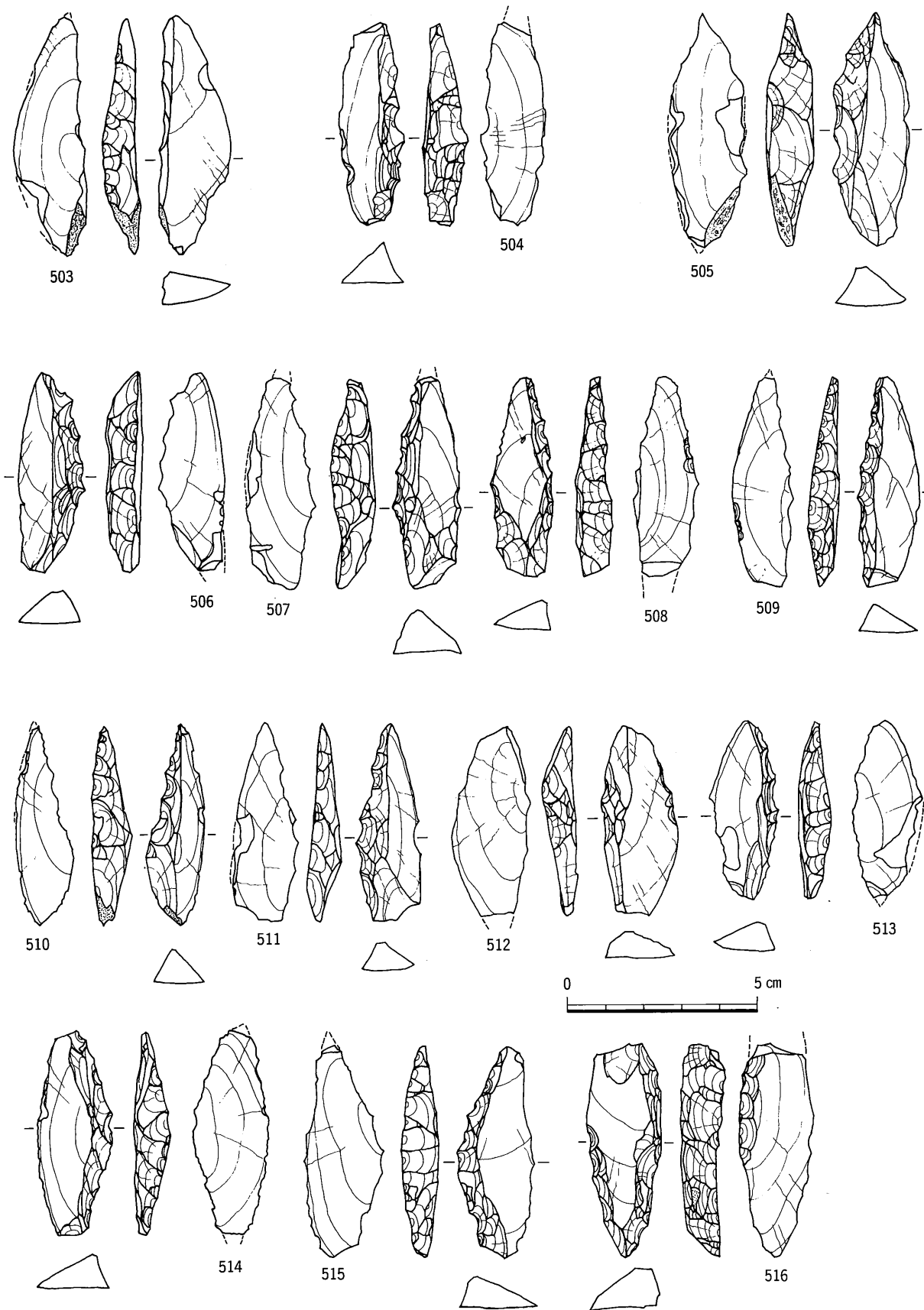
第 62 図 ナイフ形石器実測図 (30)



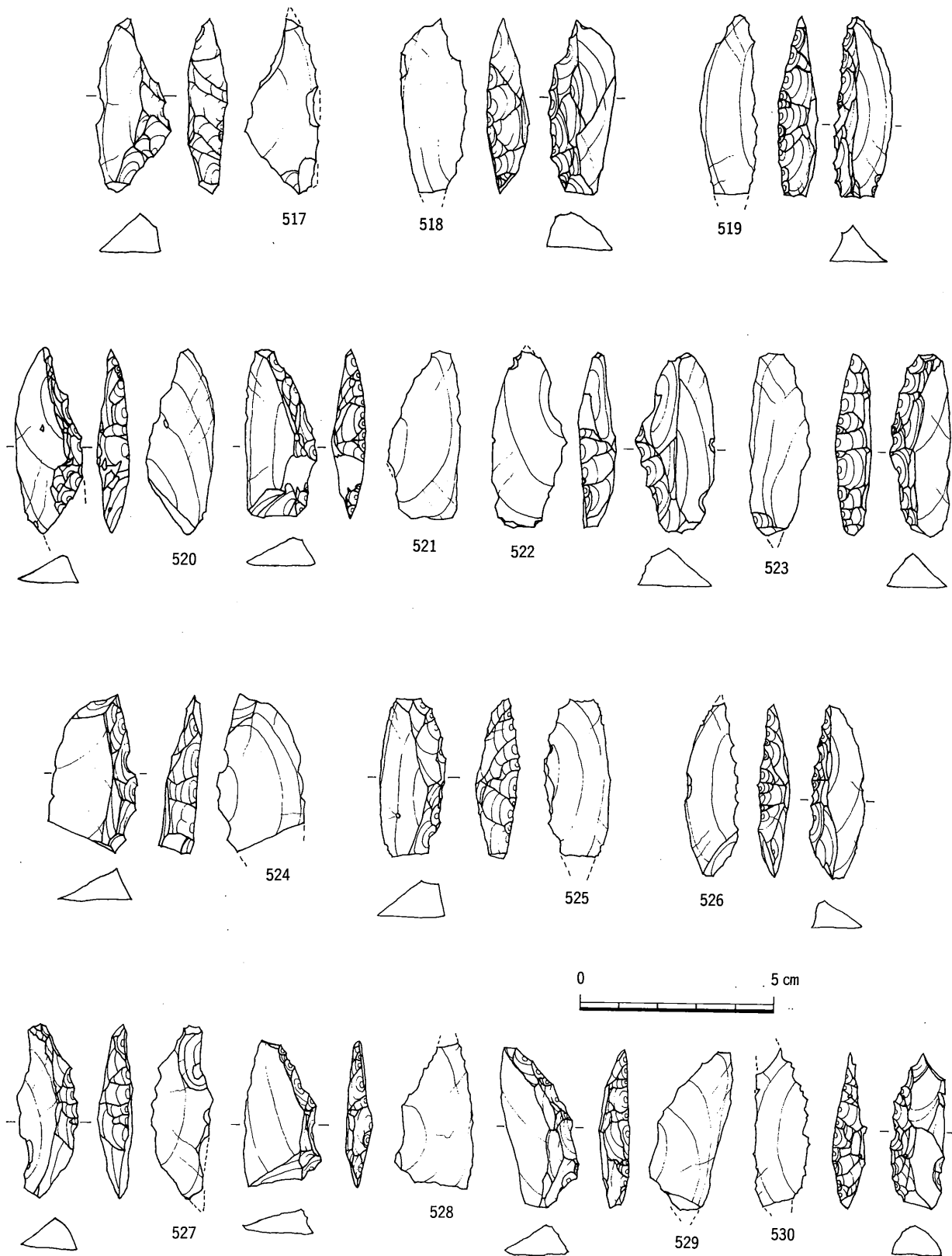
第 63 図 ナイフ形石器実測図 (31)



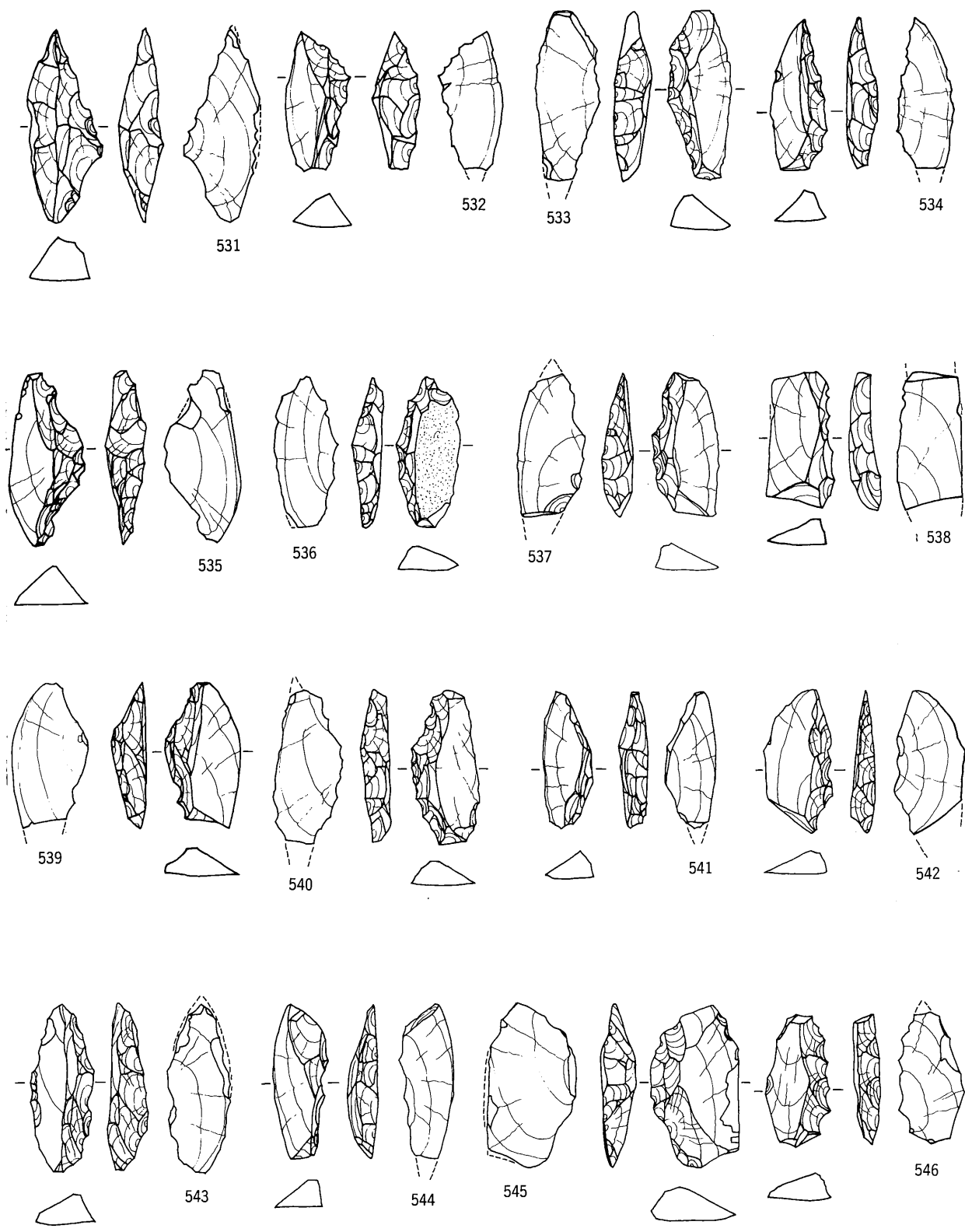
第 64 図 ナイフ形石器実測図 (32)



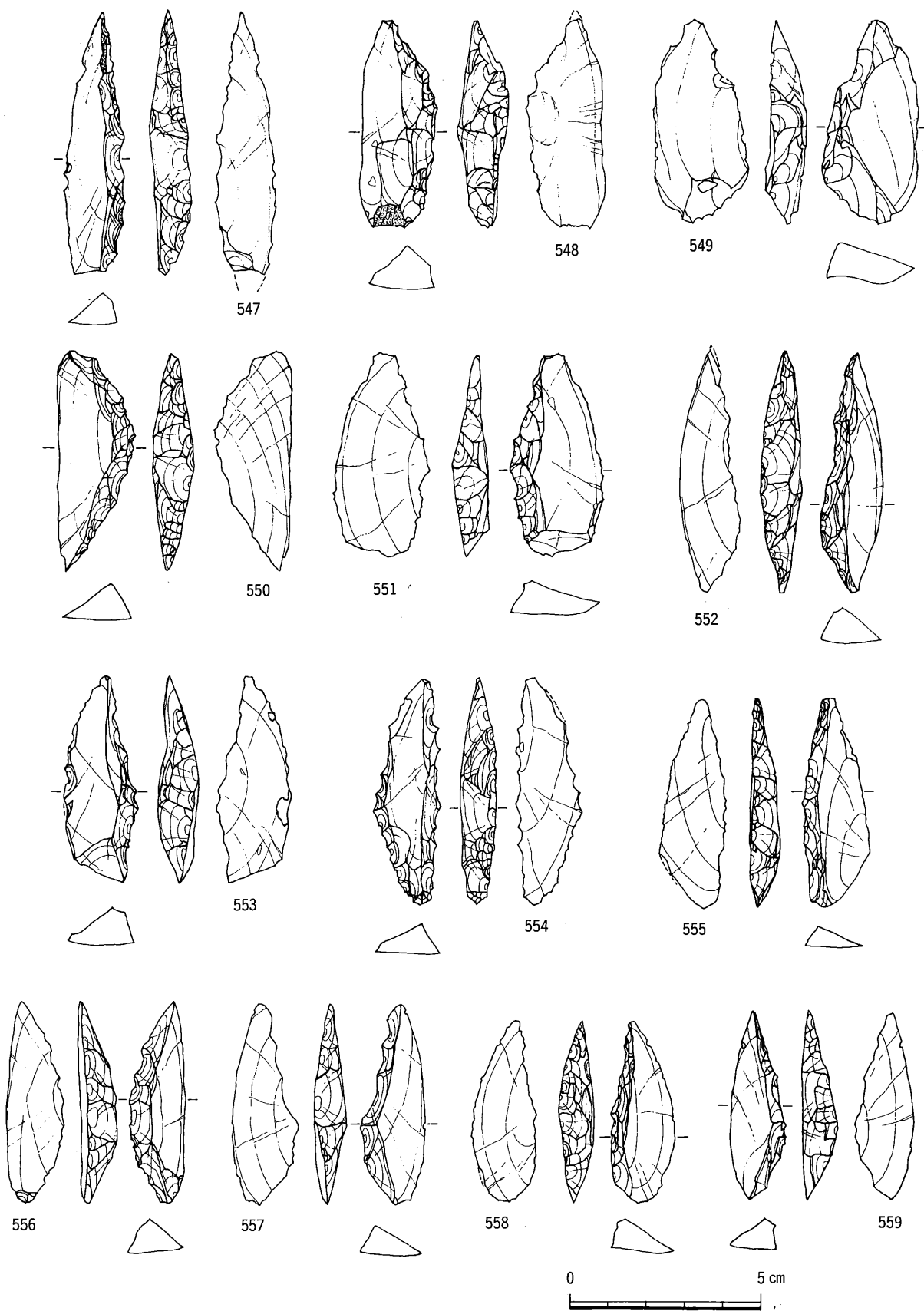
第 65 図 ナイフ形石器実測図 (33)



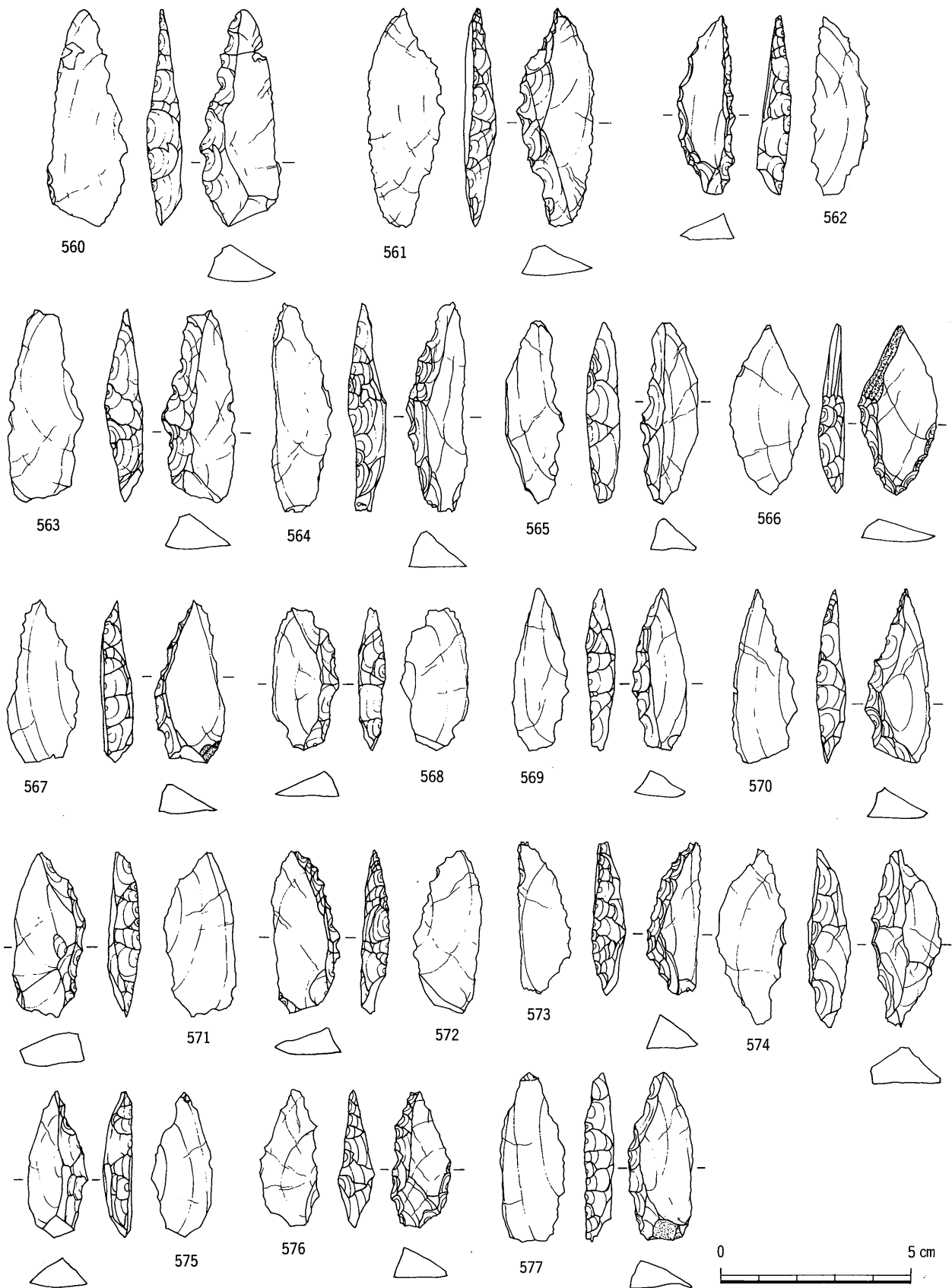
第 66 図 ナイフ形石器実測図 (34)



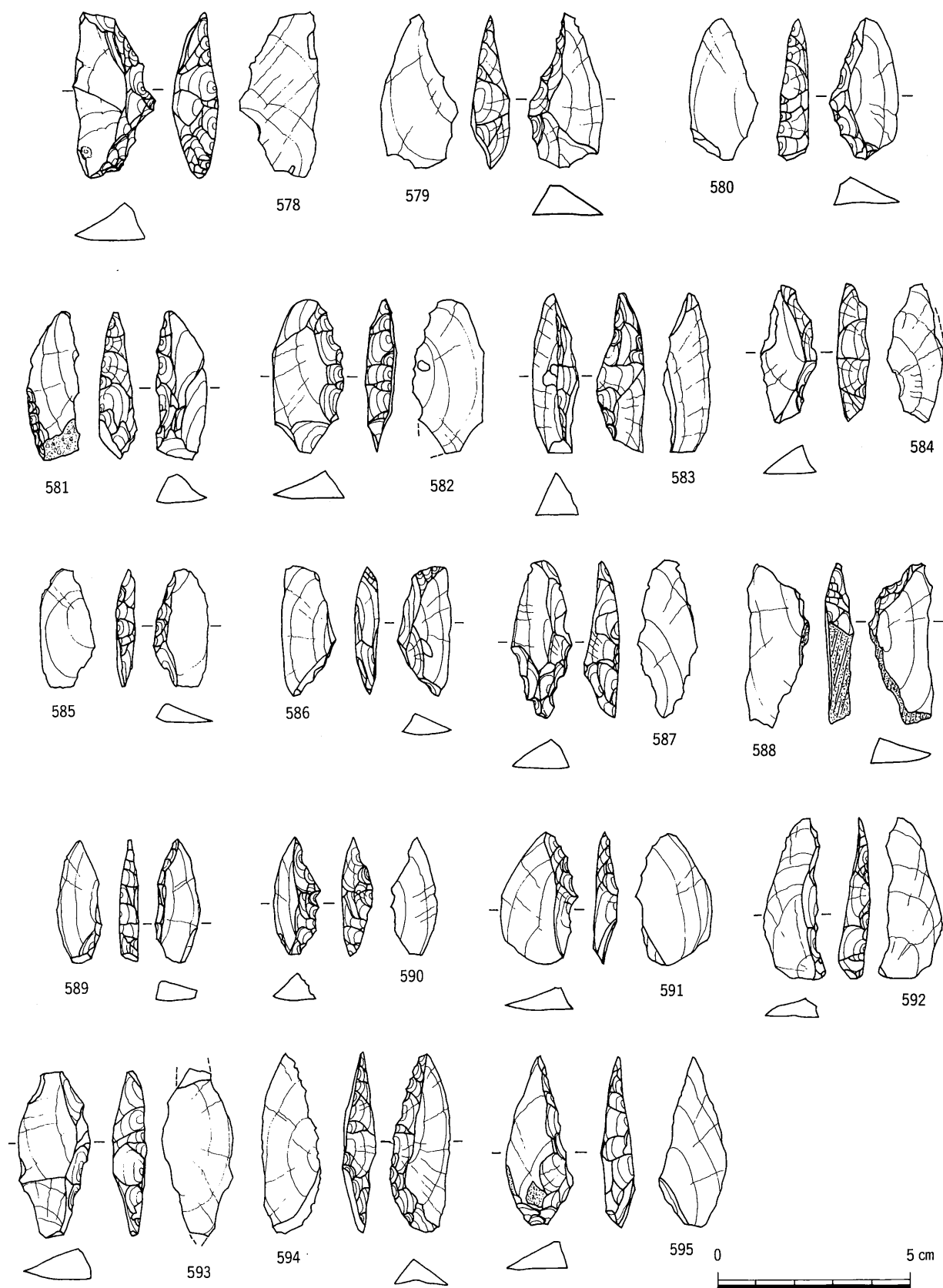
第 67 図 ナイフ形石器実測図 (35)



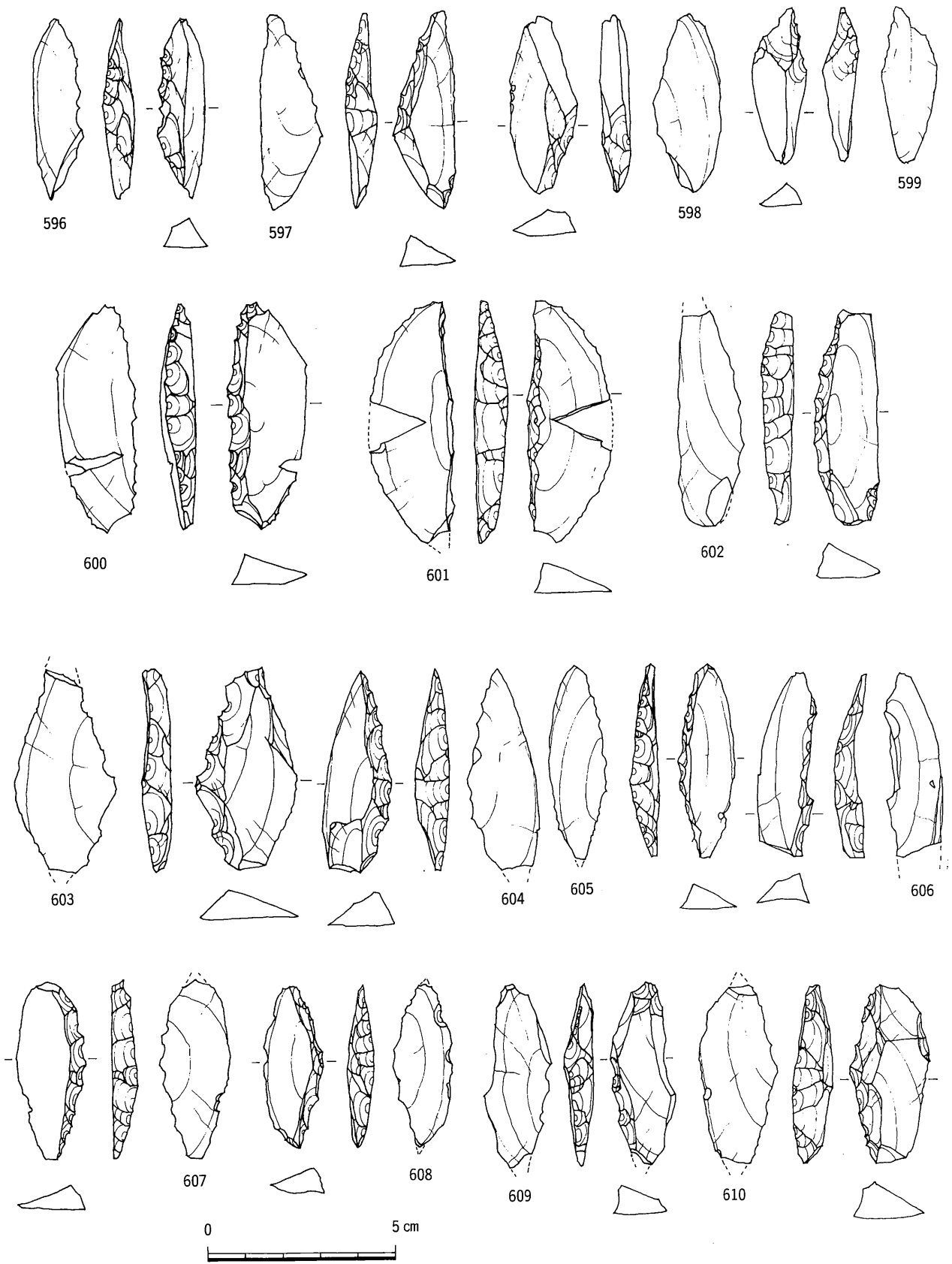
第 68 図 ナイフ形石器実測図 (36)



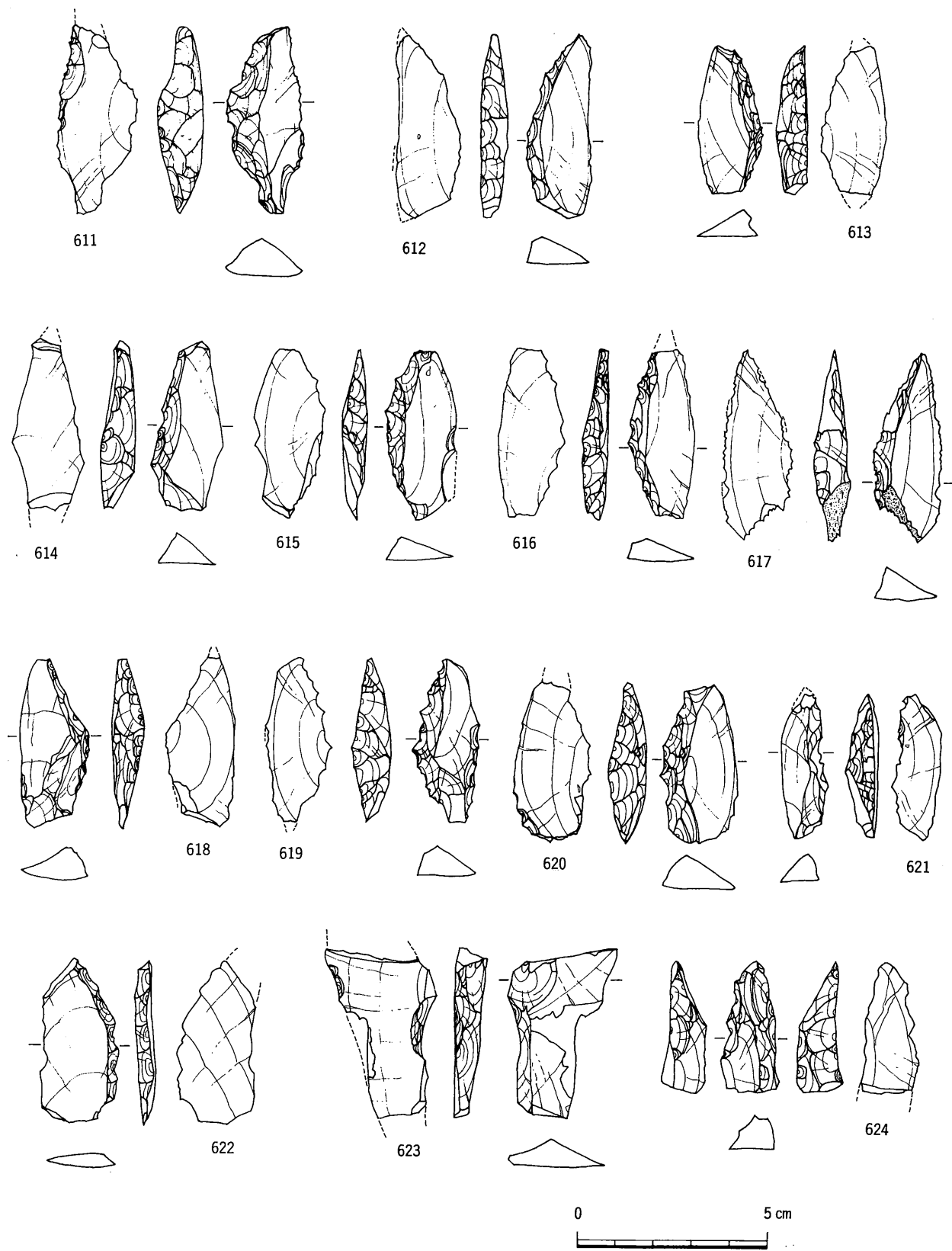
第 69 図 ナイフ形石器実測図 (37)



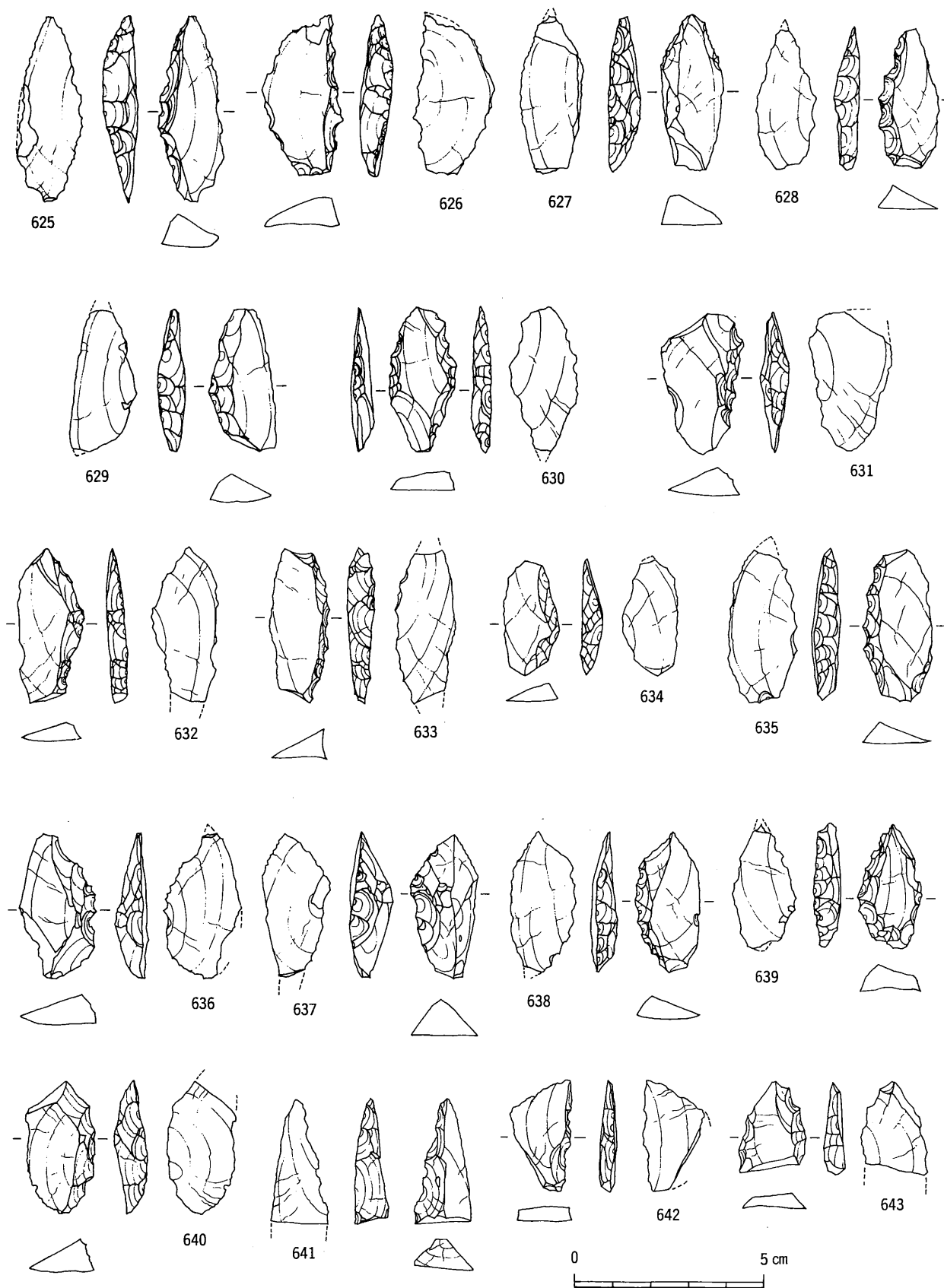
第 70 図 ナイフ形石器実測図 (38)



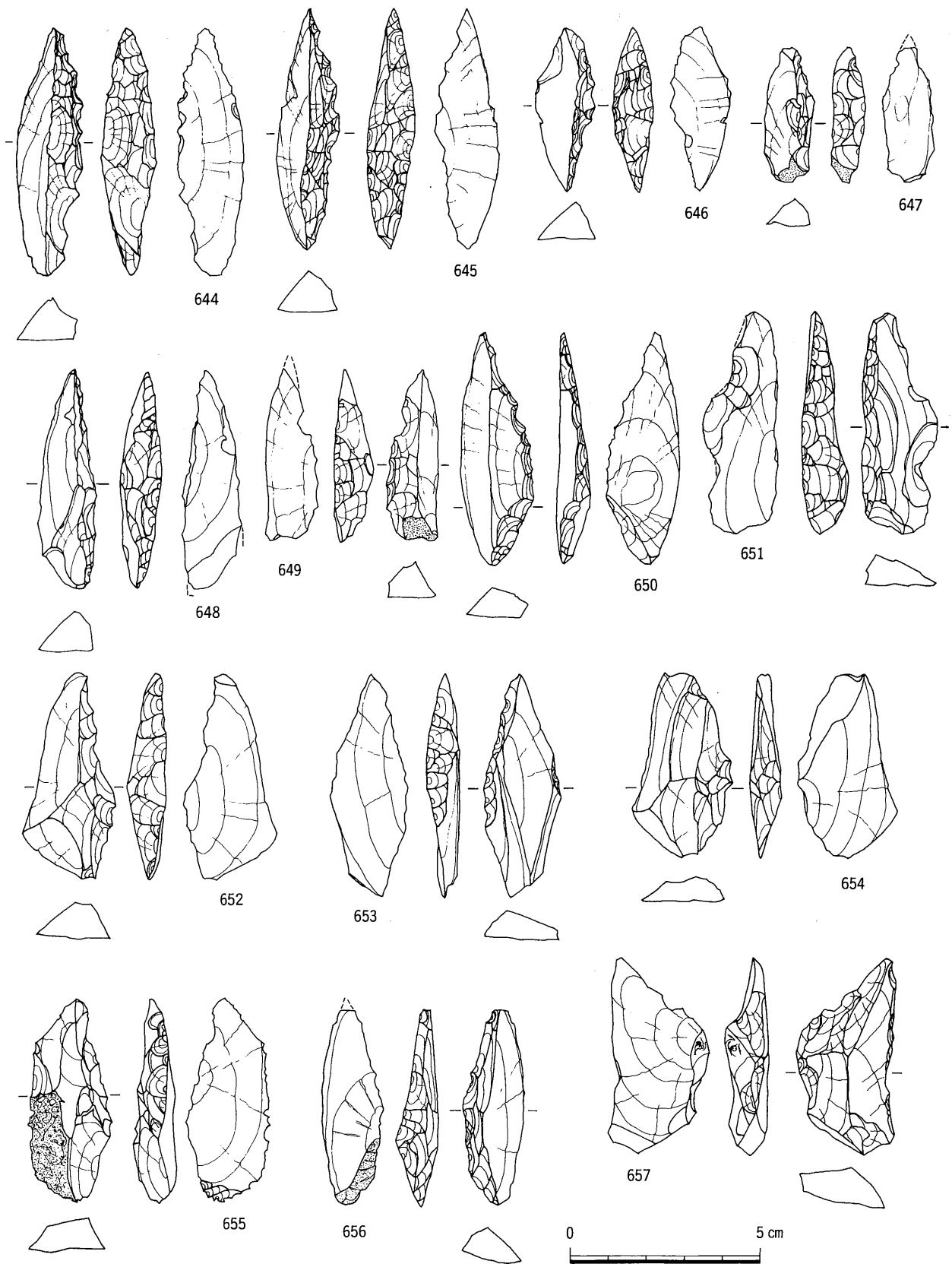
第 71 図 ナイフ形石器実測図 (39)



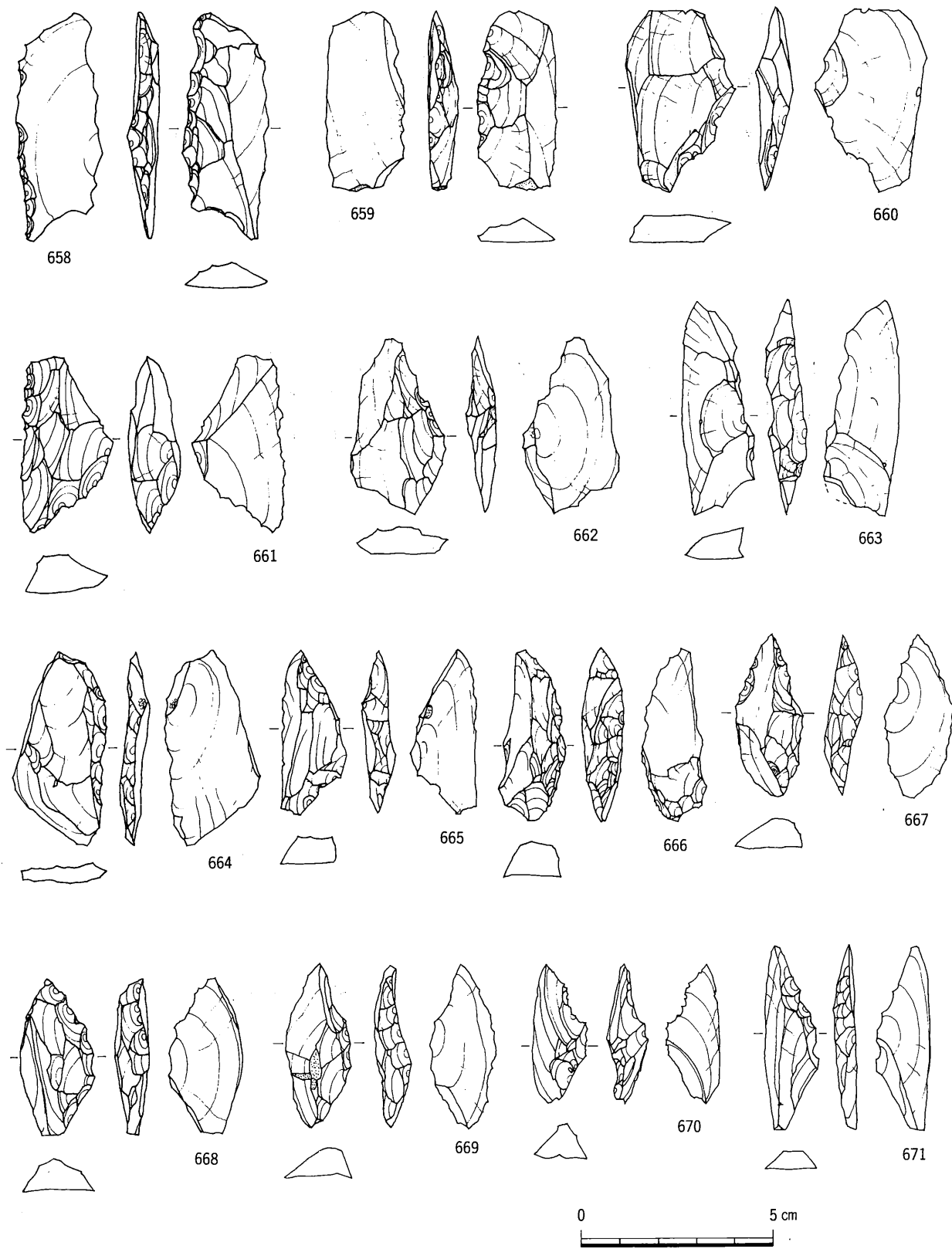
第 72 図 ナイフ形石器実測図 (40)



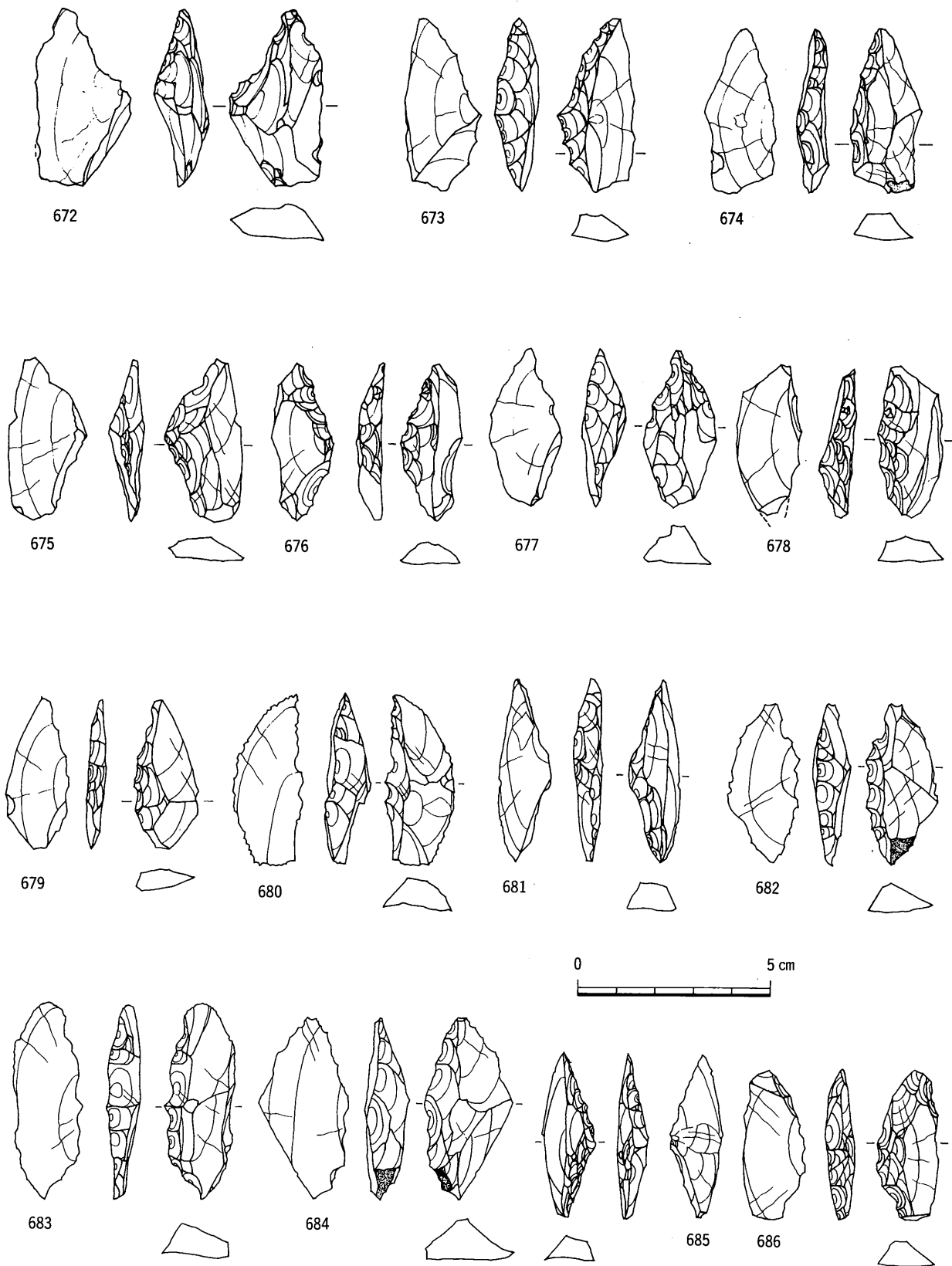
第 73 図 ナイフ形石器実測図 (41)



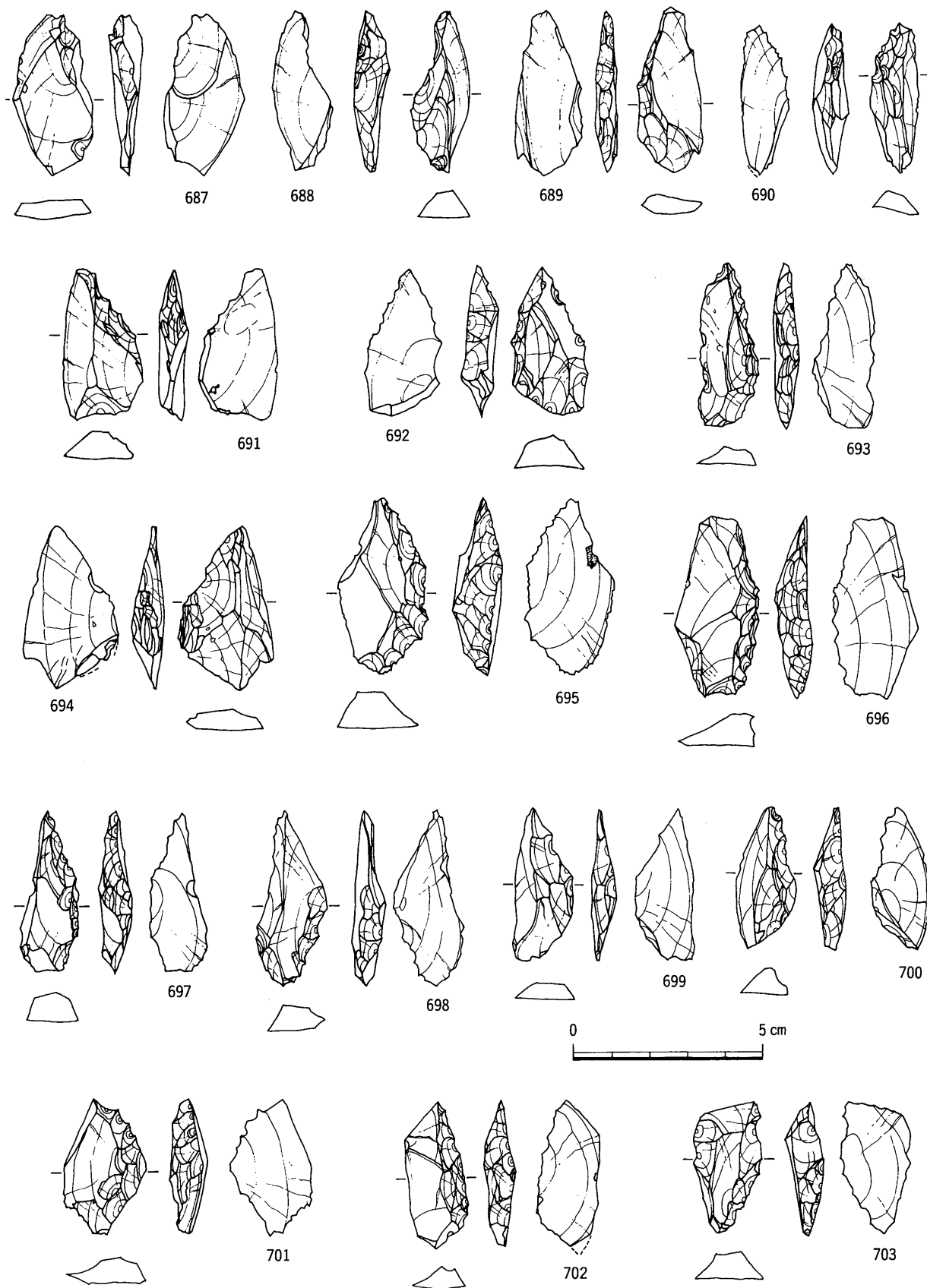
第 74 図 ナイフ形石器実測図 (42)



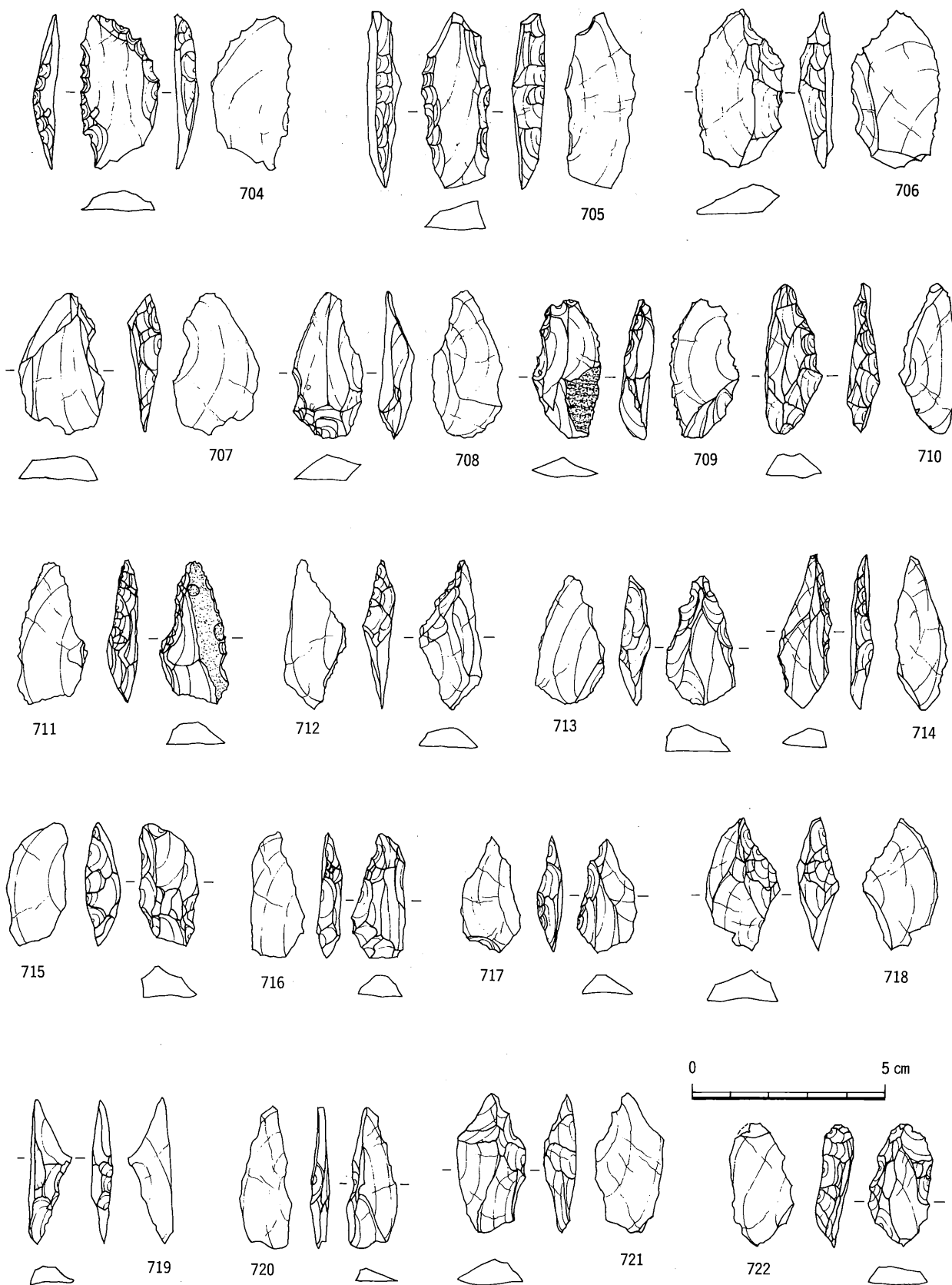
第 75 図 ナイフ形石器実測図 (43)



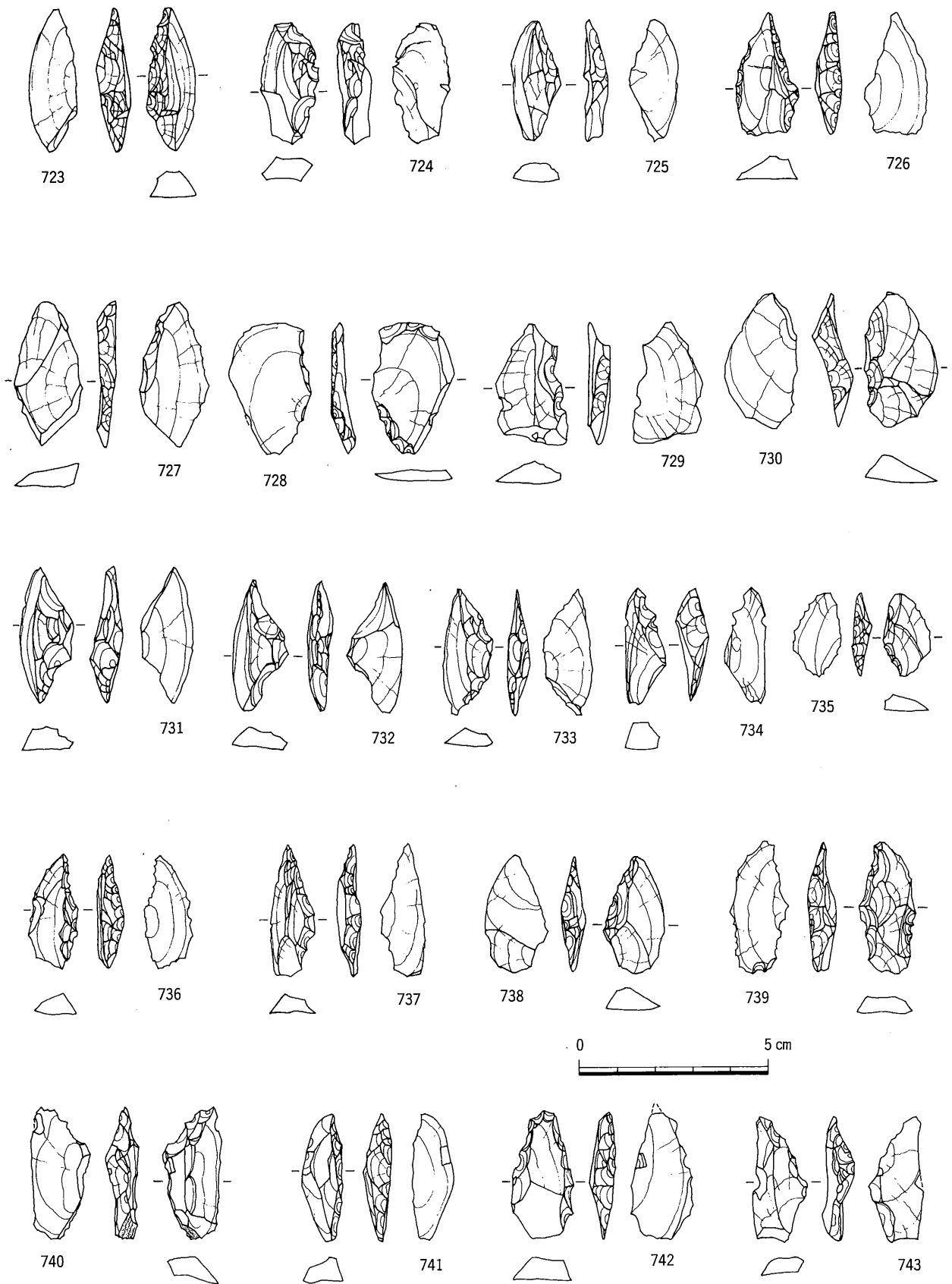
第 76 図 ナイフ形石器実測図 (44)



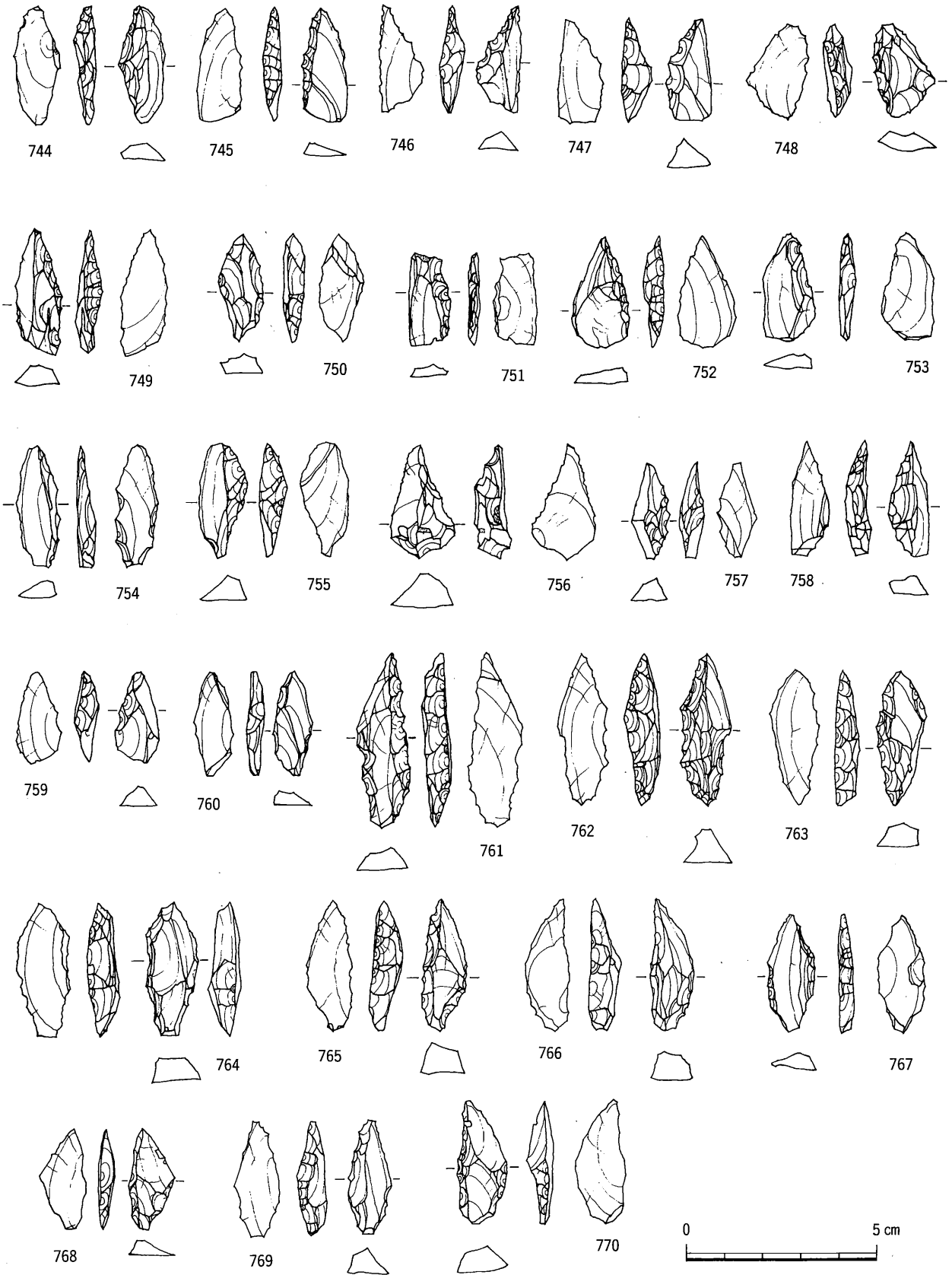
第 77 図 ナイフ形石器実測図 (45)



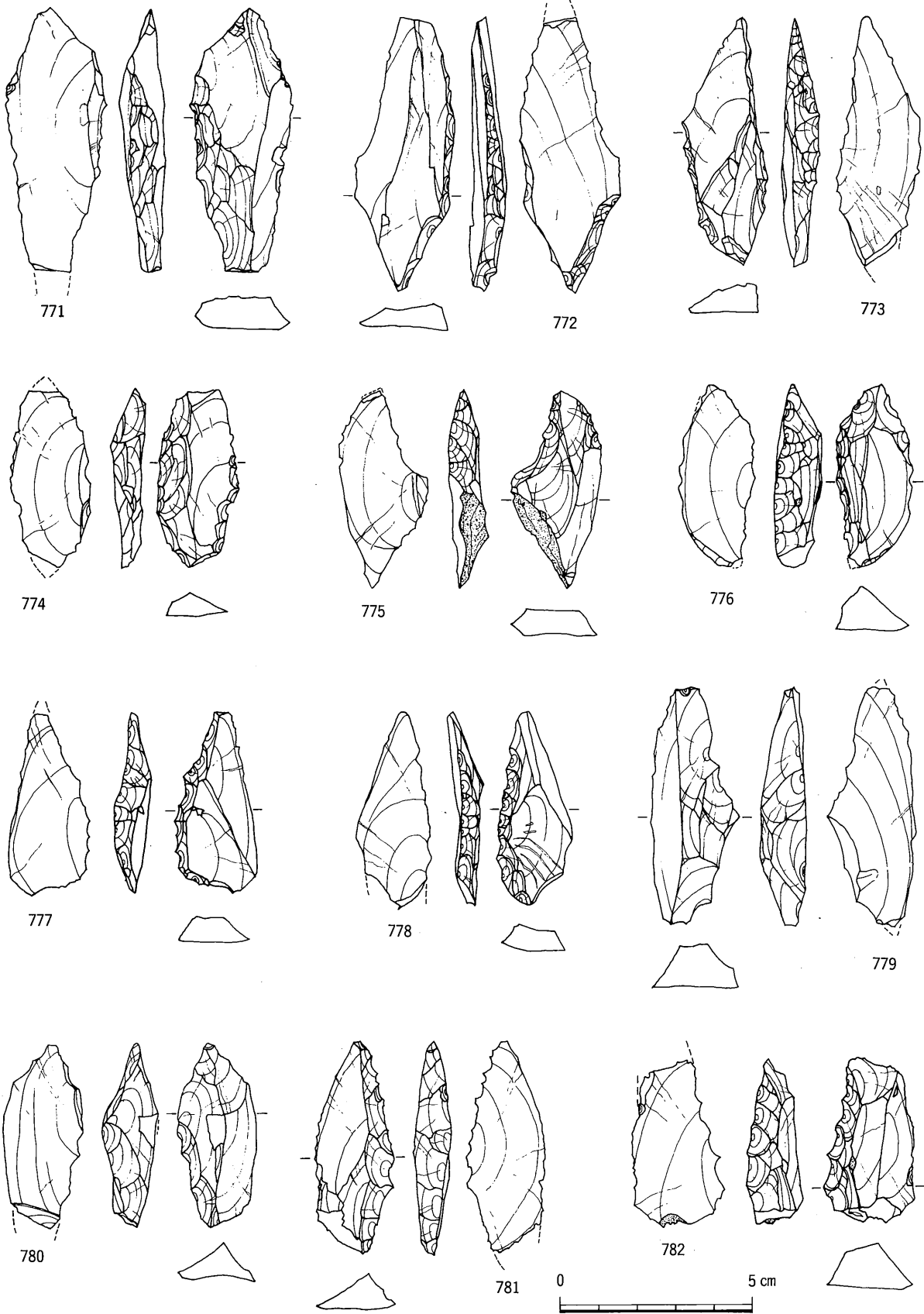
第 78 図 ナイフ形石器実測図 (46)



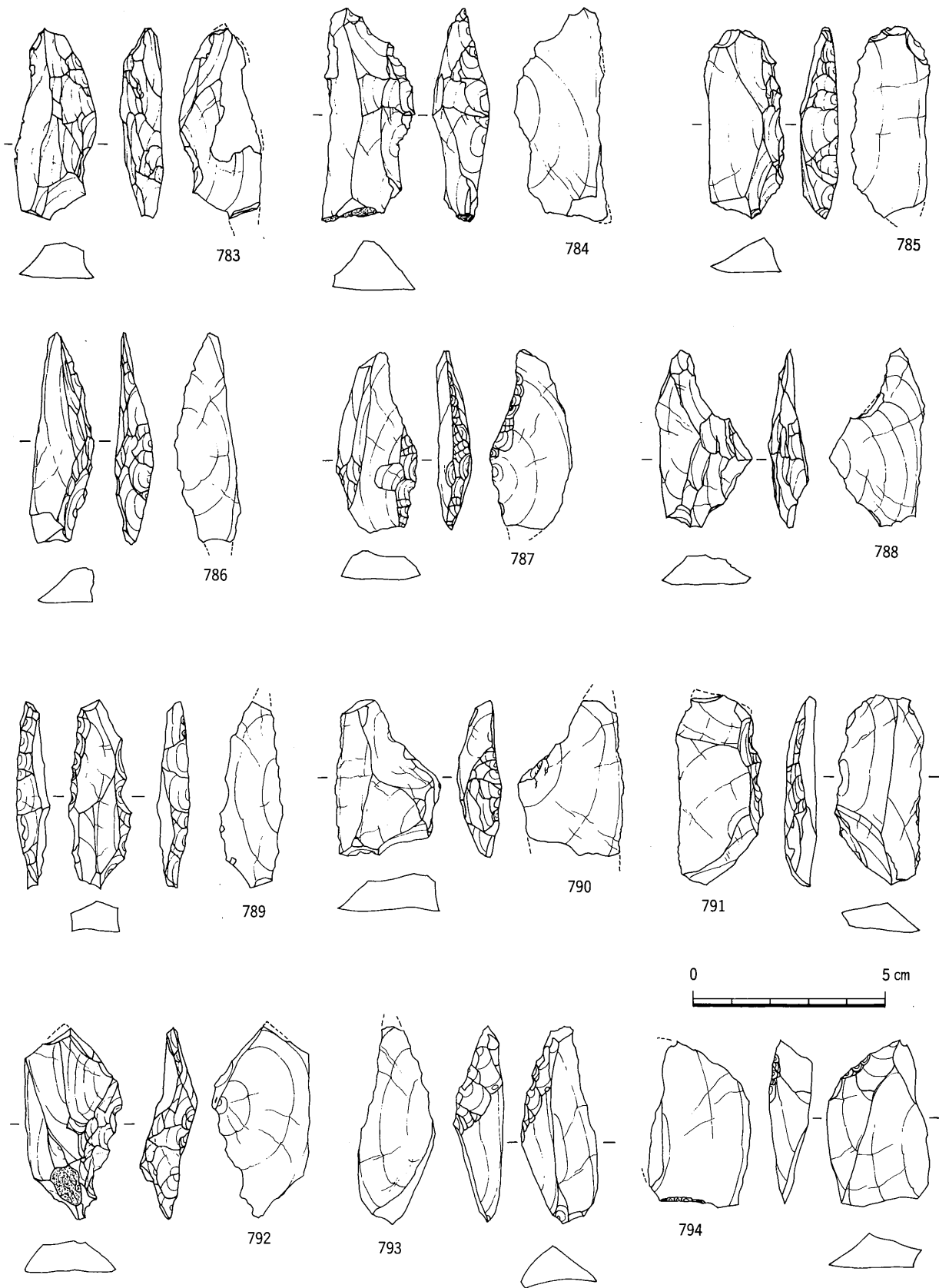
第 79 図 ナイフ形石器実測図 (47)



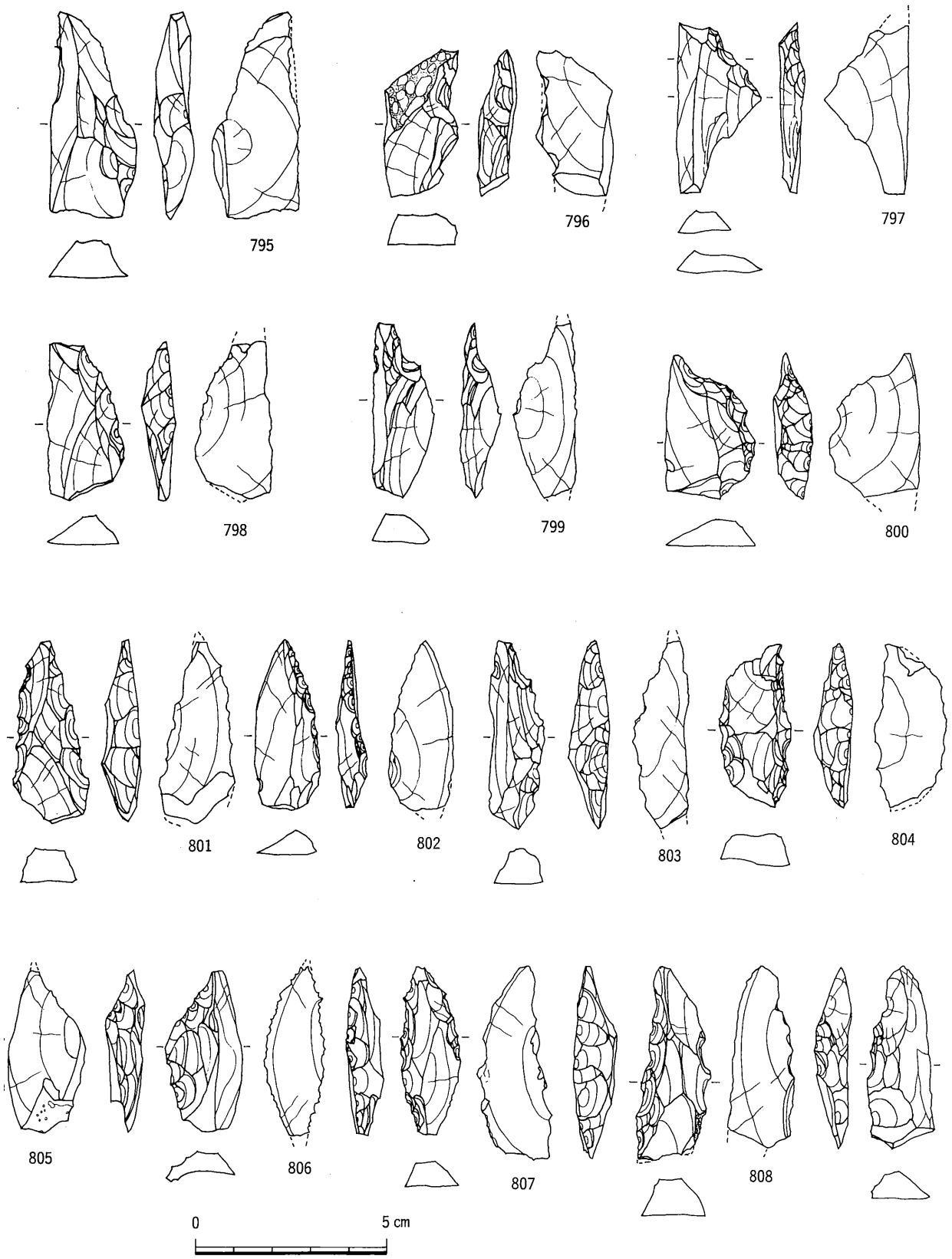
第 80 図 ナイフ形石器実測図 (48)



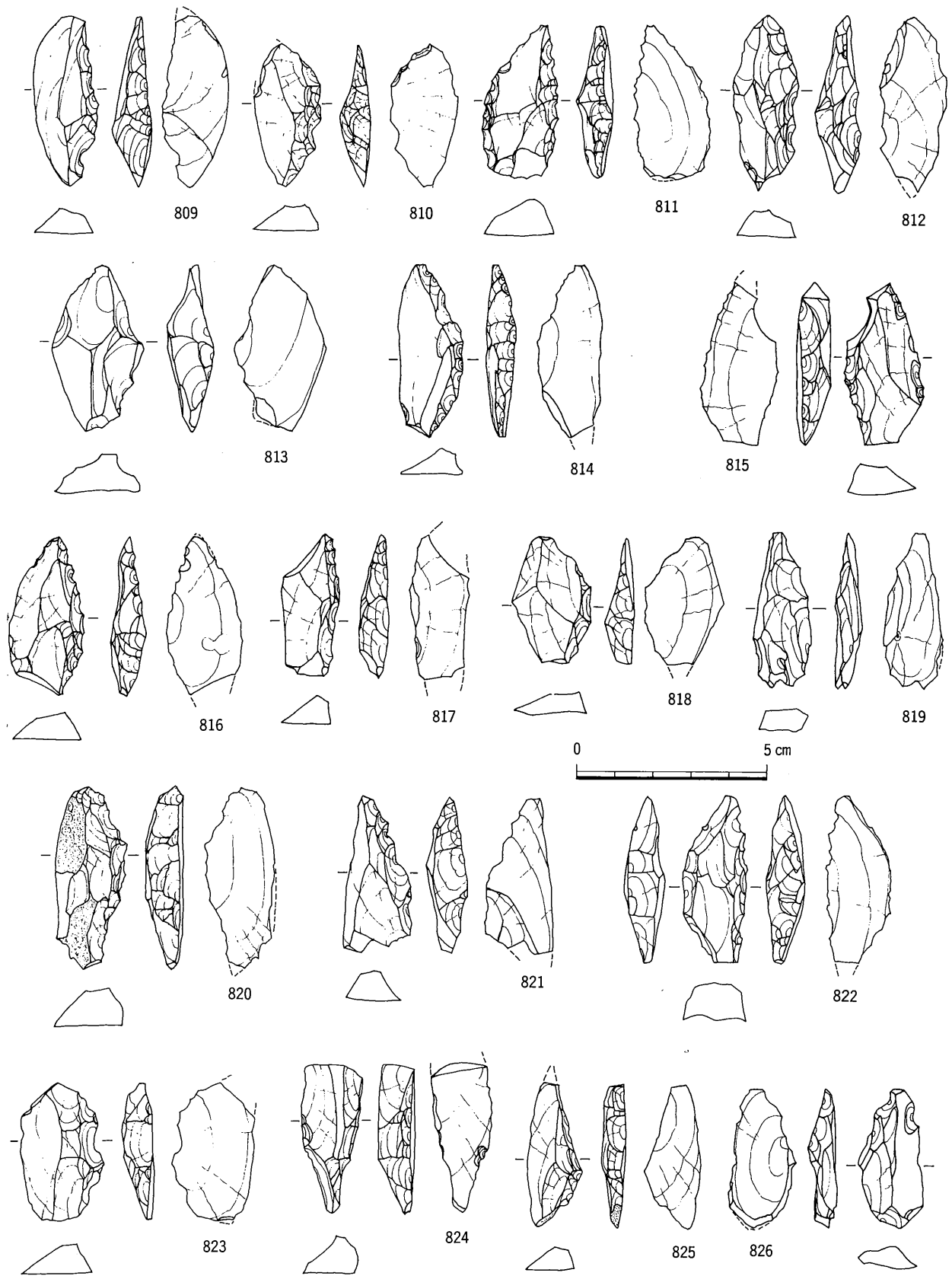
第 81 図 ナイフ形石器実測図 (49)



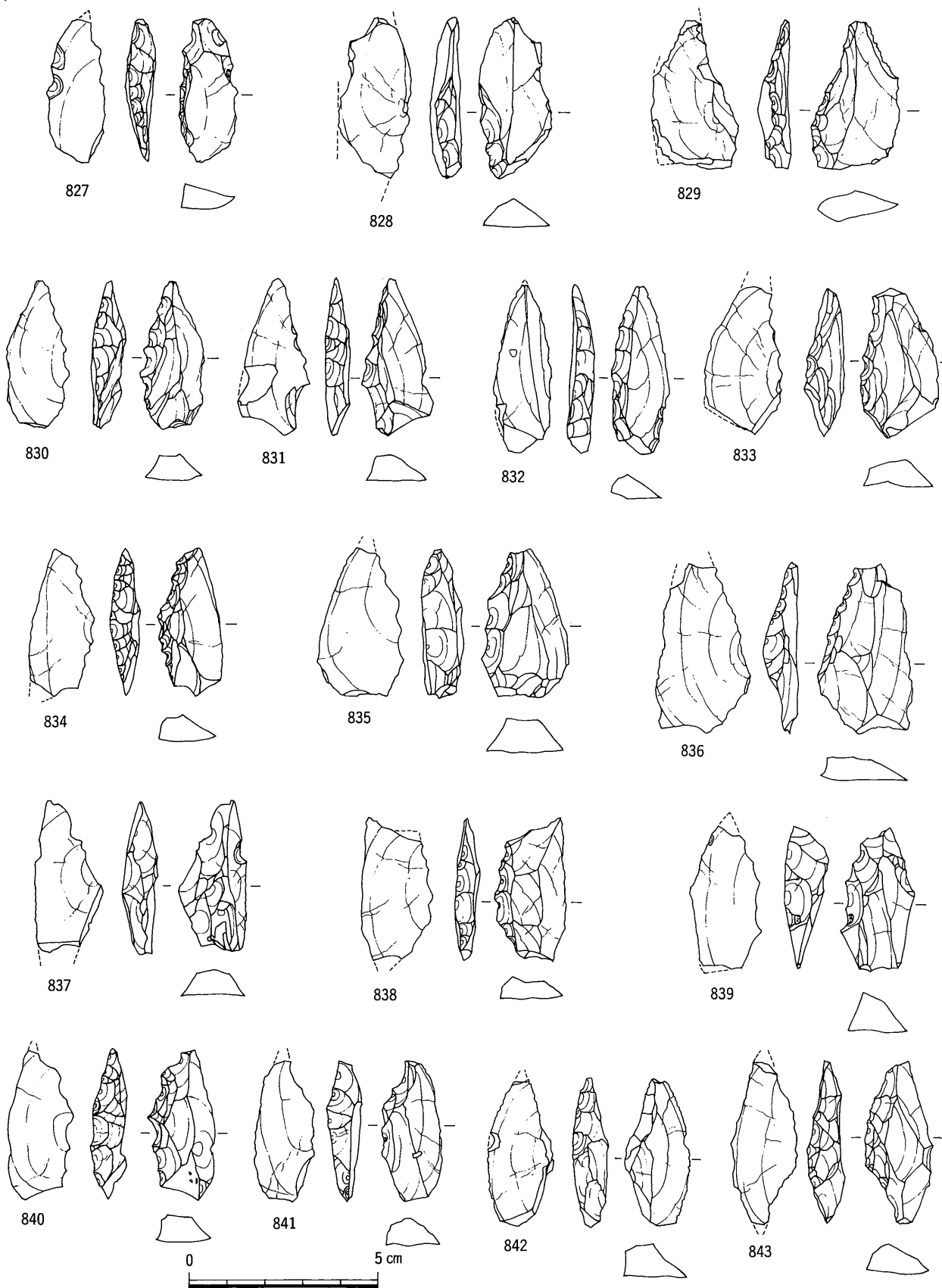
第 82 図 ナイフ形石器実測図 (50)



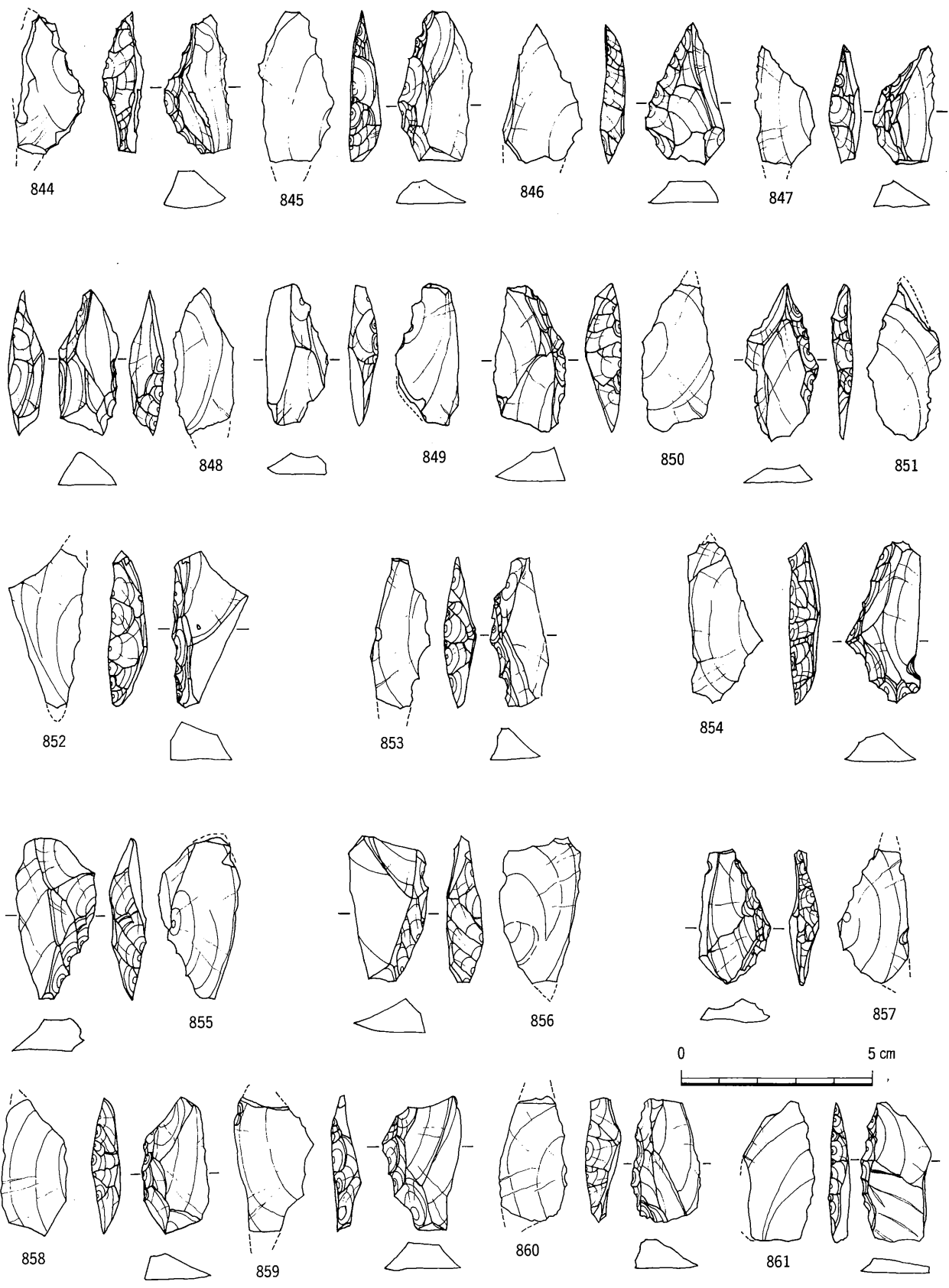
第 83 図 ナイフ形石器実測図 (51)



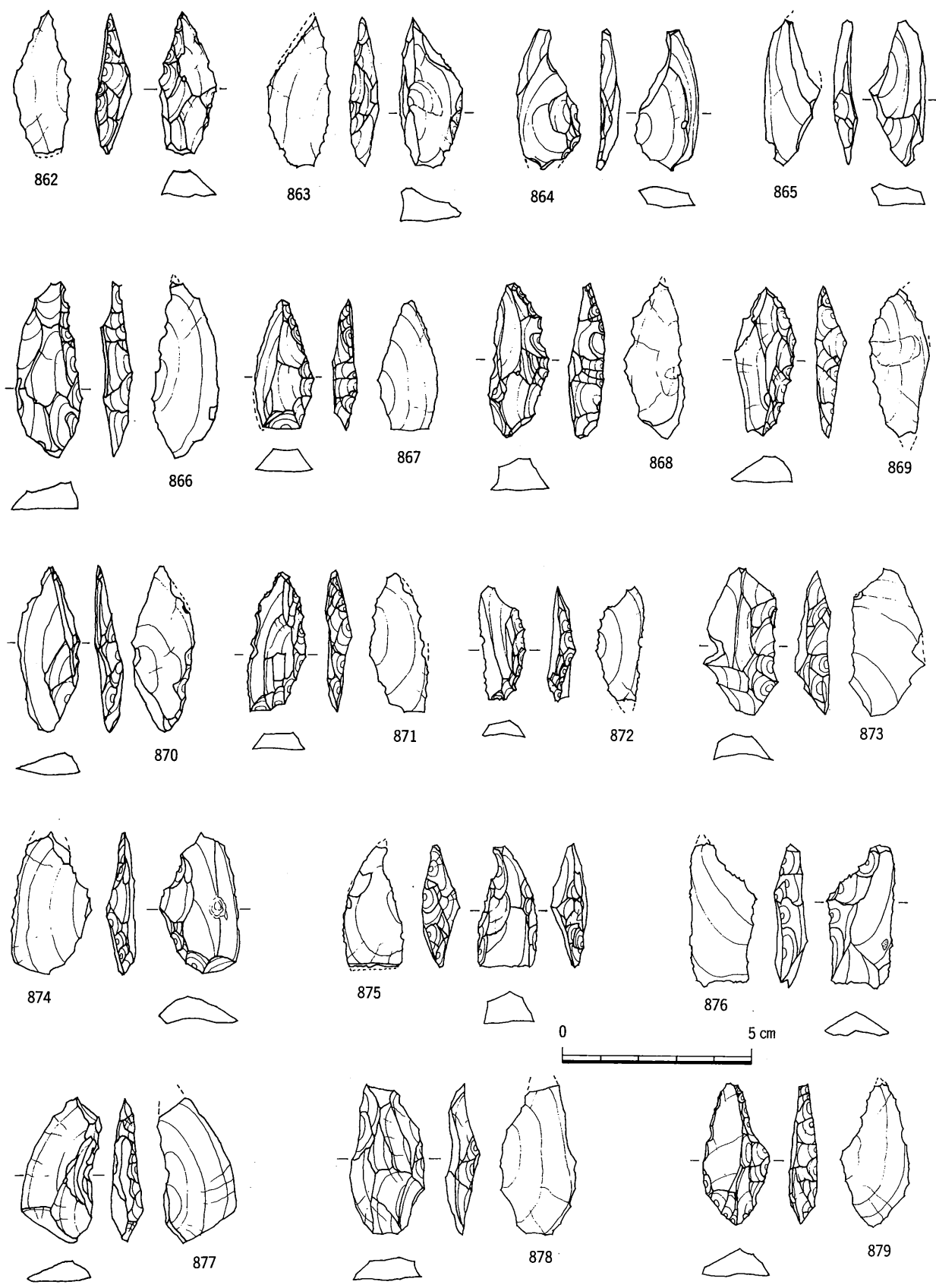
第 84 図 ナイフ形石器実測図 (52)



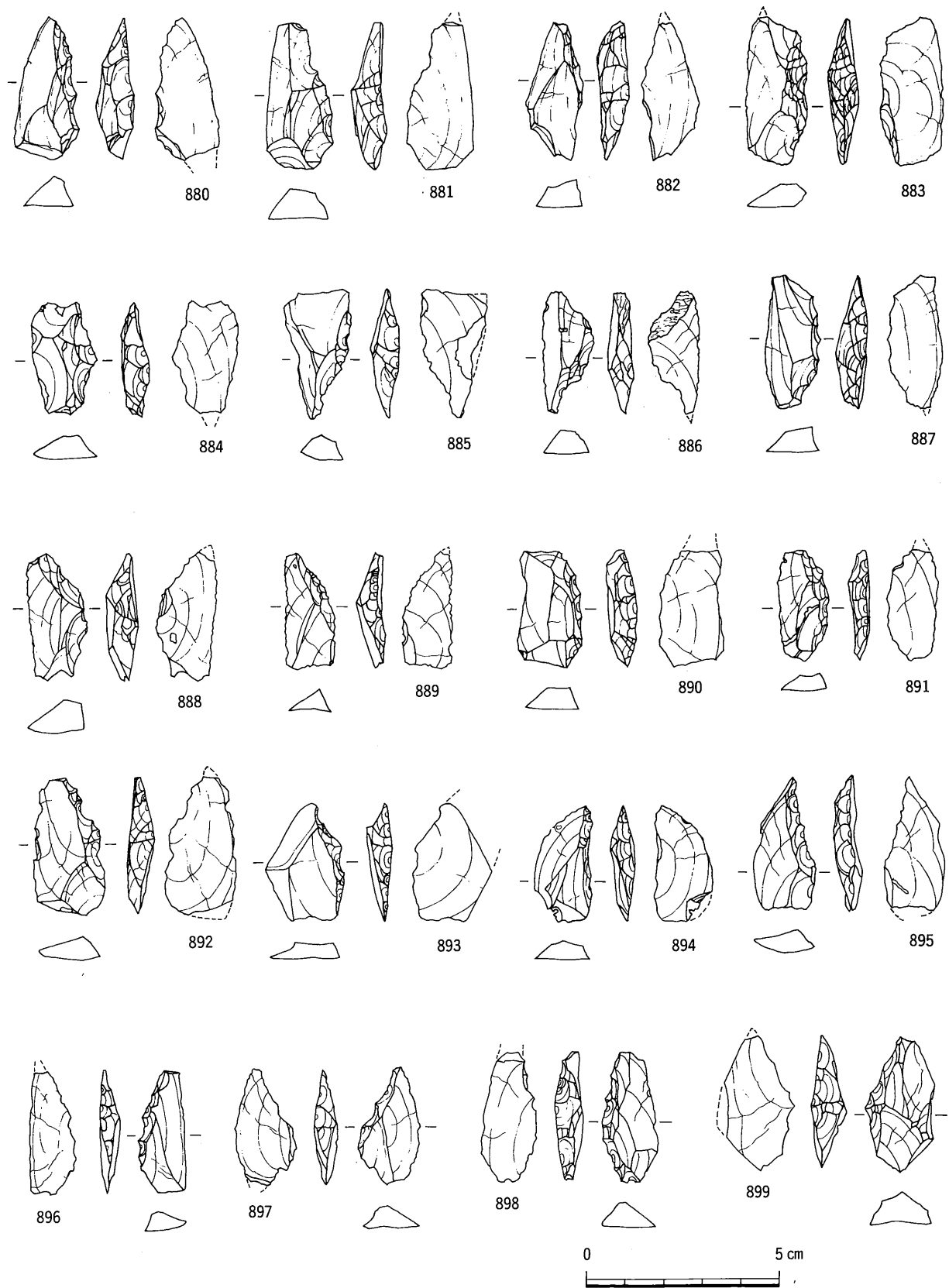
第 85 図 ナイフ形石器実測図 (53)



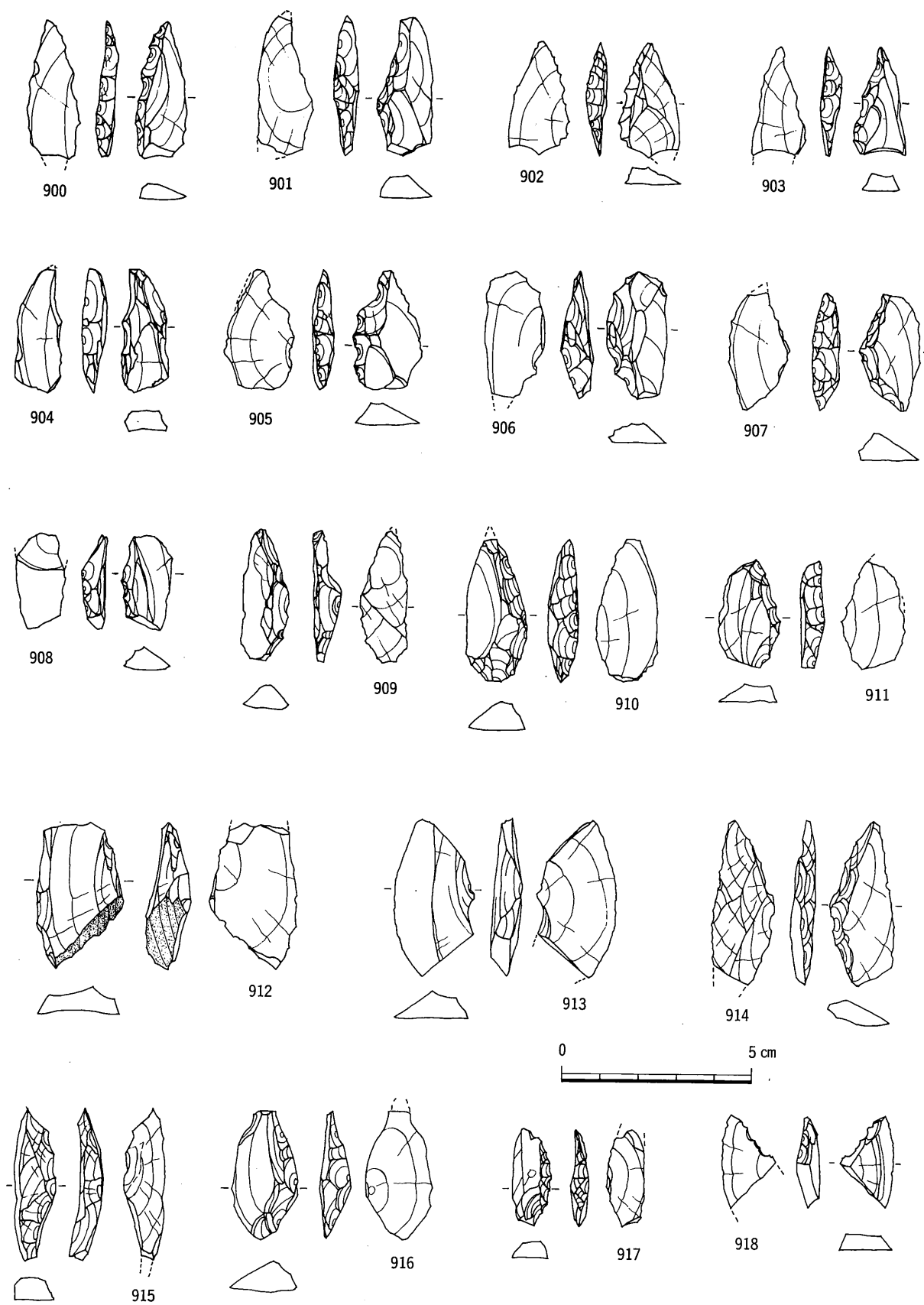
第 86 図 ナイフ形石器実測図 (54)



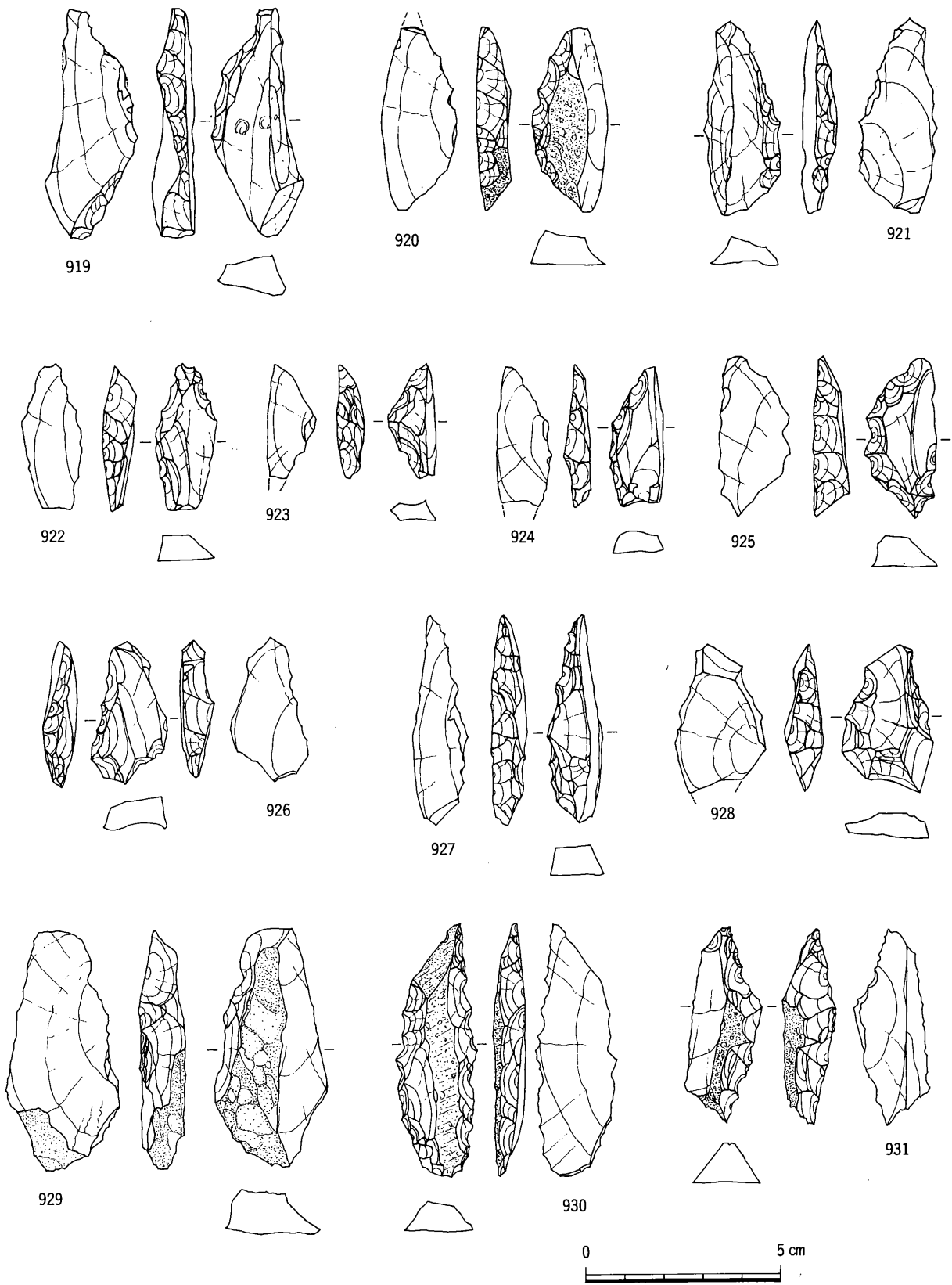
第 87 図 ナイフ形石器実測図 (55)



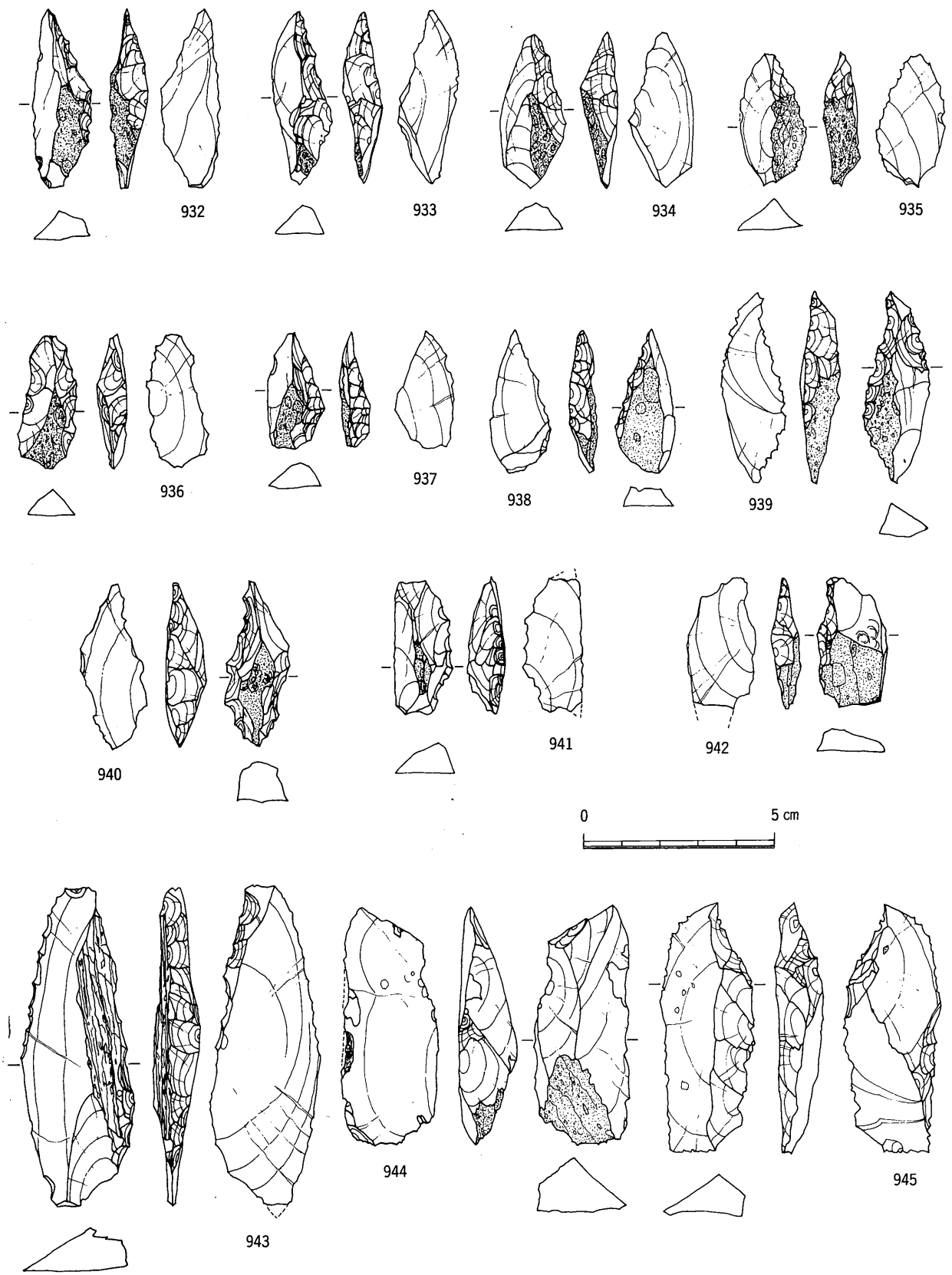
第 88 図 ナイフ形石器実測図 (56)



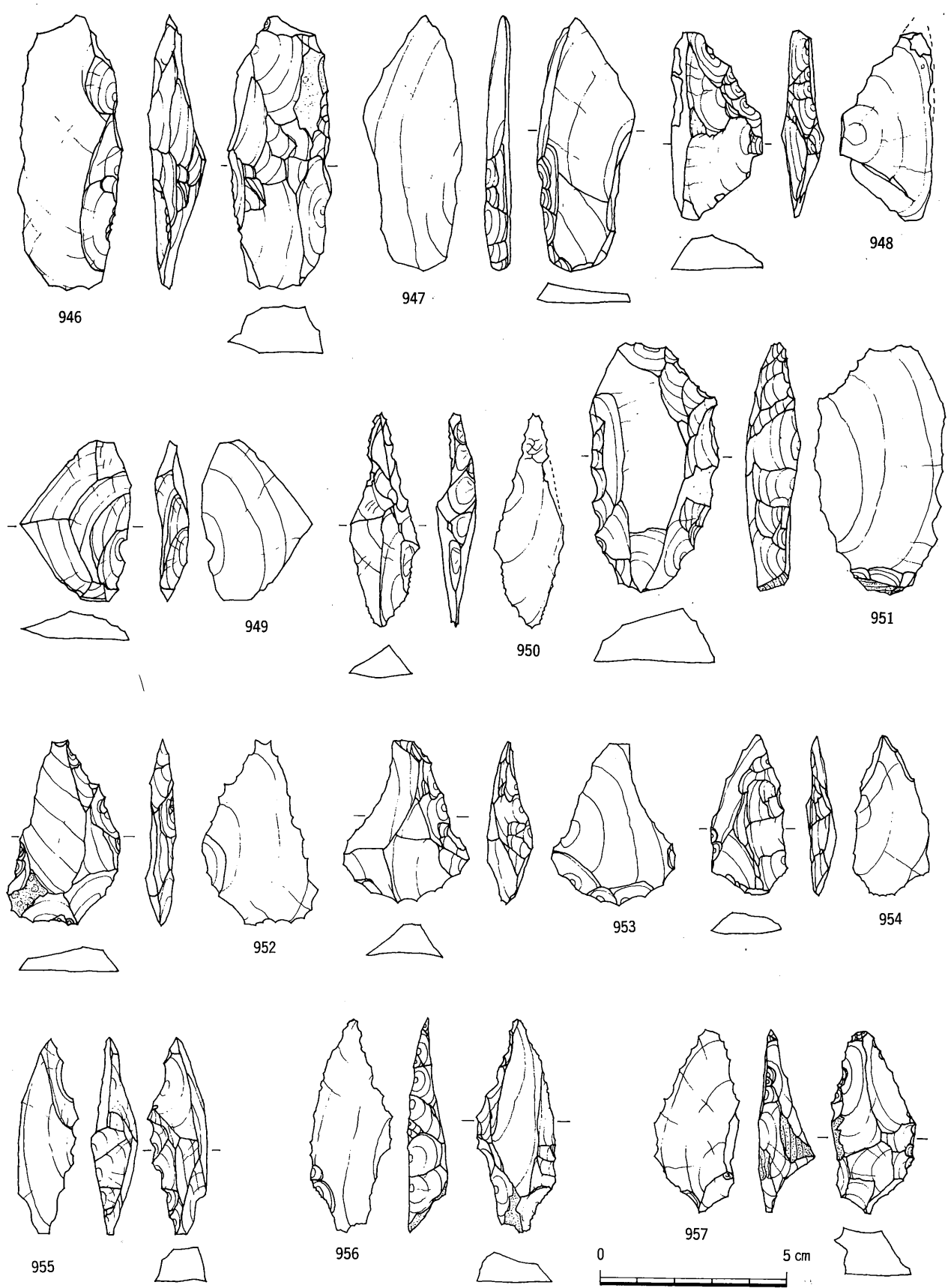
第 89 図 ナイフ形石器実測図 (57)



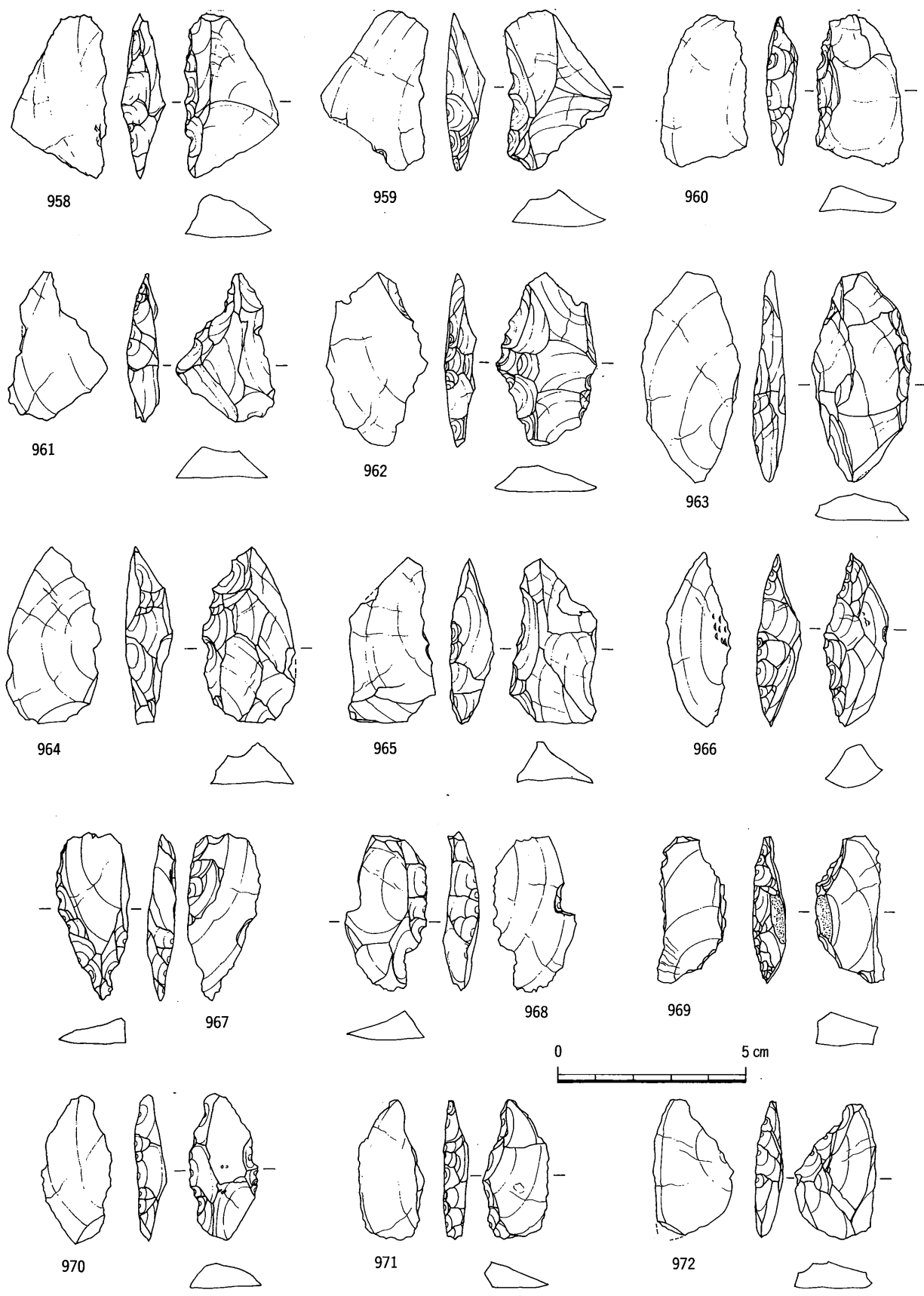
第 90 図 ナイフ形石器実測図 (58)



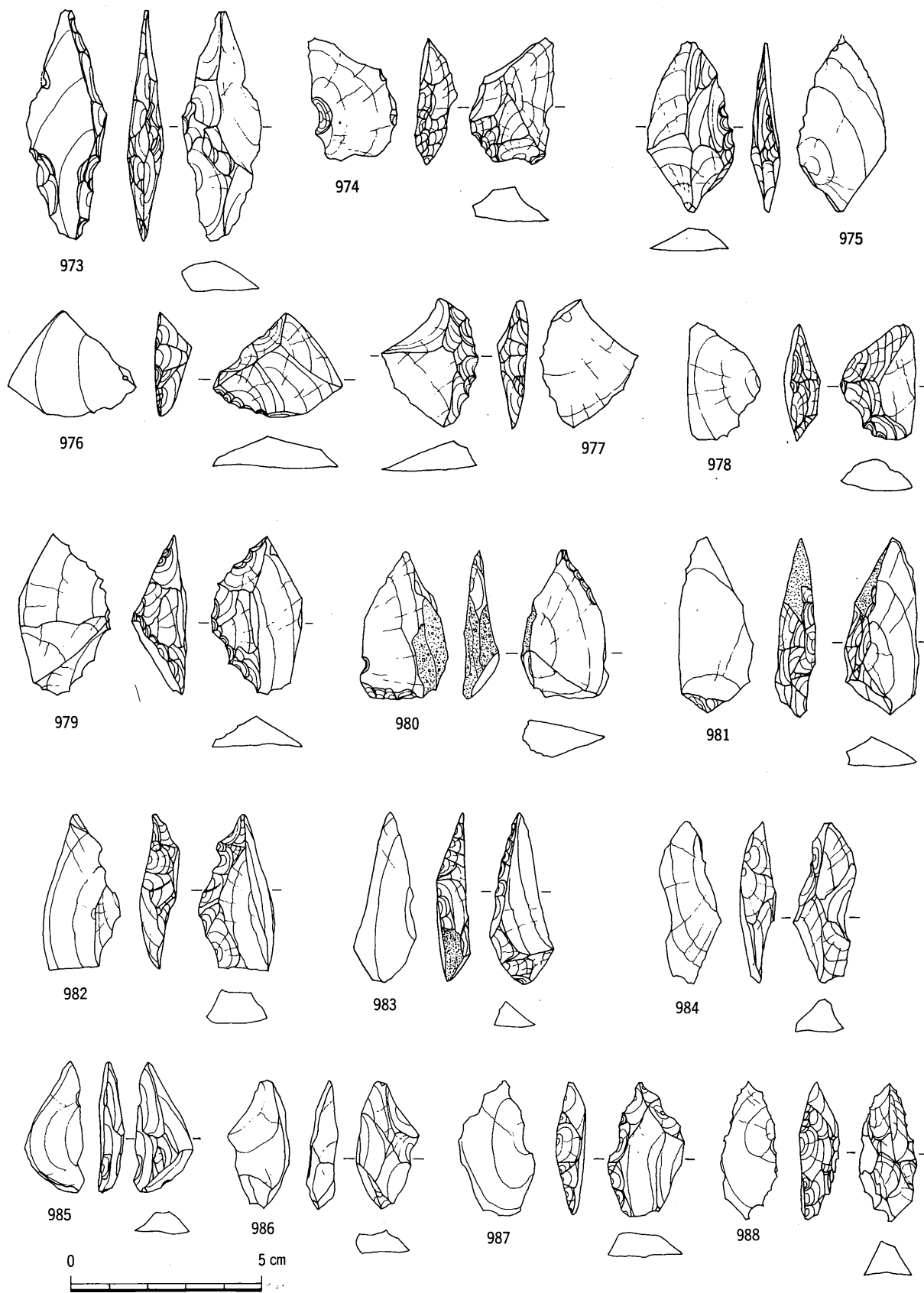
第 91 図 ナイフ形石器実測図 (59)



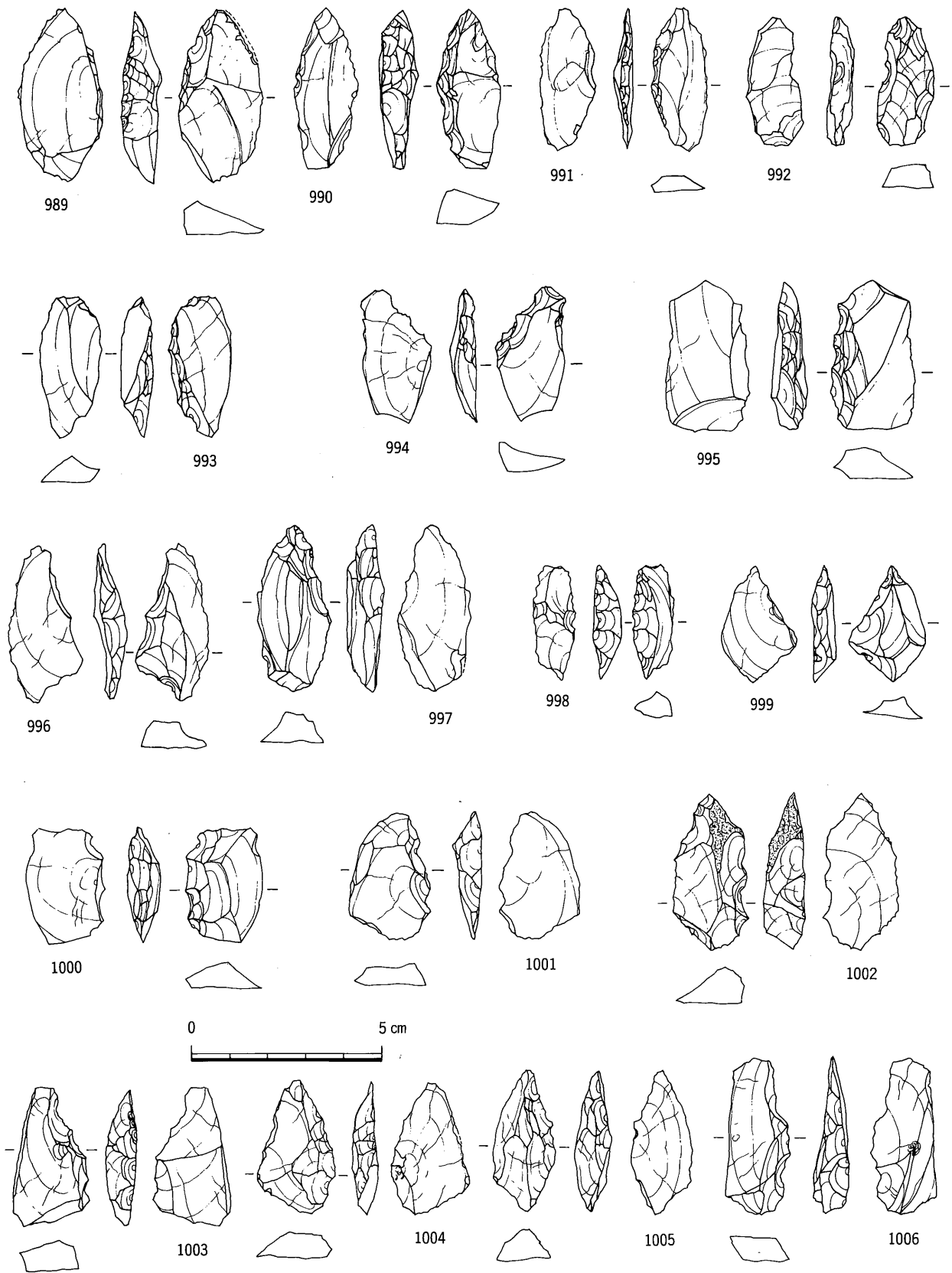
第 92 図 ナイフ形石器実測図 (60)



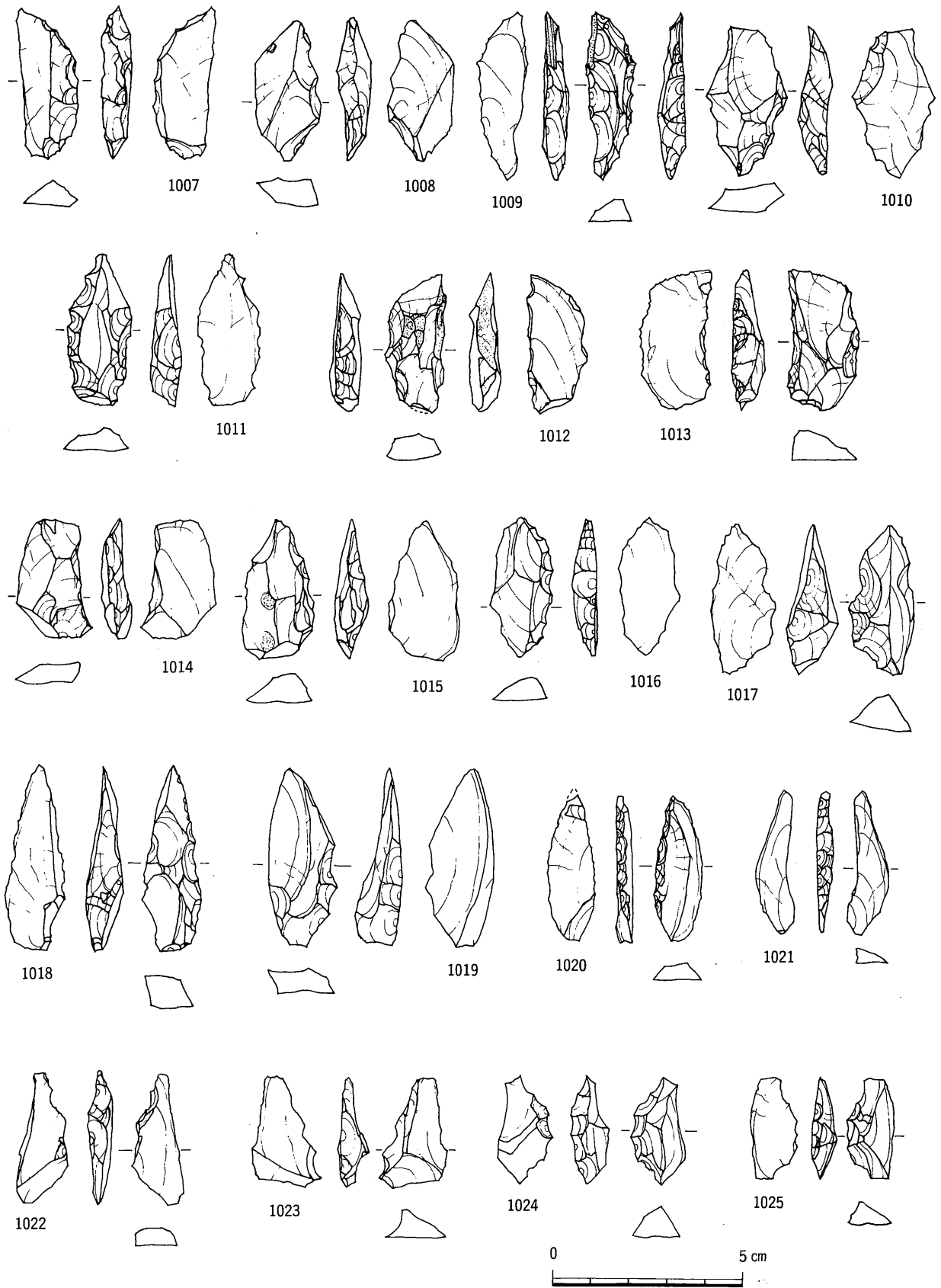
第 93 図 ナイフ形石器実測図 (61)



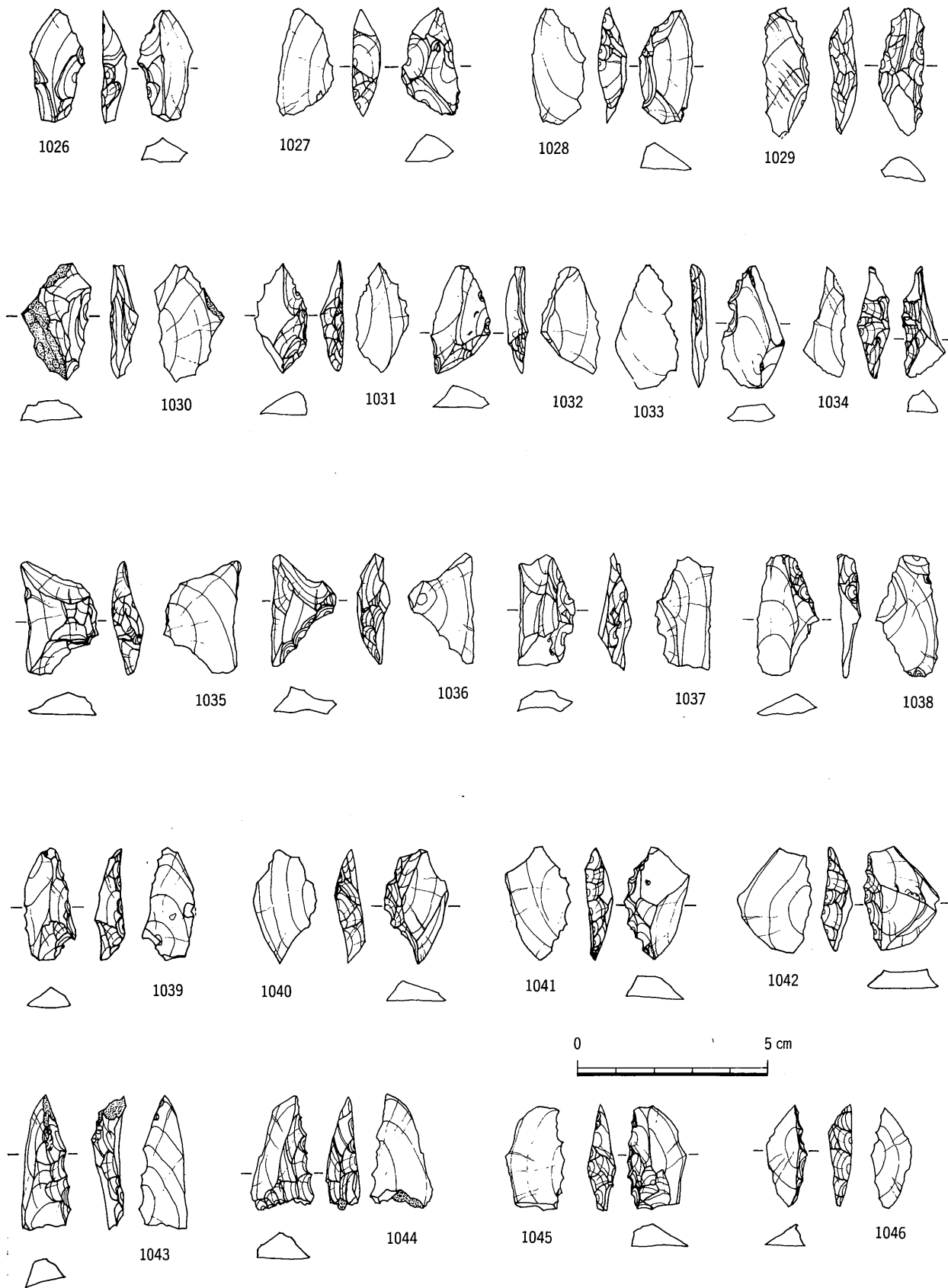
第 94 図 ナイフ形石器実測図 (62)



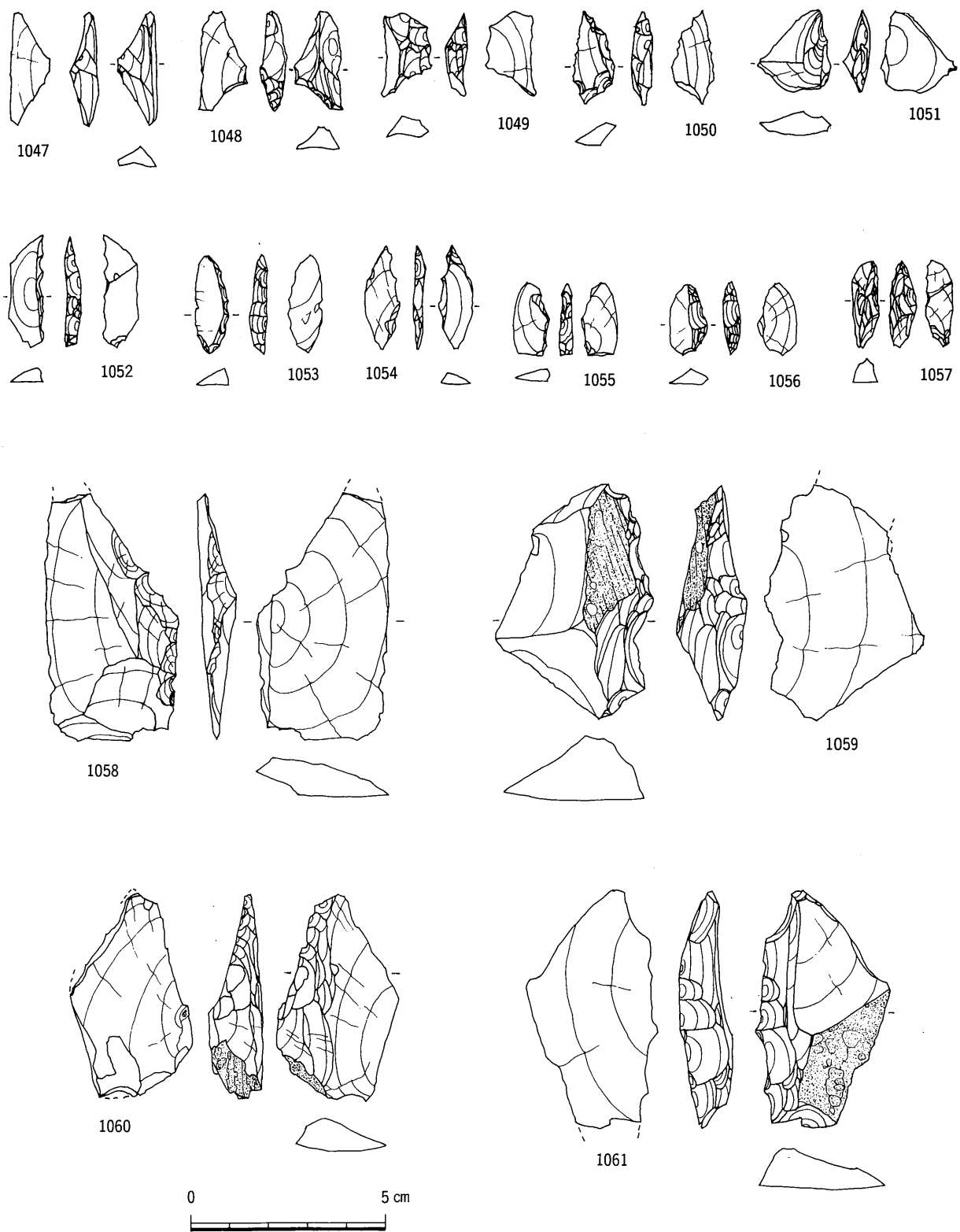
第 95 図 ナイフ形石器実測図 (63)



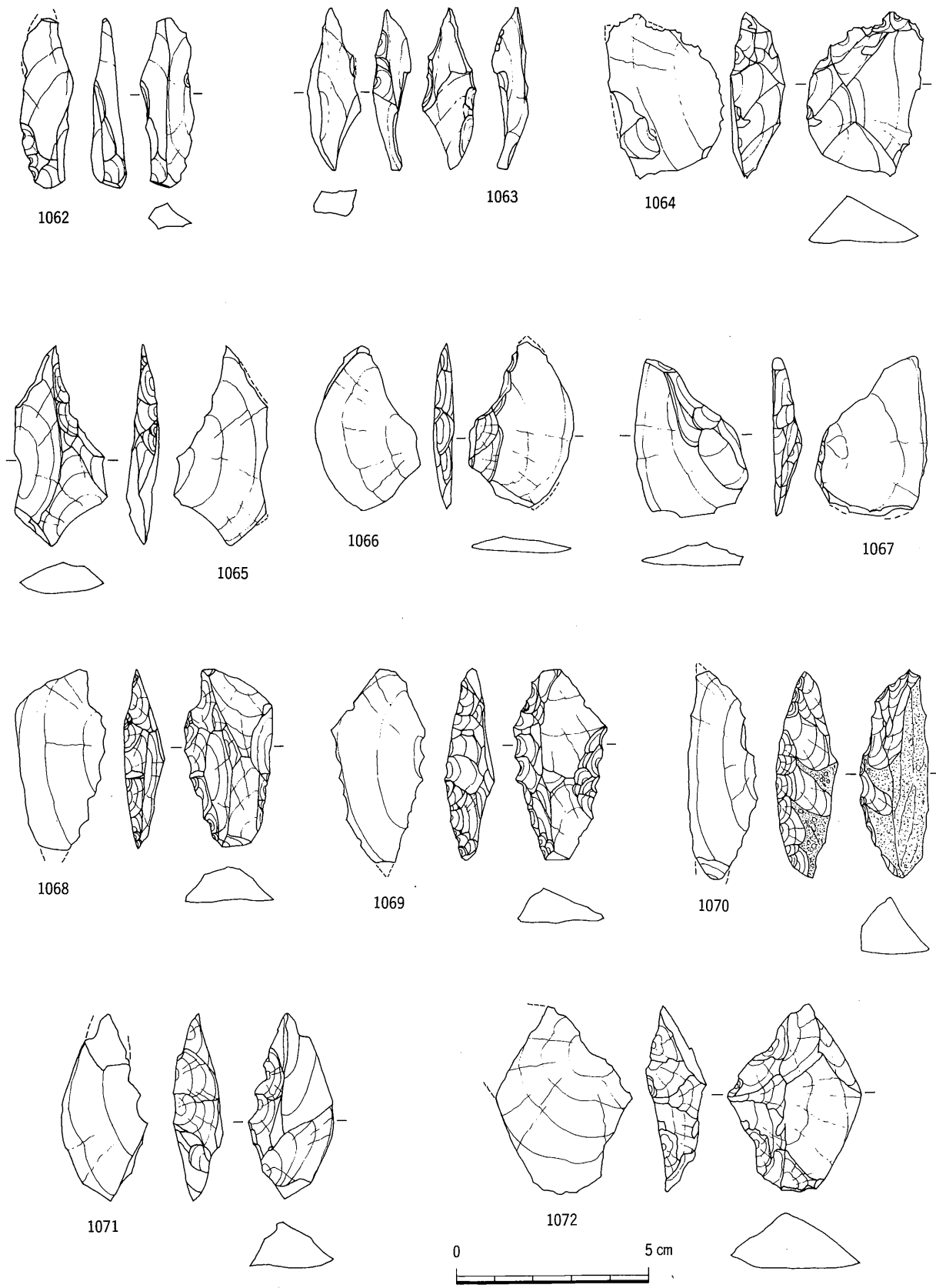
第 96 図 ナイフ形石器実測図 (64)



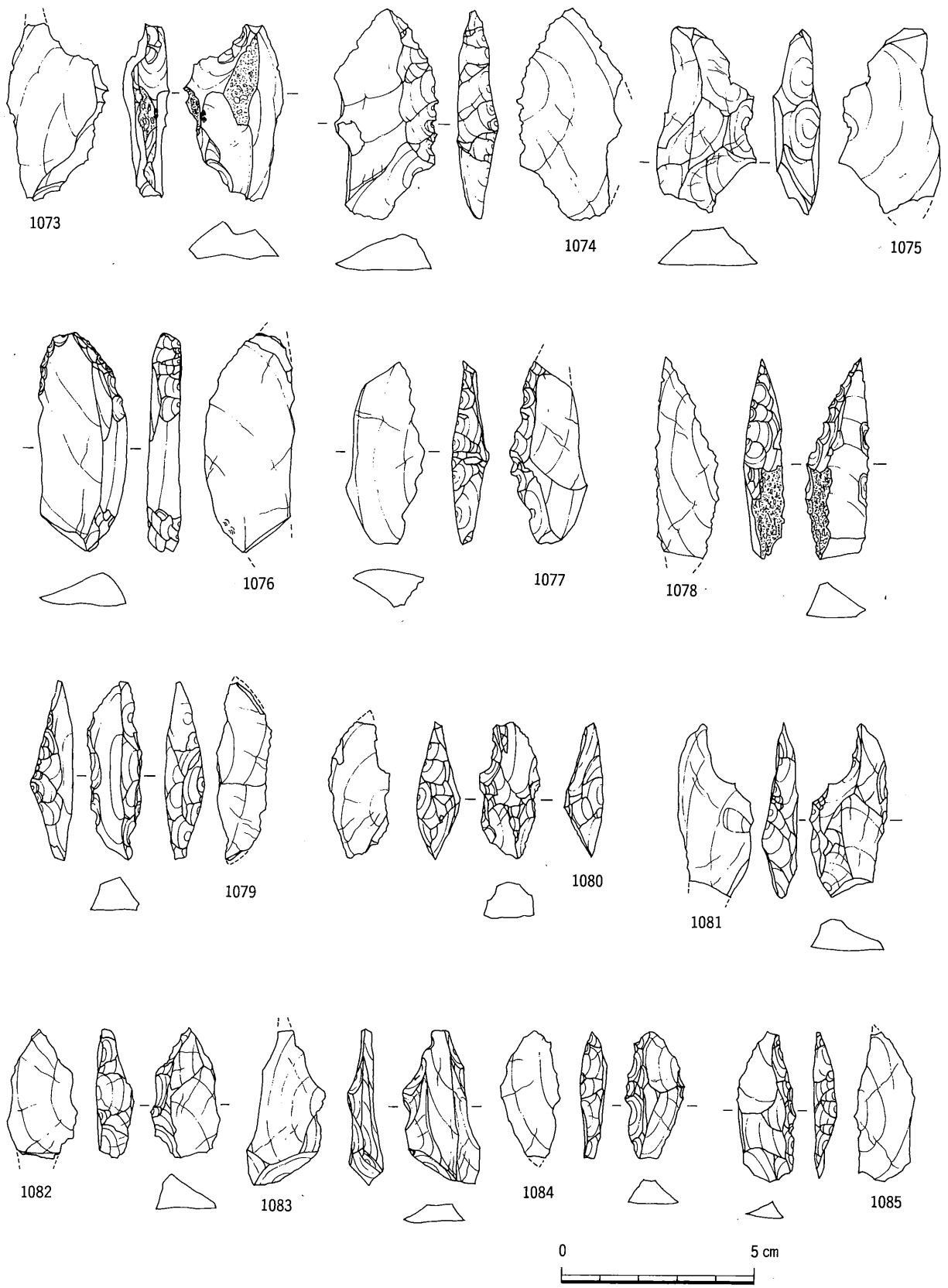
第 97 図 ナイフ形石器実測図 (65)



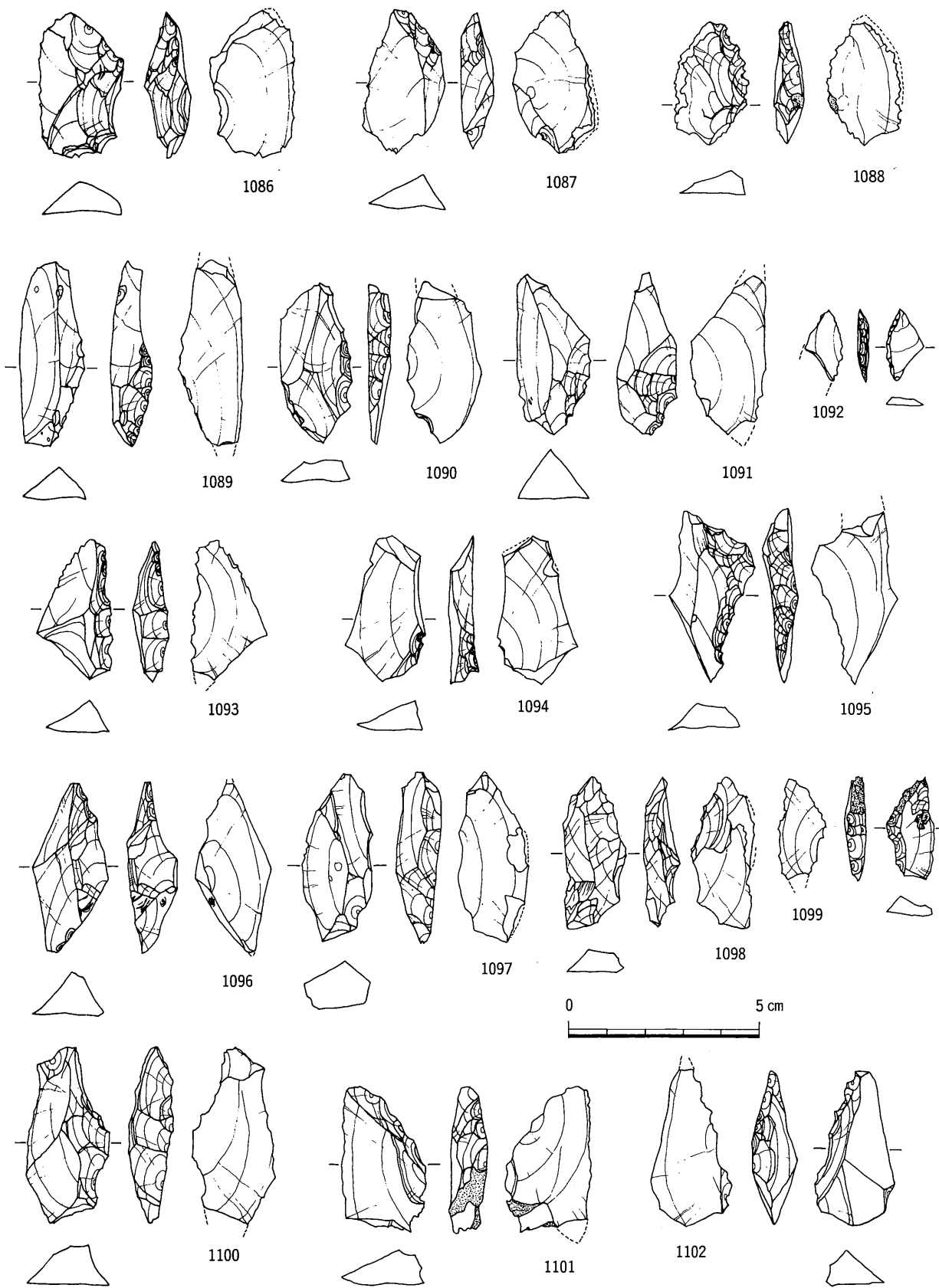
第 98 図 ナイフ形石器実測図 (66)



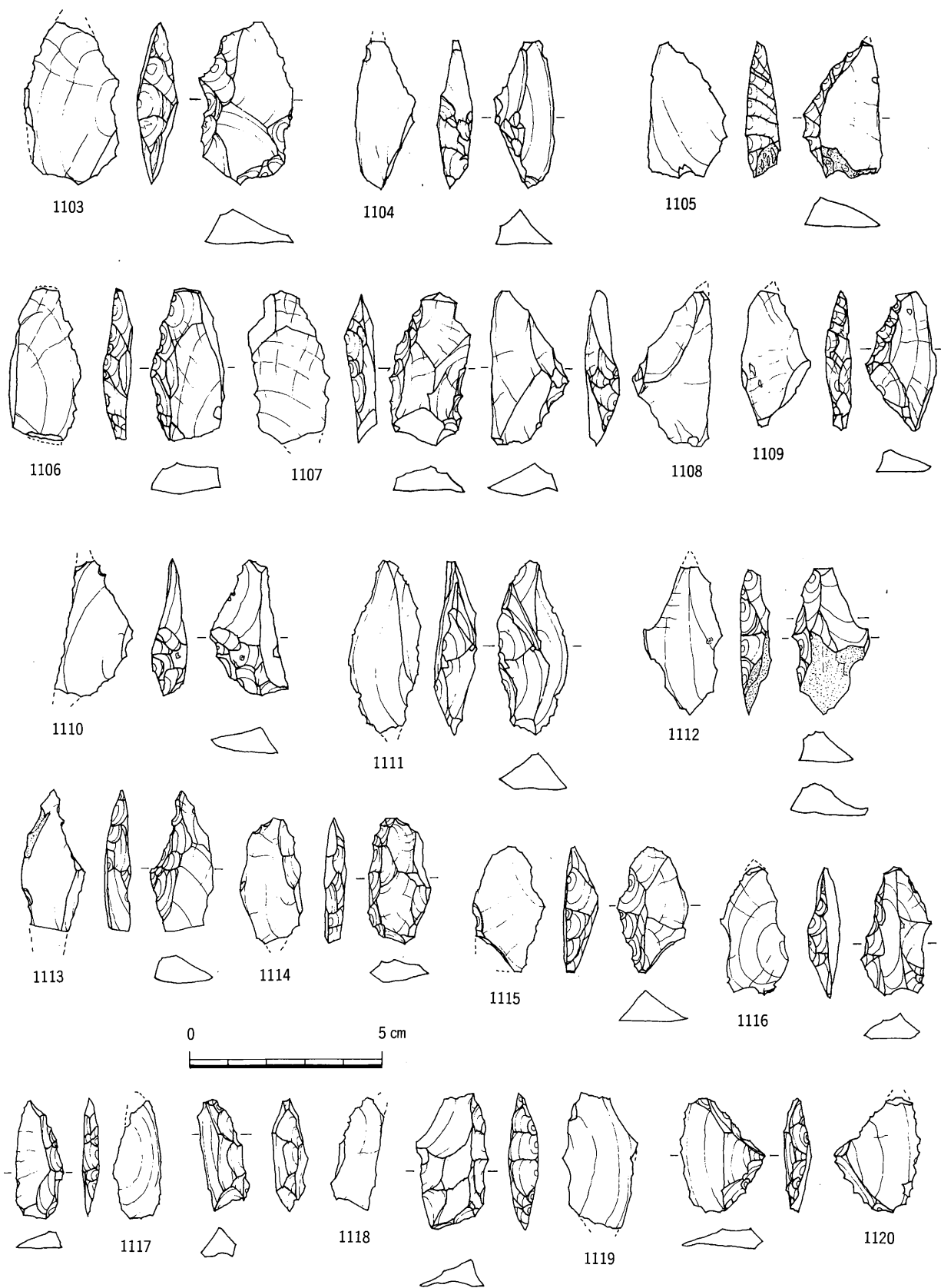
第 99 図 ナイフ形石器実測図 (67)



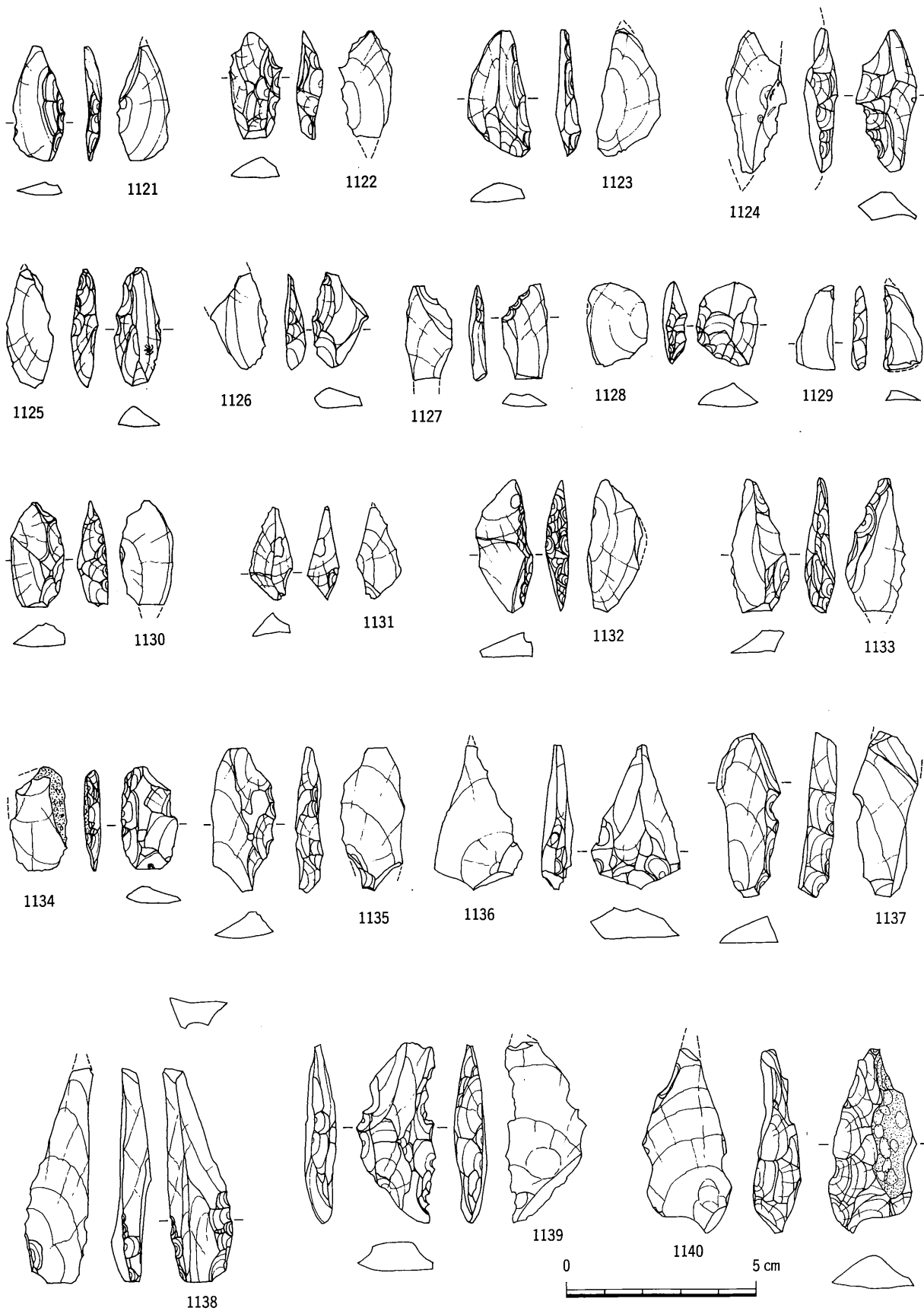
第 100 図 ナイフ形石器実測図 (68)



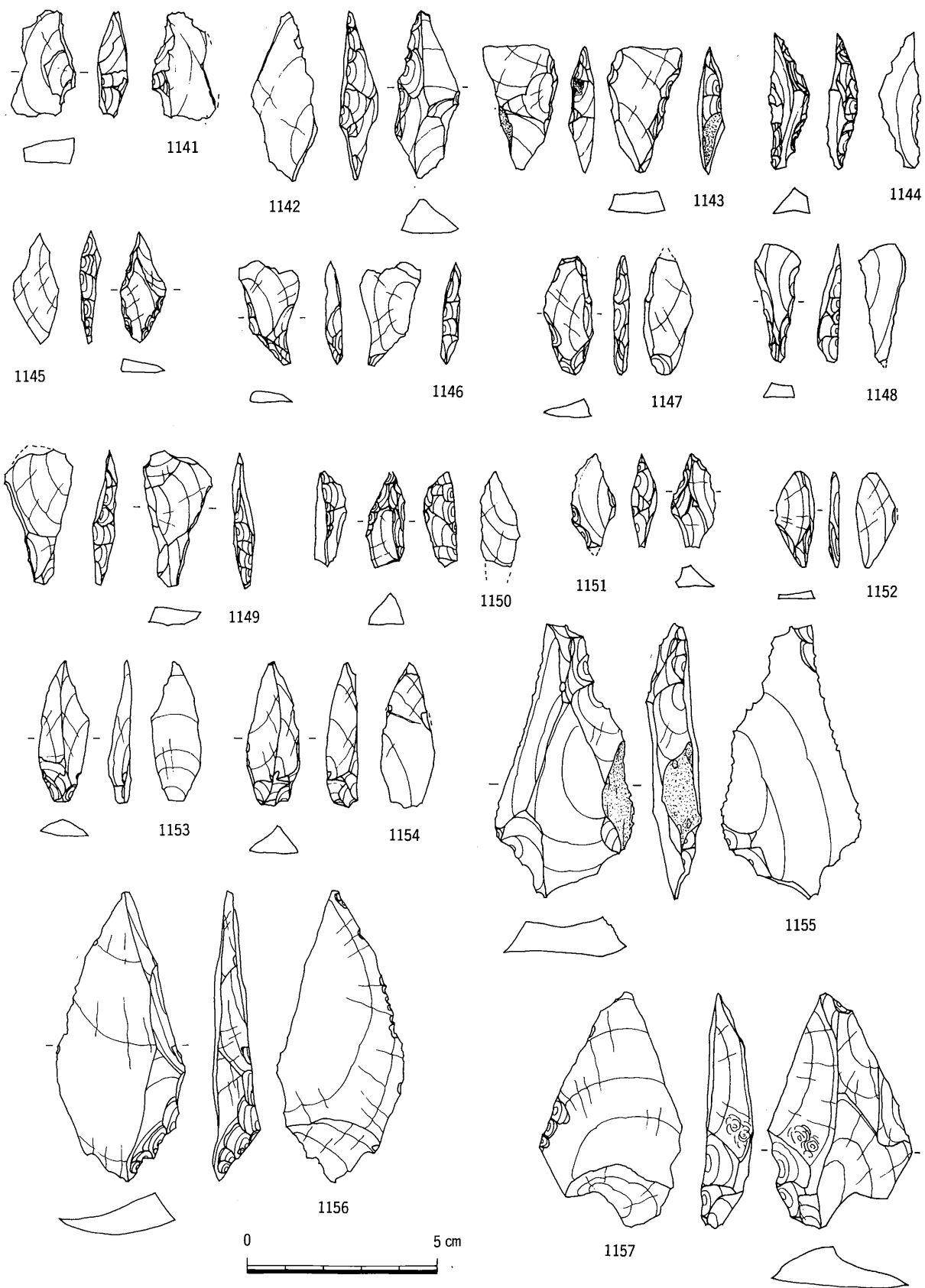
第 101 図 ナイフ形石器実測図 (69)



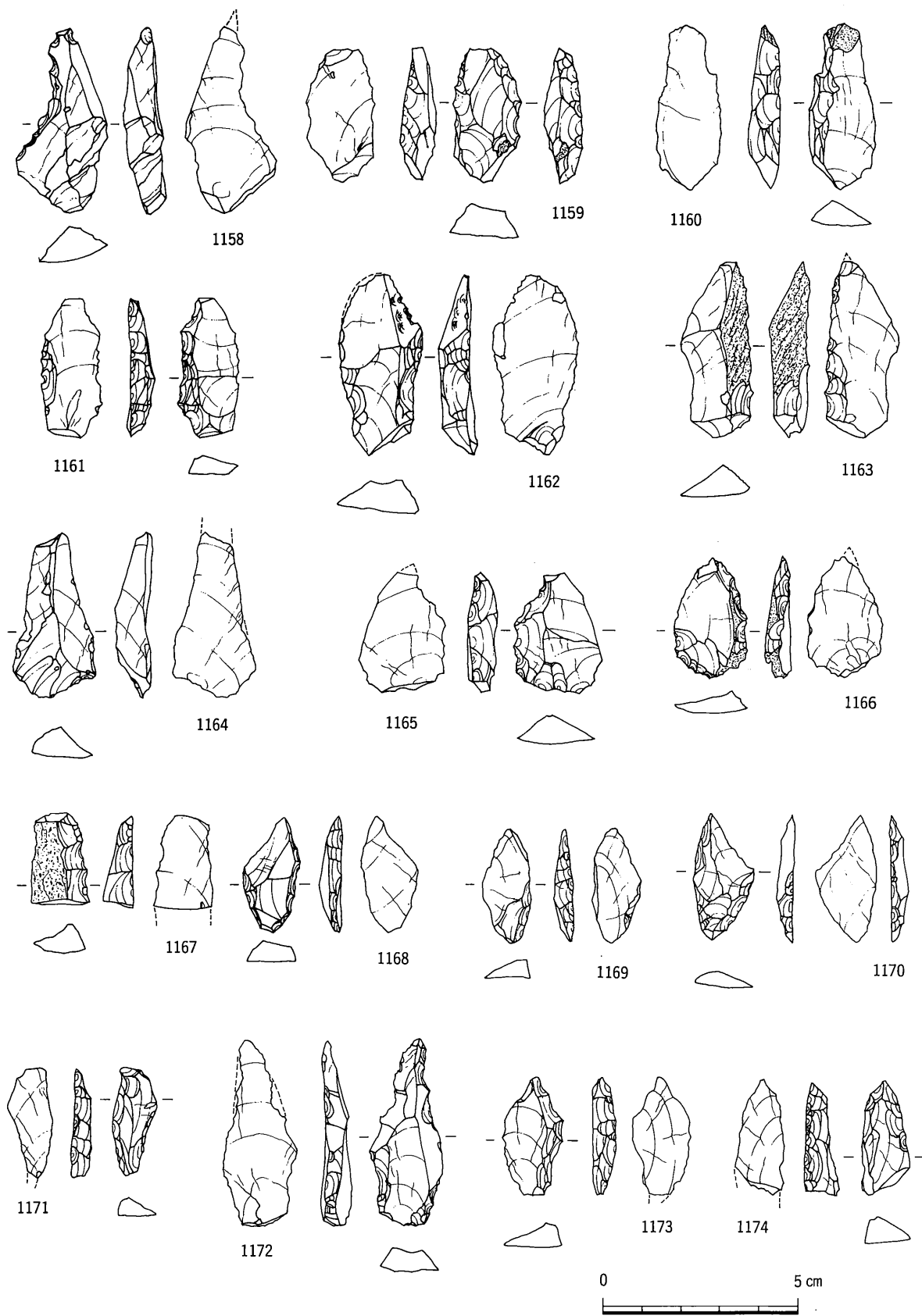
第 102 図 ナイフ形石器実測図 (70)



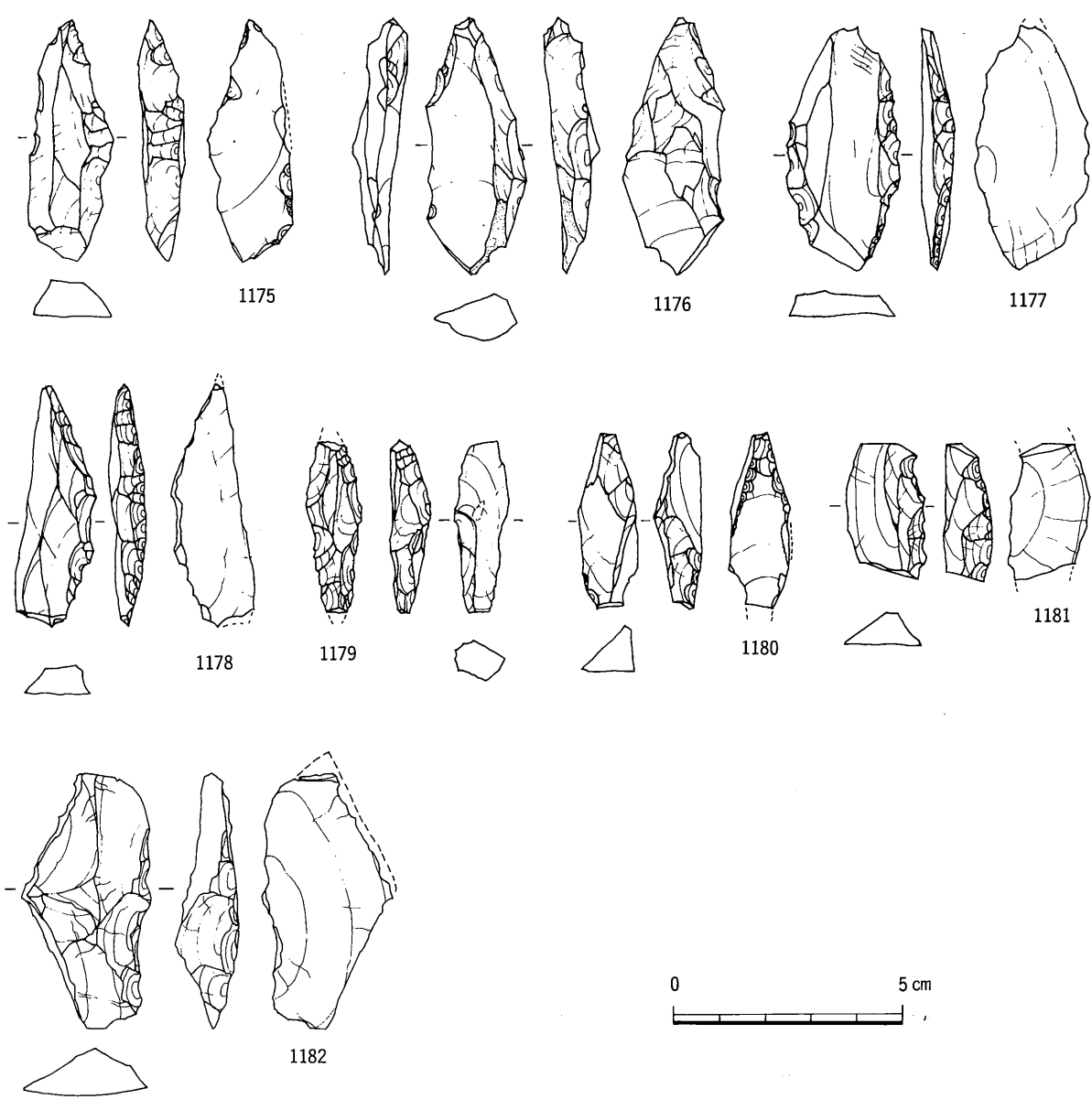
第 103 図 ナイフ形石器実測図 (71)



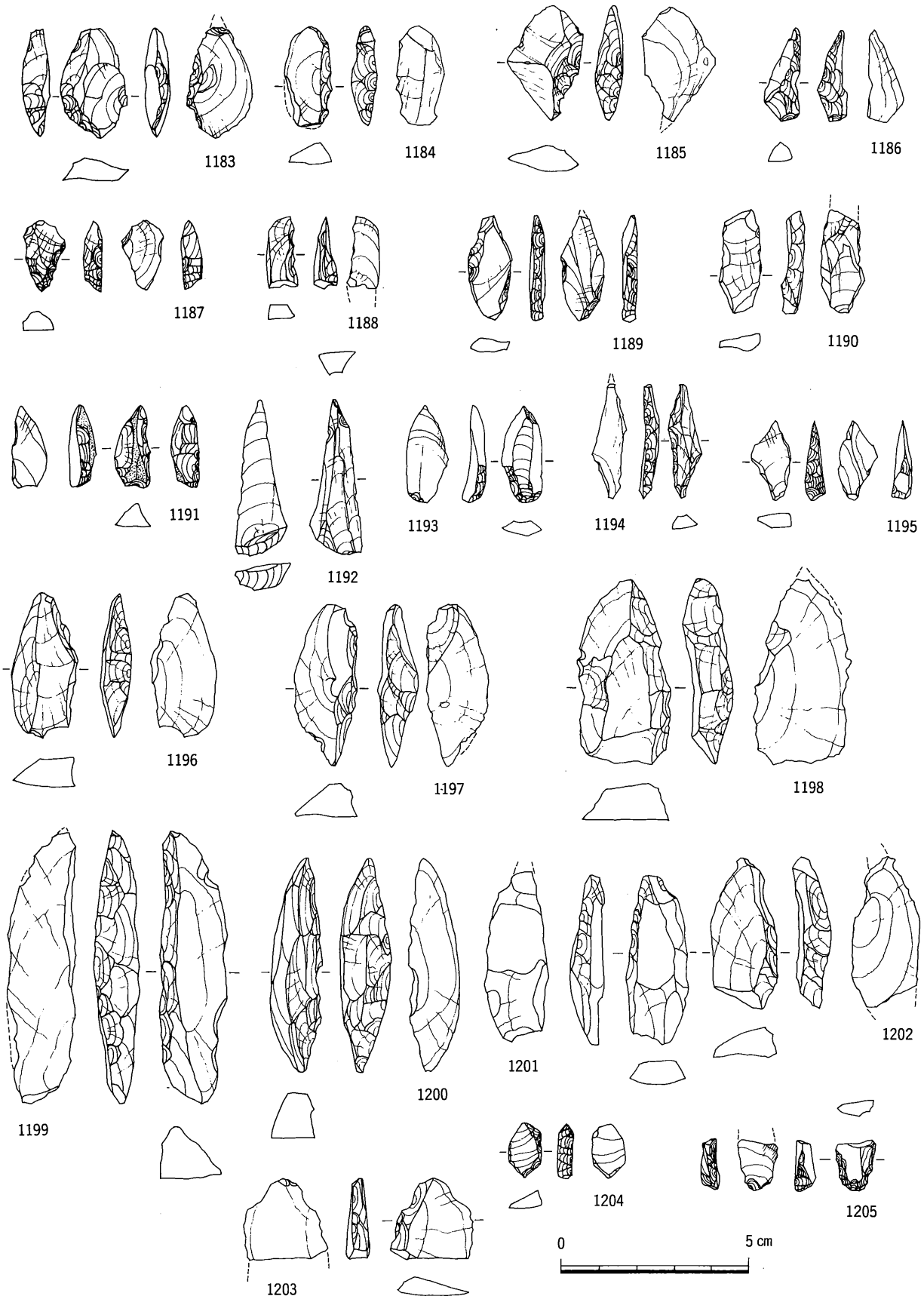
第 104 図 ナイフ形石器実測図 (7)



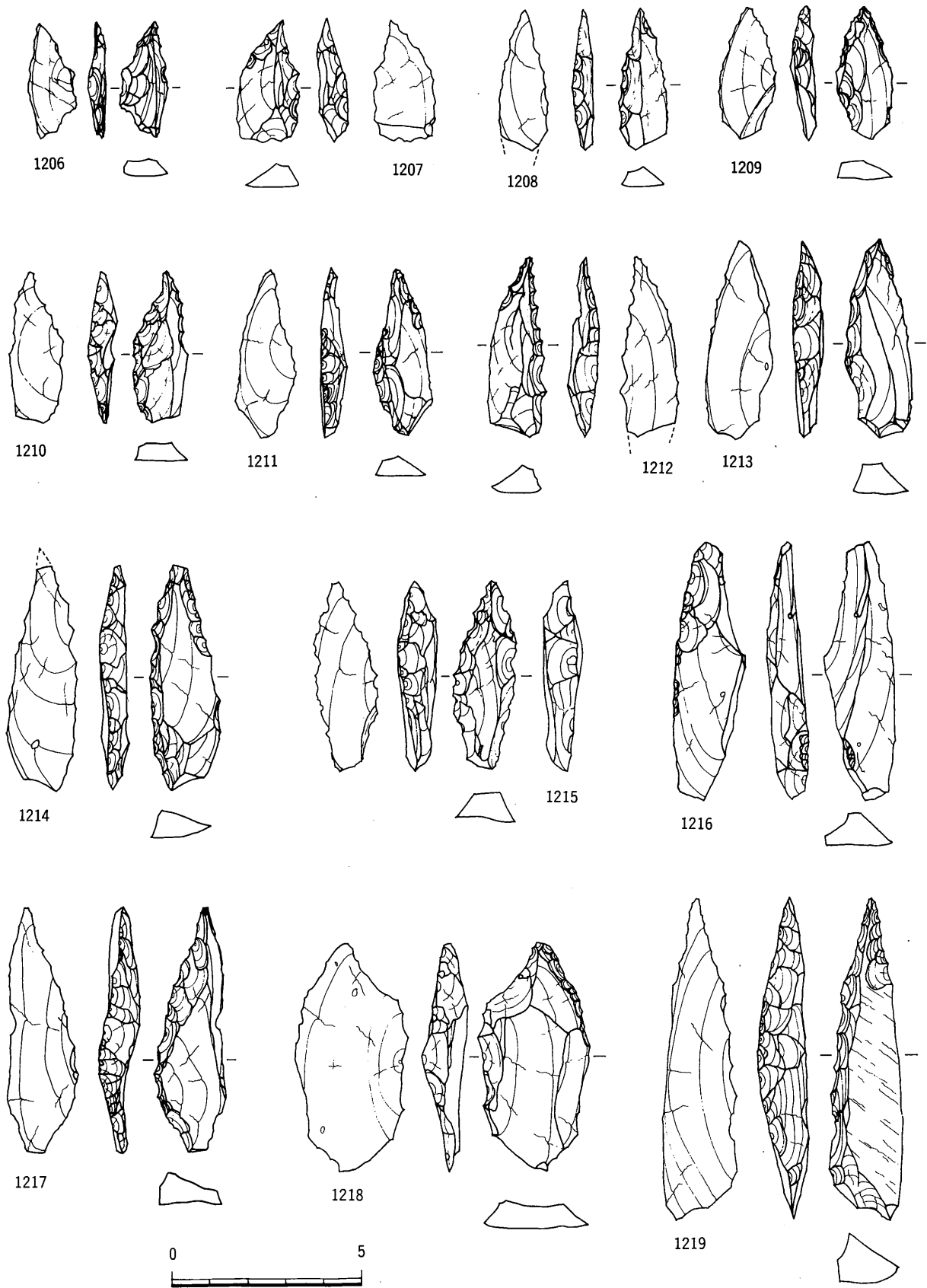
第 105 図 ナイフ形石器実測図 (73)



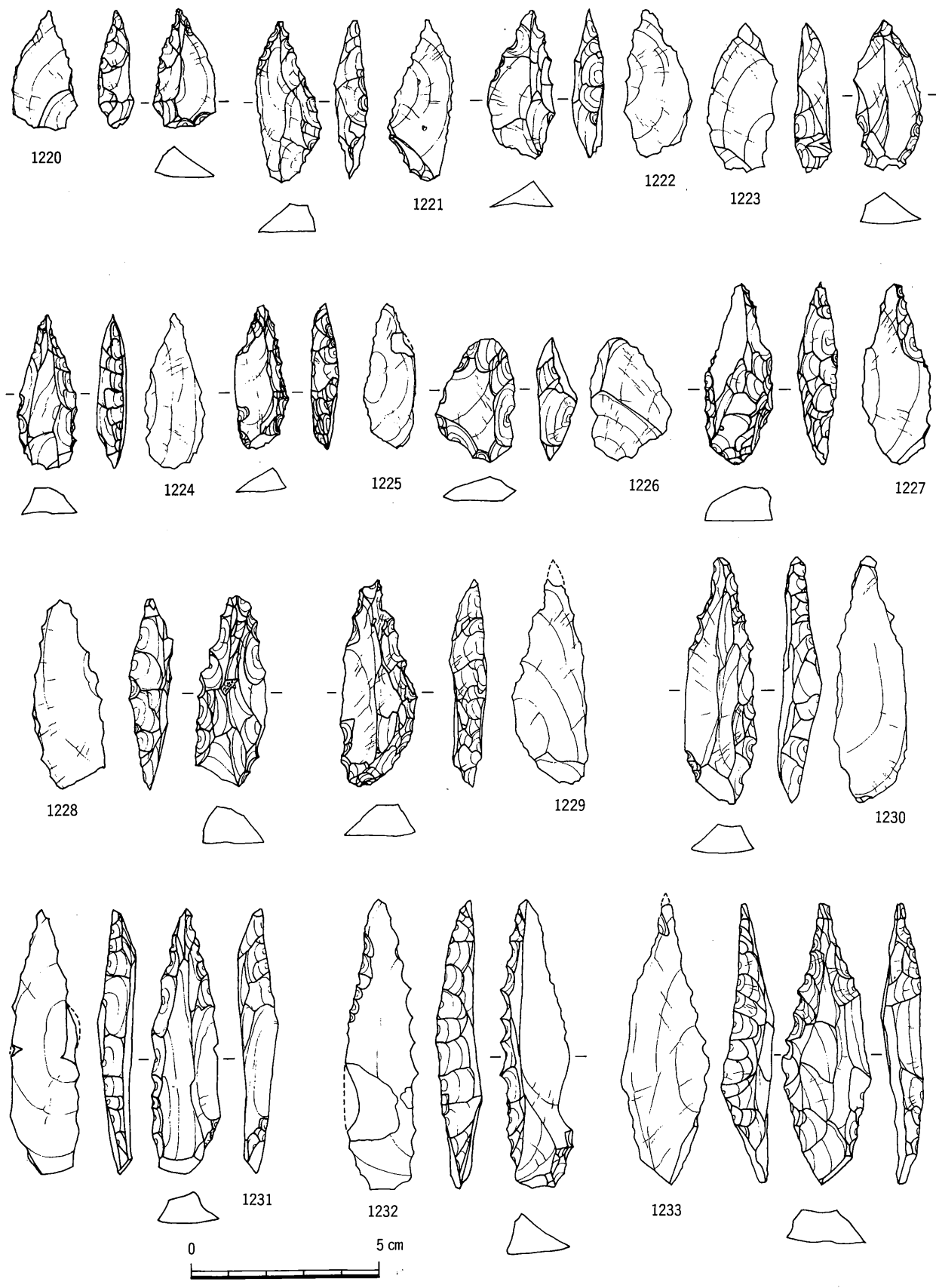
第 106 図 ナイフ形石器実測図 (74)



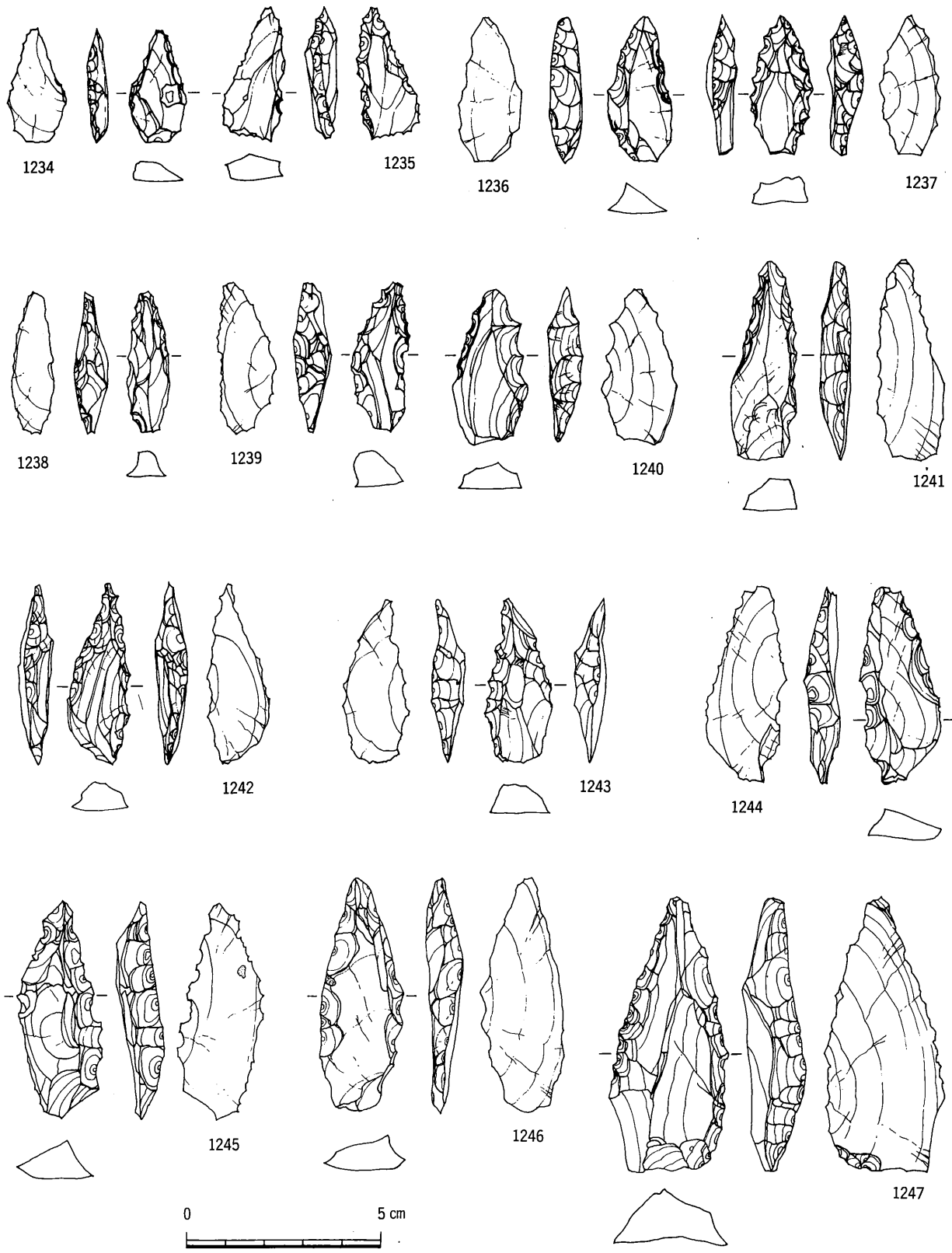
第 107 図 ナイフ形石器実測図 (75)



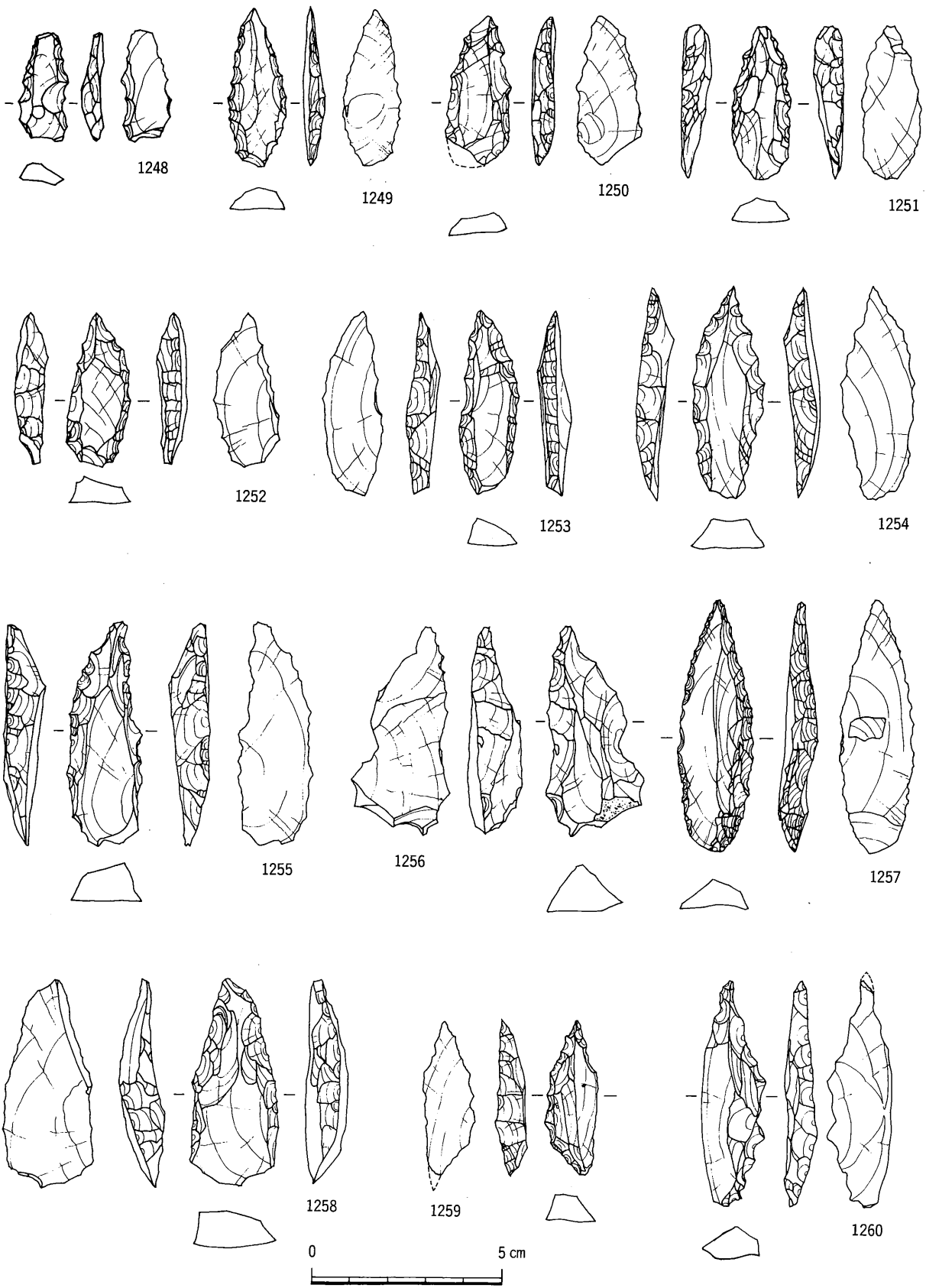
第 108 図 ナイフ形石器実測図 (76)



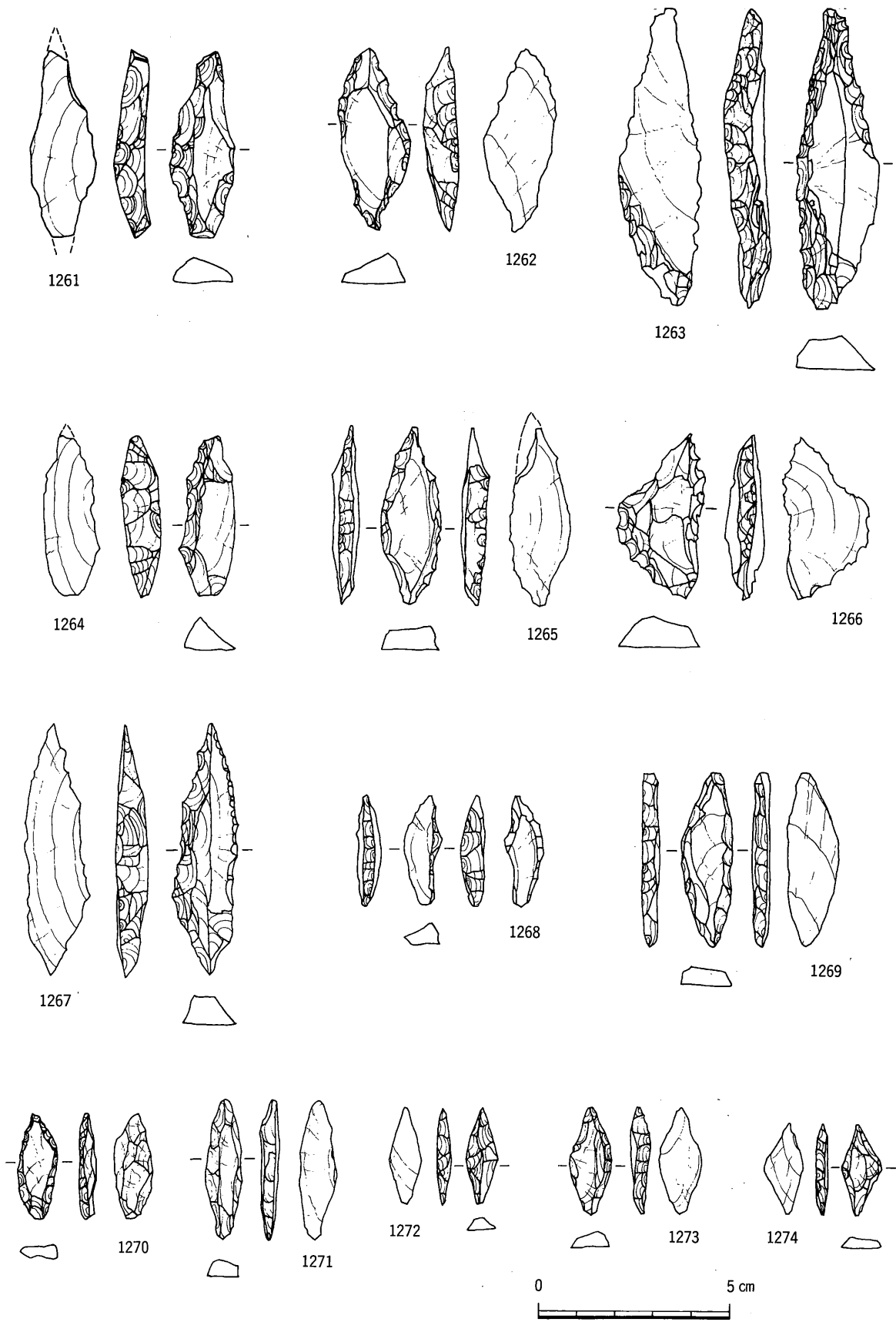
第 109 図 ナイフ形石器実測図 (7)



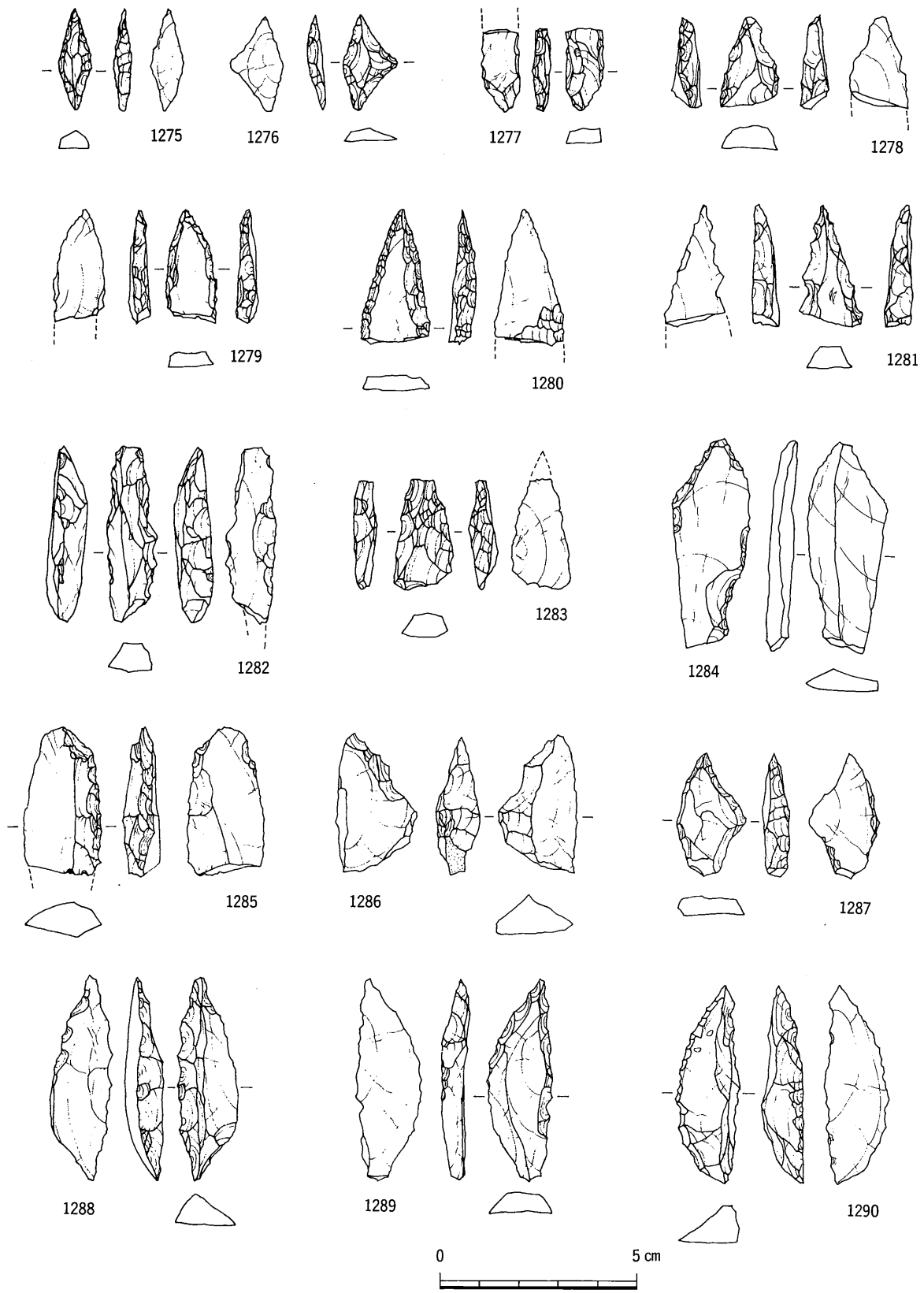
第 110 図 ナイフ形石器実測図 (78)



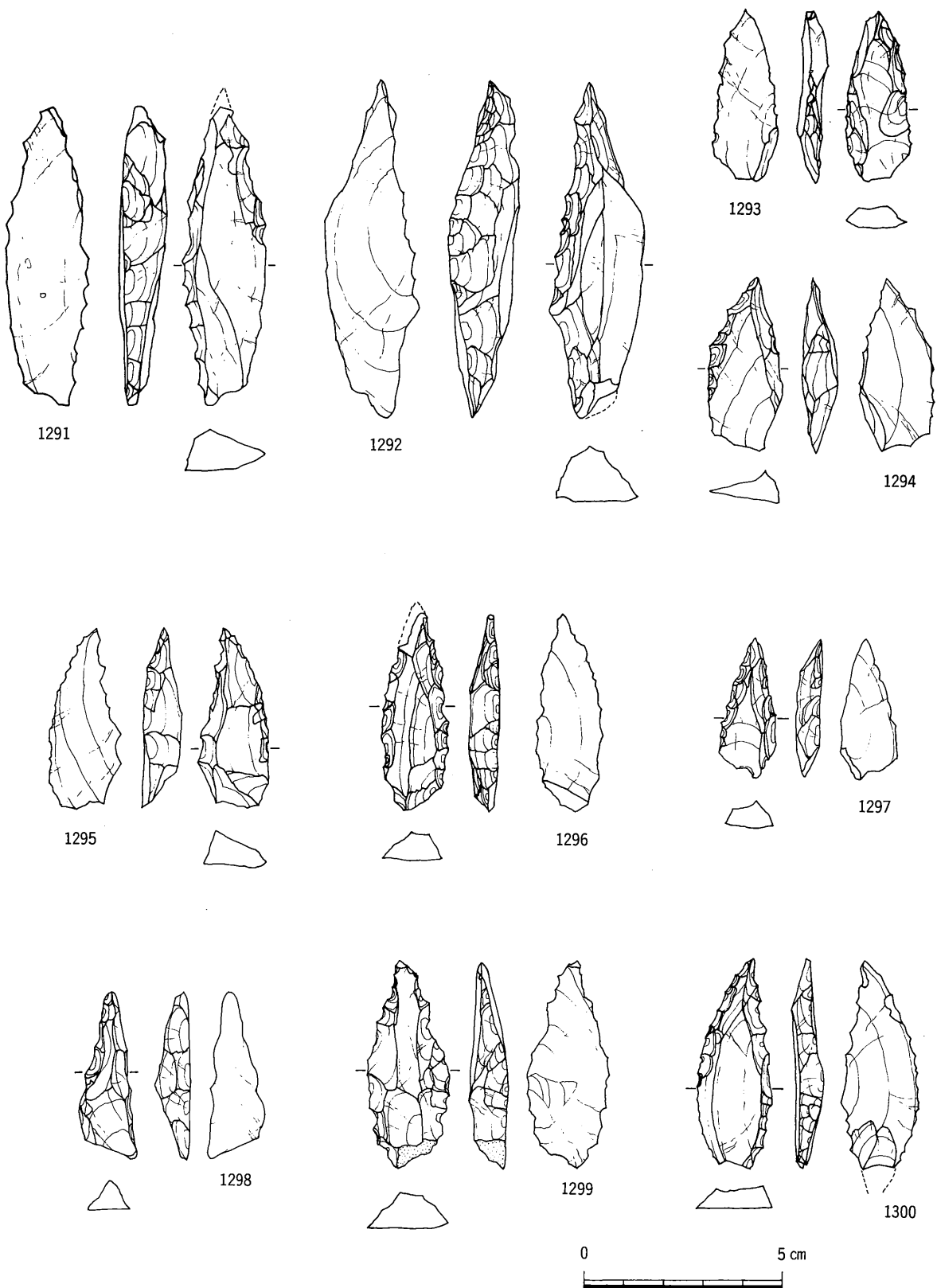
第 111 図 ナイフ形石器実測図 (79)



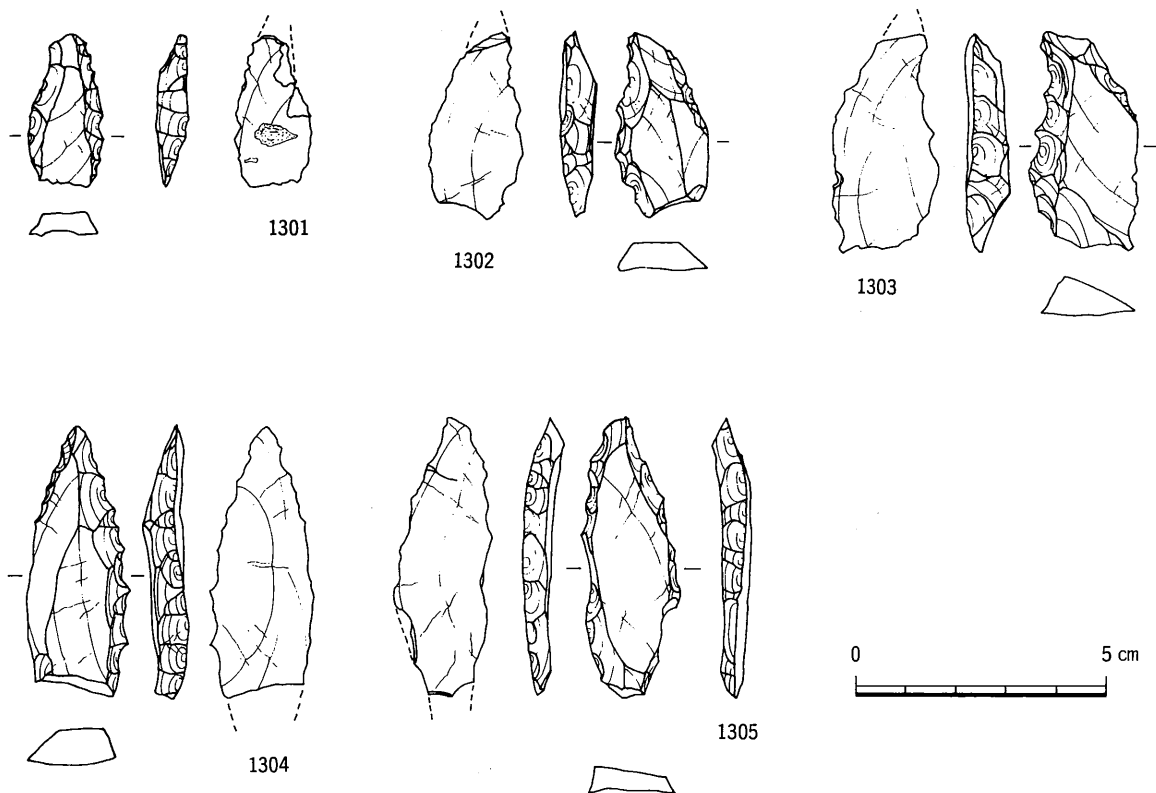
第 112 図 ナイフ形石器実測図 (80)



第 113 図 ナイフ形石器実測図 (81)



第 114 図 ナイフ形石器実測図 (82)



第 115 図 ナイフ形石器実測図 (83)

2. 舟底形石器 (第116図～第119図)

57点出土したが、特に集中する地点はなかった。出土が比較的多かったのはA38～A40の12点、B18・C17-1・C18-1の7点などである。調査地区南端部からの出土は非常に少なかった。(第16表)。

出土した舟底形石器は、甲板面からのみ調整を施したものが多い。底面からの調整を持つものもあり、前者にはいくつかのタイプが認められる。石材からみれば第116図5が流紋岩と思われるほかはサヌカイト製である。

第116図1・3～8・第118図24・25は1面ずつの底面と甲板面を持ち、全周にわたって甲板面から調整を施したものである。4・6は縦長剥片を利用するが、他は横長剥片を用いている。長さ3～6cm、重さ5～10gのものが多い。1・3～8の断面は台形を呈するが、24・25の底面は傾き、器体の横断面は三角形状となる。26は底面からの調整を持つもののわずか1面のみであり、24・25に含めて良いであろう。

第118図23・28は自然面からなる底面の一部が甲板面まで達し、側面の一部には調整を施していない。切出し形ナイフ形石器と類似し、区別が困難なものがある。

第116図12～18・第117図21・22・第118図27は複数の底面を持つものであるが、これにも全周に調整を施すもの(16・18・21・22・27)と、側面の一部に調整を施さず一方の底面が甲板面に接するもの(12～15)とがある。17の一方の側面には未調整の大きな剥離面を持つが、この

点を除くと16・18と共通した特徴を持つ。この16～18は、長さ7.9～9.3cm、重さ18.9～27.2gをはかり、羽佐島遺跡出土の舟底形石器の中では最も大形に属する。また、複数の底面には調整剥離面も含まれ、特に16では底面と側面の区別が難しい。なお、18の甲板面の一方向の縁辺には、側面からの調整が施されている。

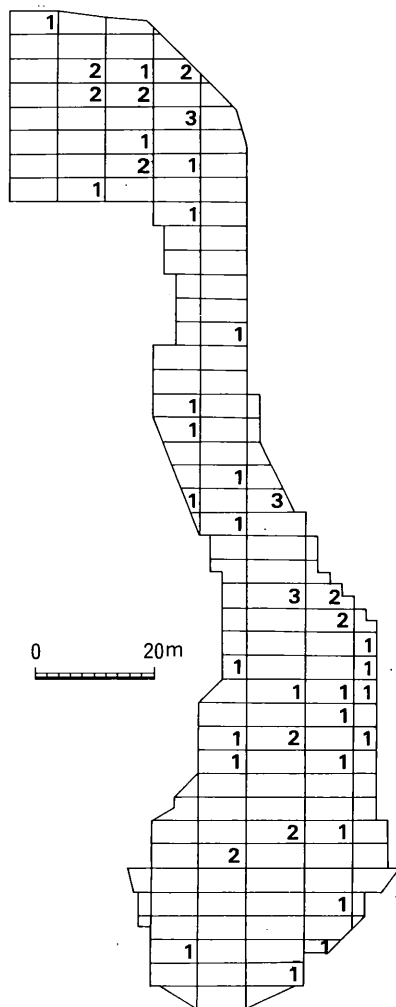
第118図29・30は明瞭な底面を持たず、断面は三角形を呈する。30は、まず甲板面から大きな剥離を施して横断面三角形の半製品を作製してから甲板面に沿った全周に細かな調整を施したことが明瞭である。

第119図35～37は甲板面からの調整に加えて底面からも調整を施されたものである。いずれも破片であるが、現状で5～7cmの長さを持つことからみて、大形に属することがわかる。35の底面には一方からのみの調整が施されているが、36・37では中央の稜の左右に調整を施している。細身であり、横断面は35が台形、36・37では中央の稜の左右に調整を施している。

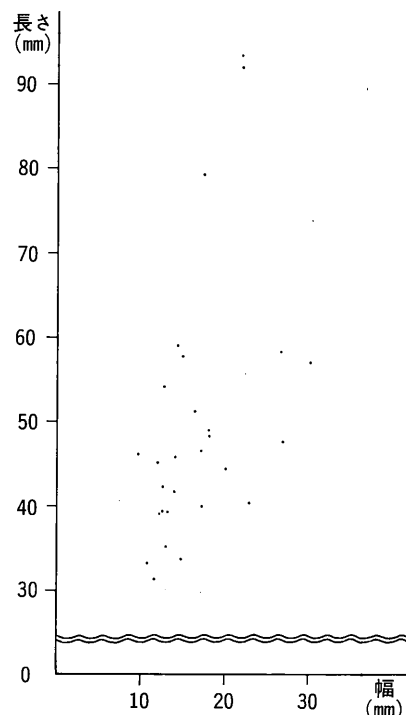
第119図38～41は複数の甲板面を持つものである。複数の甲板面を持つものとしては第116図2もあるが、これは折損による可能性もある。甲板面が複数であることを除くと、38は1・3～8と、39は21・22・27と類似する。40・41は器体が不整形・幅広となり、また、3面ずつの甲板面は剥離方向が不定である。1～39までの形態とは大きく異なり、石器の性格も異なるもの

のであろう。42は40・41に類似したものともみることができ、両側に細かな調整が施されていることから削器ともみることが可能である。

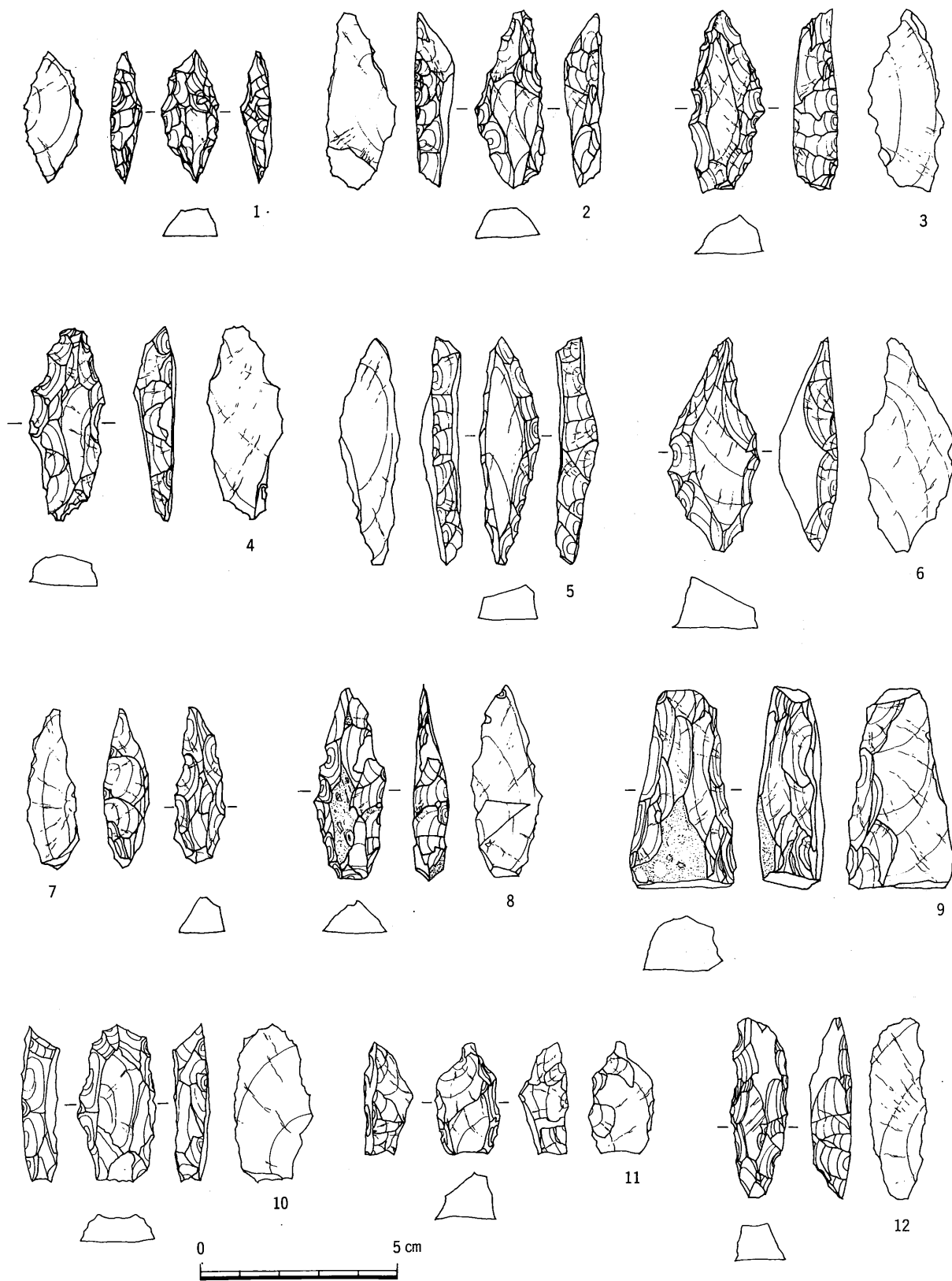
短かくて重い40～42を別にして完形の舟底形石器についてみると、長さ3～6cm、重さ3～7gのもの、長さ8～10cm、重さ20g前後のもの、二者に分かれるようである。(第17表)。



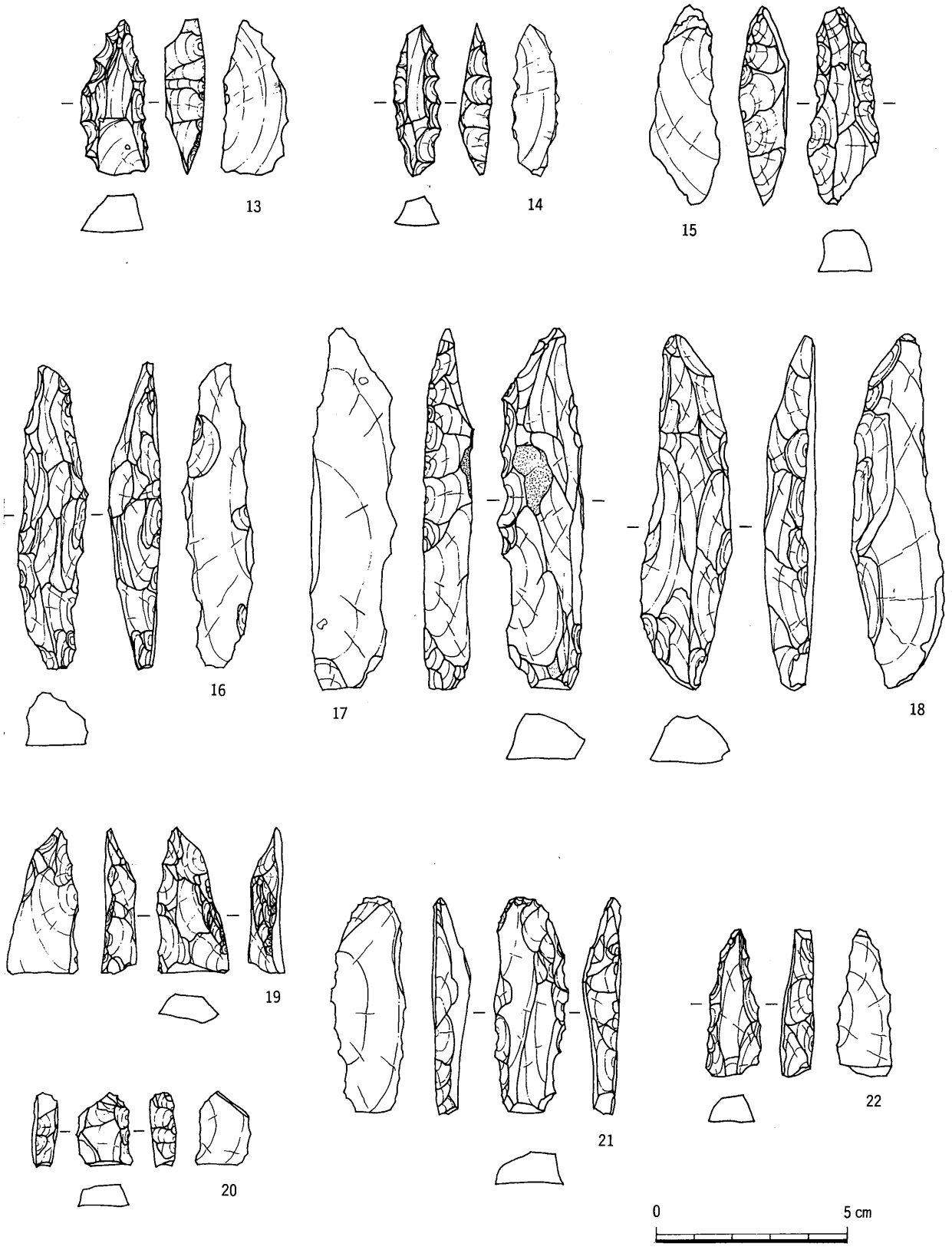
第 16 表 舟底形石器出土分布表



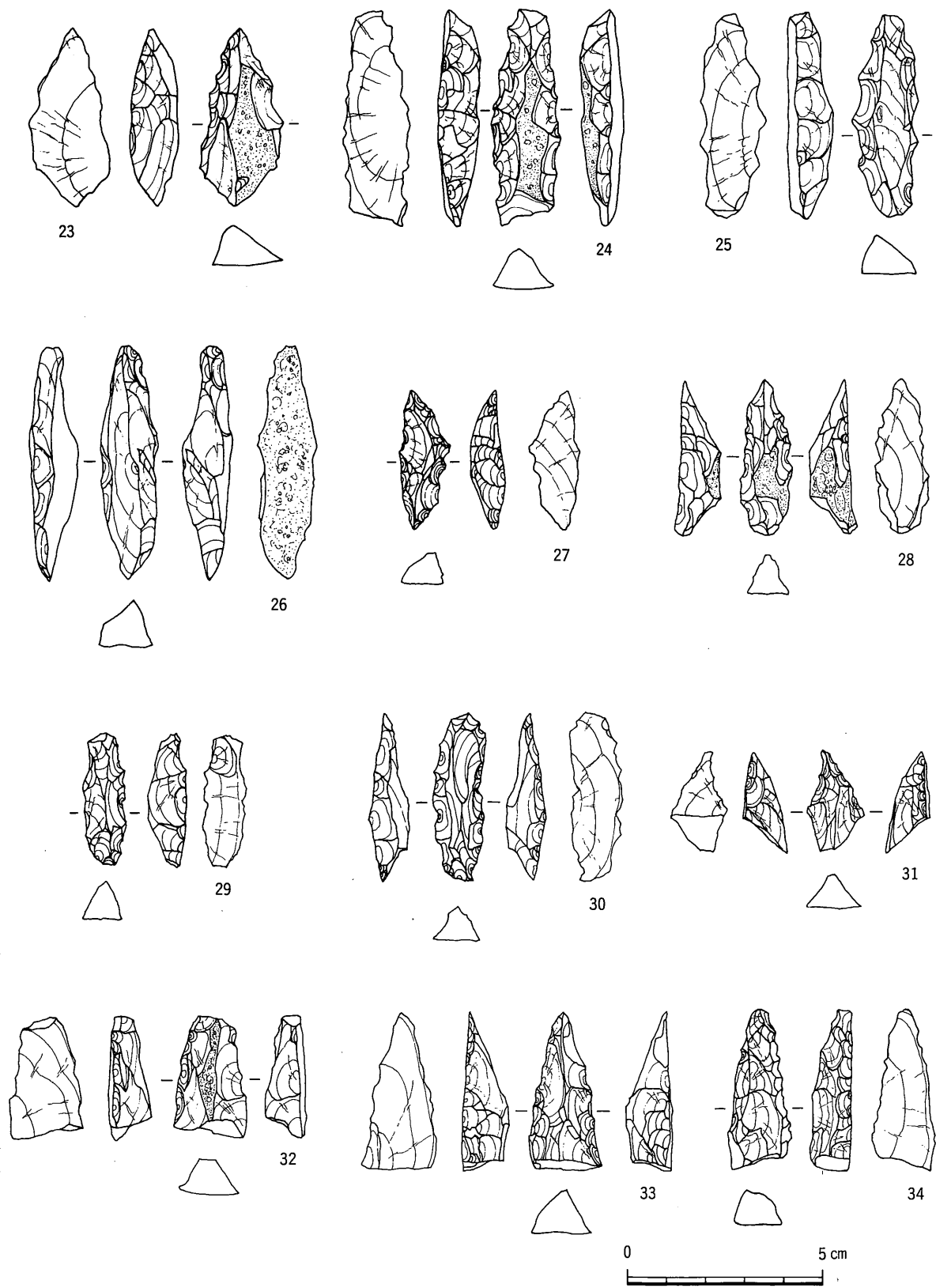
第 17 表 舟底形石器の長幅比



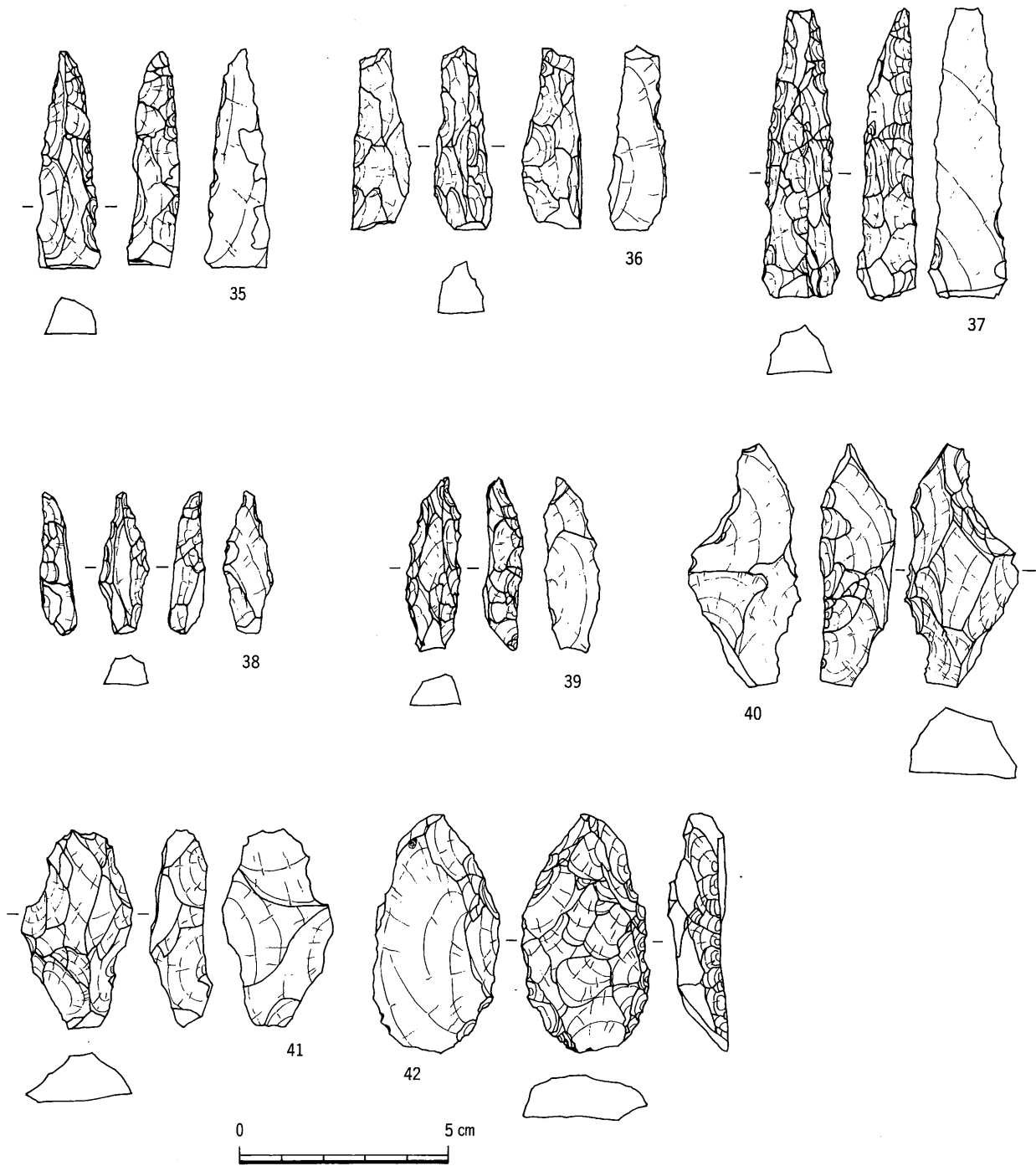
第 116 图 舟底形石器实测图 (1)



第 117 图 舟底形石器实测图 (2)



第 118 图 舟底形石器实测图 (3)



第 119 图 舟底形石器实测图 (4)

3. 尖頭器 (第120図～第128図)

2点の有舌尖頭器もここに含めることにする。尖頭器は、表採されたものを除くと破片とも合わせて163点出土した。出土は調査区南端部・中央部の南側・北部に集中するが、なかでもC14-1・2～C17-1・2に特に集中し36点が出土している。第125図65が玻璃質安山岩製であるほかはサヌカイト製であるが、尖頭器の出土分布は玻璃質安山岩(第7表)や玻璃質安山岩を多く用いた細石核(第37表)の出土分布と類似する。

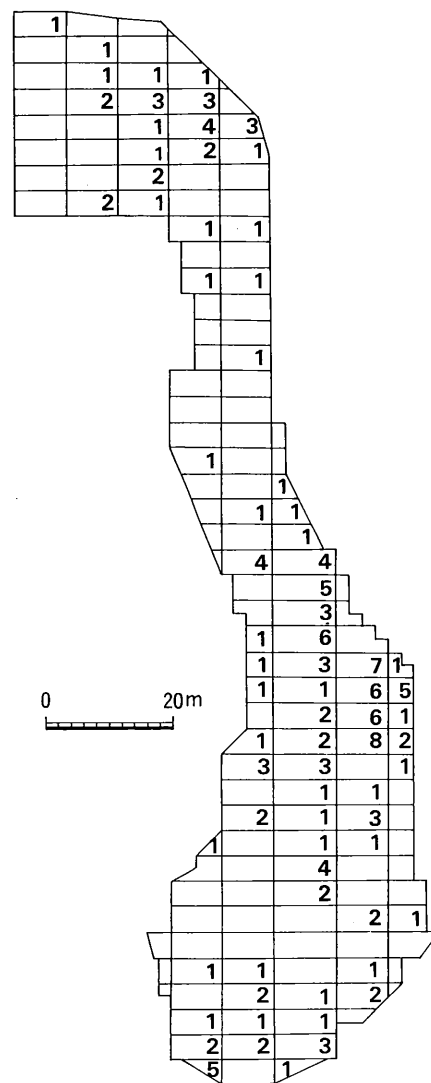
尖頭器には4例の接合資料が得られた。第120図13はA1-2・221とB2・966, 第121図16はB13・bNとA13-1・bS, 19はC14-1・455とC15-1・520, 第127図100はB20・bSとA37-3・cNからの出土である。近隣のグリッドからの出土による接合が多いが, 100は60m以上離れて出土している。

第120図1～4は三角形の体部を持つものである。4は両面とも加工するが, 1～3は側縁ないし周縁の加工が中央部に及ばず, 特に2・3には大きな剝離面を残す。2～4は長さ4cm前後, 重さ5.9～8.1gをはかるが, 1は長さ3.1cm, 重さ3.8gと小形である。1の調整は石鏃と比べるとやや粗いものの, 大きさからみれば類似した石鏃(第345図235・236など)があり, これらと同類とすべきかもしれない。

5～7は小形木葉形で, 基部は丸くおさめる。長さは3.6～4.8cm, 重さは3.8～10.7gである。いずれも両面にわたって周辺から調整を加えるが, 5は両面に調整以前の剝離面を小さく残す。

8～11は両端の尖ったやや幅広の紡錘形を呈し, 周縁のみに調整を加えたものである。これには, 長さ4cm, 重さ3g前後の大きさで扁平な横長剝片を用いたもの(8・9・11)と, 復元で長さ6cm以上, 重さ10g程度のも(10)とがある。第122図29は下端部を欠失しているが, 前者に含まれるものであろう。

12～22・77・78はやや細身の紡錘形ないし木葉形を呈する。調整以前の剝離面を両面に大きく残すもの(14・20・21), 片面に大きく残すもの(16), 中央部及び一部に小さく残すもの(12・15), 両面加工が施されたもの(13・17・18・19・22)があり, 調整の程度によって細分することができる。20は長さ3.76cm, 重さ0.9gの小形品であるが, 19は長さ9.34cm, 重さ16.2gをはかり重さも一定しないが, 5g前後のものが多い。破片も含めると, 体部の調整と大きさには密接な関係は認められないようである。19は中央近くで折れているが, 上片には折れ面からの調整を持つ。これが意図的な折断かどうかは明らかでないが, 切断したものの使用をうかがわせる資料である。なお, 20に類似した小形品は43でもみられるが, これらは1と同じく大きさ



第 18 表 尖頭器出土分布表

からみて石鏃となる可能性がある。

23・110は有舌尖頭器で、両者とも体部から徐々にせばまった三角形の茎を持つ。23がやや大きく、長さ6.11cm、重さ10.6gをはかる。

第122図24～26は有肩尖頭器である。基部の非常に短いもの(25)から長いもの(26)まである。24はあまり長くない基部を持ち、基端部は自然面のままである。第122図36・第125図74は下部を欠失するが、26に類似した形態をするものであろう。

28は縦長剥片の基部をわずかに加工して、三角形の頭部に幅広の茎を作り出している。これに類似したものは少ないが、第128図108・109は横長剥片を利用し、やや細長い茎状の基部を作り出している。108・109は一般にナイフ形石器に含められているが、槍先状をなす形態や基部加工のみを加えた28との関連からみて、これも尖頭器に含まれる可能性が強い。なお、両面加工を施した第122図27は下部を欠失するが、この部分が長くならなければ28と同じ形態になる。

42は小形の尖頭器で、両面の両側縁から調整を施し、中央部に調整以前の剥離面を残す。

尖頭器には、先端部及び基部を大きく欠失したものが多く出土した。^註それらには、側縁を調整したもの(第122図29～39・41)、片面に調整以前の剥離面を残すもの(第123図40・43～61)、両面加工が施されたもの(第125図62～107)があり、両面加工の尖頭器が最も多い。30は両縁のそれぞれ一方から錯行状の調整を施す。30・31は翼状剥片を利用した可能性が強い。

60・61は同一個体の破片で、大形の本葉形を呈する。復元すると長さ17cm前後、重さ200g以上になるものと思われる。

註

ただ、折断したのちに使用する場合も考えられるので、これらがすべて廃棄されたものであるとは限らない。

4. 彫器(第129図)

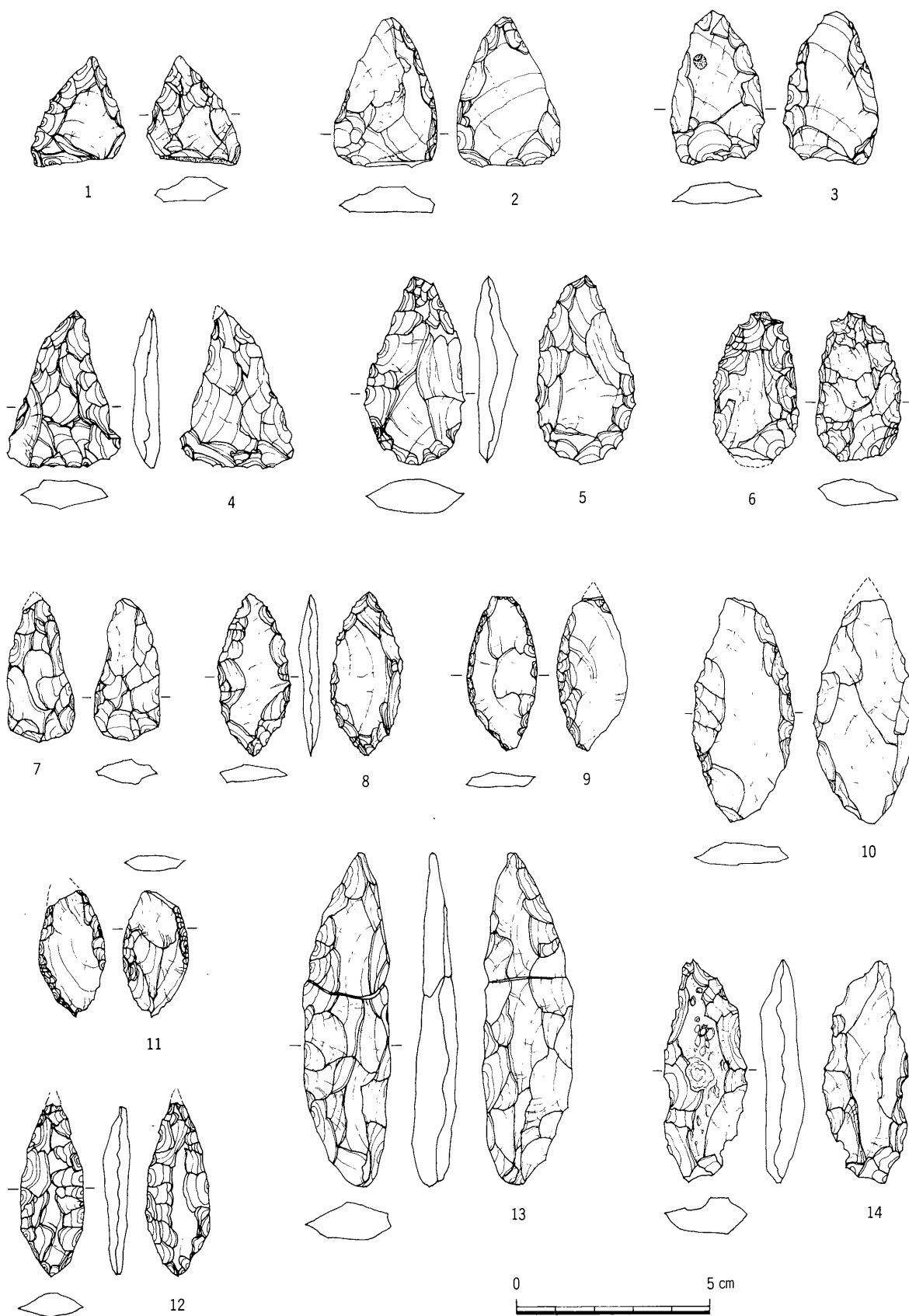
ポイント状の両面加工品を素材とするものが3点、板状素材を用いたものが2点出土した。前者の2点(第129図1・5)と後者の1点(2)は、両面加工品を素材とする彫器に伴うスポールの多い調査地区北部から出土している(第19表)。

第129図1は、ポイント状の両面加工品の先端左右を斜交いに切断し、器体の先端中央部に刃部を作り出している。一方の側縁は一回の加撃によって彫刀面を作り出すが、他方の側縁には長い樋状剥離とこれに並んだ短く幅広い剥離を持つ。刃部の角度は約60°である。下端部は折損する。

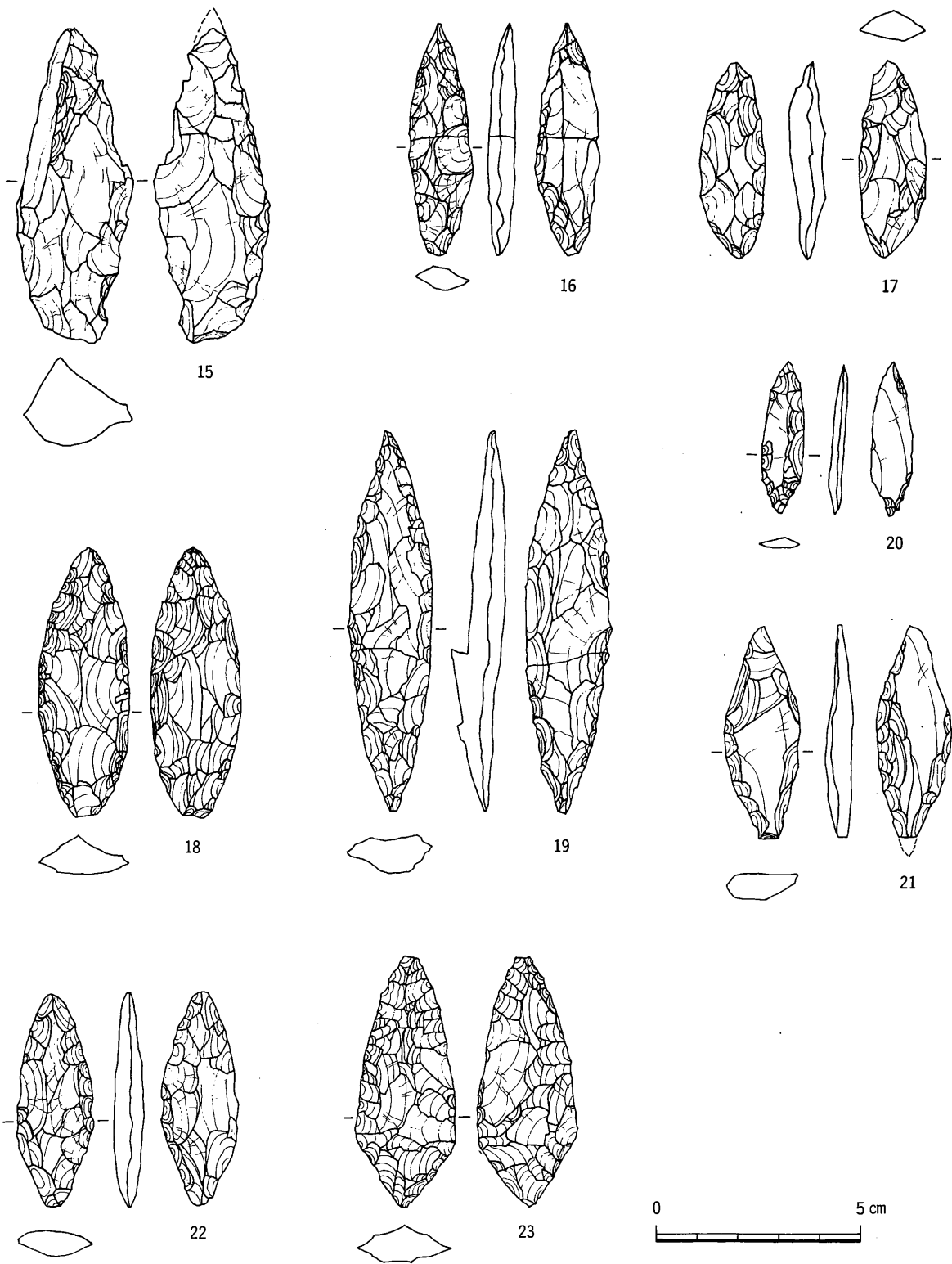
2は片面の上下に階段状剥離を施した板状の素材を用いる。側刃型の彫器である。平らな折れ面である小口面を加撃し、一方の長側面に4条の樋状剥離を施す。樋状剥離の末端は階段状剥離となっている。刃部の角度は約70°である。

3は両面加工品を素材とし、先端部の一方の側縁にのみ樋状剥離を施す。下端部は欠失するが、完形を想定しても他のものに比べてかなり小さい。刃部の角度は約60°で、1と等しい。

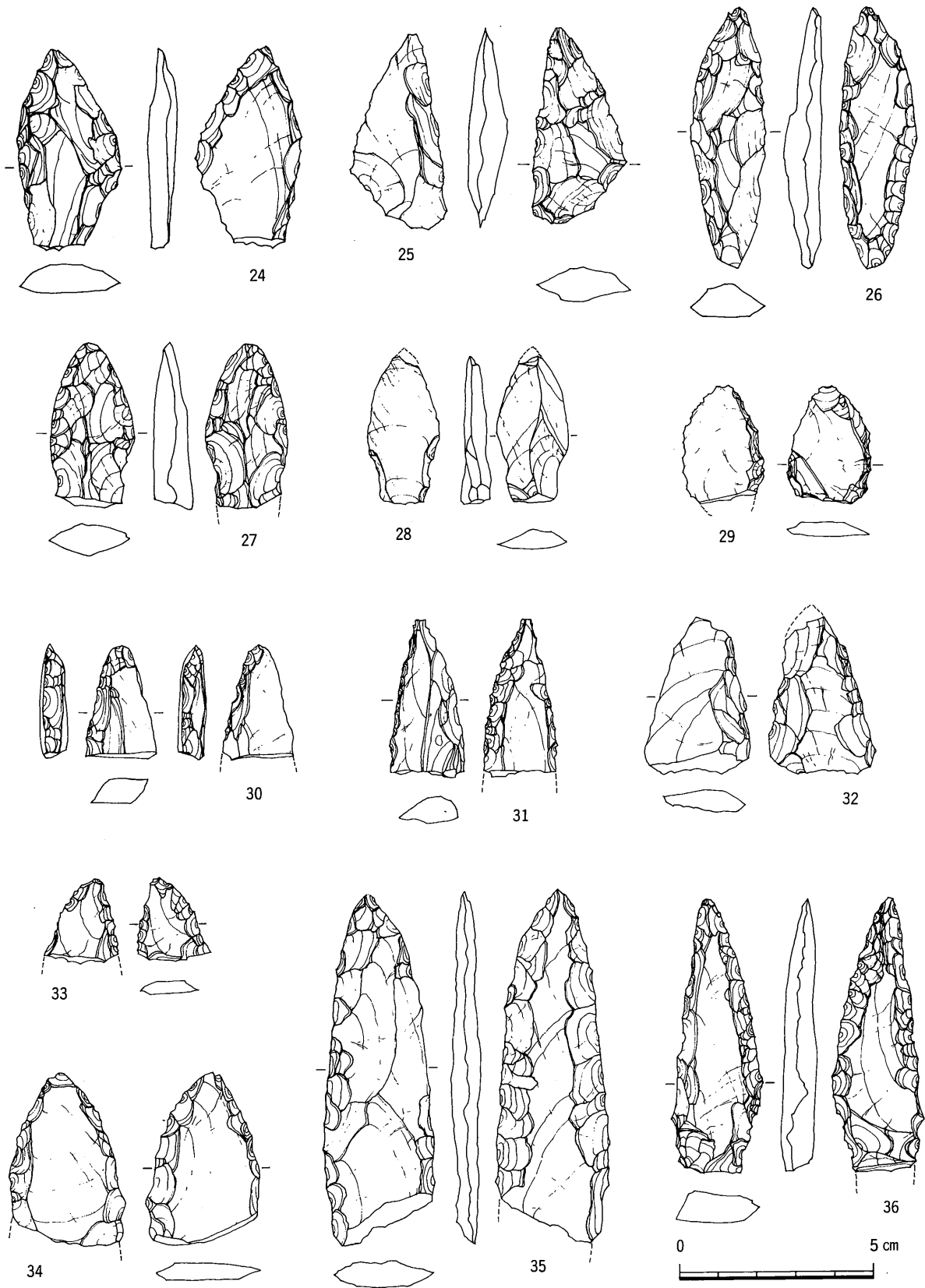
4は2と同じく、板状の素材を用いたものである。図示した5点の彫器のなかでこの彫器のみサヌカイトの風化が著しく、縦長剥片や同石核のあるものと類似する。凹形の剥離面を打面



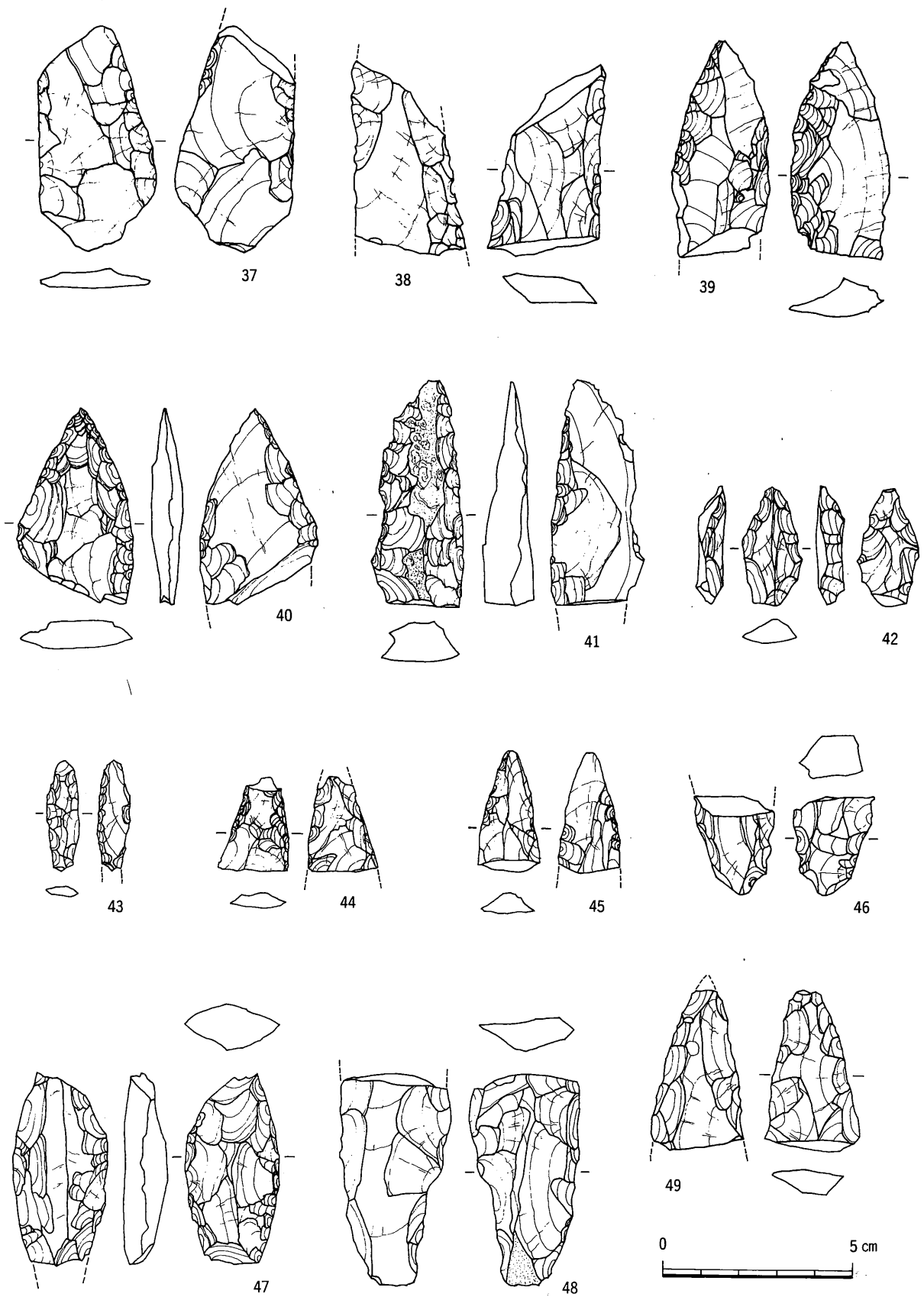
第 120 图 尖頭器実測図 (1)



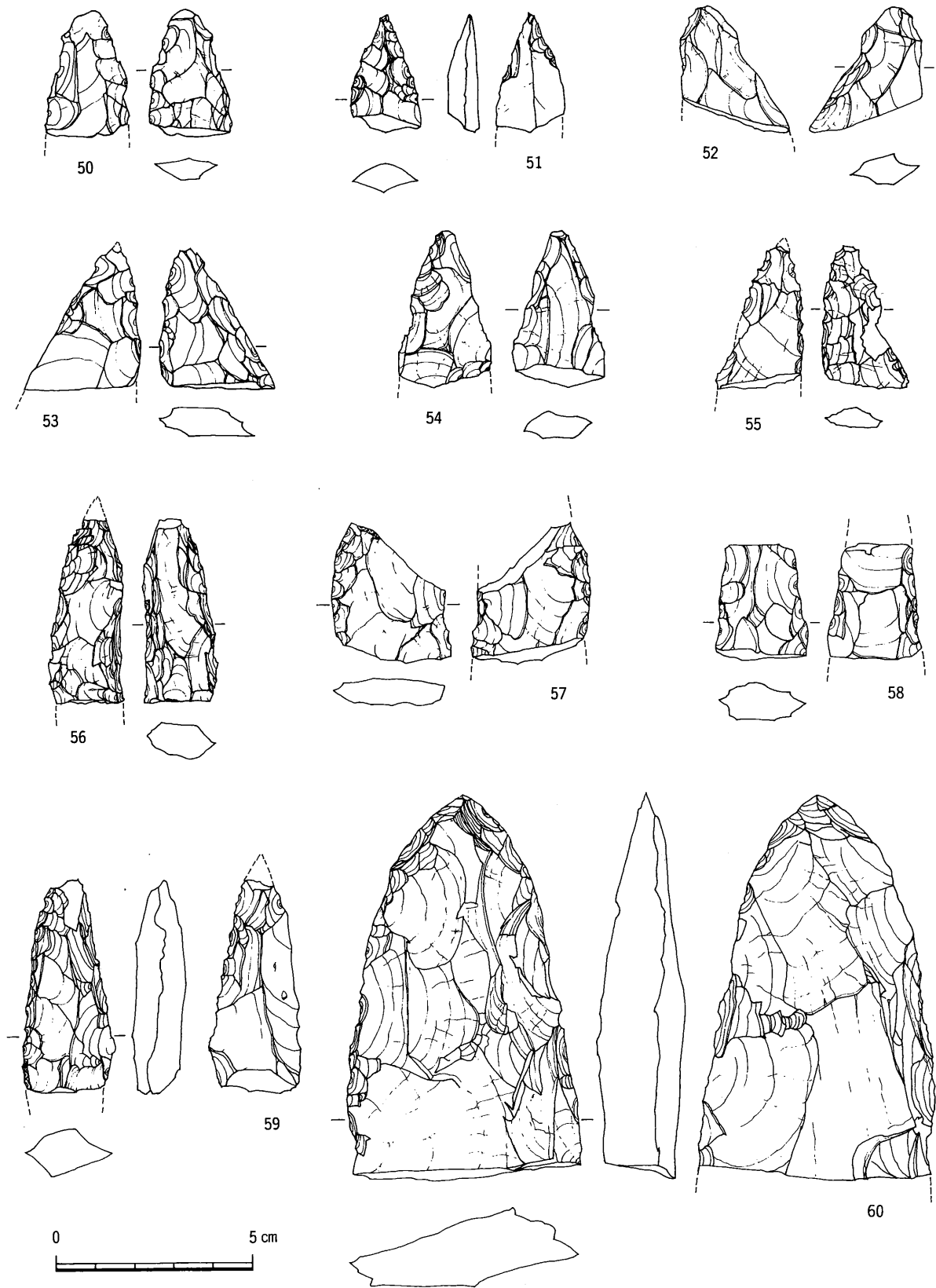
第 121 图 尖頭器実測図 (2)



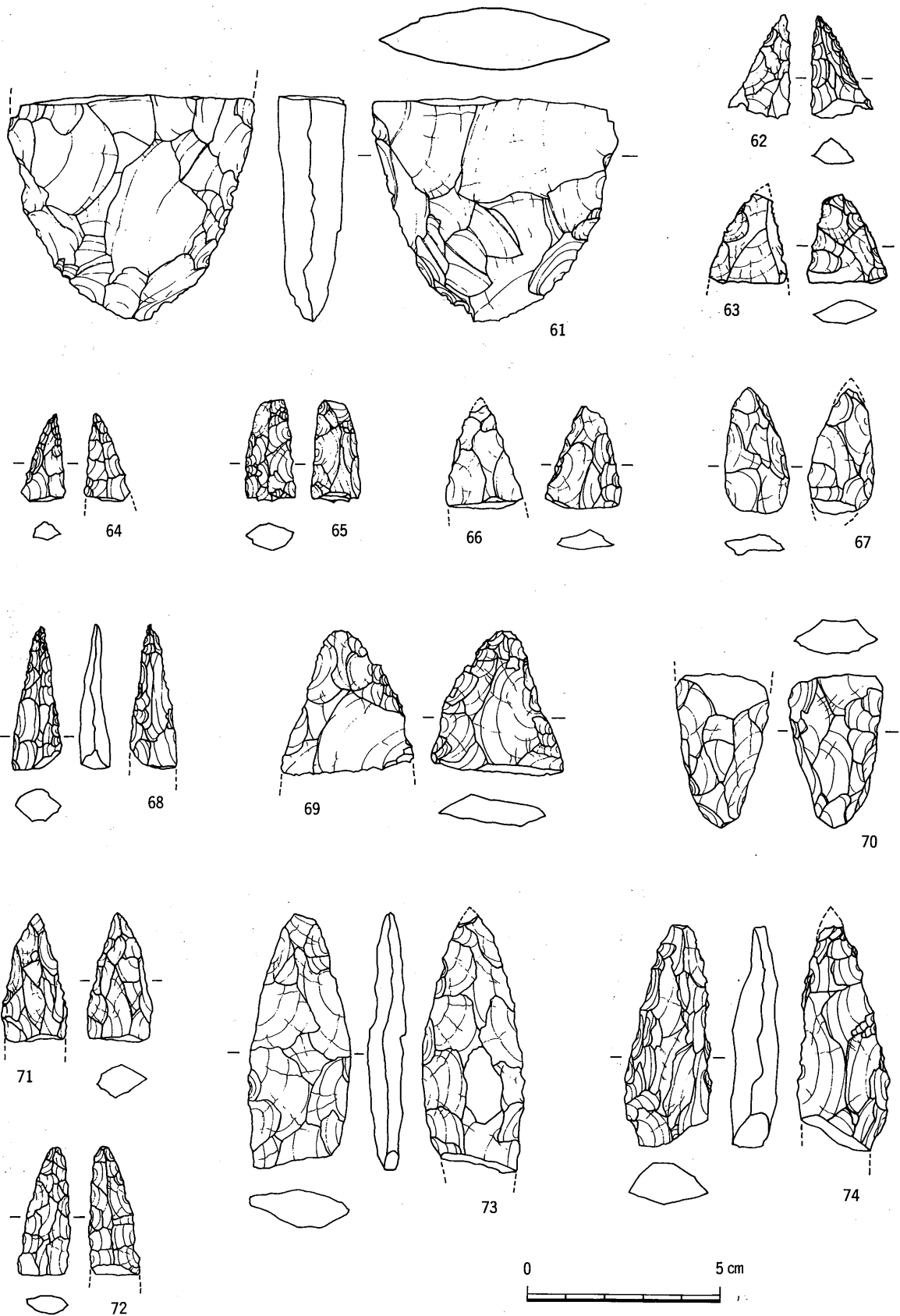
第 122 图 尖頭器実測図 (3)



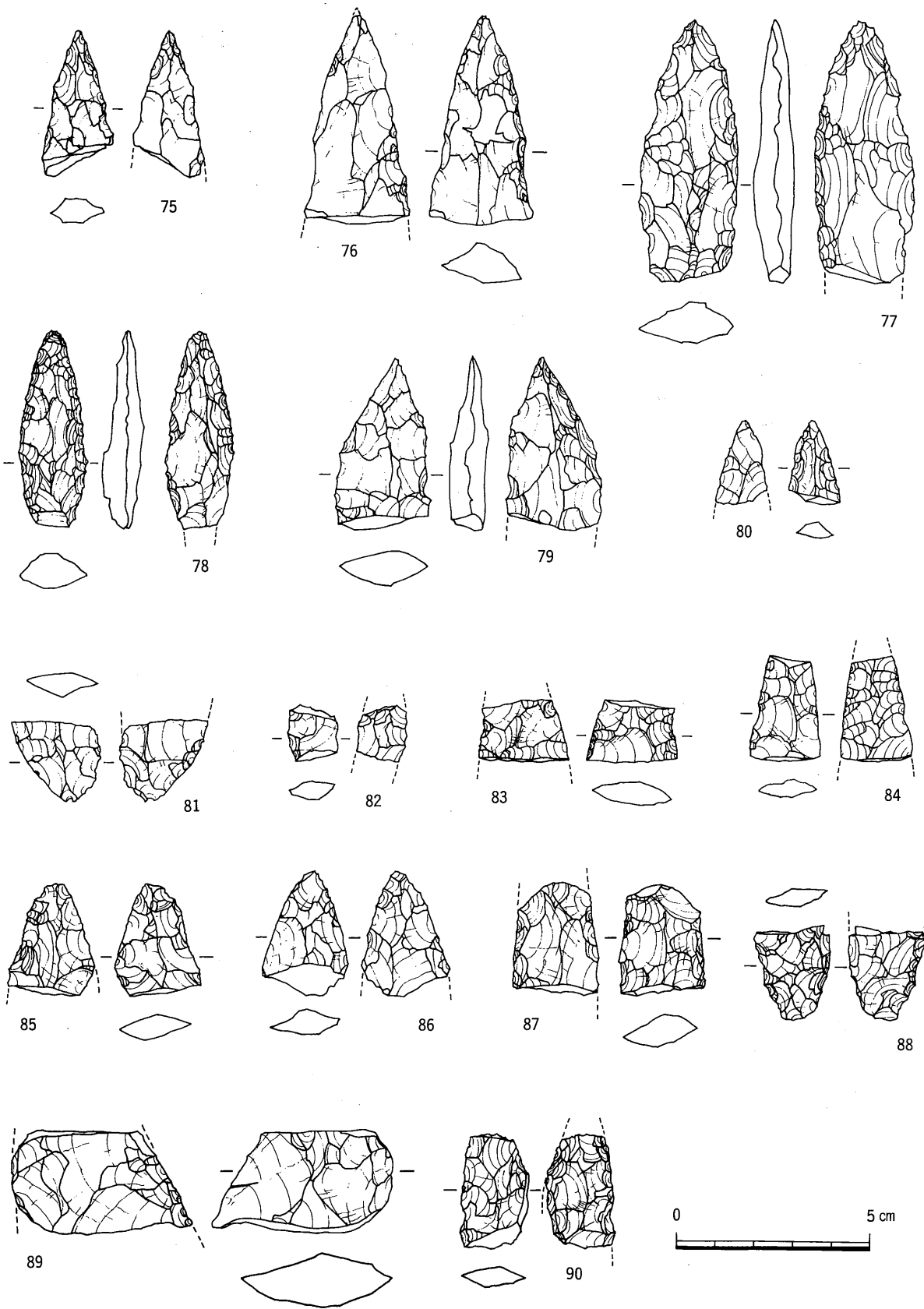
第 123 图 尖頭器実測图 (4)



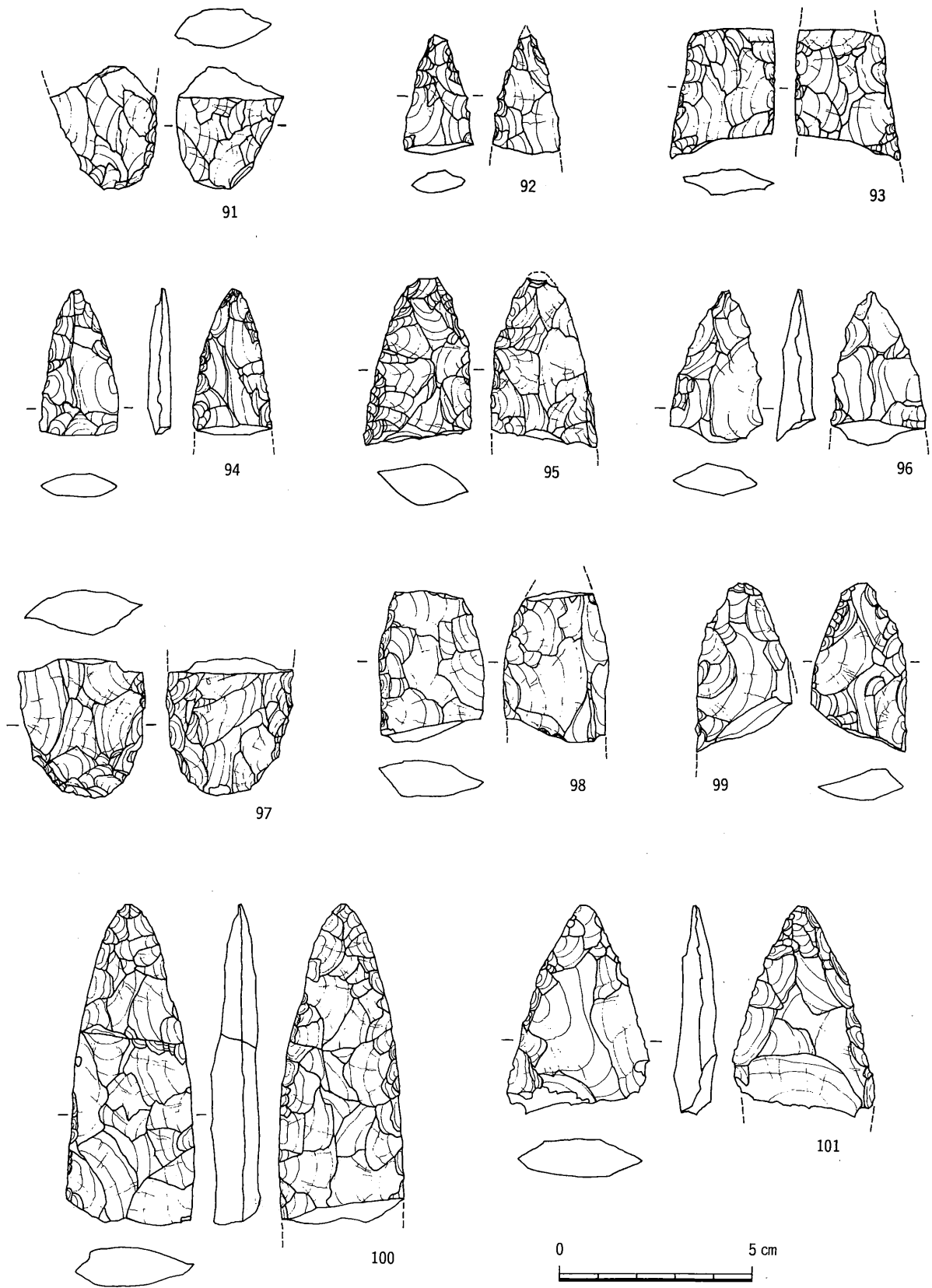
第 124 图 尖頭器実測图 (5)



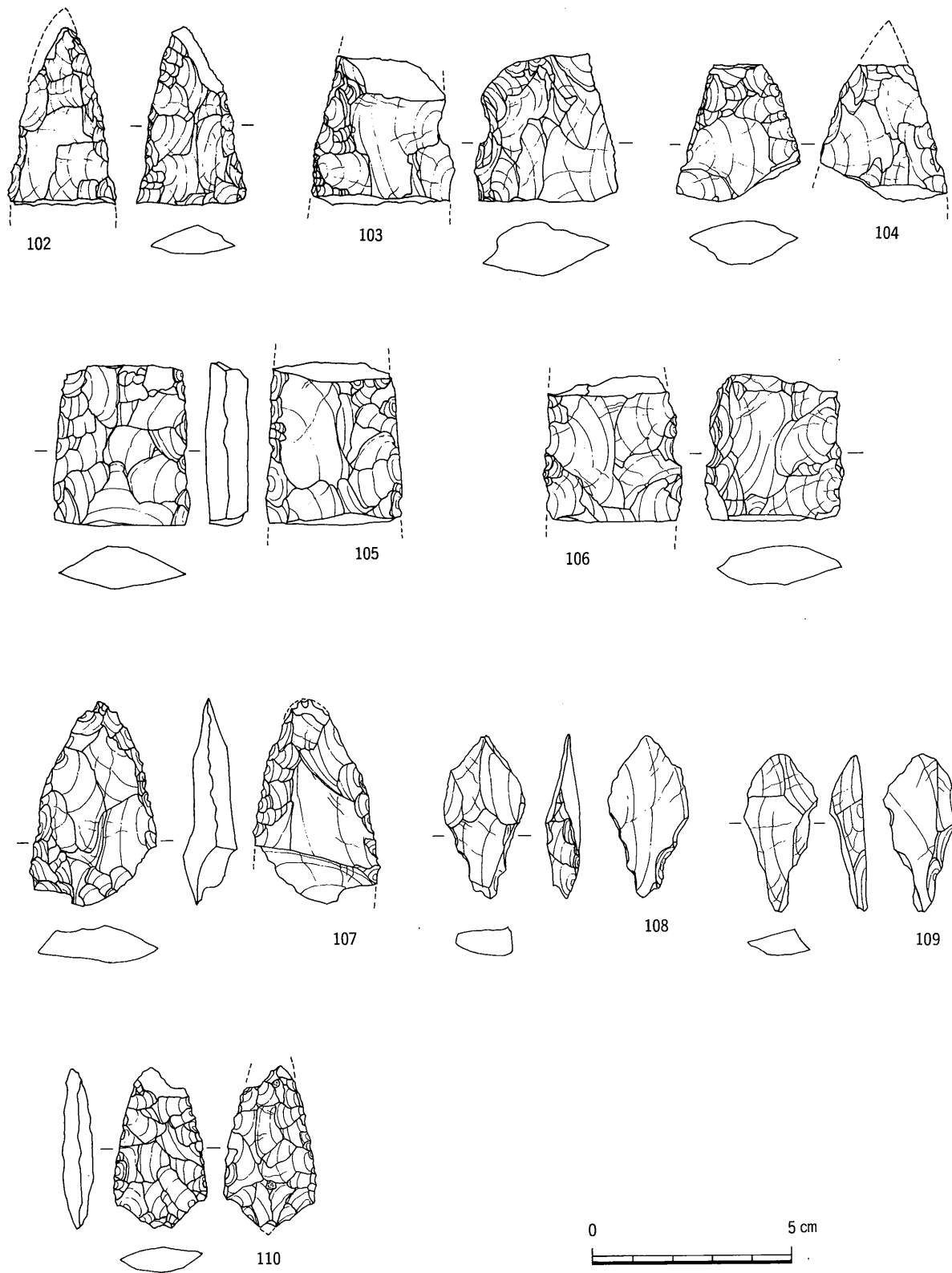
第 125 图 尖頭器実測图 (6)



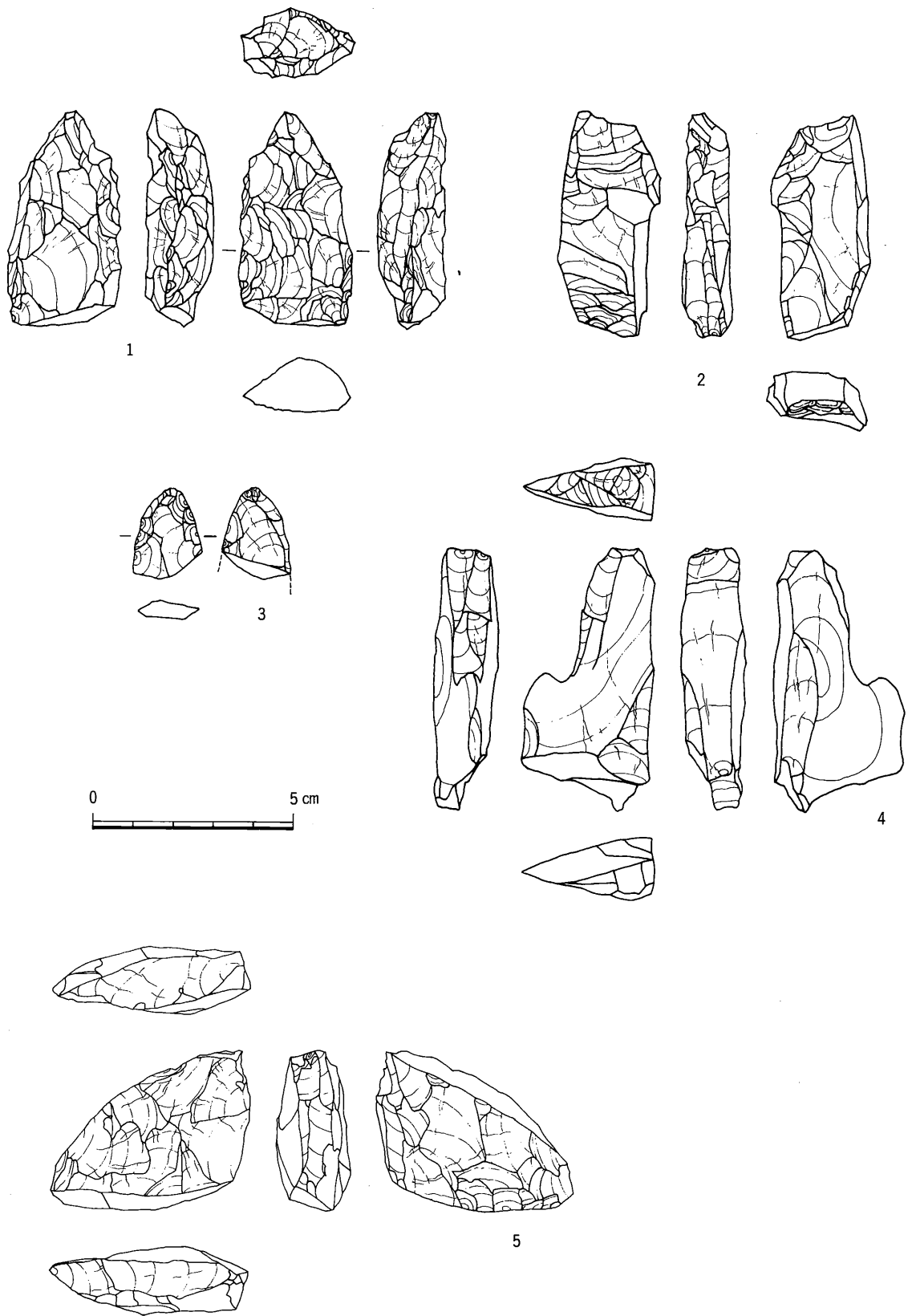
第 126 图 尖頭器実測図 (7)



第 127 图 尖頭器実測図 (8)



第 128 图 尖頭器実測图 (9)



第 129 图 彫器実測図

とし、一方の長側面に槌状剥離を施す。槌状剥離の剥離痕は2条ずつ並んで上下に4条が認められる。刃部の角度は5点中最も大きく、ほぼ直角である。

5は両面加工品を用いたもので、中段左図の右上方から斜めに切断したのち、側縁部に槌状剥離を施して彫刀面をつくる。1と同じく交叉刃型彫器であるが、刃部は片側に寄っている。また、下端部は左方からの加撃によって切断し、横刃型の彫刀面をなしている。上端と下端に異った刃部を持つ例である。さらに、下端の彫刀面を加撃し、片面にわずかな二次加工が認められる。上端の刃部に対する基部加工であろうか。刃部の角度は2に近く、約72°である。

以上のように、彫器には横刃型(5)・斜刃型(3)・交叉刃型(1)・側刃型(2・4)が認められる。

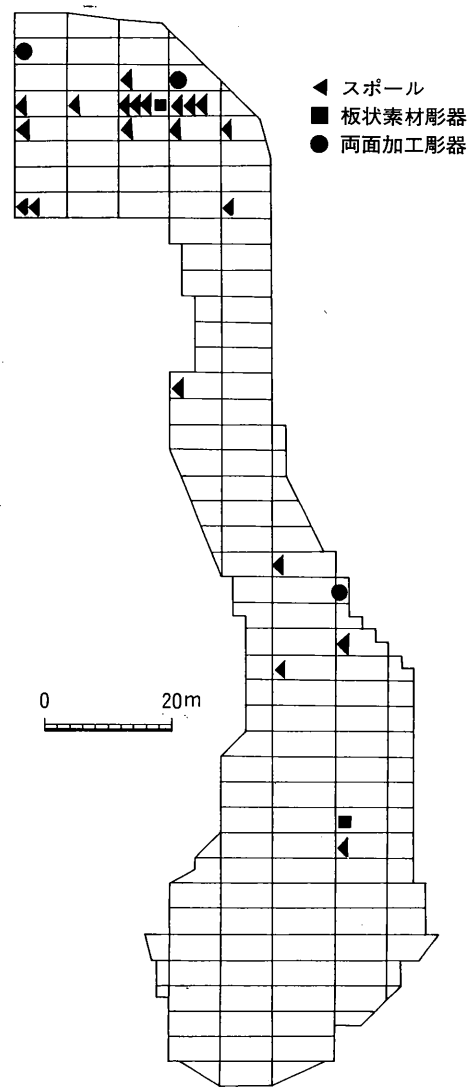
5. スポール (第130図～第131図)

両面加工の素材を用いた彫器に伴うスポールで、21点出土した。A39-2・A39-3を中心とした調査地区北部で半数以上が出土している。ただ、第130図1・8・12・15は加工が片面に限られており、縦長剥片石核からの初期の剥片とすべきかもしれない。これを除くならばスポールは17点となり、調査地区北部での集中は一層顕著となる(第19表)。

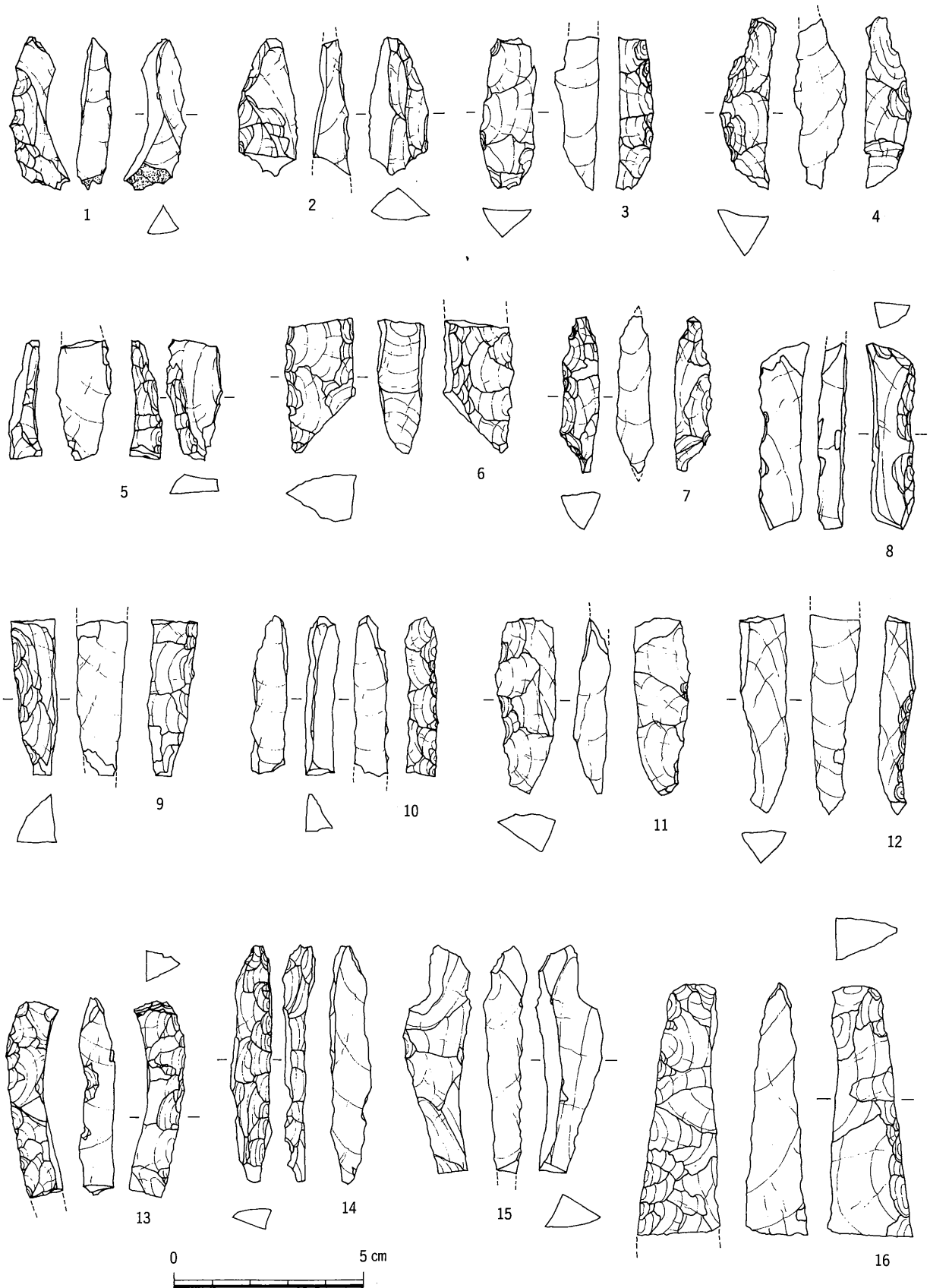
スポールの大部分は両面加工品の縁辺を切断したものであるが、第130図6・10・第131図17・20・21は複数の槌状剥離面を持つ。これらのうち、21は彫刀面と思われる複数の槌状剥離を一方に持っているもので、刃部の再生を意図して切り落とされたものであることがわかる。他のものも刃部の再生を意図し、または刃部作製失敗によって再び切り落とされたものであろう。5の一方の面(右図)は断面面か。

5の折れ面や、10・16・17・20の切断面から二次加工が施されている。16はスポールとなつてからのわずか1面の小剥離であるのでこれを別にするると、他は第130図5に認められるような彫器に施された二次加工であろう。

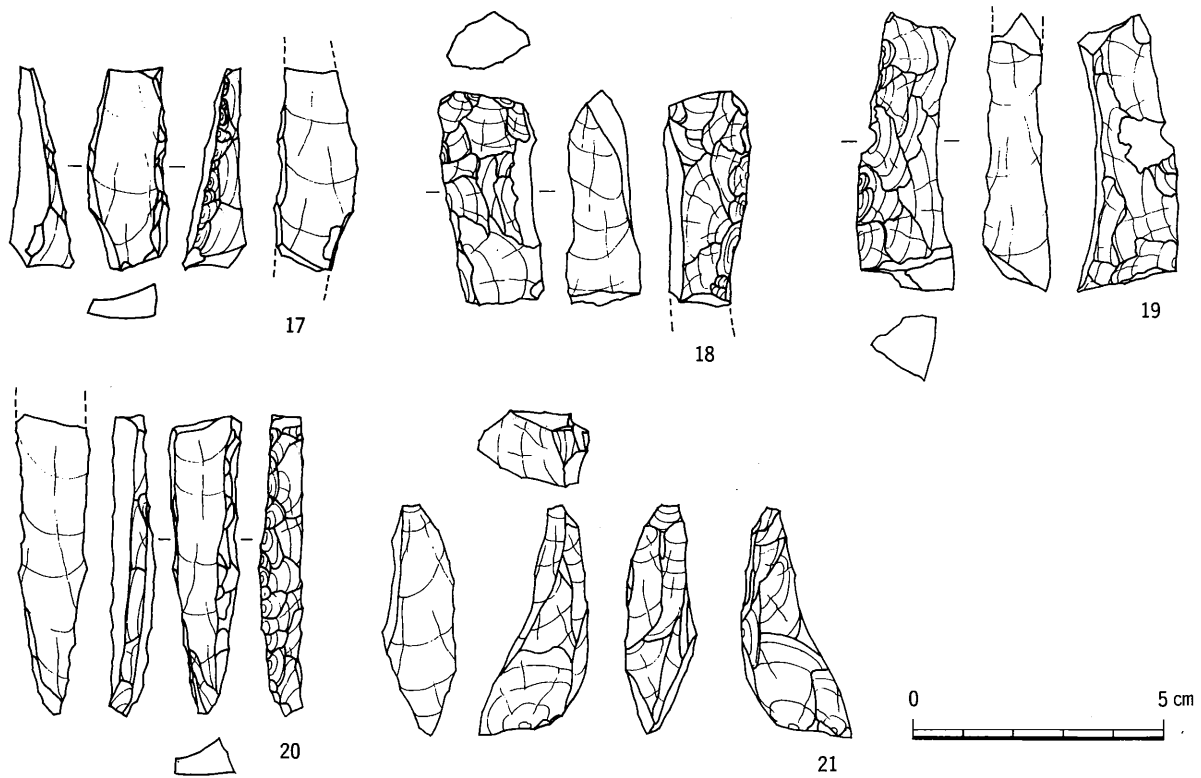
スポールや彫器でみると、素材とされた両面加工品の調整は丁寧であり、両面加工の尖頭器の剥離と類似する。また、両面加工品の先端は尖頭器の基部に類似するところがあり、尖頭器とした中にも彫器の素材が含まれている可能性がある。



第19表 彫器・スポール出土分布表



第 130 図 スポール実測図 (1)



第 131 図 スポール実測図 (2)

6. 石 錐 (第132図～第133図)

所属する時代を限定できないが、全部で13点出土した。いずれもサヌカイト製である。そのうち約半数は調査区北部のA36～A39から出土した。

素材には扁平な剝片を利用するものが多いが、7のように残核かと思われる肉厚の素材を用いたものもある。4は基部に剝片剝離の打点を残し、得られた剝片の先端部を刃部に加工したことがわかる。

刃部の加工をみると、片面の両側にのみ調整を加え、逆の面には調整しないものが最も多い。1～5・7がそれで、この中には4・5のように片側は大きな粗い調整ですませるものもある。12の刃部裏面には先端側から小剝離があり、使用による破損の可能性もある。

6は片面の片側のみ調整し、10は片側両面に調整を加えている。

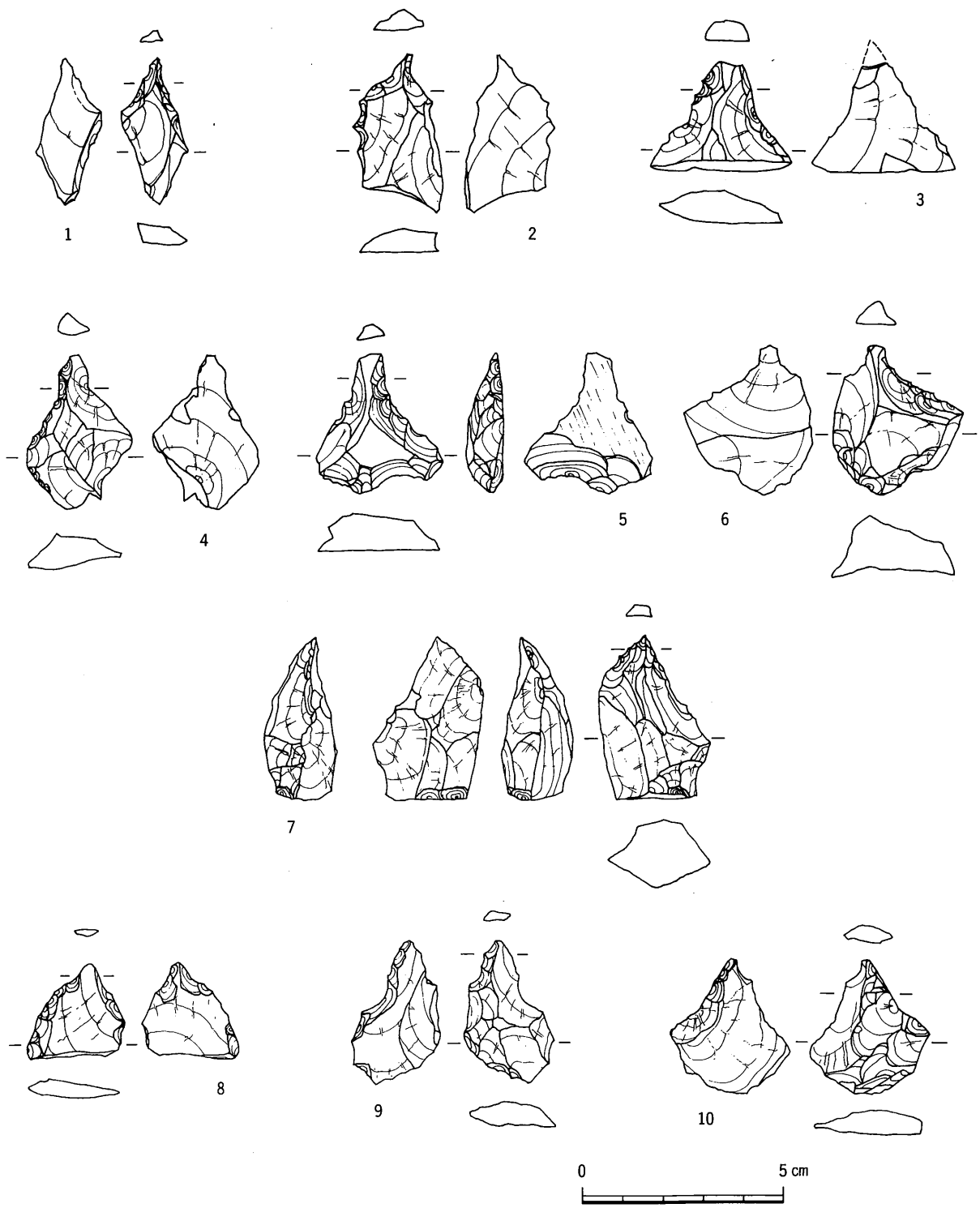
9は両側の1面ずつに錯行状の調整を加え、8は両面の両側を調整して刃部をつくり出す。

11は刃部の両面に調整している。

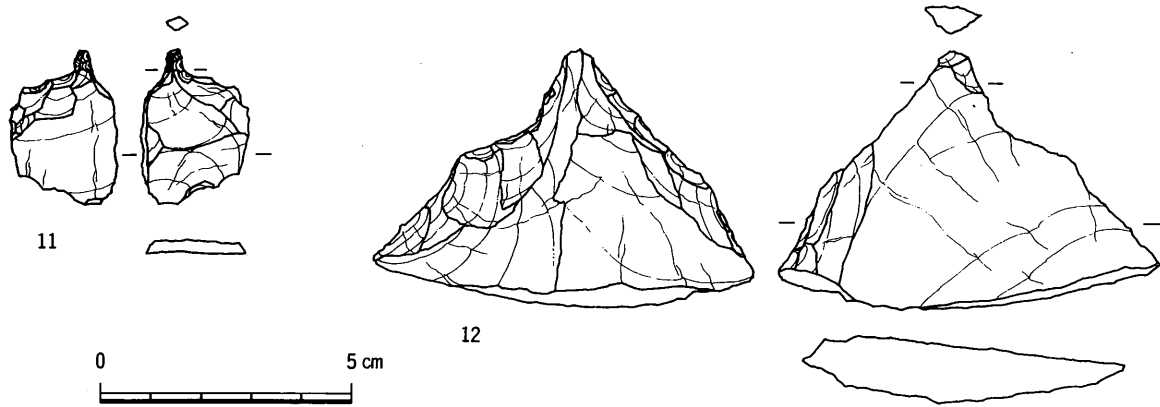
一方、4・9は調整が刃部で終らず、片側の基部まで及ぶ。

2の刃部は右方に曲り、10の刃部には使用時と思われる磨滅が認められる。

3は刃部の先端を欠失する。



第 132 図 石 錐 実 測 図 (1)



第133図 石錐実測図(2)

7. 削器・搔器 (第134図～第144図)

不確実なものや細部加工石器を含め、削器と搔器・円形搔品をあわせて約1,030点出土した。^註ほとんどは削器である。搔器は非常に少なく25点前後で、ほかに、短側縁と長側縁を加工し搔器と削器の機能を兼ね備えたものがわずかに認められた。体部の全周ないしほぼ全周に調整を施すもののうち、比較的分厚い体部に急角度の調整を加えたものは20点程度しかない。これ以外に、薄い素材の周囲から階段状剝離を特徴とする粗雑な調整を加えたもの(67)が少なからず出土している。ここで取上げる削器と搔器・円形搔器の所属時期は必ずしも旧石器時代のみ限定されるものではないが、一括して紹介する。

第134図1～12は石核を転用した削器である。1・5は翼状剝片石核の後縁に底面側から調整を施し、刃部を作り出している。1の打面部の調整は、一般の打面調整に比べると細かく丁寧なことから、この側縁も刃部としたのではないかと考えられる。刃部はいずれも片面からの調整である。国府文化期に属することが確実な削器である。

2・3は交互剝離石核の後縁を利用する。2は片側の両面から2枚ずつ、3は1枚ずつの横長剝片を剝離したものとみられる。刃部の調整は両者とも両面から調整を施すが、調整の部位を異にするため、微細にみれば片面からの調整であることがわかる。3の打面側にも調整と思われる小剝離があり、これも刃部をなす可能性がある。

4・6～12は石核やその破片を利用したものである。4・6～9の刃部は片面側からのみ調整を施す。10・12は反対側からもわずかに調整を加え、11は両面から調整する。8は三角形をなす体部の二辺を刃部とし、右図の左辺を搔器として使ったかもしれない。

13～16・18～23・25～35・37～48・78・80は剝片を利用した削器である。体部の一辺に調整を施したもの(13～15・17～23・25～30・33・34・40・41・78)、反対の二辺に調整したもの(16・31・35・39・44～46・48)、隣接する二辺に調整したもの(32・42・43・80)がある。46・48は長方形ないし長円形の縦長剝片の対向する長側縁に調整を施すが、一方の短側縁には未調整の鋭いエッジを持つので、これを刃部として用いた可能性もある。剝片の種類からみると、横長剝片が最も多く、翼状剝片(19・20・28)や縦長剝片(14・16・45～48)もある。翼状剝片を利用した削器のうち、19・28は主要剝離面側に二次調整を施すが、20は底面側に調整を施す。

28は翼状剥片を剥離後、主要剥離面側から打点付近の打面部を大きく剥離する。底面のリング・フィッシャーからみて、ファースト・フレイクに近い剥片であろう。石材は14～16・18が玻璃質安山岩、76が流紋岩又は蛋白岩であるが、他はサヌカイトである。

調整は打面側の縁辺、端部側の縁辺、側縁と様々な部位に施すが、片面からの調整が多い。両面から調整を加えた刃部を持つ削器（29・31・34・35・37・39・40・42～44・46）のなかで、旧石器時代に属することが確実なものはみられない。31・35・42などは表面の風化もほとんど認められず、縄文時代以降のものであろう。刃部は直線刃とわずかな外湾刃が多く、内湾刃（13・38）、顕著な外湾刃（15・30・39・44）は少ない。

24・36・47・49・51～53は体部の長側縁と短側縁に調整を持つ。24・36は、隣接する二辺に調整を施した削器（32・42・43）に類似するが、短側縁に比べて長側縁の調整が粗雑であり、これを基部加工とみなせば搔器とみることができる。両者とも刃部は斜行し、24は玻璃質安山岩製で、短側縁には両面から丁寧な調整を施す。47・52は短側縁の加工が粗雑である。49・51・53は長側縁・短側縁とも丁寧な調整を施し、削器と搔器の機能をあわせ持つものと考えられる。

50・54～58・60・64は短側縁に調整を施された搔器である。58の刃部には両面から調整を加えるが、他は片面からの加工である。55・57は尖った体部の先端に加工され、刃部は強く外湾する。54・55は横長剥片石核の再利用である。

59・61～63・65～75は体部のほぼ全周に調整を持つものである。59・61・62・65・66は不整形ないし不整楕円形の体部を持ち、体部のほぼ全周に調整を加える小形の搔器である。刃部の調整には片面のもの（59・66）と、両面のもの（61・62・65）とがある。

67は不整四角形の体部の全周に、階段状剥離を主体とする調整が施されている。体部が薄いことと階段状剥離を特徴とするこの種の製品は少なくなく、今回の調査では一応楔状石器の素材と考えたが、円形搔器の一種の可能性もあるのでここでも紹介しておく。

68は楕円形の薄い板状の体部の全周に調整を行う。調整は体部の縁辺のみに限られ、長側縁と短側縁はそれぞれ対向する側縁と調整する方向が異なっている。

69は翼状剥片石核を転用したもので、楕円形の体部の全周に調整を施す。長側縁には方向を違えて一方から調整するが、短側縁の調整は両面からである。

63・70・71～73は短冊形ないしバチ形の体部に調整を加えたもので、長さ5cm前後を計る。73はやや大形であるが上部を欠失する。74・75は大形の体部の側縁辺部に調整を持つもので、74には左右に抉りが施されている。63・70・71・72に比べて大形であると共に調整の剥離角度が小さい傾向がある。石鋏とすべきかもしれない。

第135図17・第144図76・77・79・81・84・87は石核や剥片、及びその破片を素材とし、縁辺の一部に調整が施されたものであり、細部調整石器とすることができる。調整が施される方向は、各個体によって一定しているが、前述した削器に比べると浅いものが多く、範囲も狭い。ここに挙げたもの以外にも、石核・剥片として図示したものの中に、いくつか認められる。

76・84・87は横長剥片石核及びその破片を素材とし、鋭い縁辺にわずかな調整を施している。

17・77・79・81は横長剥片の鋭い縁辺に調整を持つが、調整は背面側から施されたもの（17・77）と主要剥離面側から施されたもの（79・81）がある。17は主要剥離面に伴う打点を残すが、77・79・81は打点部を除去されている。

82・83・85の鋭利な縁辺には微小な剥離痕が両面にわたって不規則に認められる。また、86の右図の右辺にも微小な剥離痕がわずかに残されている。これらは自然による損傷と考えるこ

ともできるが、同時に、鋭利な縁辺を使用した際の刃こぼれの可能性が指摘できる。ただ、剥片類の中で、鋭利な縁辺に微小な剥離をこのように多く持つものはきわめて少ない。82のみ縦長剥片を用いている。

註

以下の数値には横長剥片石核からの転用は含まれていない。横長剥片石核からの転用だけで100点程度の削器・搔器が増加するものと思われるが、これ以外の器種とした中にも若干含まれているので、総数はさらに増加するであろう。

8. 楔状石器 (第145～第148図)

約120点出土したが、切断面が明らかでないものについては削器と区別することが困難なものも少なくない。サヌカイト製がほとんどを占めるが、16・24・30・49・54の5点は玻璃質安山岩製である。

第145図1～10・24は角柱状又は三角形状を呈し、両長側面に切断面を持つものである。一方ないし両方の短側縁には階段状剥離の著しい調整が施されている。両長側面の切断は、加撃方向が同じであるもの(1～4・7・9・10・24)が多いが、対向するもの(5・8)もあり、また、6では両長側面の下方からと、左図の右上方から加撃している。両切断面の加撃方向が同じであるものの中には彫器のスポールも含まれている可能性がある。

11～21は一辺にのみ切断面を持つものである。楔状石器として用いられたもののほか、1～10・24などを剥離した残核も含まれていよう。幅広の四角形を呈し、上下両縁や、さらには一方の側縁に調整が加えられたもの(14・15～17・21)のほか、幅が狭くなったもの(12・18・19)もある。11・20は切断面に対応する側縁が直線状または隅丸形状をなさない。

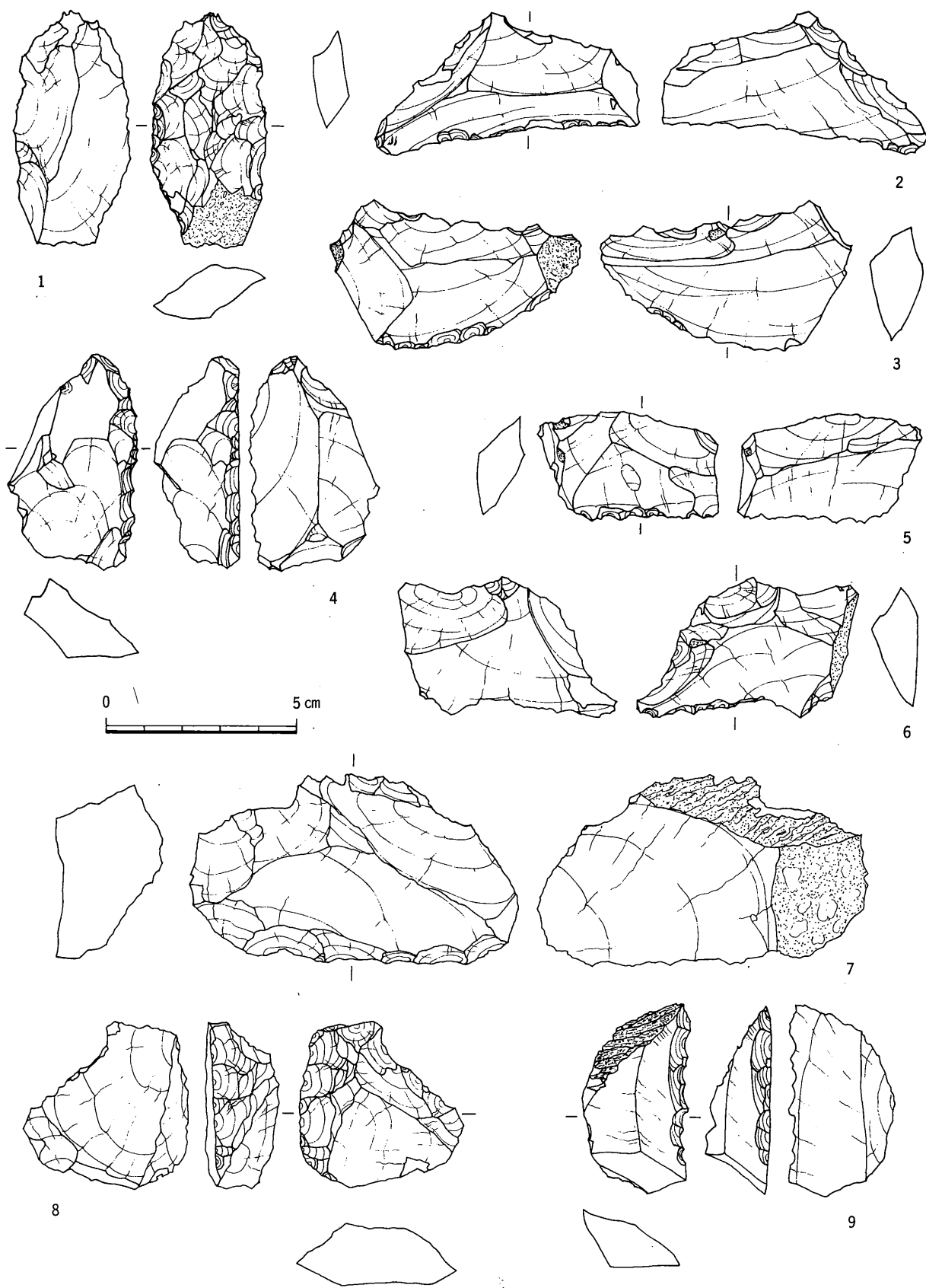
22・23・25は両側面のうち、一方は切断面をなすが、他方の側面の剥離については切断面でないものの、詳細は明らかでない。22は上下両縁に、23は下縁にのみ調整を施し、24は粗雑な調整を上下両縁に施している。

26～31は両側面のうち、一方は上端または下端から加撃した切断面であるが、他方は横方向からの剥離面であるので折れ面ではないかと思われる。

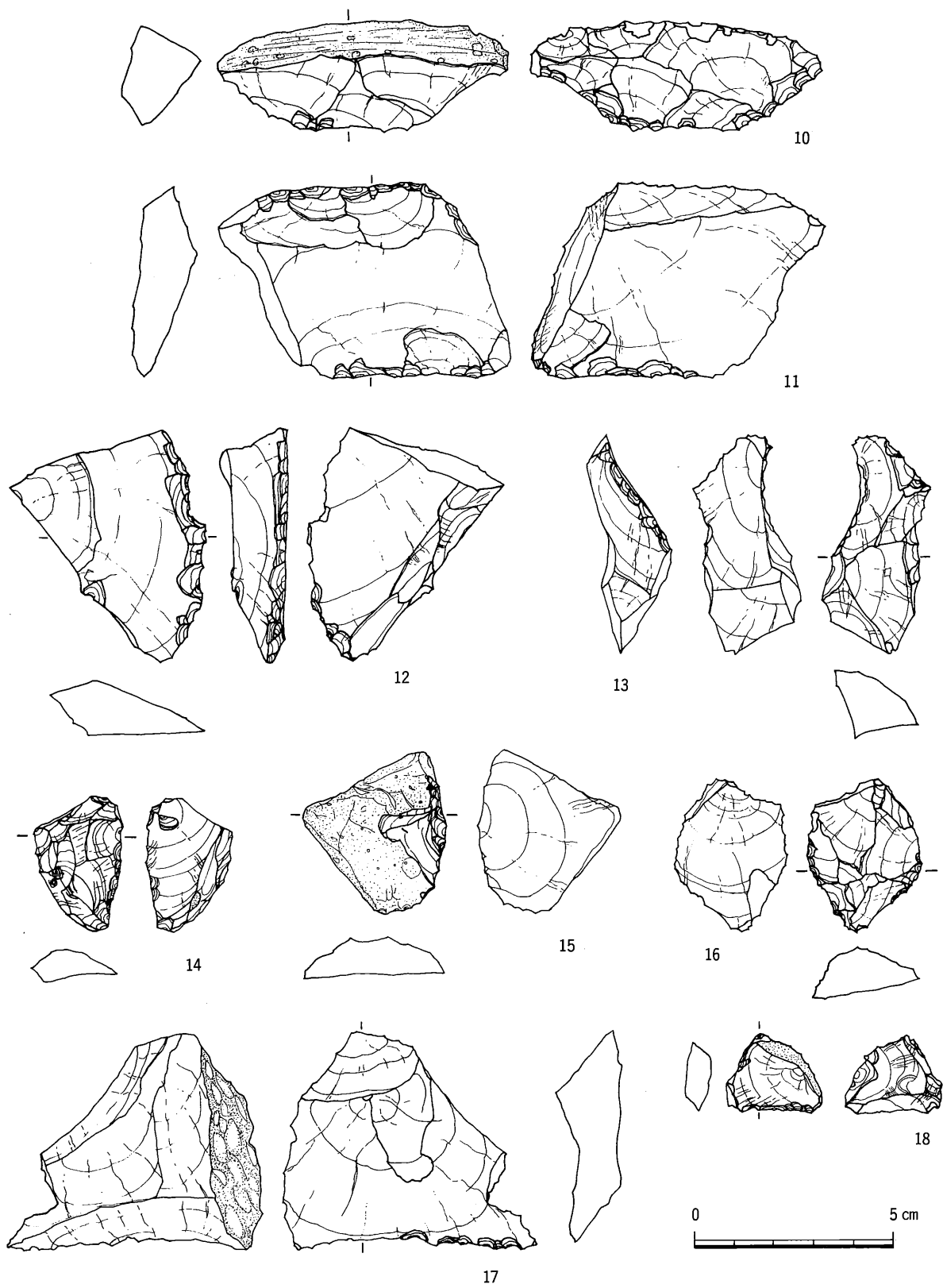
32～49は一方または両方の側面とも横方向からの剥離面であり、上下端を加撃した切断面を持たない。また、50～61にも切断面は確認されず、これらは切断面を持たない楔状石器、またはその残核であると思われる。出土点数は、切断面を持たないものが多い。

62は縦長剥片の上下端に簡単な調整を持つ。前述したような楔状石器ではないが、参考として図示した。

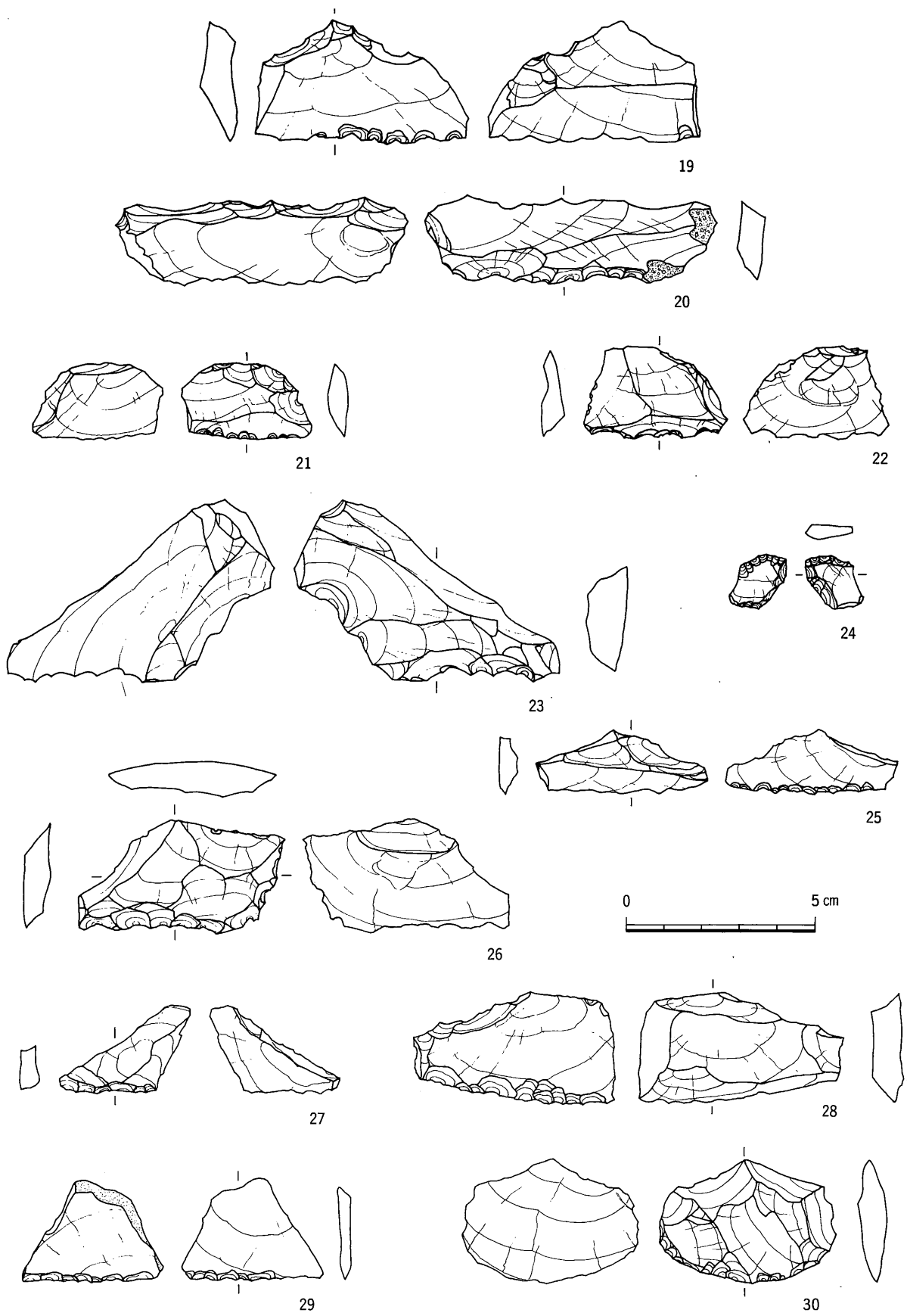
63～73は四角形を呈し、両面の縁辺に調整が加えられたものである。調整は粗雑なもの(72)もあるが、丁寧なもの(66・68・71)では両面のほぼ全周に及ぶ。角柱状ないし三角形状・四角形状をした楔状石器とその残核からみて、楔状石器の素材と考えられるが、65・70のように細かな調整が連続して丁寧に施されたものと削器を峻別することは困難である。一般に階段状剥離が顕著であるが、70のように階段状剥離が認められないものもある。



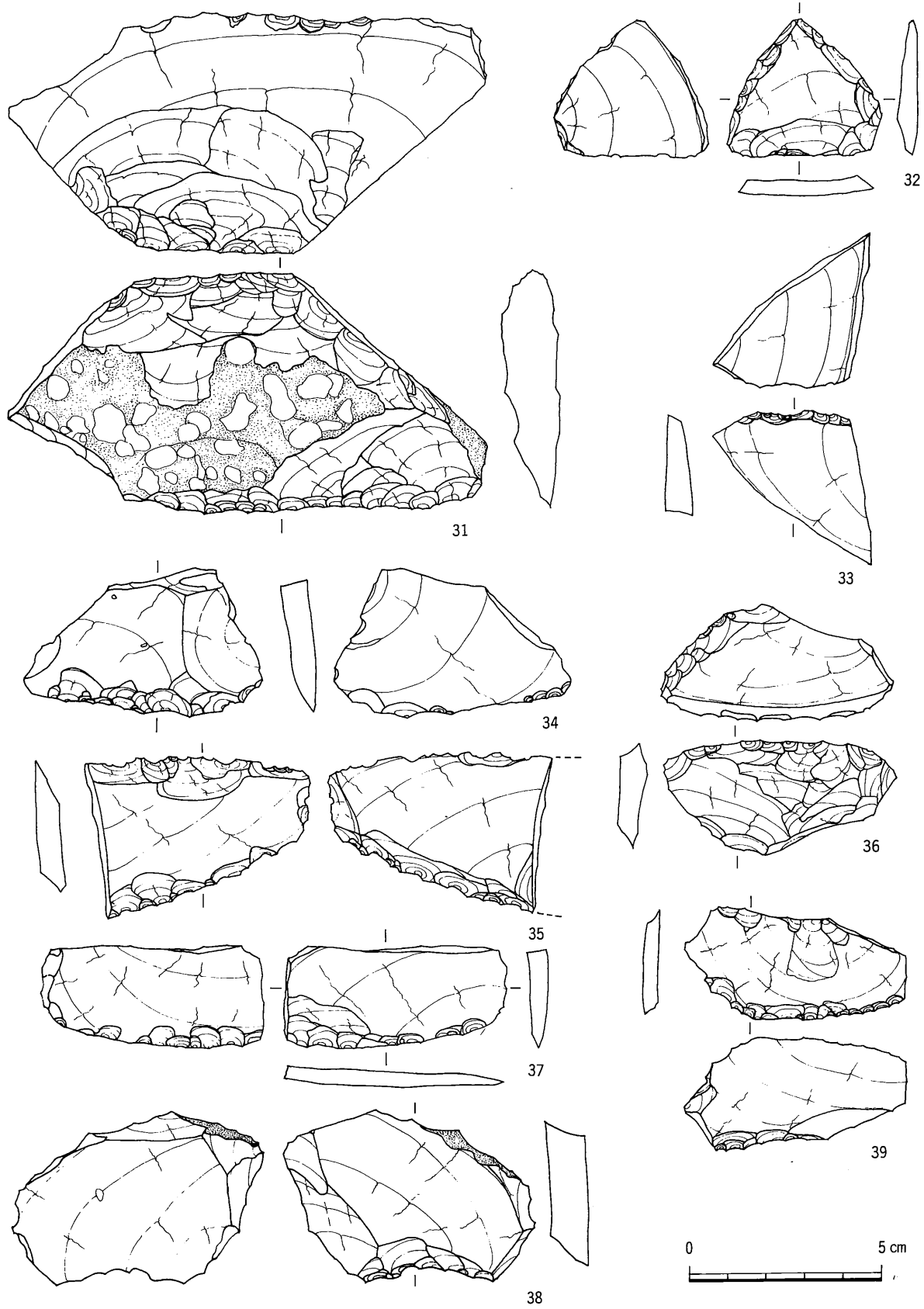
第 134 图 削器・搔器实测图 (1)



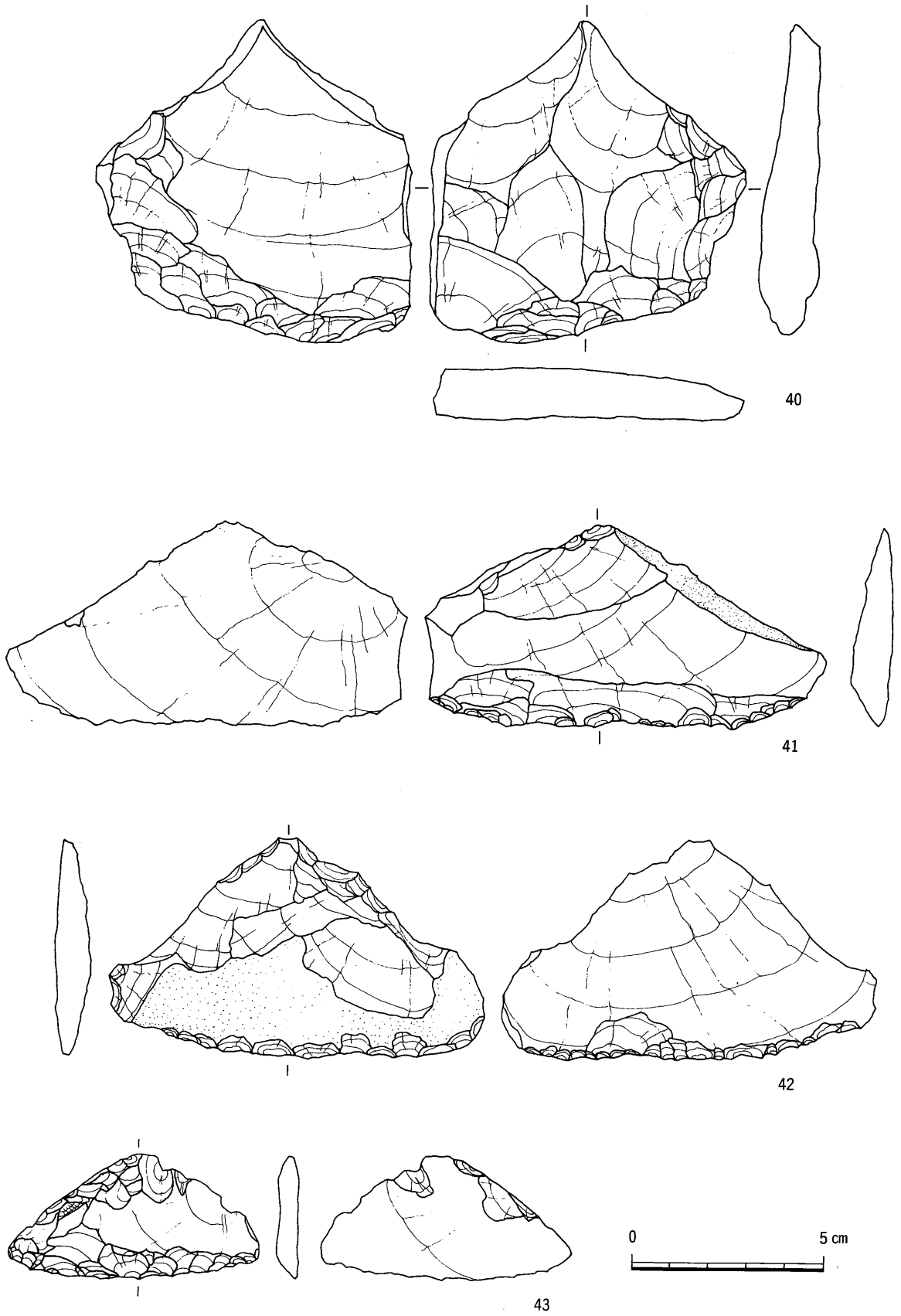
第 135 图 削器·搔器实测图 (2)



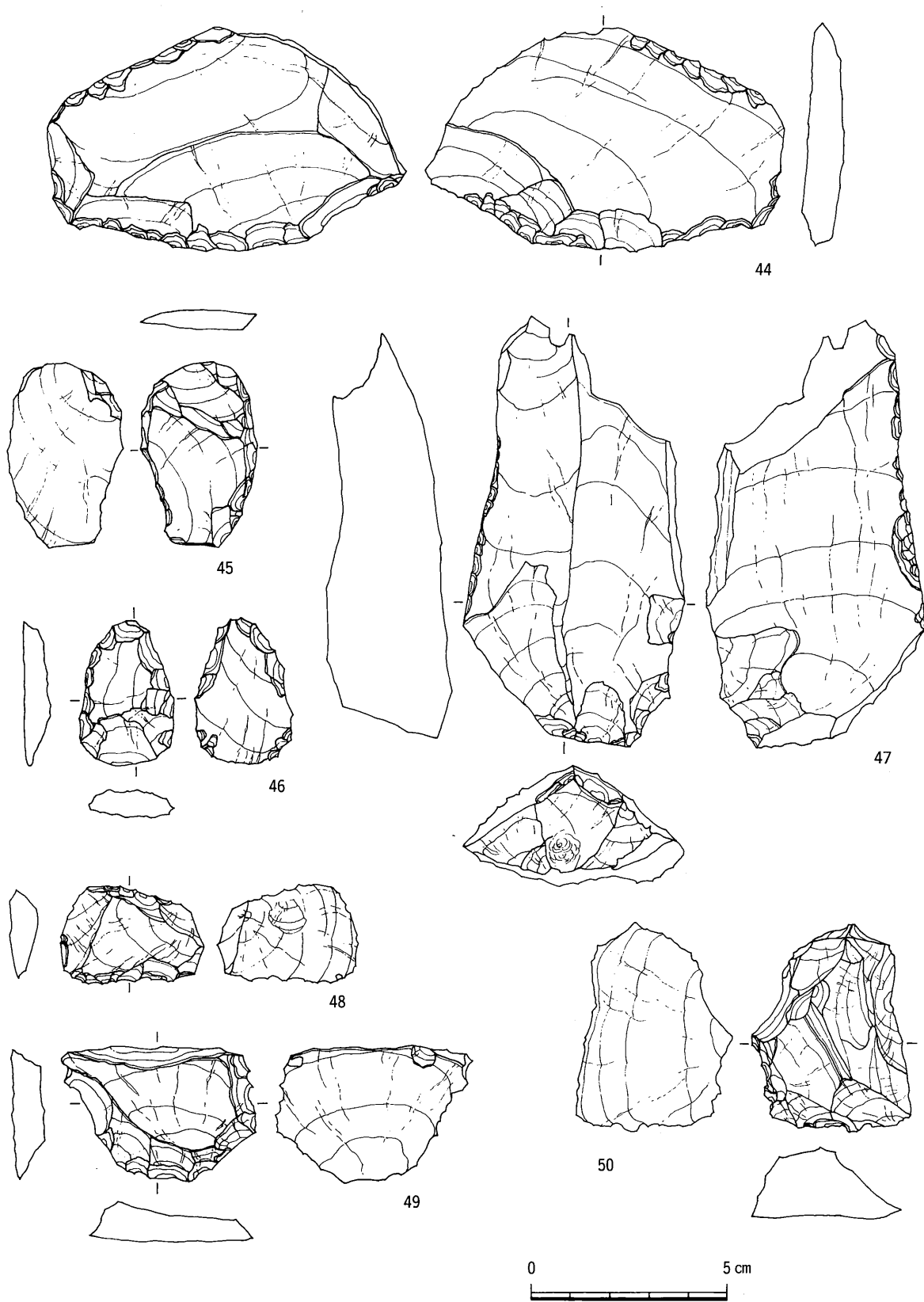
第 136 图 削器·搔器实测图 (3)



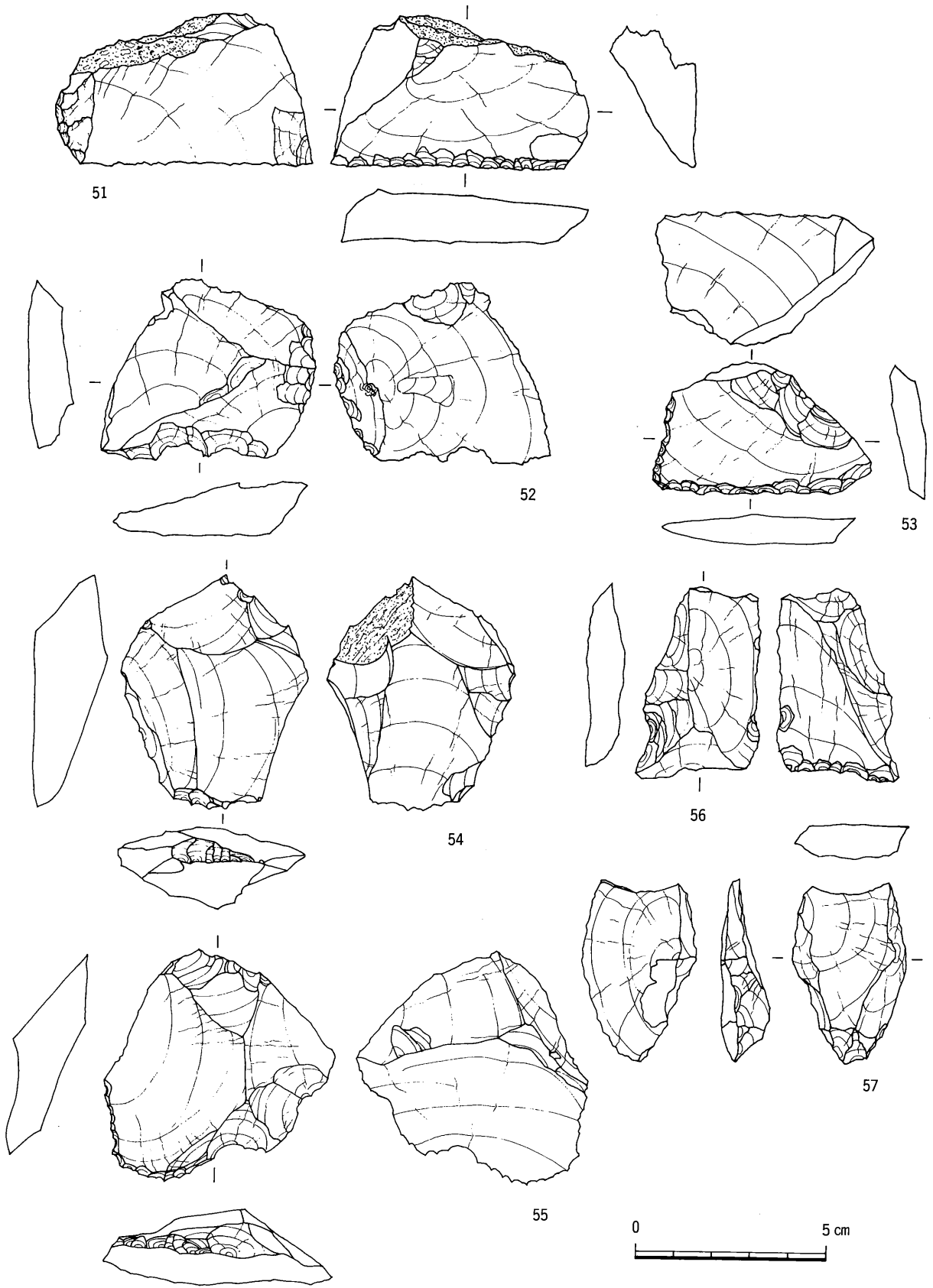
第 137 图 削器・搔器実测图 (4)



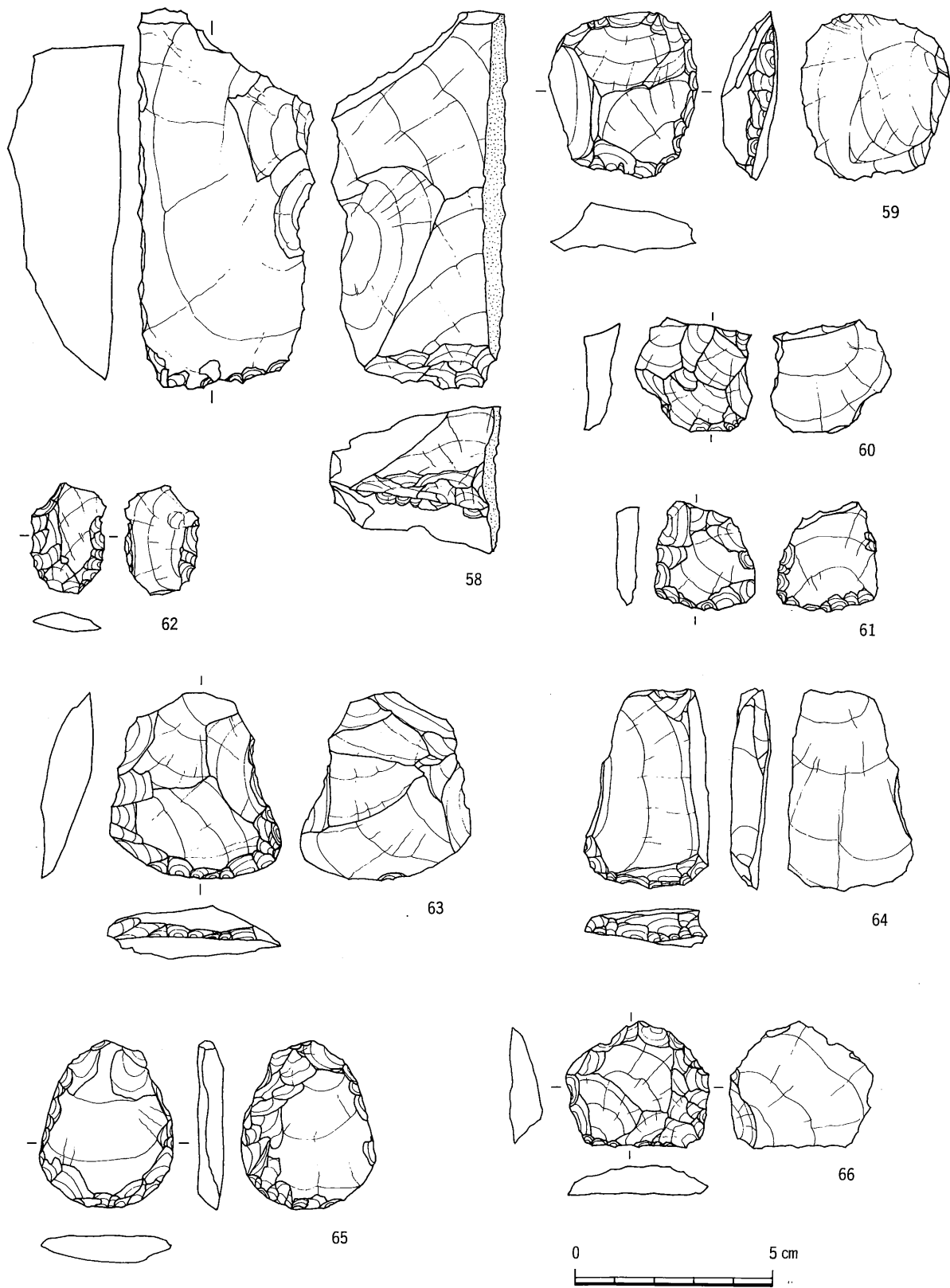
第 138 图 削器・搔器实测图 (5)



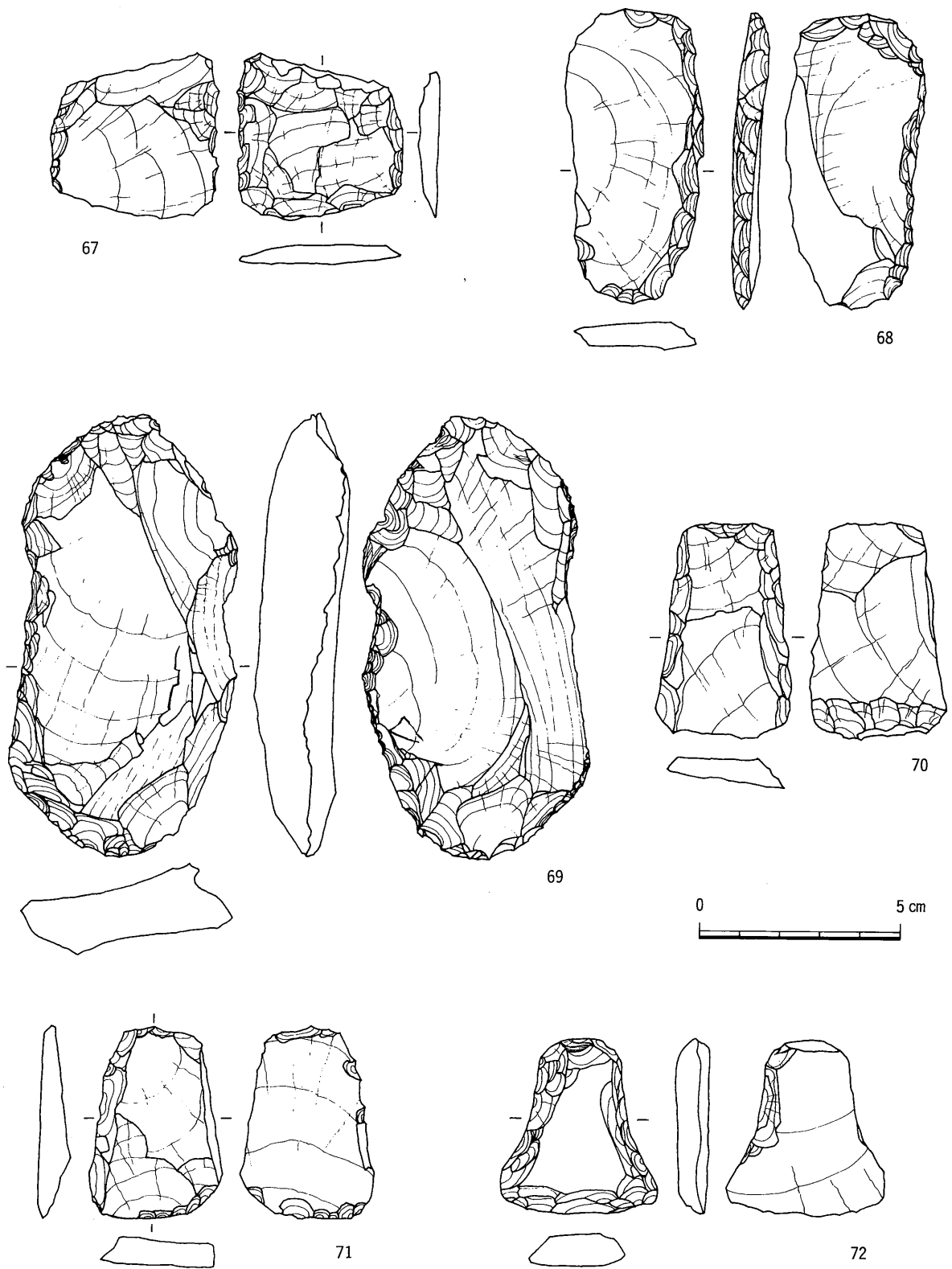
第 139 图 削器·搔器实测图 (6)



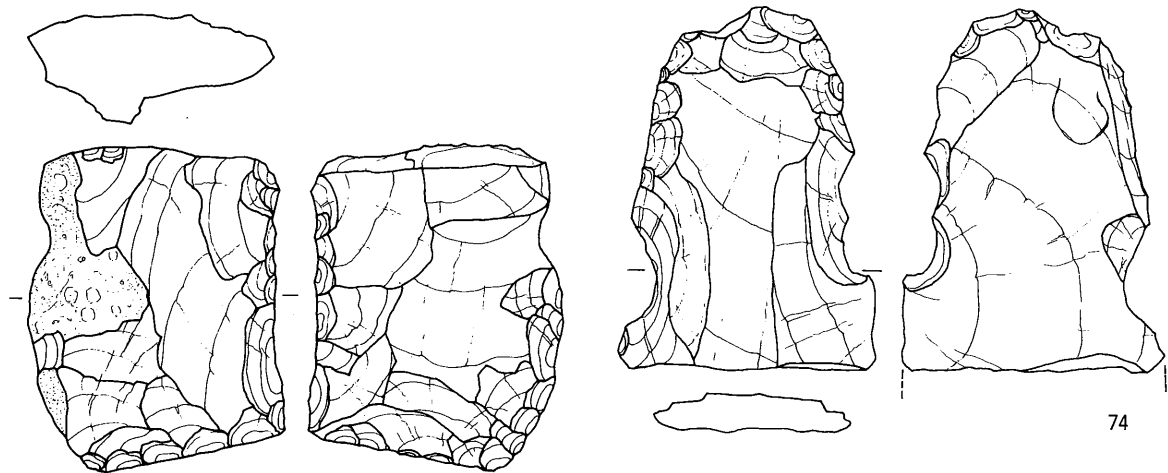
第 140 图 削器·搔器实测图 (7)



第 141 图 削器·搔器实测图 (8)

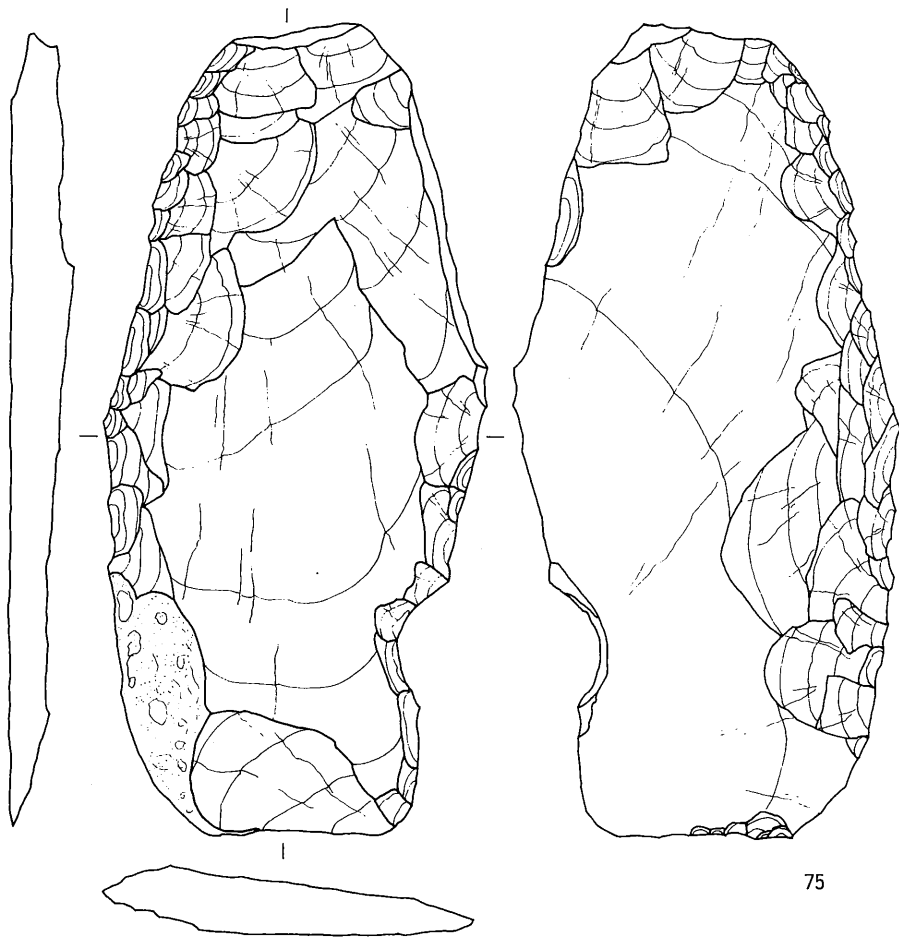


第 142 図 削器・搔器実測図 (9)



73

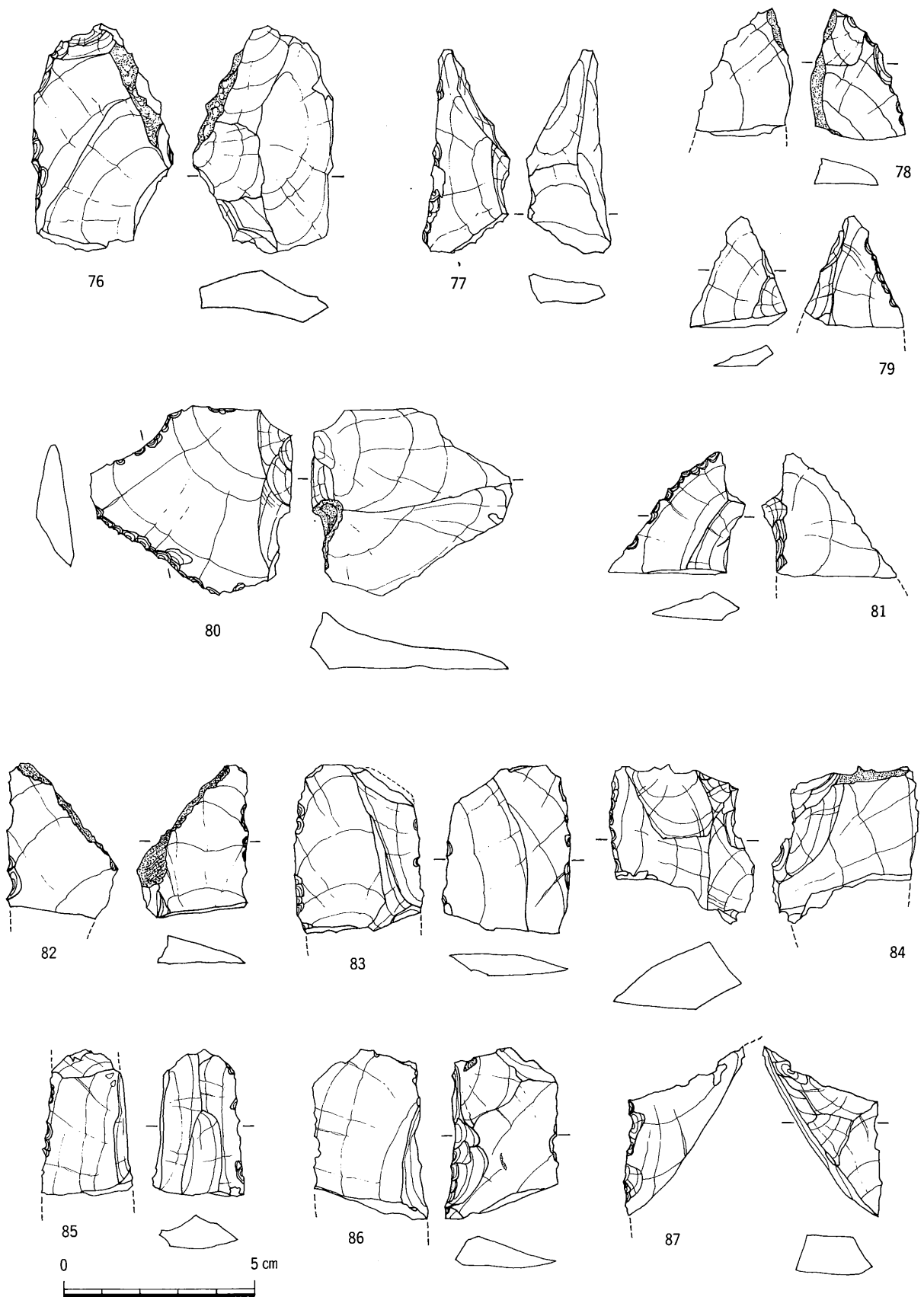
74



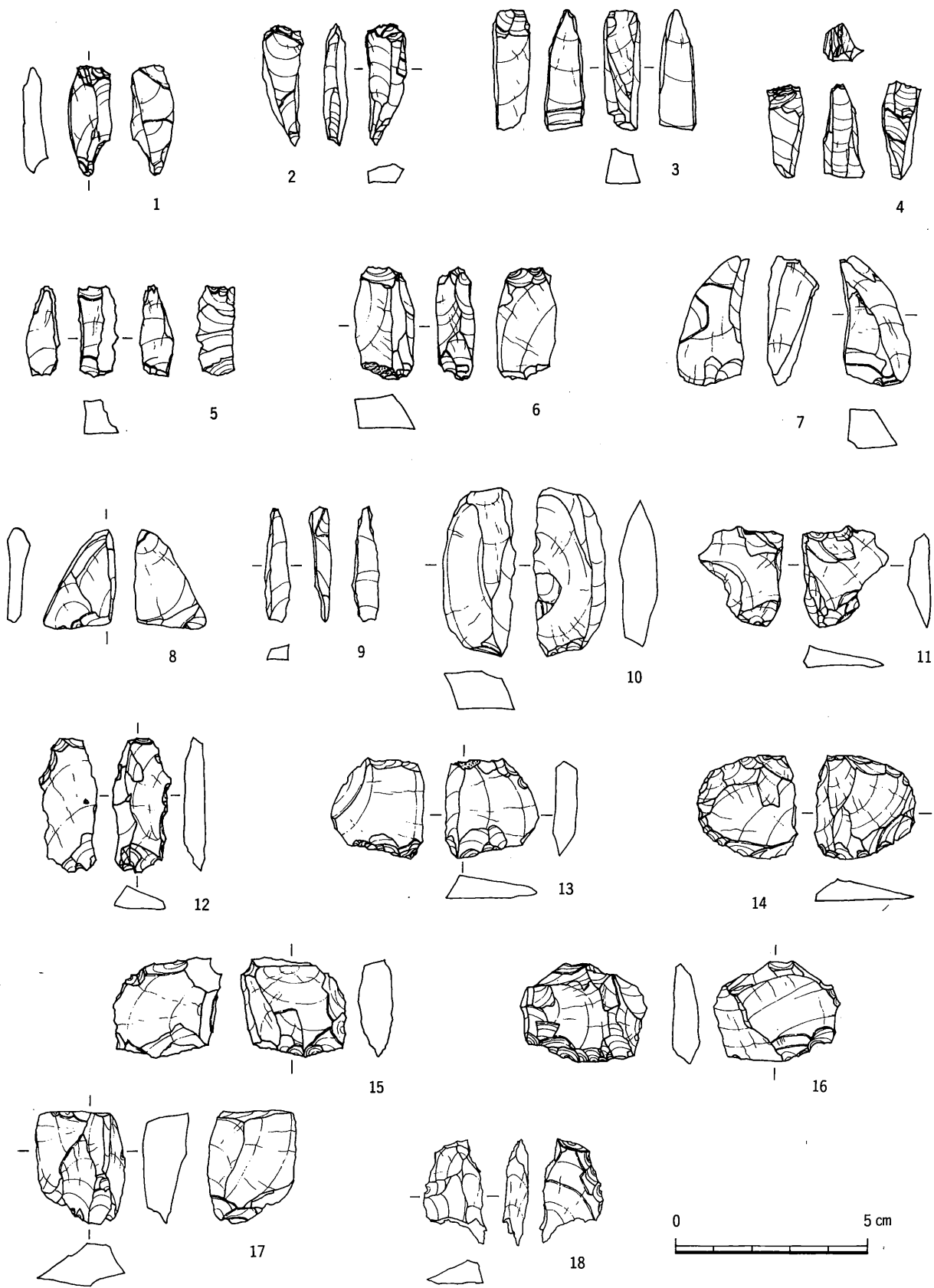
75



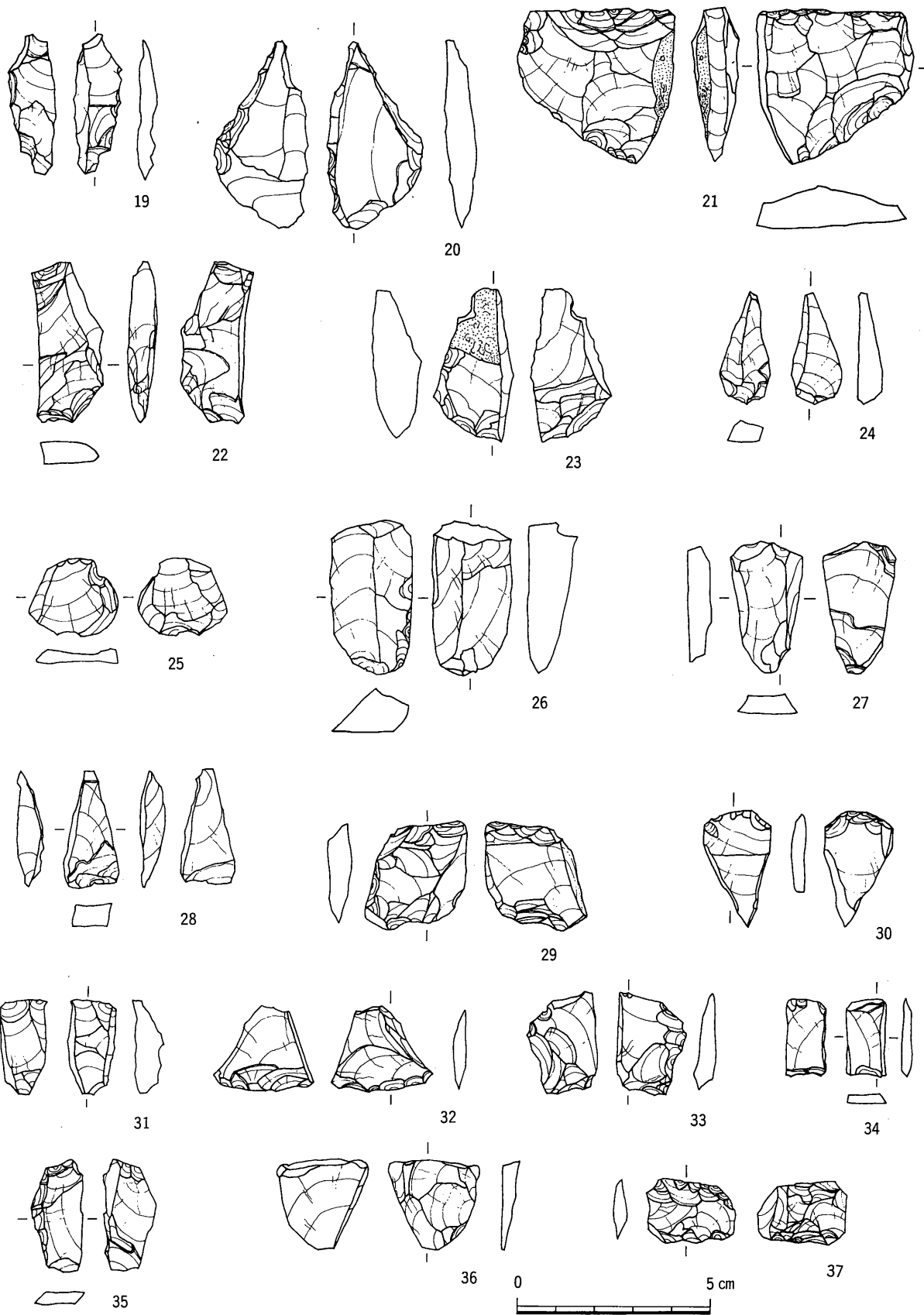
第 143 图 削器·搔器实测图 (10)



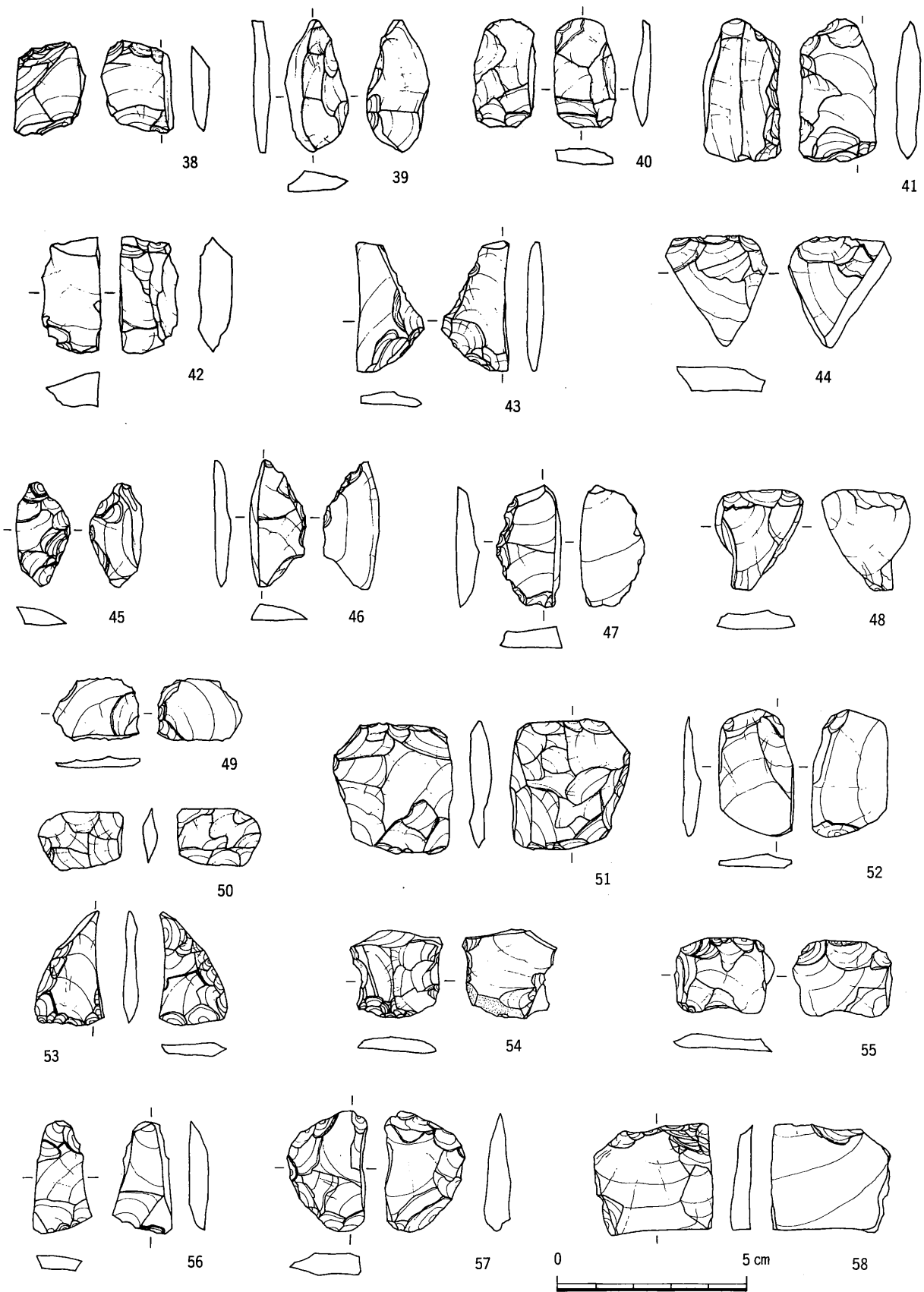
第 144 图 削器·搔器实测图 (11)



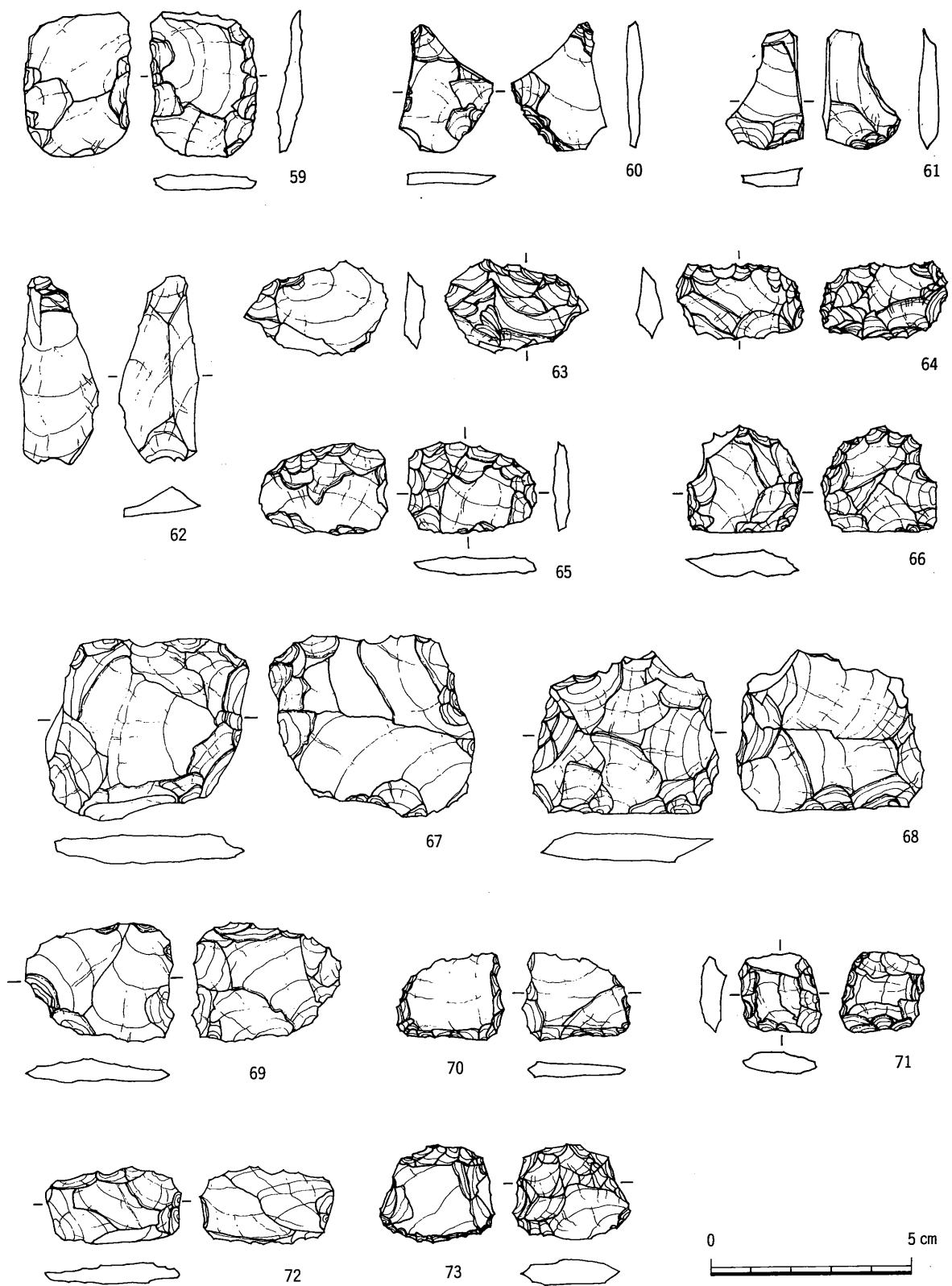
第 145 图 楔状石器实测图 (1)



第 146 图 楔状石器实测图 (2)



第 147 图 楔状石器实测图 (3)



第 148 图 楔状石器实测图 (4)

9. 二次調整ある剥片（第149図～第151図）

第149図1～6は、翼状剥片（2・3・5）や横長剥片（1・6）の打面部を加撃し、背面に細かな調整を加えたものである。翼状剥片に施されたこの種の調整は打面縁調整とされている註が、横長剥片にも同種の調整がわずかながら存在したことが知られる。図示したものは、調整が細かく丁寧なことや、6の上端では主要剥離面を切っており、4のように打面とは無関係な自然面などに施しているものもあることなどから、あるものについては削器や平刃型彫器としての機能が認められるかもしれない。

7は横長剥片の打面に背面側から細かな調整を加えている。主要剥離面の打点付近は折損しているが、下端に打面の一部が残されている。調整は主要剥離面を剥離する以前になされたものと思われる。

8は翼状剥片と思われる剥片の先端部に主要剥離面側から調整を加え、鋭く尖らす。

9は不定形の剥片の一辺に両側から調整を加え、先端を尖らす。石錐の一種か。

10は打面側の縁辺に背面側から調整を加える。ナイフ形石器か。

11は両側縁に錯行状の調整を施す。

12・13は背面に調整痕をもつ剥片である。調整は主要剥離面の剥離以前になされており、打面調整である。

14は翼状剥片に調整を加えたものである。上端は欠失するが、下端は主要剥離面側から調整し、同時に打面側から背面側に連続する丁寧な調整を施す。翼状剥片の打面側から背面に調整を行う点は2・3・5に共通する。

15は調整ある側縁部を剥離した剥片である。16～18は剥片剥離以前の調整を、19は剥離後の調整を側面に持つ。

20は両側縁に沿って下面側から調整を行う。上下両端を欠失した舟底形石器か。

21は主要剥離面側から打面に調整を加え、さらに背面にも細かな調整を行う。

22は周縁を調整して不定形な尖頭器状に加工する。周縁の調整は上部と下部、右側と左側でそれぞれ加撃方向を逆にする。

23は翼状剥片の打面部を主要剥離面側から調整すると共に、刃部側から主要剥離面に調整を施す。

24は背面側から調整を施したナイフ形石器か。

25は片面にのみ両側から調整を加える。裏面には先端側を打点とする縦長剥片の剥離痕を持つ。サヌカイトの風化は著しい。

26は鋭いエッジに調整が加えられている。

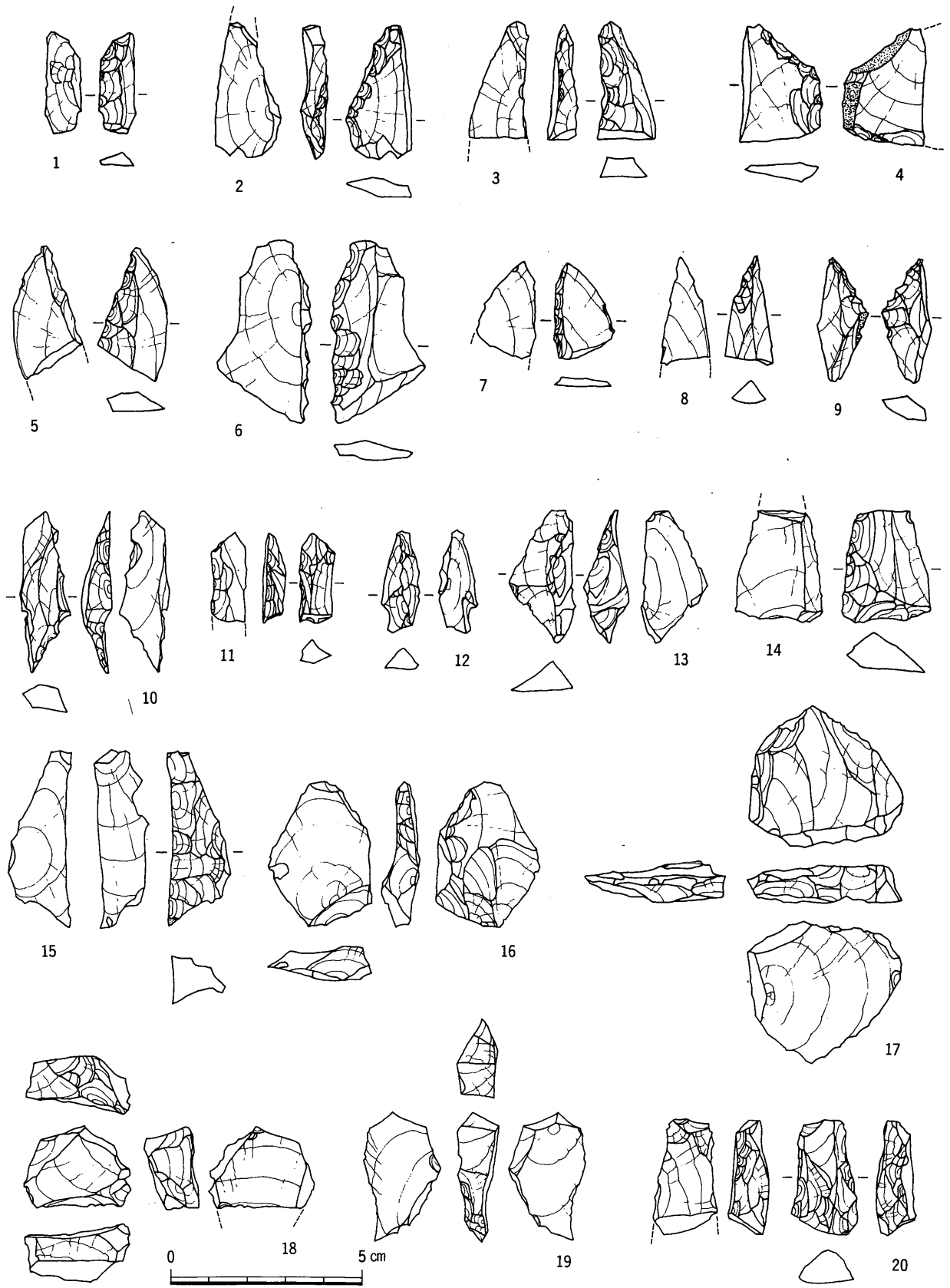
以上の遺物はサヌカイトを用いたものであるが、27～39は玻璃質安山岩、40は流紋岩と思われる石材を用いる。

27～32・34・35・39は不定形な剥片の縁辺にわずかな調整を持つ。調整はほとんどの場合、主要剥離面側からなされているが、逆のもの(30)や、ネガティブな剥離面の打点付近になされたもの(27)もある。33は細石核の転用か。

36は楔状石器とすべきであろうか。

37は打面に調整を持ち、38は先端部に調整を施して鋭く尖らす。8・9と同種のものか。

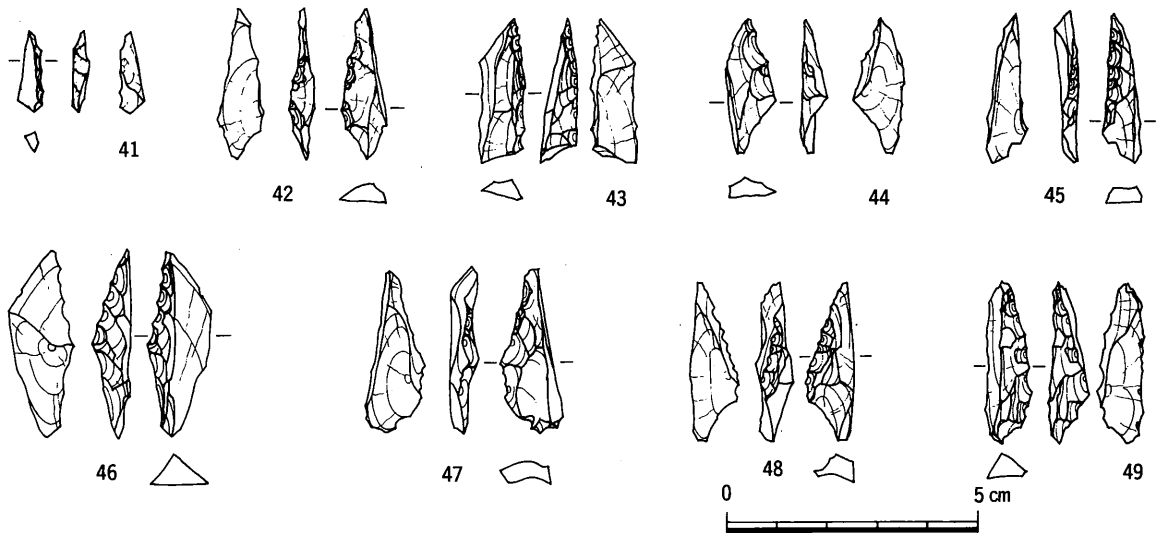
40の背面には、上下から剥離された細石刃様の剥離痕を持つ。この上下の打面には背面側から調整が加えられ、削器状の刃部をなす。打面調整剥片の利用か。



第 149 図 二次調整ある剝片実測図 (1)



第 150 図 二次調整ある剝片実測図 (2)



第 151 図 二次調整ある剝片実測図 (3)

第151図41～49は主要剝離面の加撃が二次調整と同じ方向であり、しかも二次調整面のごく近くに行われていることから、調整途中において、ナイフ形石器の先端部が加撃によって斜めに切断されたものと考えられる。

43は主要剝離面の打点部分を欠失する。

45は翼状剝片の打面調整がわずかに認められるが、他は一応の二次調整が施されたのちに加撃されている。

41は長さ1.57cm、46は最大で長さ3.65cmを計る。

註

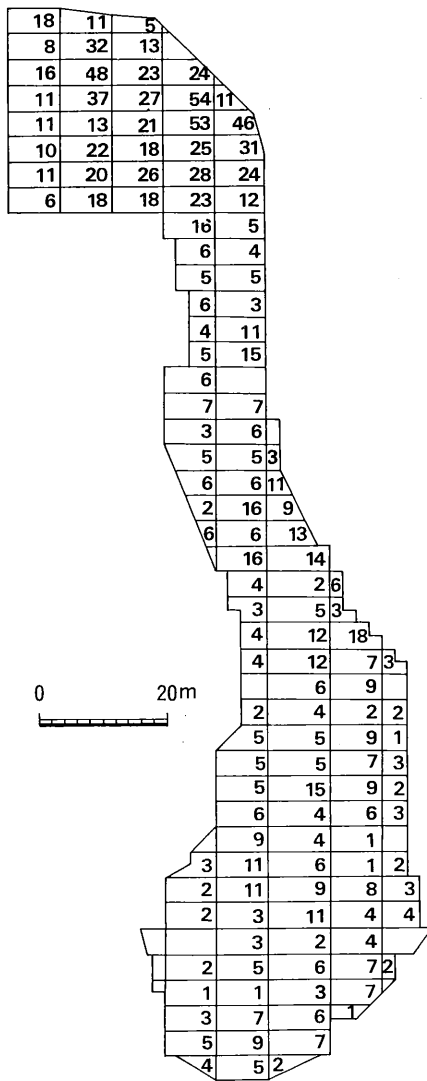
堀田啓一・松藤和人・柳田俊雄・古森政次・麻柄一志・佐藤良二『二上山・桜ヶ丘遺跡』 1979 奈良県教育委員会

10. 横長剝片石核 (第155図～第211図)

ここでいう横長剝片石核とは、翼状剝片を含む横長剝片を剝離した石核を指す。今回の調査によってグリッドの明らかなものが1,390点出土したが、そのうちの55.7%にあたる774点はA35列以北からの出土である。なかでもA39-2から54点、A38-2から53点が出土して最も多く、両グリッドを中心にして特に濃密な分布が認められる (第20表)。

この集中地点以外では20点以上出土したグリッドはないが、1グリッドあたり10点以上出土したのものとして、B7・A8-1・A9-1、B12、B17・B18・C18-1、B21・A21-1・B22・A23-1・B24、A29-1・A30-1の5地点があって、ここでも出土がやや集中する傾向を示す。以上の横長剝片石核の出土傾向はナイフ形石器や翼状剝片と類似するが、縦長剝片や縦長剝片石核・尖頭器・細石刃・細石核などとは異なる。

出土した横長剝片石核はサヌカイトが最も多かったが (1～387・398)、玻璃質安山岩が6点 (388～393)、流紋岩と思われる石材を用いたものが4点 (394～397)、チャートが1点 (399) あった。なお、サヌカイト以外では流紋岩と思われる石材を用いた翼状剝片石核が2点あった。



第 20 表 横長剥片石核出土分布表

調整は、片面の縁辺のみに施されるのが基本であり、これは前述した削器の観察結果とも矛盾しない。また、167は翼状剥片石核転用の石錐であると考えられる。

図示した横長剥片石核のうち、サヌカイト製の石核をみると、1～135・137～153・155～158・161～165・192・241・248・282・298・325は翼状剥片石核とすることができ、翼状剥片石核にも多様性が認められる。また、136・154・159・160・166～191・193～198・239・295・324は同一石核上において翼状剥片を剥離すると同時に横長剥片をも剥離している。

同一の石核から翼状剥片しか剥離しないもの（1～135・137～153・155～158・161～165・241・248・282・298・325）をみると、典型的なものは、上面に山形の打面調整を施して底面は1面のポジティブな剥離からなり、盤状剥片の打点側から連続して、石核の幅に相当する翼状剥片を剥離している。羽佐島遺跡から出土した翼状剥片石核にはこれが最も多いが、これに対して打面調整が顕著な山形にならないもの（84～87など）、山形になった石核の上面をそのまま利用して打面調整を一部にしか施さないもの（88・89・150・151など）、石核の上面をそのまま利用したもの（152・153・155など）、底面が複数からなるもの（63・110^註など）、底面が自然面からなるもの（95・99など）、盤状剥片を剥離した打撃に対して直角の方向から翼状剥片を剥離する

横長剥片石核には、二次調整を施して削器・搔器に転用したものが少なくない。横長剥片石核として図示した399点の中で削器及び搔器に転用したものが30点あるので、全体では約100点前後になるものと思われる。そのうちのいくつかは前述したが、図化したものの大部分はここで紹介する。

39・44・104・119・122・129・217・240・258・264・269・294・322・327・341・356・368・371・386の19点は、削器又は細部調整石器と考えられる。このうち、39～129の6点は翼状剥片石核の転用であり、217は翼状剥片石核の可能性のある石核を、240～386の12点は横長剥片石核を用いている。また、90・108・116・181・182・203・235・312・359・370・389の11点は搔器であり、そのうち90～182の5点は翼状剥片石核を203・235は翼状剥片石核の可能性のある石核を転用している。剥片を利用したものに比べて、搔器の比率が高いようである。372の縁辺にみられる微小な剥離痕は、使用痕である可能性もある。

以上の削器・搔器のうち大部分は片面にのみ調整が施されているが、削器とした4点（122・129・327・386）は両面に調整が認められる。しかしながら、それらの調整をみると、片面の調整は少なく粗雑であったり（122・386）、裏面と重ならないように場所を変えて施しており（129）、両面から比較的丁寧に調整を行っているのは327の1例のみである。

したがって、旧石器時代における削器・搔器の調

もの(57・82など)、盤状剥片の打点の反対側から剥離するもの(84など)、打面転移が認められるものがある。打面転移が認められる翼状剥片石核には、底面を共有して上面の両側縁、あるいは任意の二側縁に打面調整を施して翼状剥片を剥離するもの(137~146・163・282・325)と、二側縁から翼状剥片を剥離するが、打面が反対側になるため、錯行状の剥離となるもの(135・148・161・162・164・165・192)がある。前者の場合、剥離の最終段階には翼状剥片の剥離が重なり、他の翼状剥片の剥離面が底面となることがある(137・140・141・143・144)。また、各々の翼状剥片石核においても、石核の末端から剥離された翼状剥片は複雑な様相を示す。なお、147は一側縁から打面調整を異にした翼状剥片を2枚剥離した例である。

以上の翼状剥片石核はさらに、連続して断面四角形の翼状剥片を剥離したものと、打撃の力が底面に達せず断面が三角形を呈するものや、打点がずれたり、打撃の失敗などによって、背面に複数のネガティブな剥離面を持つ翼状剥片が剥離されたものの別が生じる。

したがって、以上の翼状剥片から作られたナイフ形石器には、腹面と背面のネガティブな剥離面・底面が1面ずつで構成され、断面が四角形をなす典型的な国府型ナイフ形石器のほかに、底面や背面のネガティブな剥離面が複数のもものや、底面が刃部側から剥離されたネガティブな剥離面からなるもの、断面が三角形のものなども含まれる。したがって、翼状剥片石核からは、必ずしも国府型ナイフ形石器のみが生産されるとは限らないのである。

136・154・159・160・166~198・239・295は同一の石核から翼状剥片と横長剥片を剥離している。横長剥片の剥離は無調整の打面を加撃して行うものが多いが、136・188~191・193・239・324は瀬戸内技法と交互剥離技法が同一石核に認められるので注目される。

199~236・242は打面調整の大きな翼状剥片石核とみることができ、打面調整が大きいため、形態的に交互剥離石核と区別しがたい面があり、同時に打面調整によって剥離された剥片が比較的大きいため、これらがナイフ形石器の素材として利用された可能性も否定できない。したがって、これらは翼状剥片石核と共に、交互剥離石核の可能性も考えておきたい。

そのうち、237・240・244~246・249・251~273・323は石核の表裏から1枚ずつ、目的とする大きな横長剥片を剥離している。こうした交互剥離石核から剥離された横長剥片には、断面が四角形を呈し、背面に大きなネガティブな剥離面を持つものが含まれるので、打点部を二次調整で除去すれば、国府型ナイフ形石器と同形態のナイフ形石器を製作することは可能であると考えられる。しかも、244・246・249・252・253などからは、片側のみ打面調整がきわめて大きいものの、翼状剥片と同形態の横長剥片を剥離することもできる。交互剥離石核には、以上のように一側縁の表裏で1枚ずつの横長剥片を剥離するもののほか、一側縁で複数の横長剥片を剥離するもの(274~281・286・288~294・296~299)、両側縁で剥離するもの(283~285・287・300~302)などがあり、さらに交互剥離の作業面以外から剥離を行ったもの(304~322・326~334)などがあり、複雑な様相を示す。

335~348・350~363・374・379・387は、不定方向から表裏にわたって横長剥片を剥離した石核である。これから生産された剥片は、一般に小さく不定形である。

349・364~373・375~378・380~385は、無調整の平坦な打面を加撃して横長剥片を剥離する。無調整の平坦な打面を加撃して横長剥片を剥離する例は、翼状剥片石核にも、交互剥離石核や横長剥片を剥離する石核にも不定方向から表裏にわたって伴っているが、ここに挙げたものは他の技法を伴わない。

小さな剥片を石核としたもの(366・376・378)があることからみて、1つの石核から数多く

の横長剥片を剥離したものではない。また、剥離された剥片も小さく不定形である。

398は一辺を残して周囲から小形の横長剥片を剥離している。円盤状石核に似るが、不定方向から表裏にわたって横長剥片を剥離した石核に含めておきたい。

388～393は玻璃質安山岩製の横長剥片石核である。391・393からは横長剥片と共に縦長剥片も剥離しているが、縦長剥片のみを剥離した玻璃質安山岩製の石核は出土しなかった。388・389・392は交互剥離石核であり、390は表裏にわたって不定方向から横長剥片を剥離した石核であり、391・393は縦長剥片の剥離も行っているが、390に近いものであろう。

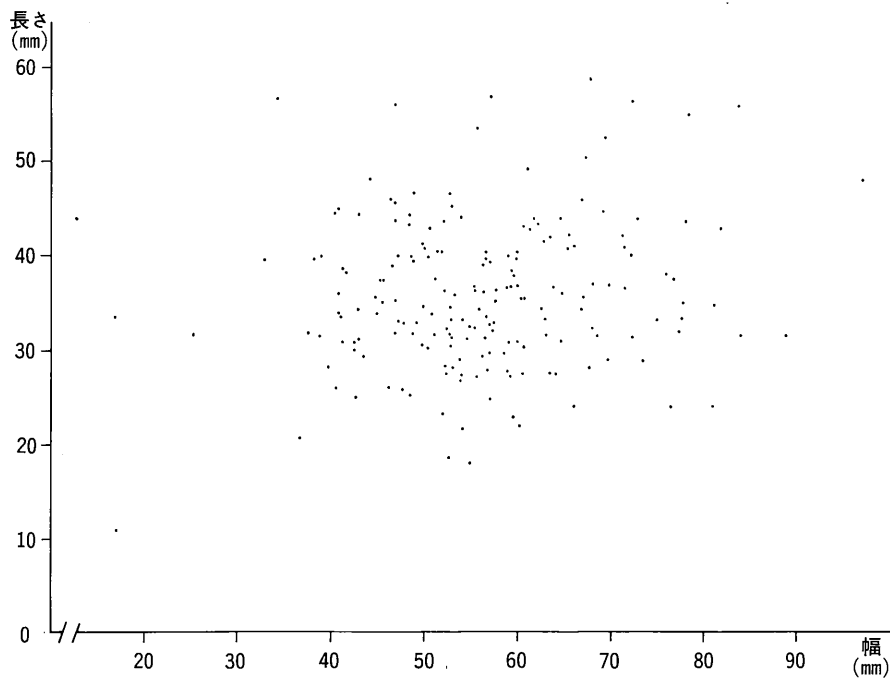
なお、玻璃質安山岩製の翼状剥片石核や国府型ナイフ形石器は出土しなかったが、原石（第323図75・第324図77）の大きさからみても、玻璃質安山岩で国府型ナイフ形石器を作ることは無理であろう。

394～397は流紋岩と思われる石材を用いており、394・395は翼状剥片石核、396は交互剥離石核、397は未調整の平坦な打面から横長剥片を剥離した石核である。なお、この石材は全体で約180点しか出土していないが、国府型ナイフ形石器や削器・石鏃なども出土していることから使用期間は長期にわたったことを知ることができる。

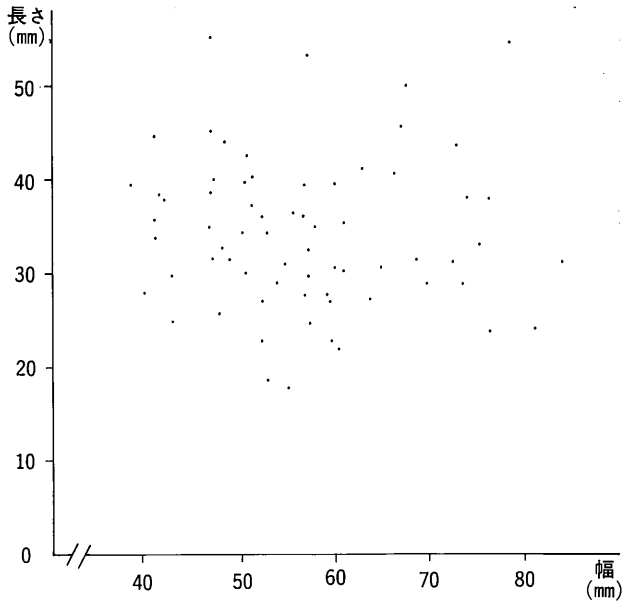
399はチャート素材としたもので、石核の側面・後面・下面は丁寧に調整が施されている。1枚の大きな剥離面からなる打面を加撃して、小形の横長剥片が剥離される。

以上の横長剥片石核の残核のうち、完形品の大きさをみると、幅約4～8cm、長さ約2.5～4.5cm程度の大きさが最も多いが(第21表)、いま仮に、翼状剥片石核を1～135・137～148に限り、横長剥片石核を237・238・240・242～247・249～281・283～294・296・297・299～323・326～393・396・397に限ると、両者の石核の大きさはほとんど差が認められない(第22・23表)。

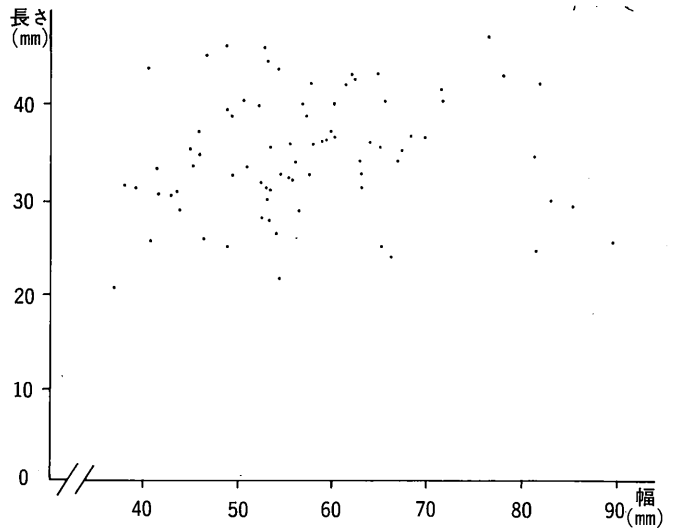
一方、全体の石核について、目的としたと思われる剥片の剥離痕の大きさをみると、第24表のように、幅約3～5cm、長さ約1.2～2.5cmであるが、同様に限ってみると、翼状剥片石核では約3～5cm、長さ約1.2～2.5cmの範囲が多いものの、幅5cmを越えるものは少ない(第25表)。一方、横長剥片石核の場合は、幅約2.6～4.6cm、長さ約1～2.5cmの範囲に集中し、幅が5cmを



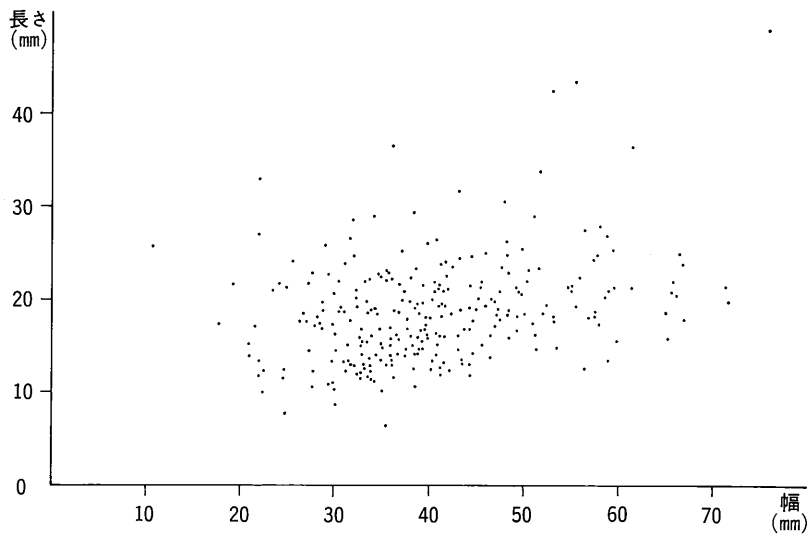
第21表 翼状剥片石核・横長剥片石核の長幅比



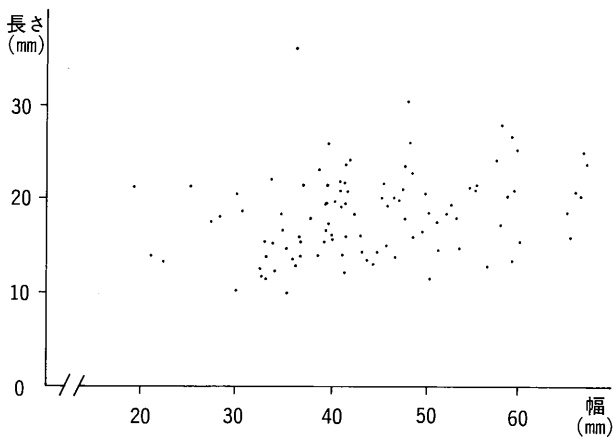
第 22 表 翼状剥片石核の長幅比



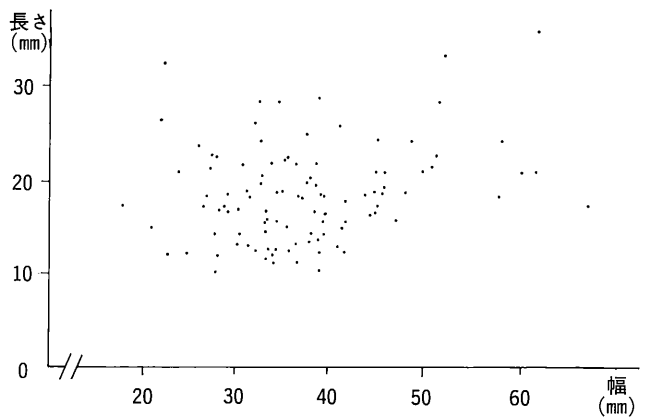
第 23 表 横長剥片石核の長幅比



第 24 表 横長剥片石核における剥片剥離痕の長幅比



第 25 表 翼状剥片剥離痕の長幅比

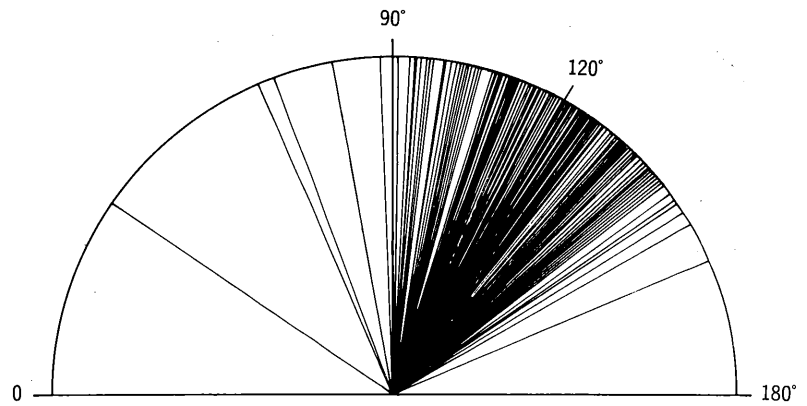


第 26 表 横長剥片剥離痕の長幅比

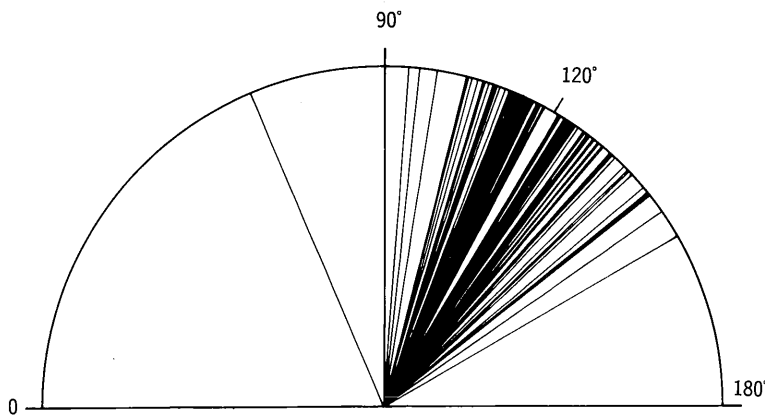
越えるものは非常に少なくなっている (第26表)。

また、剝離角度をみると、図示した石核のなかで計測しえたものすべてをまとめると第152図のようになり、120°を中心として、101°~140°の間に約83.6%が含まれる。これも同様に翼状剝片石核と横長剝片石核に分けると、両者とも111°~120°の間が最も多く、剝離角度が全体

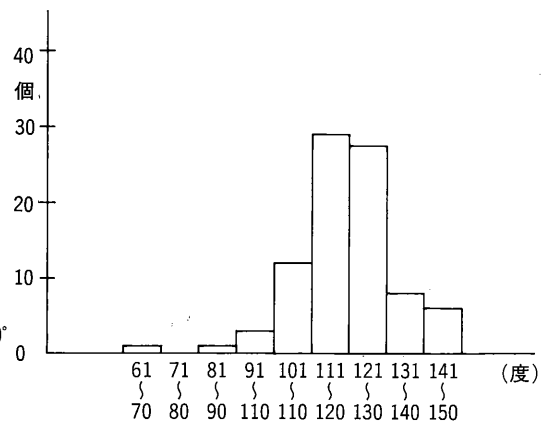
にやや小さくなるものの、101°~140°の間に翼状剝片石核で約87%、横長剝片石核で約86%が集中する (第153・154図、第27・28表)。これを各々の剝片と比較すると、最も多い101°~140°に集中する割合はほとんど変わらないが、横長剝片 (第33表) では121°~130°の剝離角度が特に多く、全体に剝離角度はやや大きい傾向を示す。



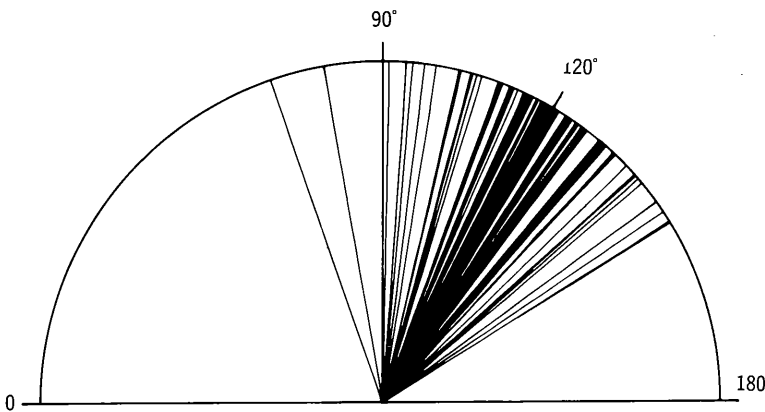
第 152 図 横長剝片石核及び翼状剝片石核の剝離角度分布図



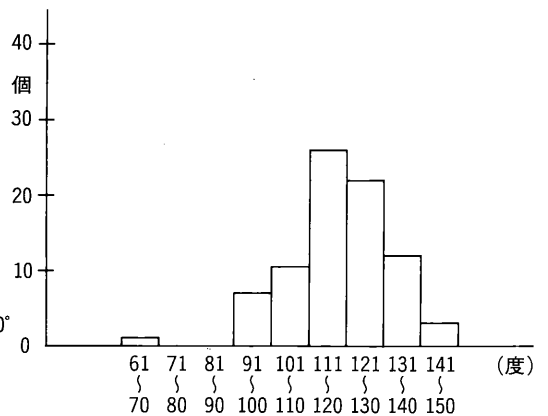
第 153 図 翼状剝片石核剝離角度分布図



第 27 表 翼状剝片石核の剝離角度分布表

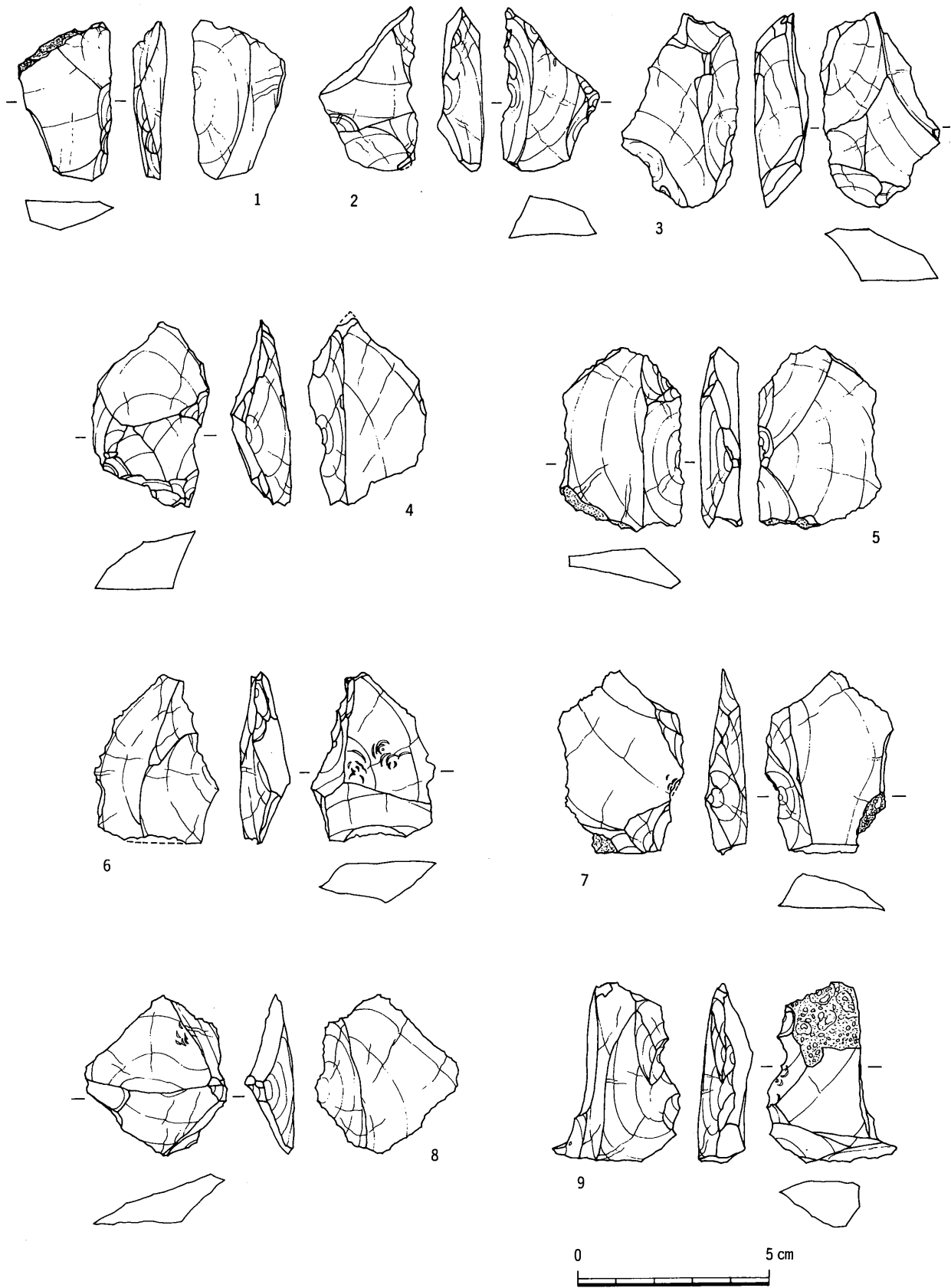


第 154 図 横長剝片石核剝離角度分布図

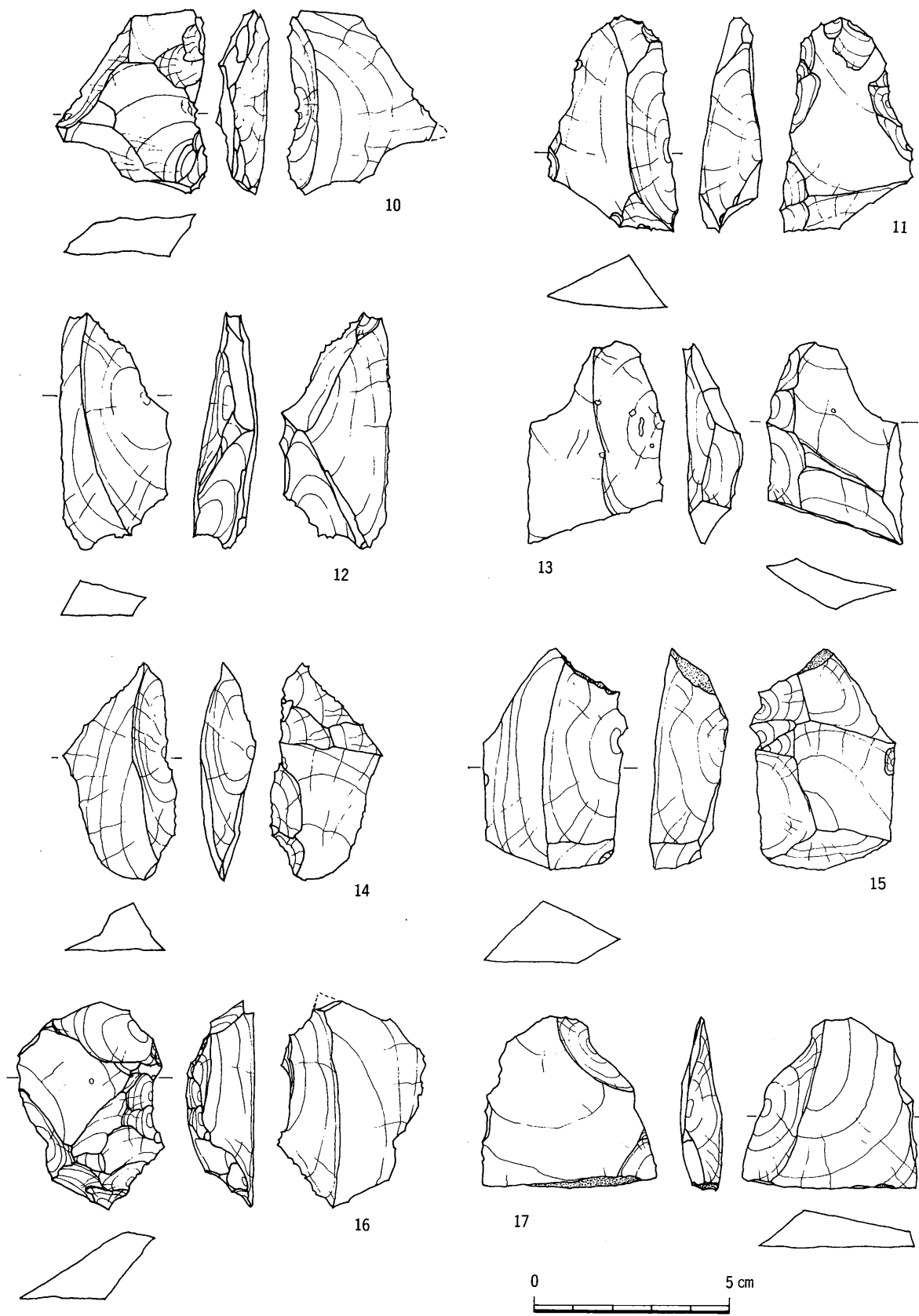


第 28 表 横長剝片石核の剝離角度分布表

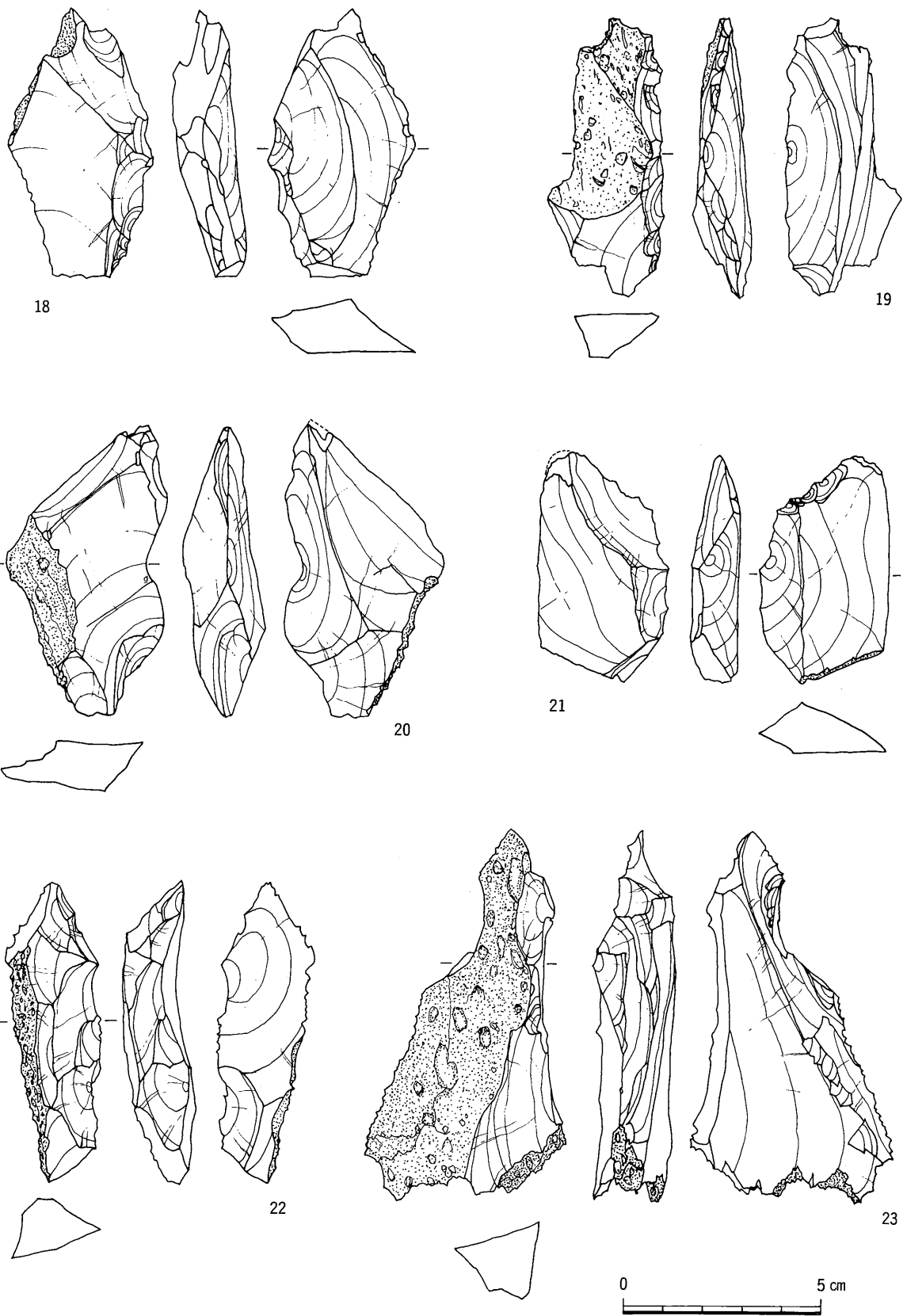
註 石核の末端ほどその傾向が強いものと思われる。



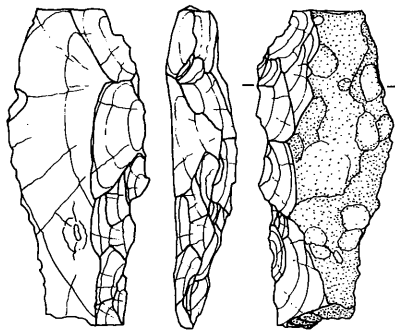
第 155 図 横長剥片石核実測図 (1)



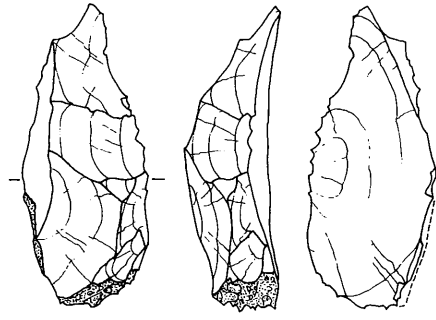
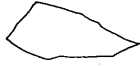
第 156 図 横長剝片石核実測図 (2)



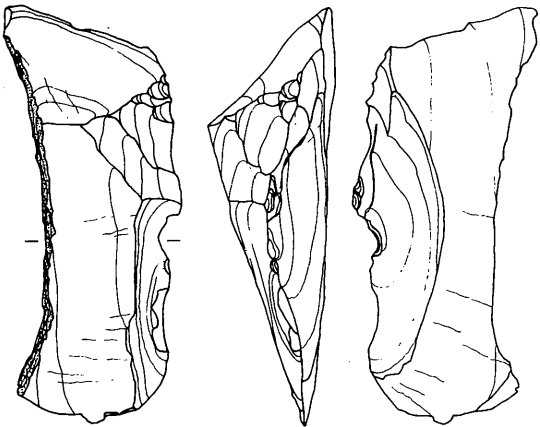
第 157 図 横長剝片石核実測図 (3)



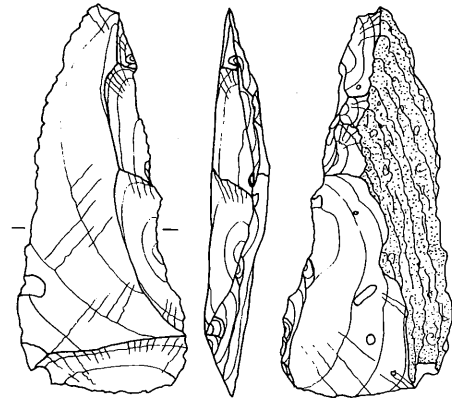
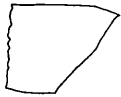
24



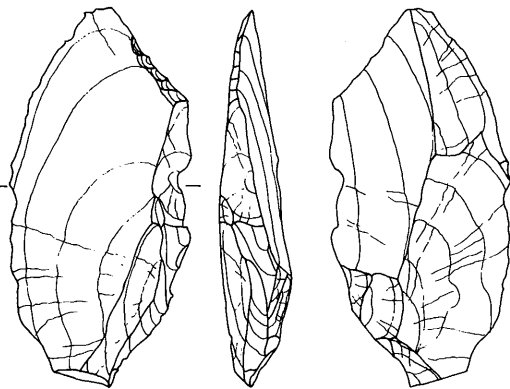
25



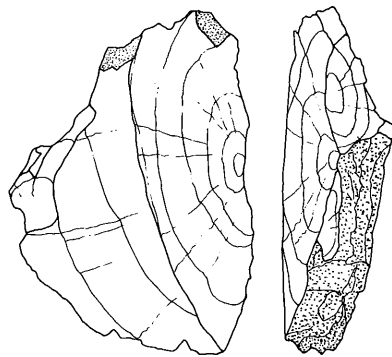
26



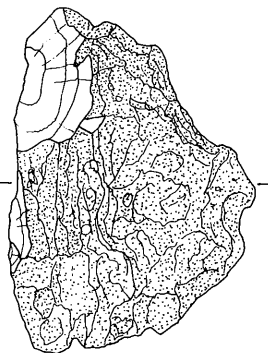
27



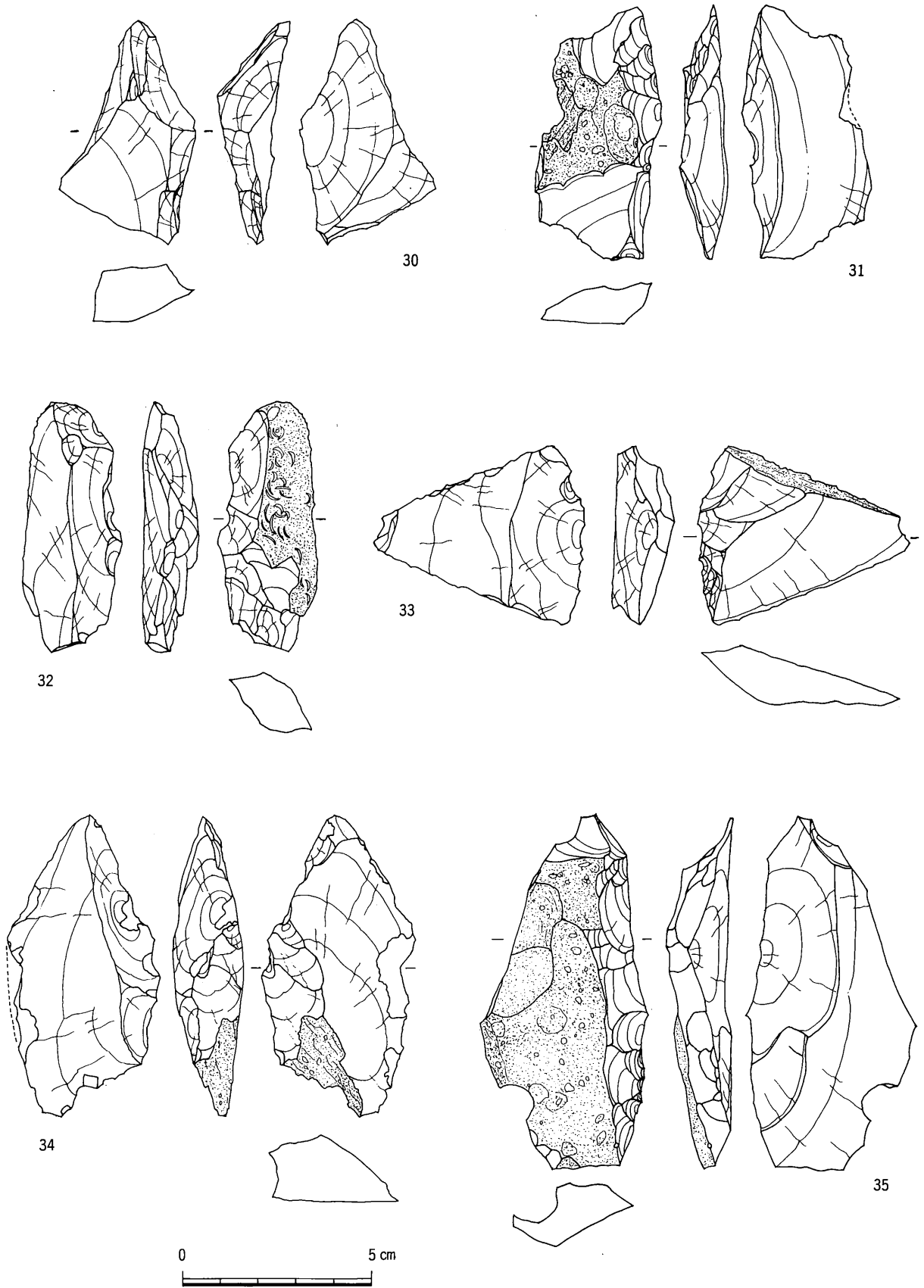
28



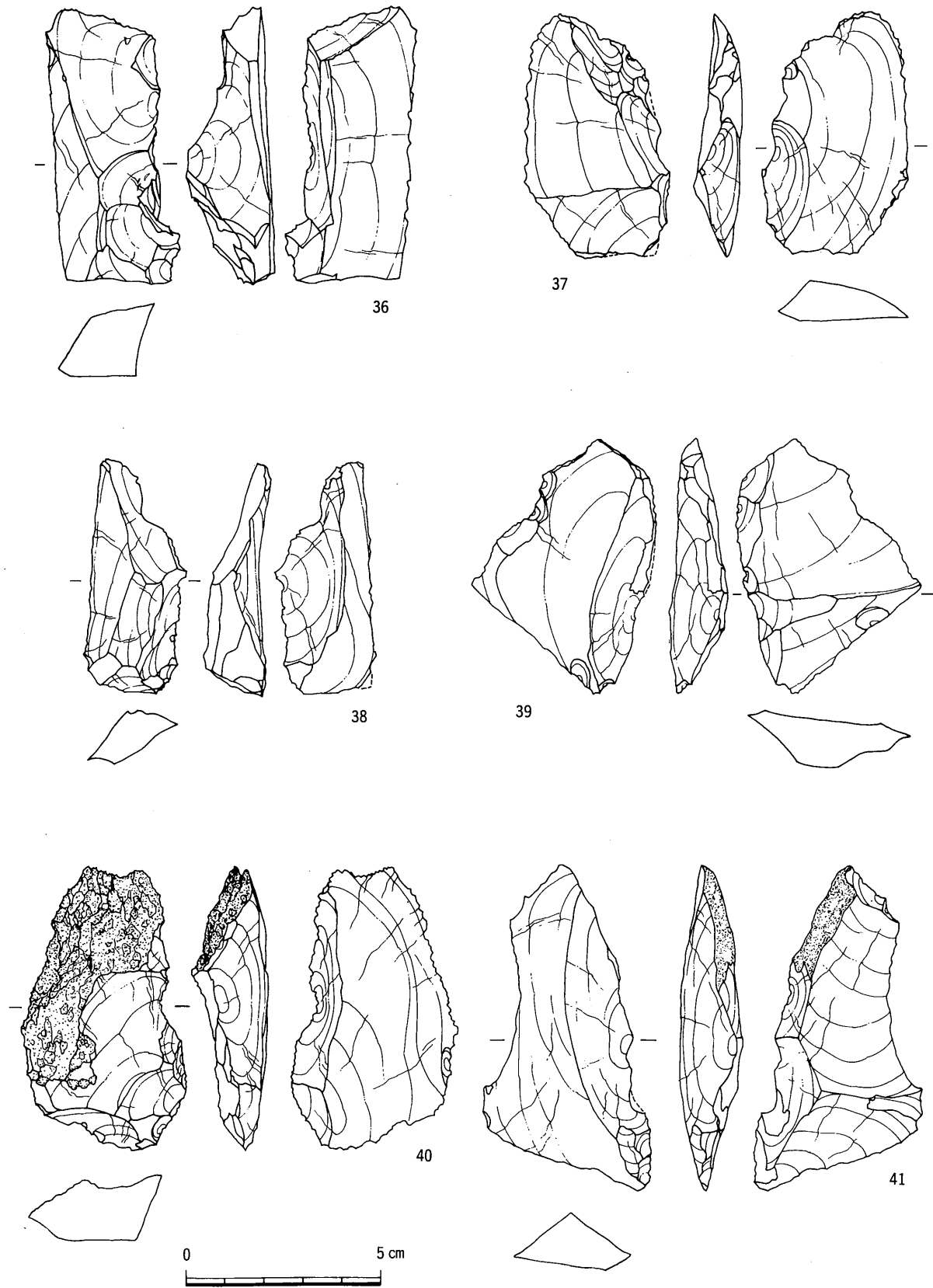
29



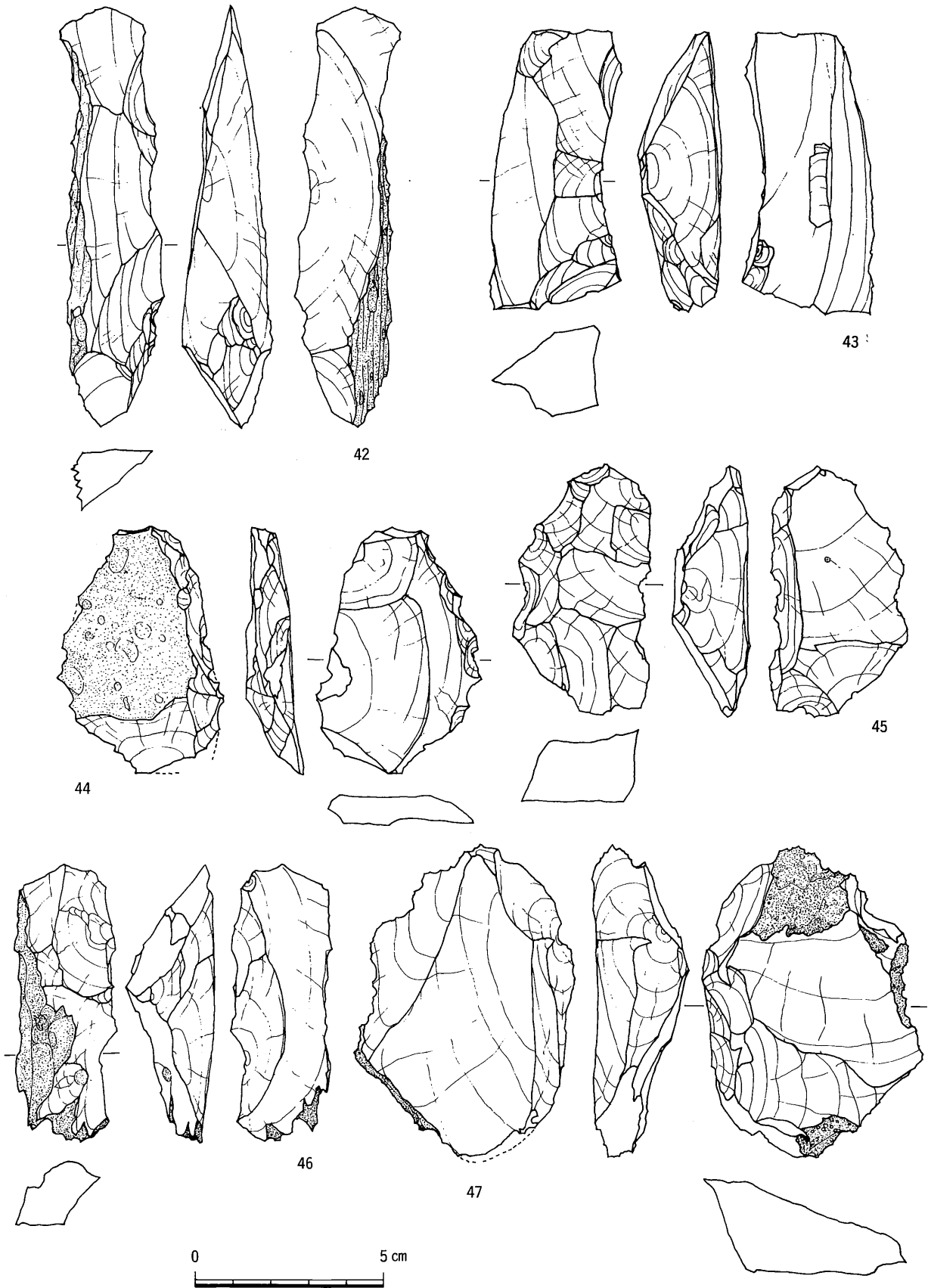
第 158 図 横長剥片石核実測図 (4)



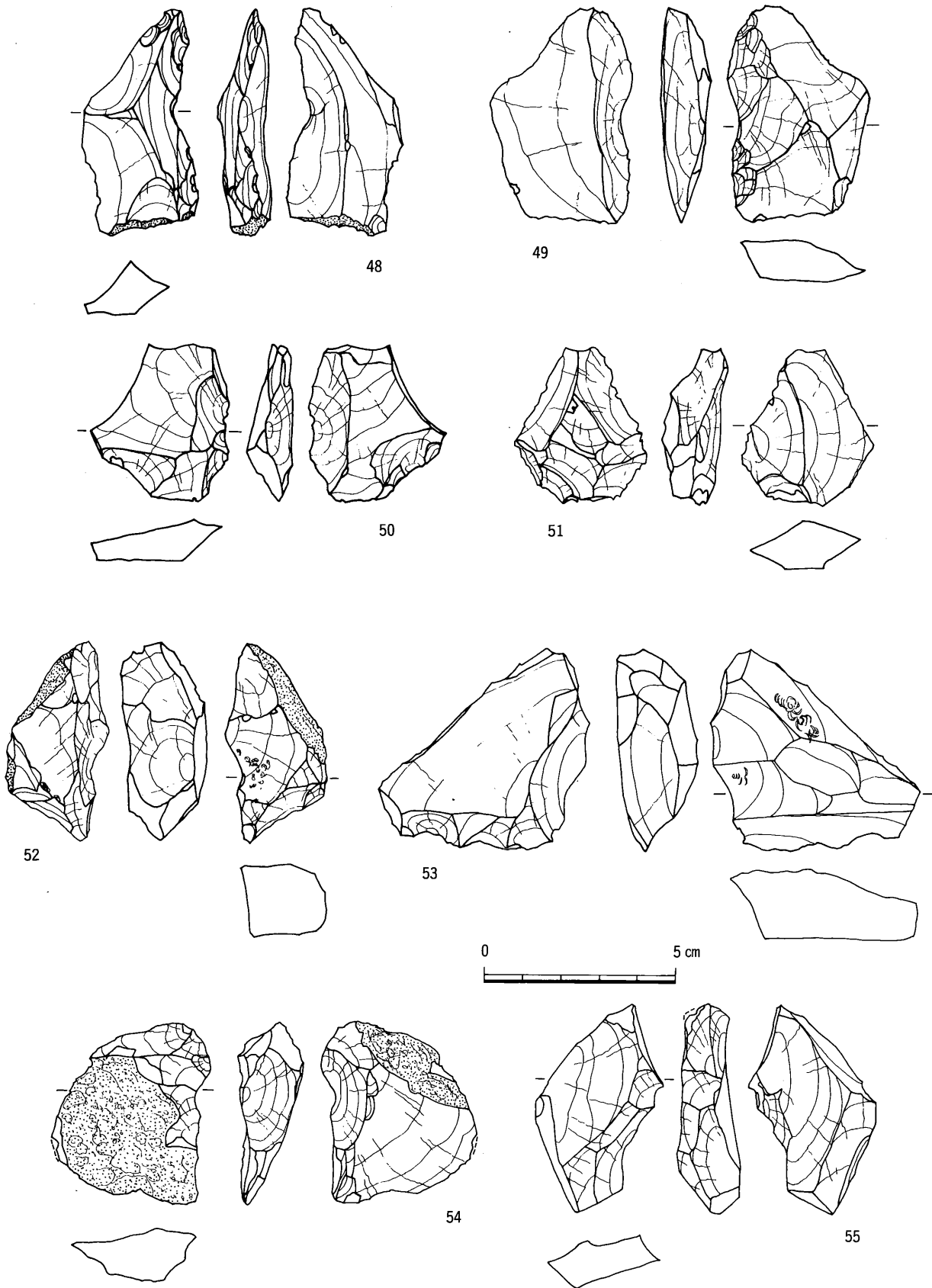
第 159 図 横長剝片石核実測図 (5)



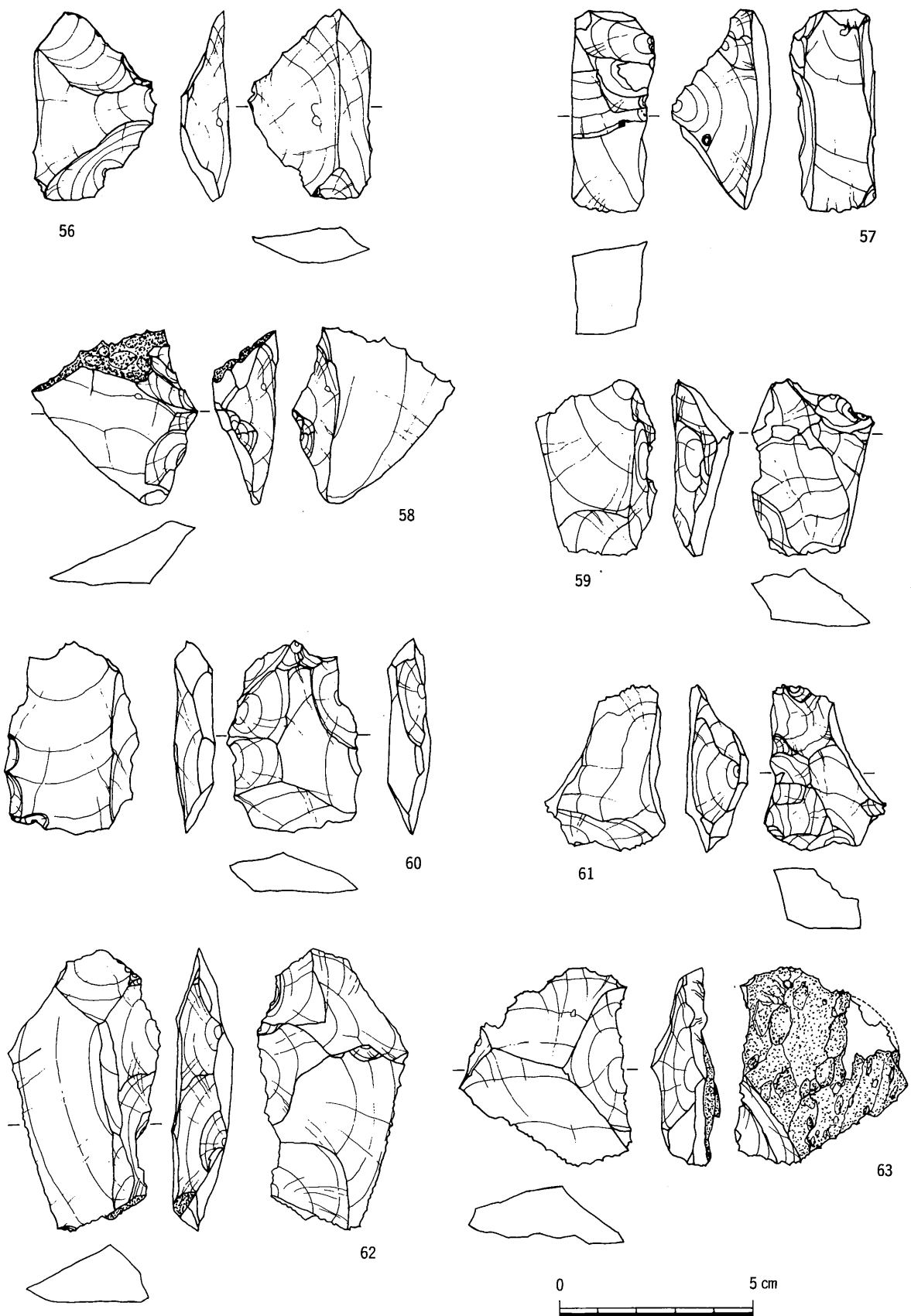
第 160 図 横長剥片石核実測図 (6)



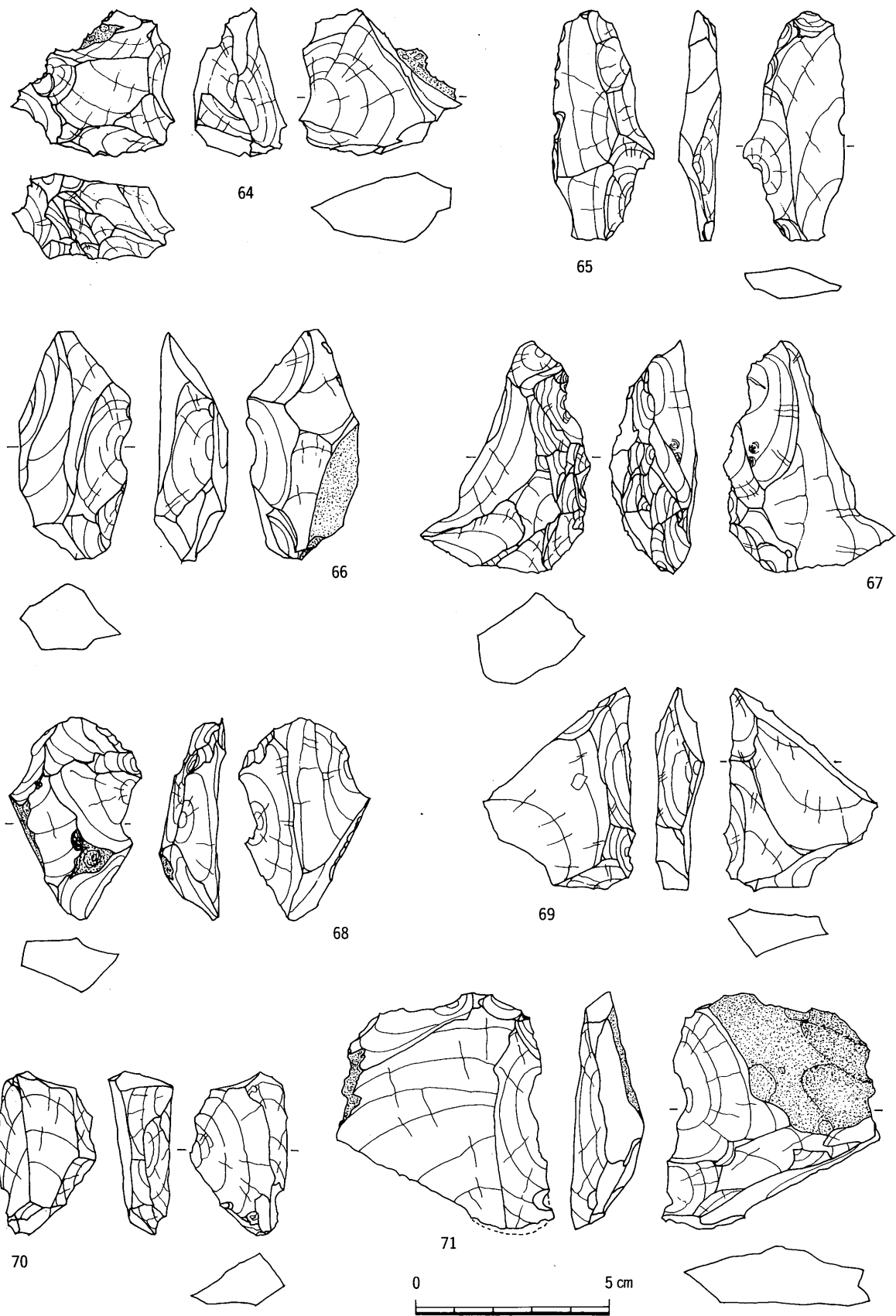
第 161 図 横長剝片石核実測図 (7)



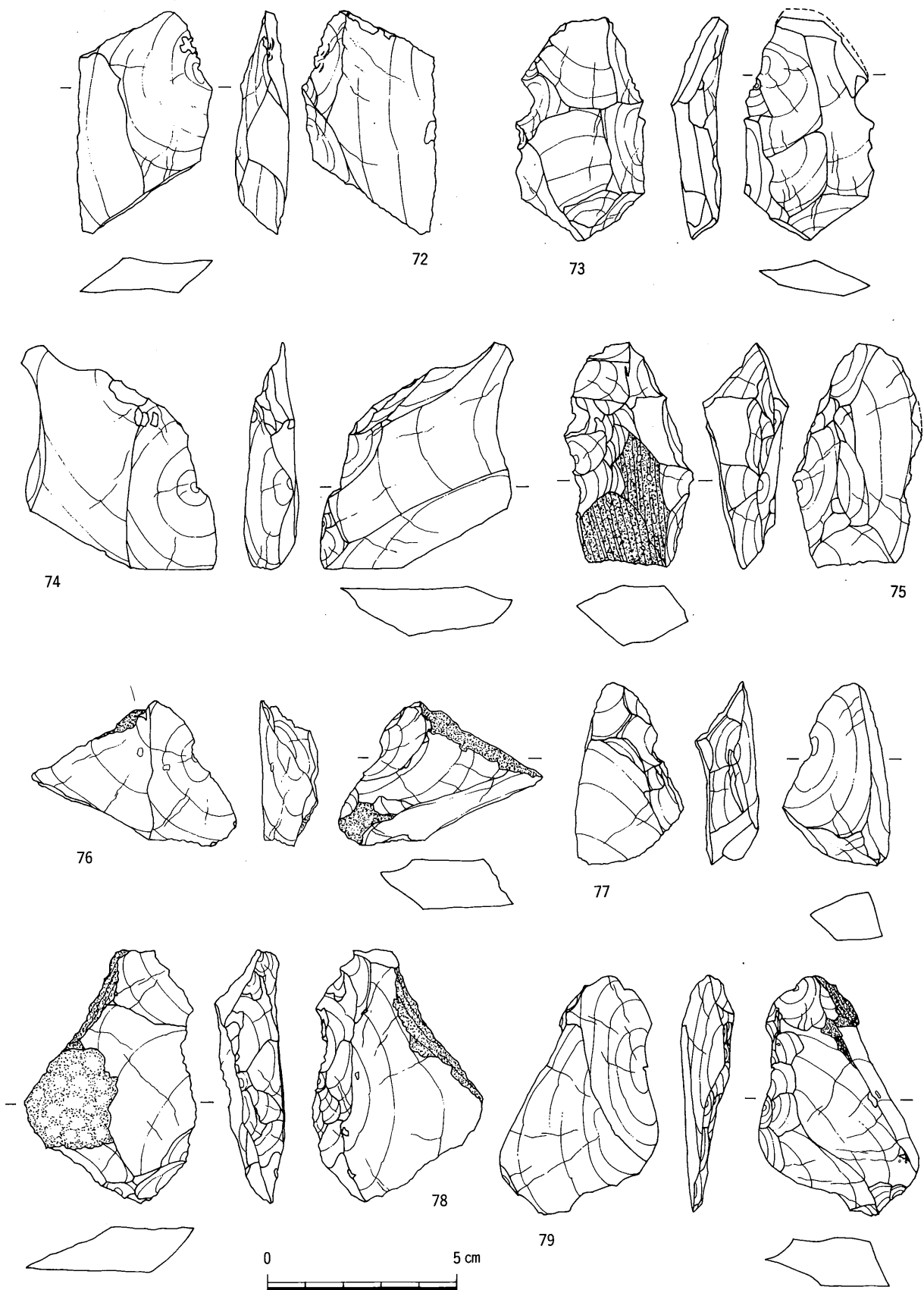
第 162 図 横長剝片石核実測図 (8)



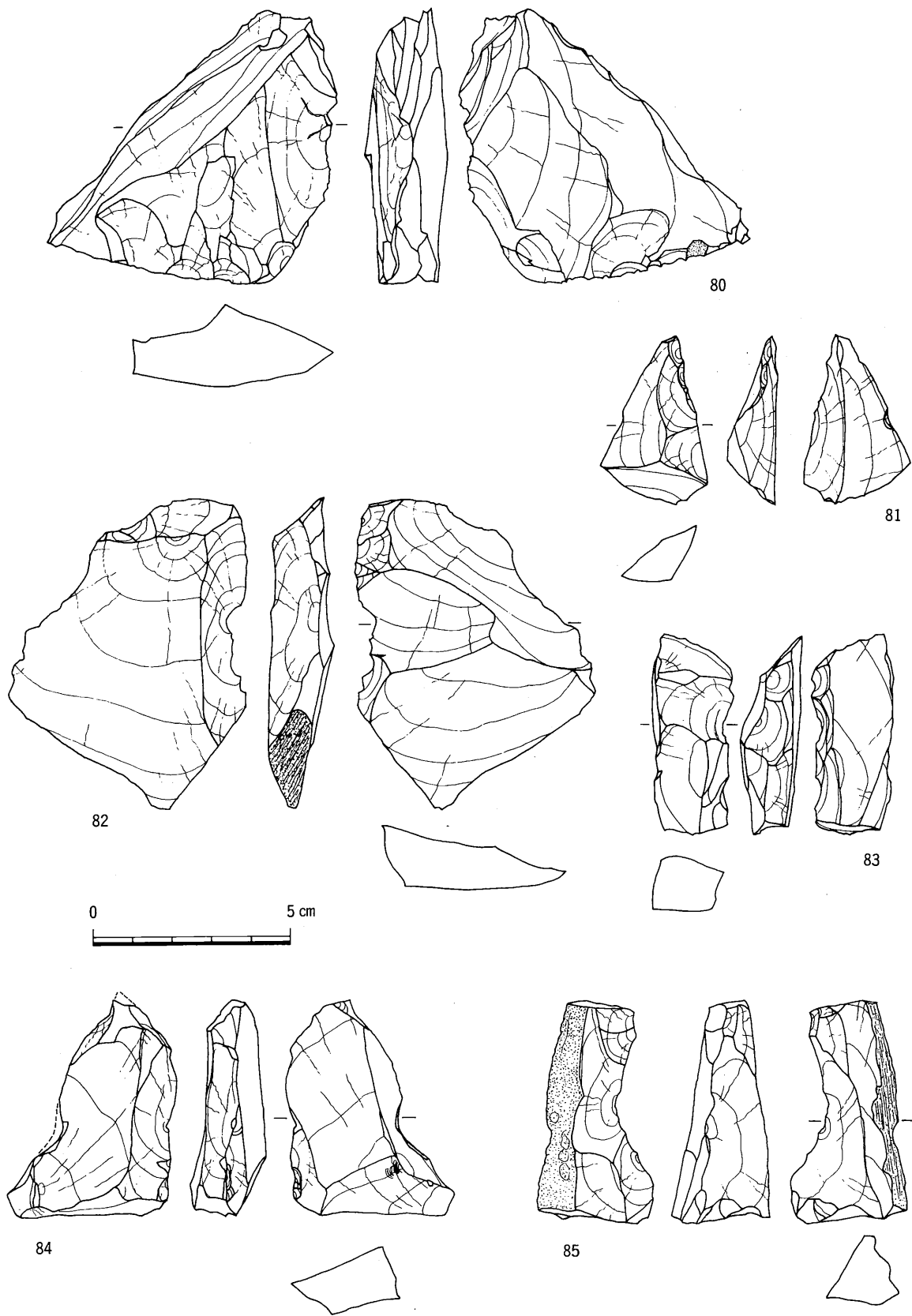
第 163 図 横長剥片石核実測図 (9)



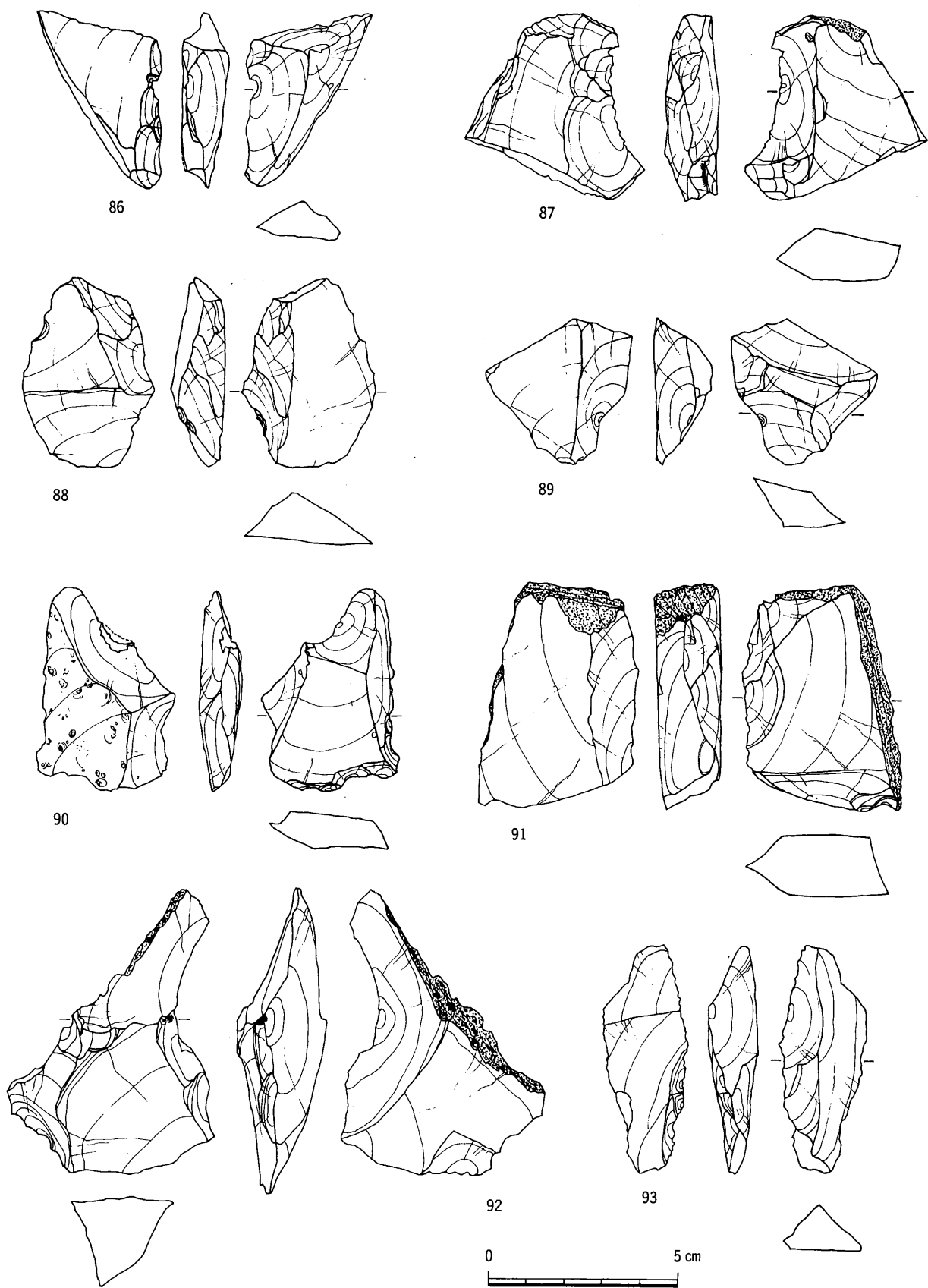
第 164 图 横長剝片石核実測図 (10)



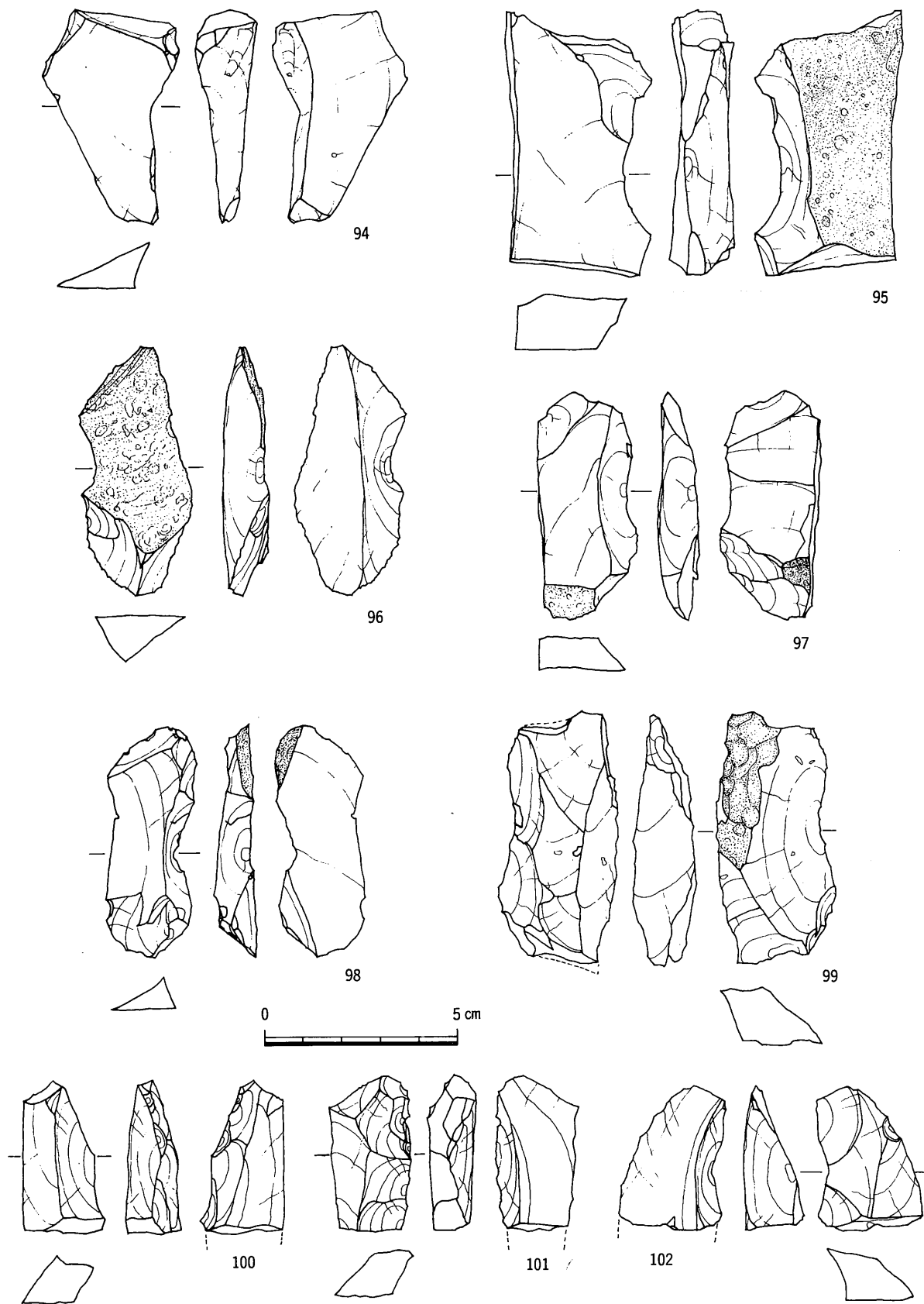
第 165 図 横長剝片石核実測図 (11)



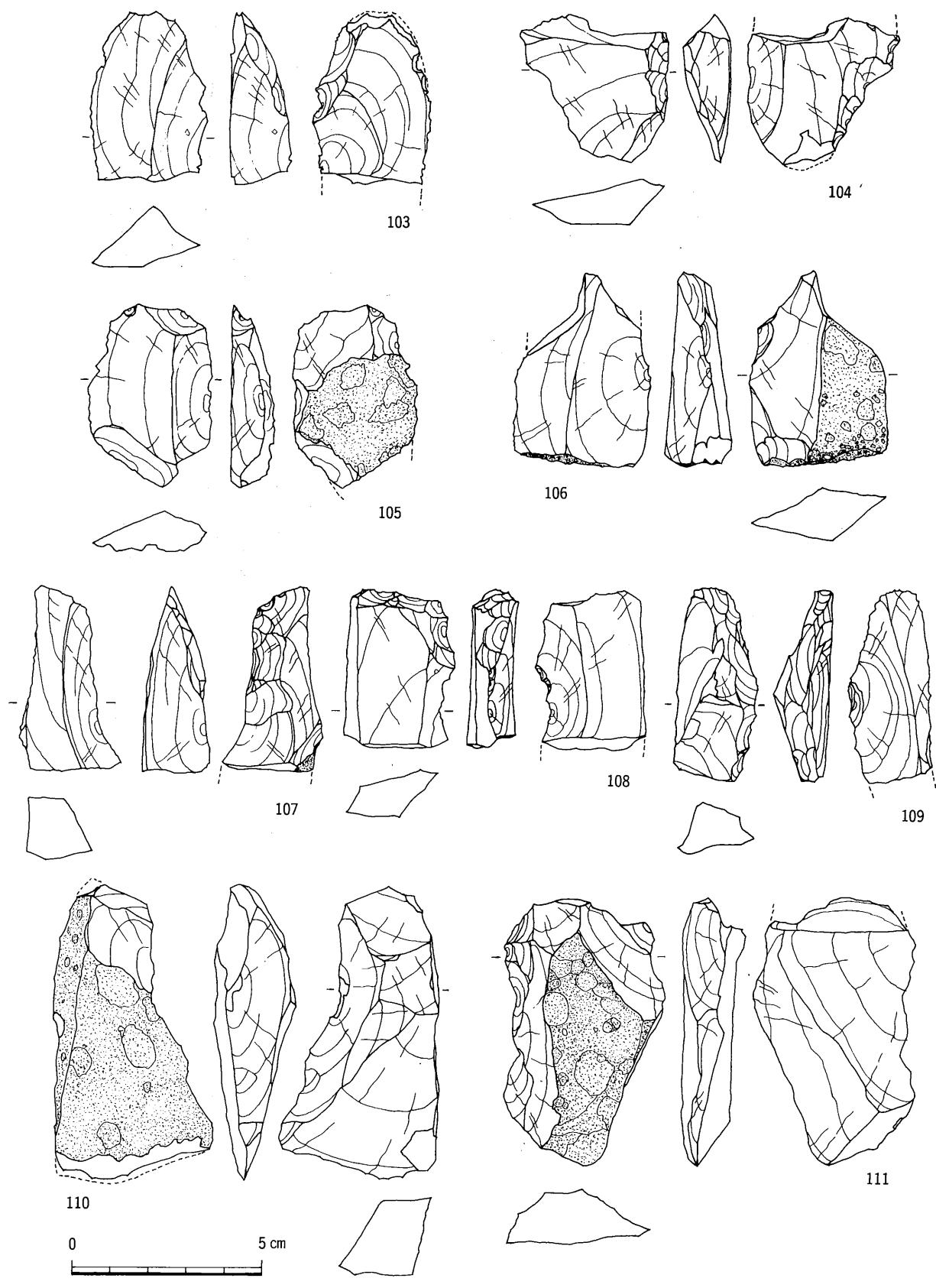
第 166 図 横長剥片石核実測図 (12)



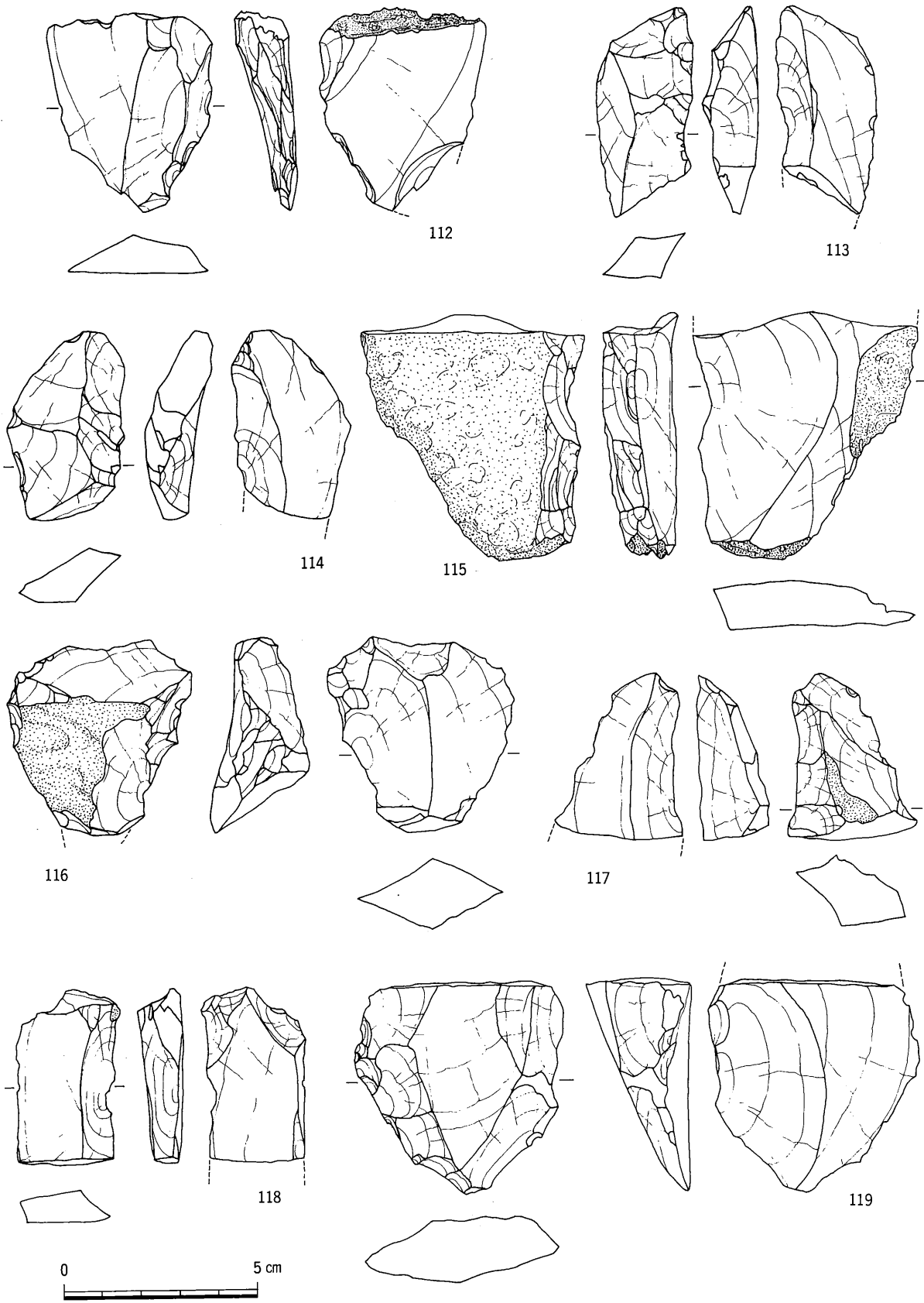
第 167 图 横長剝片石核実測図 (13)



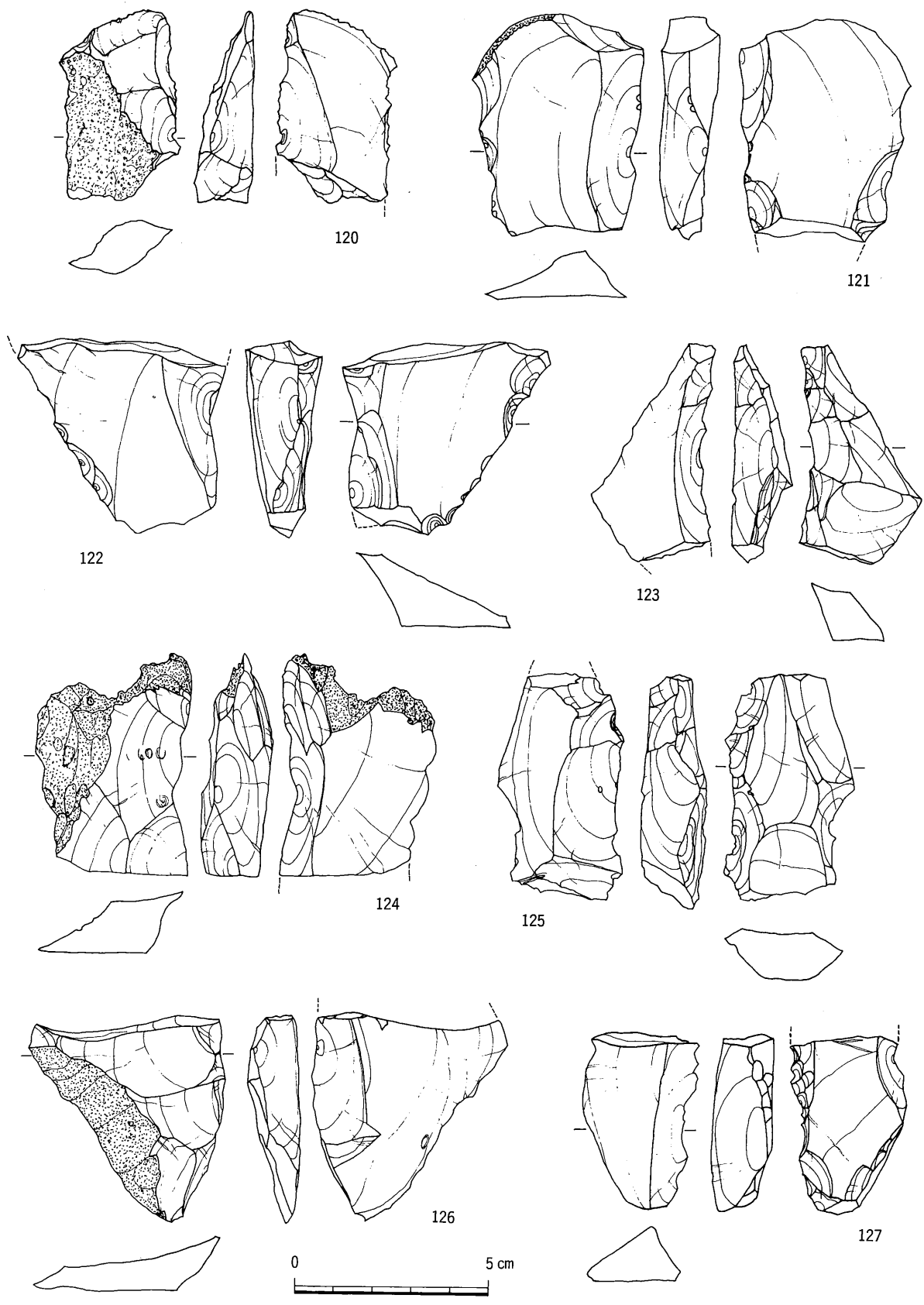
第 168 図 横長剝片石核実測図 (14)



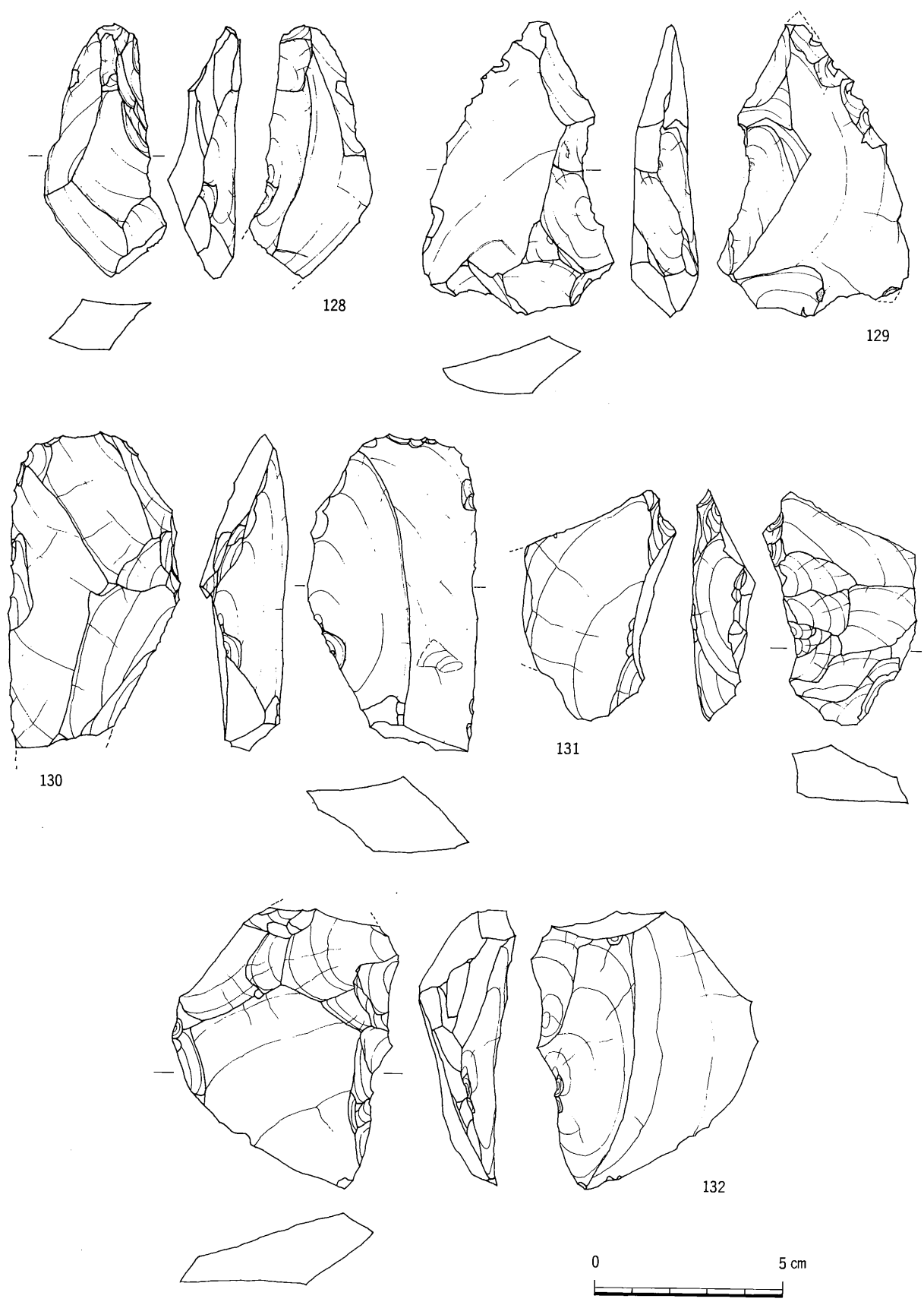
第 169 図 横長剝片石核実測図 (15)



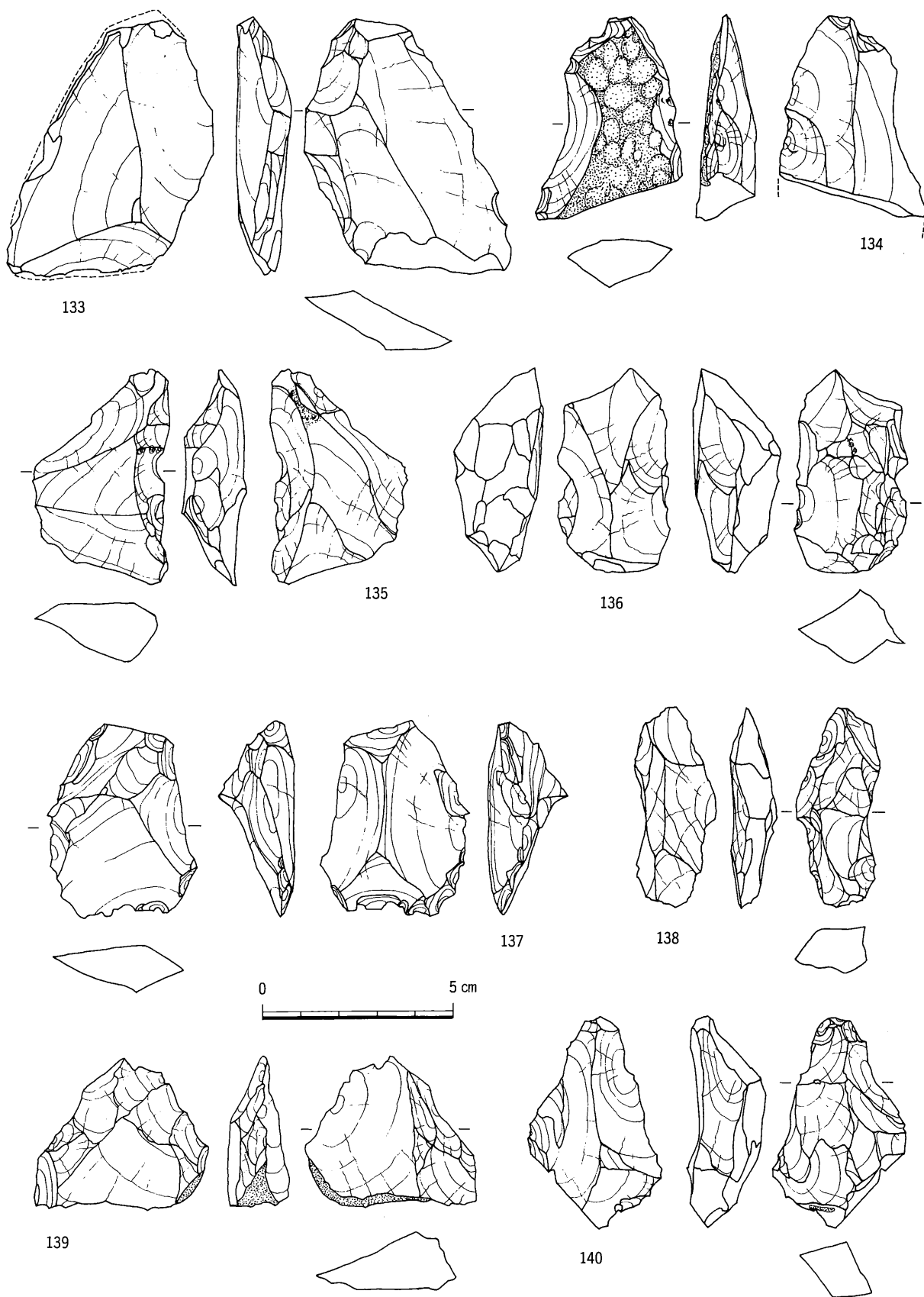
第 170 図 横長剥片石核実測図 (16)



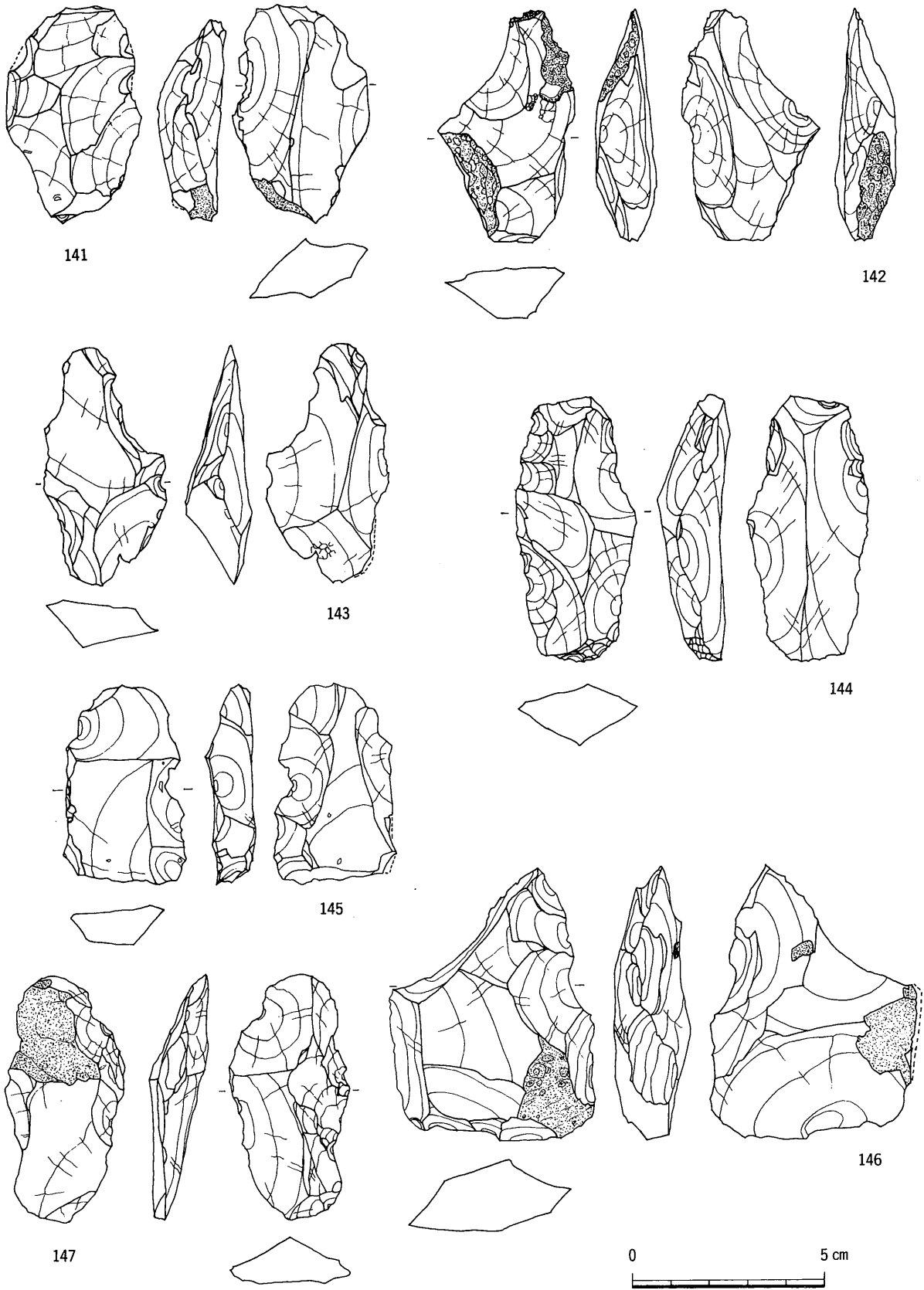
第 171 図 横長剥片石核実測図 (17)



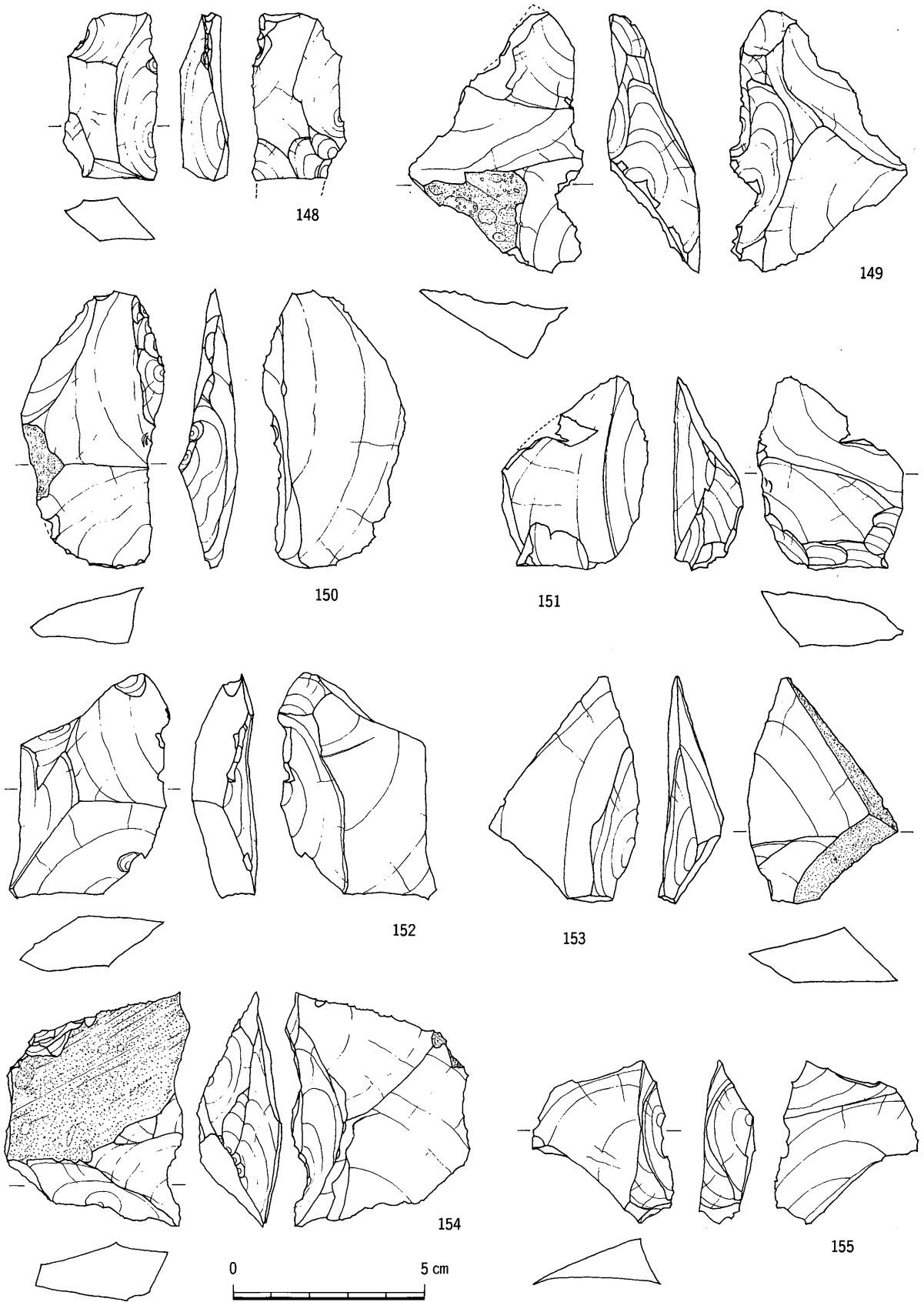
第 172 図 横長剝片石核実測図 (18)



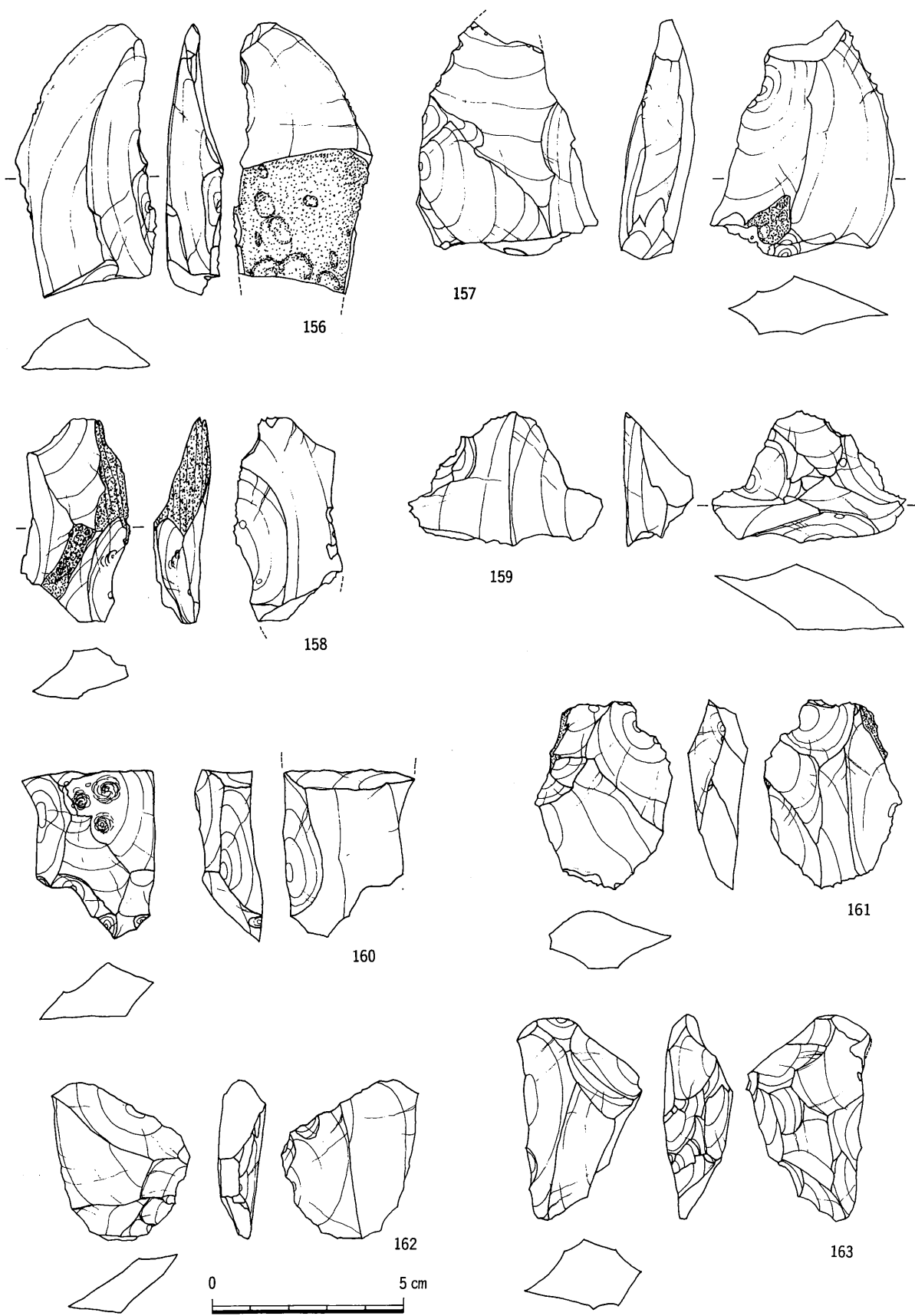
第 173 図 横長剝片石核実測図 (19)



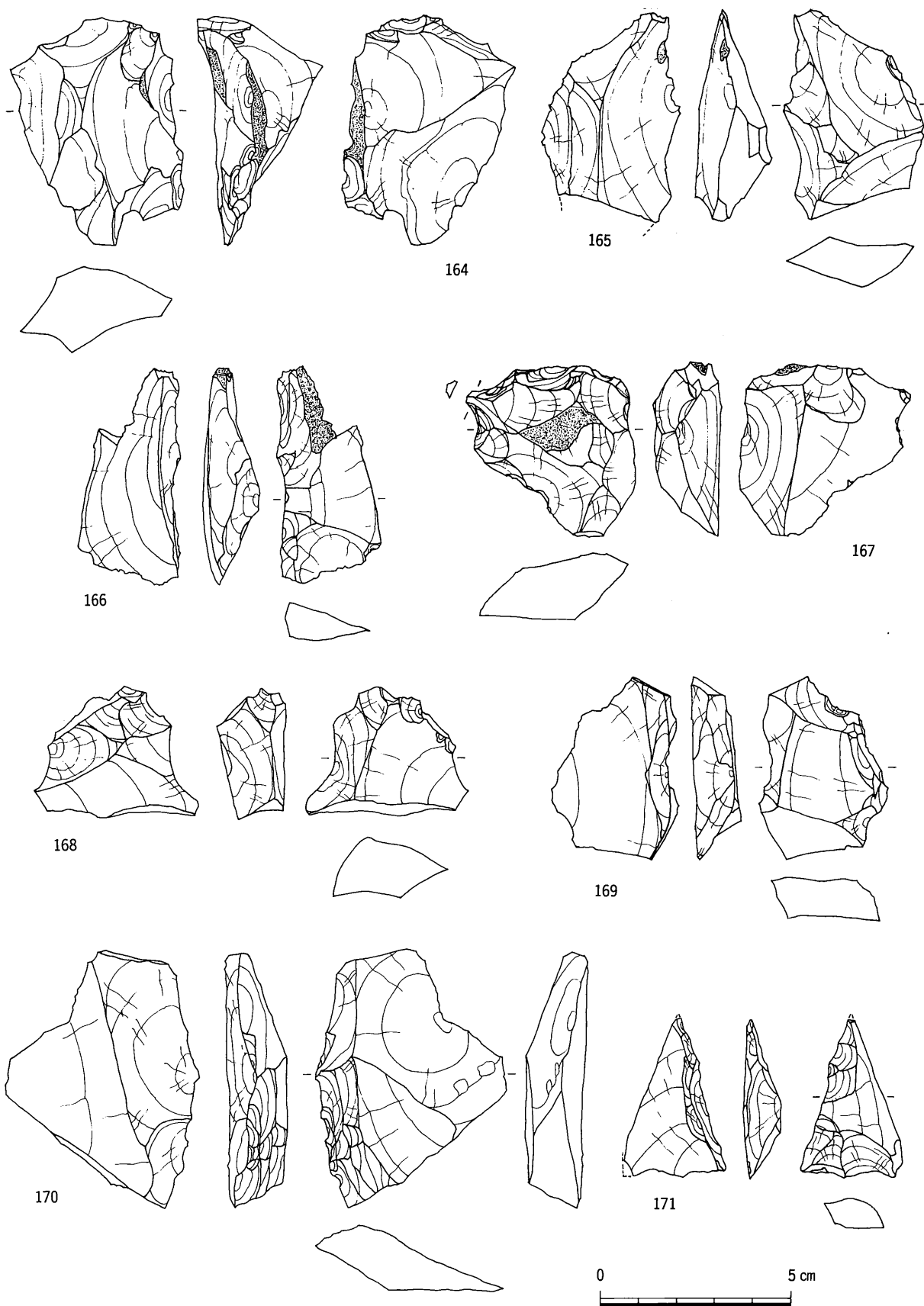
第 174 図 横長剝片石核実測図 (20)



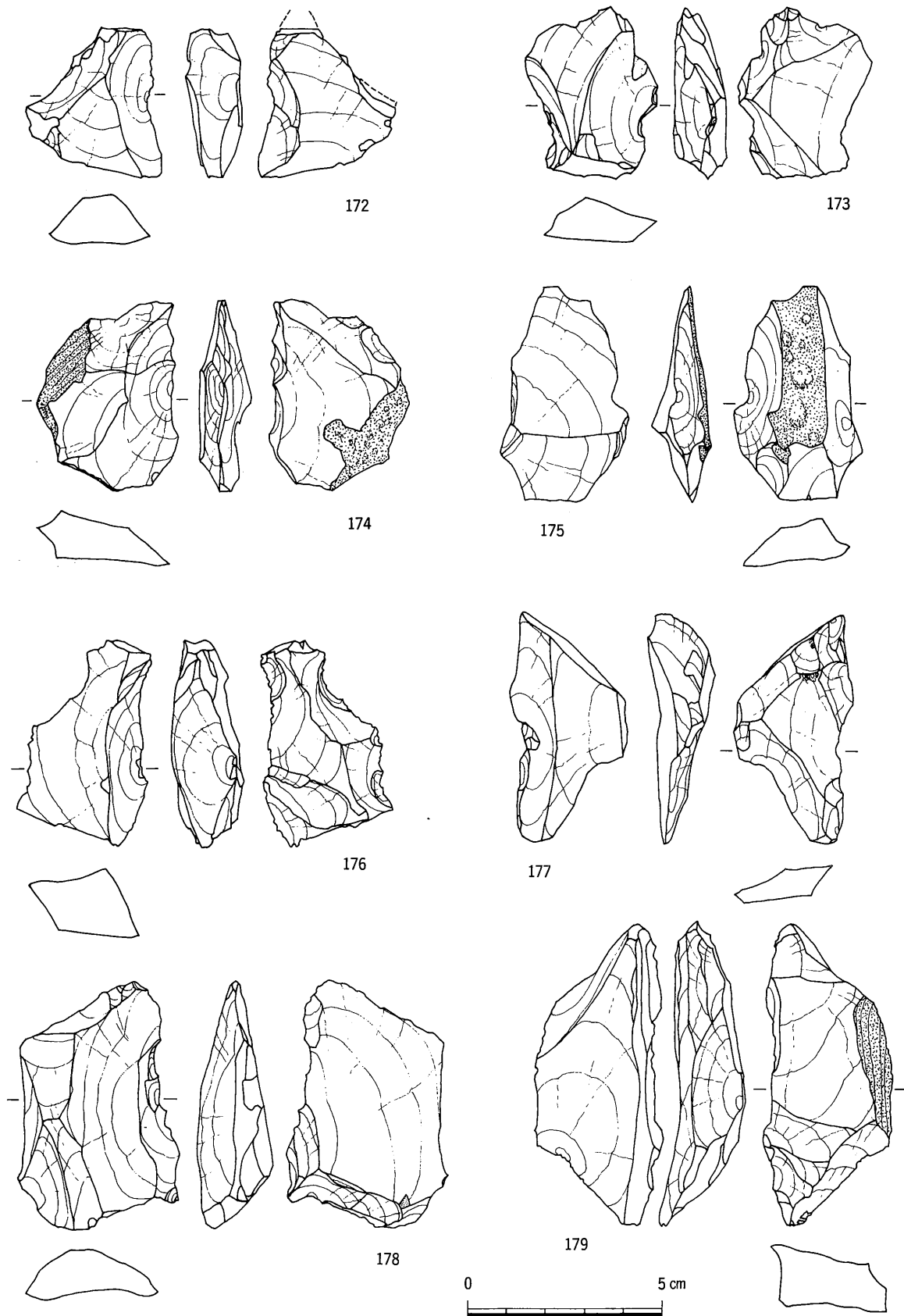
第 175 図 横長剥片石核実測図 (2)



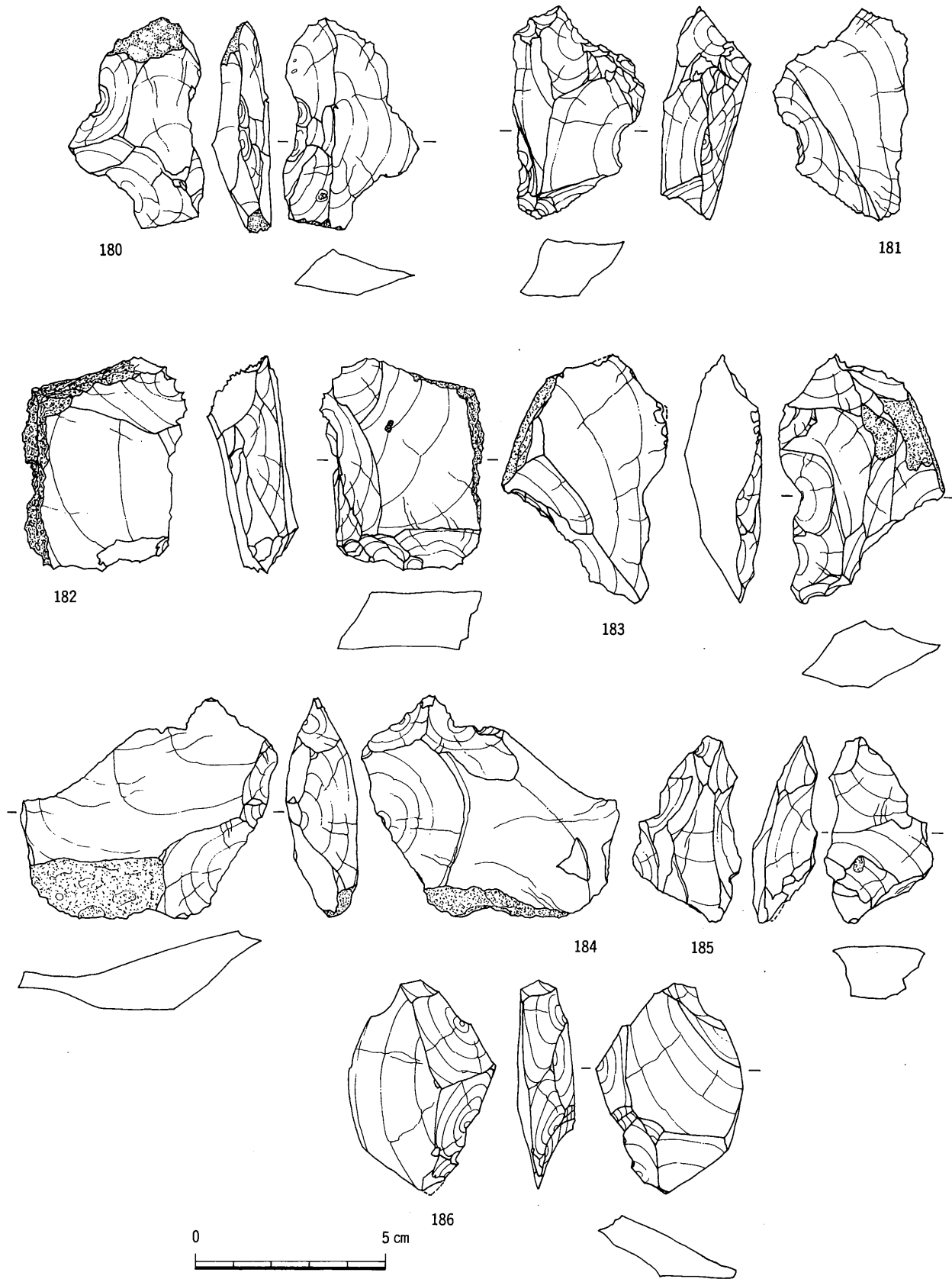
第 176 図 横長剥片石核実測図 (2)



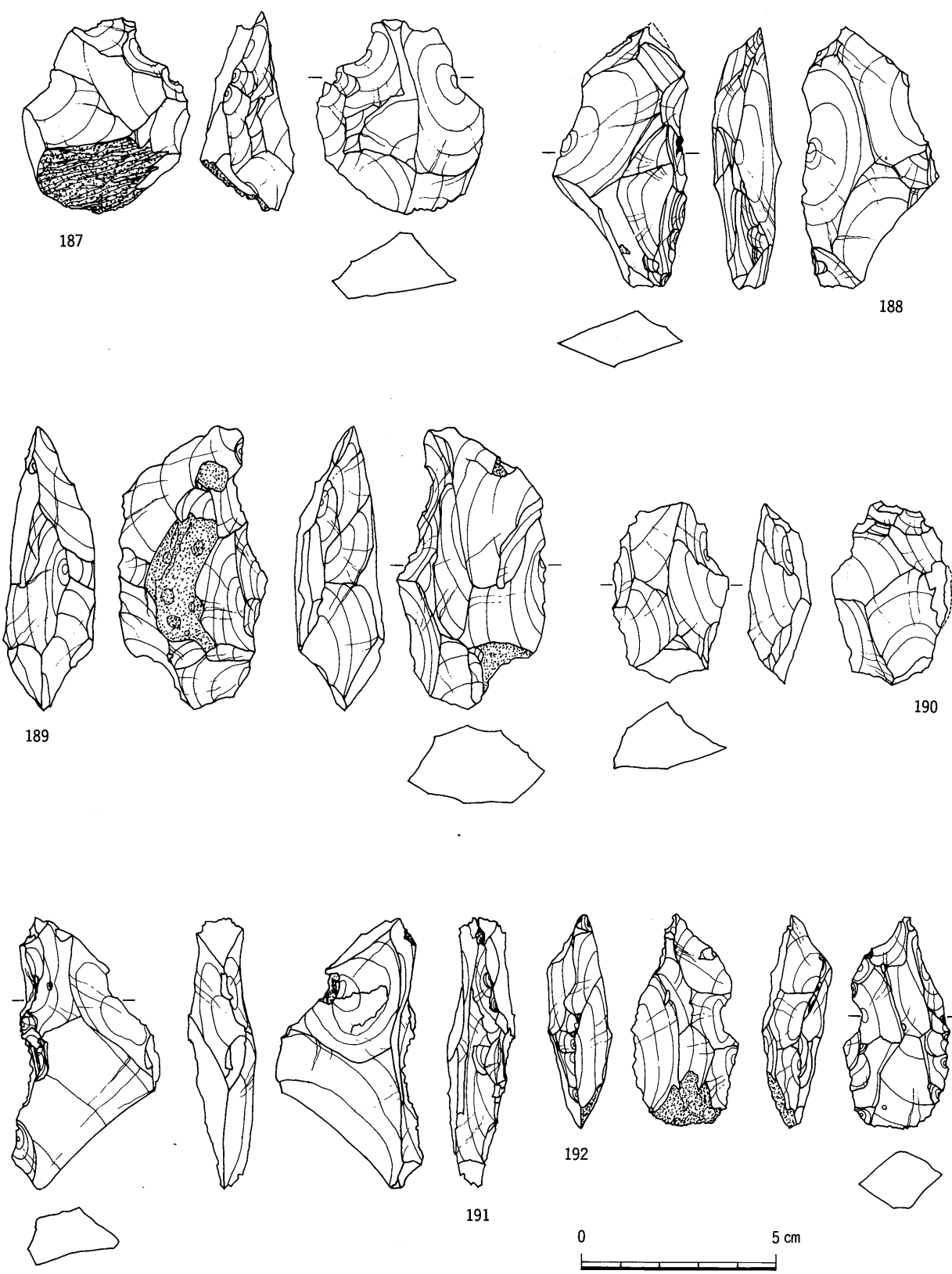
第 177 図 横長剥片石核実測図 (23)



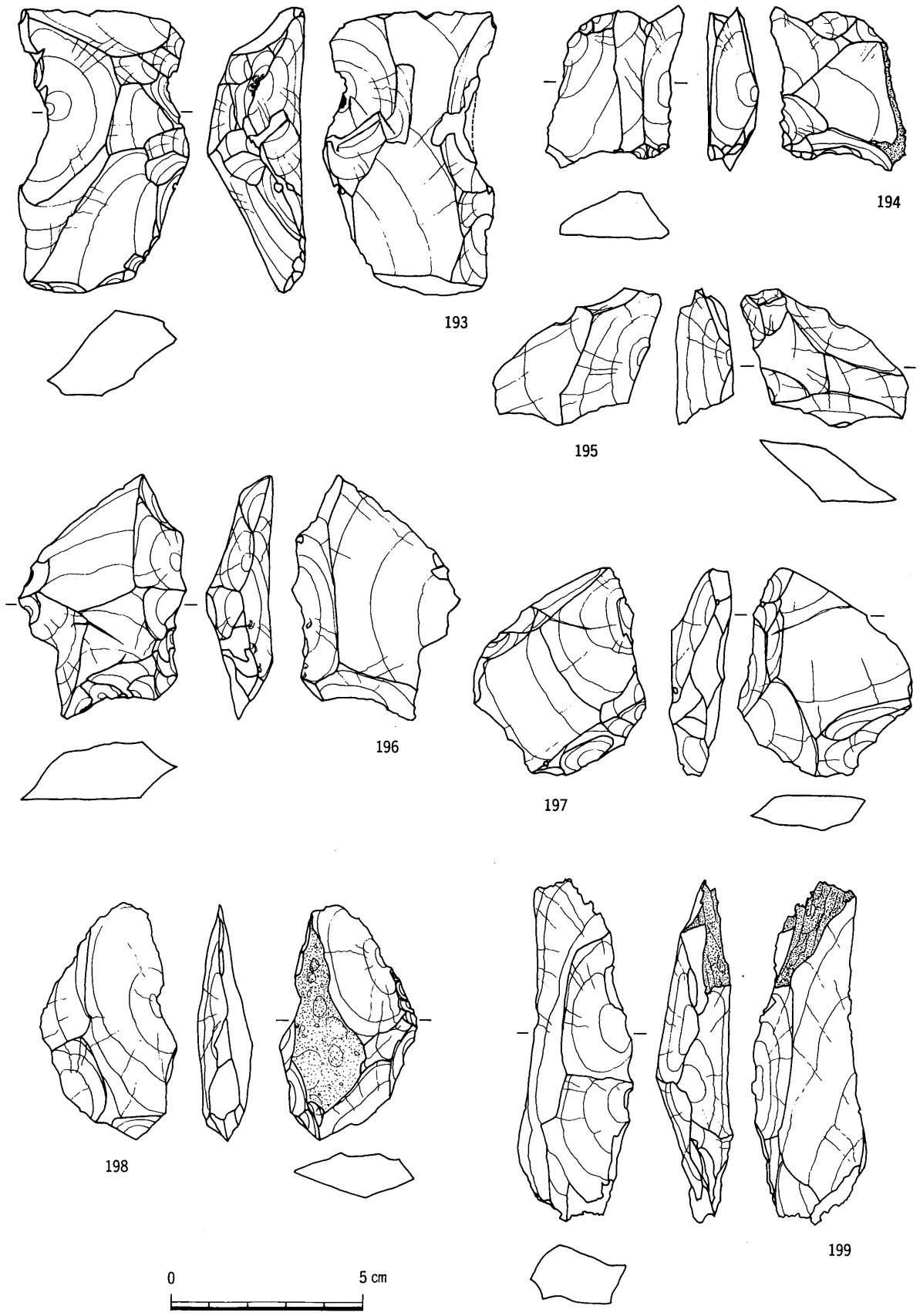
第 178 図 横長剝片石核実測図 (24)



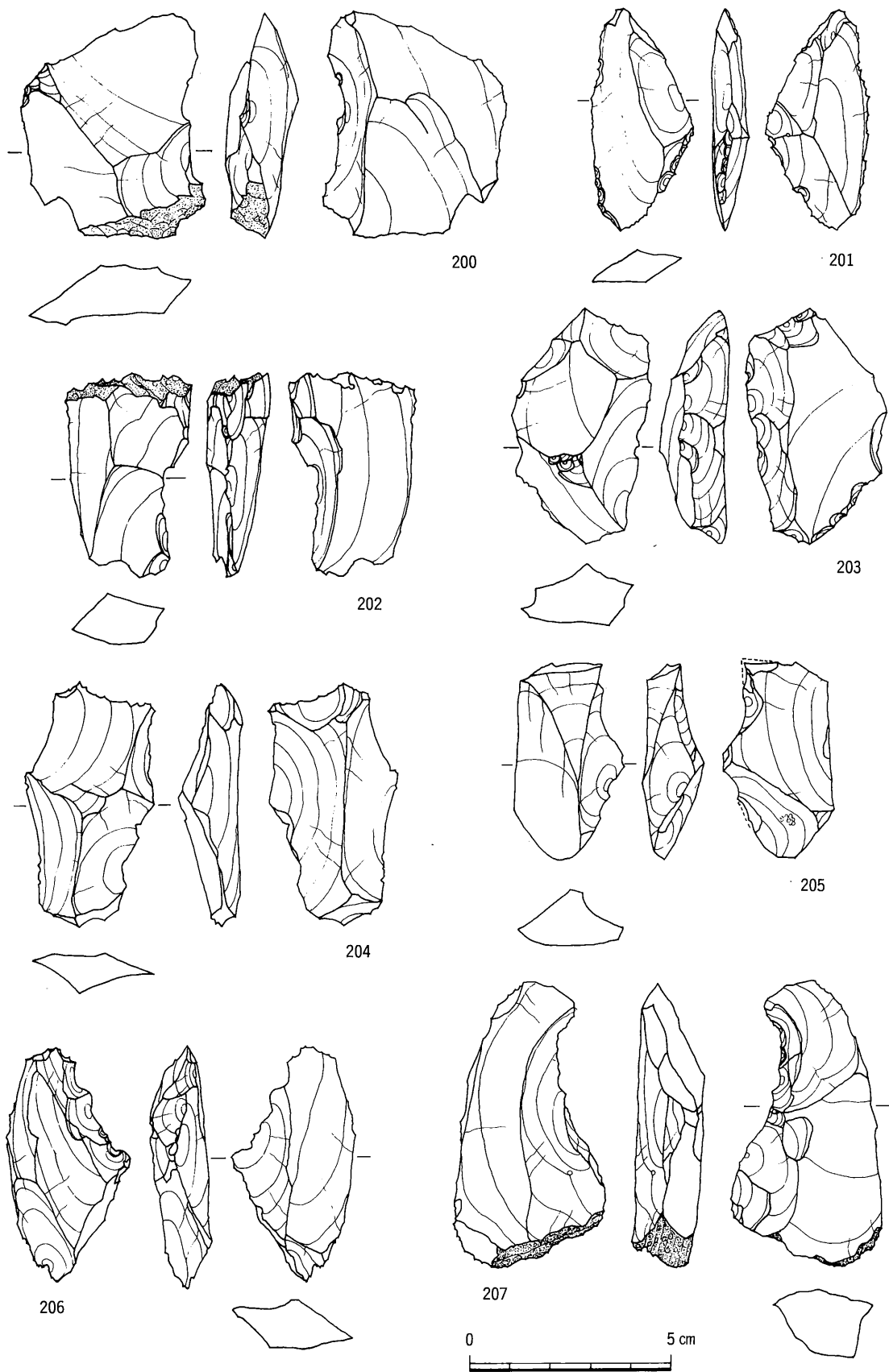
第 179 图 横長剝片石核実測図 (25)



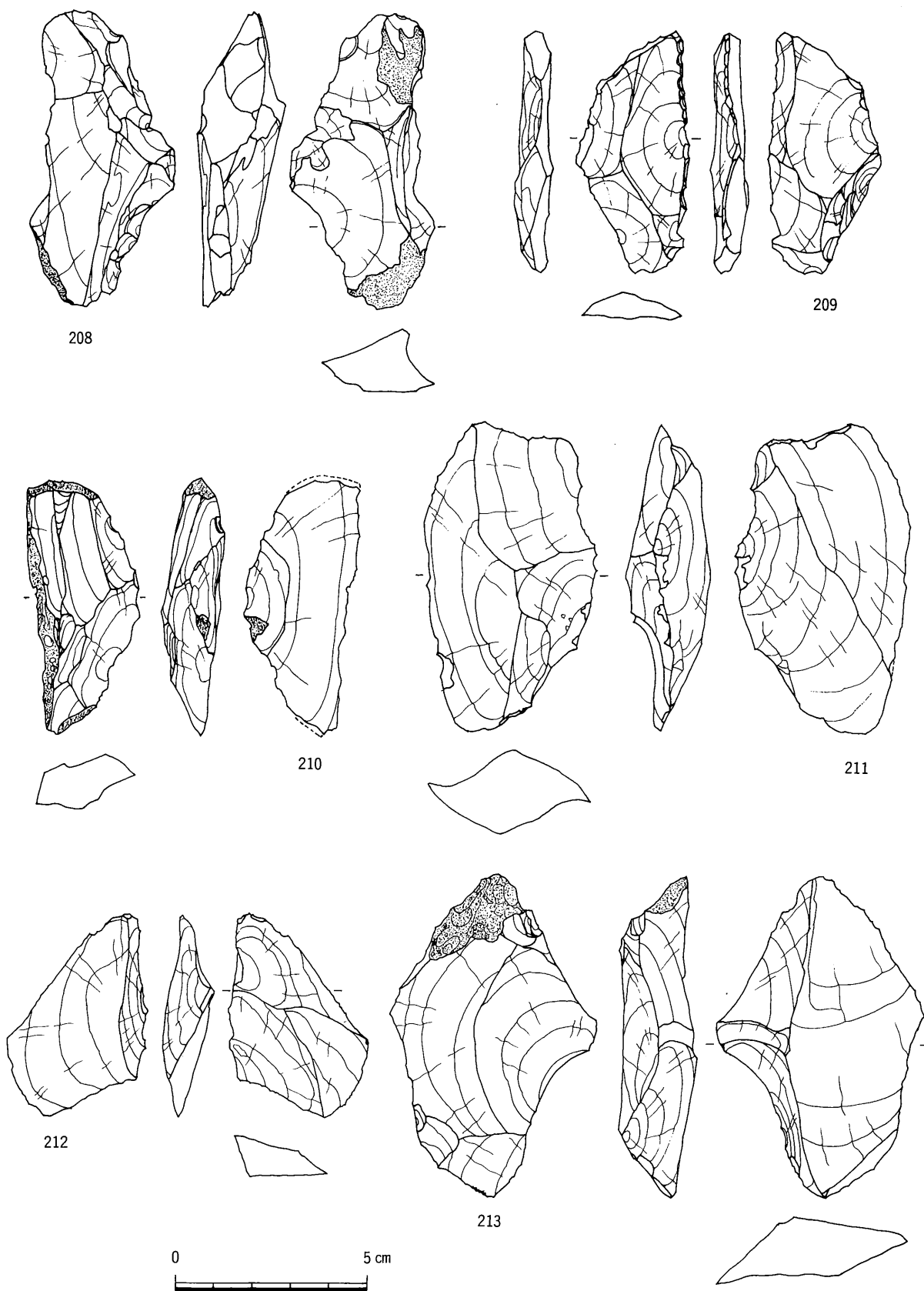
第 180 図 横長剥片石核実測図 (26)



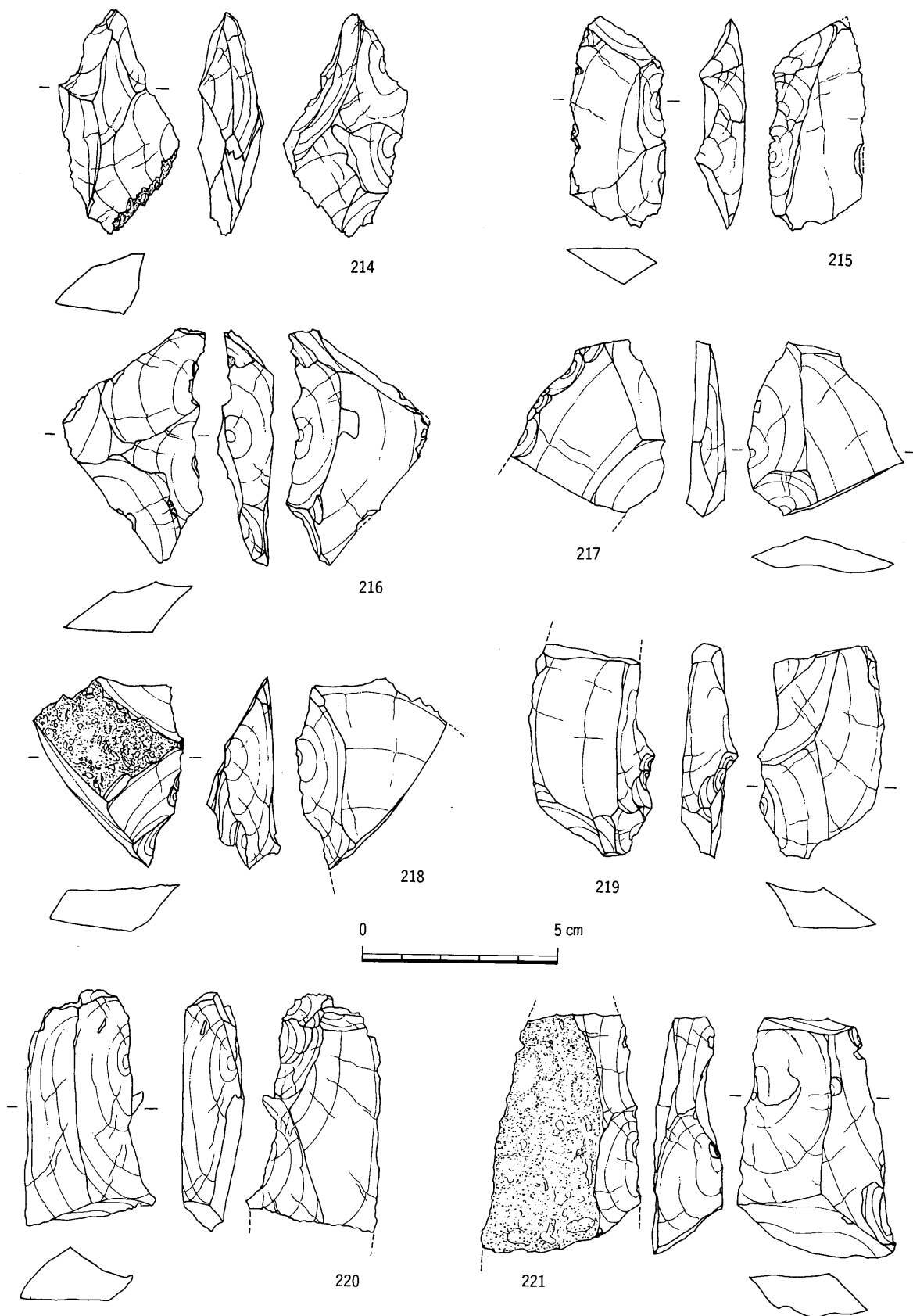
第 181 図 横長剝片石核実測図 (27)



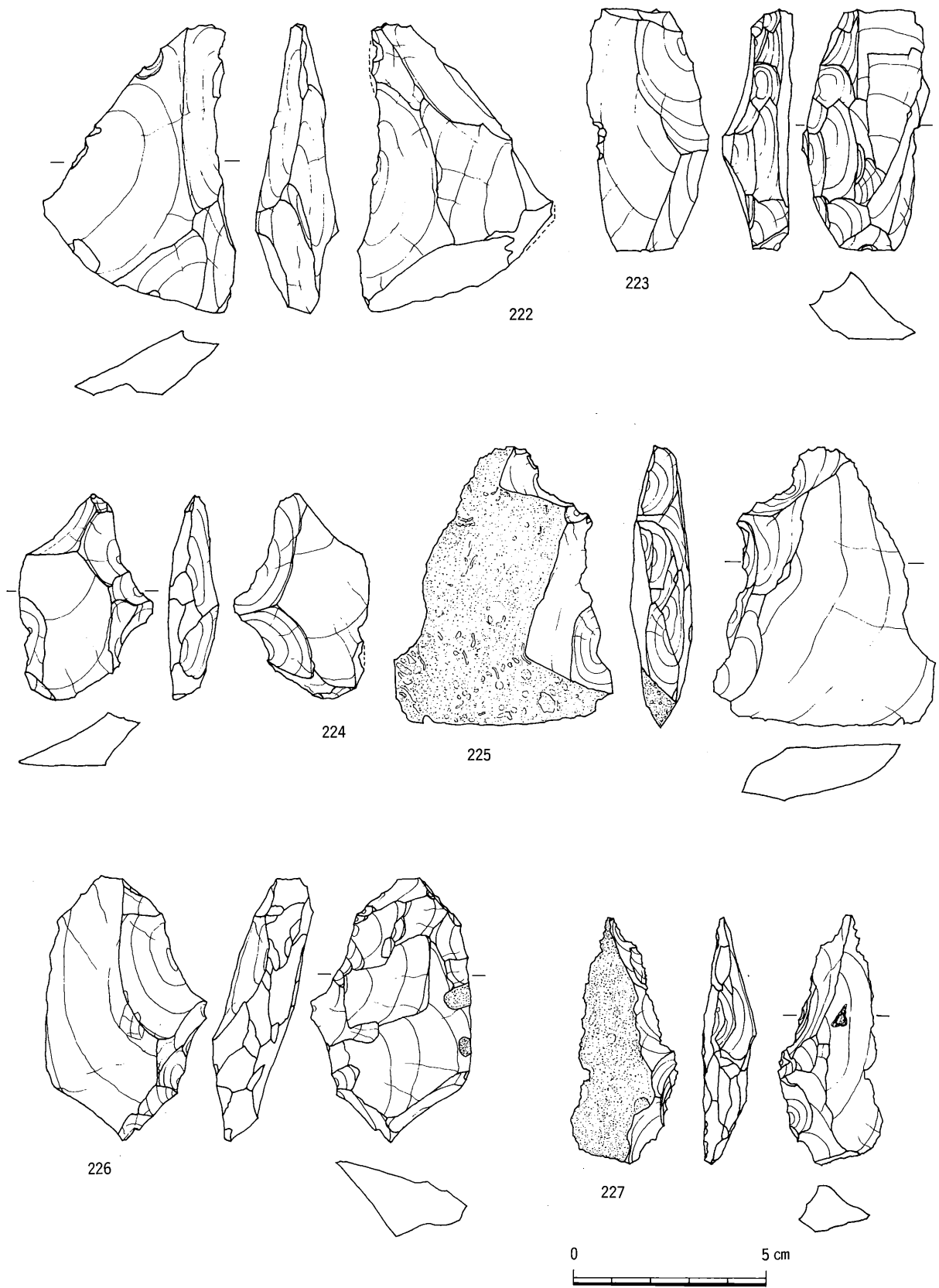
第 182 図 横長剥片石核実測図 (28)



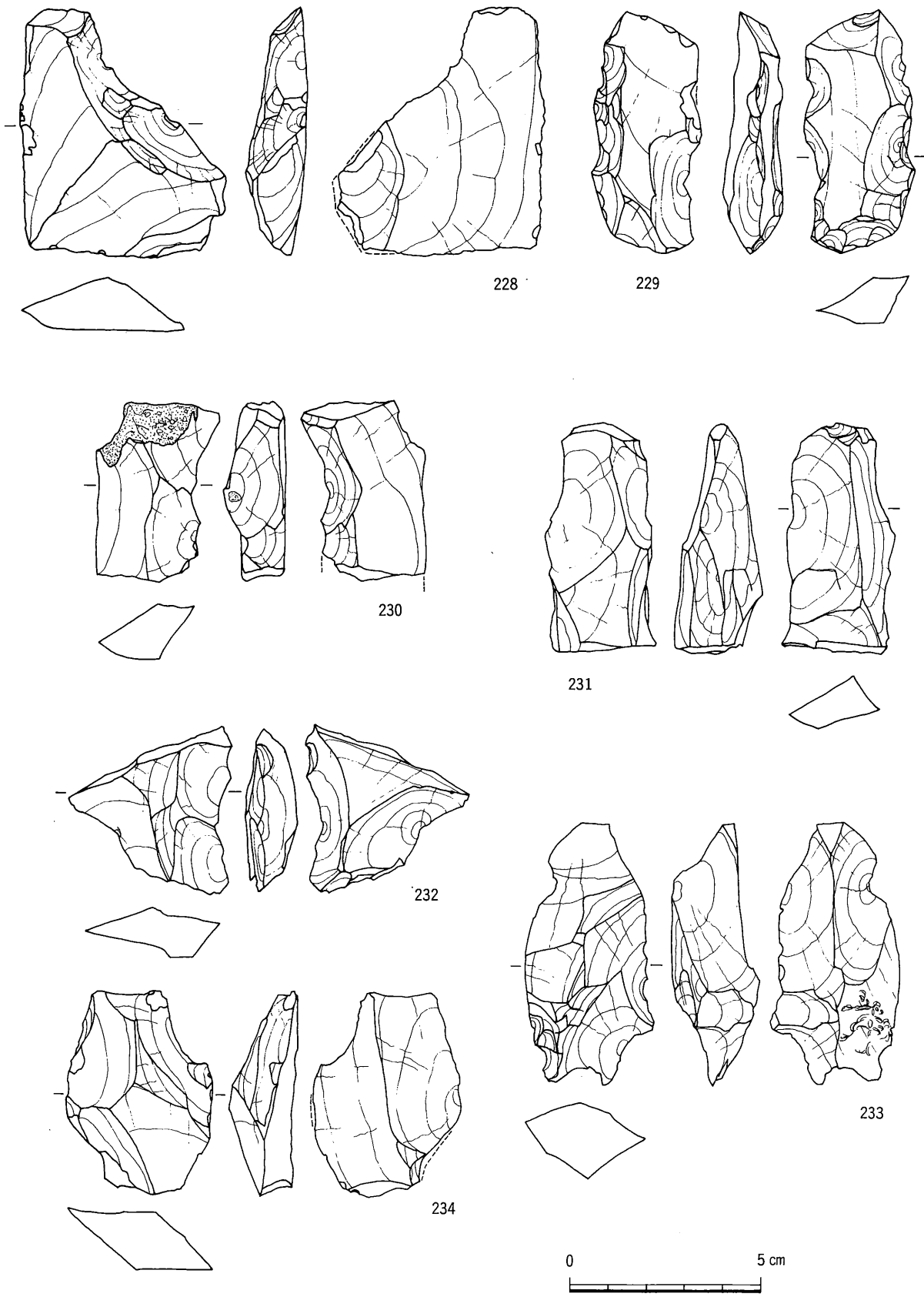
第 183 図 横長剥片石核実測図 (29)



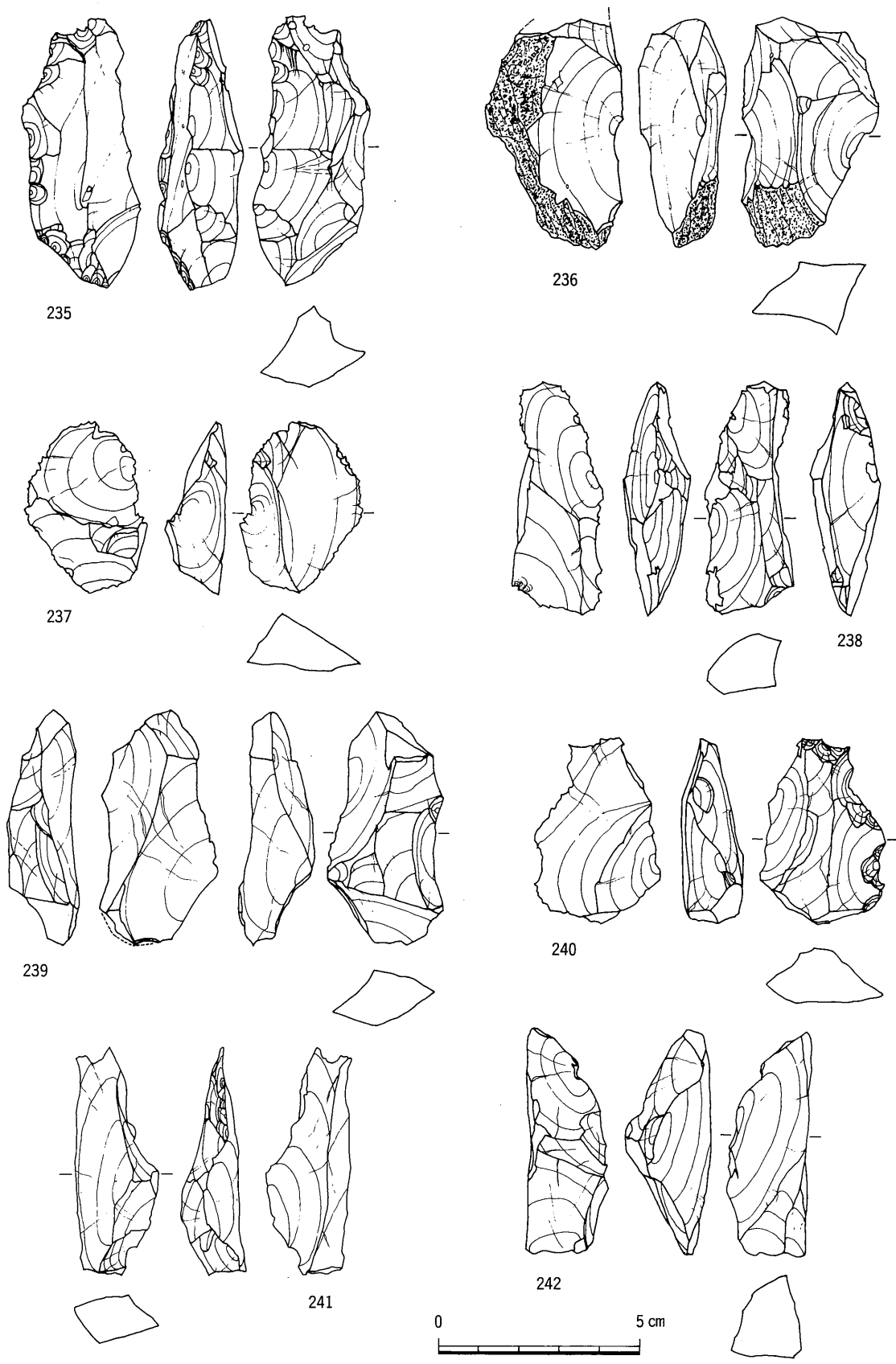
第 184 図 横長剝片石核実測図 (30)



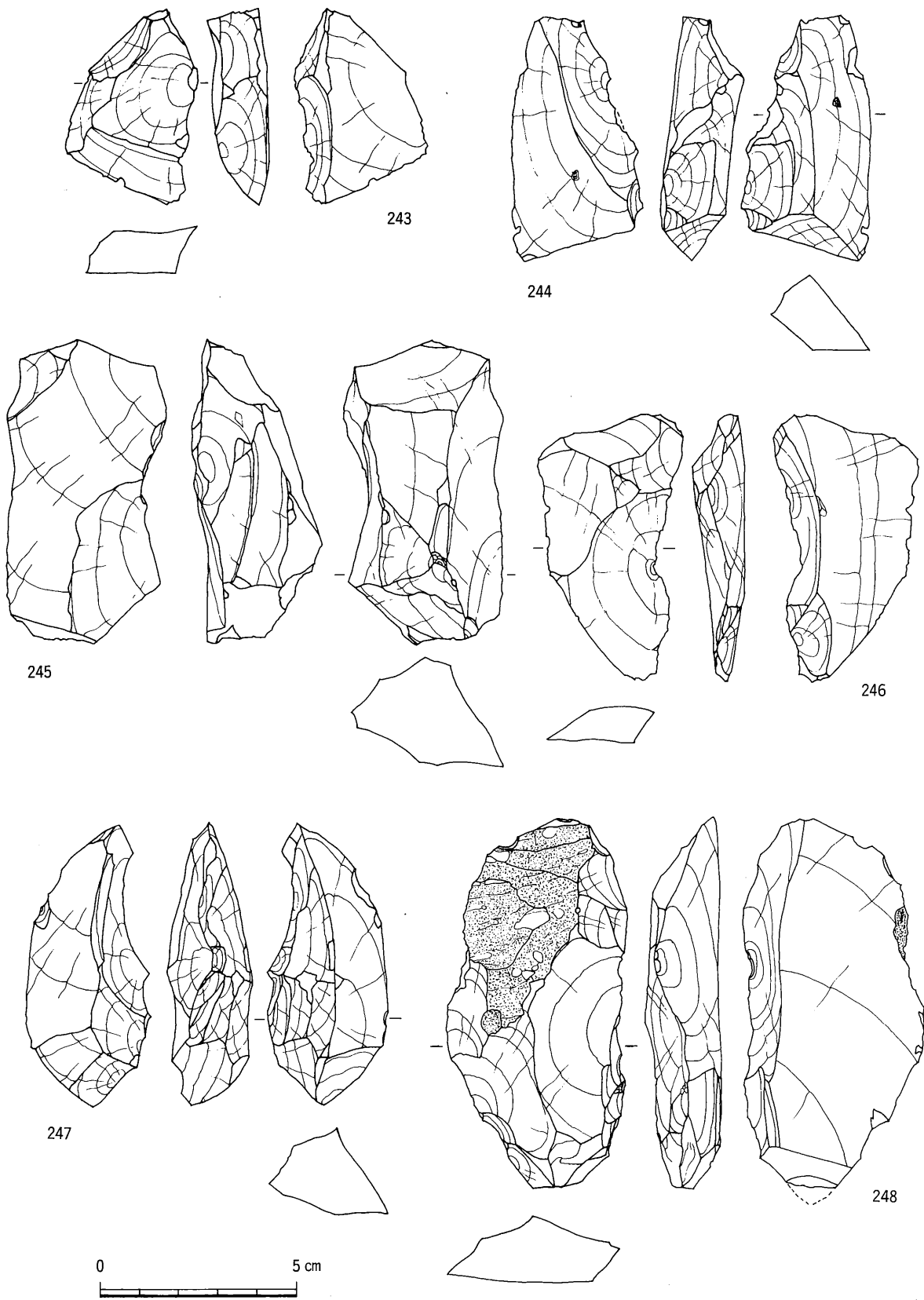
第 185 図 横長剝片石核実測図 (31)



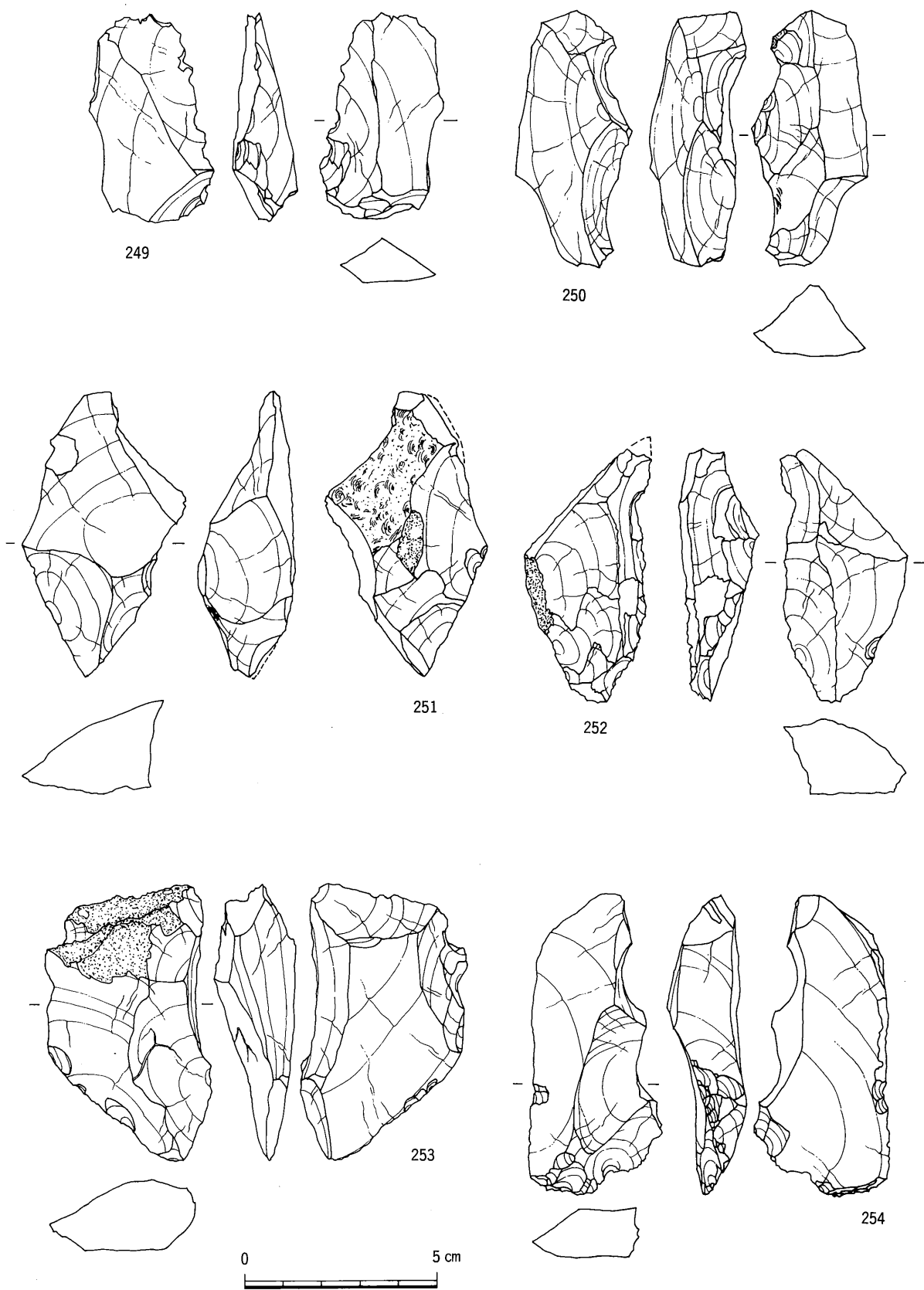
第 186 図 横長剝片石核実測図 (32)



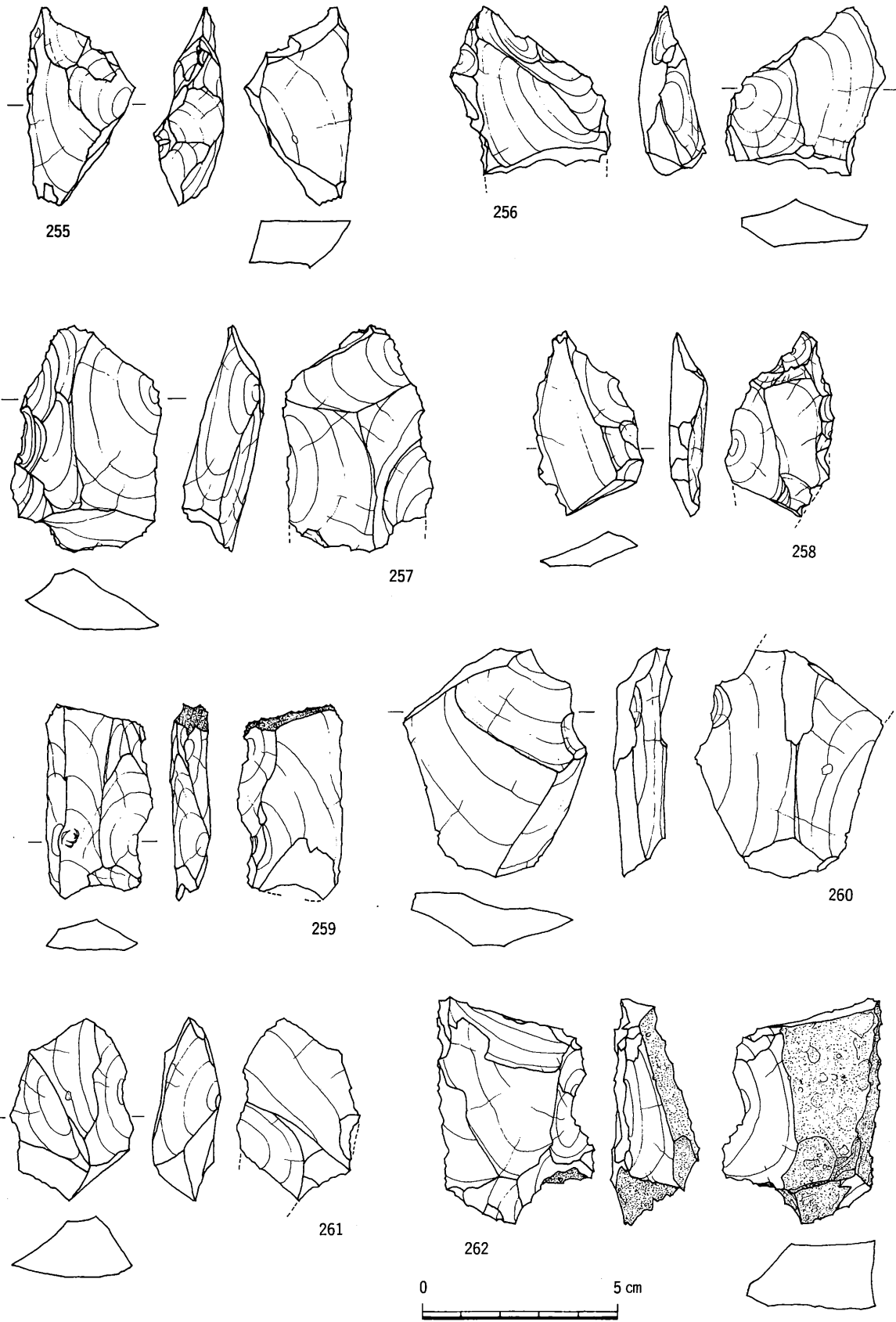
第 187 図 横長剥片石核実測図 (33)



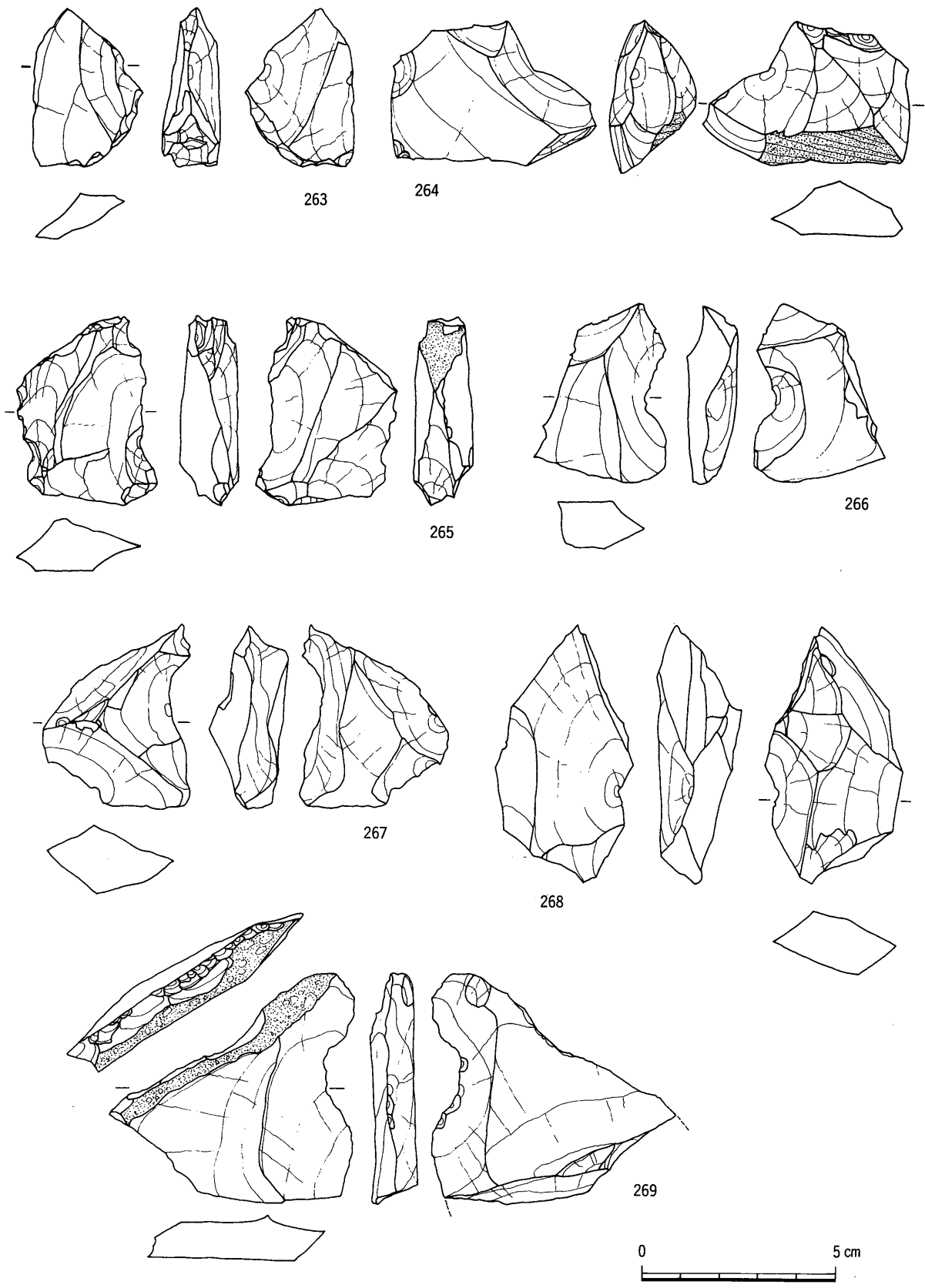
第 188 図 横長剝片石核実測図 (34)



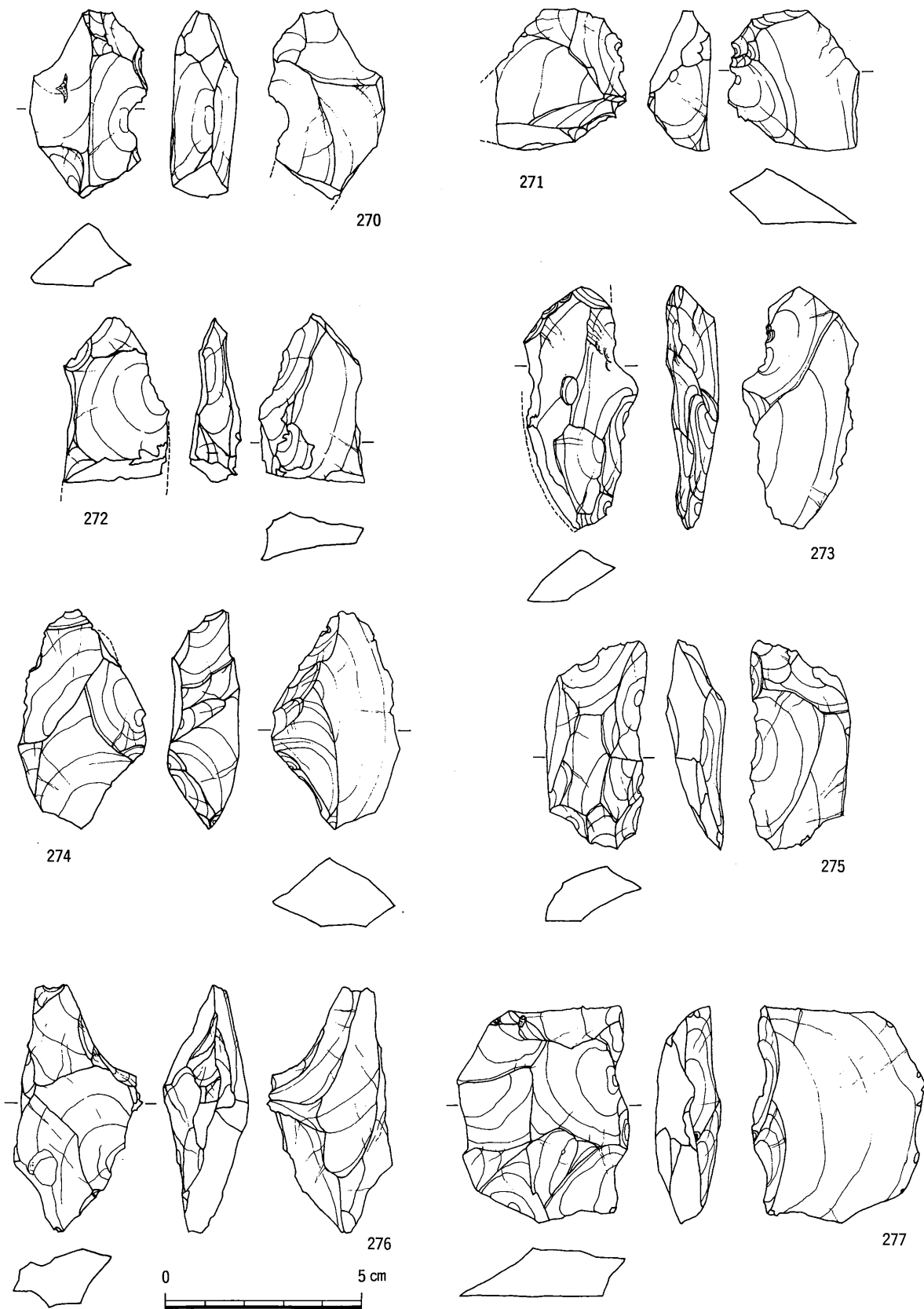
第 189 図 横長剝片石核実測図 (35)



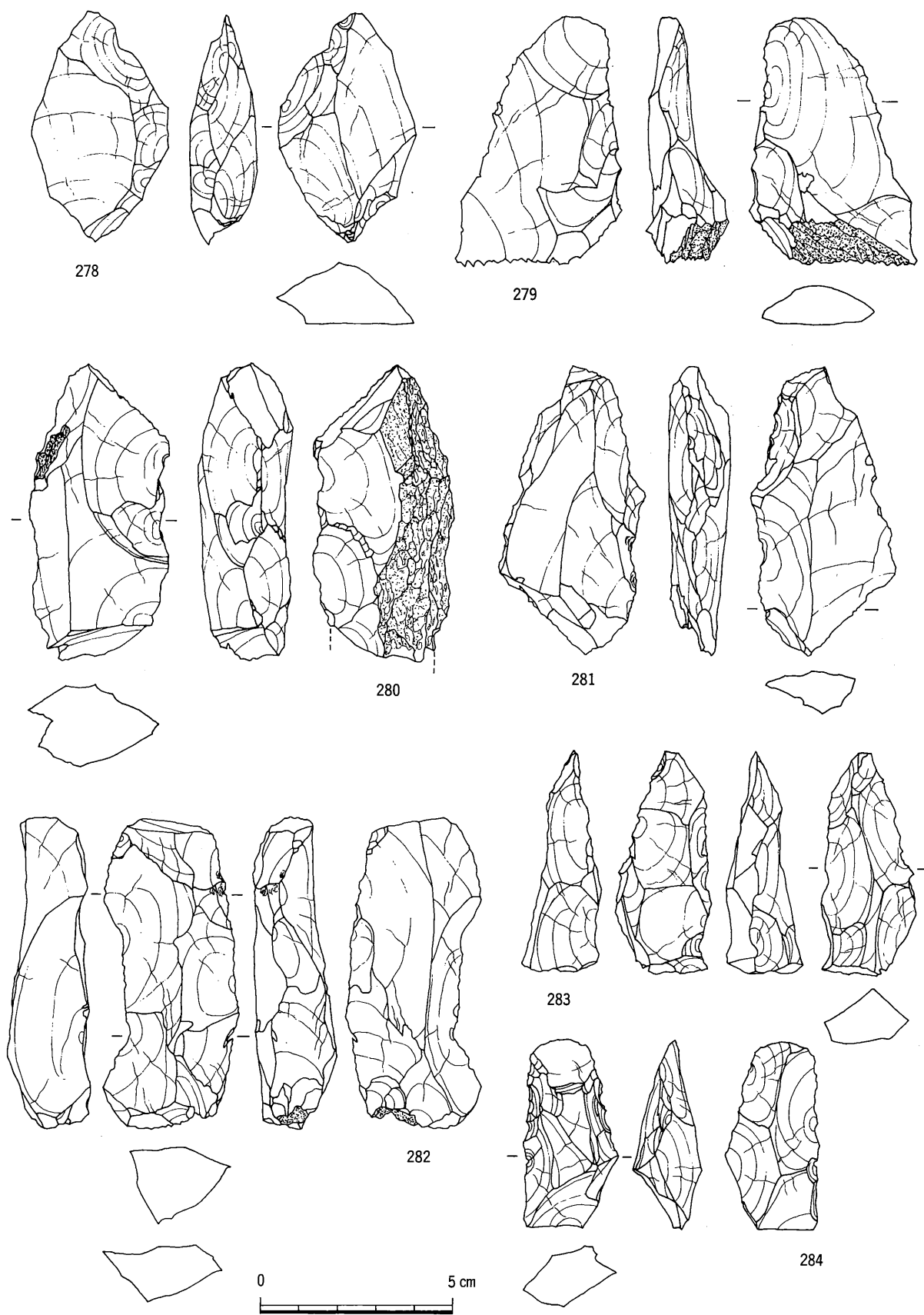
第 190 図 横長剝片石核実測図 (36)



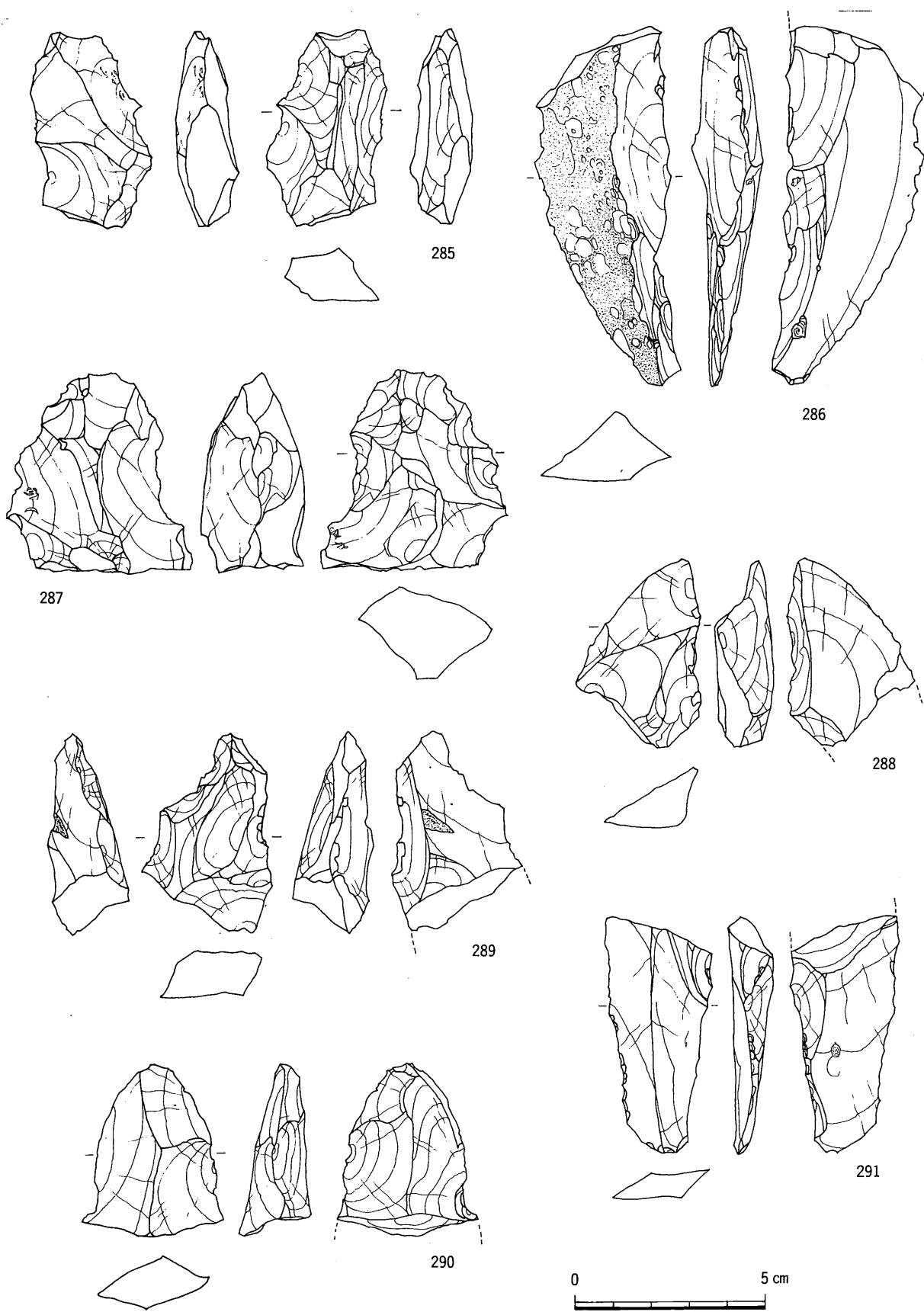
第 191 図 横長剥片石核実測図 (37)



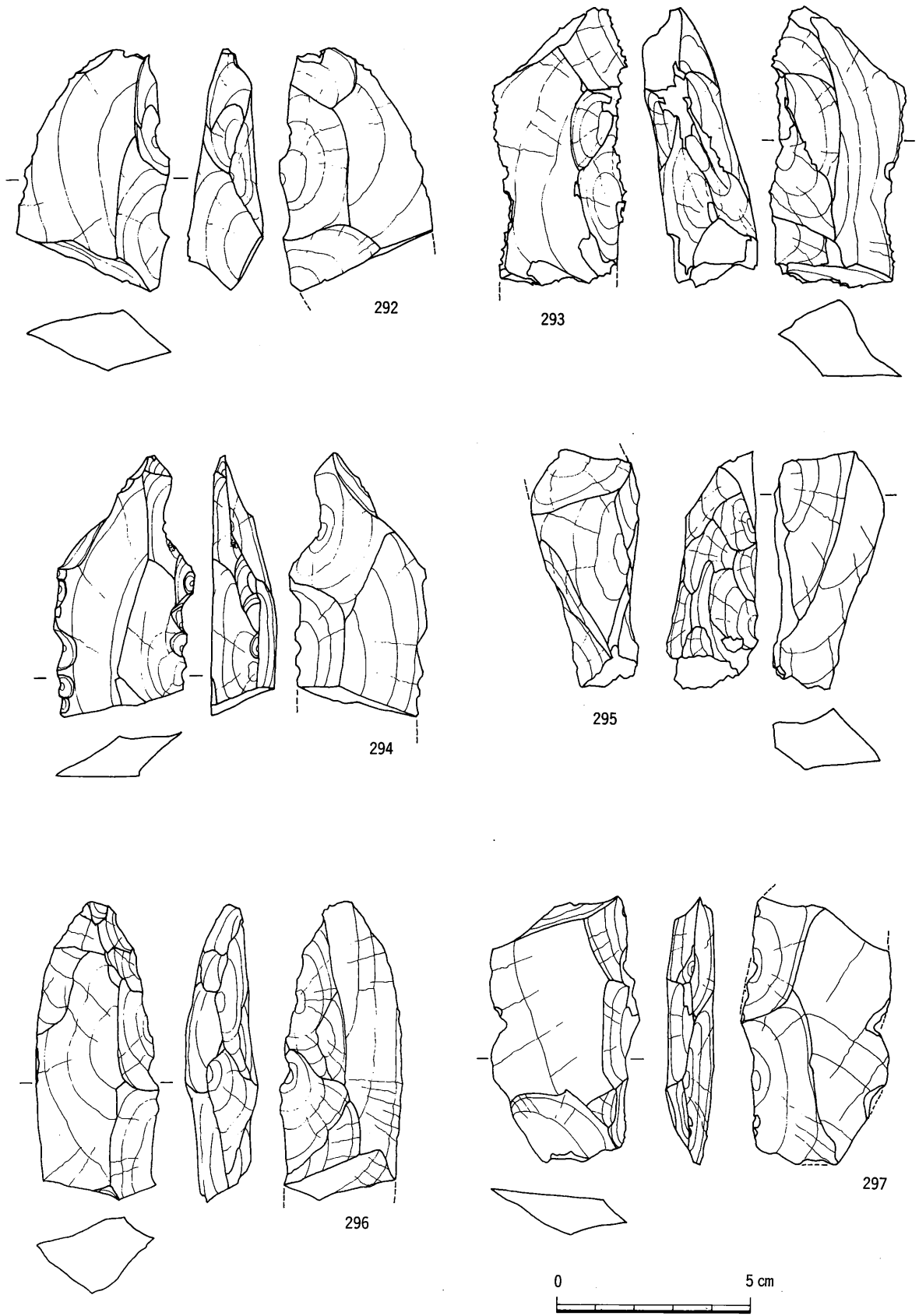
第 192 図 横長剥片石核実測図 (38)



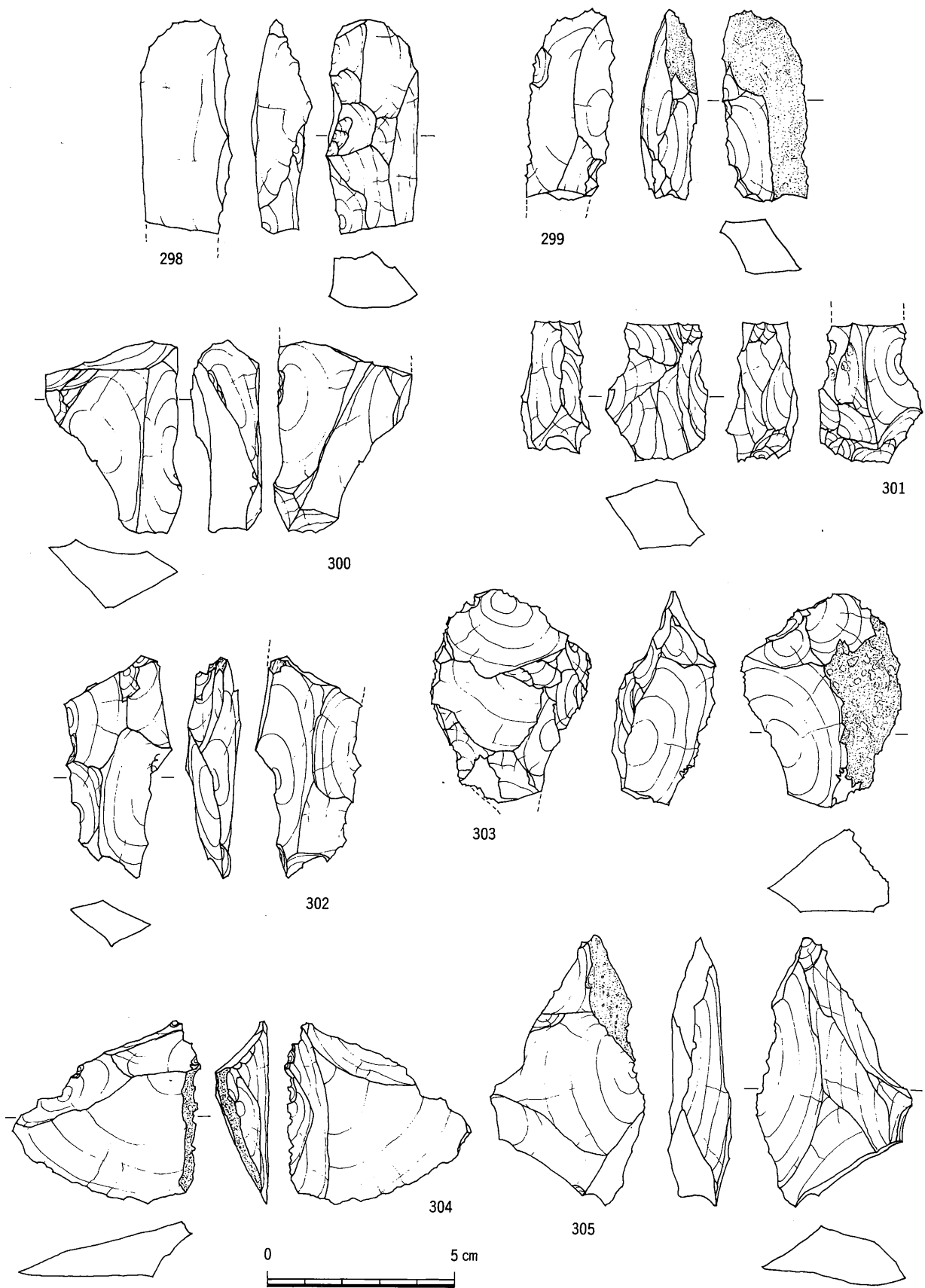
第 193 図 横長剝片石核実測図 (39)



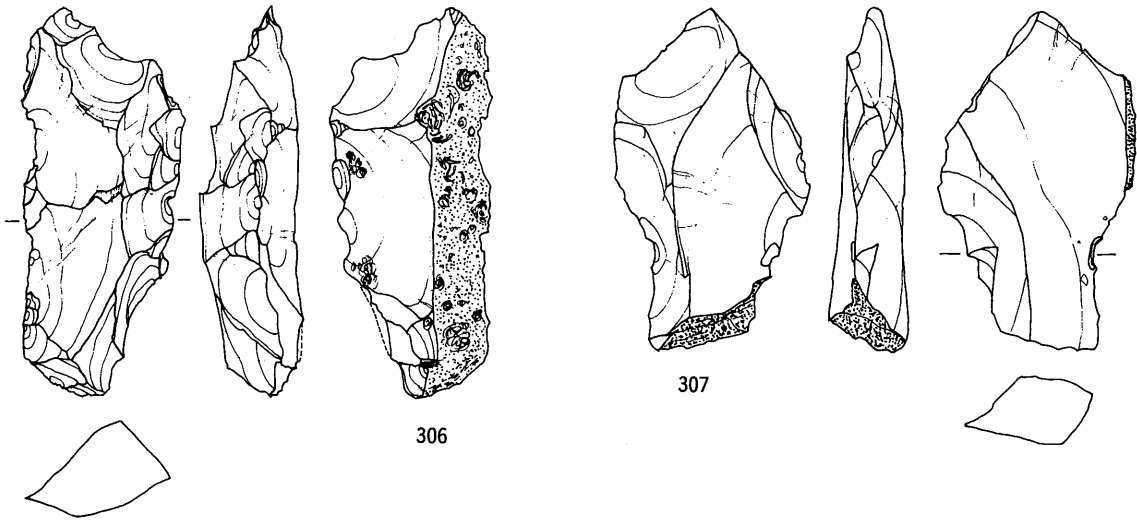
第 194 図 横長剥片石核実測図 (40)



第 195 図 横長剣片石核実測図 (41)

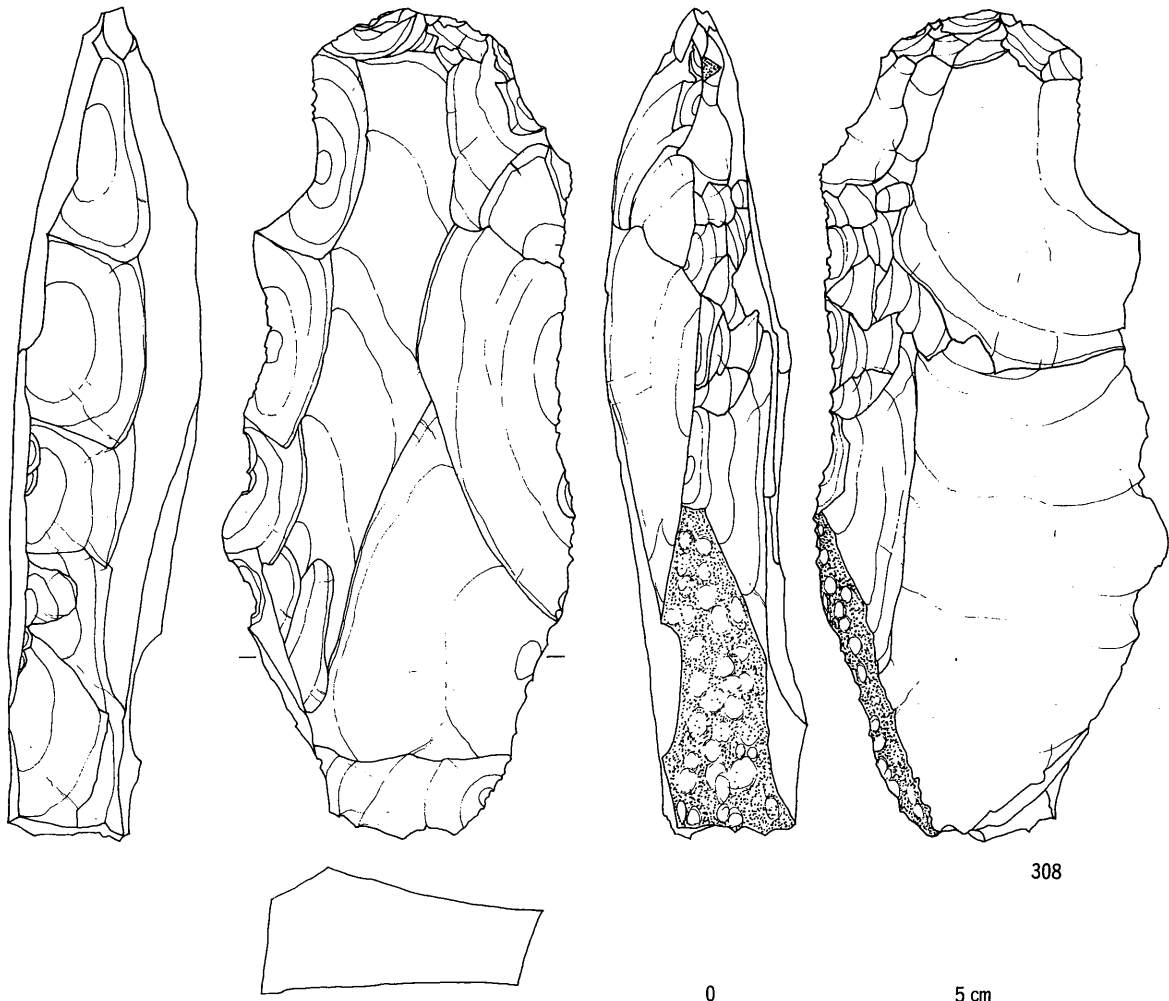


第 196 図 横長剝片石核実測図 (42)



306

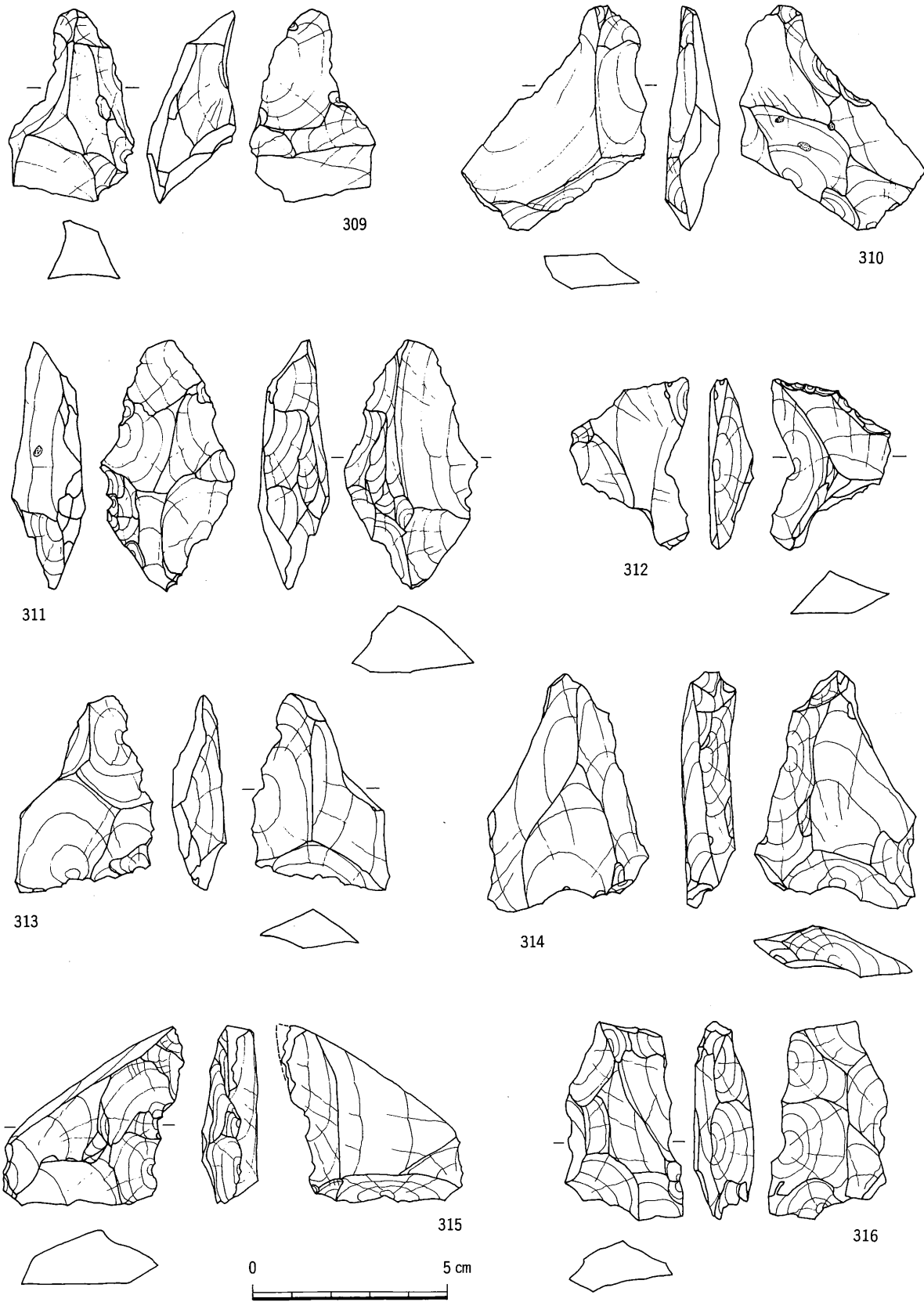
307



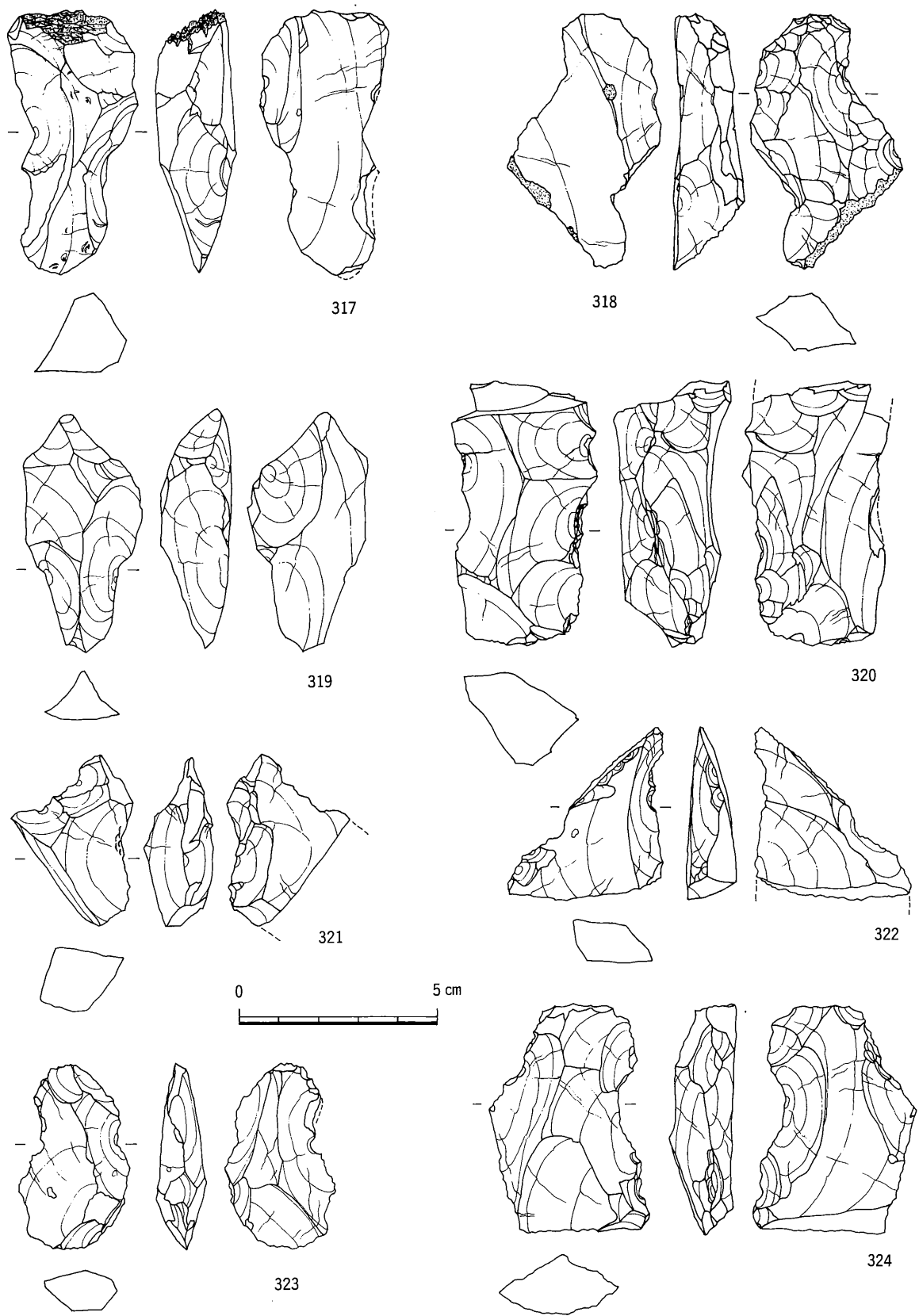
308



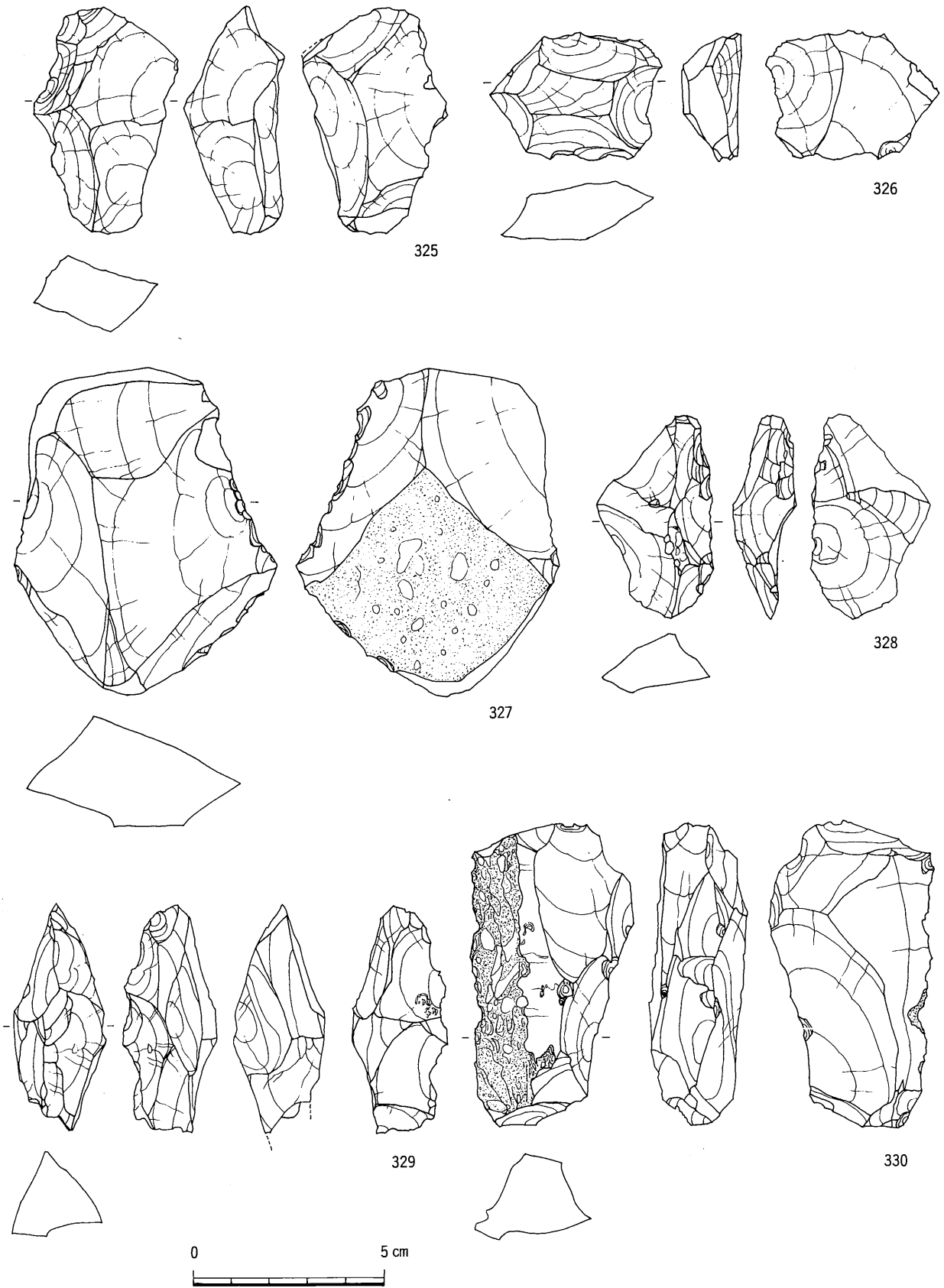
第 197 図 横長剝片石核実測図 (43)



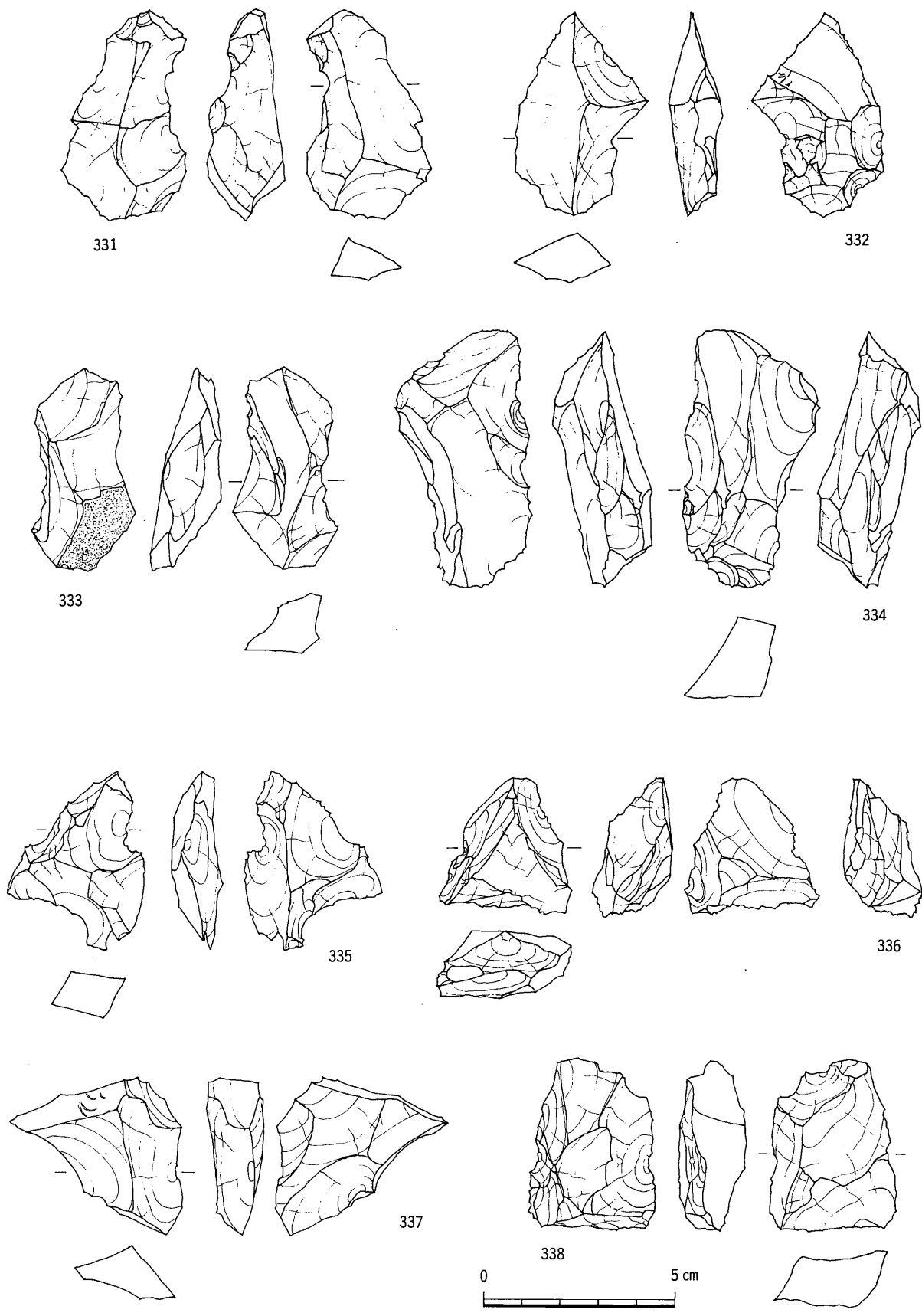
第 198 図 横長剥片石核実測図 (44)



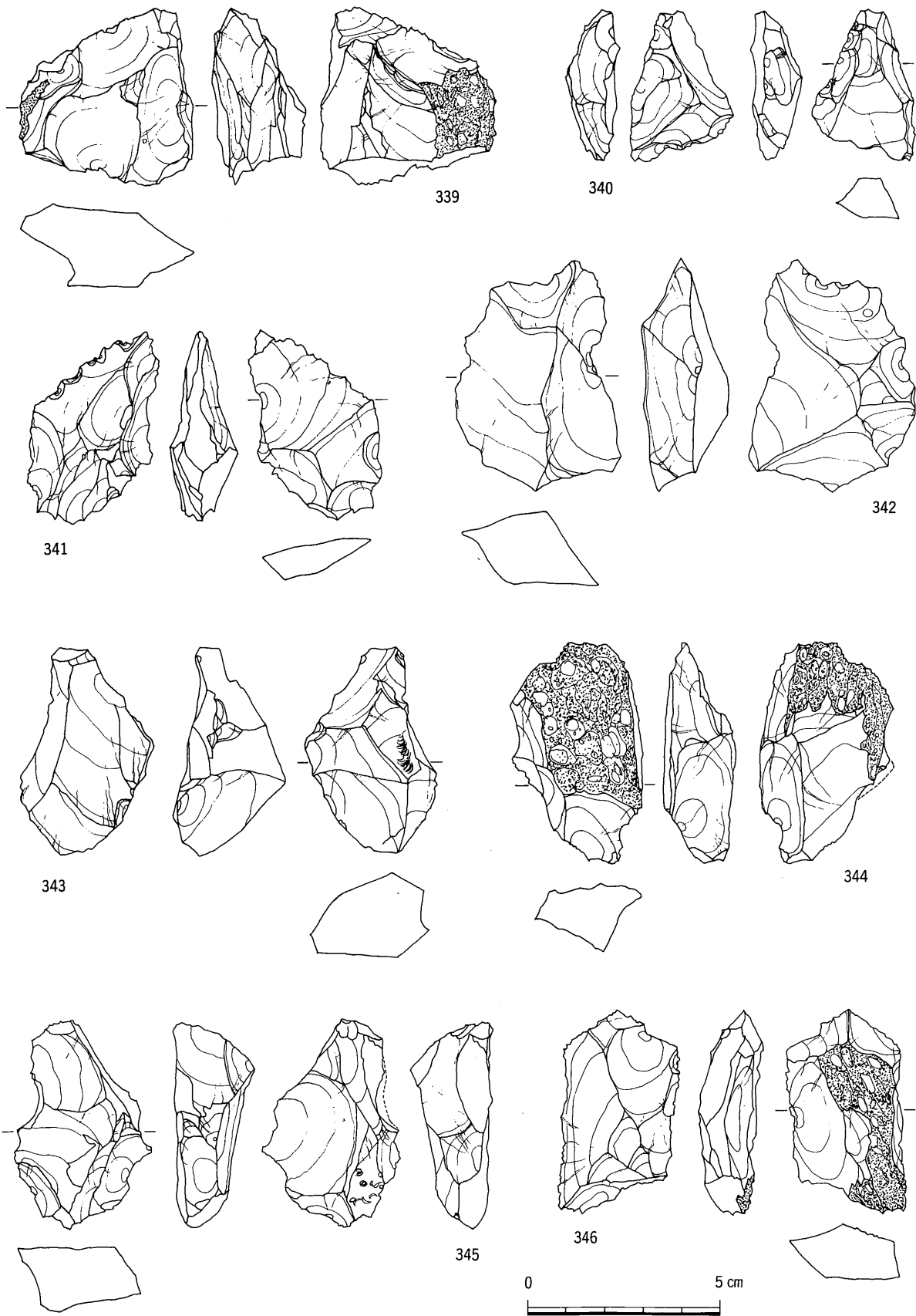
第 199 図 横長剝片石核実測図 (45)



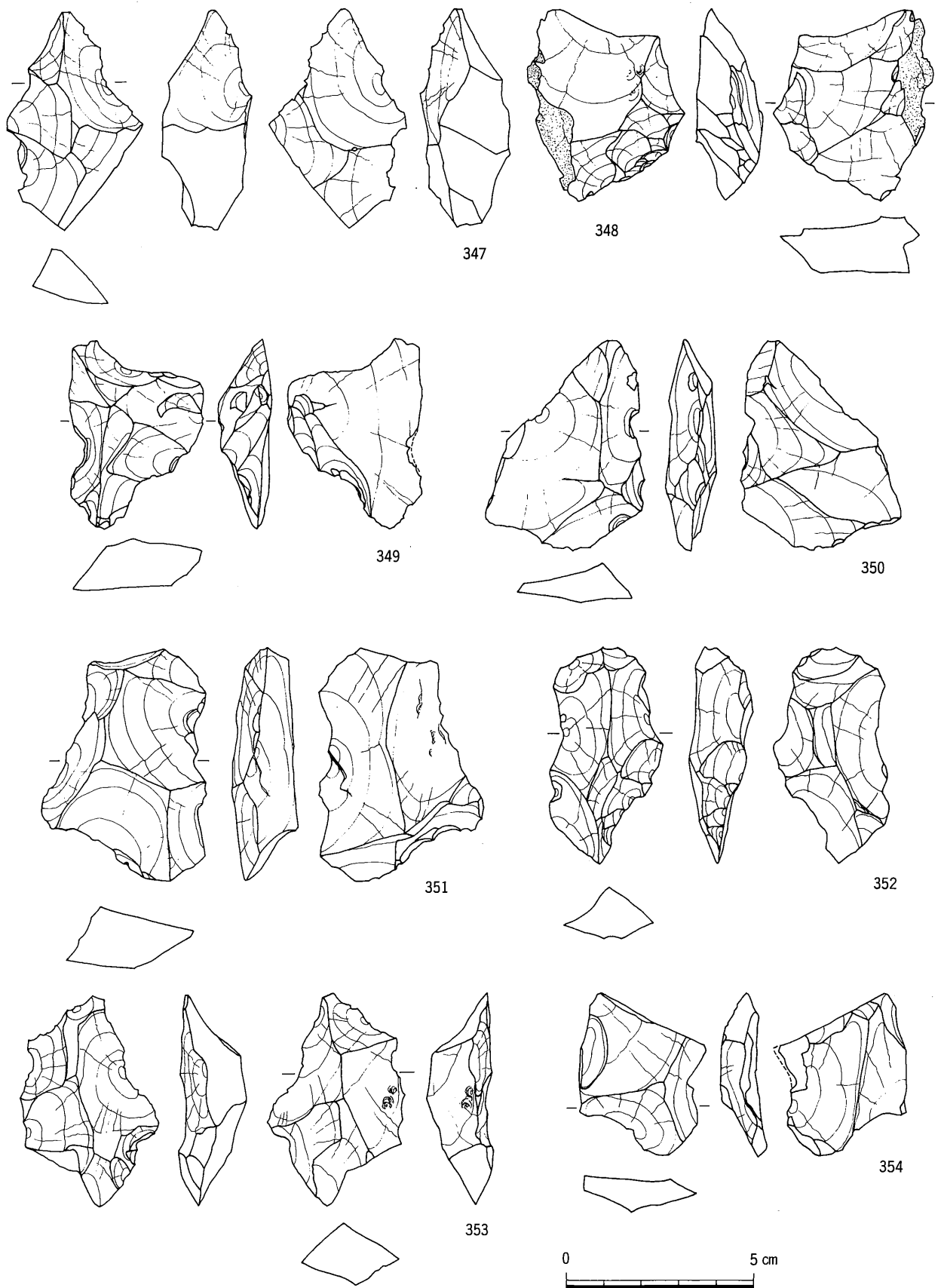
第 200 図 横長剥片石核実測図 (46)



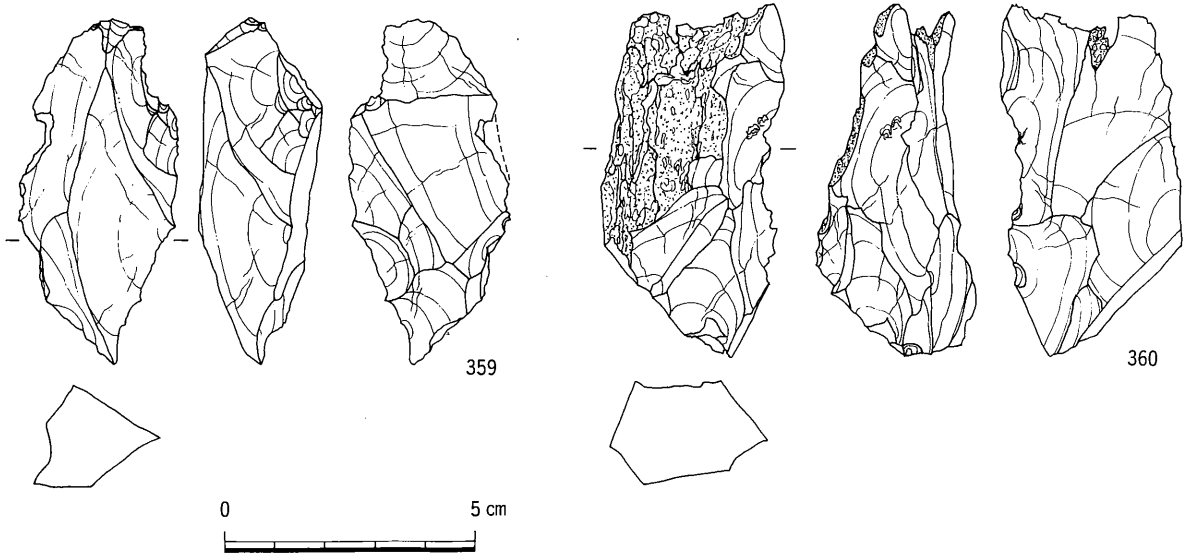
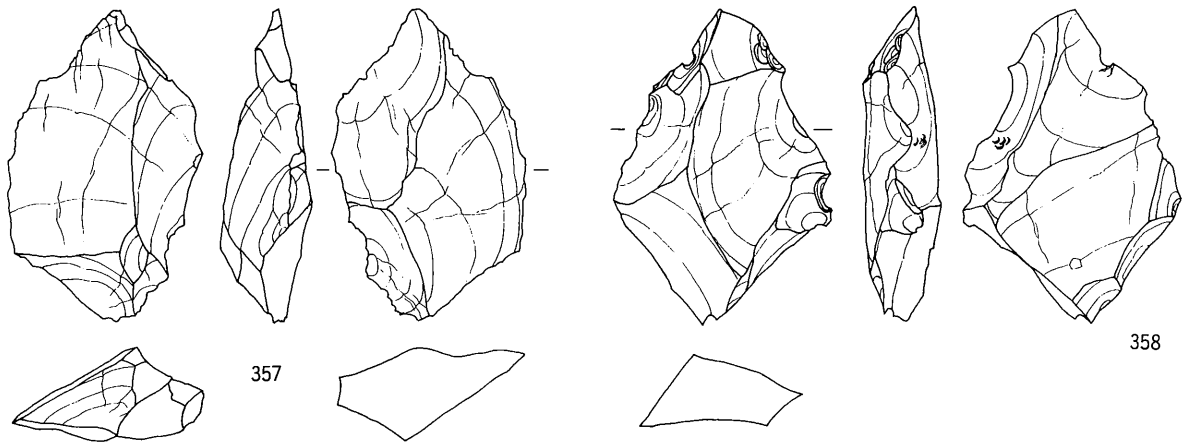
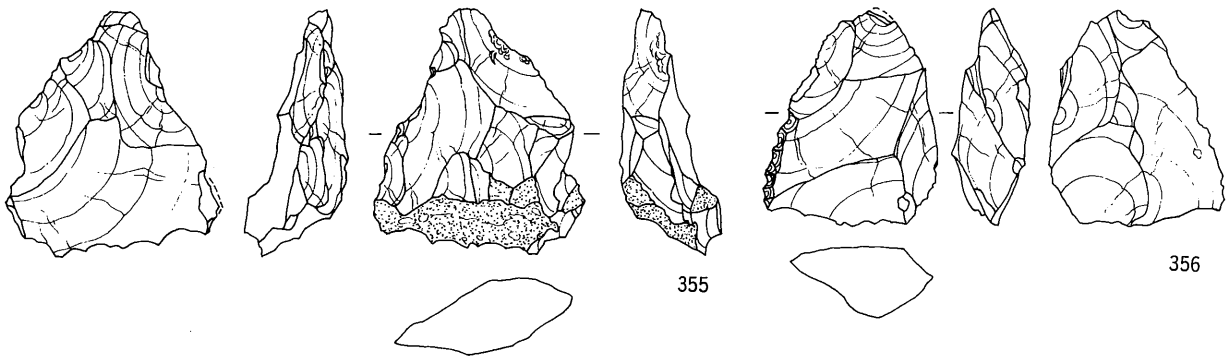
第 201 図 横長剝片石核実測図 (47)



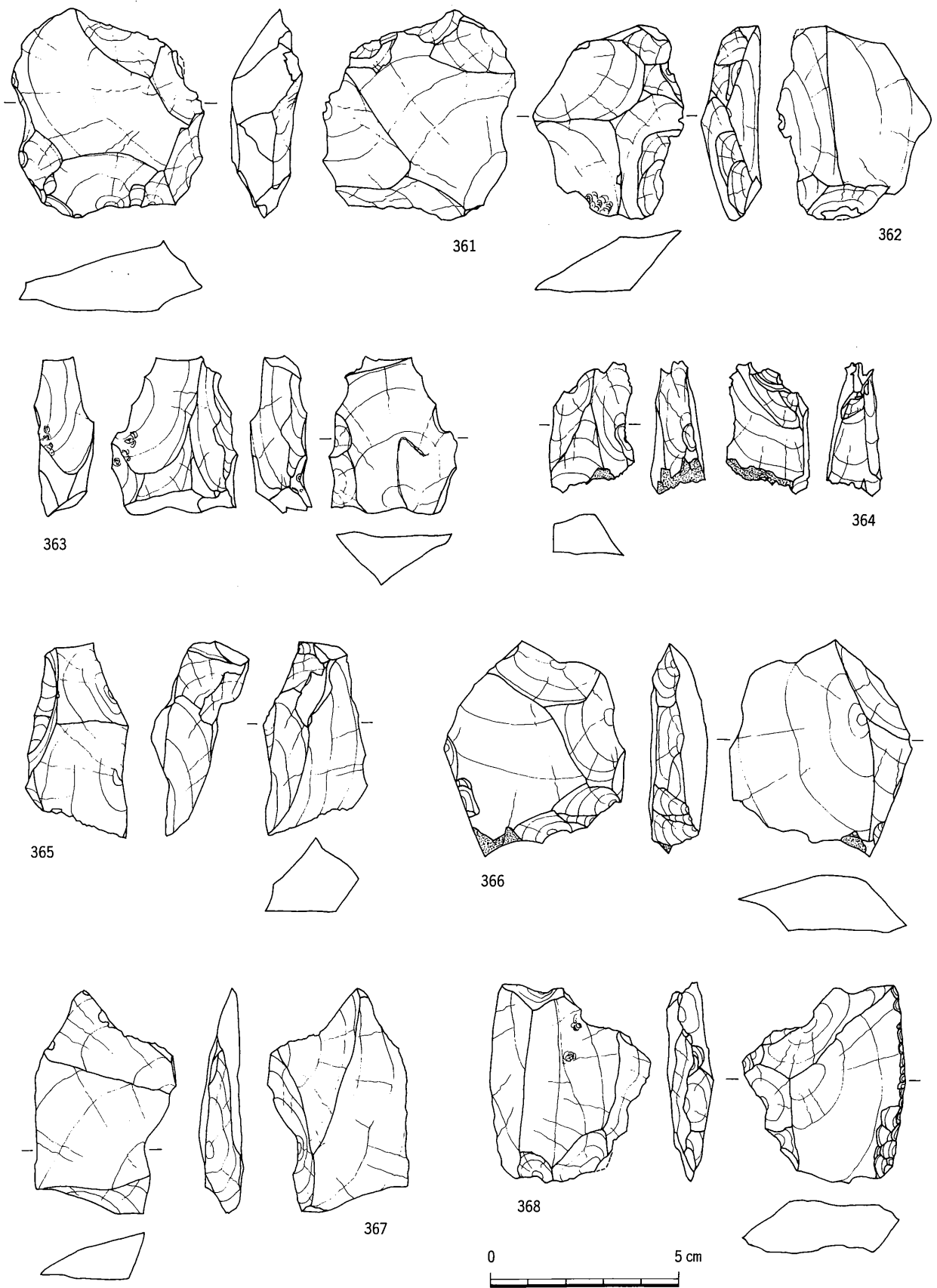
第 202 図 横長剝片石核実測図 (48)



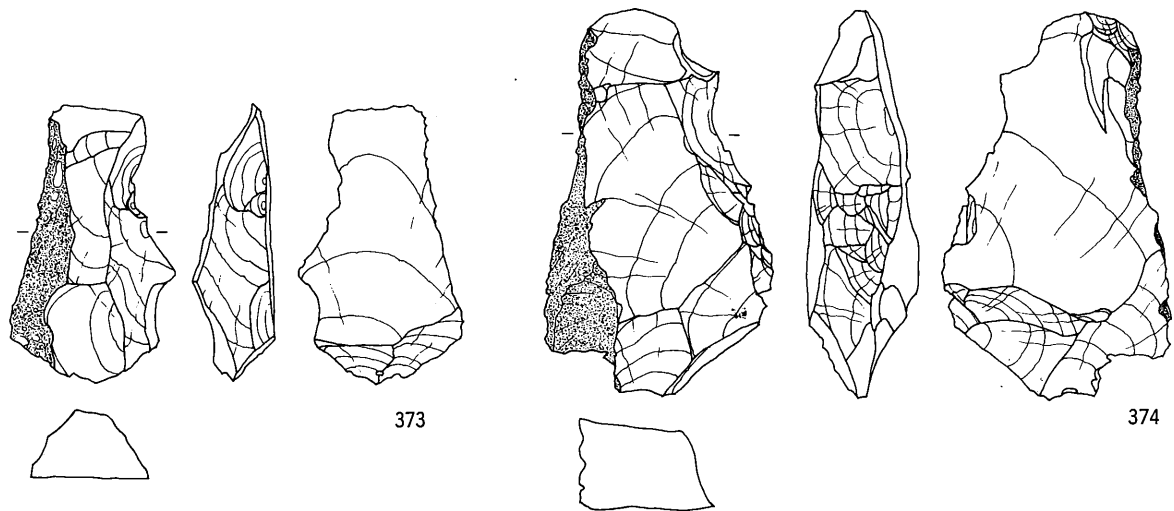
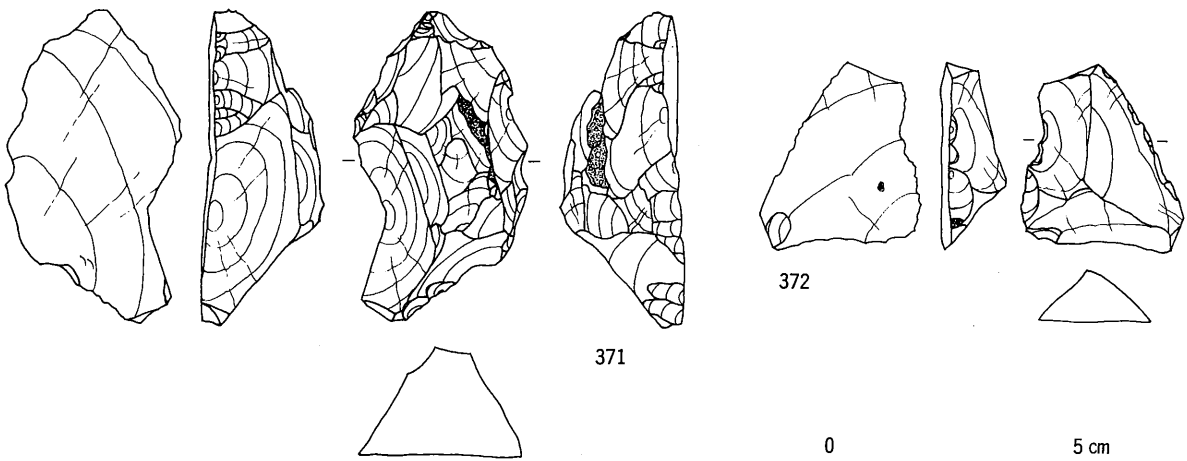
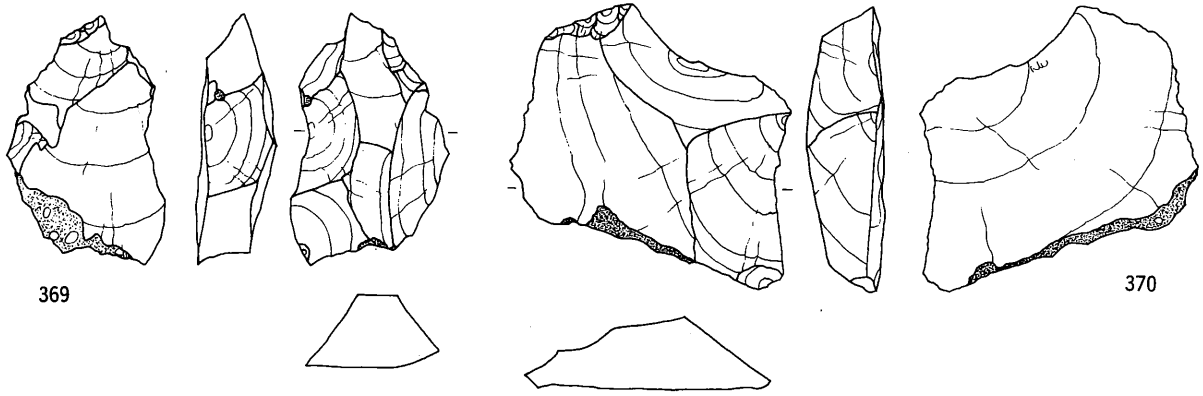
第 203 図 横長剣片石核実測図 (49)



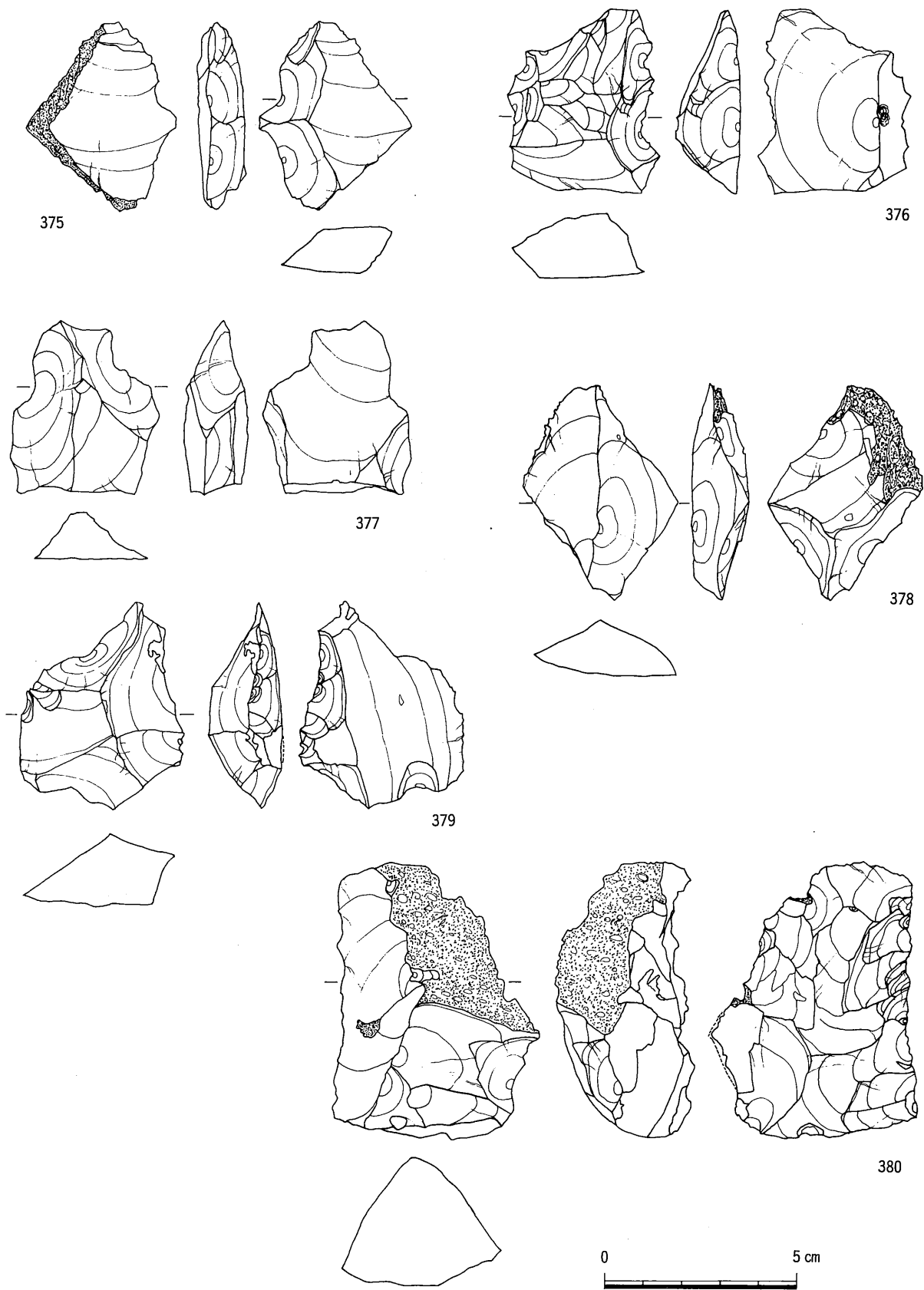
第 204 図 横長剣片石核実測図 (50)



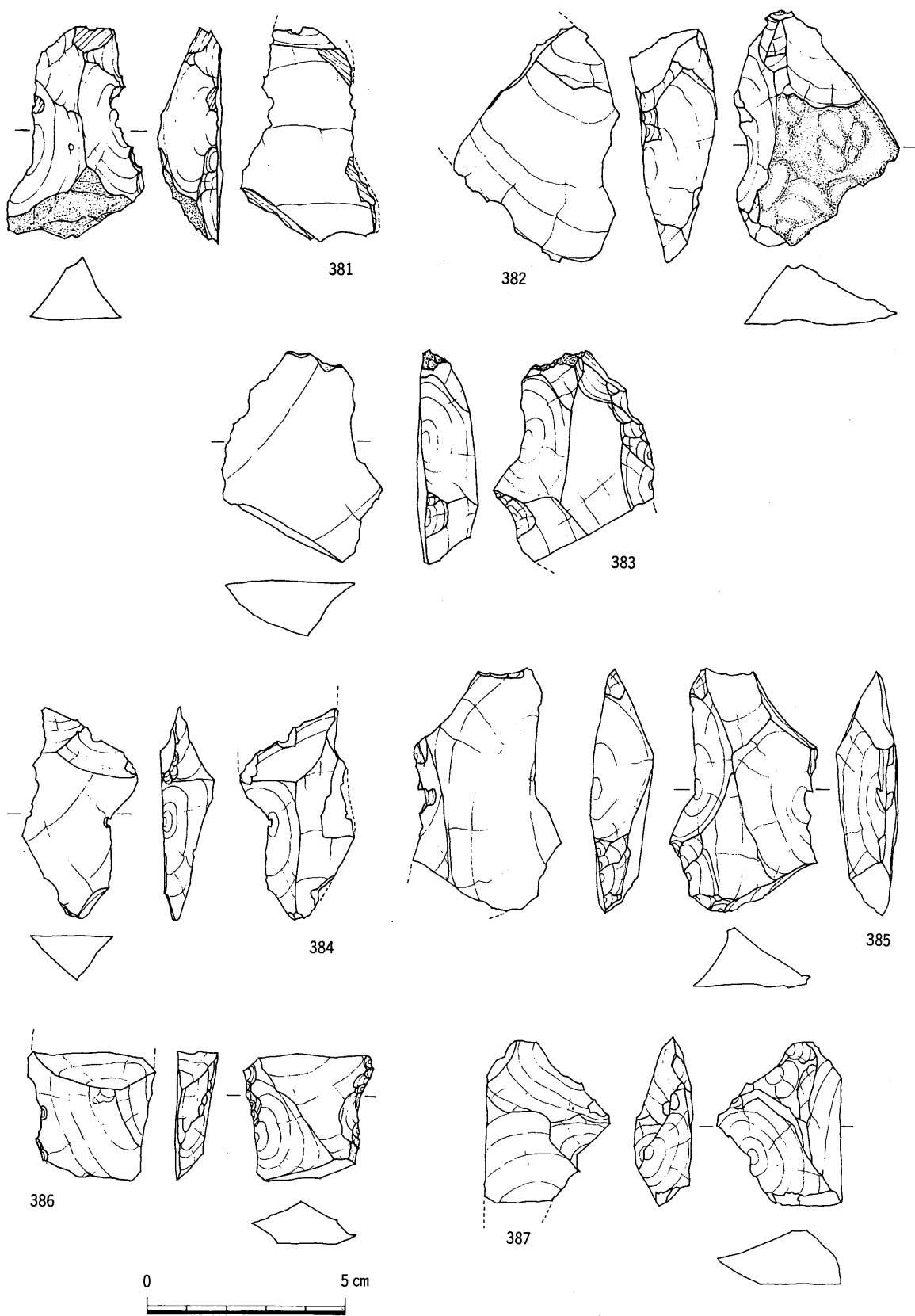
第 205 図 横長剥片石核実測図 (51)



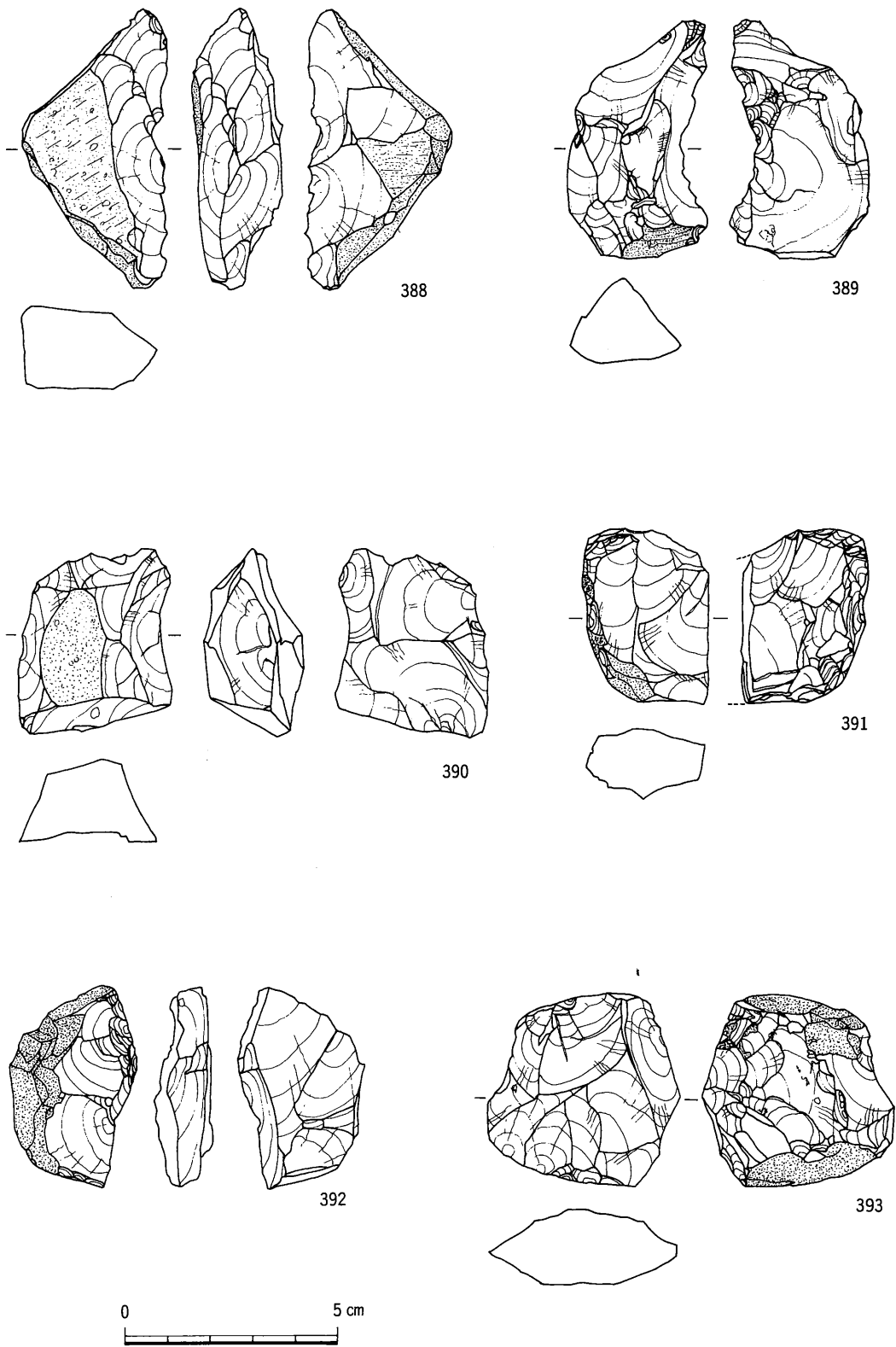
第 206 図 横長剥片石核実測図 (52)



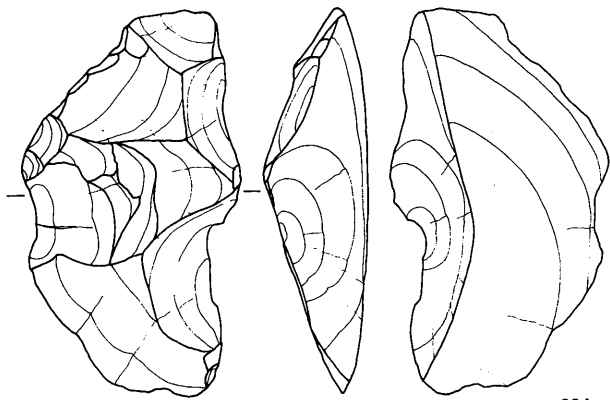
第 207 図 横長剥片石核実測図 (53)



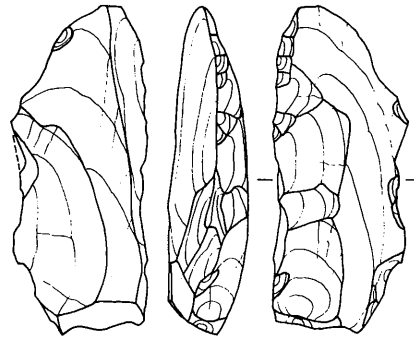
第 208 図 横長剥片石核実測図 (54)



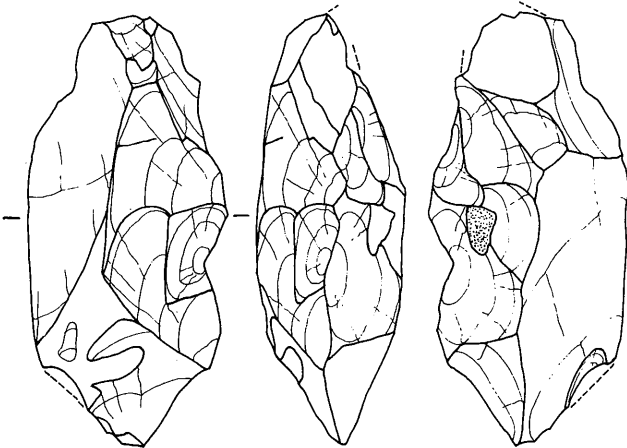
第 209 図 横長剝片石核実測図 (55)



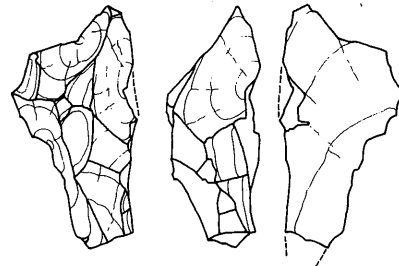
394



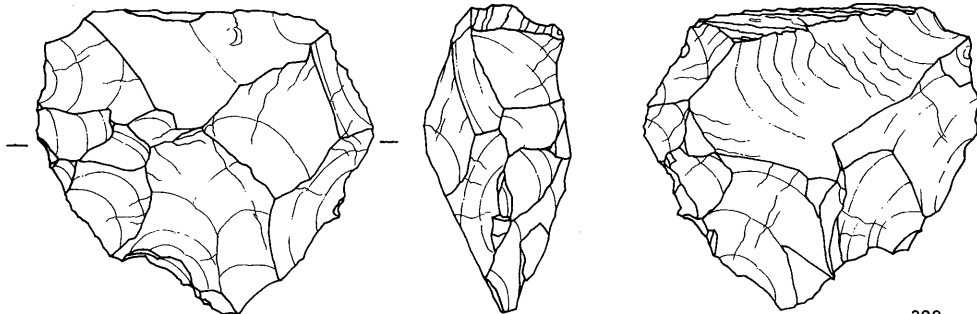
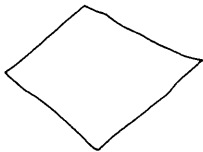
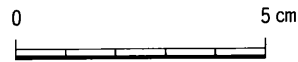
395



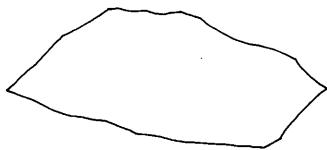
396



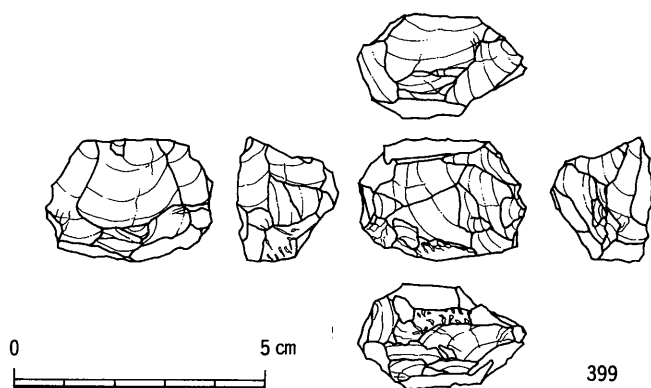
397



398



第 210 図 横長剣片石核実測図 (56)



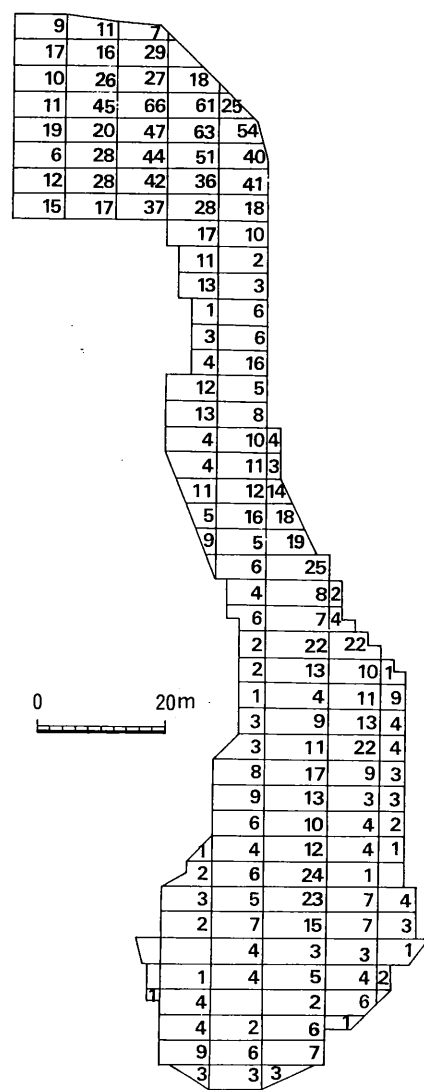
第 211 図 横長剥片石核実測図 (57)

11. 翼状剥片 (第213図～第246図)

ここで翼状剥片としたものと横長剥片 (第248図～第278図)との最も大きな相違は、翼状剥片としたものには、打面を山形に成形することを意識して背面側から施された複数の調整剥離を持つことである。ただ、交互剥離石核から生産された剥片には、目的とする剥片を剥離したネガティブな面があたかも打面調整のように打面に残される場合があるが、これを翼状剥片と厳密に区別することはできなかったのここを含んだ。

出土総数は1,829点である。しかも、翼状剥片が出土しなかったグリッドはほとんどなく、多少の差はあるものの調査地区の全域から出土している (第29表)。

調査地区のなかで翼状剥片の出土が特に濃密なのはA35列以北で、ここからは全体の約56%にあたる1,024点が出土した。この中でもA39-3は最も多く66点が出土し、A38-2・A39-2でも60点以上出土している。これは、この地域から旧石器時代遺物がきわめて多量に出土したことによるもので、翼状剥片のみならず、横長剥片石核やナイフ形石器などもこの地域から多量に出土している。調査地区南部と中央部をみると、B8・B9・C14-1・B18・C18-1から20点以上の出土があり、B21～B23からも18～25点出土しているのでこの4地点を翼状剥片の集中地点とすることができよう。これに対して、細石刃や細石核が多かった調査地区南端部からの出土は少なかった。



第 29 表 翼状剥片出土分布表

一方、これを国府型ナイフ形石器（第10表）や横長剥片石核（第20表）の出土状況と比較すると、A35列以北に各々の半数以上が集中することは共通して認めることができる。また、翼状剥片が集中するB8・B9とB21～23では、同グリッド又は隣接するグリッドにナイフ形石器や横長剥片石核が集中する傾向が認められ、B18・C18-1についても横長剥片石核の集中が認められる。しかしながら、一方では翼状剥片以外の素材を用いたと考えられるナイフ形石器の出土も翼状剥片の集中地点に集中する傾向が認められるので（第11表）、明確な結論を導くことは困難であるように思われる。

図示した翼状剥片は打面や刃縁の形態・背面の剝離痕・断面形・大きさ・打面の調整などによって細かな分類が可能であるが、ここではファースト・フレイクの抽出を行ったのちいくつかの点についてみてゆくことにする。

第213図1～6は翼状剥片のファースト・フレイクである。いずれも背面側のネガティブな剝離面上に打撃痕を持ち、底面はこの打撃によって形成されたポジティブな剝離面からなる。2の背面には、打面側から施された細かな調整が認められる。

7・8・10は、背面の打点部分が破損などによって失われているものの1～6と同じファースト・フレイクであるものと思われる。

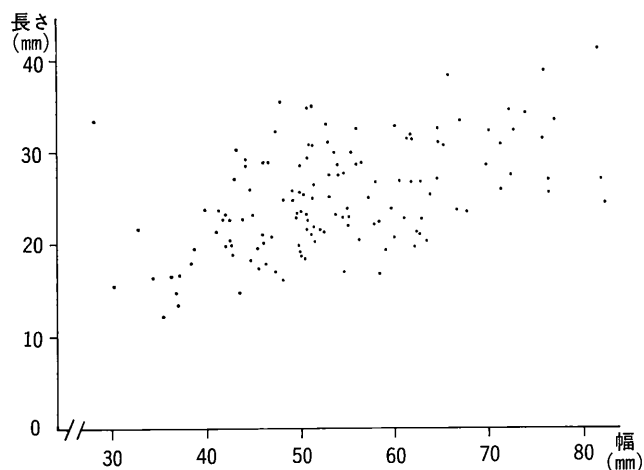
一方、第227図174の背面は、主要剝離面の剝離方向と直交する方向から剝離され、第245図377は背面が自然面からなっているのでこれもファースト・フレイクとすることができる。

翼状剥片の打面調整には非常に細かなもの（第232図229・238など）から逆に大きいもの（第243図358・359など）まで認められる。細かな打面調整については翼状剥片石核には認められないが、229・238などの観察から翼状剥片の剝離前に再度の打面調整として石核上でなされたものであることが知られる。羽佐島遺跡では顕著なものだけでも1割以上の翼状剥片に細かな調整が認められる。

一方、358・359などのように打面調整の大きいものについては、打面調整の粗い翼状剥片石核から生産された翼状剥片と、石核の表裏から目的とする横長剥片を一枚ずつ剝離する交互剝離石核（第233図249など）から生産される剥片とを区別することが難しいため、これには横長剥片をも含むものと考えられる。

第214図14・第221図101・第231図225・226・第239図309は翼状剥片の刃縁部の一部に主要剝離面側から調整を施したナイフ形石器である。翼状剥片の打点部を除去しないまま石器として用いた例は削器にもみられるが、翼状剥片として挙げた中でも第216図42・第219図78・第221図99・第230図214などのように、刃縁部の一部に調整が施されたものや使用痕の可能性のある小剝離が認められるものが1割程度ある。この中には製作時や放棄後の破損も含まれると考えられるが、出土量からみて、これらが刃器などとして使用された可能性は高いものと思われる。

図示した翼状剥片の幅はほぼ3～8cmである。また、打点から刃縁部までの長さはほぼ1～3cmを計る。幅は3～8cm、長さ



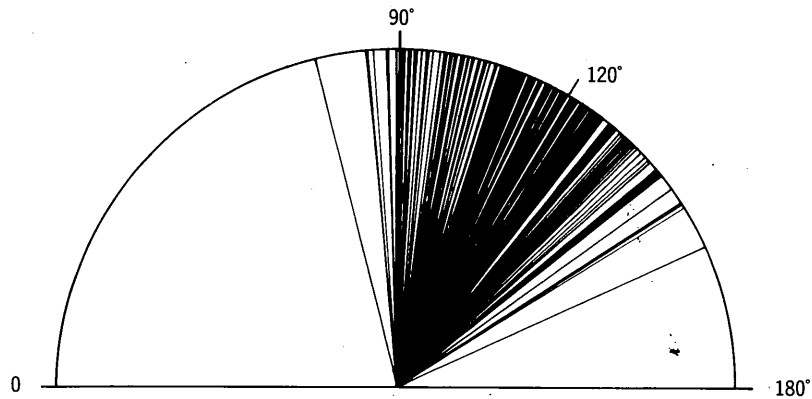
第30表 翼状剥片の長幅比

が1～3cm程度の大きさであるが、その中でも幅4～6cm、長さ1.5～2.5cm程度のものが多い(第30表)。これに対して翼状剥片石核の剥離痕をみると、幅は3cm以下のものがある一方、7cmを越えるものもなく、打点から刃縁部までの長さは1cmから3cmにほぼおさまる(第25表)。そして、この中で多いのは幅3.3～5cm、打点から刃縁部の長さは1～2.3cm程度のものである。

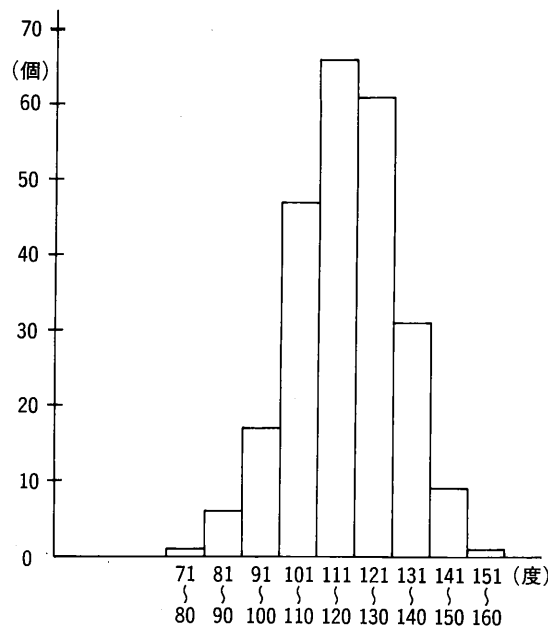
このように、出土した翼状剥片に比べて翼状剥片石核に残された剥離痕はやや小さい傾向を示すが、これは残核における最終剥離面での計測によるためであろう。また、幅3cm以下の翼状剥片はわずかながら出土したが、翼状剥片の剥離における失敗品として放棄された可能性もあり、図示しなかった。

翼状剥片の剥離角度は120°を中心として100°～140°に約86%が集中している(第212図・第31表)。これに対して100°以下では76°を最小にして約10%，140°以上では155°を最大にしてわずか4.2%しかみられない。これと同じ傾向は翼状剥片石核の剥離角度でも認められる(第153図・第27表)。

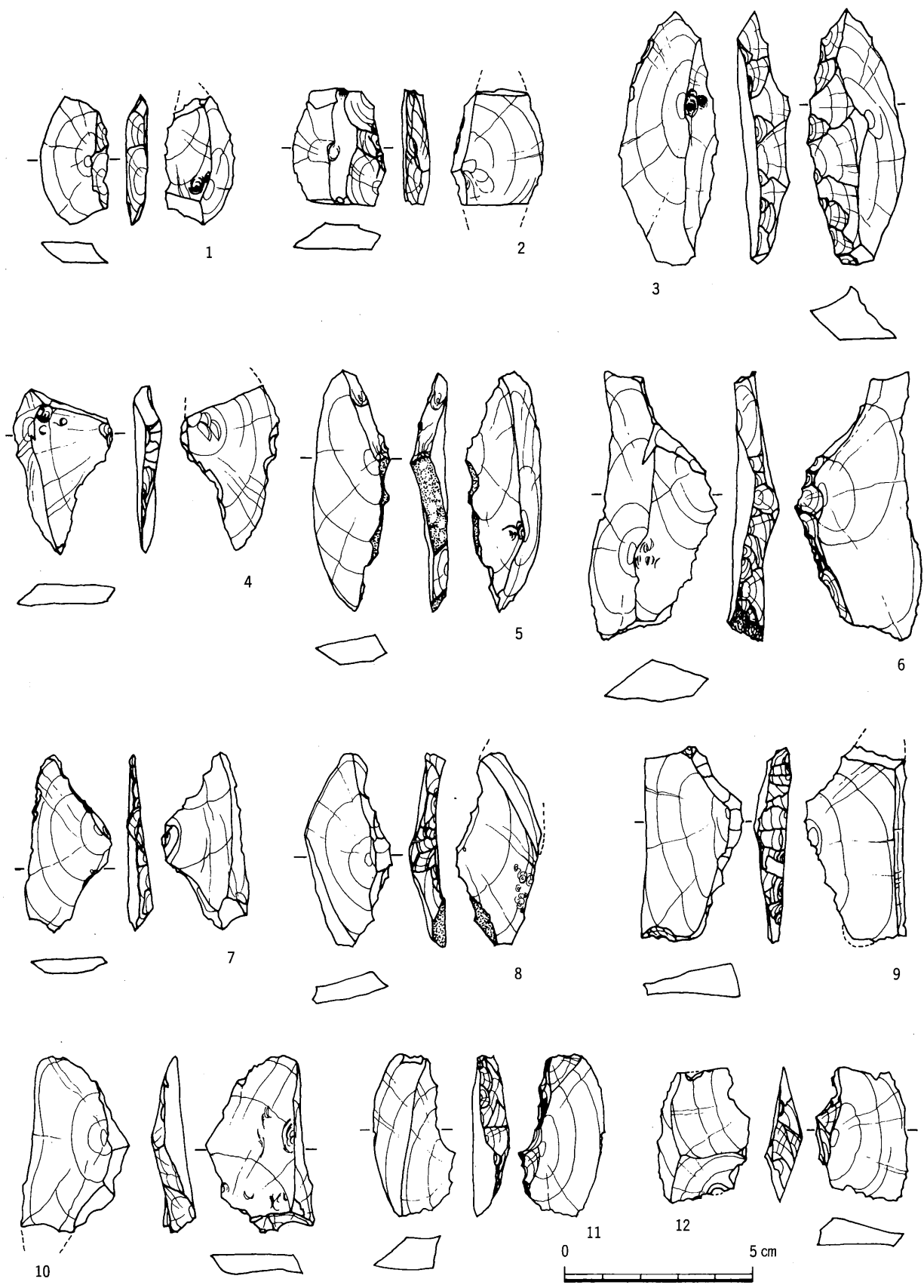
なお、第237図289・第238図306・第242図343・第245図385・第246図387・388は打面部に主要剥離面側から施された剥離痕を持つので、さきにナイフ形石器とした14・101・225・226・309と同じくこれもナイフ形石器、ないしはその加工段階のものとするべきであろう。



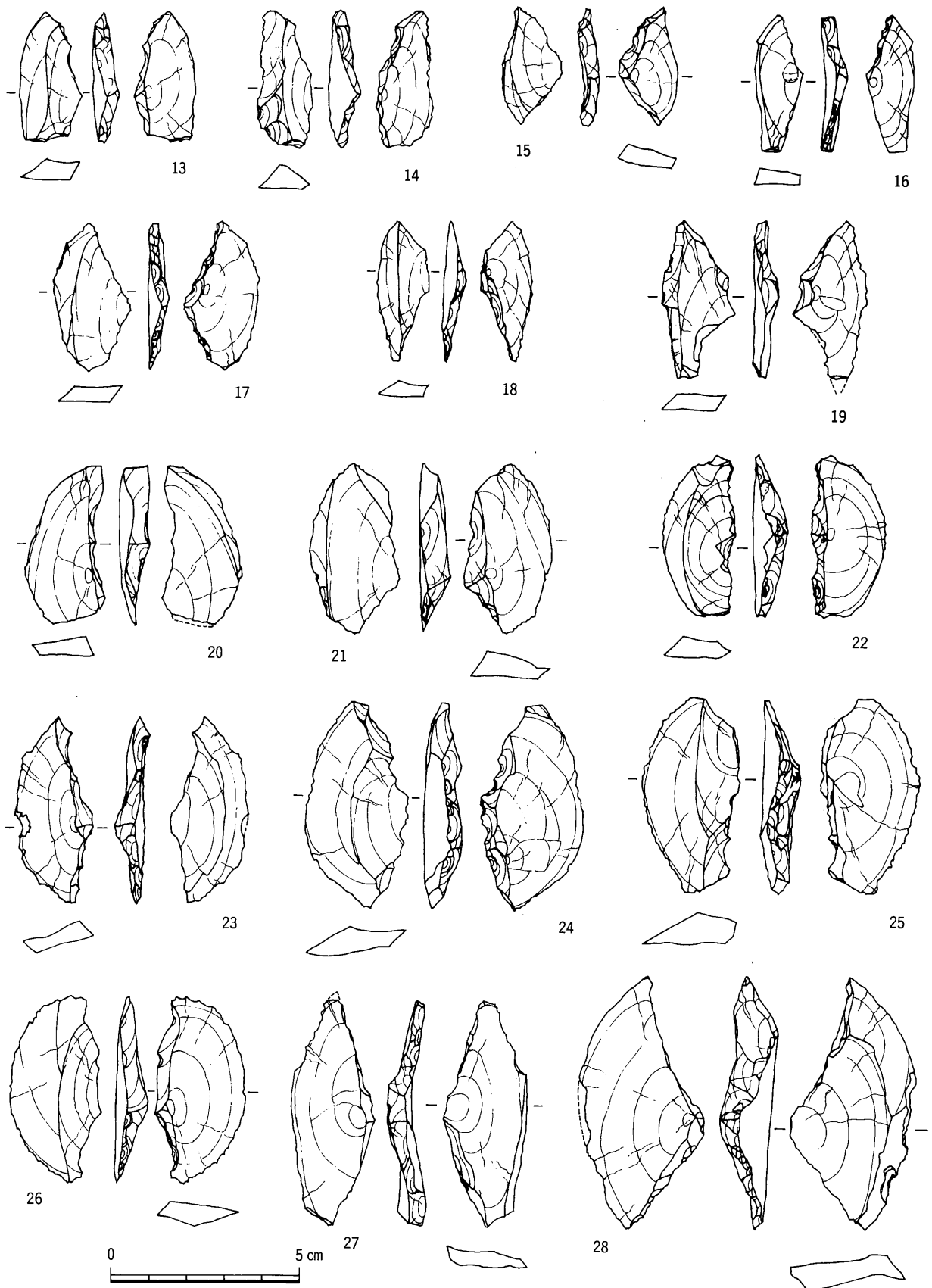
第 212 図 翼状剥片剥離角度分布図



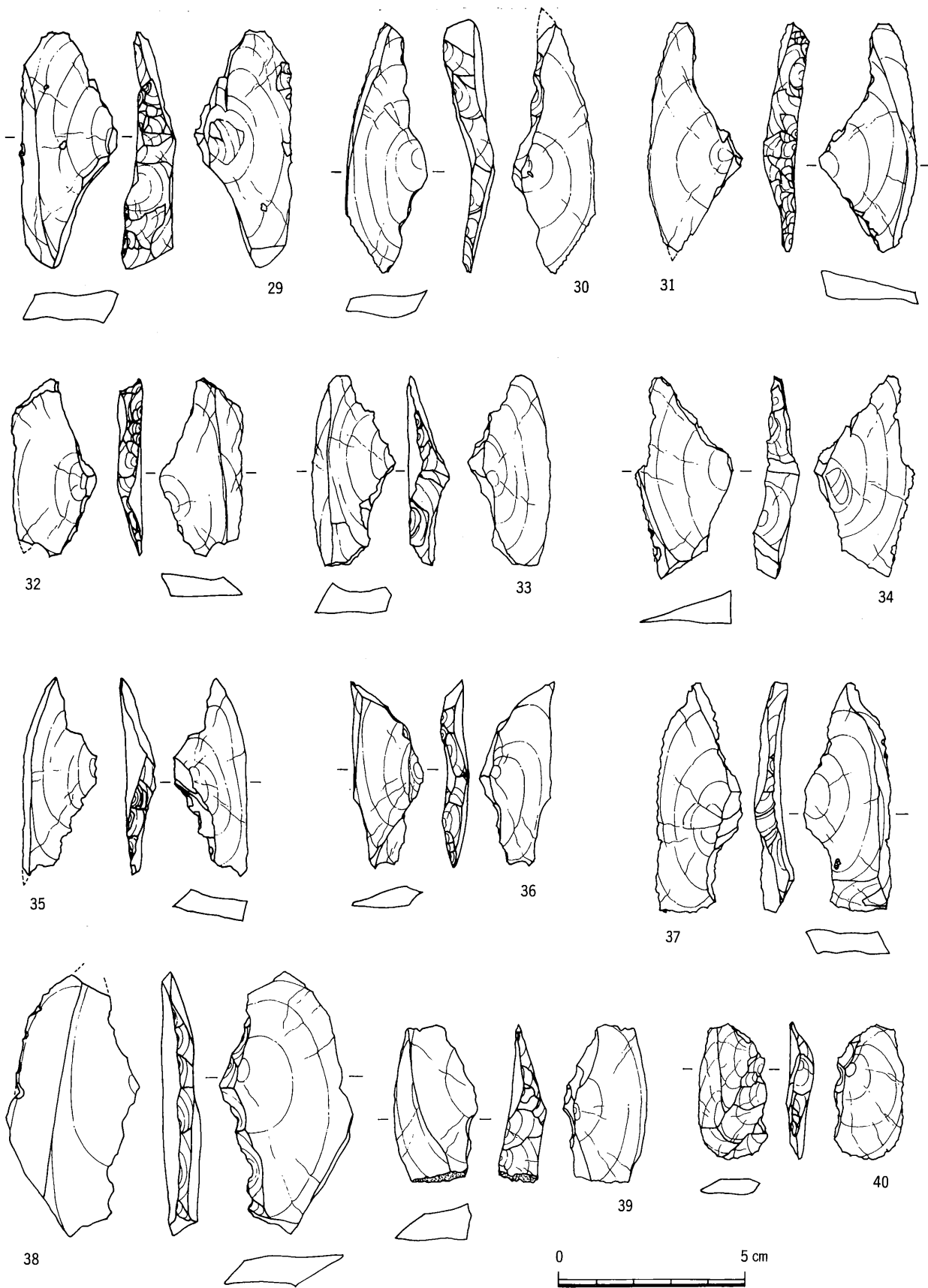
第 31 表 翼状剥片の剥離角度分布表



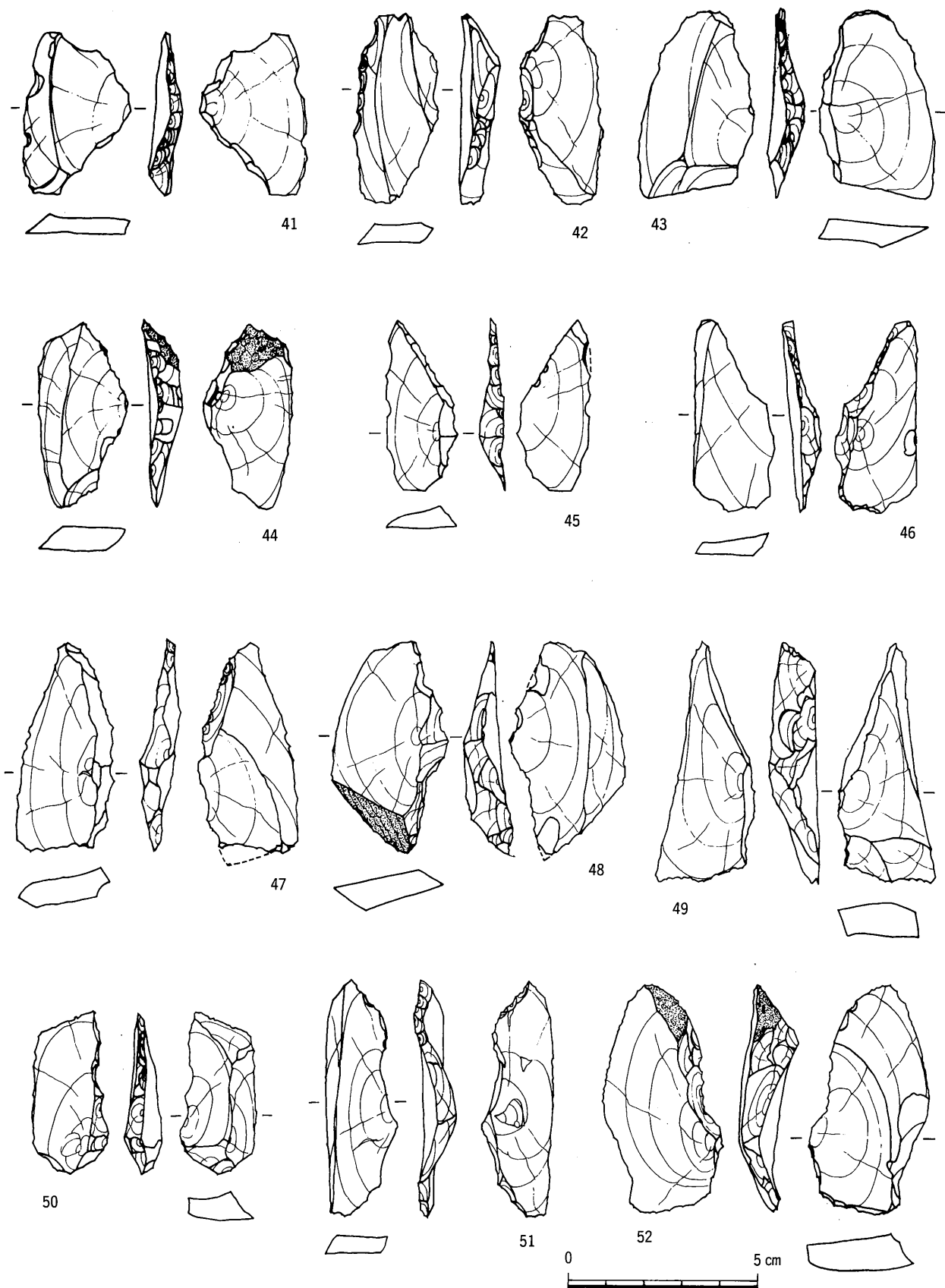
第 213 图 翼状剥片实测图 (1)



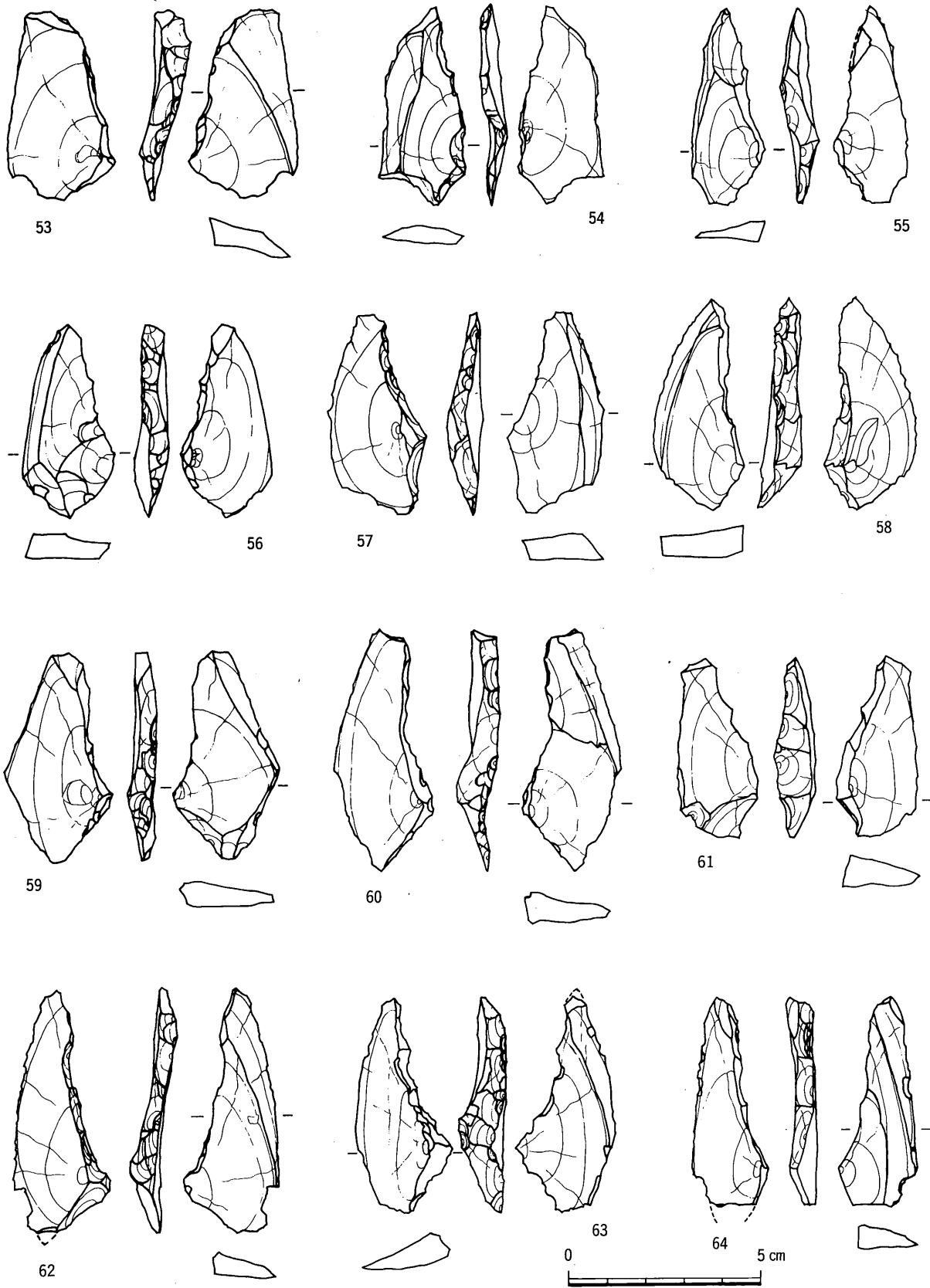
第 214 图 翼状剥片实测图 (2)



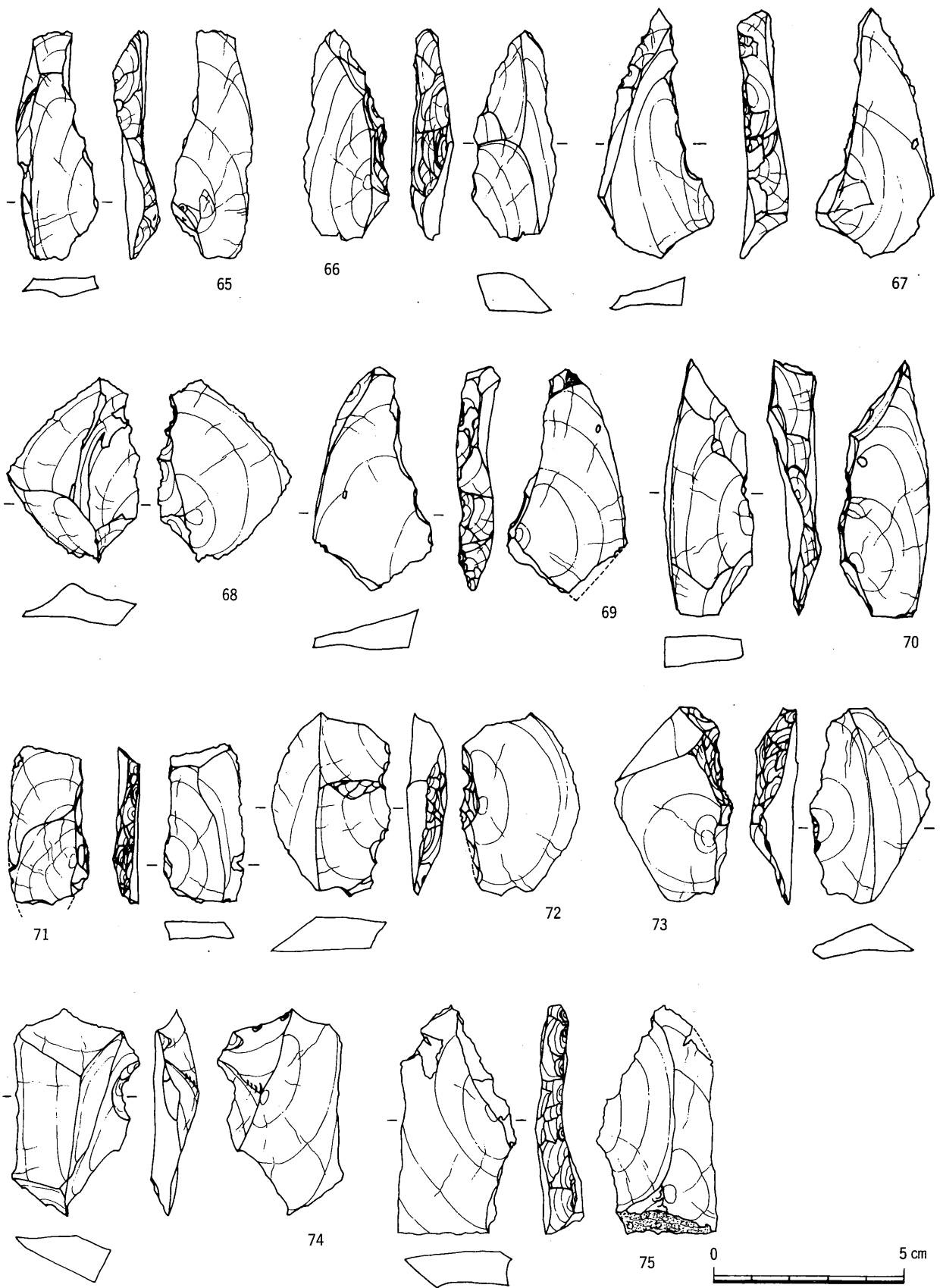
第 215 图 翼状剥片实测图 (3)



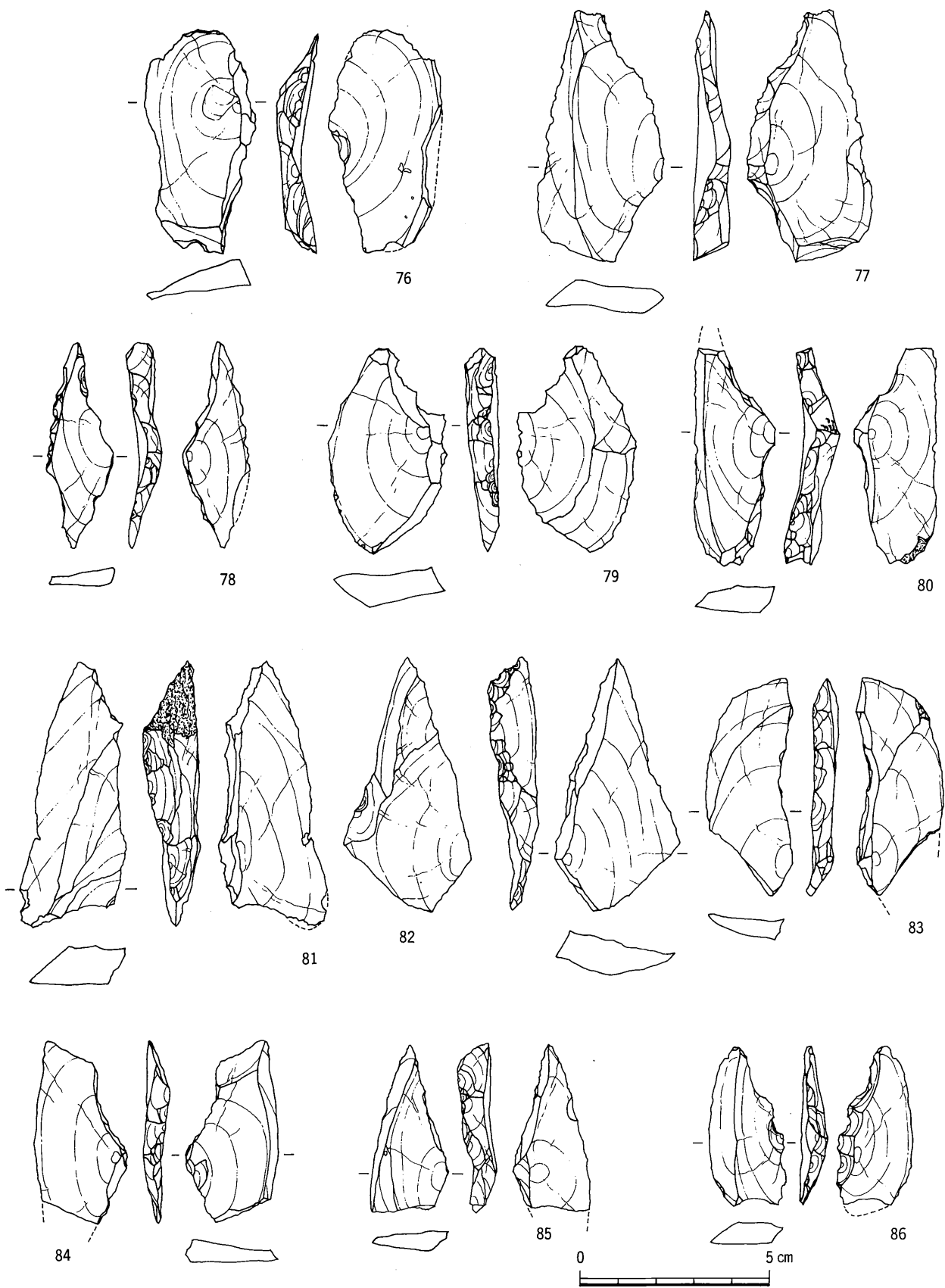
第 216 图 翼状刮片实测图 (4)



第 217 图 翼状剥片实测图 (5)



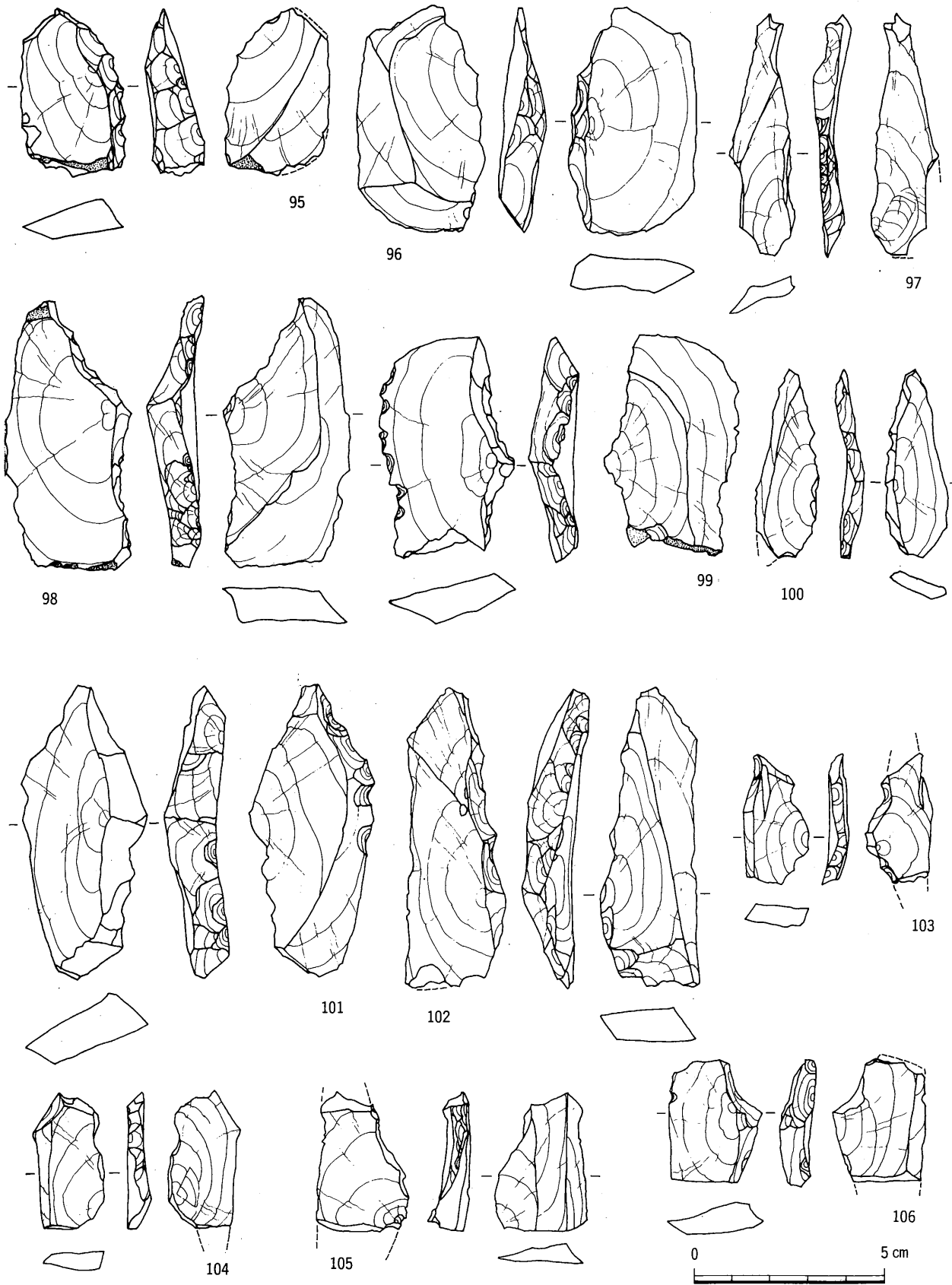
第 218 图 翼状剥片实测图 (6)



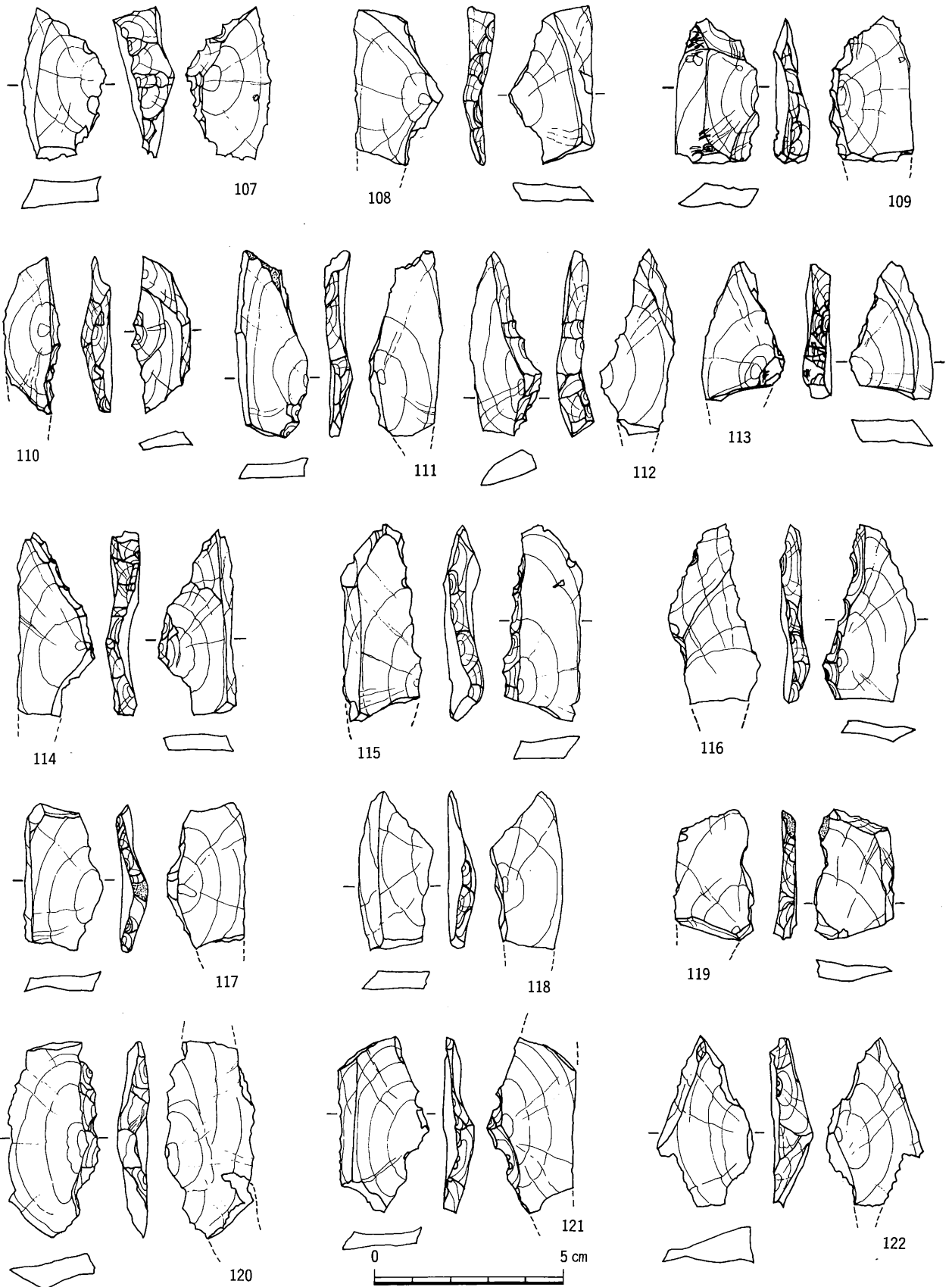
第 219 图 翼状剥片实测图 (7)



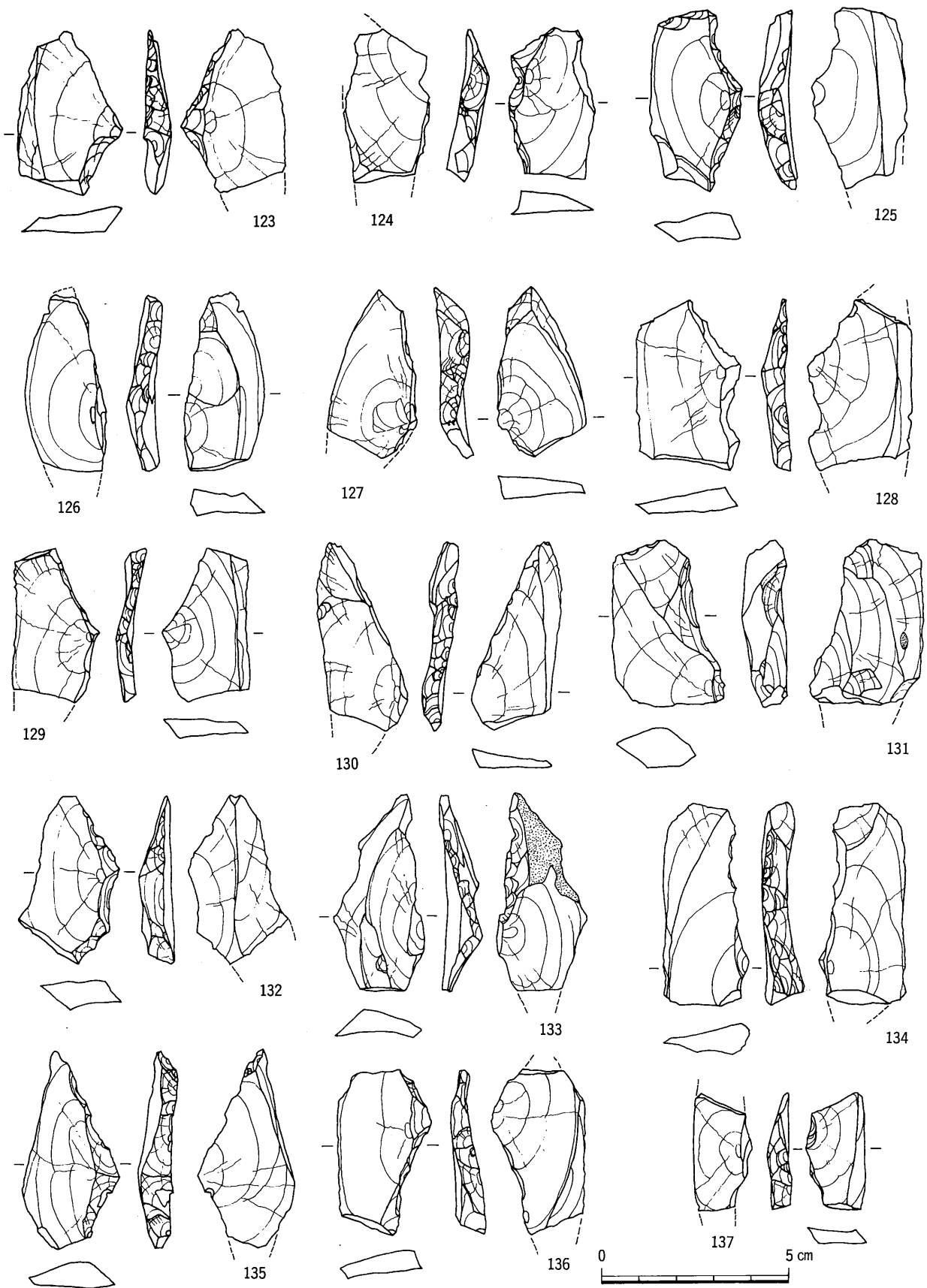
第 220 图 翼状剥片实测图 (8)



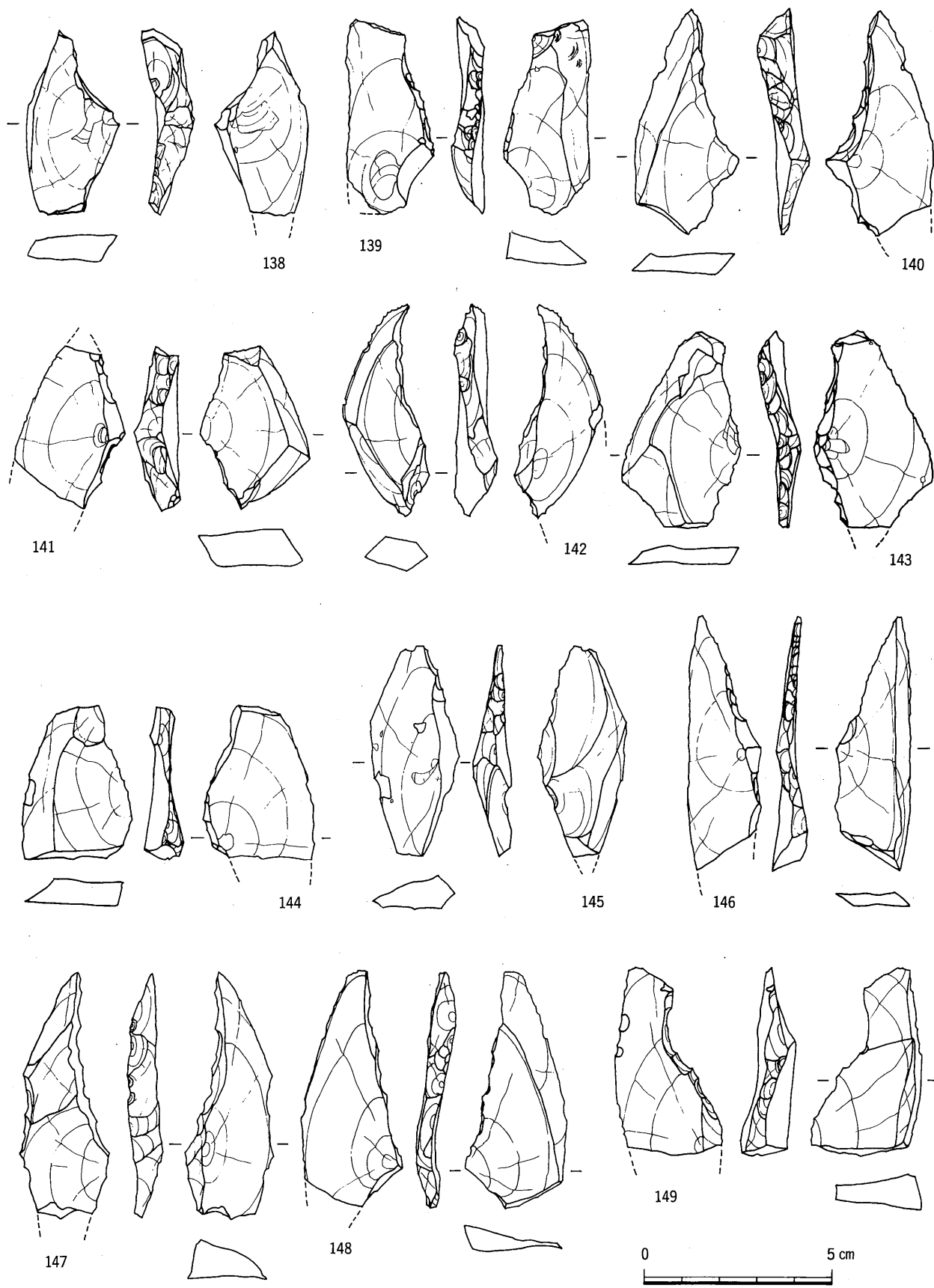
第 221 图 翼状剥片实测图 (9)



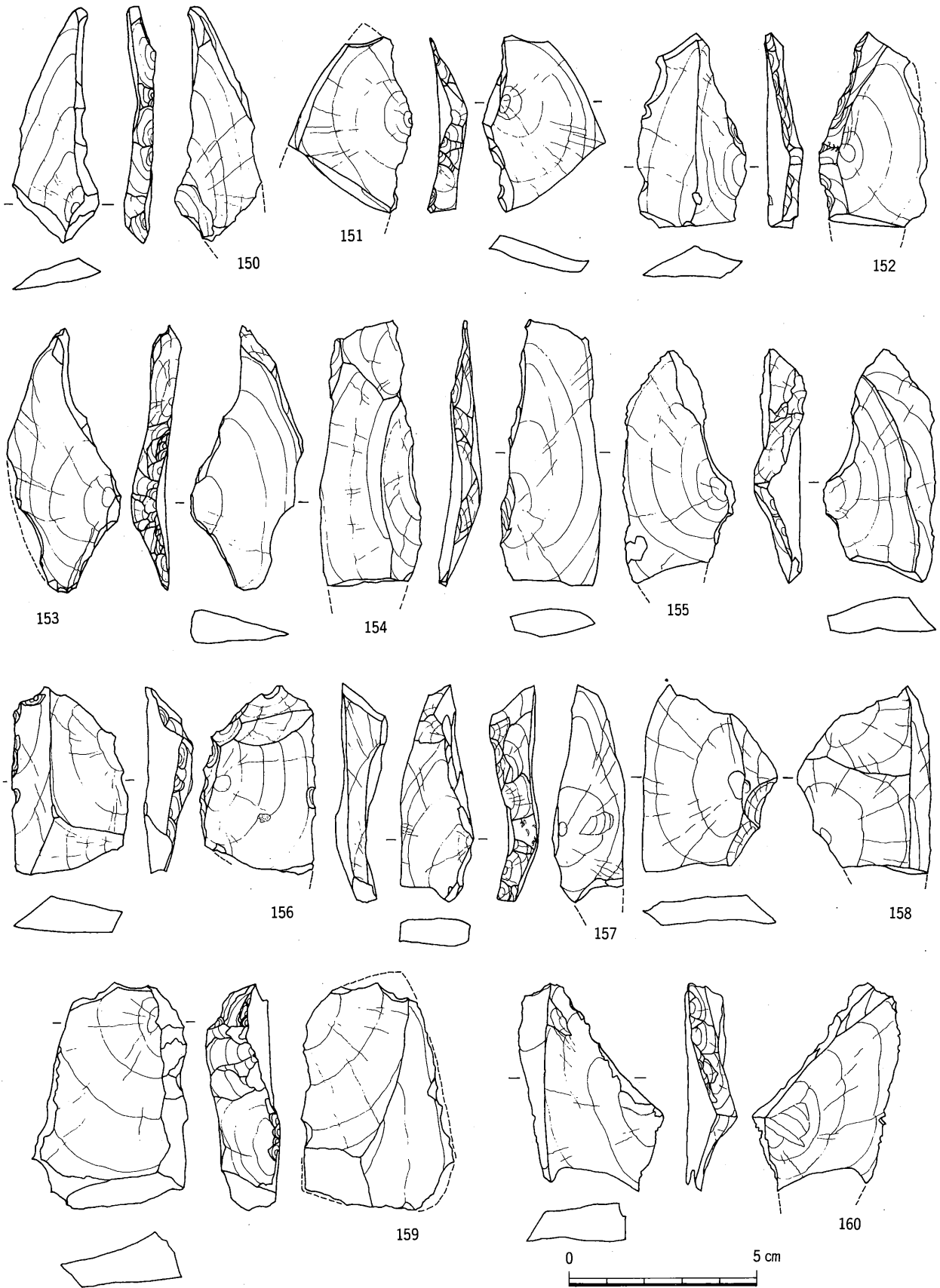
第 222 图 翼状剥片实测图 (10)



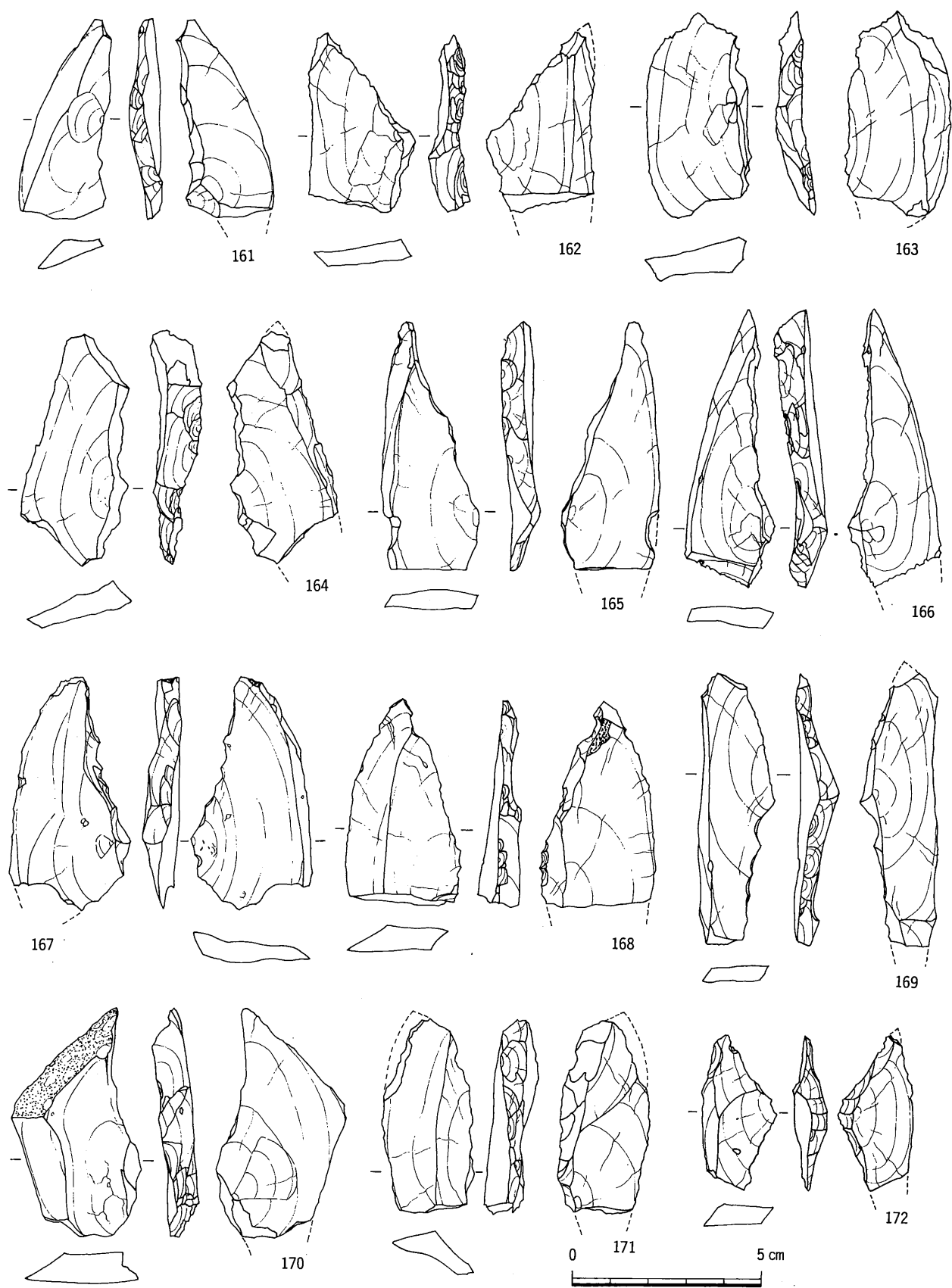
第 223 图 翼状剥片实测图 (11)



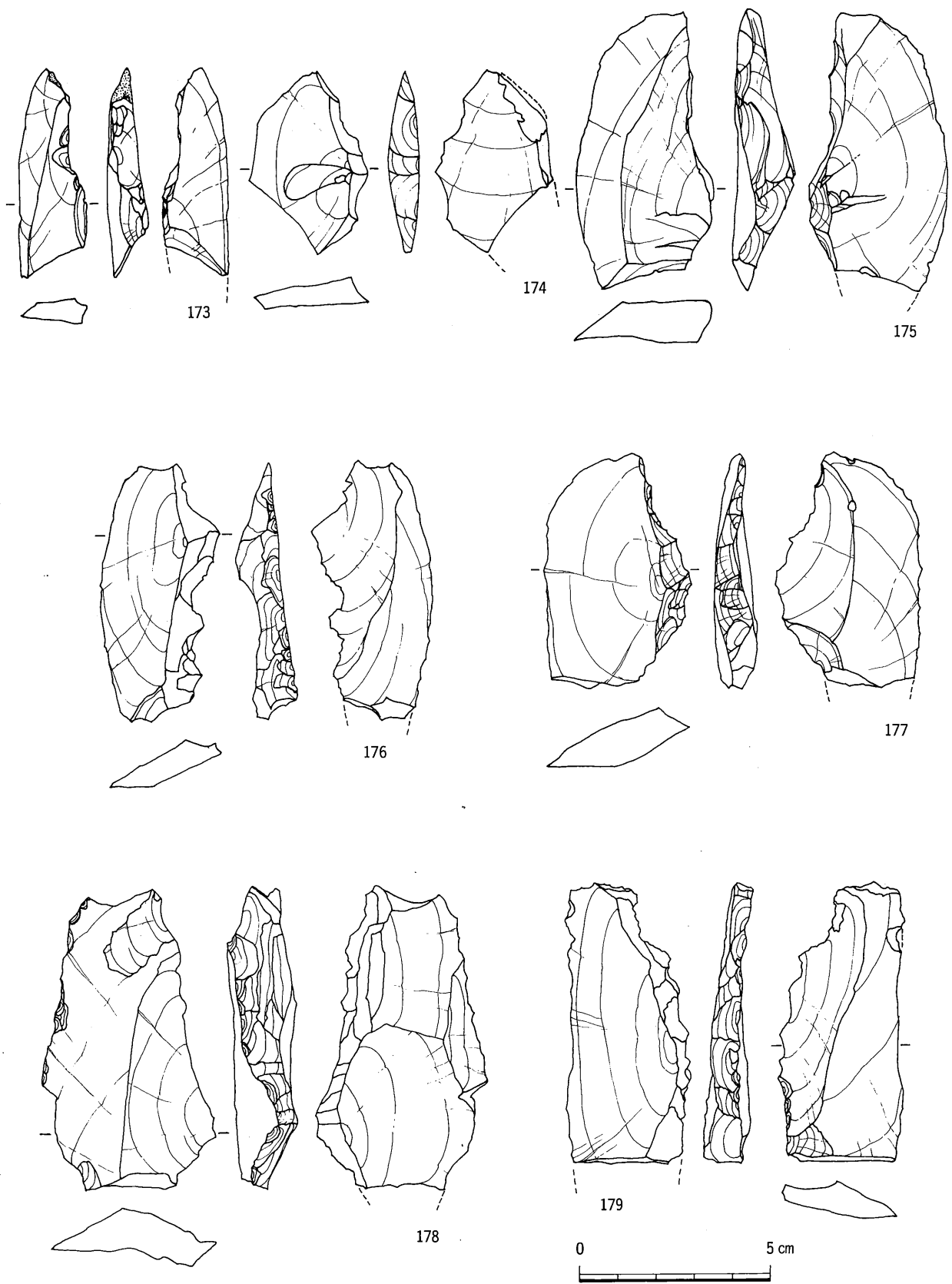
第 224 图 翼状剥片实测图 (12)



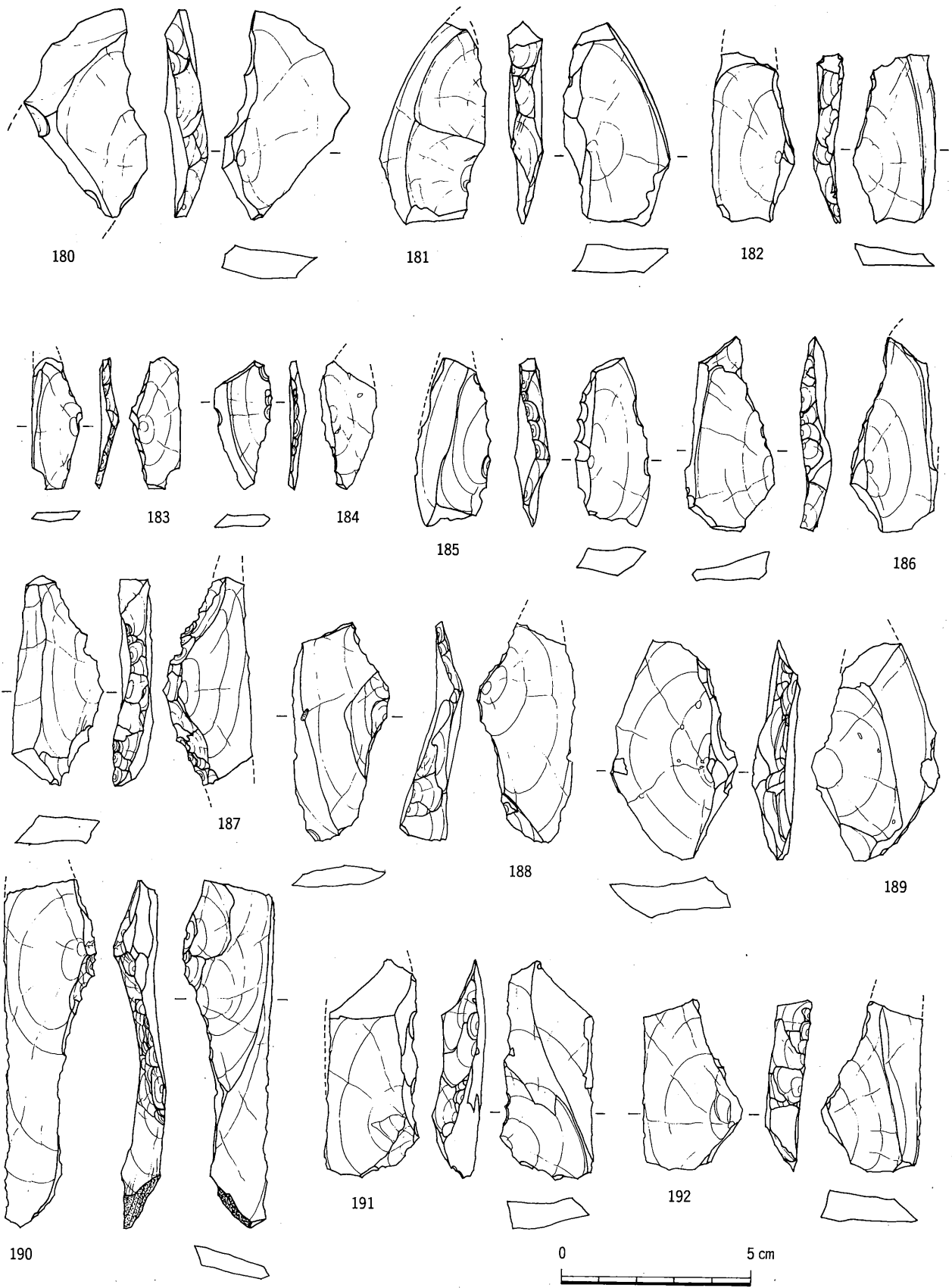
第 225 图 翼状剥片实测图 (13)



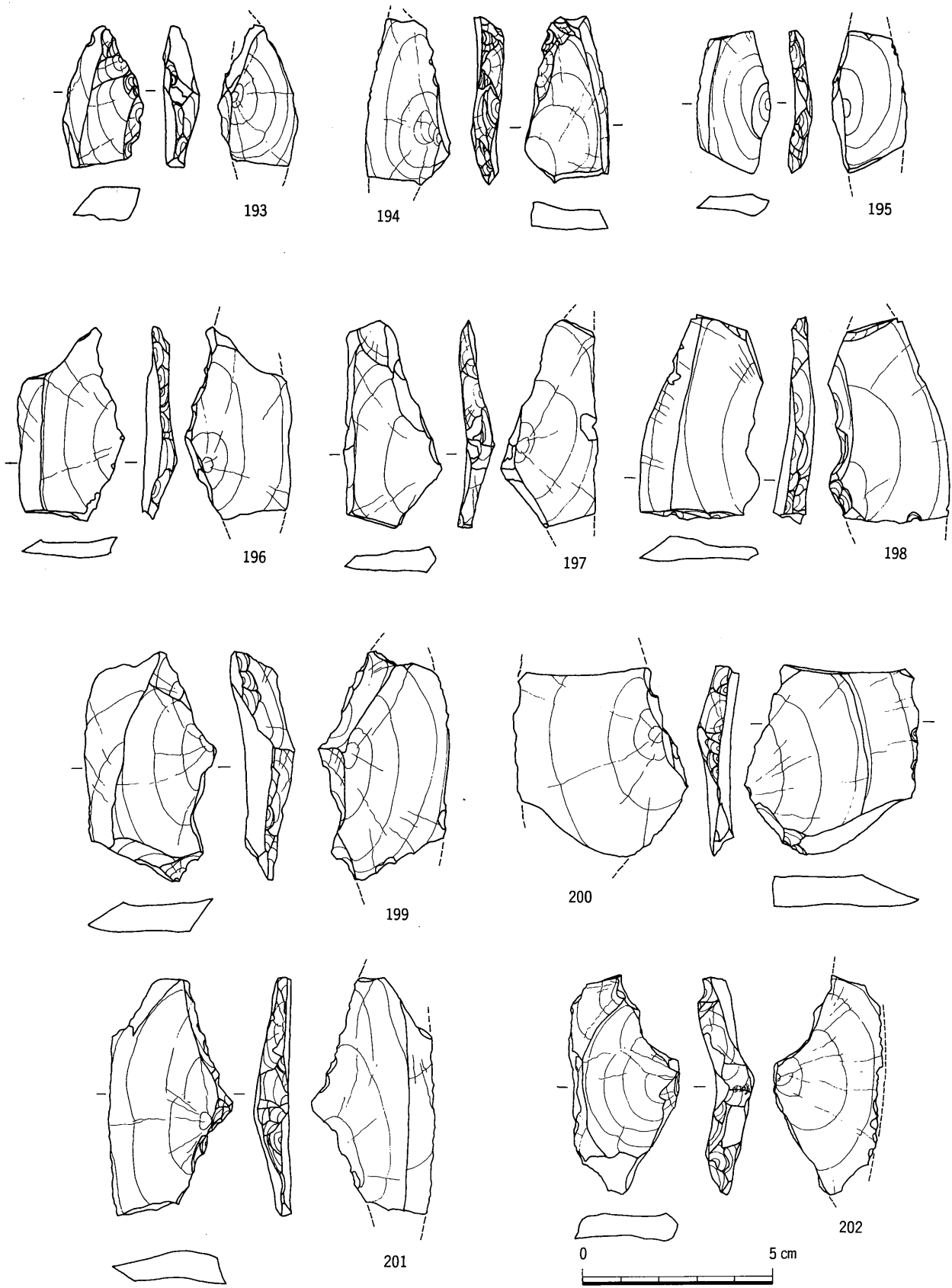
第 226 图 翼状剥片实测图 (14)



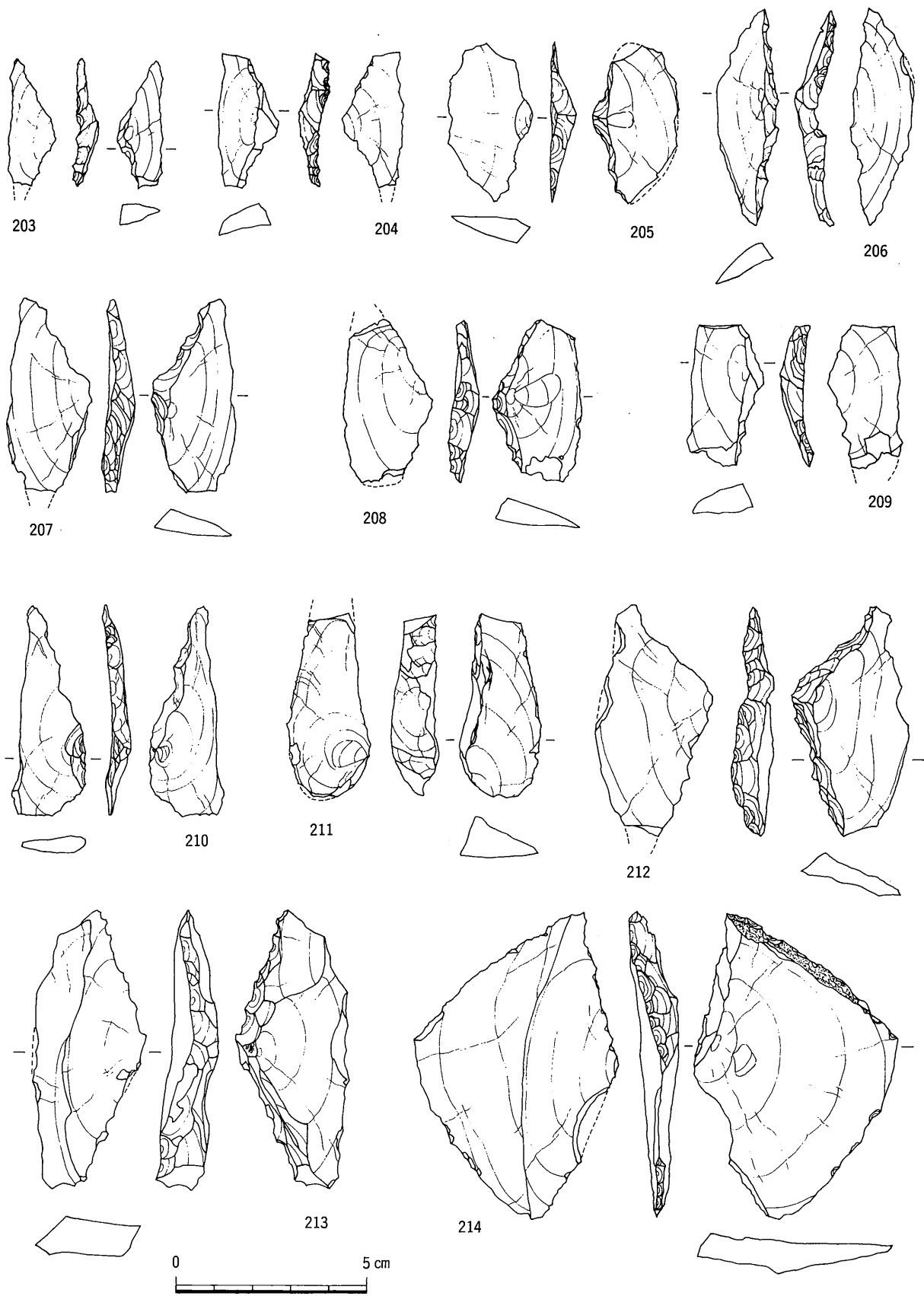
第 227 图 翼状剥片实测图 (15)



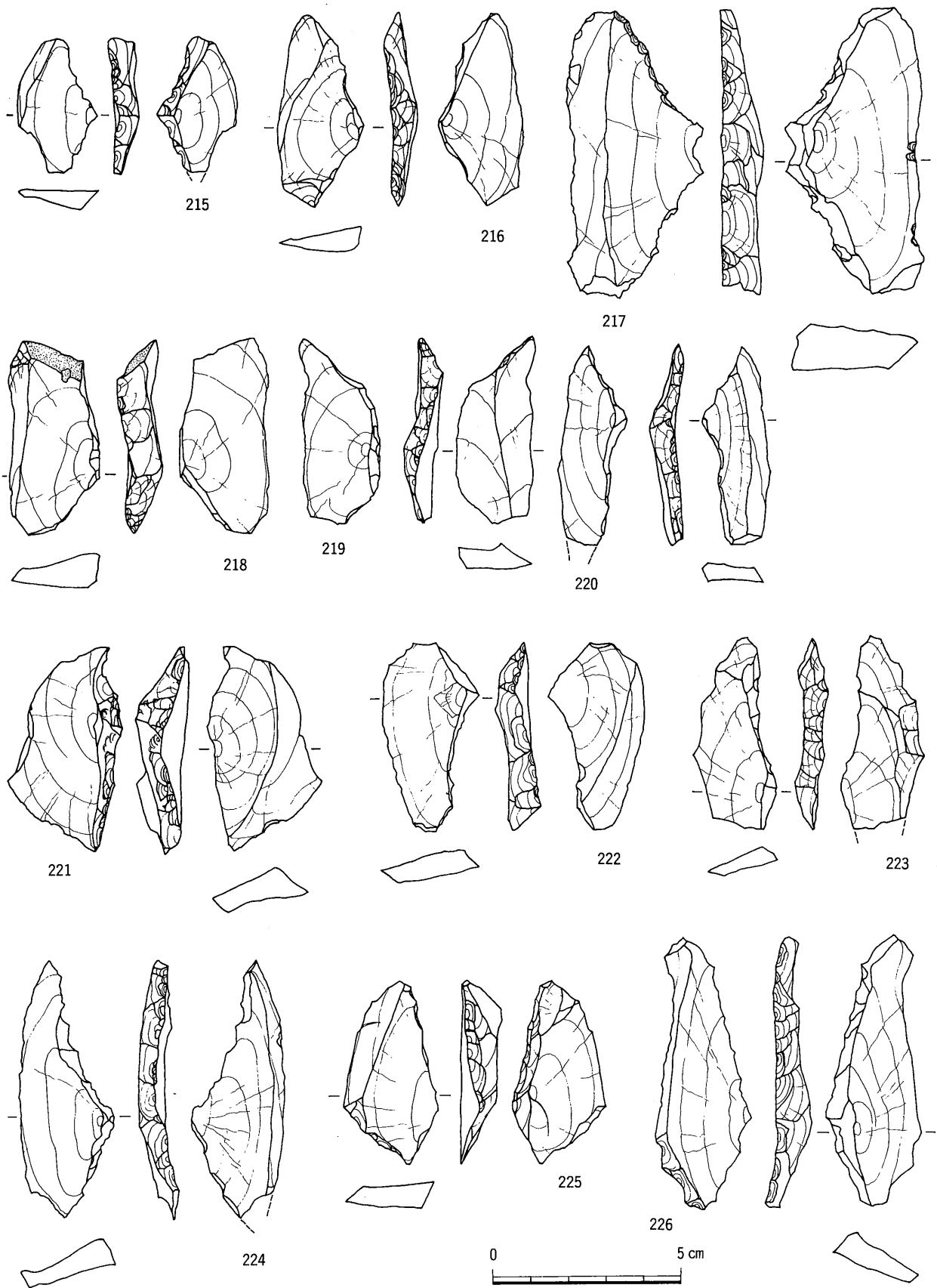
第 228 图 翼状剥片实测图 (16)



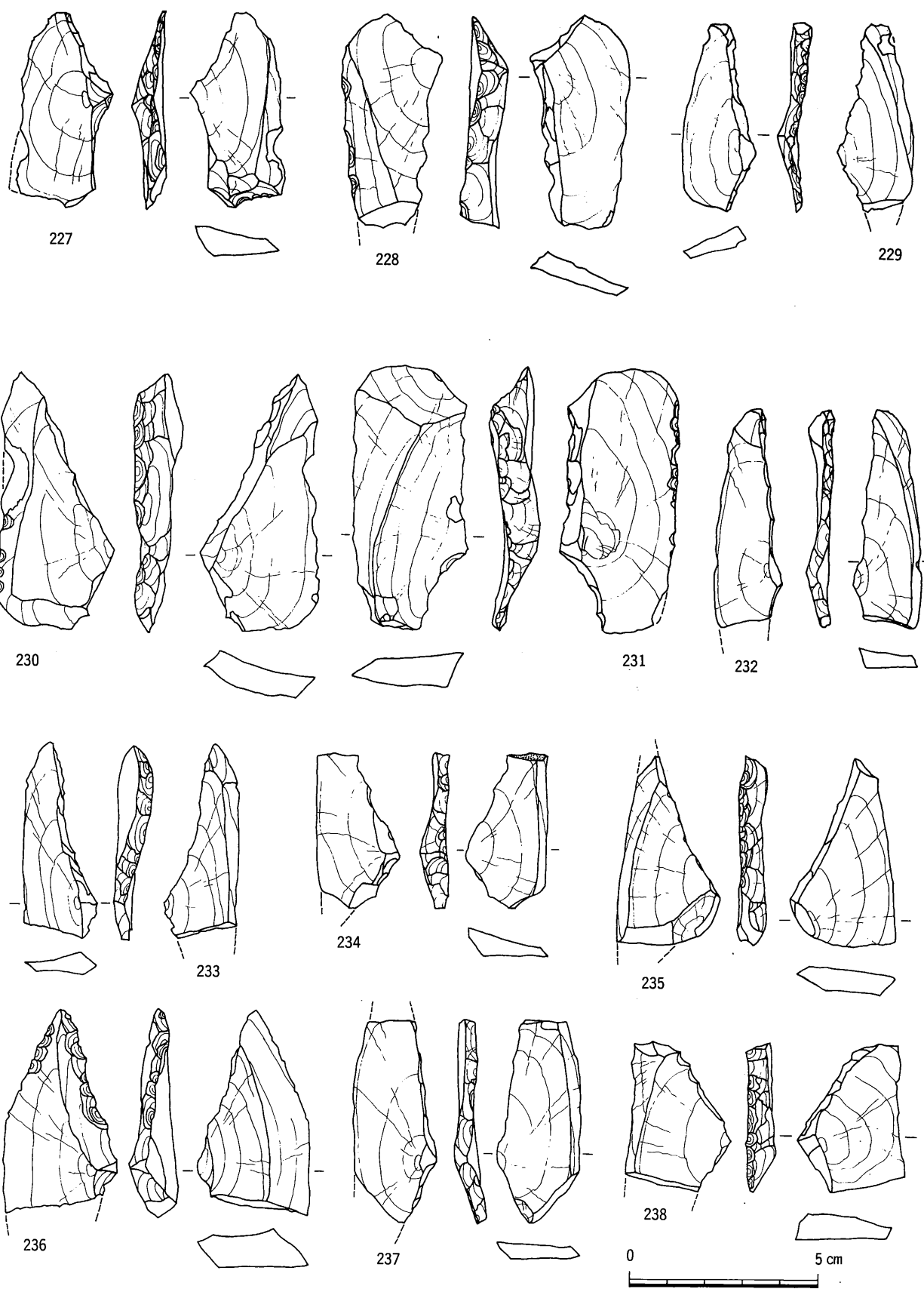
第 229 图 翼状剥片实测图 (17)



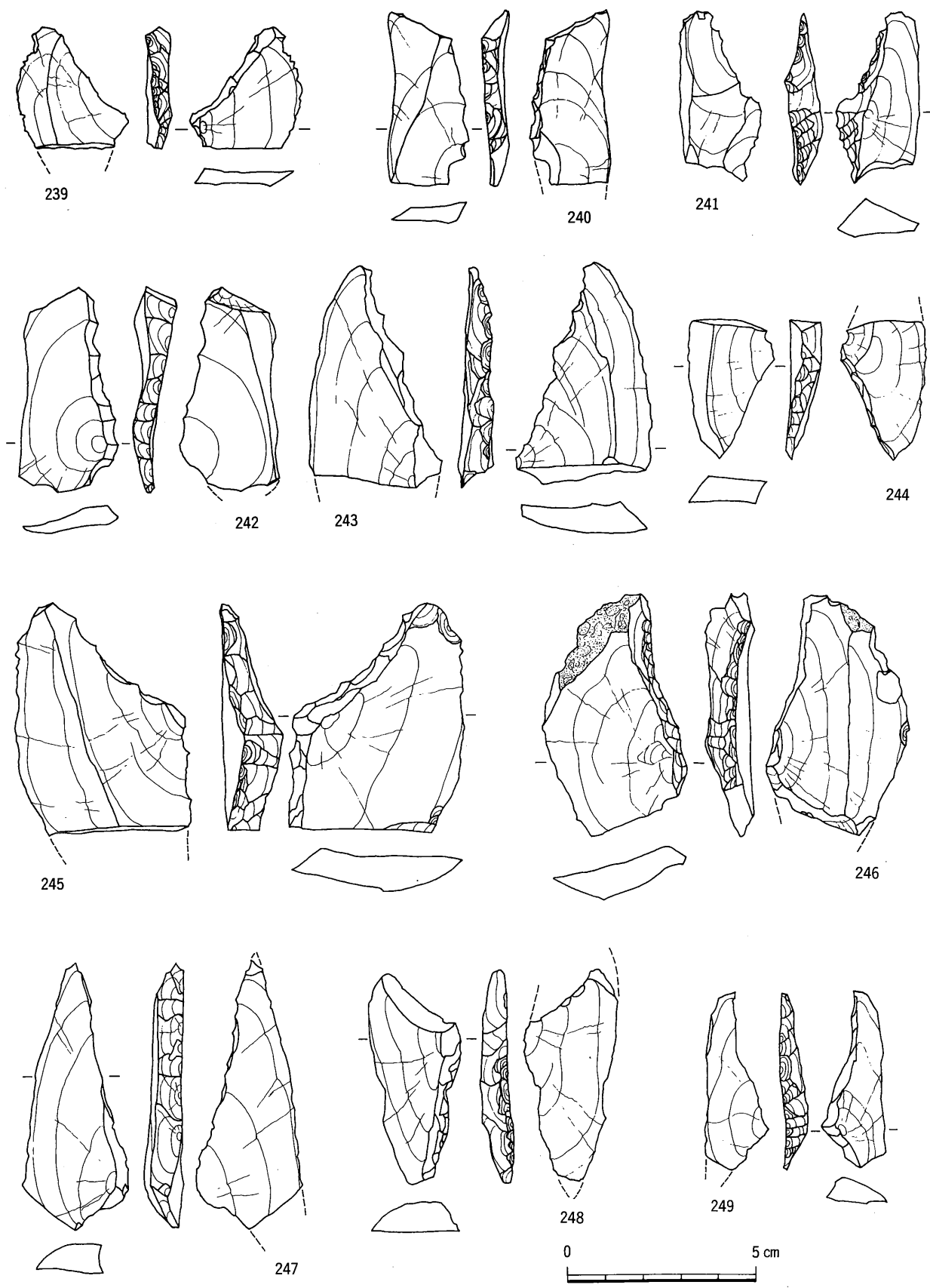
第 230 图 翼状剥片实测图 (18)



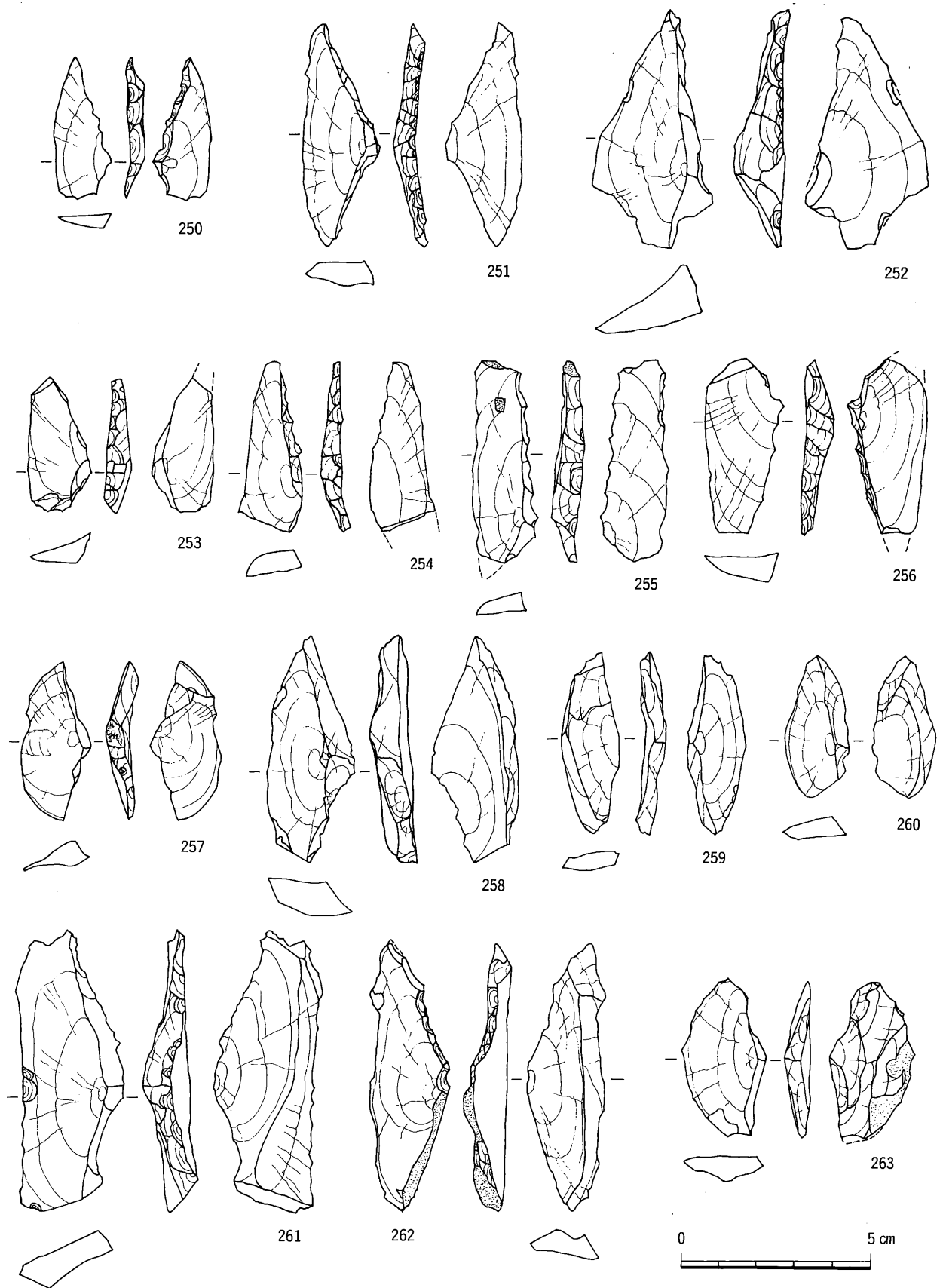
第 231 图 翼状剥片实测图 (19)



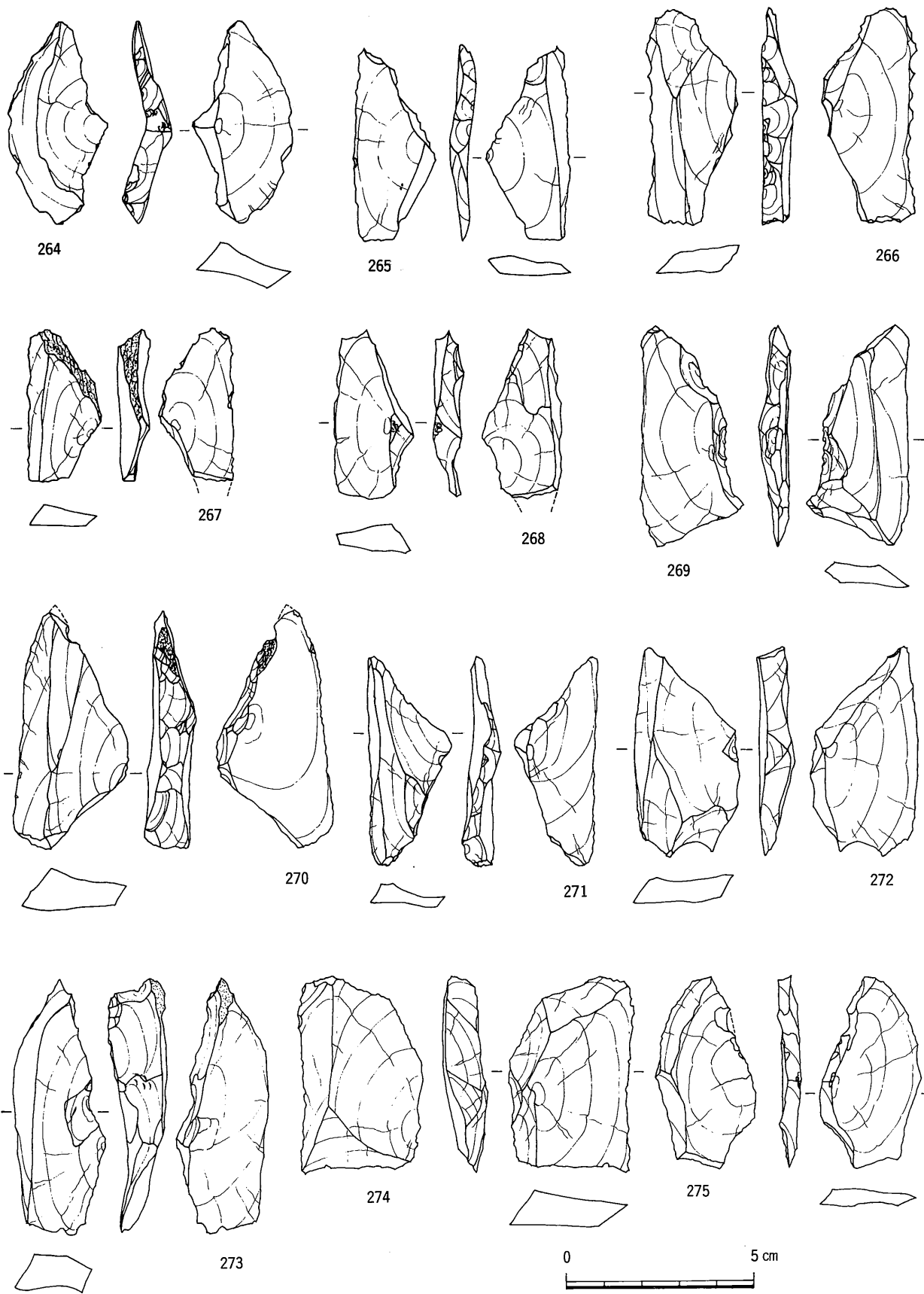
第 232 图 翼状剥片实测图 (20)



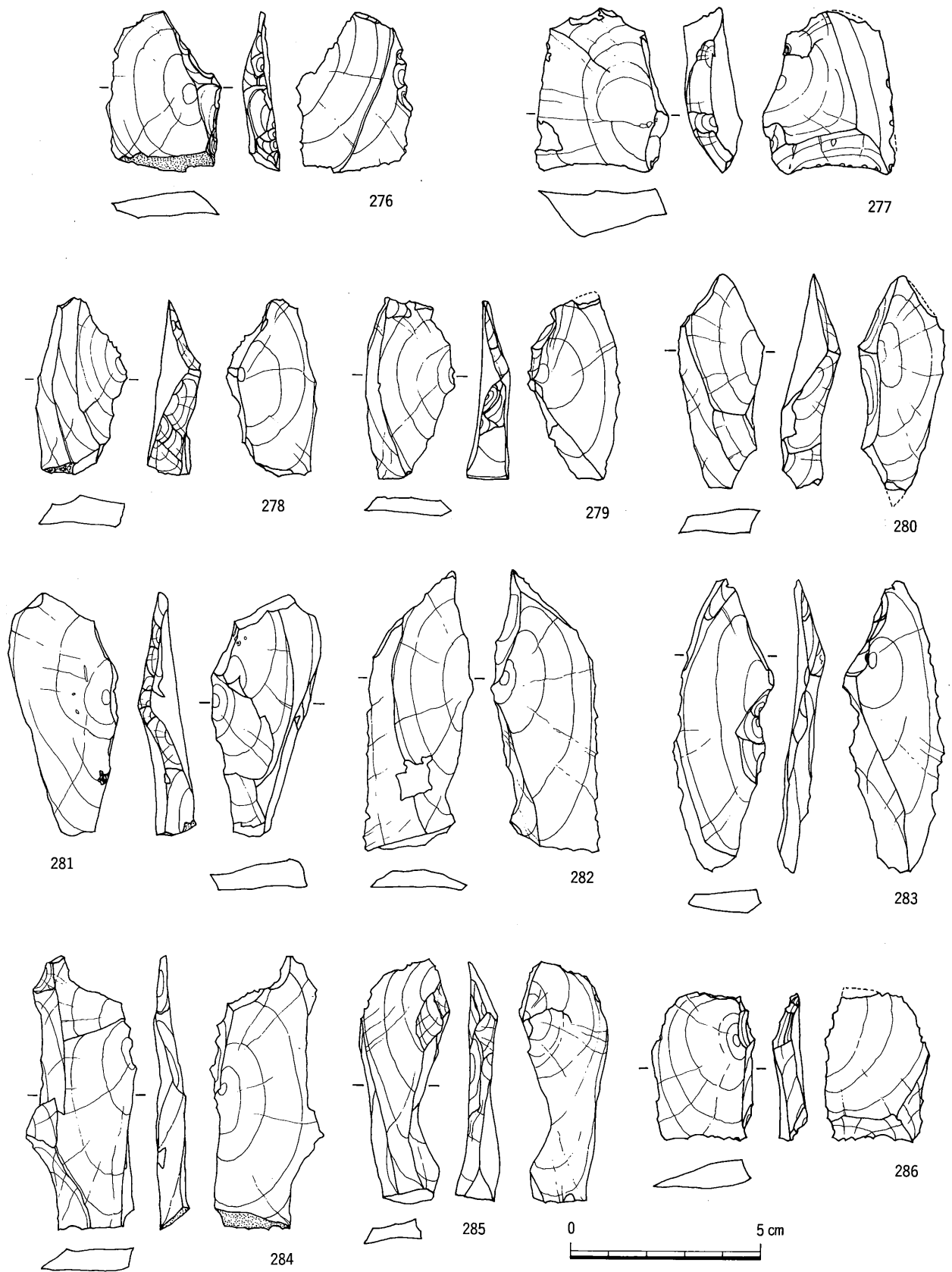
第 233 图 翼状剥片实测图 (21)



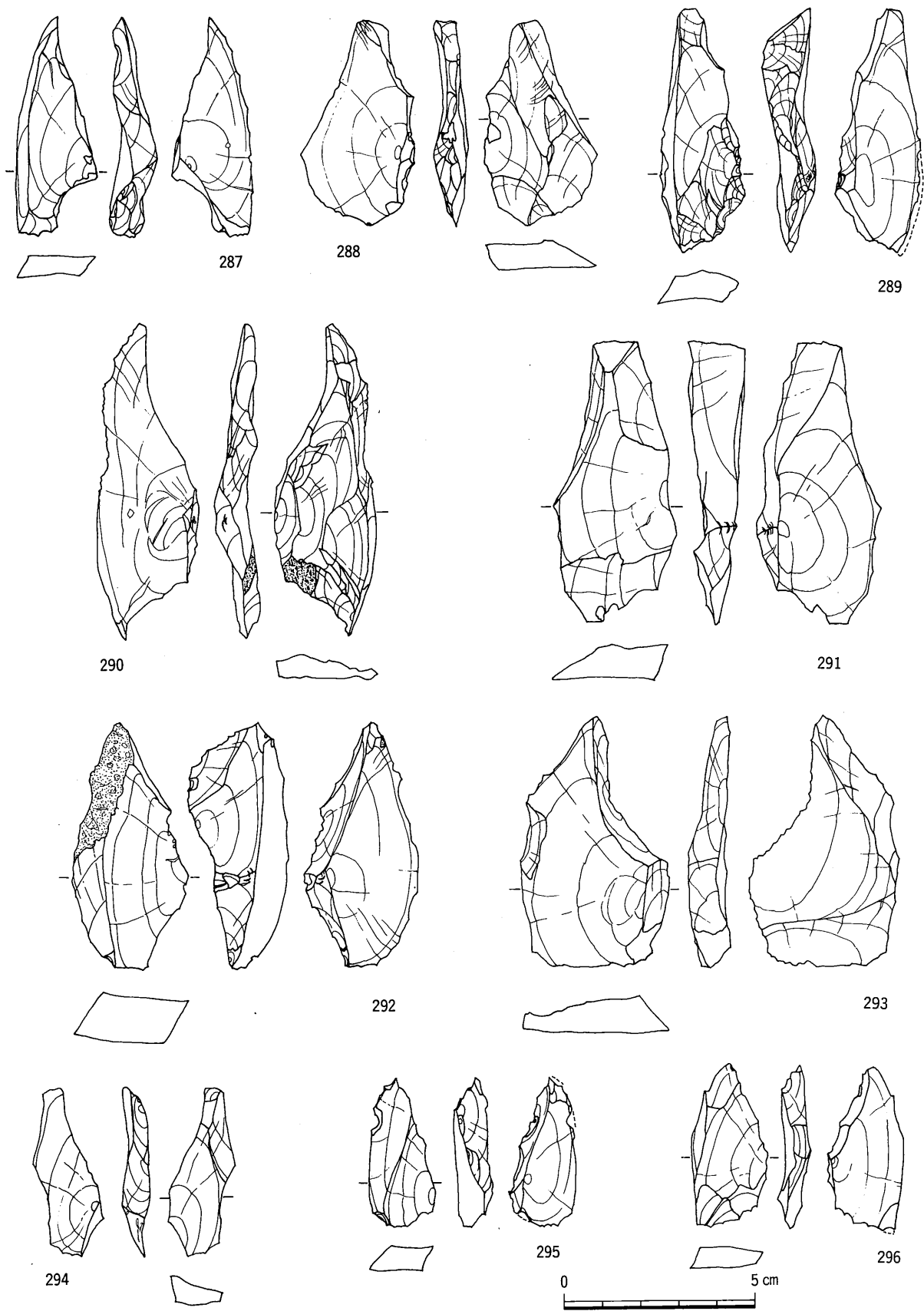
第 234 图 翼状剥片实测图 (22)



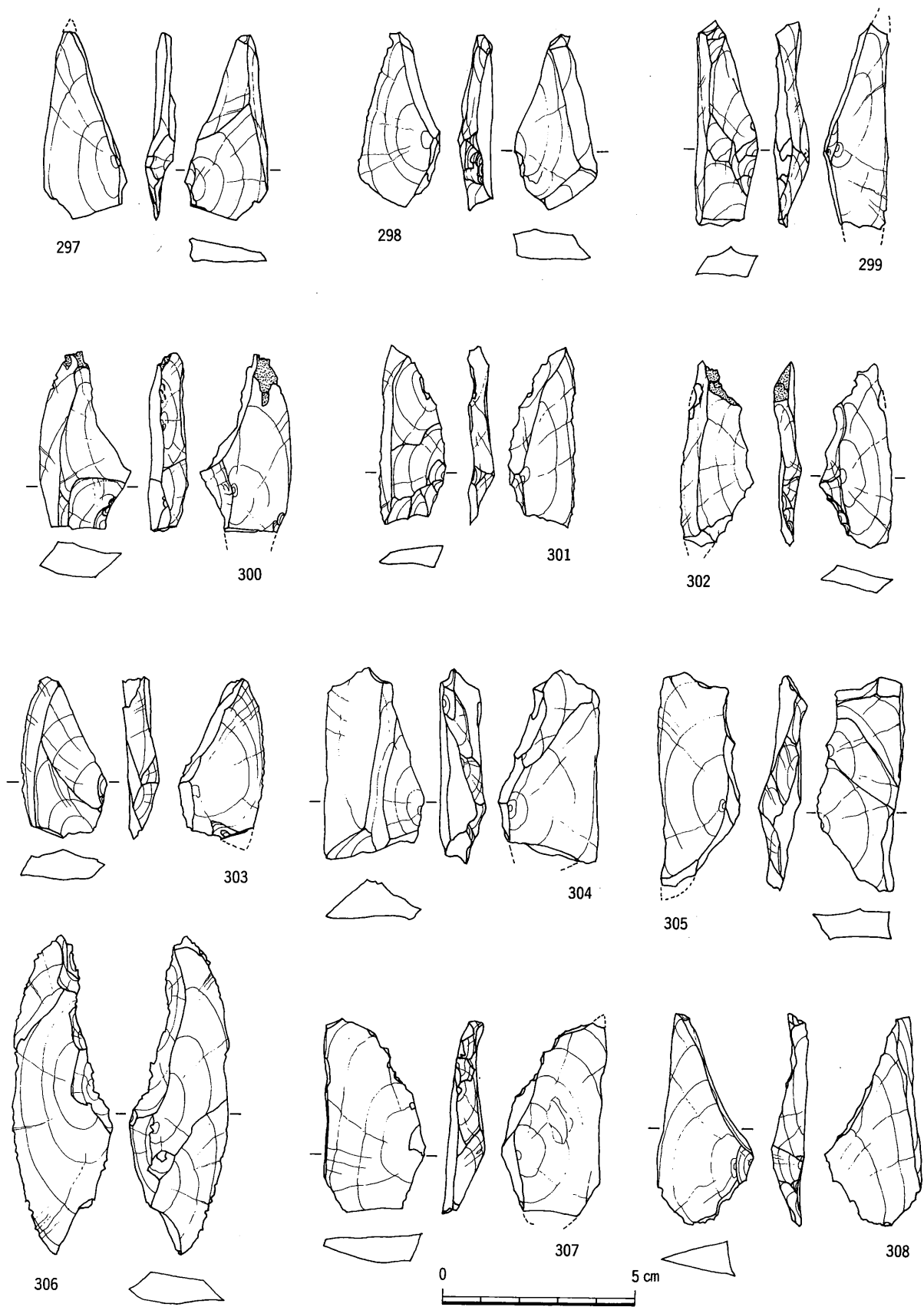
第 235 图 翼状剥片实测图 (23)



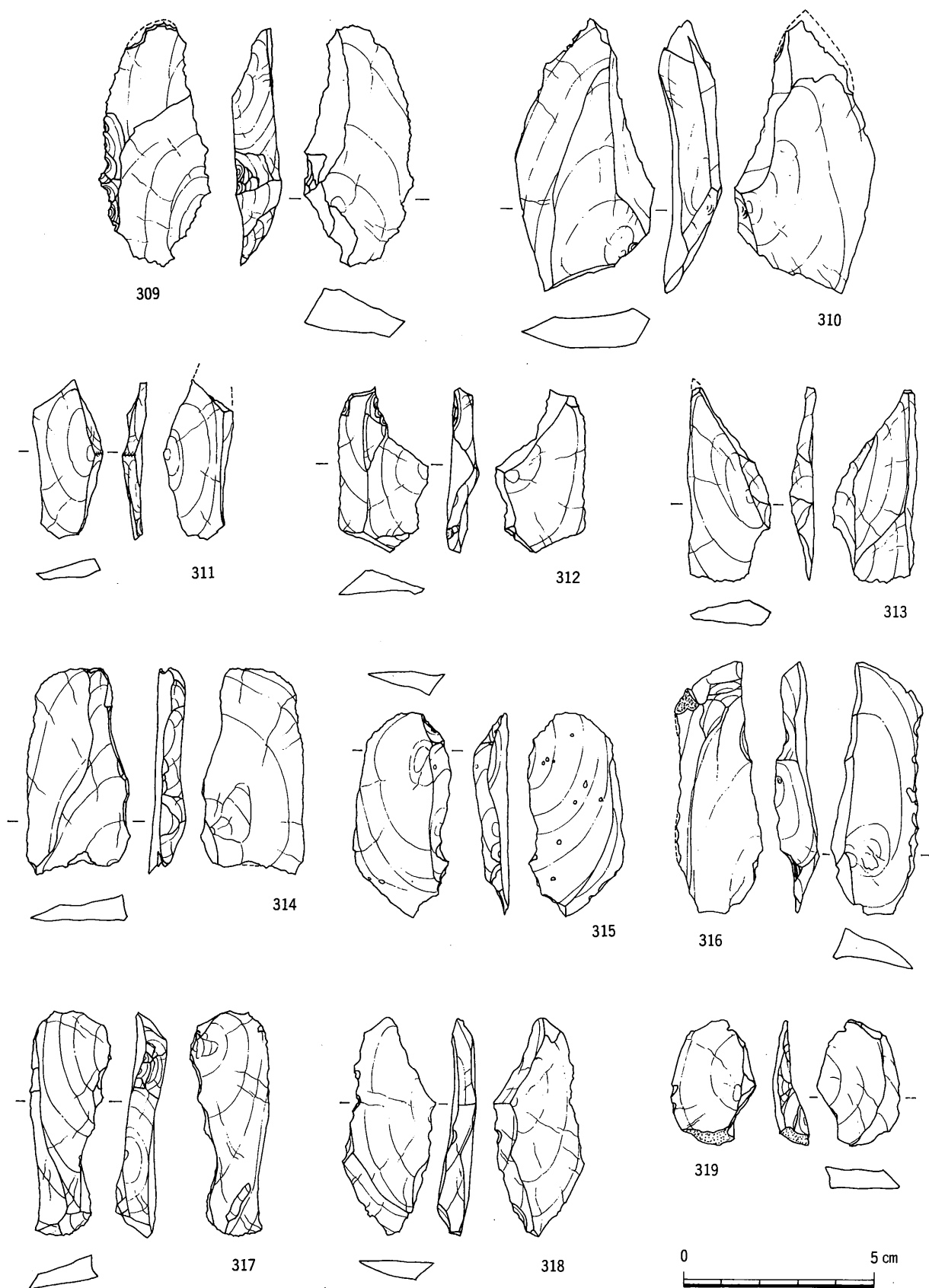
第 236 图 翼状剥片实测图 (24)



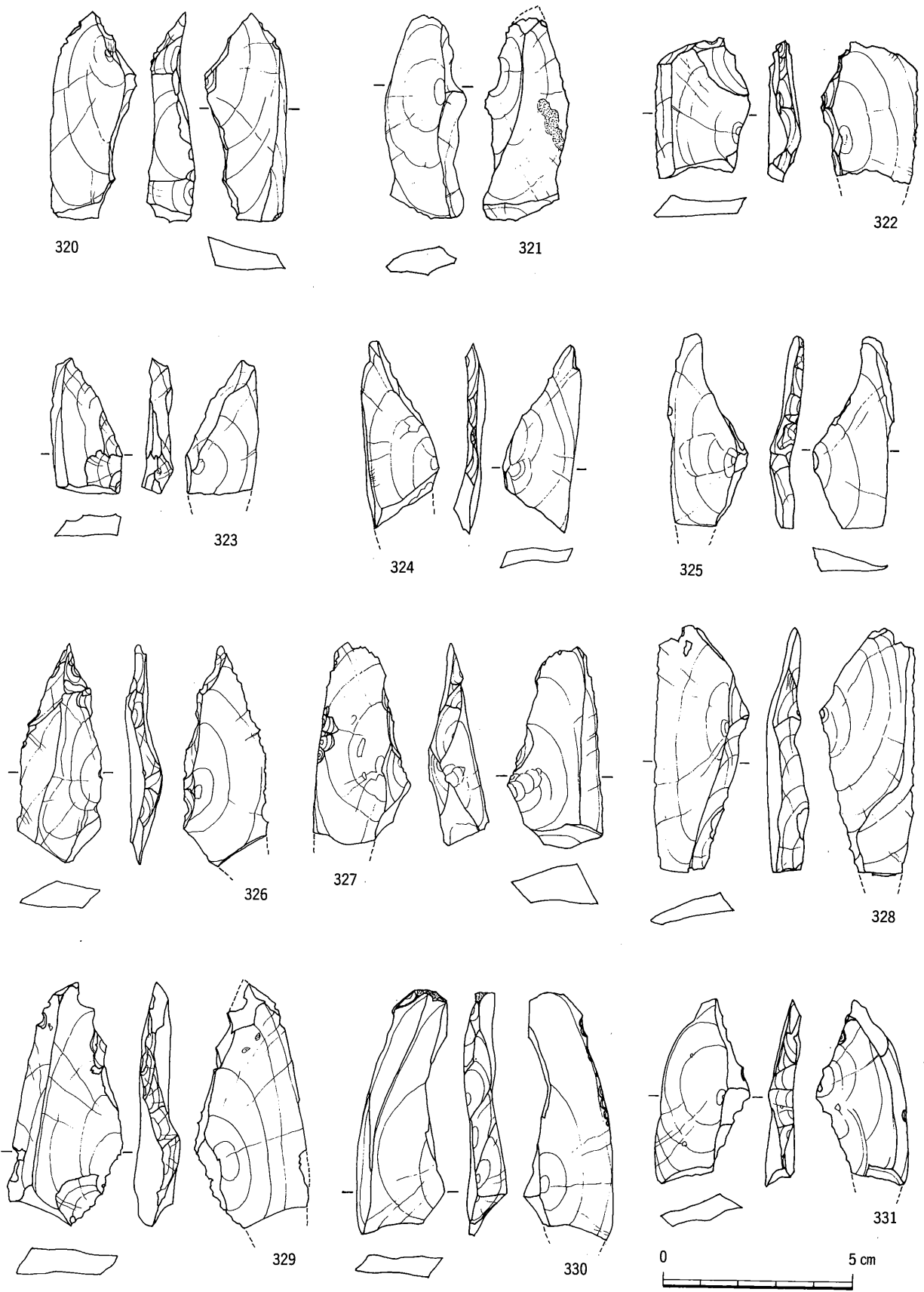
第 237 图 翼状剥片实测图 (25)



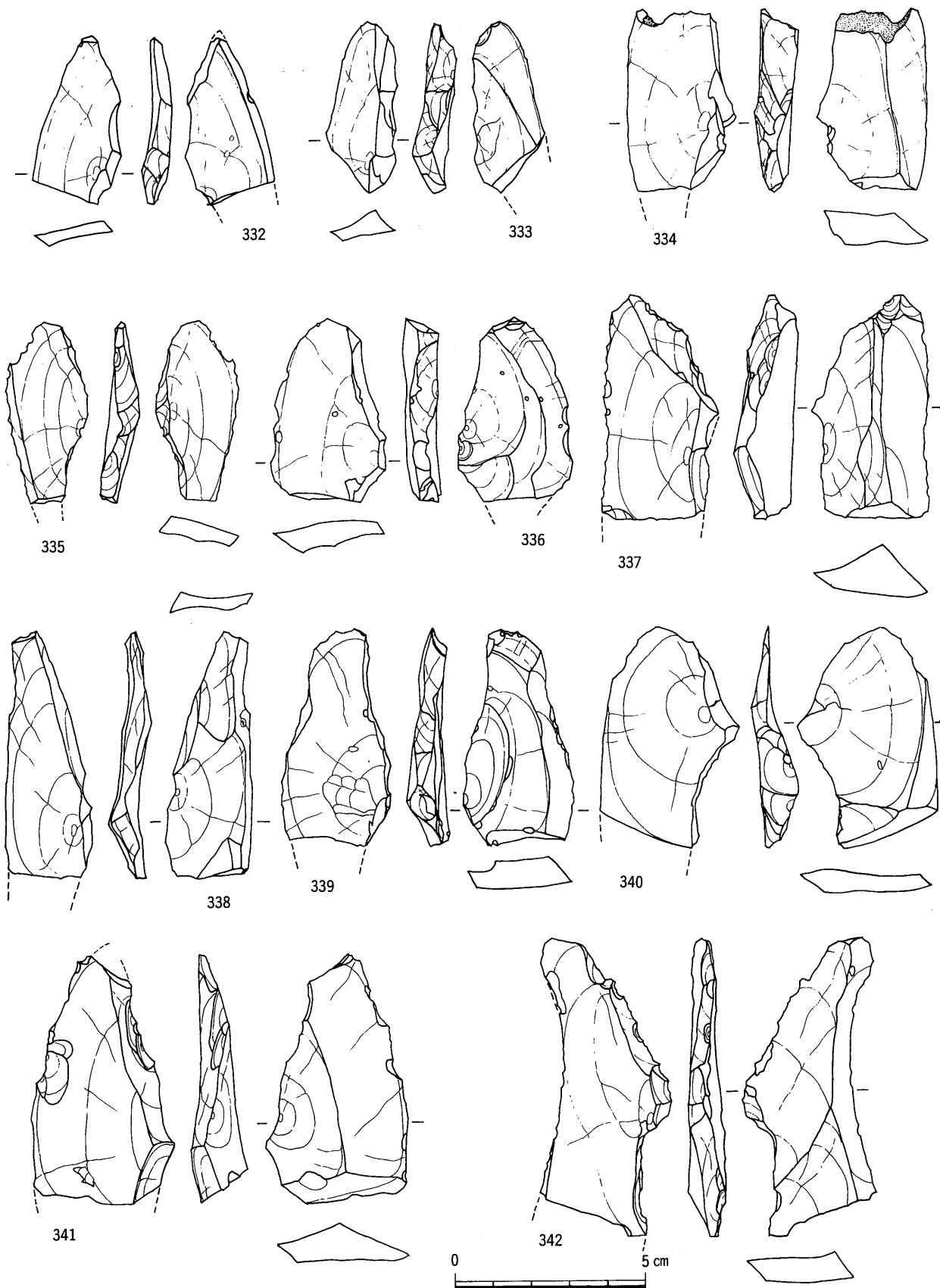
第 238 图 翼状剥片实测图 (26)



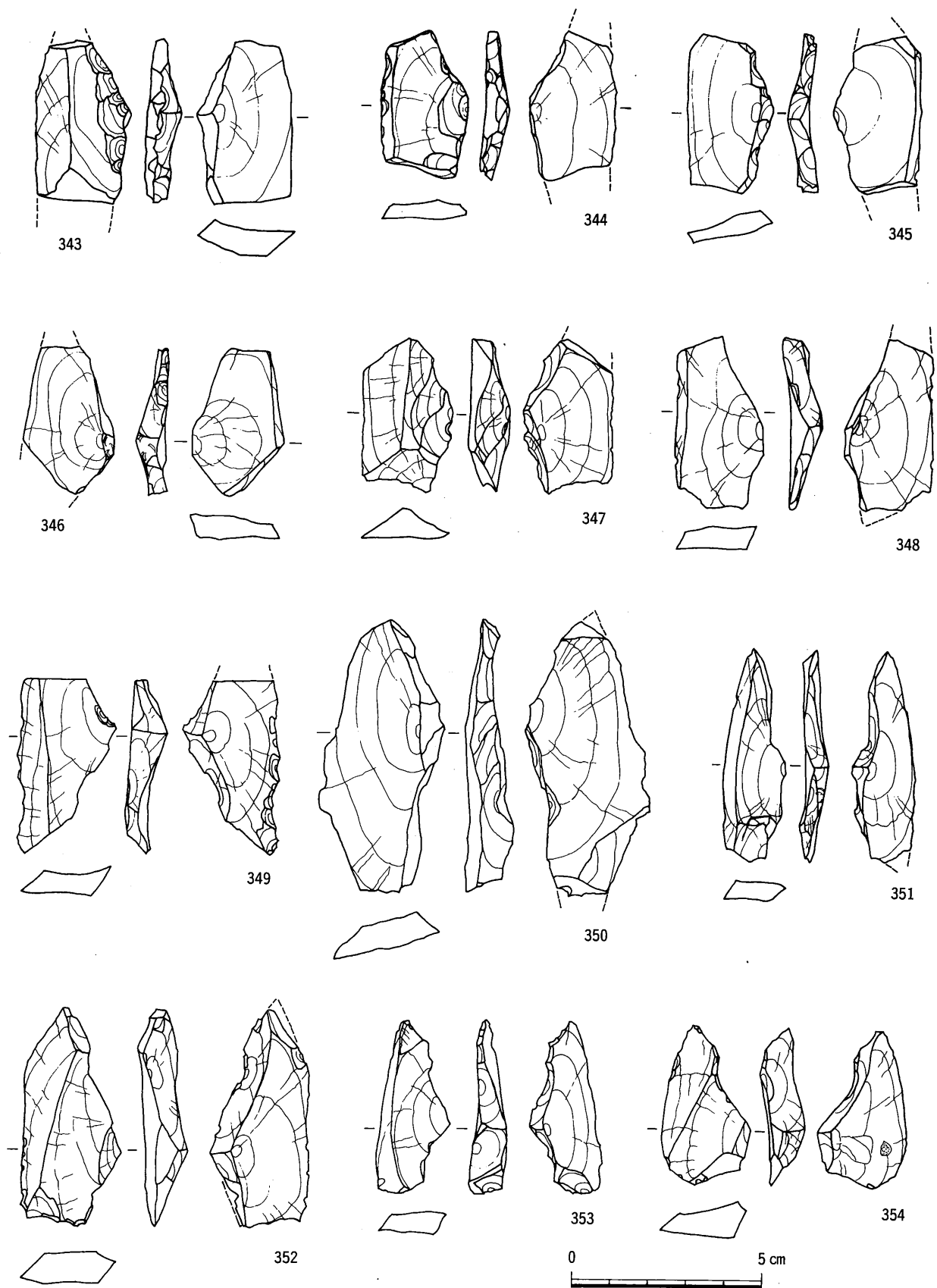
第 239 图 翼状剥片实测图 (27)



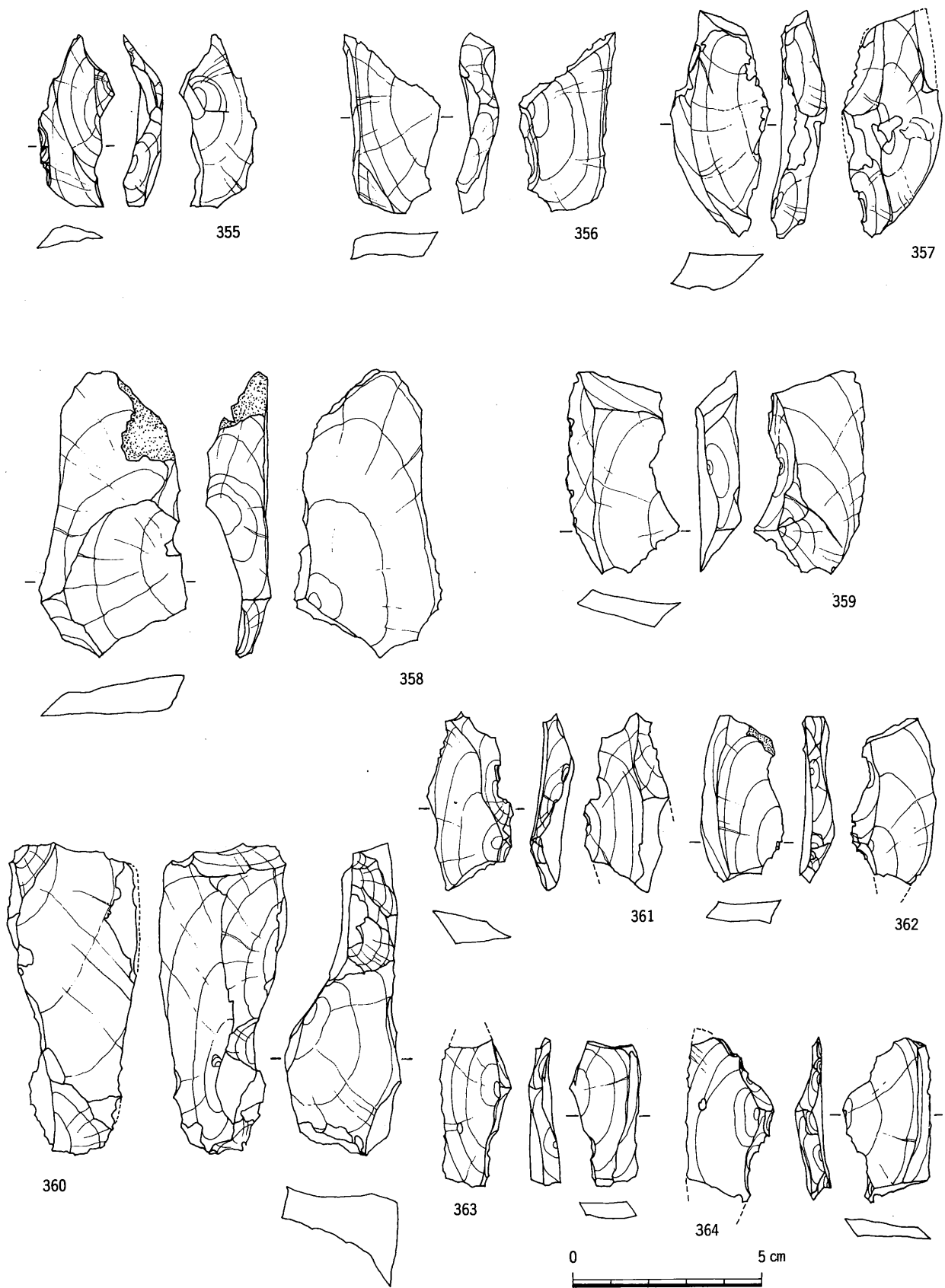
第 240 图 翼状剥片实测图 (28)



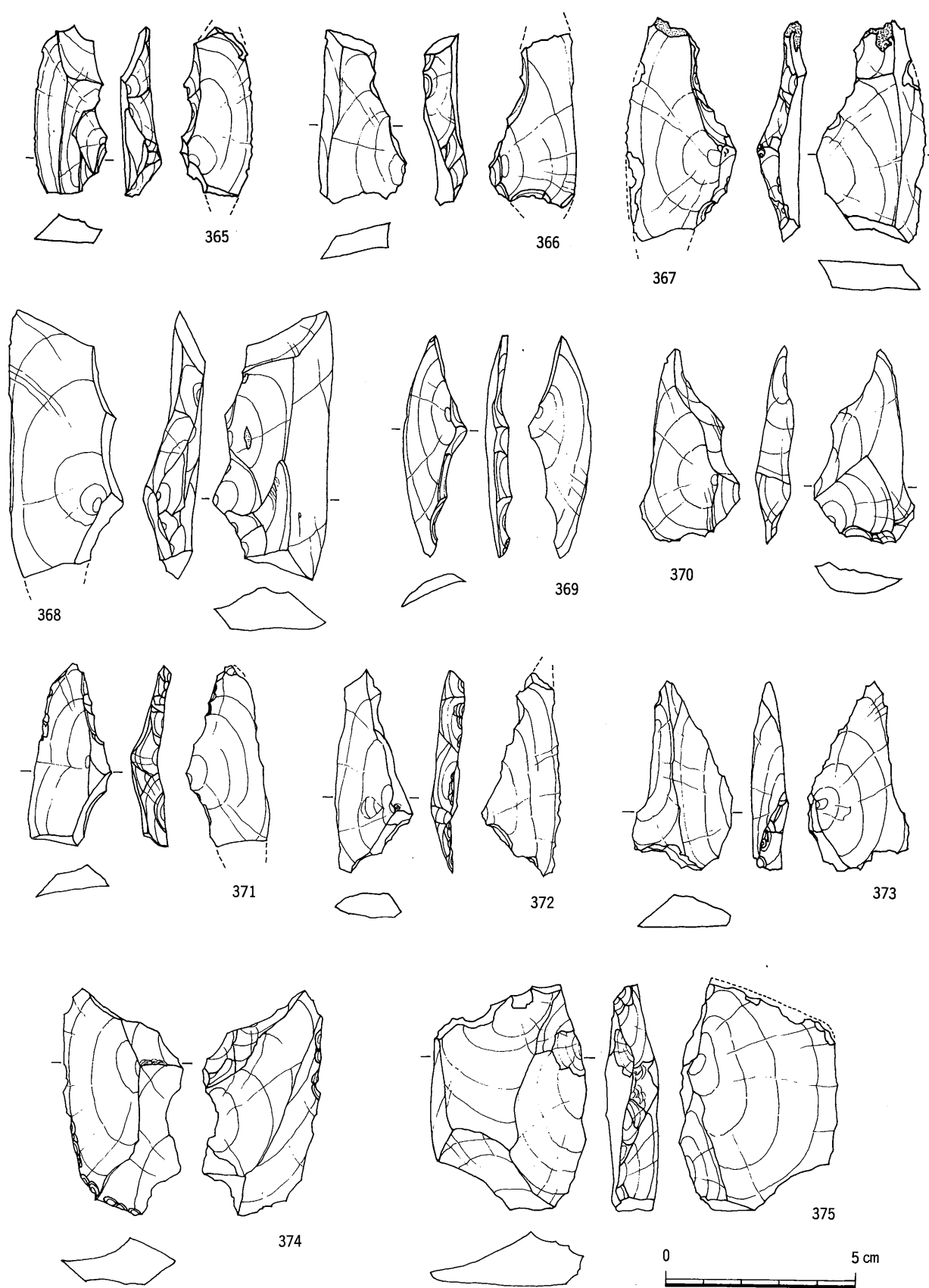
第 241 图 翼状剥片实测图 (29)



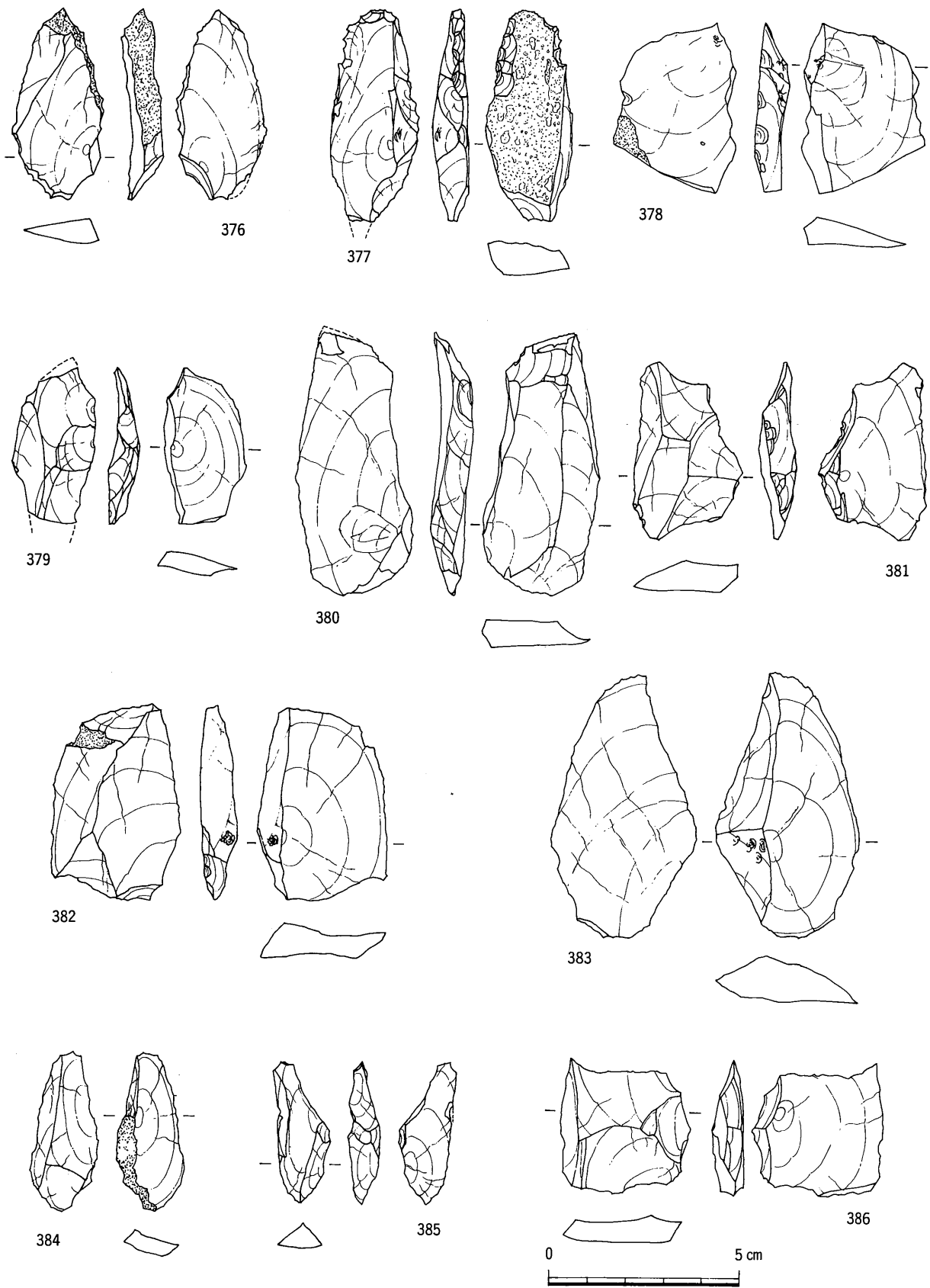
第 242 图 翼状剥片实测图 (30)



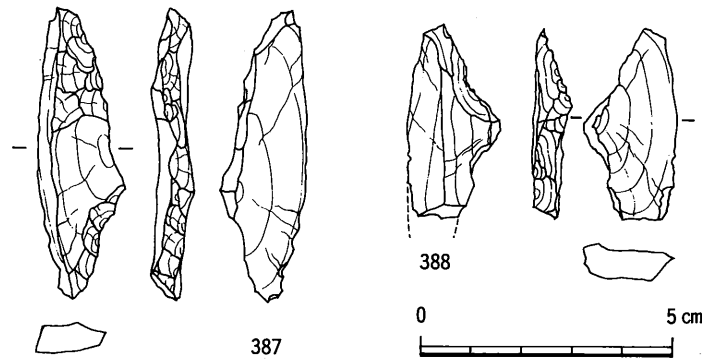
第 243 图 翼状剥片实测图 (31)



第 244 图 翼状剥片实测图 (32)



第 245 图 翼状剥片实测图 (33)



第 246 図 翼状剥片実測図 (34)

12. 横長剥片 (第248図～第278図)

羽佐島遺跡から出土した旧石器時代の遺物のうち、最も多いのは大小さまざまな剥片類であるが、その多くは横長剥片であった。ここでいう横長剥片とは、主要剥離面において最大幅(加撃方向と直角の長さ)が最大長(加撃方向と平行の長さ)を越える剥片のうち、打面を山形に成形する調整が認められないものである。ただし、玻璃質安山岩と、流紋岩と思われる石材を用いた横長剥片には打面調整を持つものもある。一方、横長剥片石核と翼状剥片において述べたように、交互剥離石核から剥離された横長剥片には、打面調整が細かく丁寧に施されていない翼状剥片と区別できないものがあるが、これは翼状剥片に含めて紹介した。

出土した横長剥片のうち最も多いのは、サヌカイト(1・277・321~358・362~394)であり、図示したのはその一部分であるが、ほかに玻璃質安山岩(278~302・359~361)、黒曜石(303~309)、流紋岩と思われる石材(310~320)などがある。

サヌカイト製の横長剥片からみると、第248図1・3・4・6・9~11は背面にもポジティブな剥離面とそれに伴う打点部を持つ剥片である。背面のポジティブな剥離面は、平坦な剥離面を加撃したもの(1・4・6)と、稜上又は稜付近を加撃したもの(3・9~11)がある。いずれも主要剥離面の剥離に伴う打面調整は施されていない。6は主要剥離面と背面のポジティブな剥離面の加撃方向が直角にねじれた方向をとるが、それ以外は類似した方向をとる。3・4・9・11の横断面は四角形を呈し、4からは典型的な国府型ナイフ形石器を作ることが可能である。

2・5・7・8は背面側から打面調整が施されているので翼状剥片とすべきであるが、打面調整の範囲は小さく(2・5)、打面を山形に成形していない(2・7・8)。7は背面に大きな自然面を持ち、8には打面縁に細かな調整が施されている。

12~17・22・23・25・28・170の背面は、打点部分のない大きな剥離面からなるので、これらは横長剥片石核から比較的初期に剥離された横長剥片であると考えられる。また、154も、右図の上面がネガティブな剥離面と思われるので、同様な横長剥片であろう。

19は背面が打点部を持たない大きなポジティブな剥離面からなると共に、一側縁に主要剥離面側から施された調整を持つので、初期の剥片を用いたナイフ形石器であることができる。また、翼状剥片を用いて同様な部位に調整を施したナイフ形石器も出土しているので(第221図101・第231図225・226)、両者の関係も注目される。

18・20・21・24・26・27・29～153・155～277は背面にも横長剥片の剥離痕を持つものであるが、196・201・206・261・265・268は側縁に主要剥離面から施された調整を持つので19と同じナイフ形石器とみられ、124・148・195は側縁に背面から施された調整を持つことからナイフ形石器、もしくは削器、または調整痕ある剥片と考えられる。また、47・65・76・130・193・198・266・271・272には打面の縁辺に調整が施されている。

図示した剥片は、背面に複数のネガティブな剥離面を持ち、それと主要剥離面との加撃方向が一致しないものが多い。また、大きさや形も変化に富むので、これらの剥片からナイフ形石器を製作しようとするれば大部分は横長剥片を利用した不定形のナイフ形石器となるが、一部は背面に複数のネガティブな剥離面を持つ国府型ナイフ形石器として容易に加工できる。さらに、二次調整の施し方によっては背面のネガティブな剥離面の小さなナイフ形石器や断面三角形のナイフ形石器などに加工することも可能である。しかし、この種の横長剥片を底面と背面・腹面が各1面ずつからなる典型的な国府型ナイフ形石器に加工することは、適当な剥片が非常に少ないため、不可能ではないものの非常に難しいようである。

278～302は玻璃質安山岩製の横長剥片である。サヌカイト製の横長剥片と比べると、大きいものは少ない。玻璃質安山岩製の横長剥片石核の大きさからみて、大形の295・297・298・300などは横長剥片石核からの剥離ではなく、原石や素材を分割してできたのではないかと思われる。283・295・297・300・302は自然面、あるいは自然面と剥離面のなす稜を加撃して剥離している。一方、285・292・296の打面には、背面側から調整が施されており、注目される。また、302の縁辺部には主要剥離面側から施された調整を持っている。

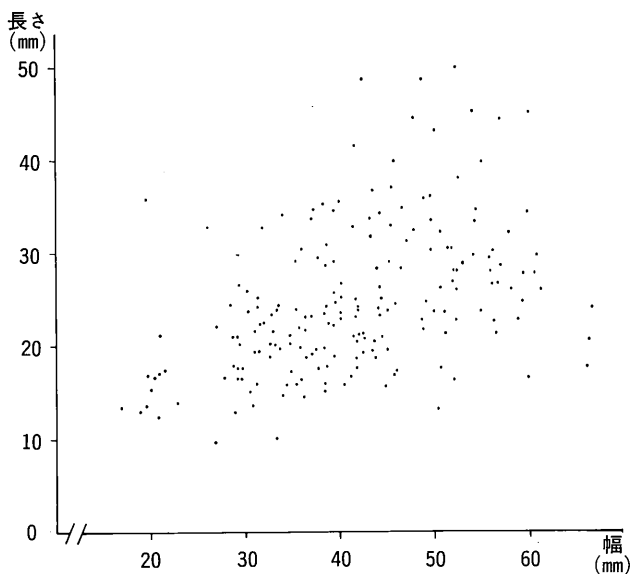
303～309は黒曜石製の横長剥片としたが、303・307は破片のため、細石刃ないし縦長剥片となるかもしれない。309は調整状の小剥離によって打点部分を失う。309以外はいずれも小さく、これらは碎片とすべきであろう。

310～320は流紋岩と思われる石材を用いた横長剥片である。310・312・315・320は打面調整が施されているが、背面のネガティブな剥離面のあり方からみて、翼状剥片石核から剥離されたものでないことは明らかである。このように流紋岩と思われる石材や玻璃質安山岩に打面調整をもつ横長剥片が存在することは、サヌカイトにも同様な剥片が存在することを示すもので

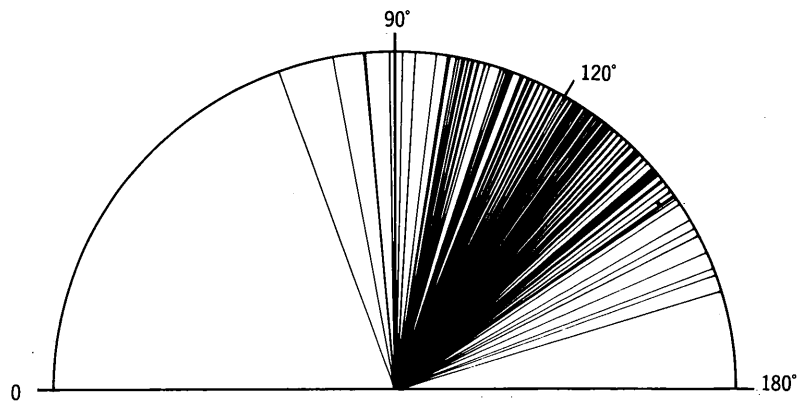
であろう。

図示した横長剥片の大きさをみると、長さ1.5～3.6cm、幅3～6cm程度のものである(第32表)。翼状剥片に比べて全体に幅が狭い反面、4cmを越える長さのものも少なくない。長幅比をみると、横長剥片が1：1～1：3の範囲にほぼ納まるのに対して、翼状剥片は2：3～1：3となり、翼状剥片の方が狭長である。

また、図示した横長剥片のうち、剥離角度を計測したものについてみると、121°～130°をピークにして101°～140°までが86.7%を占める(第247図・第33表)。翼状剥片と比較すると横長剥片の剥離角度が若



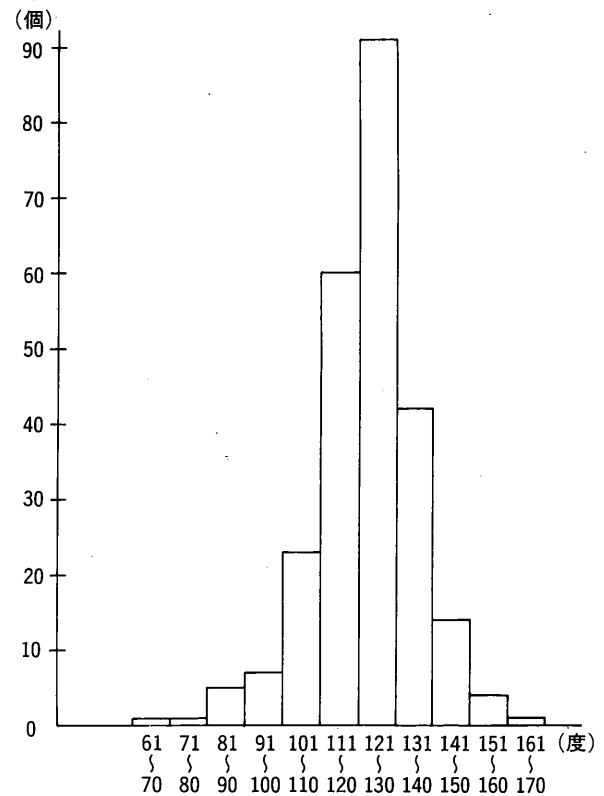
第32表 横長剥片の長幅比



第 247 図 横長剥片剥離角度分布図

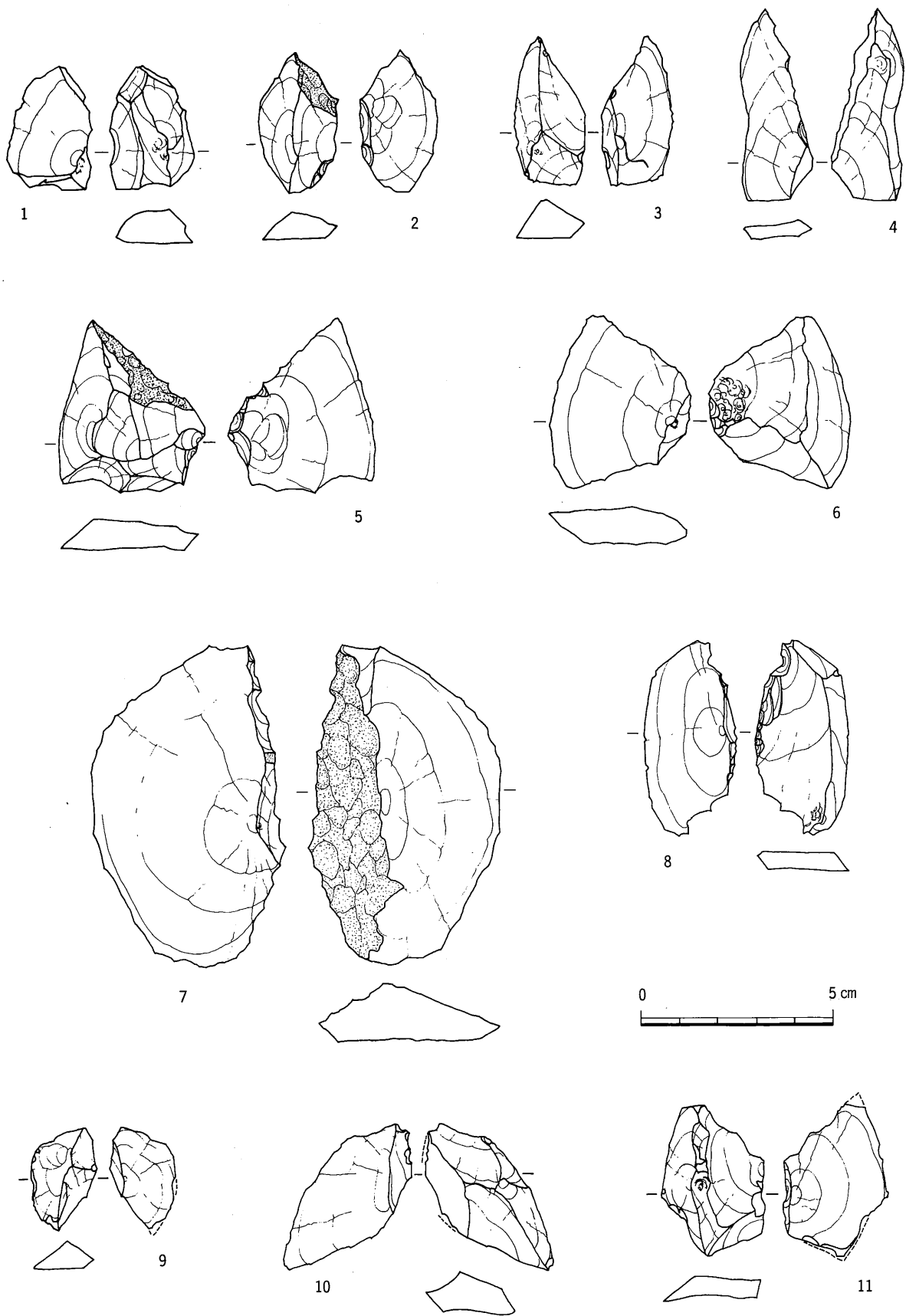
干大きいが、101°~140°までに占める割合は、翼状剥片の場合が85.8%であるので、両者ともほぼ同じであるといえる。

321~361は縦長剥片状を呈するが、背面に横長剥片の剥離痕を持つものが多いこと、打面を水平にした場合、剥片が左右に大きく傾くことから、これらは幅の狭い板状の縦長剥片石核の側面から剥離されたものではなく、横長剥片石核から剥離されたと考えられる。したがって、ここでは一応横長剥片の中で紹介する。ただし、331の先端には二次調整が施され、縦長剥片利用のナイフ形石器と共通する手法のナイフ形石器に加工されているので、縦長剥片としても用いられていることは事実である。第104図1142・1156などのナイフ形石器はこの種の剥片を用いているものと思われる。322・331には主要剥離面側から施された二次調整を持つ。

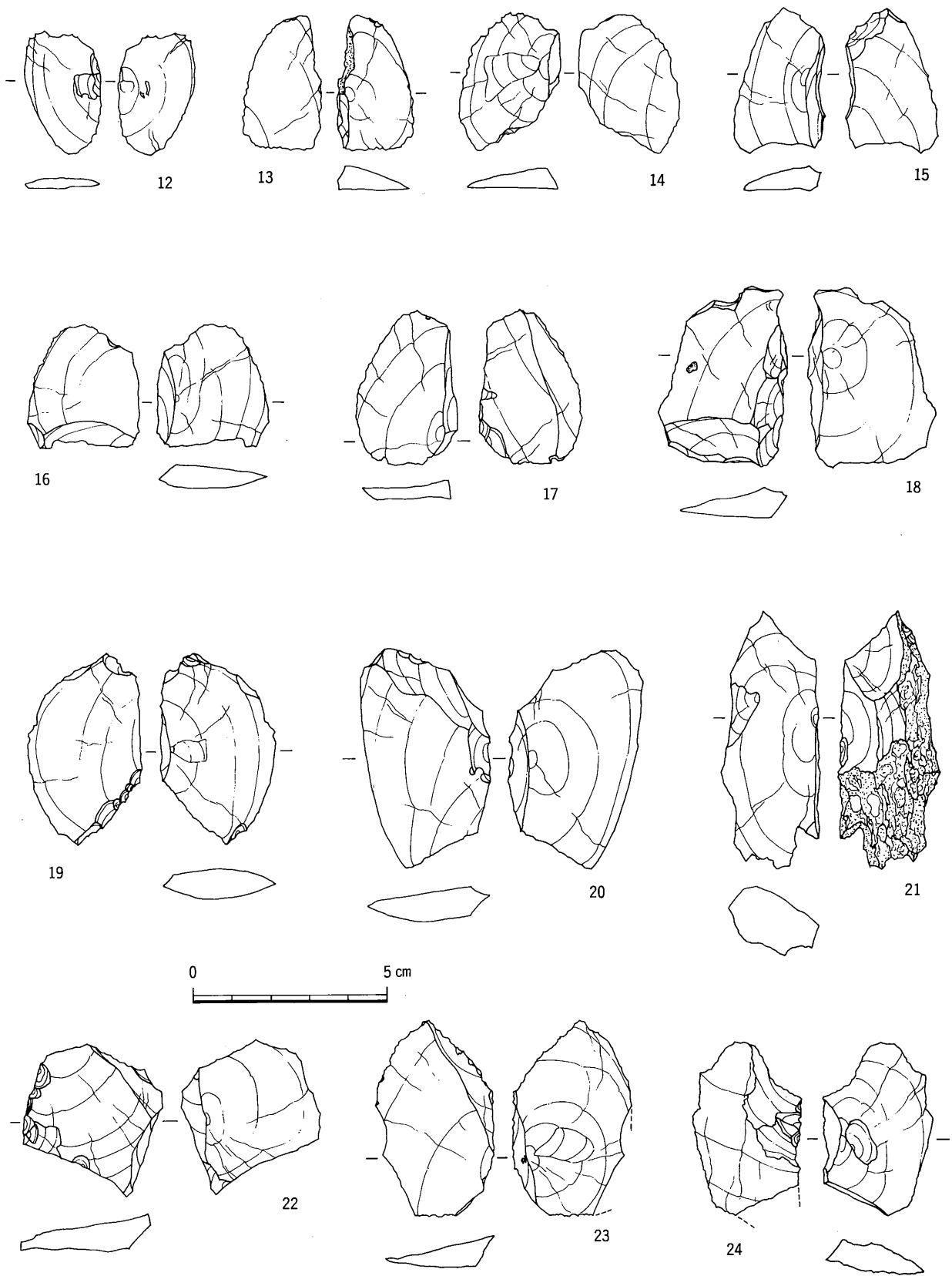


第 33 表 横長剥片の剥離角度分布表

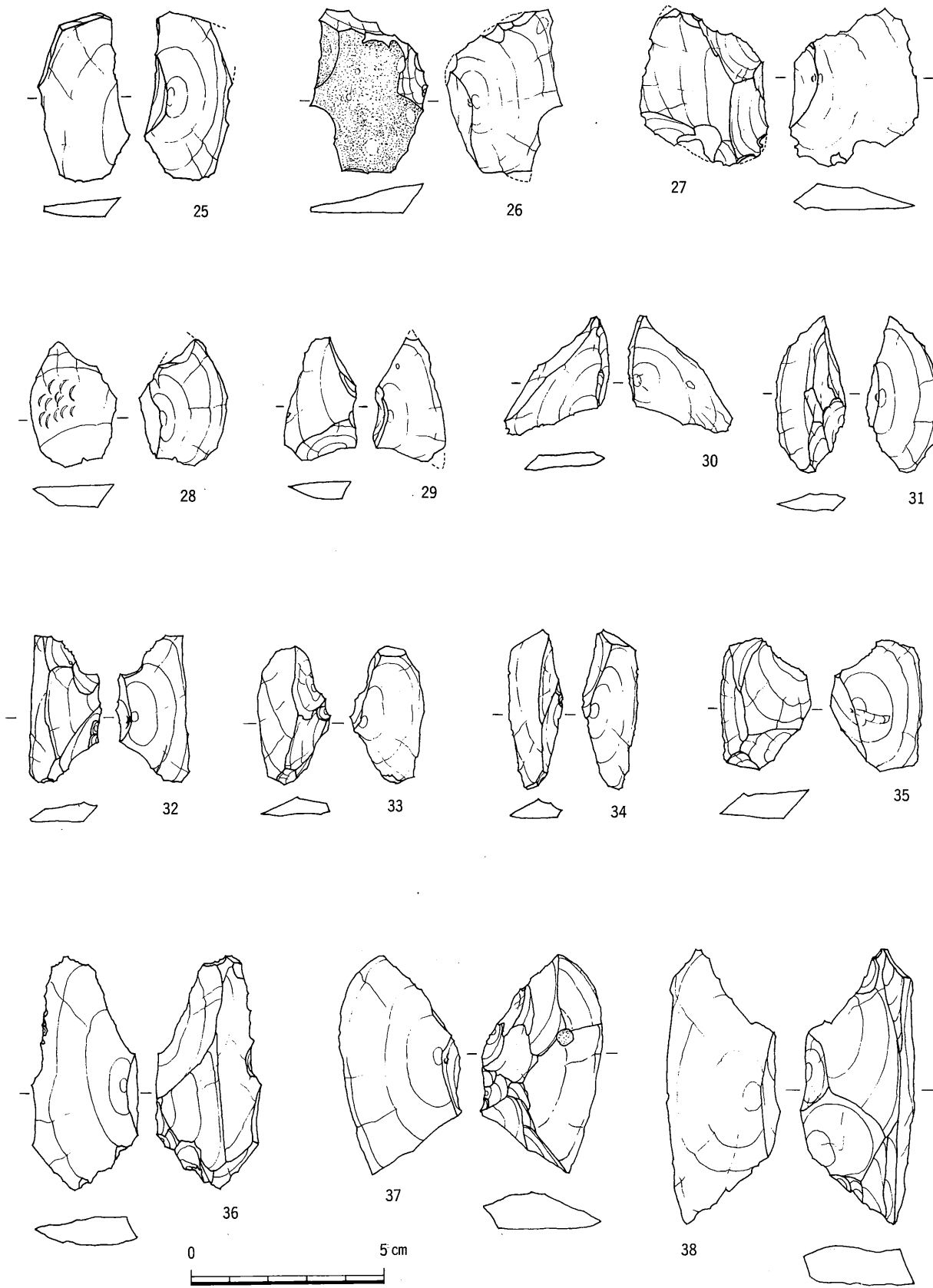
362~374は横長剥片の打点が除去されたものである。362・363・365・367~370・372は主要剥離面側から、364・366は背面側から、371・373は両方から打点部を除去している。そのうち、365・368・370~373は複数の加撃を行っているので意図的な作業とみられ、ナイフ形石器に含めるべきであろうが、362~364・366・367・369はわずか1回の加撃で打点部のみ除去しており、しかも一般の二次調整に比べて剥離が大きいので、これらを直ちにナイフ形石器とするには疑問が残る。主要剥離面に伴う打点部をまず除去するのは、二次調整を行う上での一つの方法であったとも考えられるが、現状でははっきりしない。



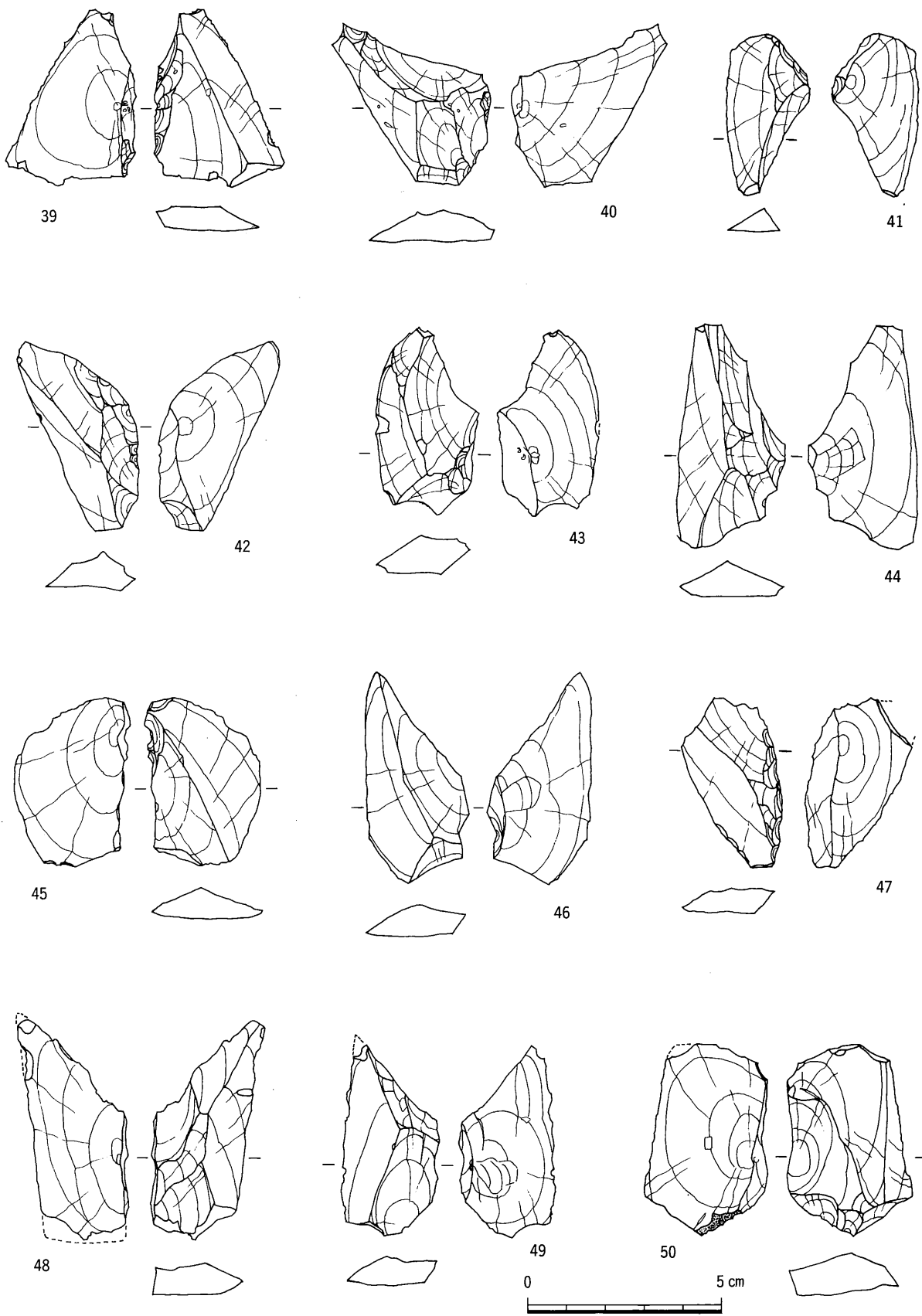
第 248 図 横長剝片実測図 (1)



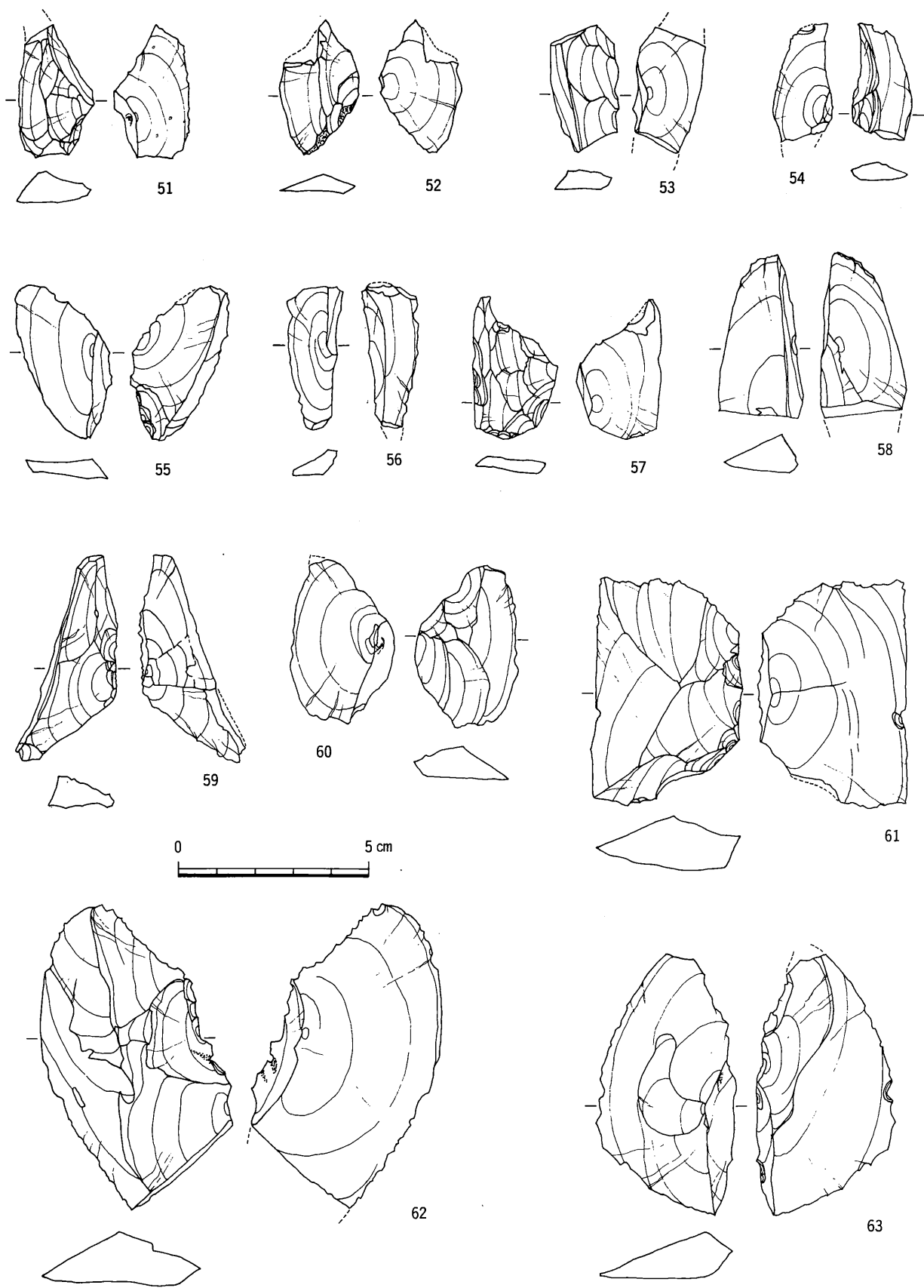
第 249 図 横長剥片実測図 (2)



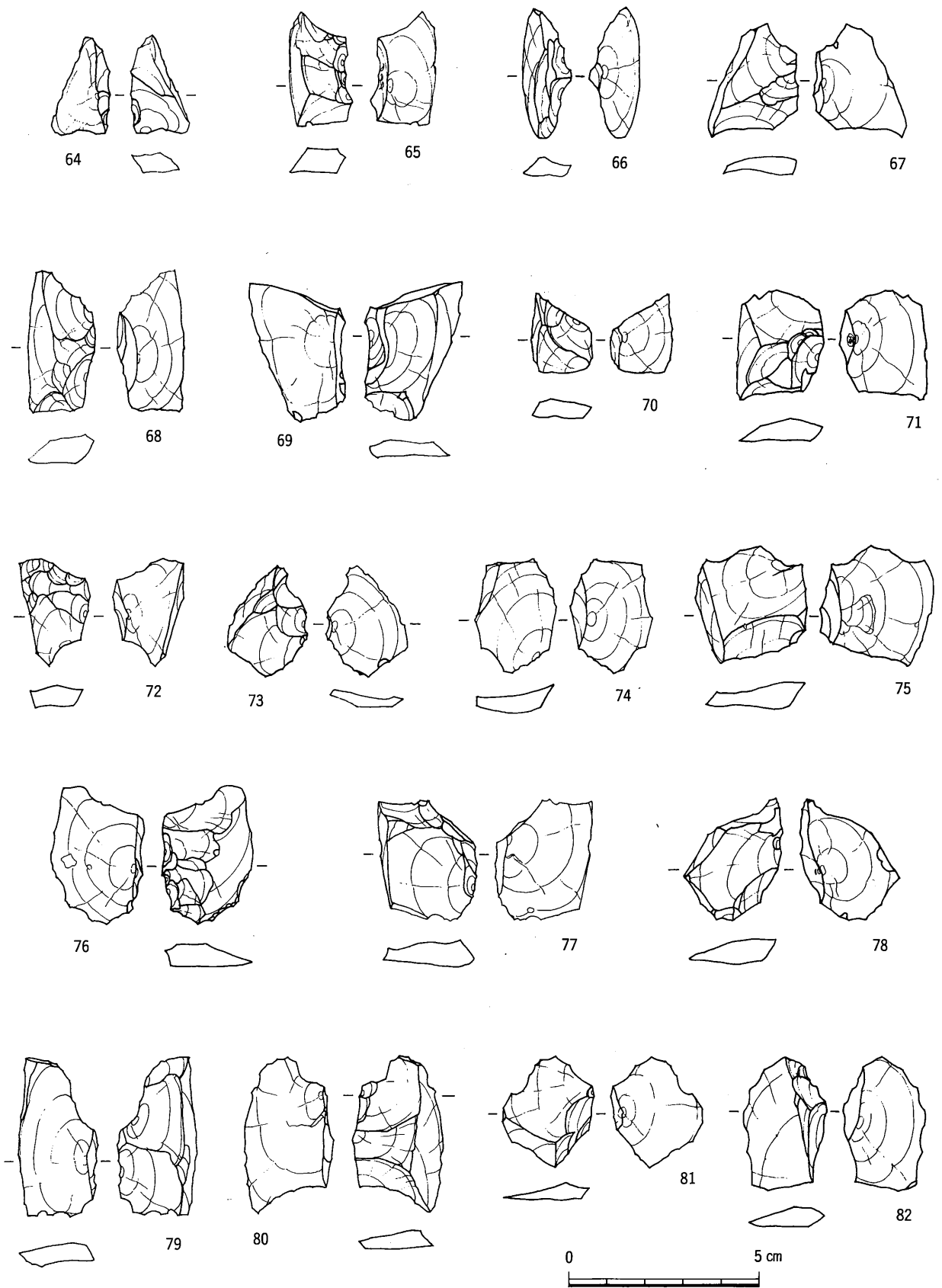
第 250 図 横長剥片実測図 (3)



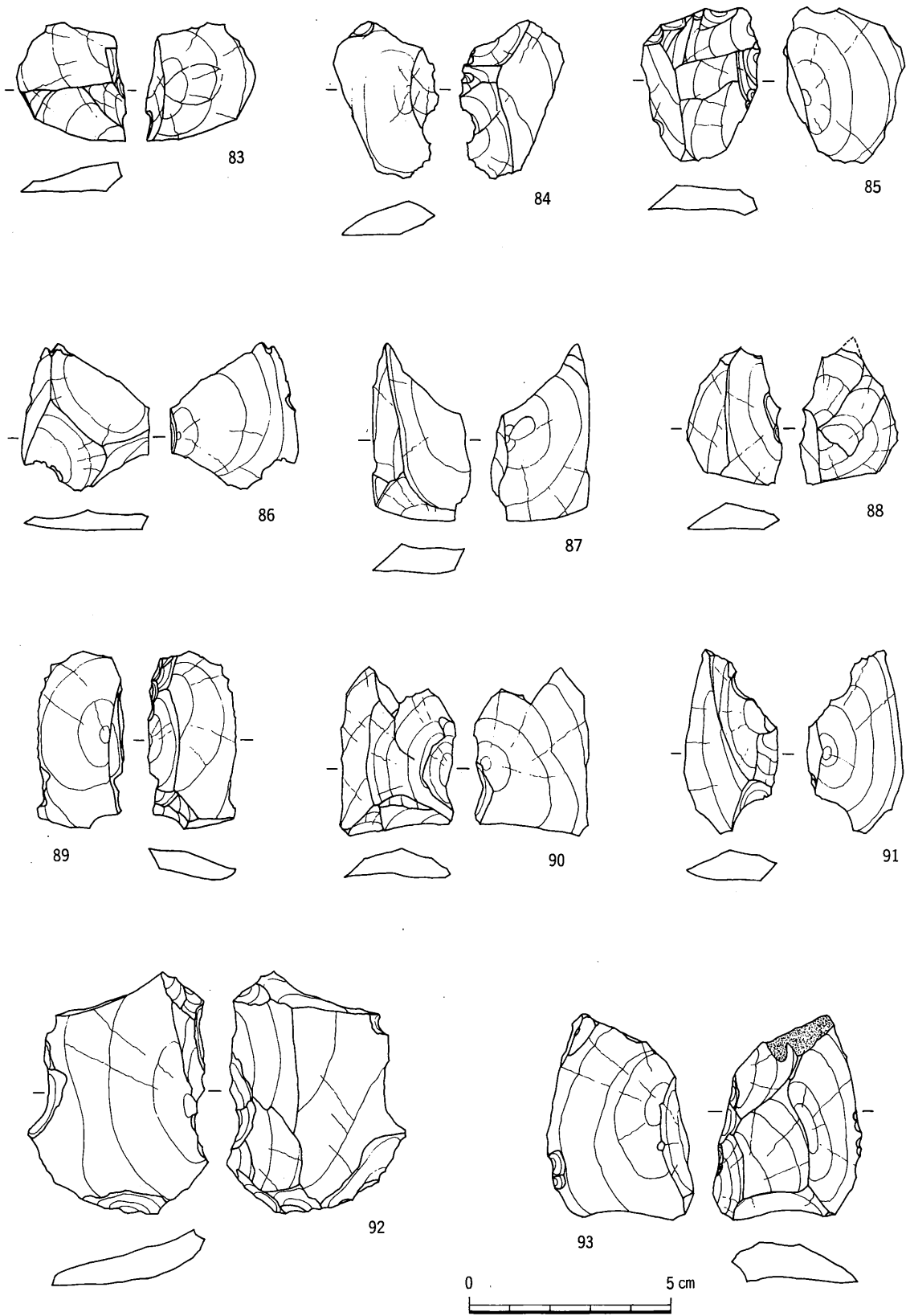
第 251 図 横長剥片実測図 (4)



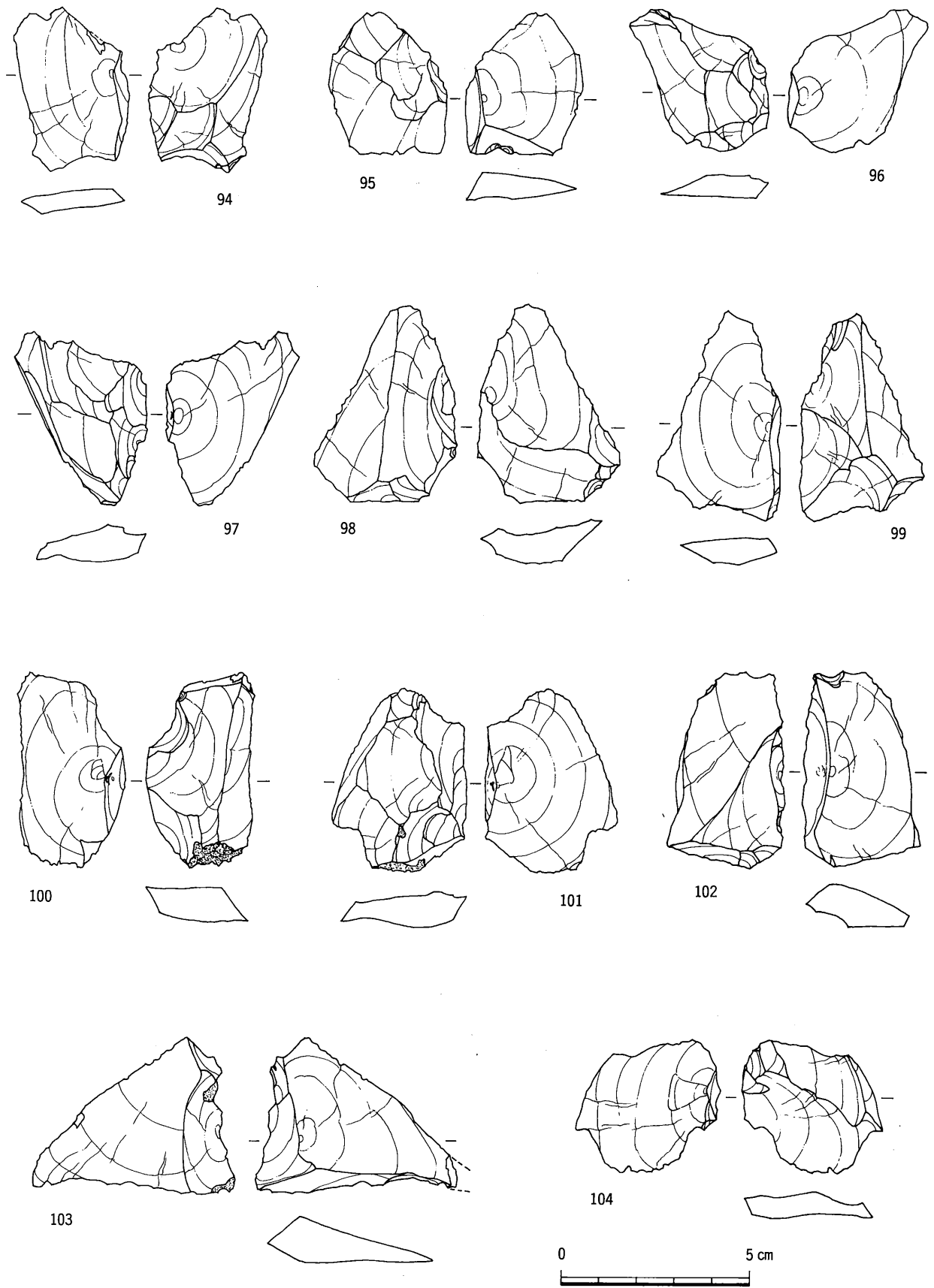
第 252 図 横長剝片実測図 (5)



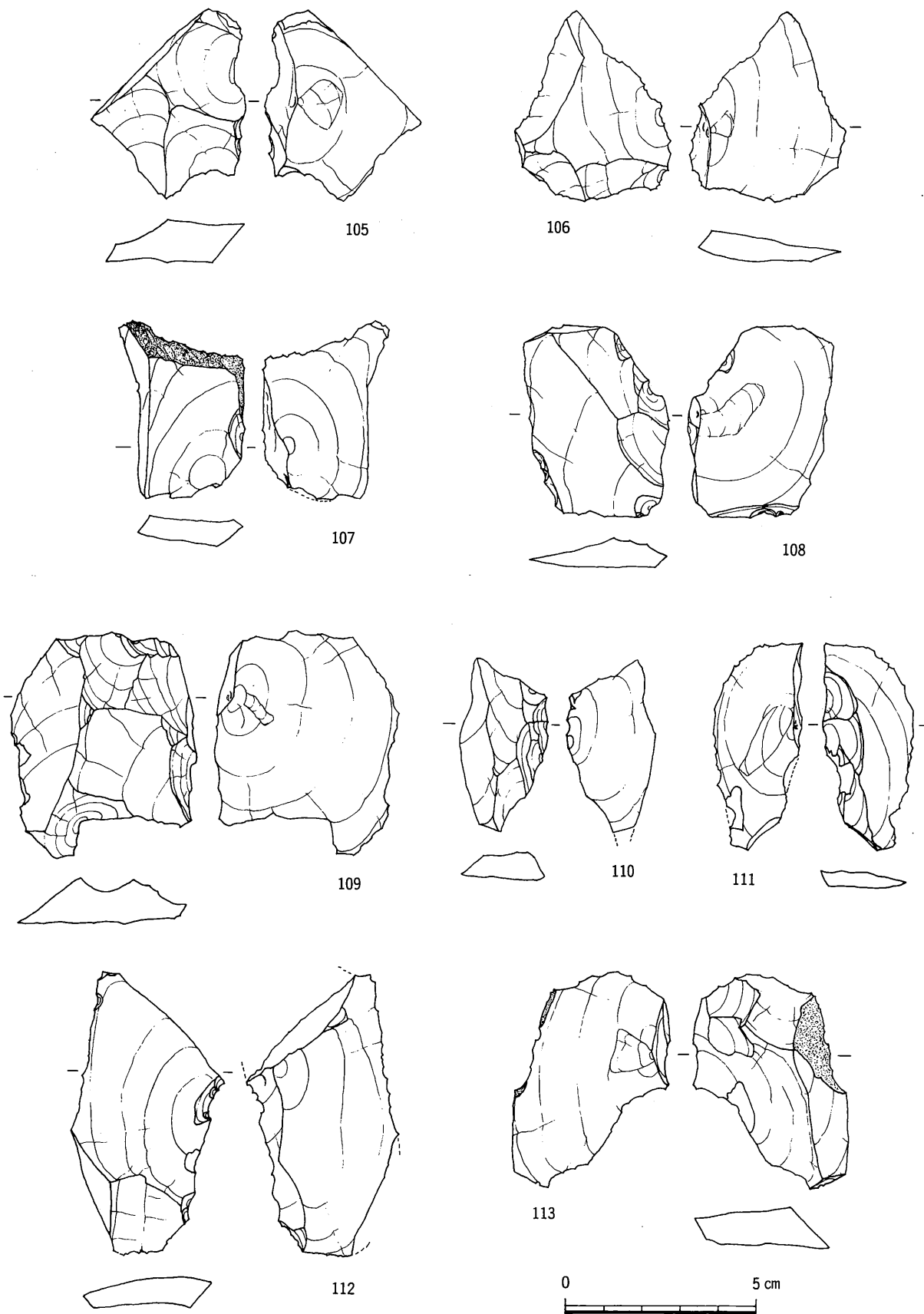
第 253 図 横長剣片実測図 (6)



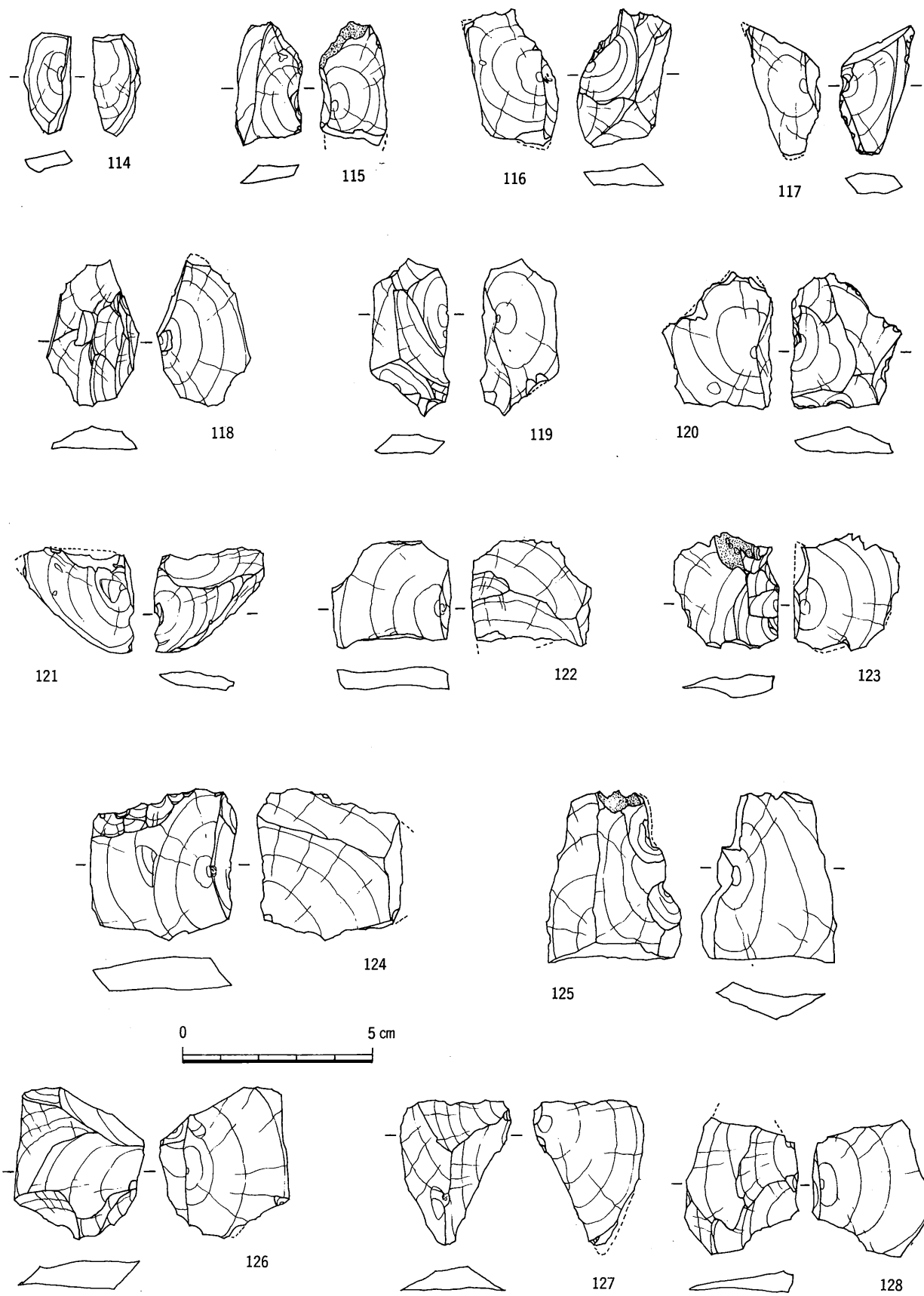
第 254 図 横長剥片実測図 (7)



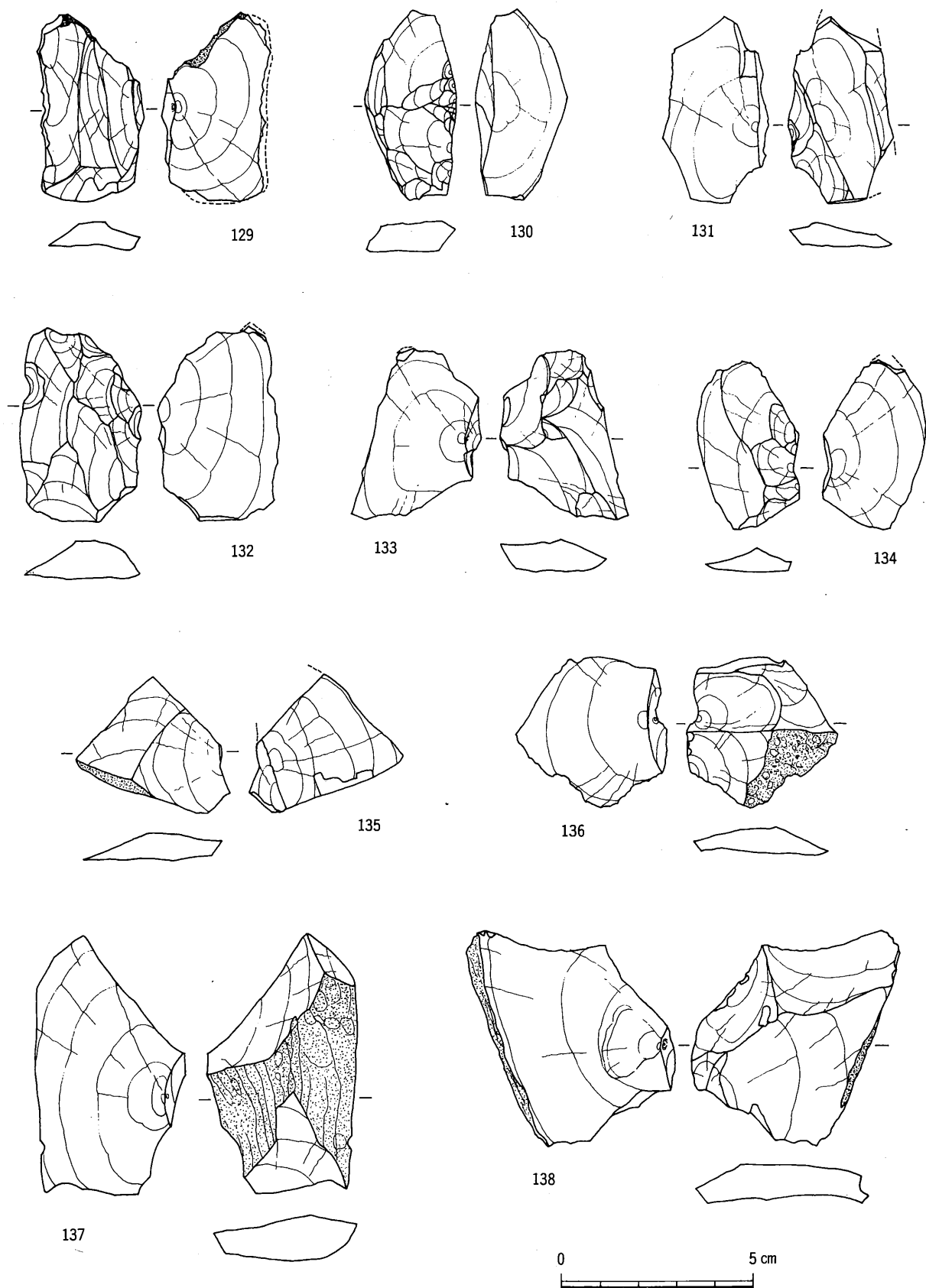
第 255 図 横長剝片実測図 (8)



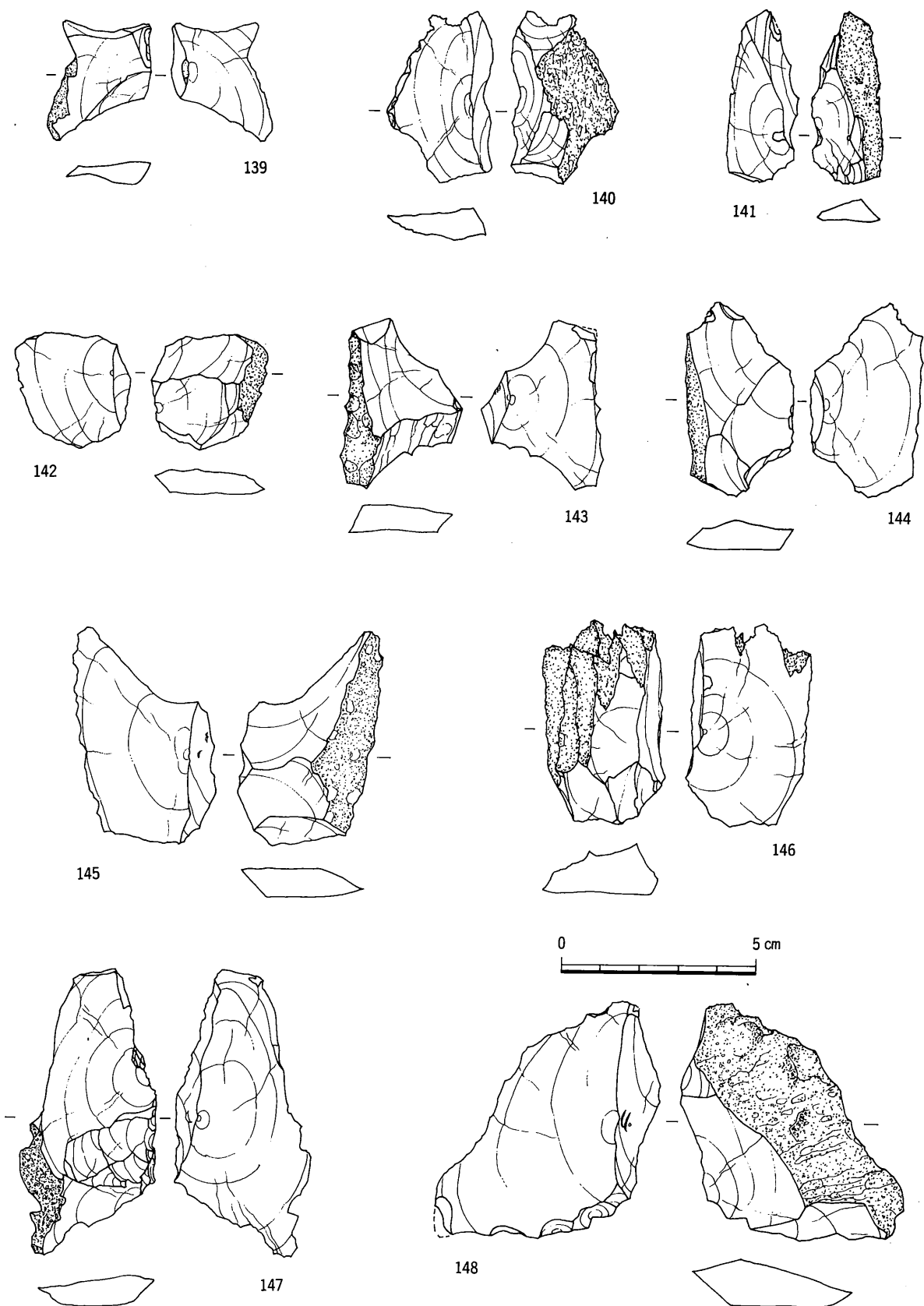
第 256 図 横長剥片実測図 (9)



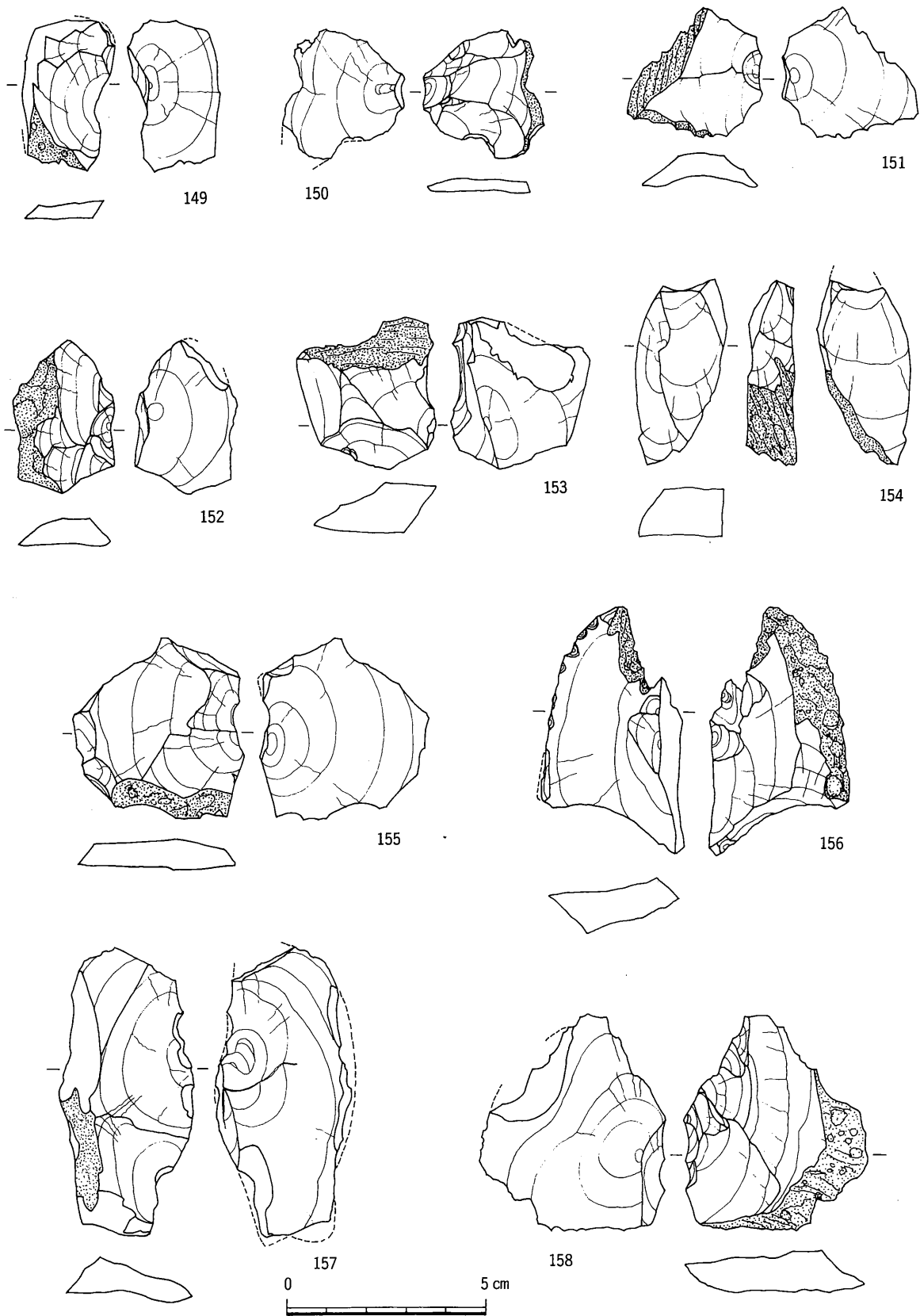
第 257 図 横長剥片実測図 (10)



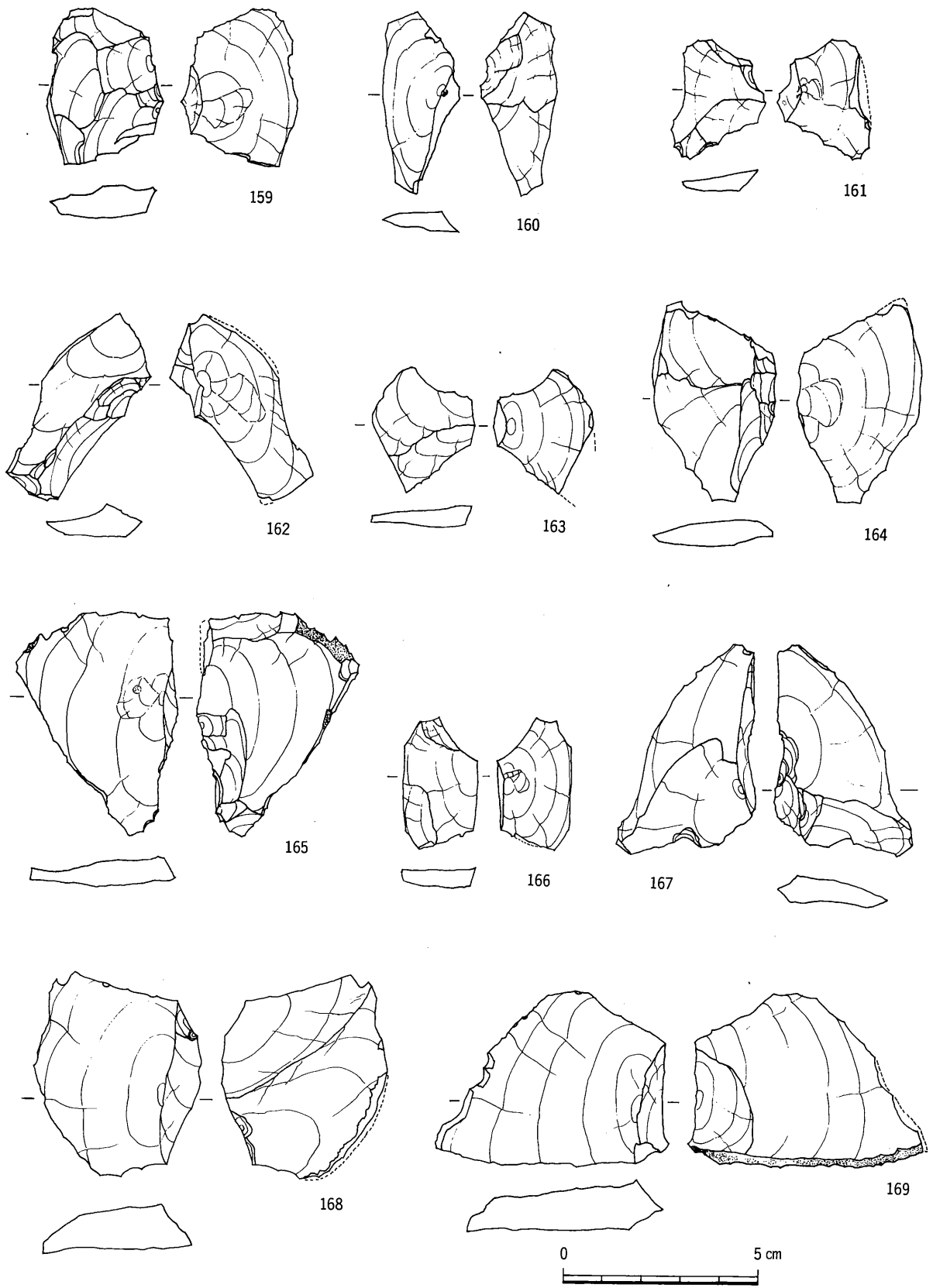
第 258 図 横長剝片実測図 (11)



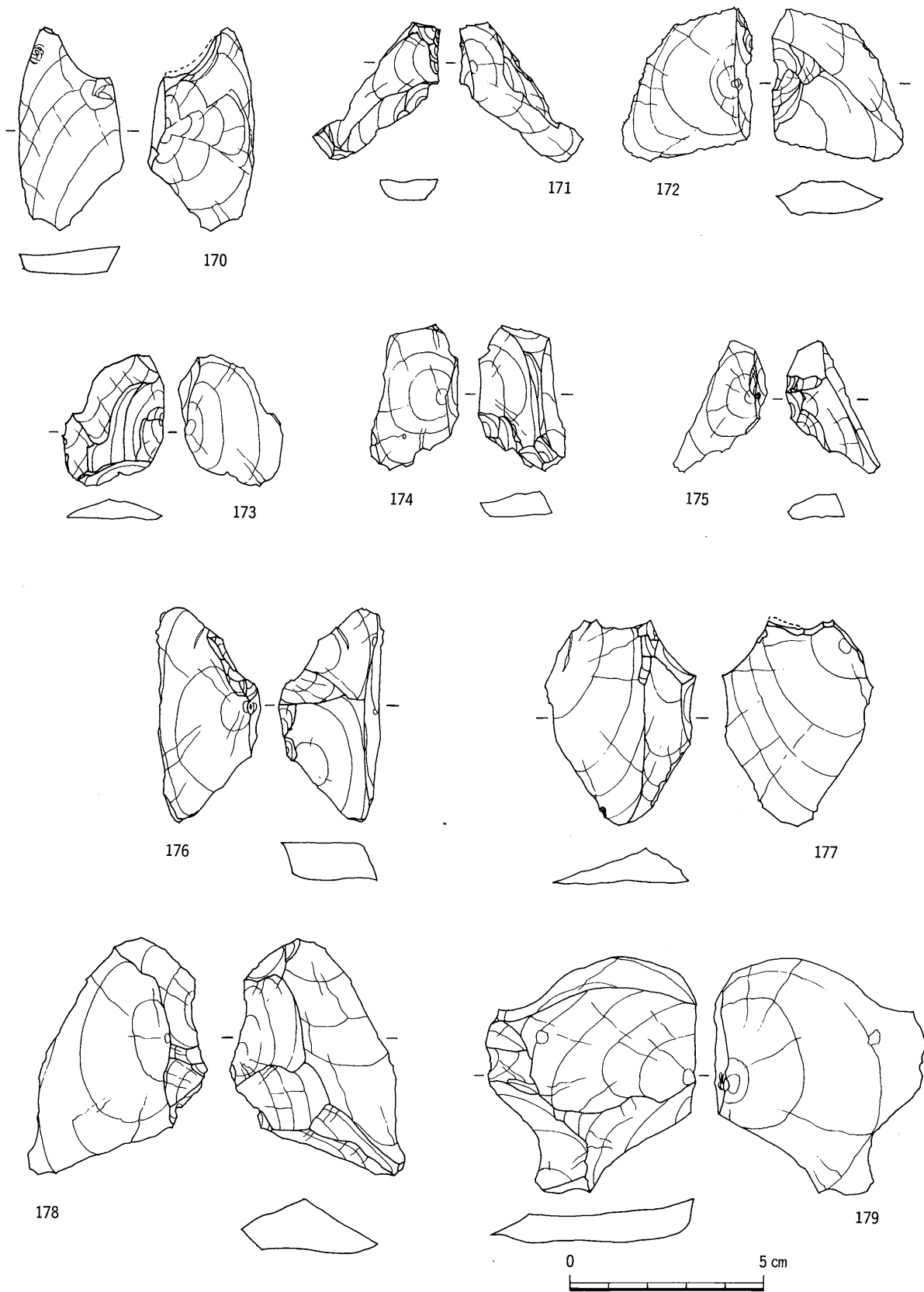
第 259 図 横長剥片実測図 (12)



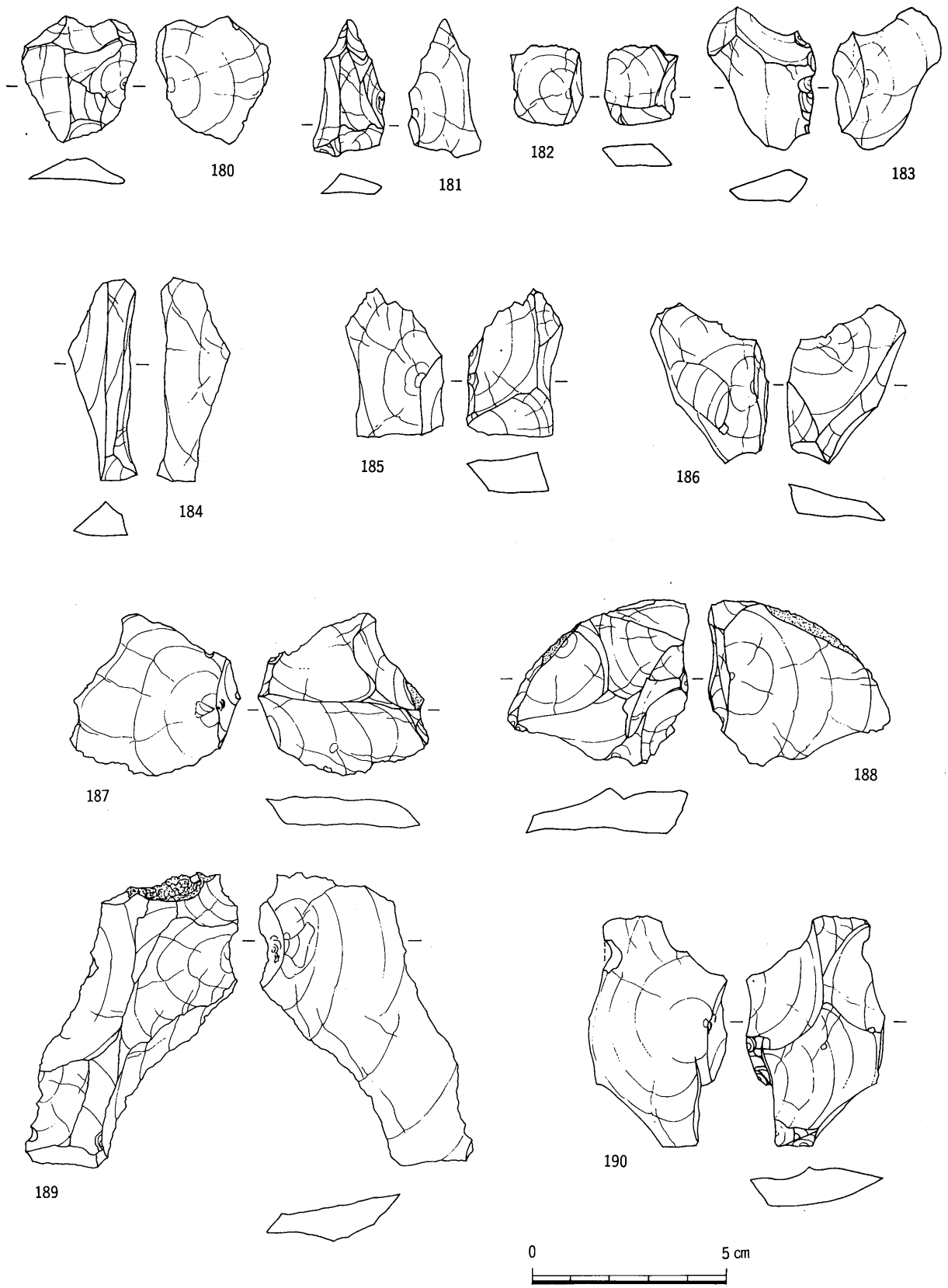
第 260 図 横長剥片実測図 (13)



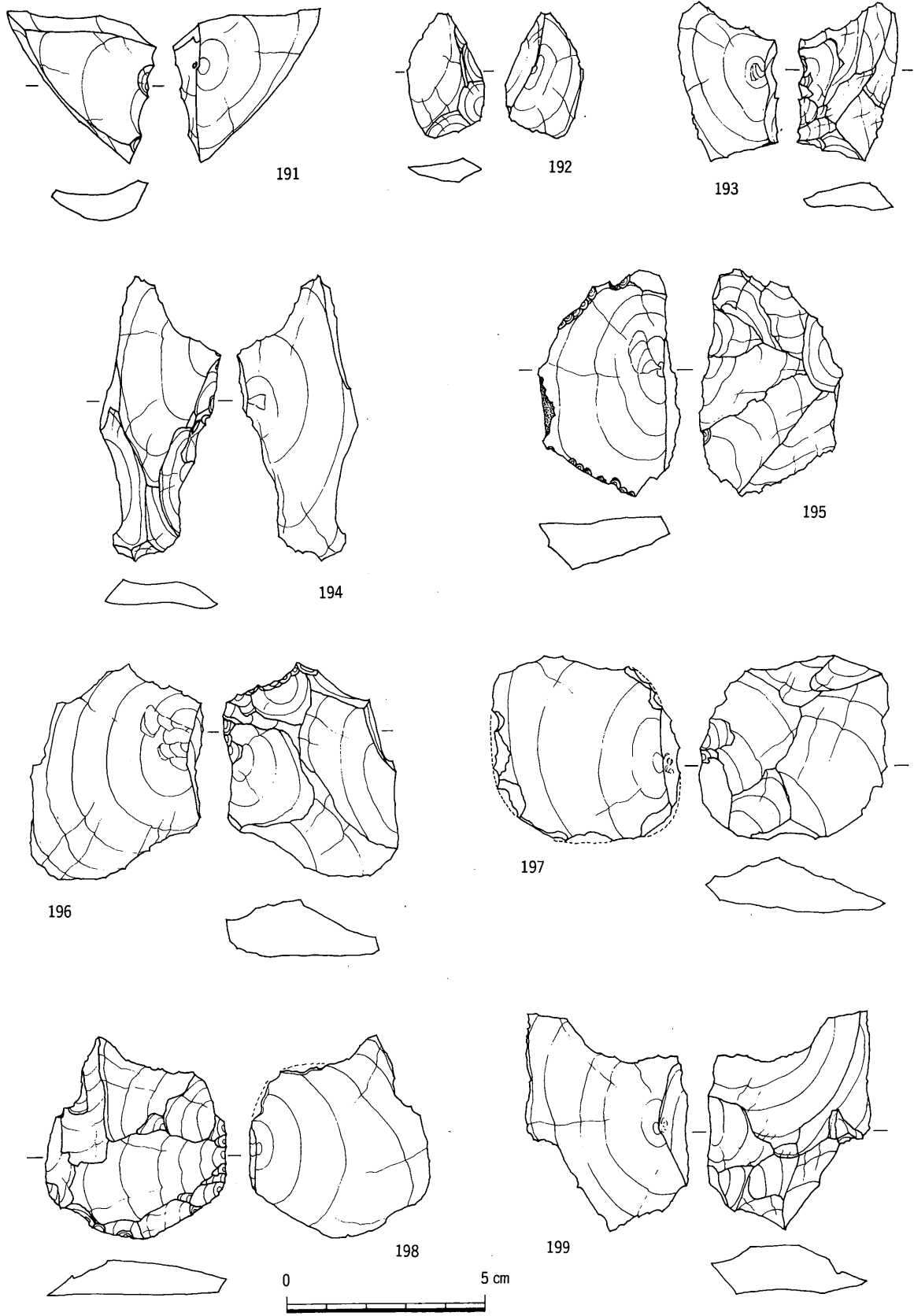
第 261 図 横長剥片実測図 (14)



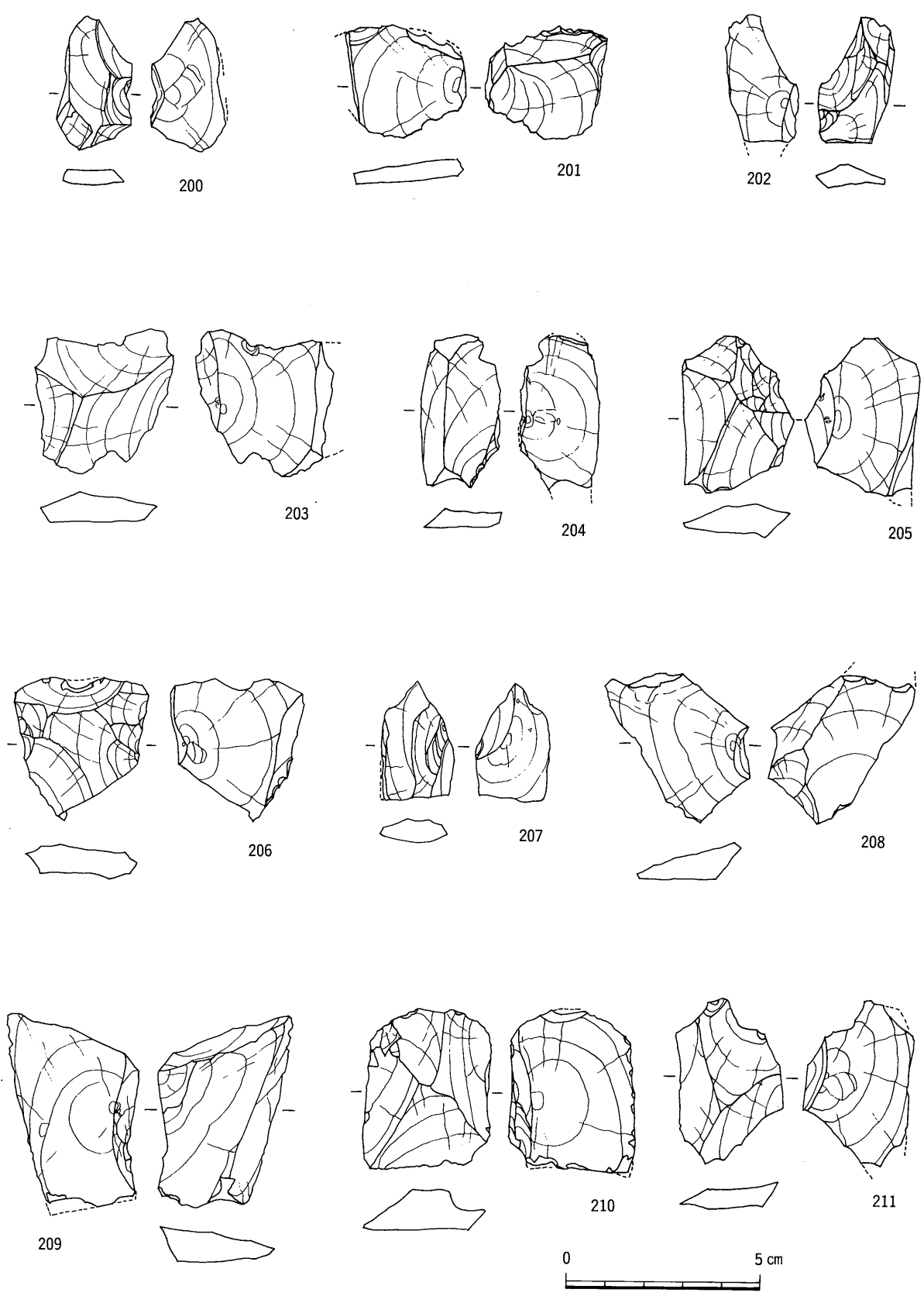
第 262 図 横長剥片実測図 (15)



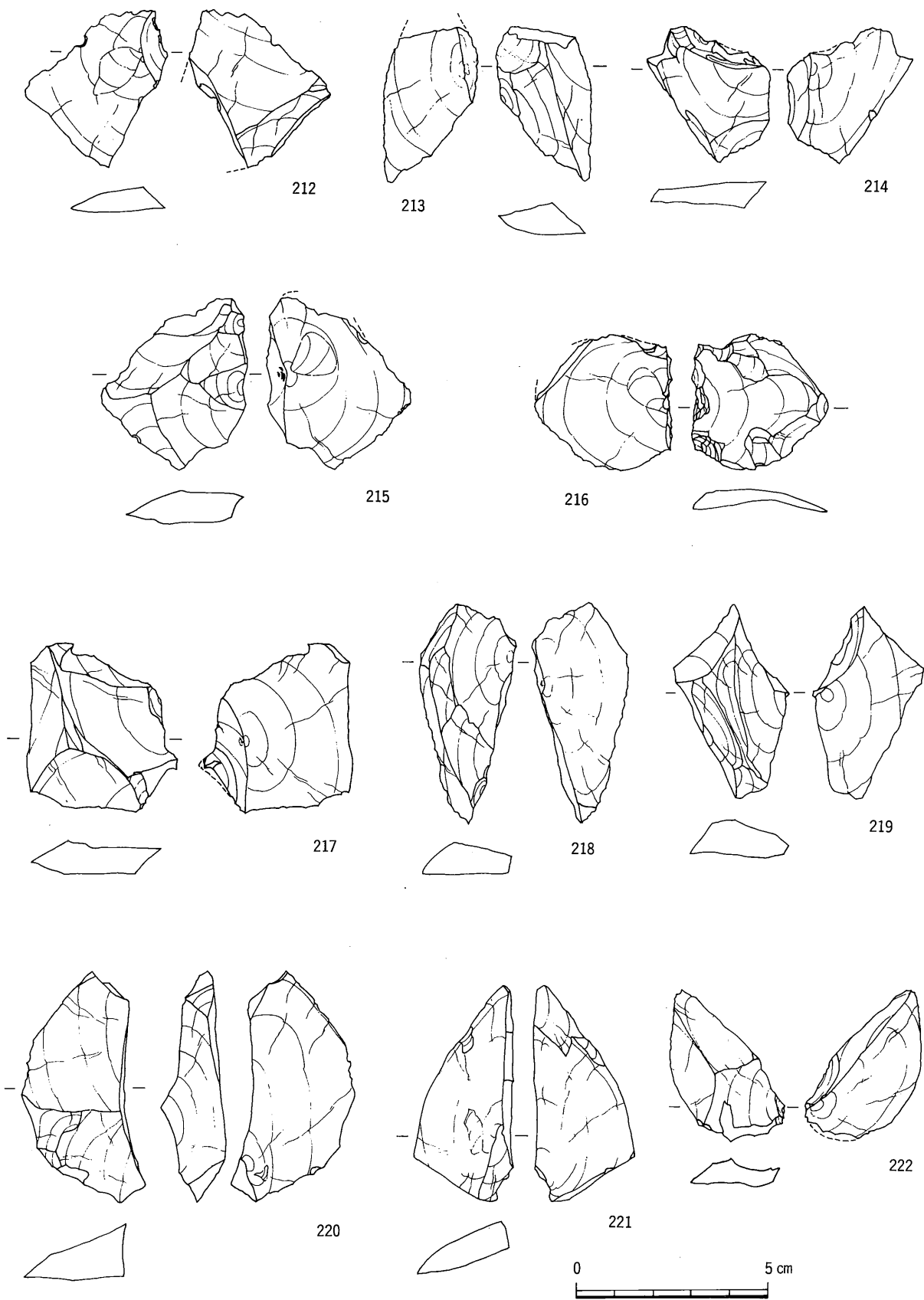
第 263 图 横長剝片実測図 (16)



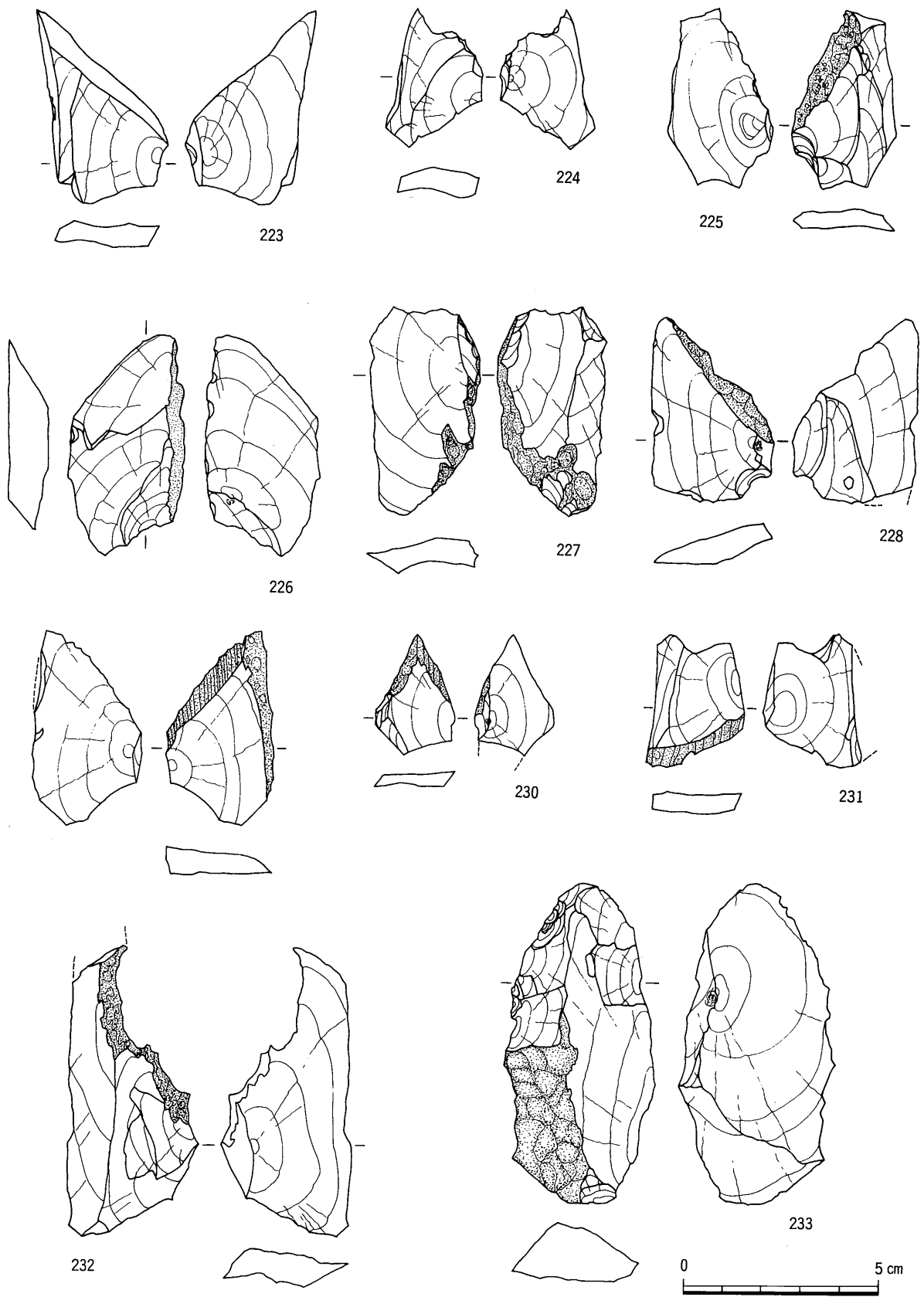
第 264 図 横長剣片実測図 (17)



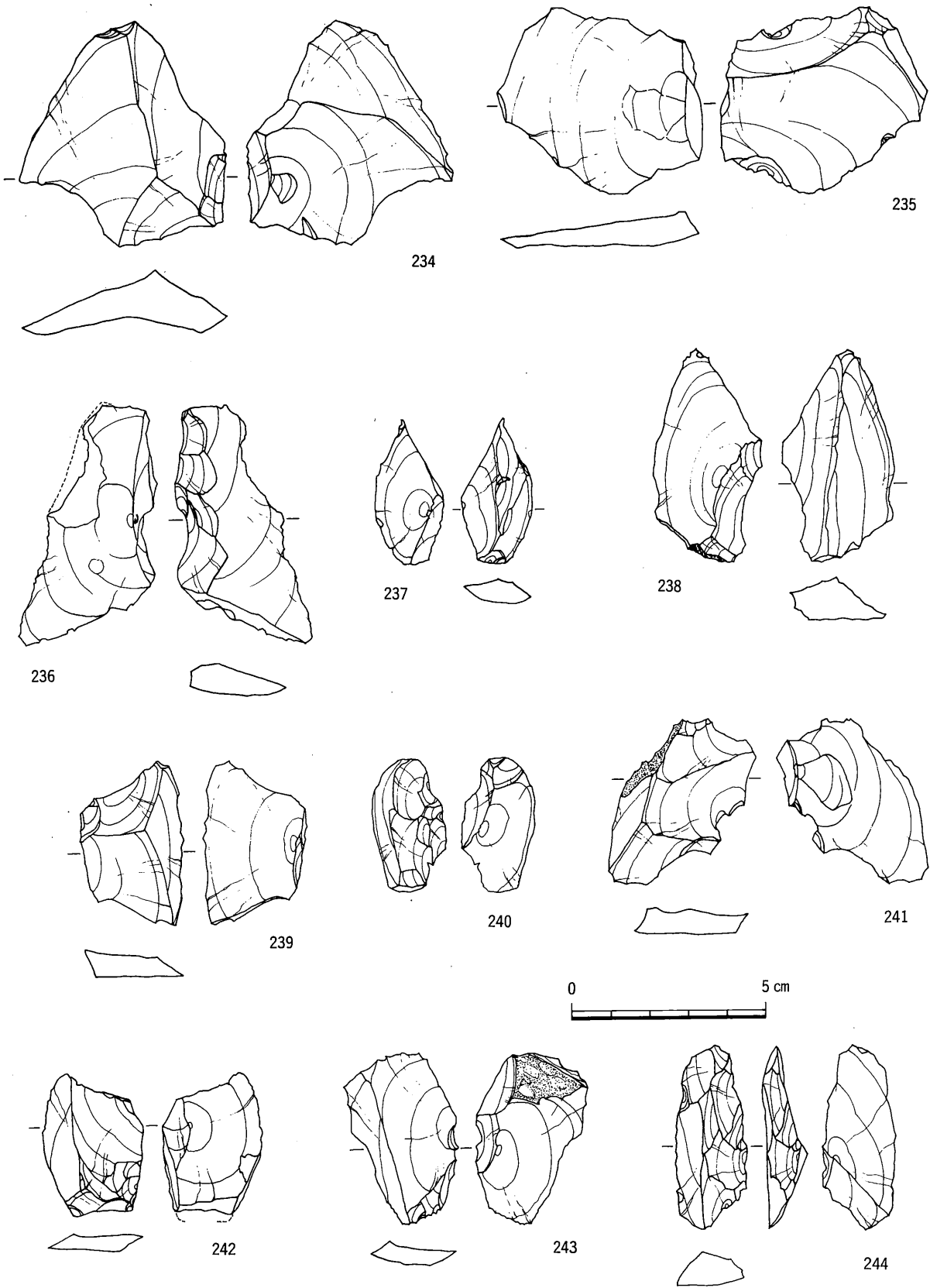
第 265 図 横長剝片実測図 (18)



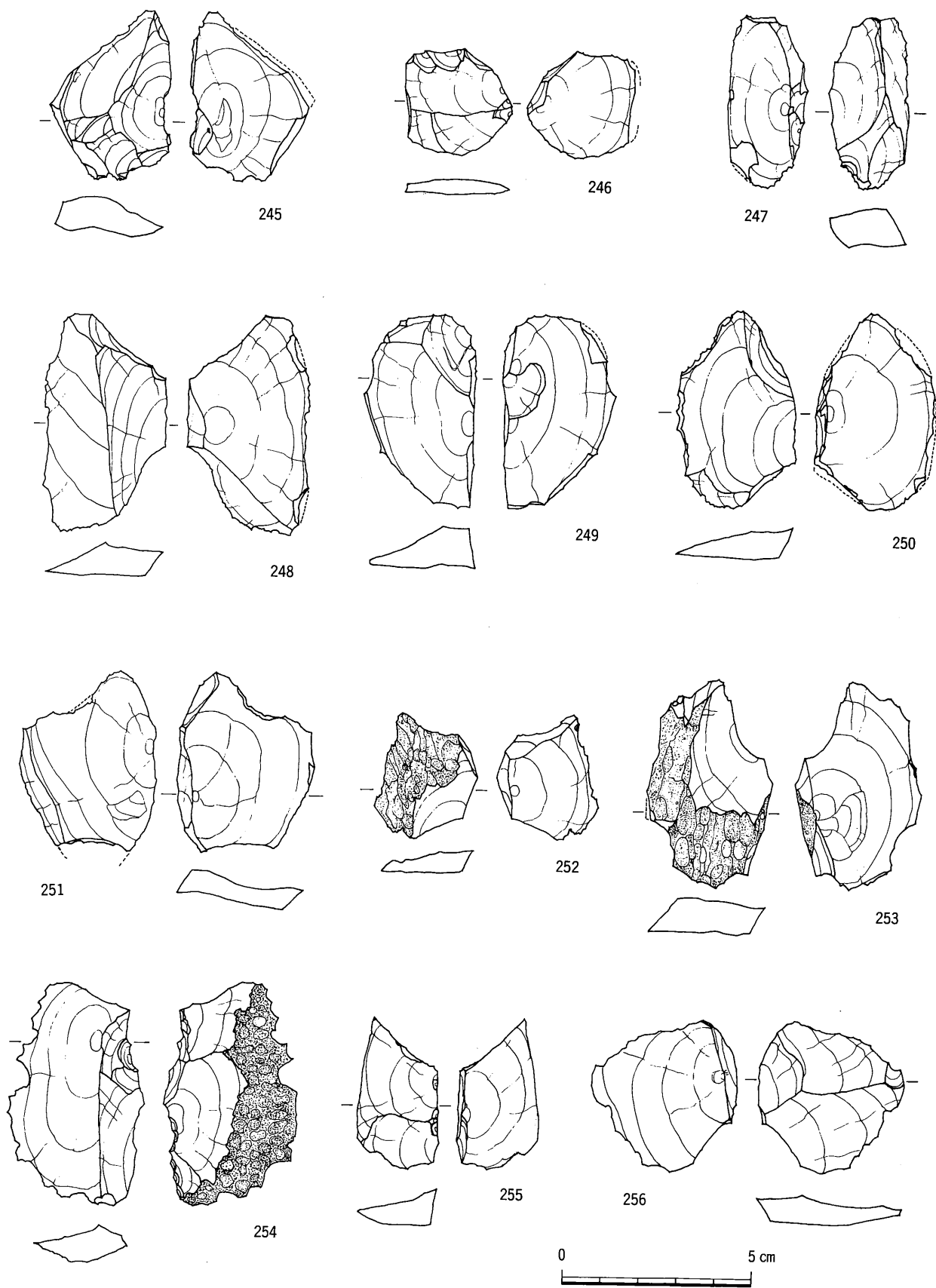
第 266 図 横長剣片実測図 (19)



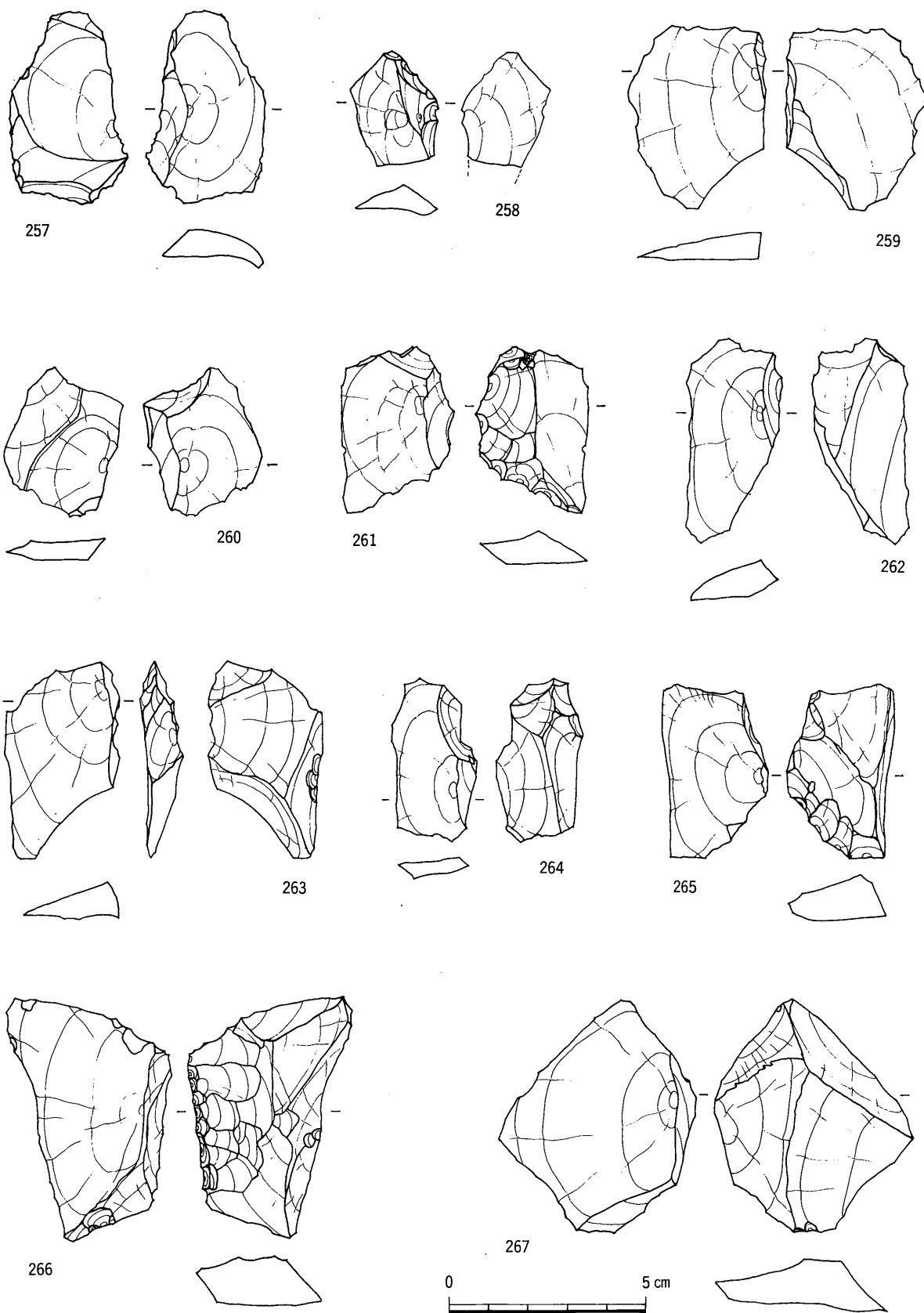
第 267 図 横長剥片実測図 (20)



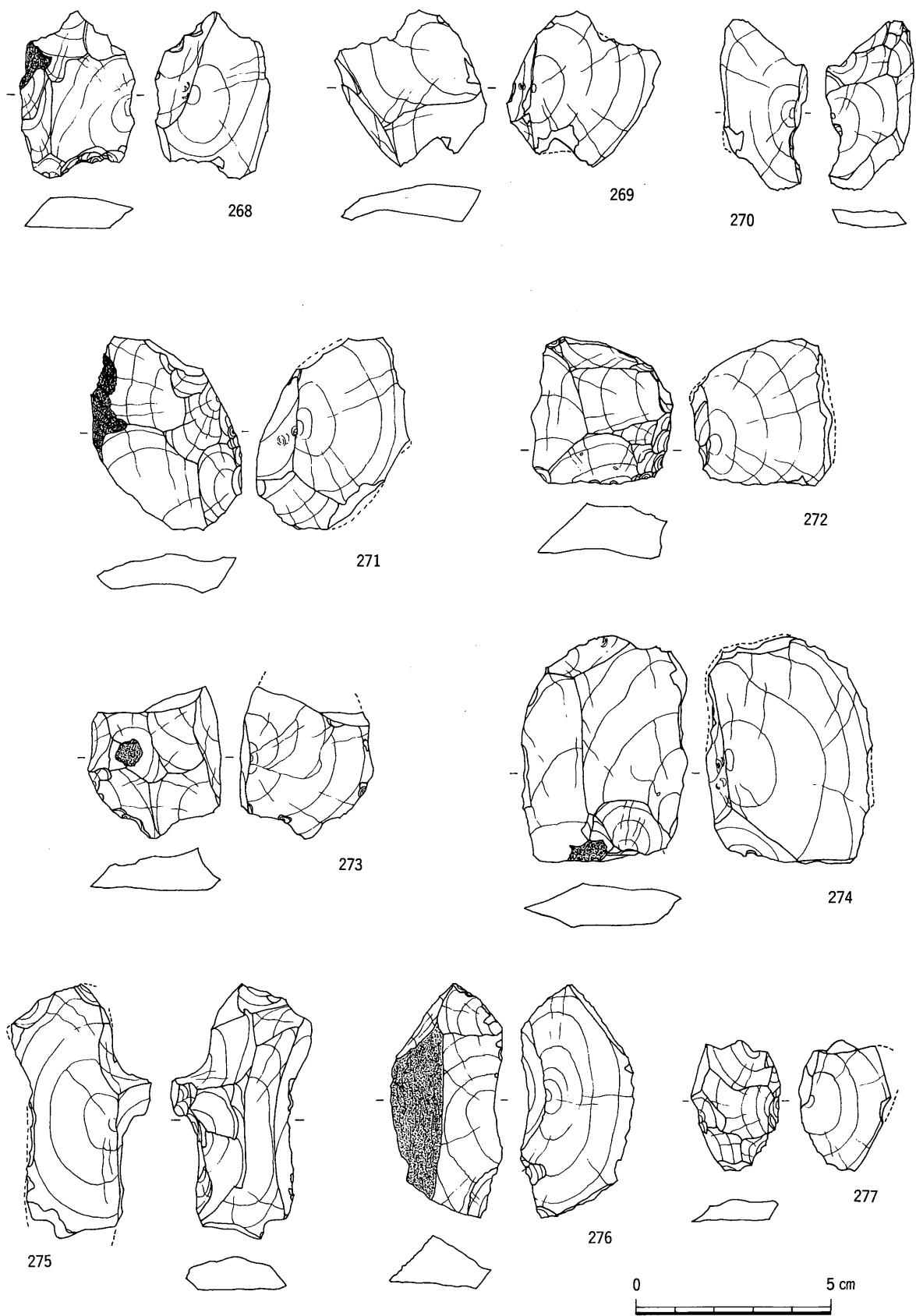
第 268 図 横長剥片実測図 (21)



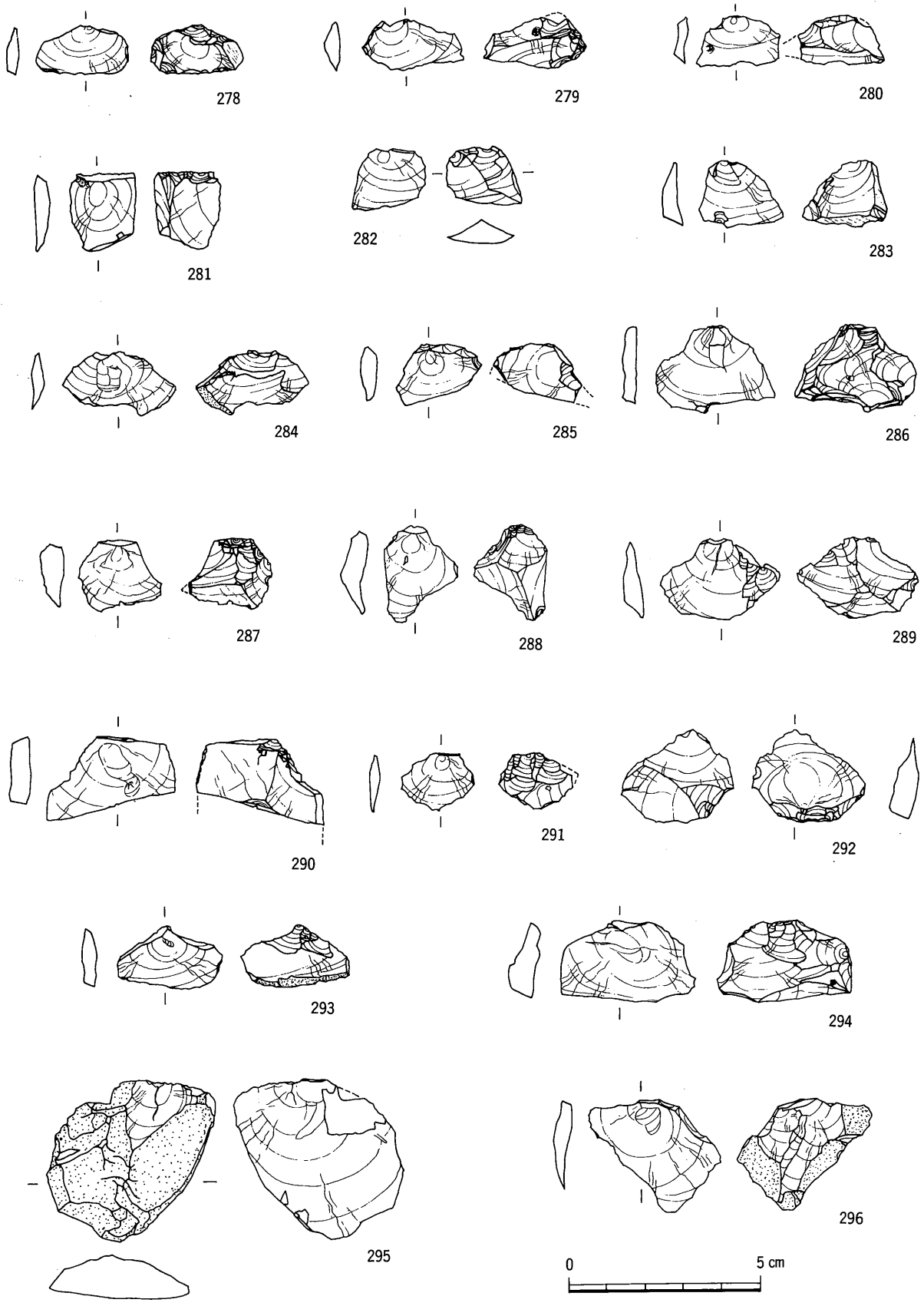
第 269 図 横長剥片実測図 (22)



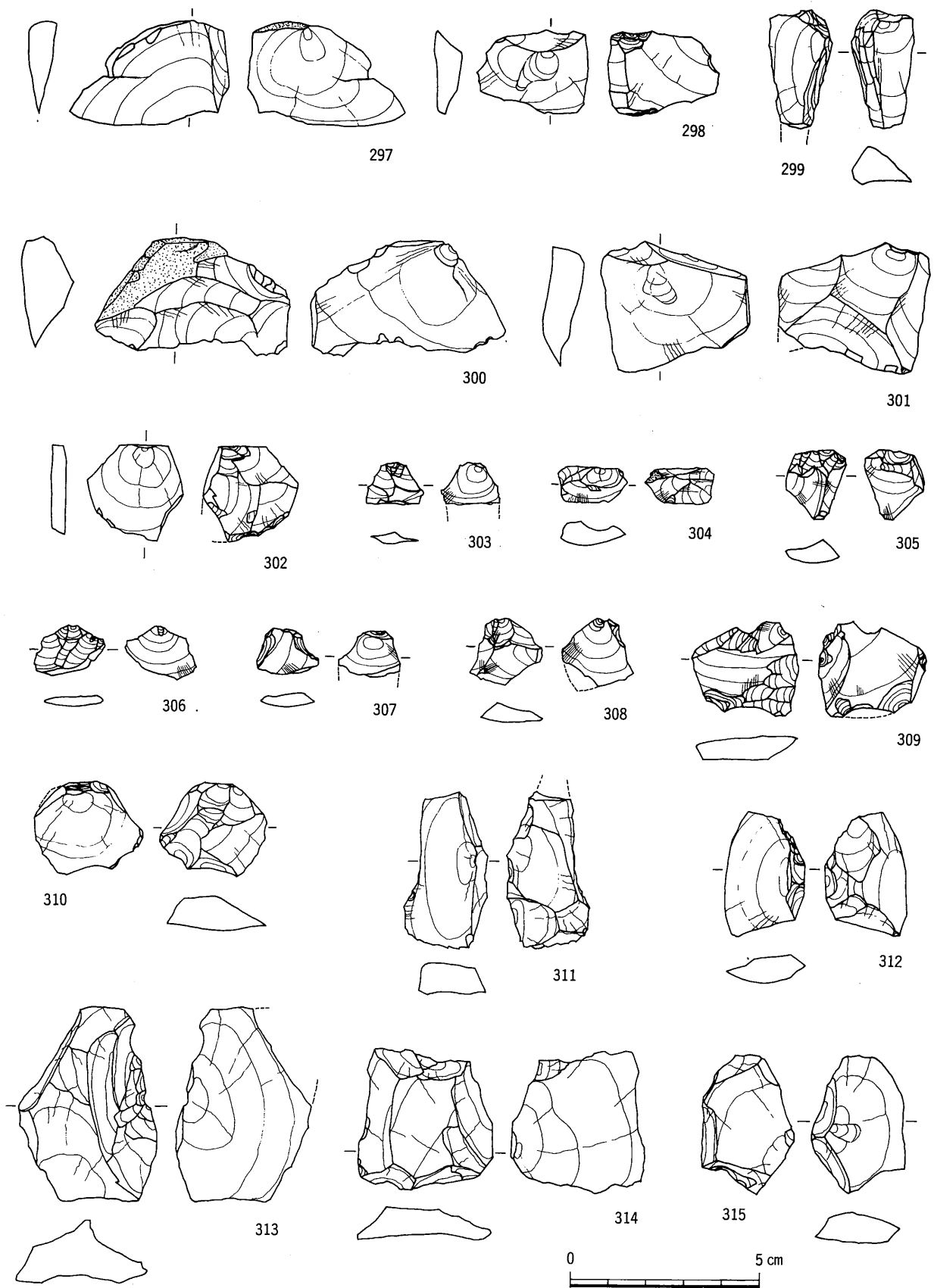
第 270 図 横長剥片実測図 (23)



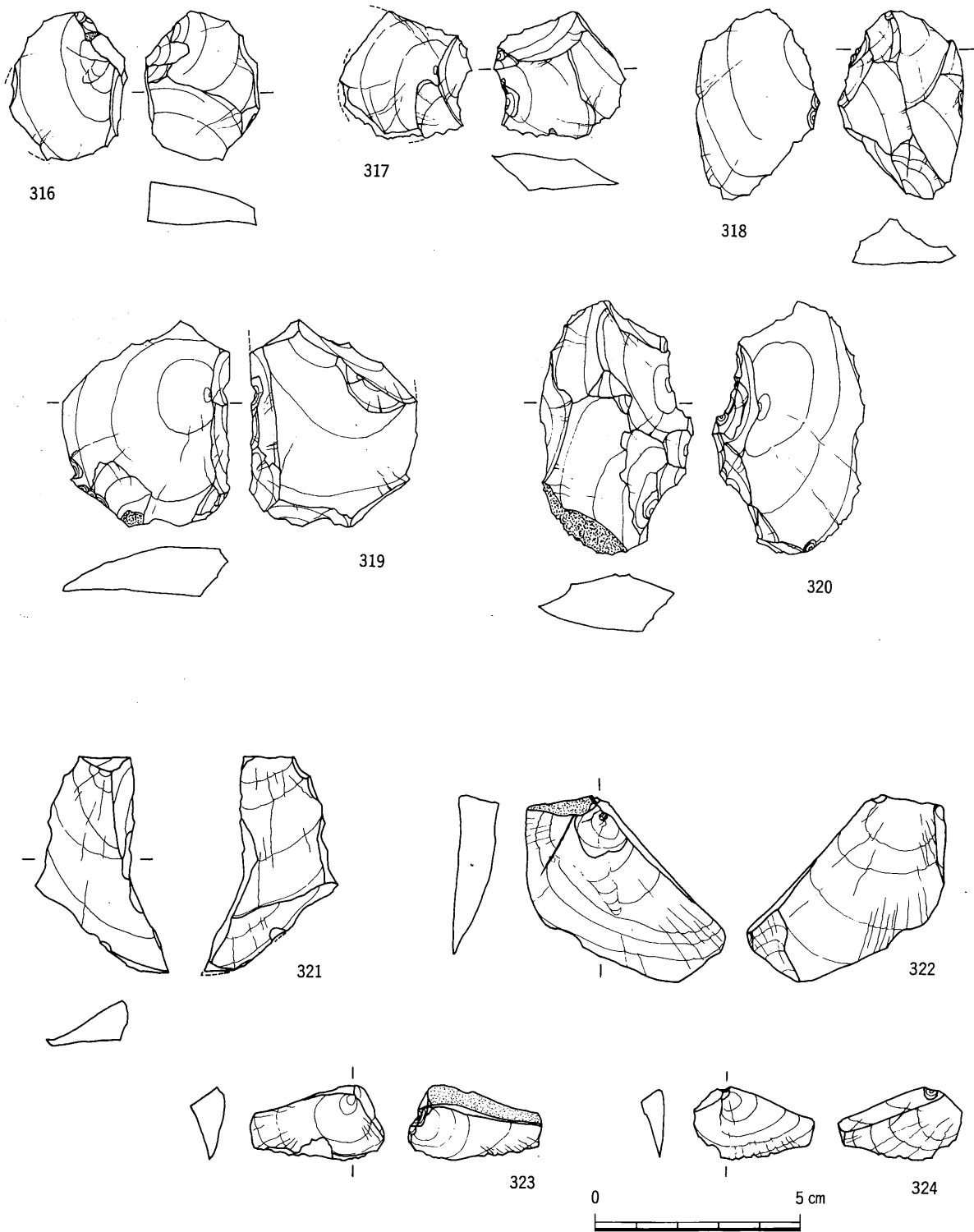
第 271 図 横長剥片実測図 (24)



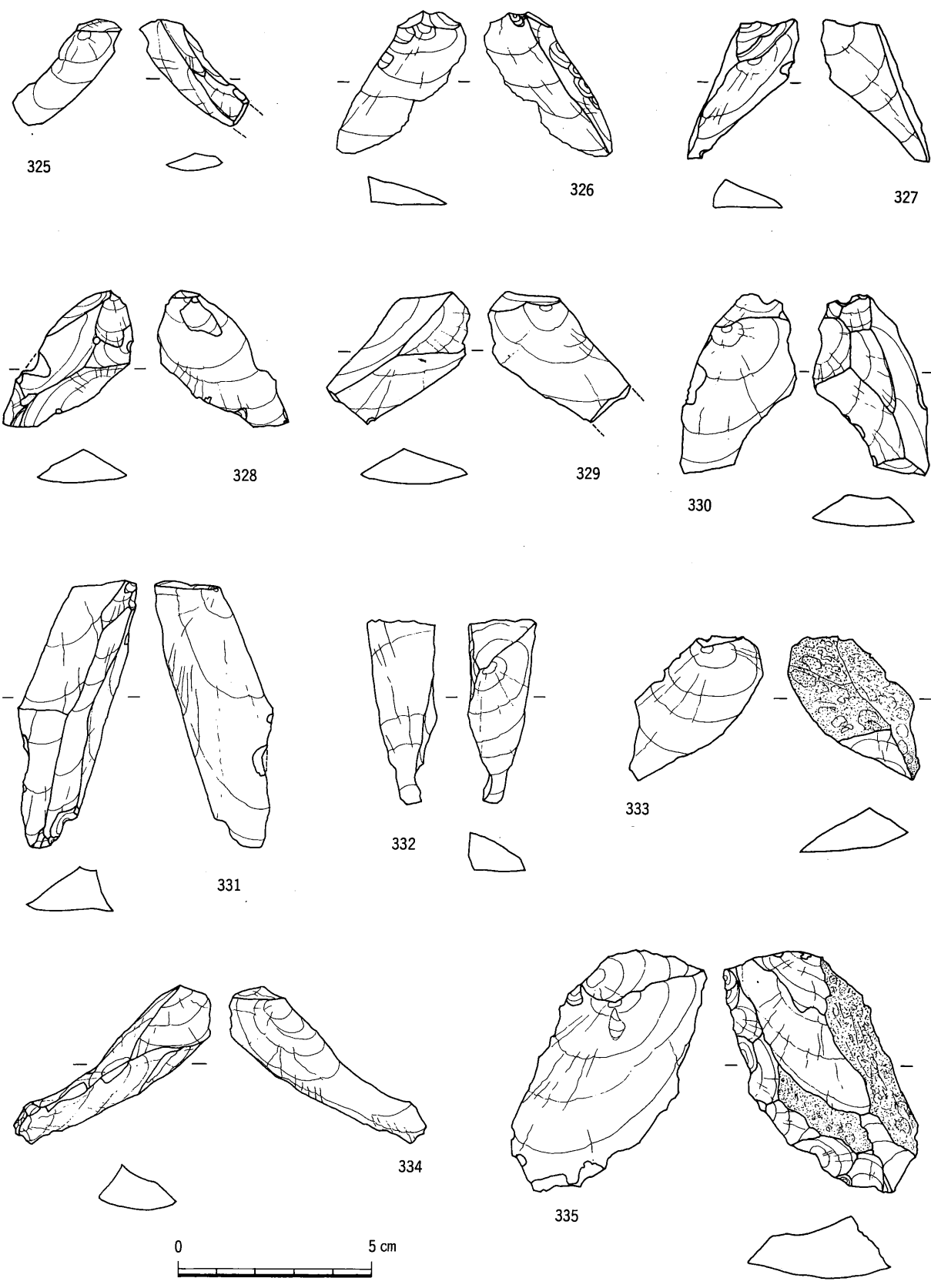
第 272 図 横長剥片実測図 (25)



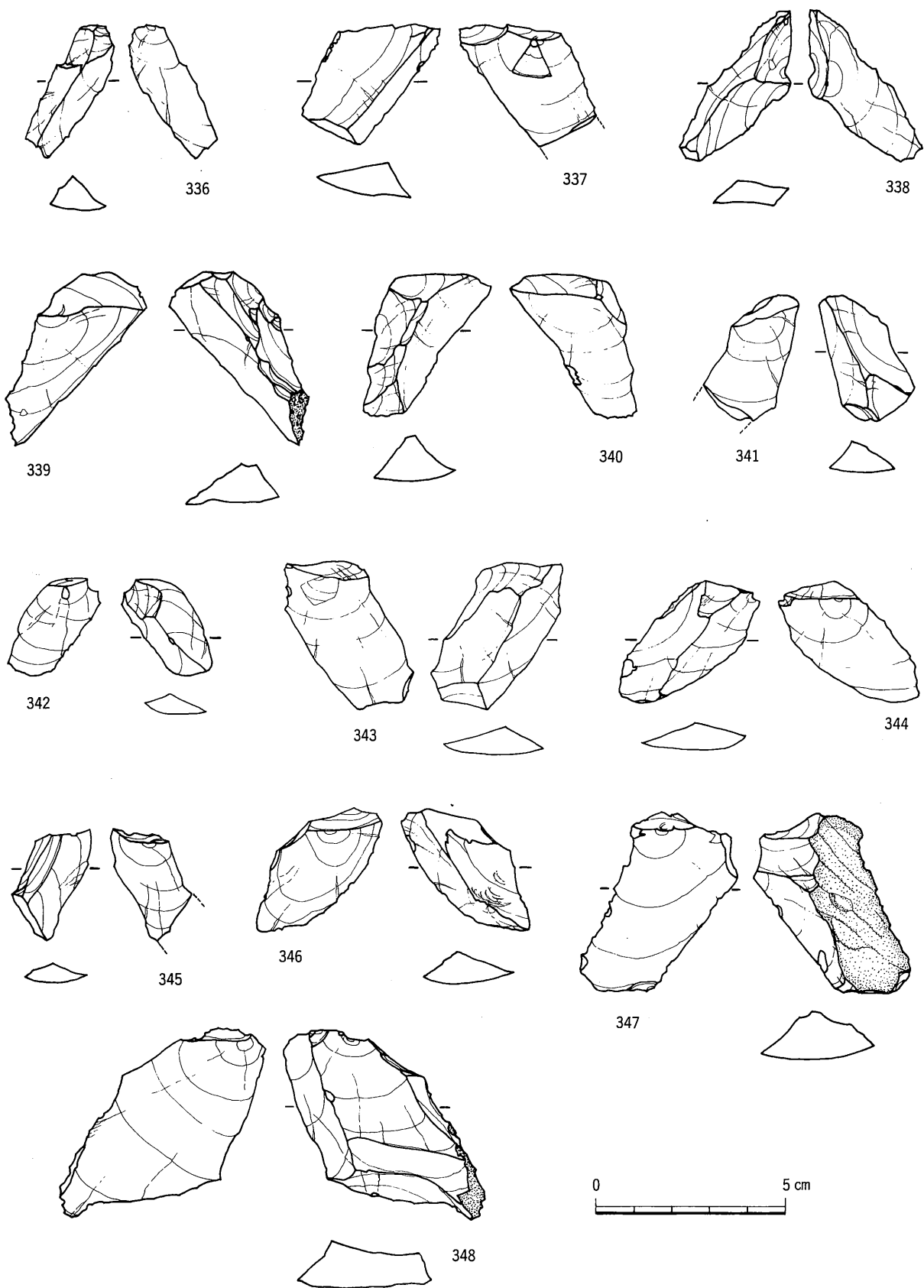
第 273 図 横長剥片実測図 (26)



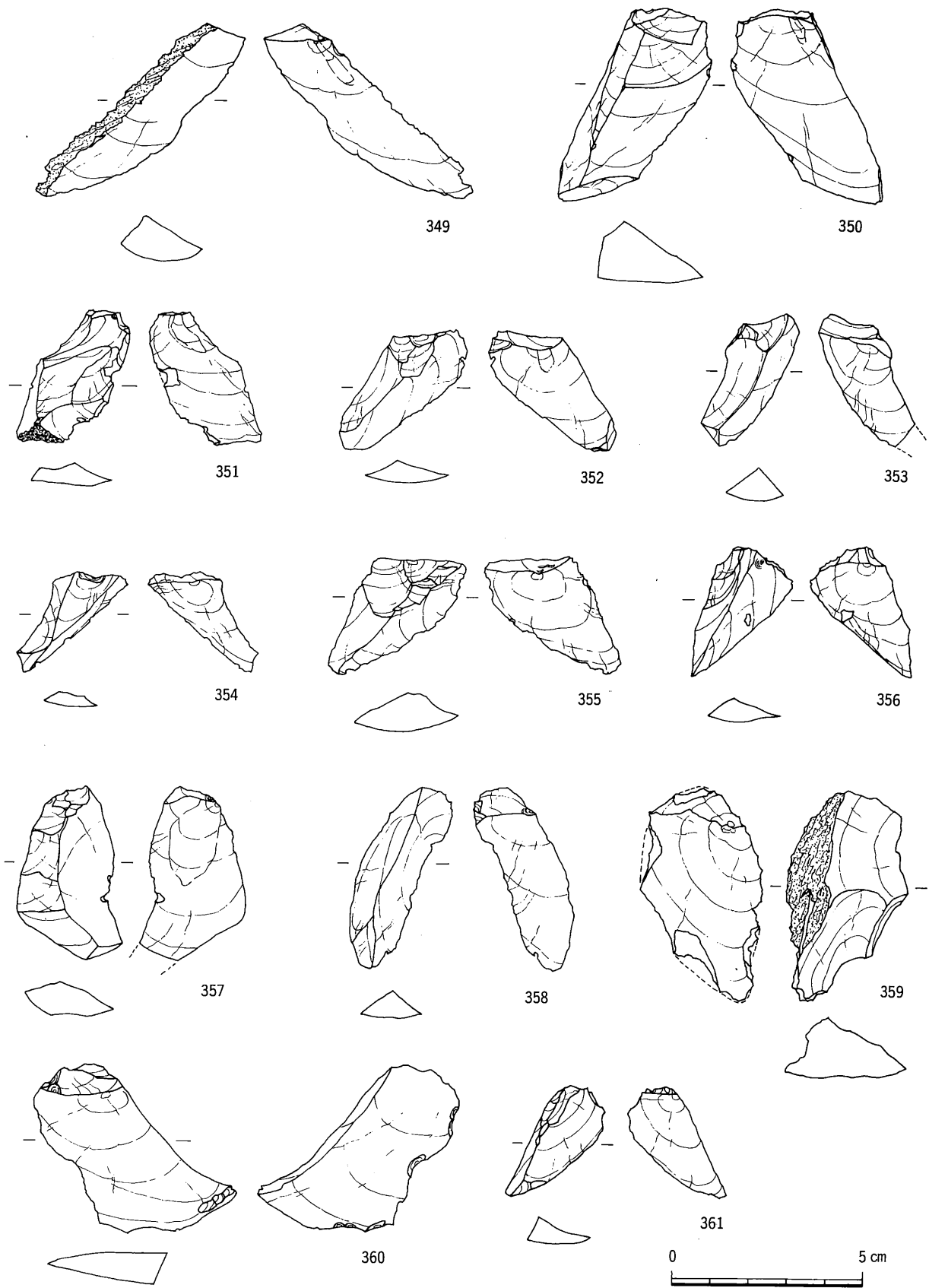
第 274 図 横長剥片実測図 (27)



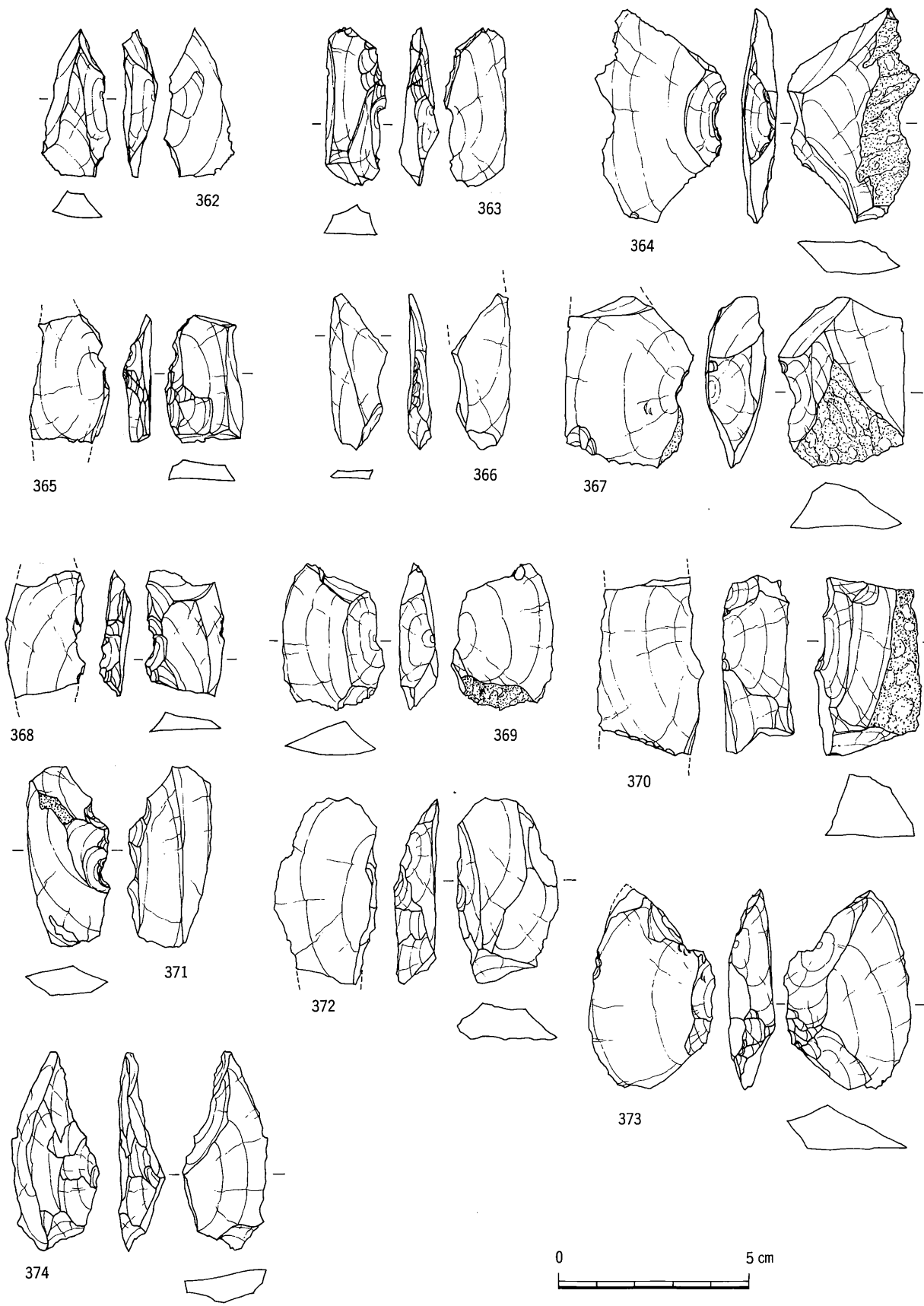
第 275 図 横長剝片実測図 (28)



第 276 図 横長剣片実測図 (29)



第 277 図 横長剥片実測図 (30)



第 278 図 横長剥片実測図 (31)

第280図2以下はサヌカイト製の縦長剥片石核である。2・3は分厚い剥片を剥離し、その主要剥離面を打面として1面ないし隣接する2面から縦長剥片を剥離している。両者とも打面を底面とする角錐形を呈するが、縦長剥片の剥離を全周で行う意図は元来なかったようである。打面調整は全く行われていない。

第281図9は、片面に打面調整、他面に横長剥片の剥離痕が認められるので、翼状剥片石核の転用であることがわかる。しかも、作業面とした小口面には折れ面も残されているので、翼状剥片石核が折れたため、打面を加撃して折れ面から縦長剥片を剥離したものと考えられる。ただ、縦長剥片の剥離は1回しか行われていないので、縦長剥片を量産するための石核であったとするには疑問が残る。

第280図4～第281図8・第281図10～第292図76は板状の素材を用いた縦長剥片石核である。羽佐島遺跡のみならず、瀬戸大橋建設に伴って発掘調査された各遺跡の縦長剥片石核は、ほとんどすべてをこの種の縦長剥片石核が占める。4～12は表面の風化が進んでいないが、13以下、特に22～76は表面の風化が顕著である。これまで観察されてきたように、この種の縦長剥片石核には、表面の風化が著しいものが多い。そして、この中には打点や剥離方向が明らかでないものが少なくないが、ここでは比較的明瞭なものを取りあげる。

板状の素材を用いた縦長剥片石核は、平坦な両側面を持ったサヌカイトの板状剥片をまず作製し、多くの場合、その短側面を打面として長側面から縦長剥片の剥離を行うものである。石核の側面は板状の素材の大きな剥離面をそのまま用い、原則として側面調整は施さない。板状の素材を用いることから作業面の幅が限定されるため、縦長剥片の剥離数は少なく、2枚程度のものが多い。したがって、剥離に伴う打撃点は、左右へあまり移動することなく後退している。打面調整を施されたものは少なく(4・10・27・34・72)、一般には施されなかったようである。

縦長剥片の剥離は一方の側面でのみ行っているものが最も多いが、打面を共有して両側面から剥離を行うものや、打面を異にして複数の側面から剥離を行うものも多い。複数の作業面を持つ石核は全体の半数程度にのぼるのではないかと思われる。このように打面転移、あるいは作業面移動の例の多いことは、板状の素材を用いるために複数の打面が設定しやすいことと共に、打面転移や作業面移動が行われても縦長剥片剥離の条件がほぼ一定であったことによるものと思われる。

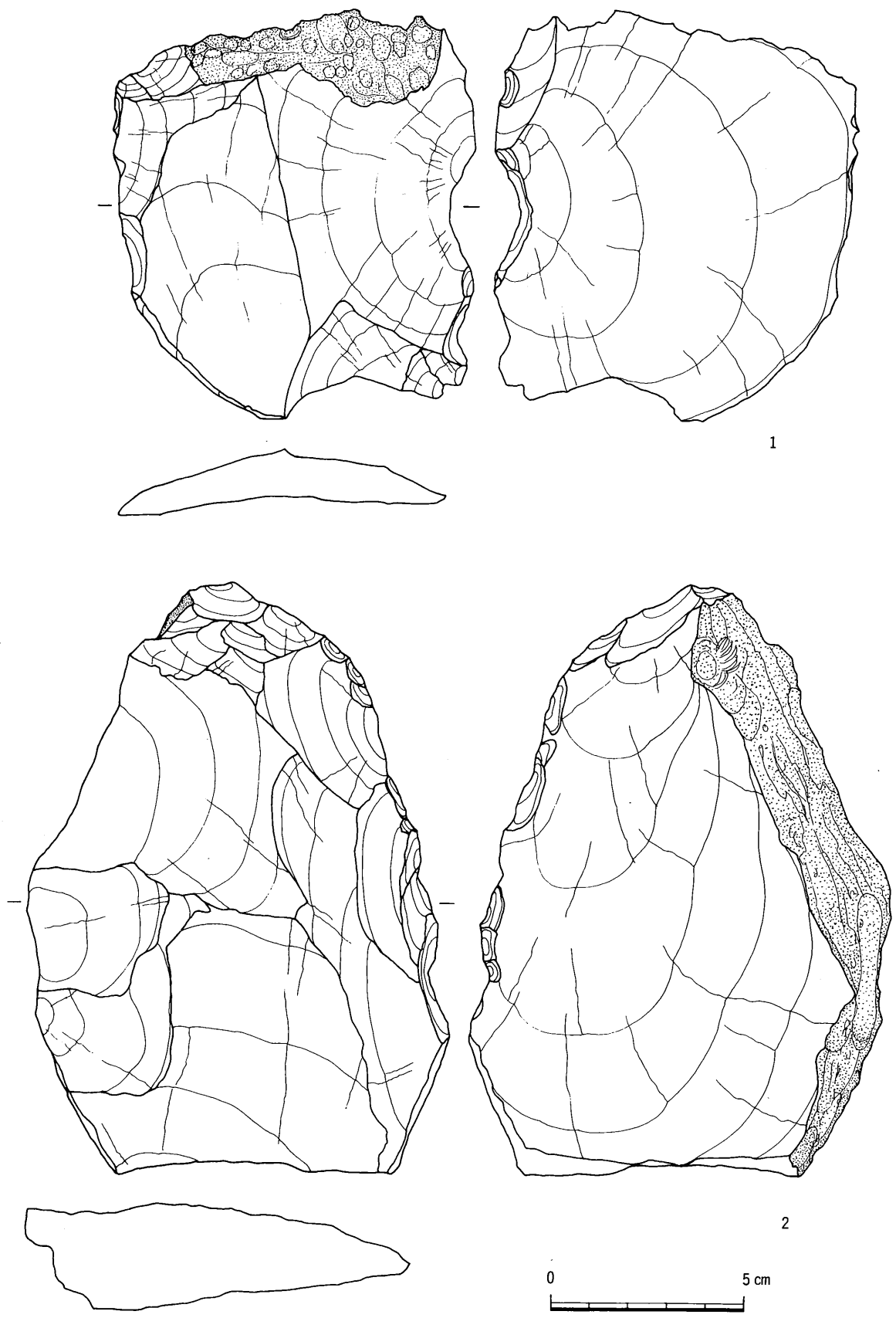
羽佐島遺跡のこの種の縦長剥片石核は、佐藤氏の観察のとおり、^註流状構造を示す石理に沿って加撃して、板状に剥離した素材を用いている。したがって、側面から縦長剥片を得ようとするれば、どの面であれ石理に対して直交して剥離することになる。そのため、縦長剥片の剥離条件に大きな差がないために、複数の作業面から剥離が行われやすかったのであろう。ただ、実際の縦長剥片石核でみると、作業面の移動は全く無秩序に行われたものではなく、対応する両側面から縦長剥片を剥離した例が主体を占め、直交する側面から剥離する例は多くない。

一方、流状構造の顕著なサヌカイトは坂出市金山周辺で産出することが知られており、この種の縦長剥片石核はそうしたサヌカイトの石質に規制されながらも、これを十分に利用した技法であったと考えられる。

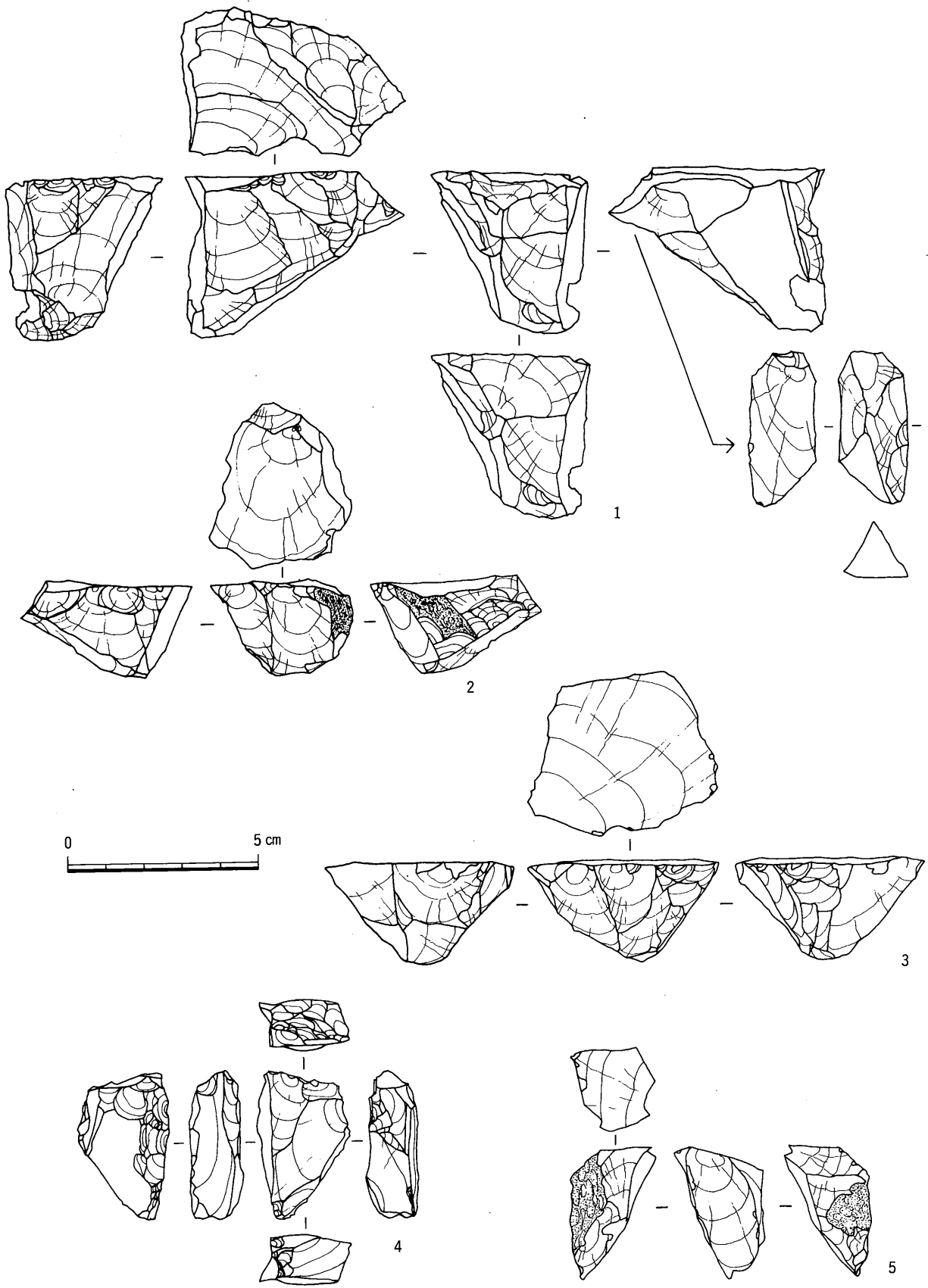
なお、第292図77・第293図78は縦長剥片石核の素材の可能性が強いと思われるサヌカイトの剥片である。

註

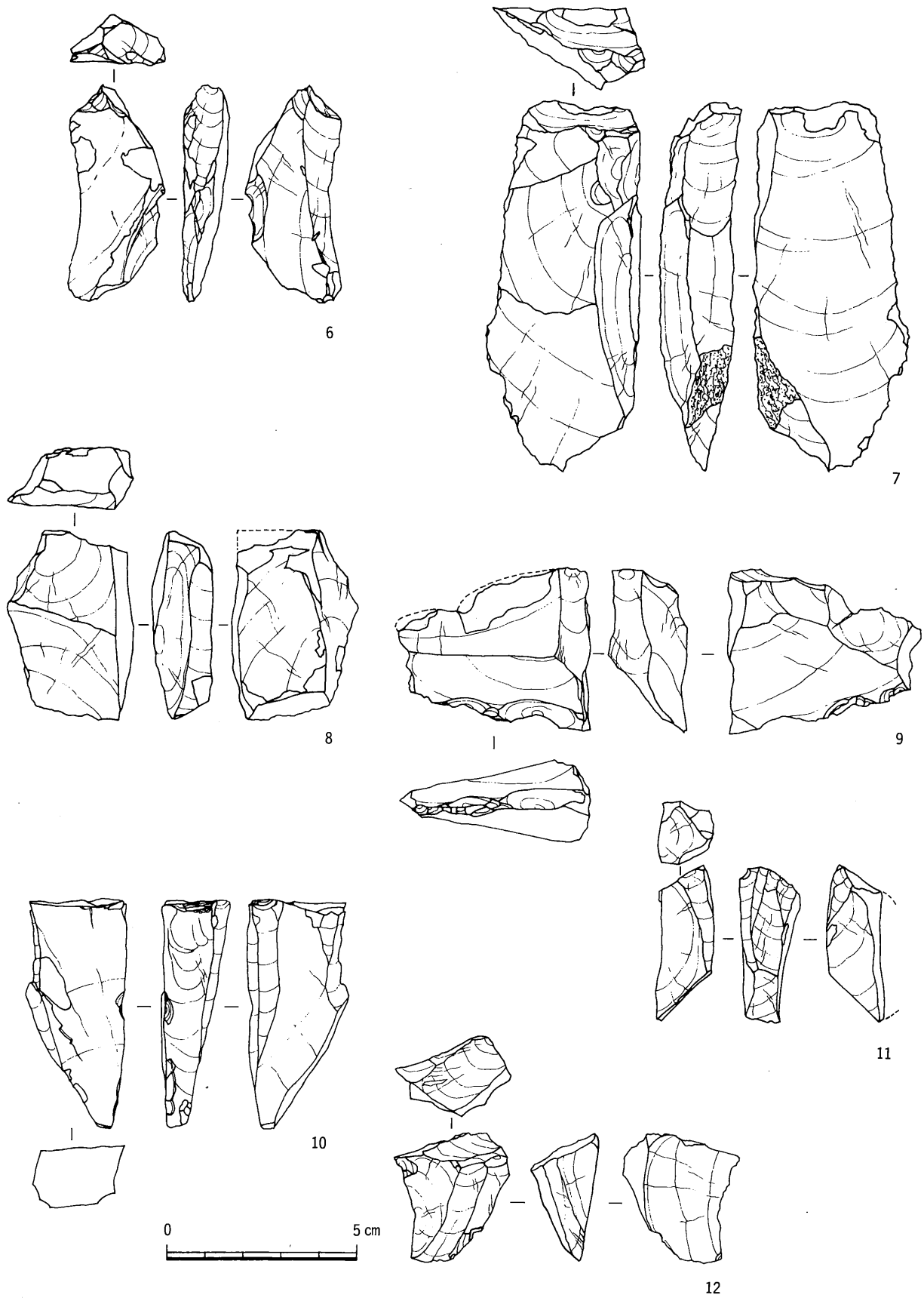
佐藤良二「備讃瀬戸地域の旧石器文化に関する二・三の問題」『旧石器考古学』24 1982 旧石器文化談話会



第 279 図 大形剝片実測図



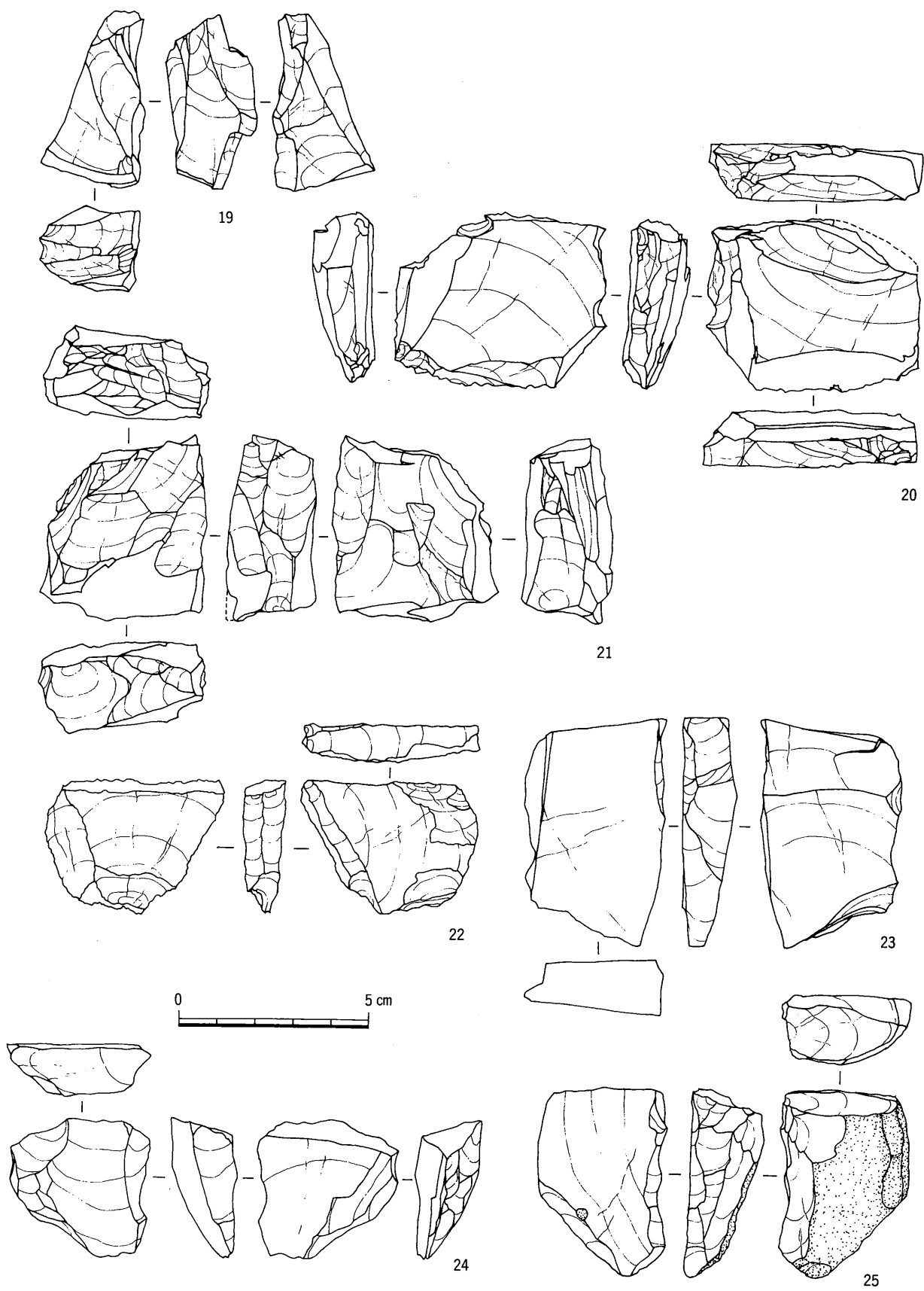
第 280 図 縦長剝片石核実測図 (1)



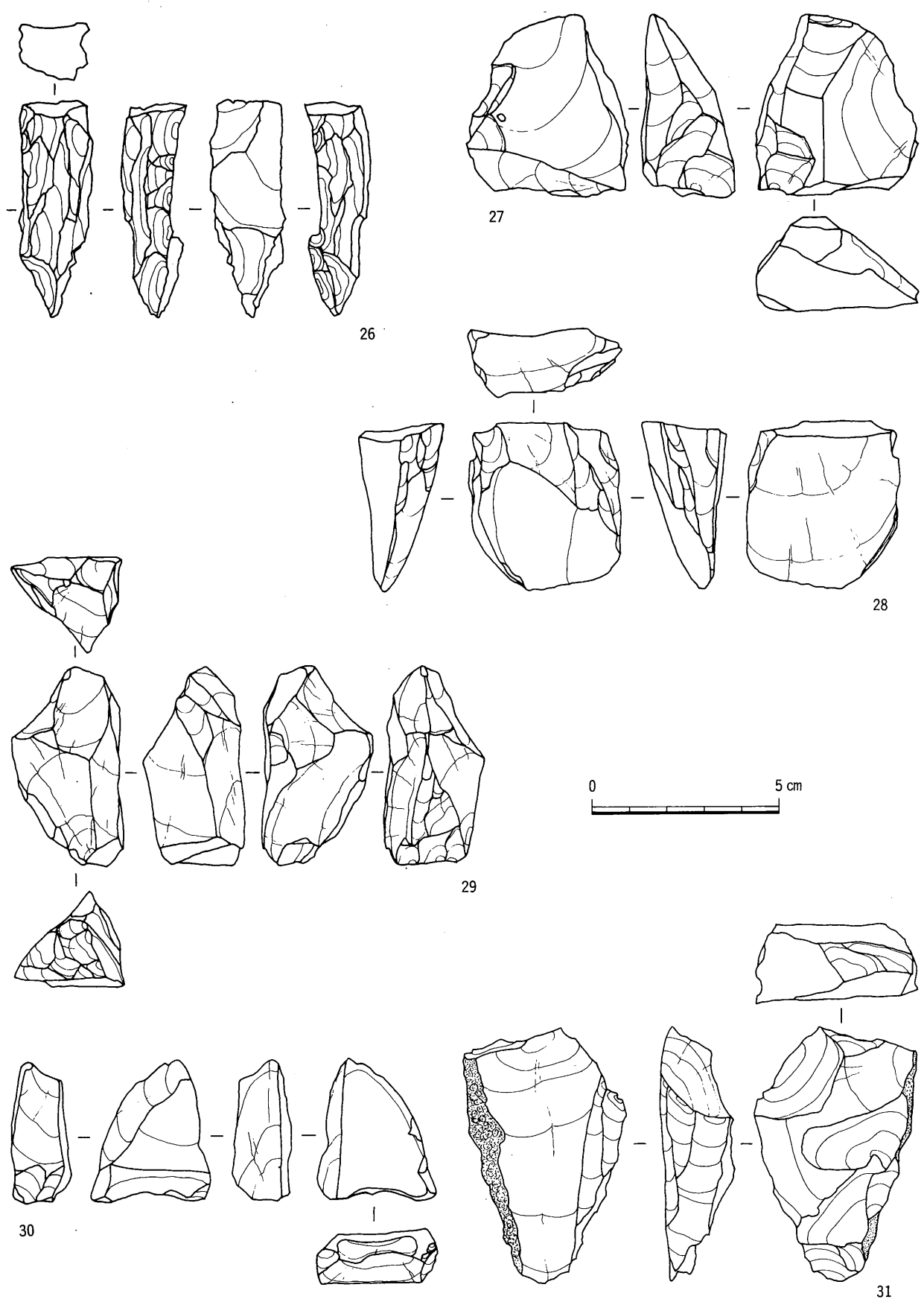
第 281 図 縦長剥片石核実測図 (2)



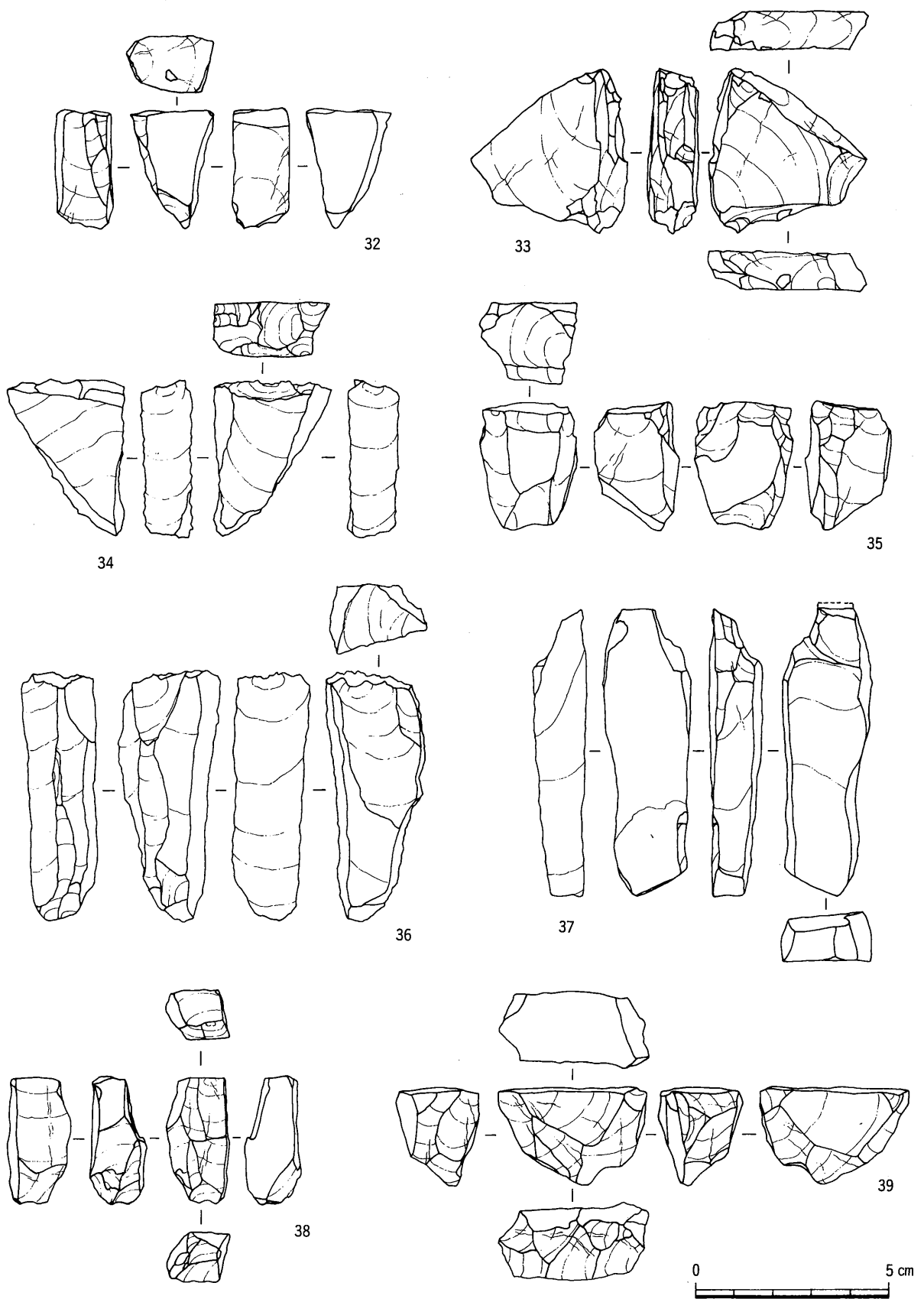
第 282 図 縦長剥片石核実測図 (3)



第 283 図 縦長剝片石核実測図 (4)



第 284 図 縦長剥片石核実測図 (5)



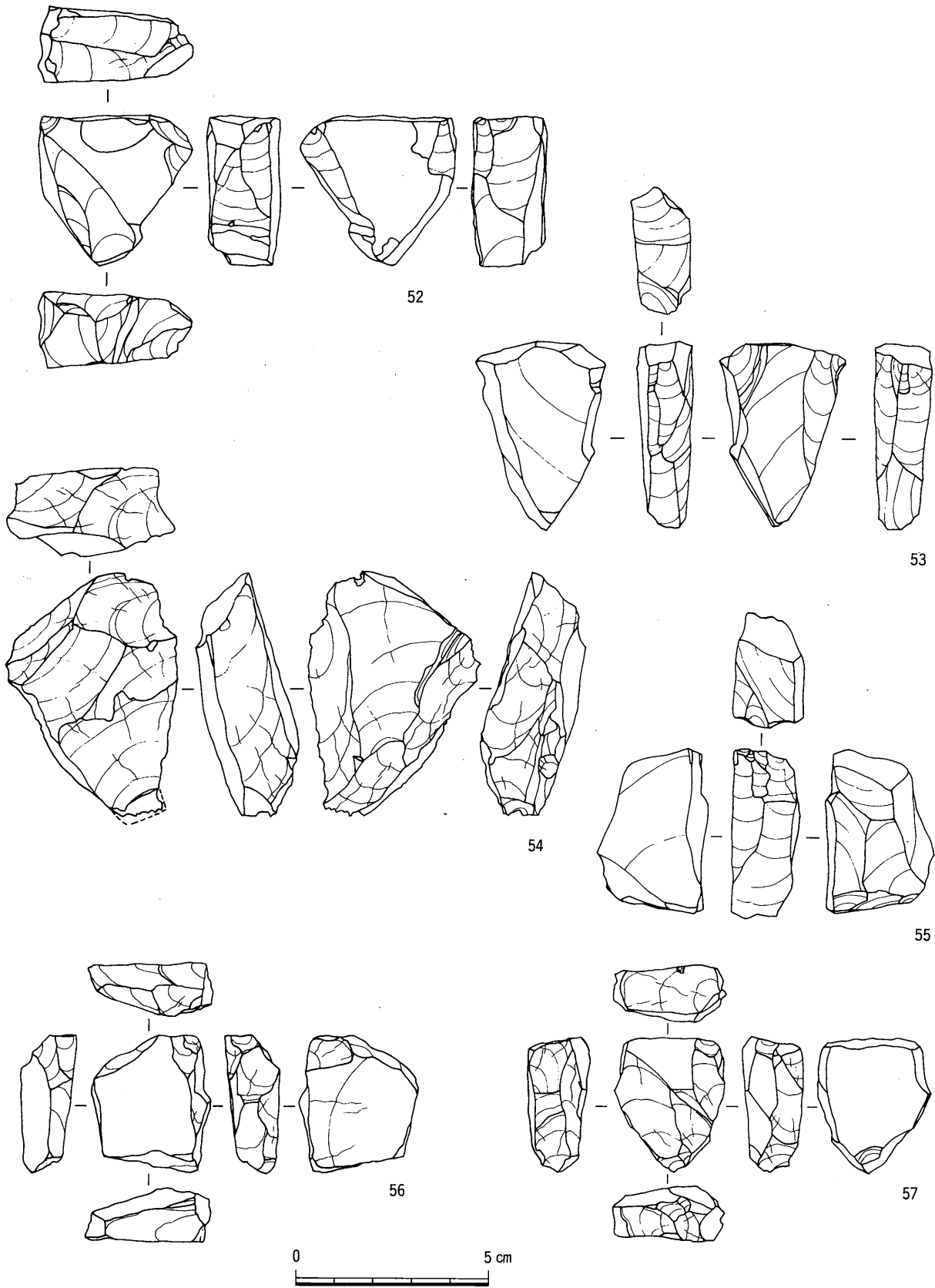
第 285 図 縦長剥片石核実測図 (6)



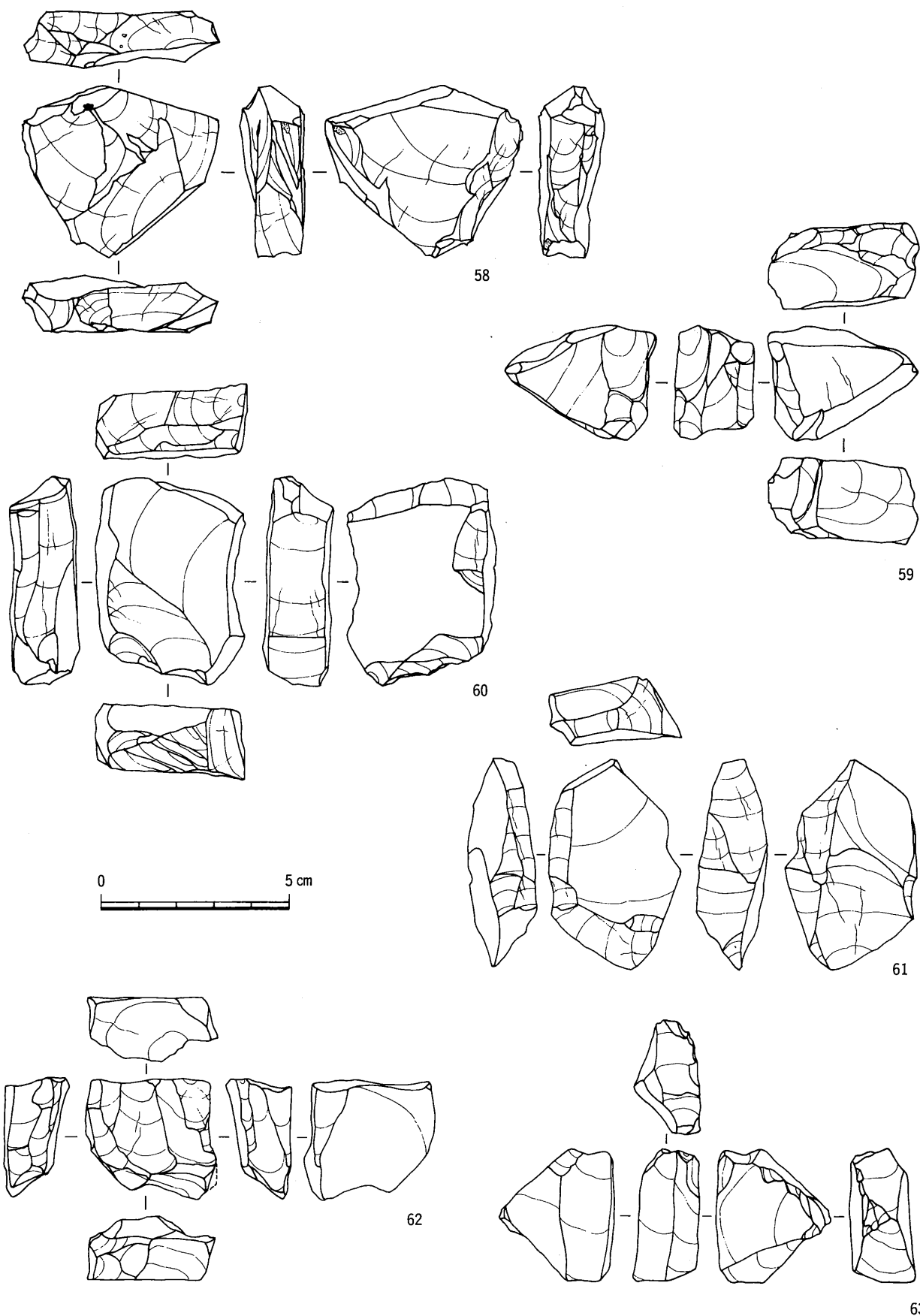
第 286 図 縦長剣片石核実測図 (7)



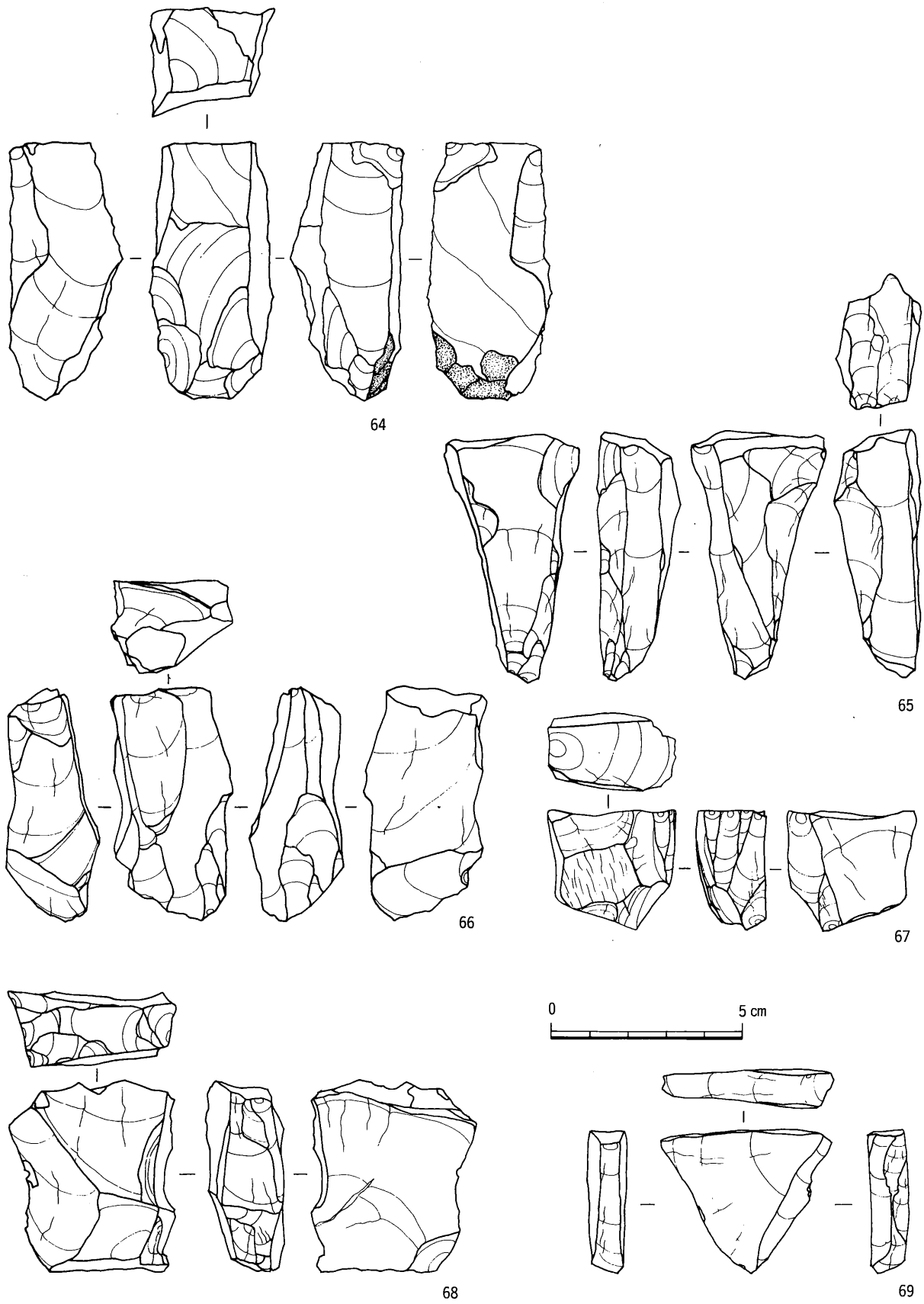
第 287 図 縦長剝片石核実測図 (8)



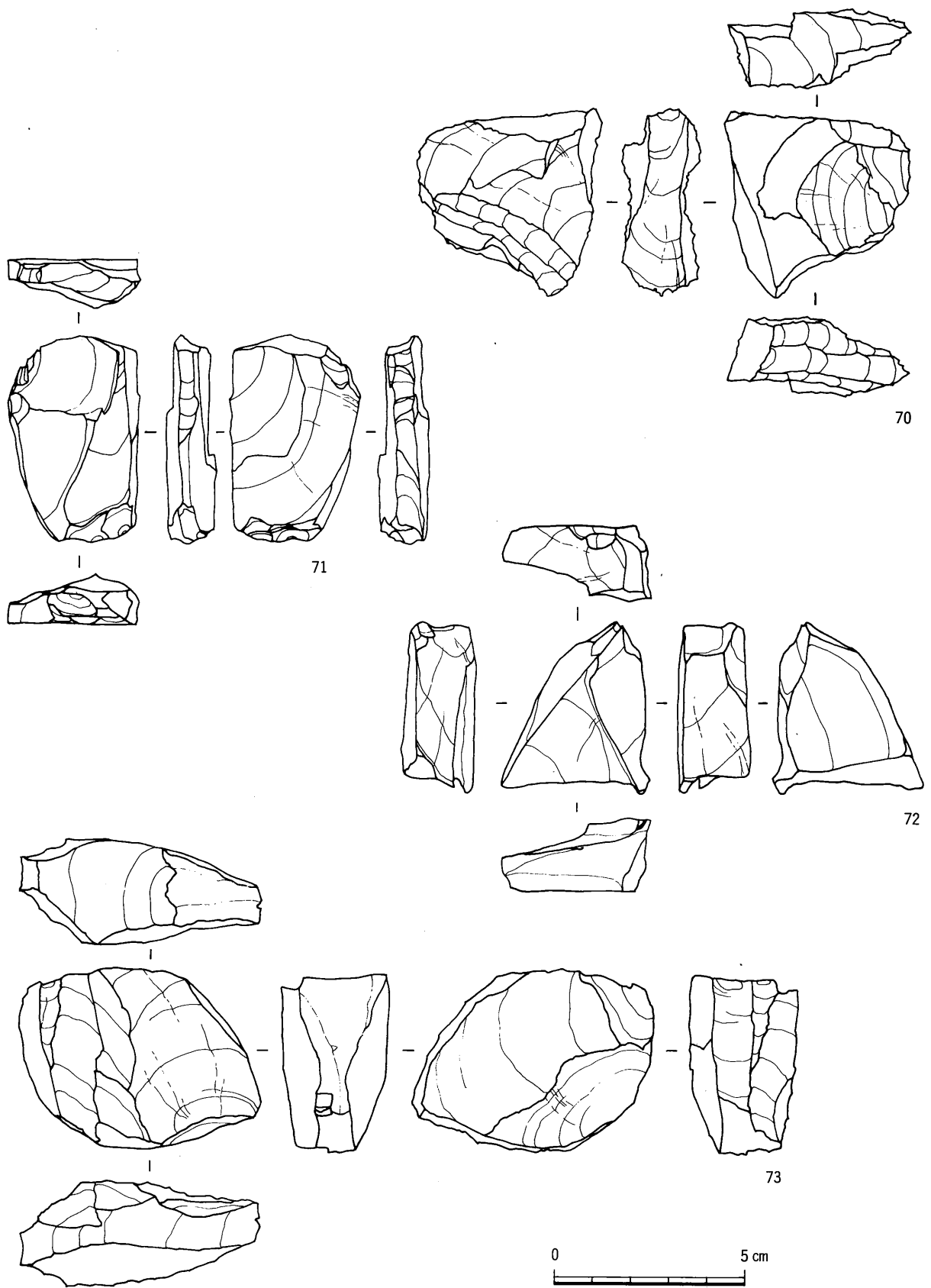
第 288 図 縦長剣片石核実測図 (9)



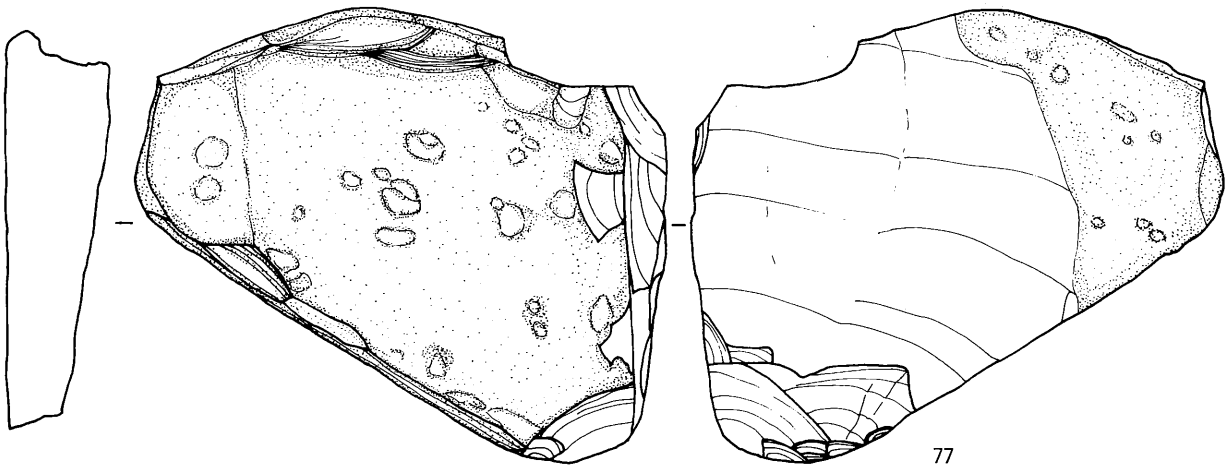
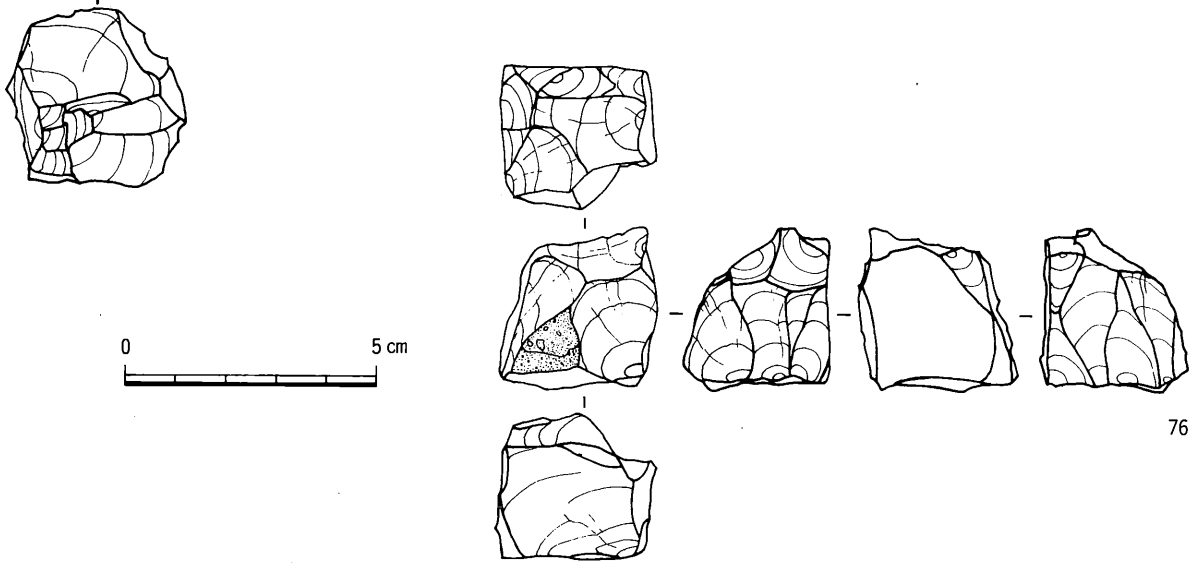
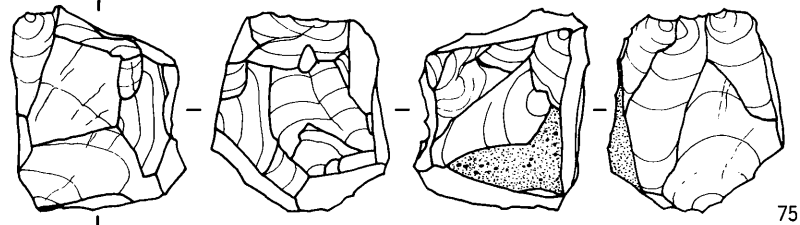
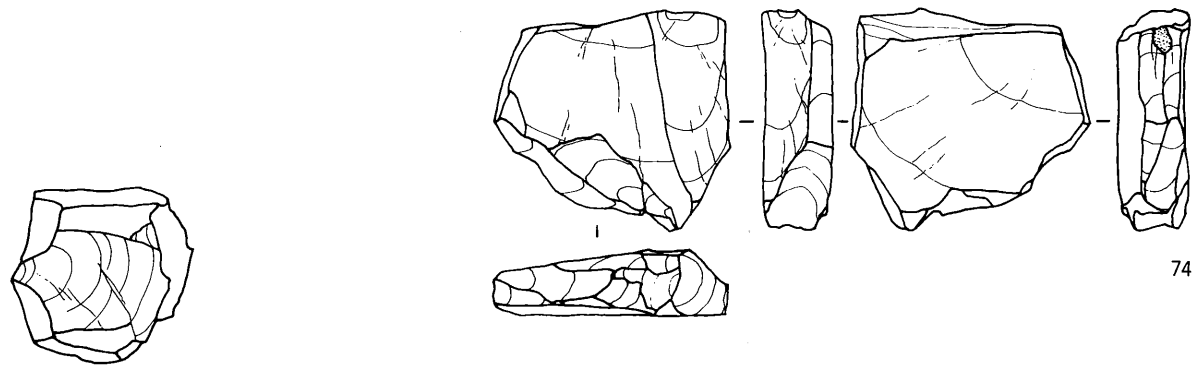
第 289 図 縦長剝片石核実測図 (10)



第 290 図 縦長剥片石核実測図 (11)



第 291 図 縦長剝片石核実測図 (12)



第 292 図 縦長剝片石核実測図 (13)

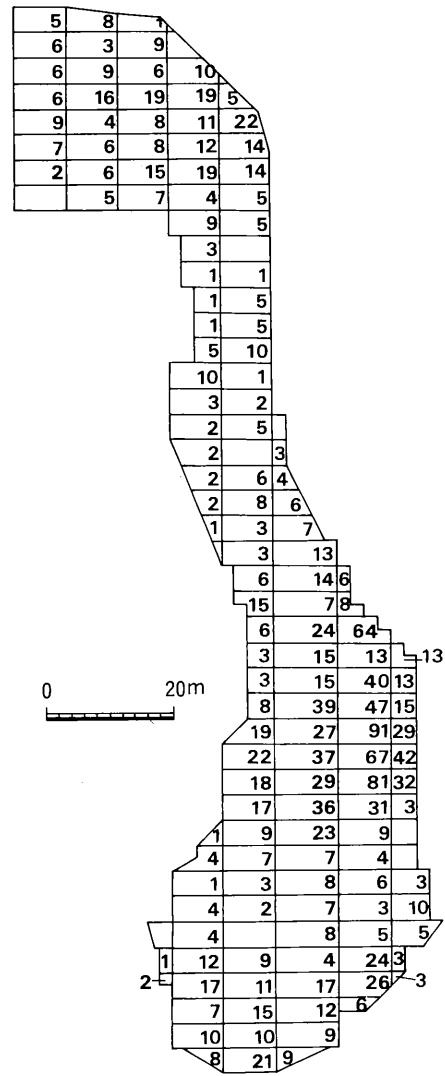


第 293 図 縦長剝片石核実測図 (14)

15. 縦長剥片 (第294図～第312図)

1,759点出土した。縦長剥片が多かったのは調査地区南部の北側で、C14-1から91点、C12-1から81点が出土し、両グリッドを中心として一部A地区にまたがる範囲に集中している。さらに、規模はやや小さいが、B18・C18-1やC4-1・C5-1でも集中が認められる。このほか、調査地区北部(A36-2・A38-1・A39-1・A39-2など)や、調査地区南端(A1-1・A4-2・B4など)でもやや多いものの、顕著な集中といえるほどの出土はみられなかった(第35表)。

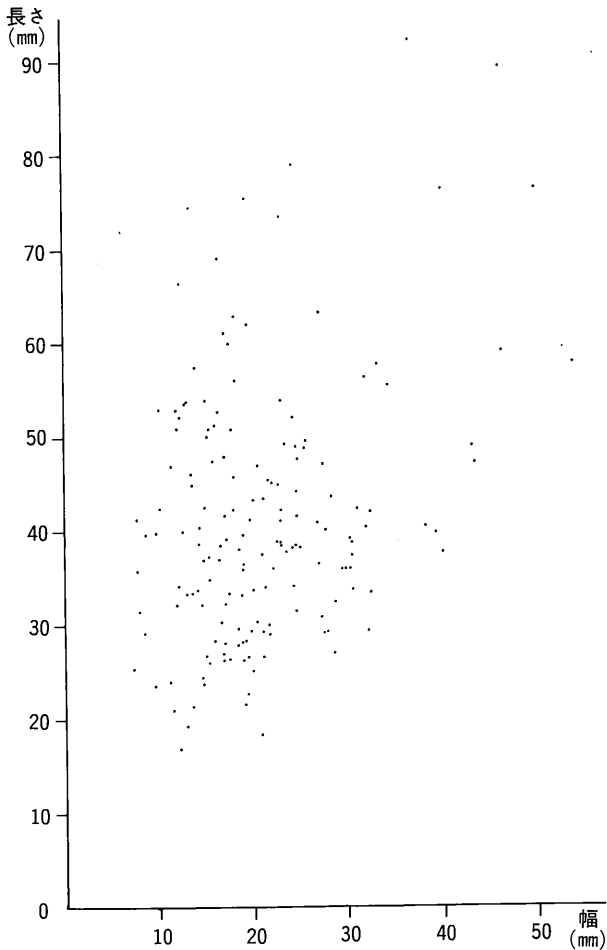
以上の縦長剥片の出土傾向は、C4-1・C5-1を除くと、縦長剥片石核のそれとほぼ一致する。また、縦長剥片と縦長剥片石核が最も集中する地点は、規模が小さくなるものの尖頭器や細石刃の出土が最も集中する地点でもある。一方、この地点には横長剥片石核やナイフ形石器も集中する傾向が認められるが、横長剥片石核とナイフ形石器の主要な集中は調査区北部であり、縦長剥片と縦長剥片石核の分布(第34表)とは大きな差が認められる。



第 35 表 縦長剥片出土分布表

羽佐島遺跡から出土した縦長剥片にはサヌカイト(1~246)のほか、玻璃質安山岩(247~257)・流紋岩(258~262)・黒曜石(263~270)などが少数ある。これらはサヌカイト製縦長剥片に比べて小形であり、また、断面が角柱状をなす狭長なものはみられない。サヌカイト製縦長剥片として図示した中では、152~246が表面の風化が著しい。

縦長剥片には長さ2cm以下のものから9cmを越えるものがあるが、長さ2~6cm、幅1~3cm程度のものが多い。長幅比はほぼ1:1から6:1までであり、狭長なものも少な



第 36 表 縦長剥片の長幅比

くない(第36表)。

ところで、1～95は背面に縦長剥片の剥離痕を持たなかったり、縦長剥片の剥離痕を持つ場合でも、剥離が非常に小さかったり打面を共有していなかったりするもので、これらの多くは縦長剥片石核から連続して剥離したものではない可能性が強いと思われる。

したがって、羽佐島遺跡の縦長剥片の主流は96～246であるが、これは1～95より狭長化の傾向を示す。また、比較的厚いものも多く、それらには断面が四角形をして側縁に鋭い刃部を持たず、側面には石核の側面を残すものが多い。これらが板状の縦長剥片石核から剥離されたことを明瞭に示しているものといえよう。

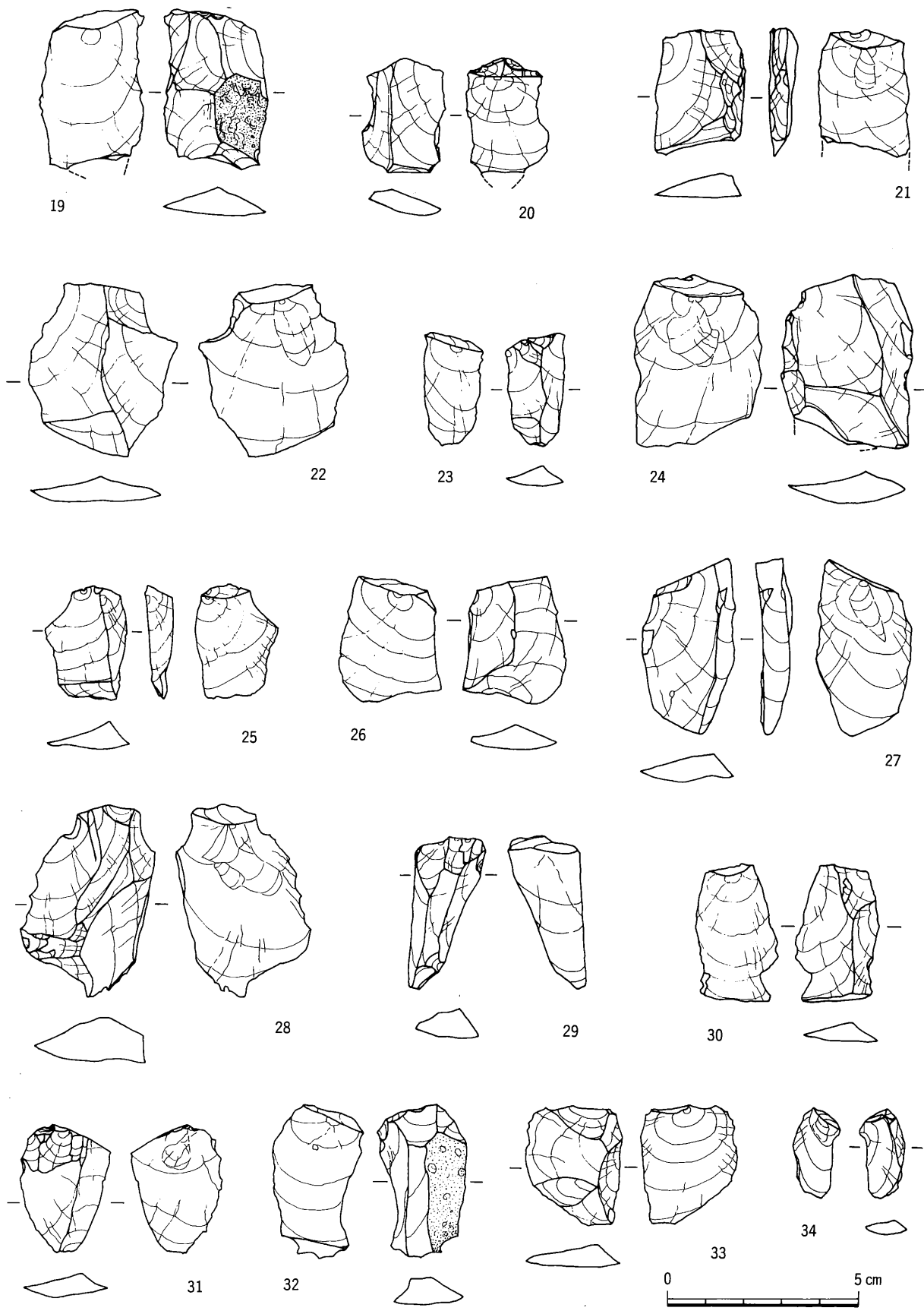
152～157・169・182・236などは剥離作業初期に生産された縦長剥片であると考えられるが、これからみると、縦長剥片石核の作業面は自然面をそのまま用いたもの(152・153・156・182・236)が最も多いようである。ほかに、主に一方の側面から簡単な調整を施したもの(155・169)、上下方向から調整を施したもの(157)もある。

一方、縦長剥片の出土の多さにもかかわらず、羽佐島遺跡ではこうした縦長剥片を用いた石器の出土はきわめて少なかった。羽佐島遺跡では縦長剥片を用いたナイフ形石器の出土は多くないが、その中でも背面に縦長剥片の剥離痕を持つもの、つまり、連続して剥離されたサヌカイトの縦長剥片を利用したものはきわめて少ない。ナイフ形石器としたもののうちほぼ完形品でみる限り、10点を越えることはないであろう。もっとも、縦長剥片として図示した中で、65・91・105・115・130・240・246は先端部付近にわずかな調整を持ち、その中でも主要剥離面側から施された調整を持つもの(91・105・115・130・240)は縦長剥片を素材としたナイフ形石器としなければならないのでここで訂正しておくが、これを加えてもなおこの種の縦長剥片を利用したことのわかる石器は多くない。また、縦長剥片の側縁に使用による細かな剥離が観察されることもほとんどない。

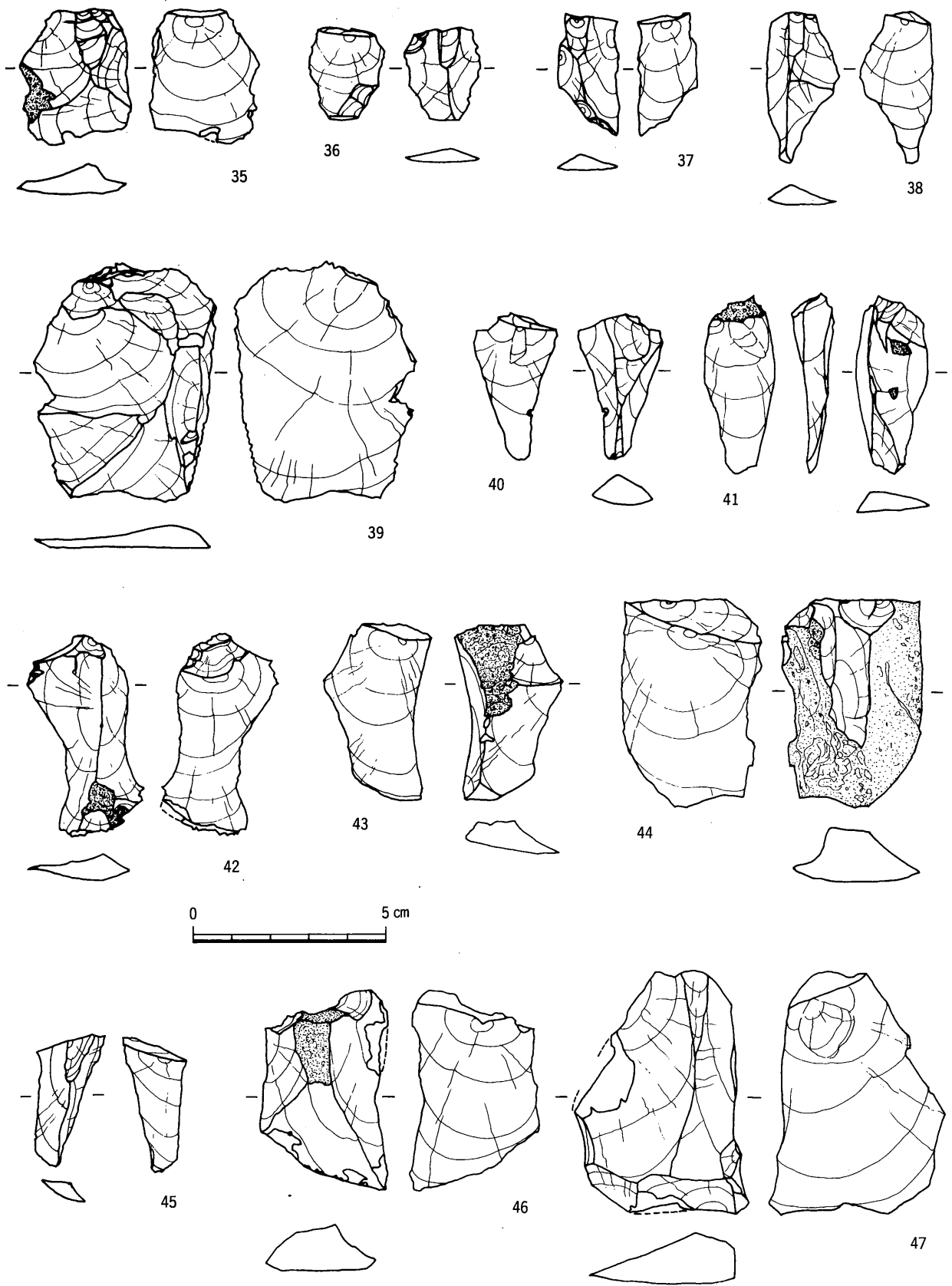
したがって、現在のところ、少数のナイフ形石器を除くと、羽佐島遺跡でこの種の縦長剥片の多くがどのように用いられたのかは不明な部分が大きいとしなければならない。



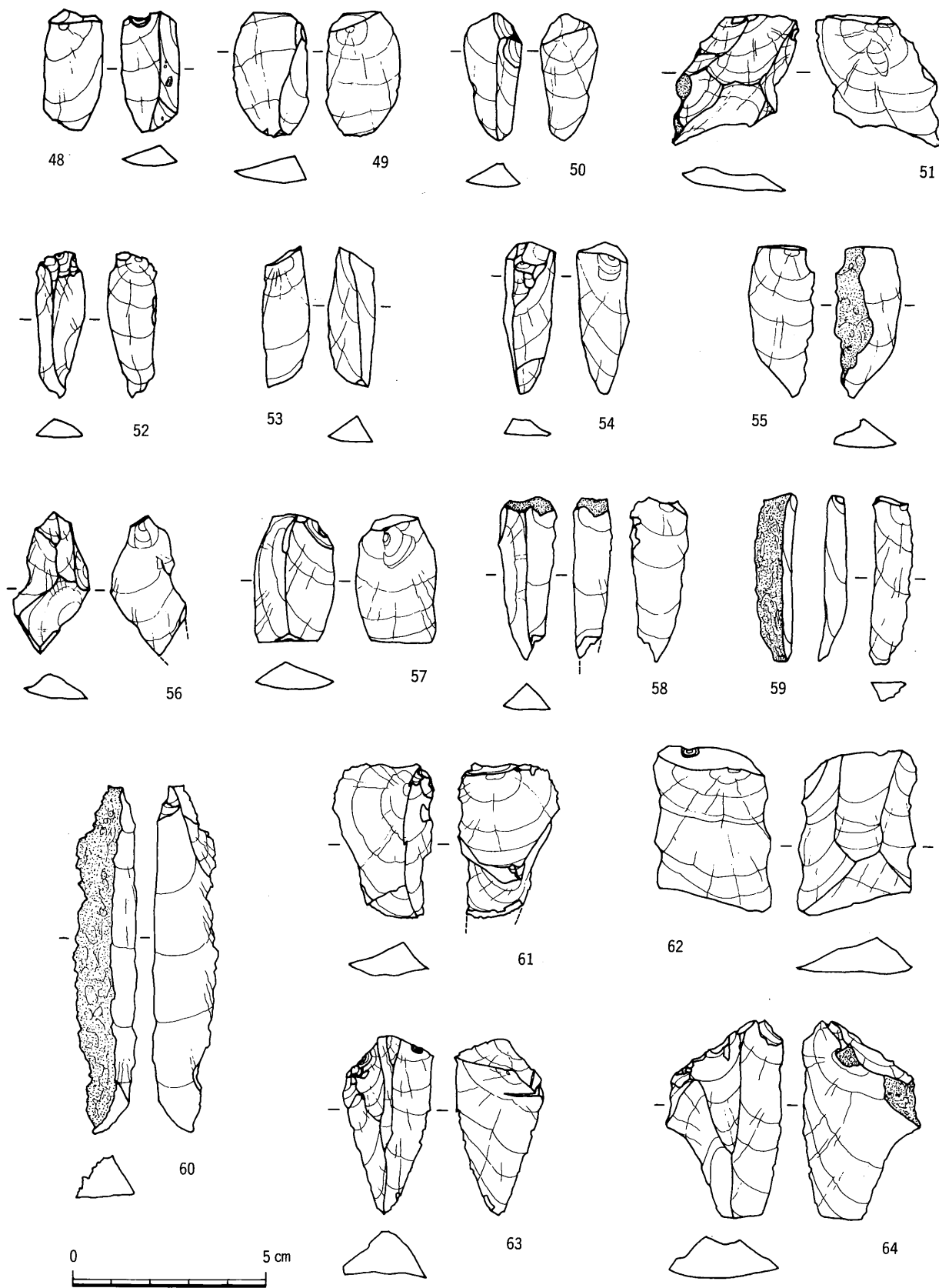
第 294 図 縦長剝片実測図 (1)



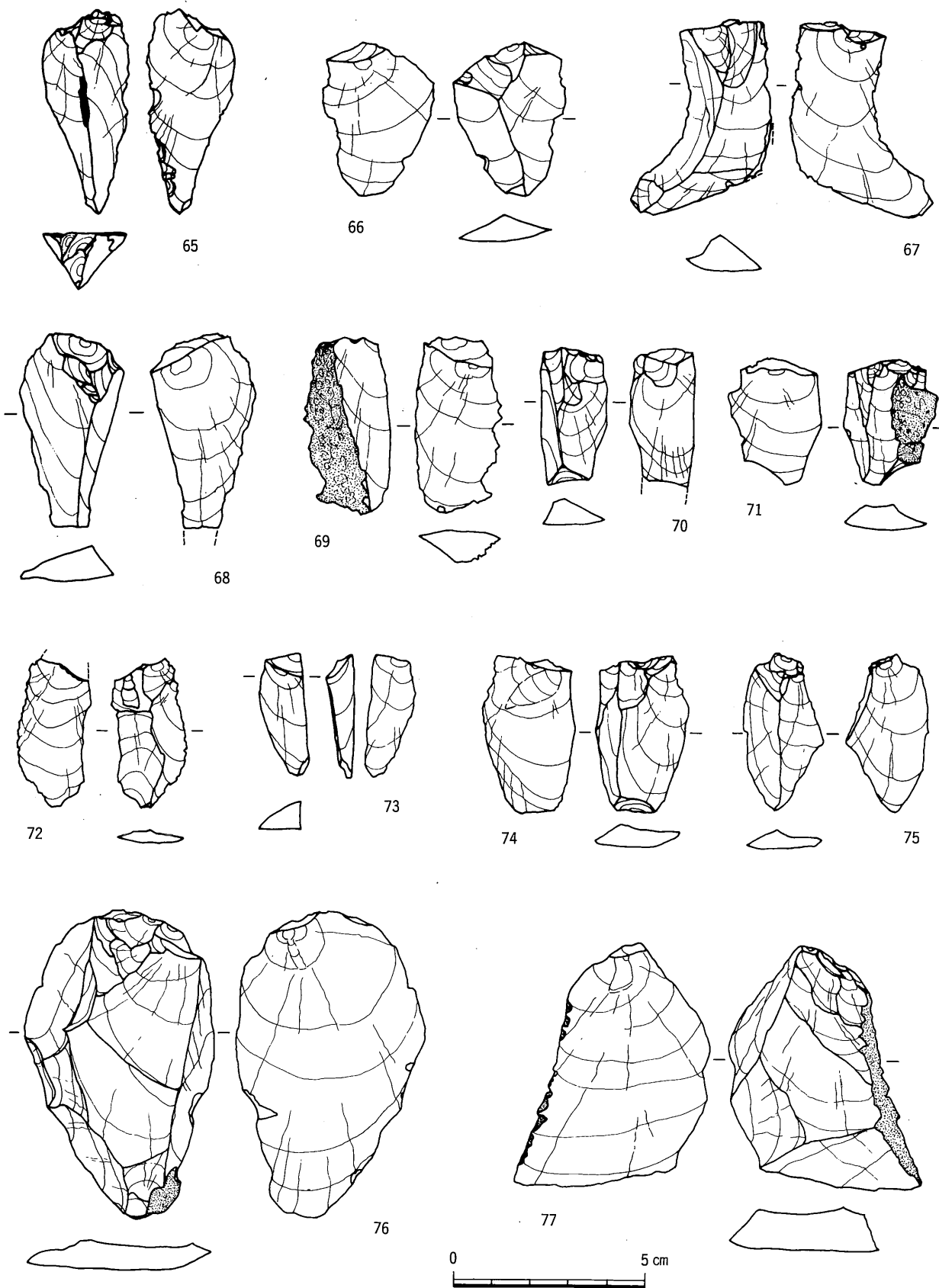
第 295 図 縦長剥片実測図 (2)



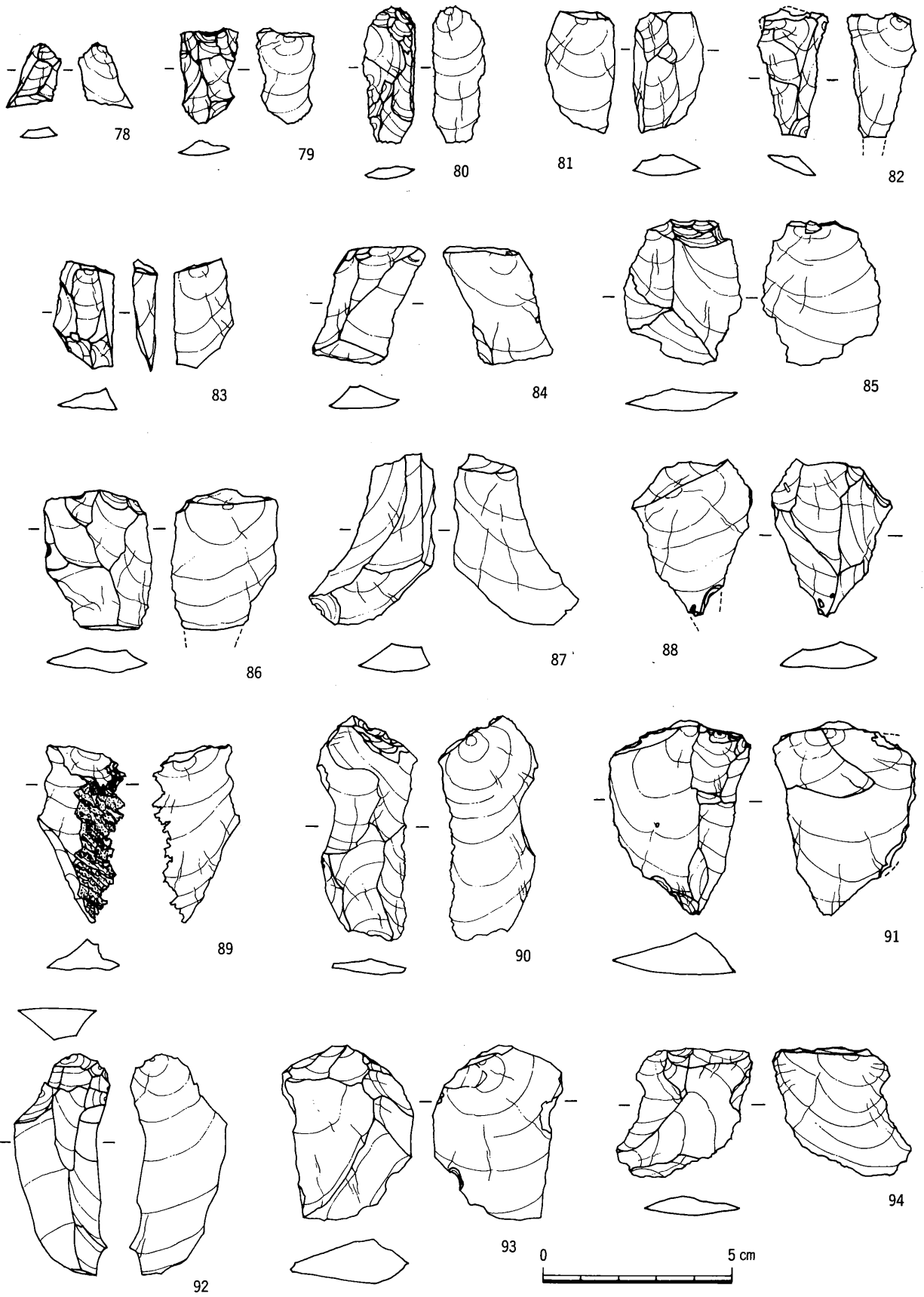
第 296 図 縦長剝片実測図 (3)



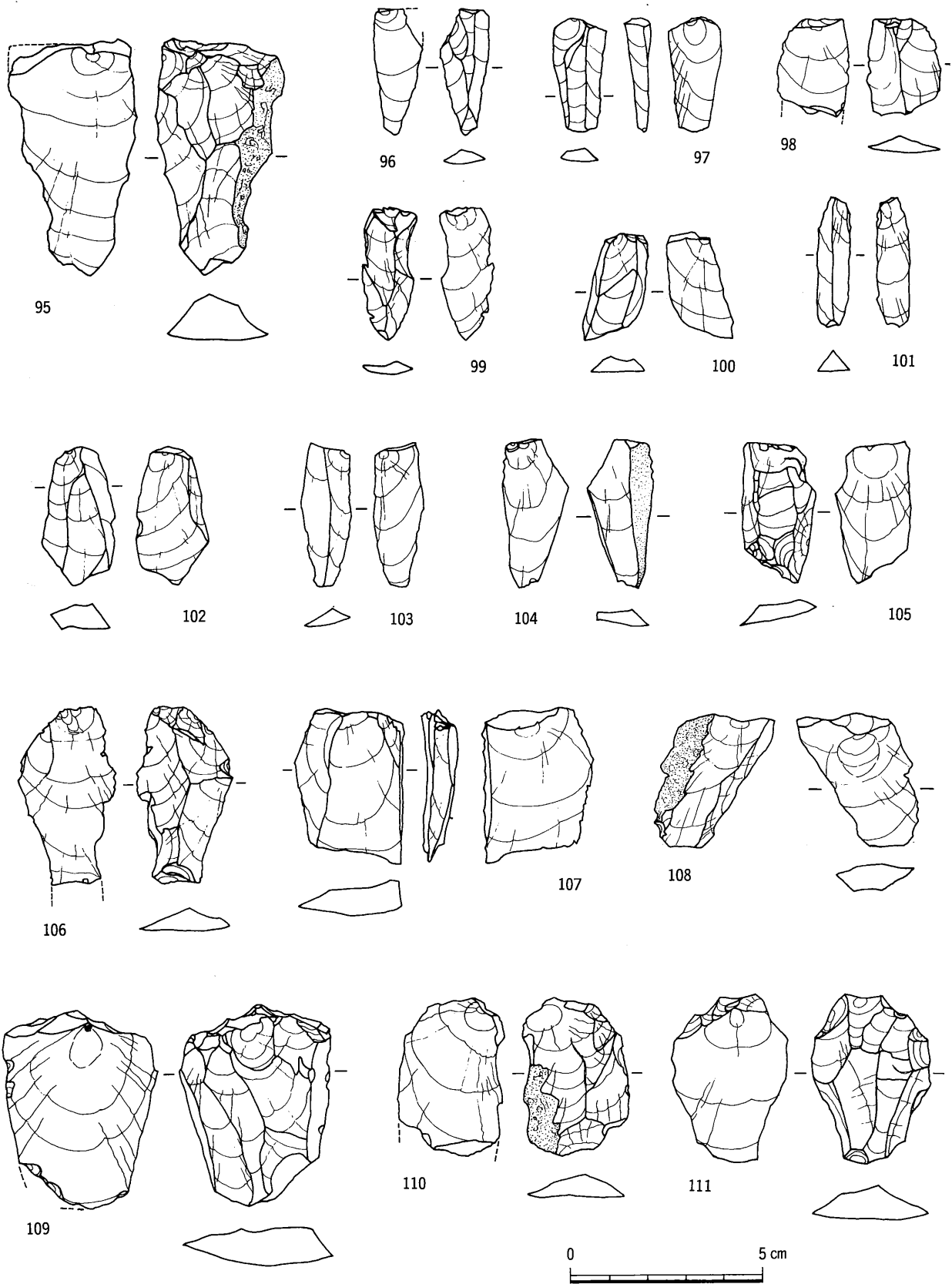
第 297 図 縦長剝片実測図 (4)



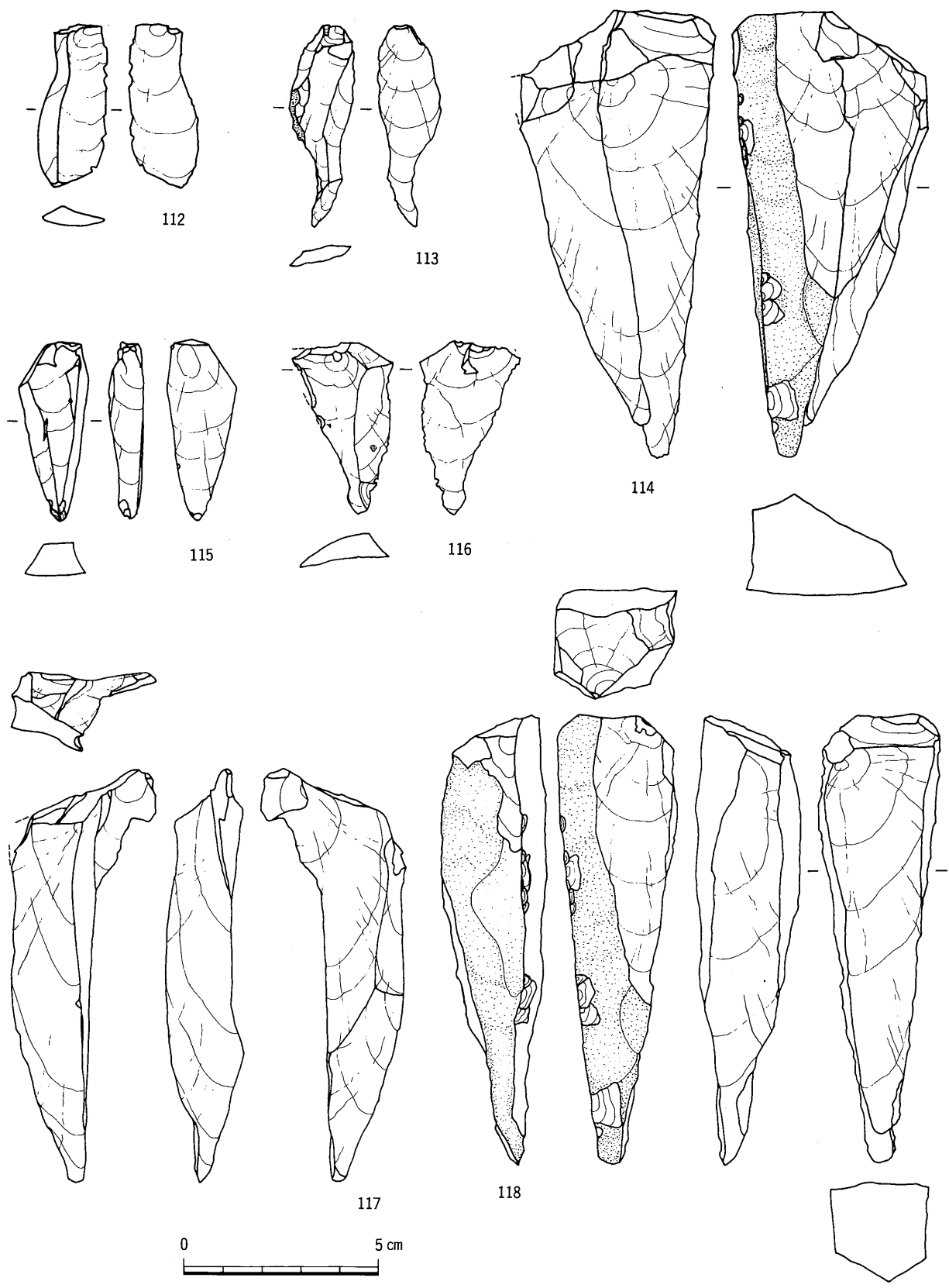
第 298 図 縦長剥片実測図 (5)



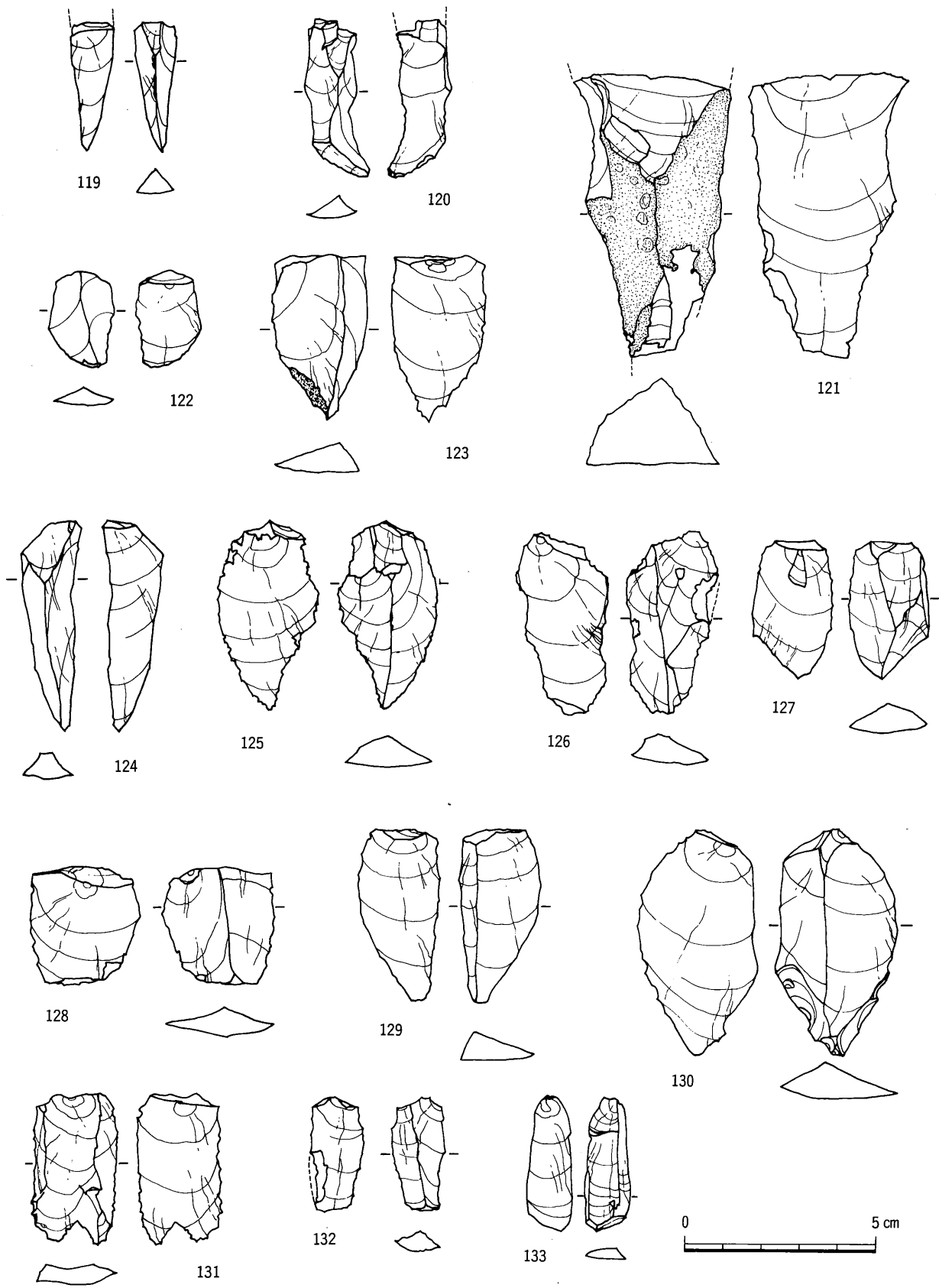
第 299 図 縦長剥片実測図 (6)



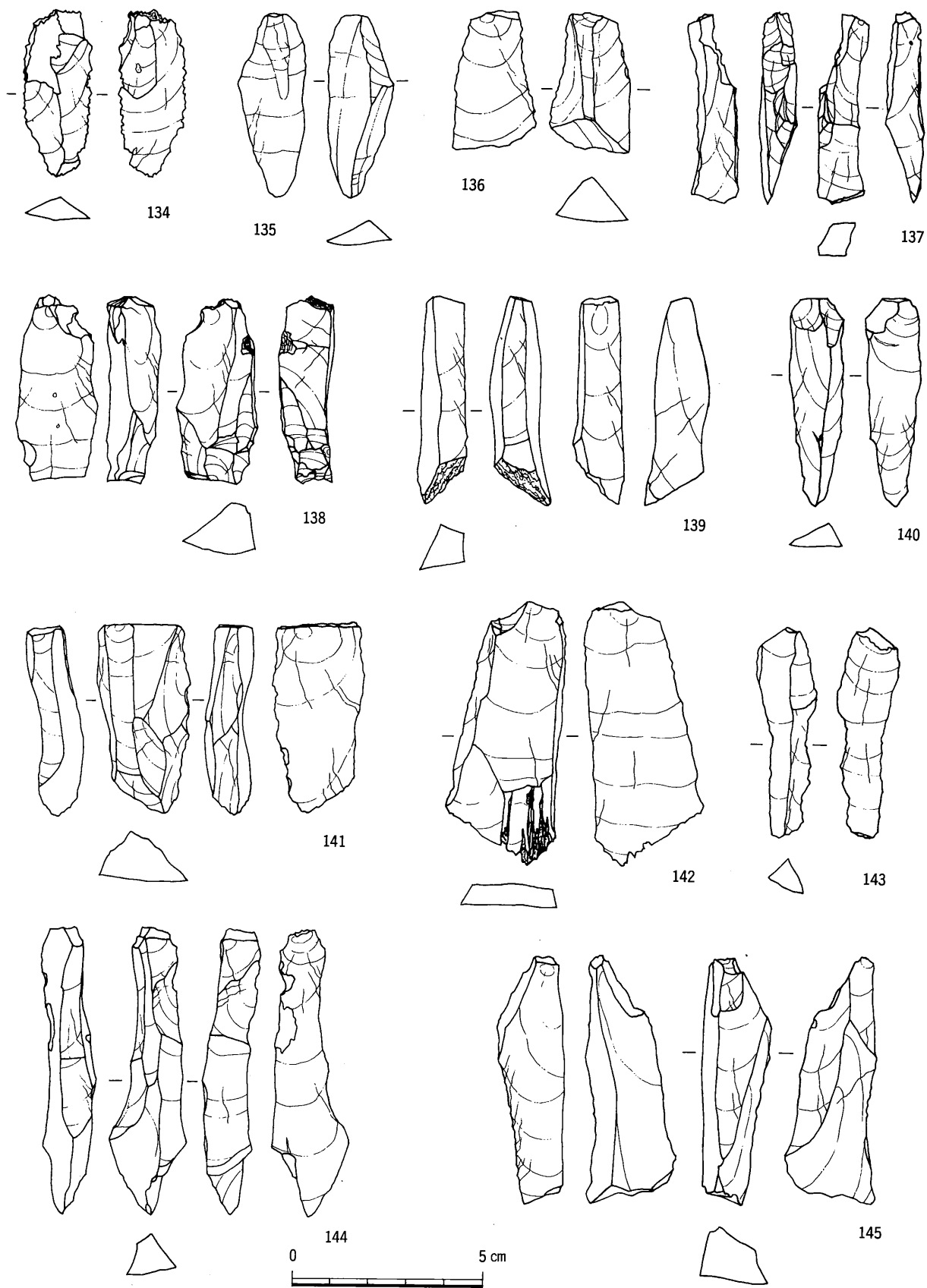
第 300 図 縦長剝片実測図 (7)



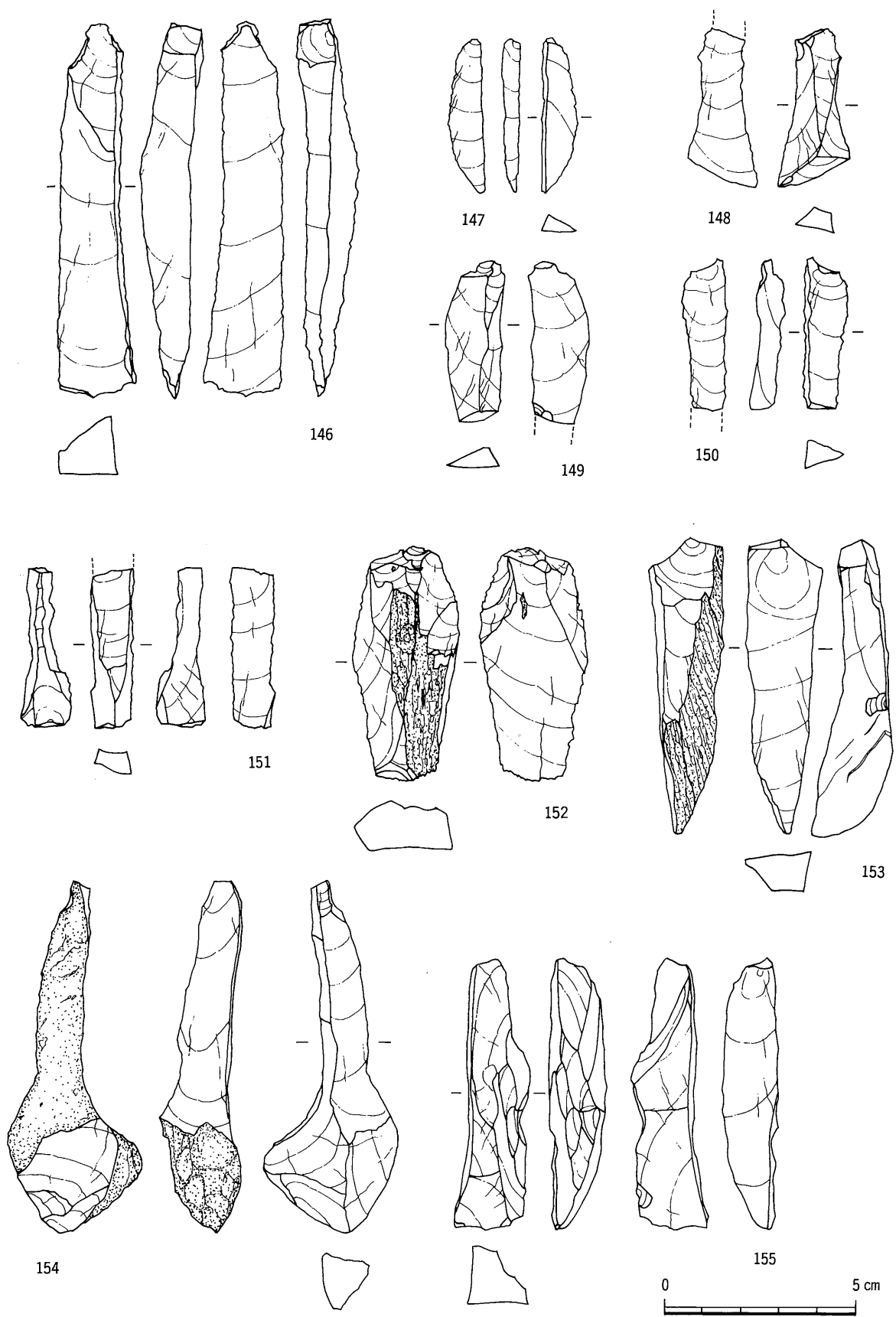
第 301 図 縦長剥片実測図 (8)



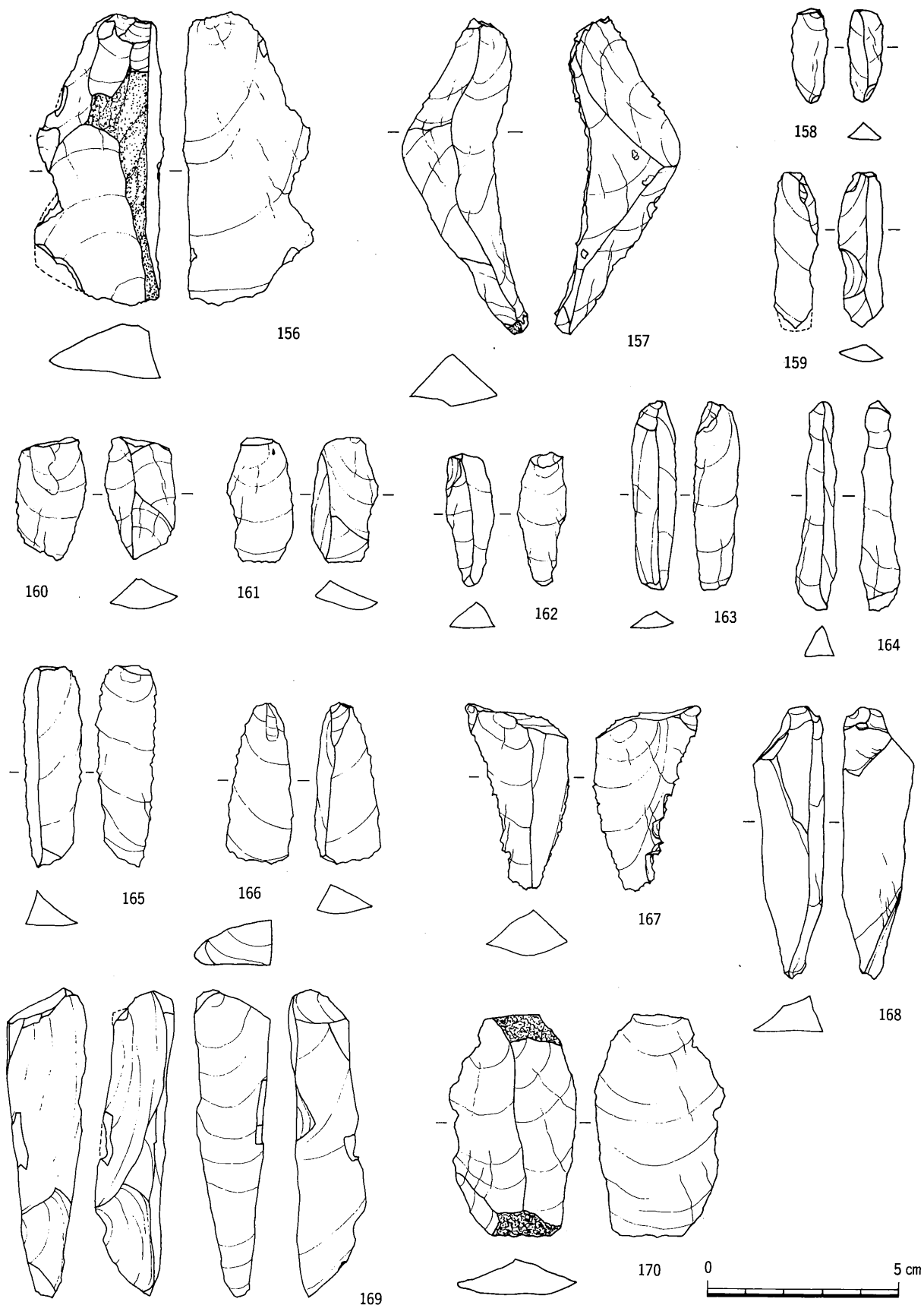
第 302 図 縦長剝片実測図 (9)



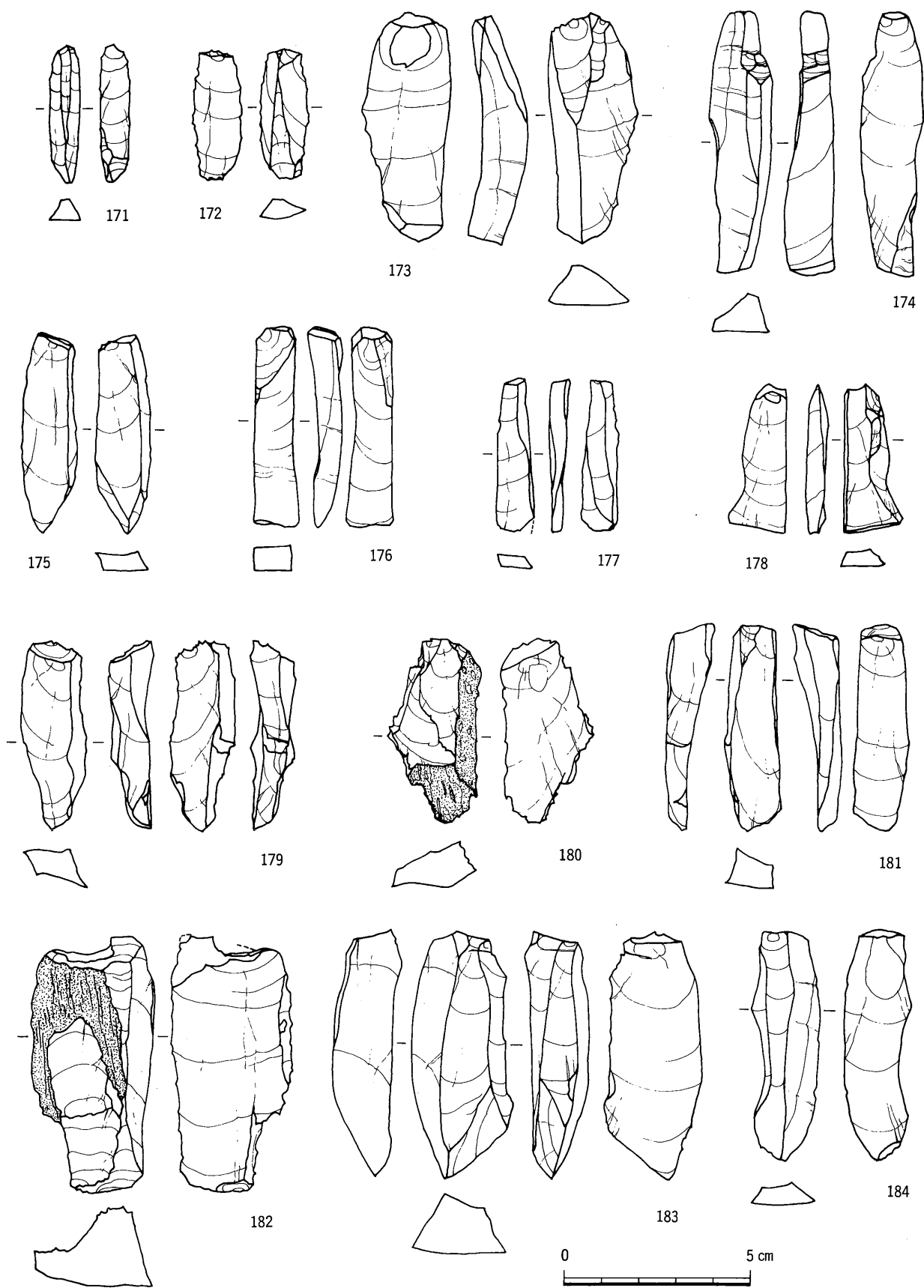
第 303 図 縦長剥片実測図 (10)



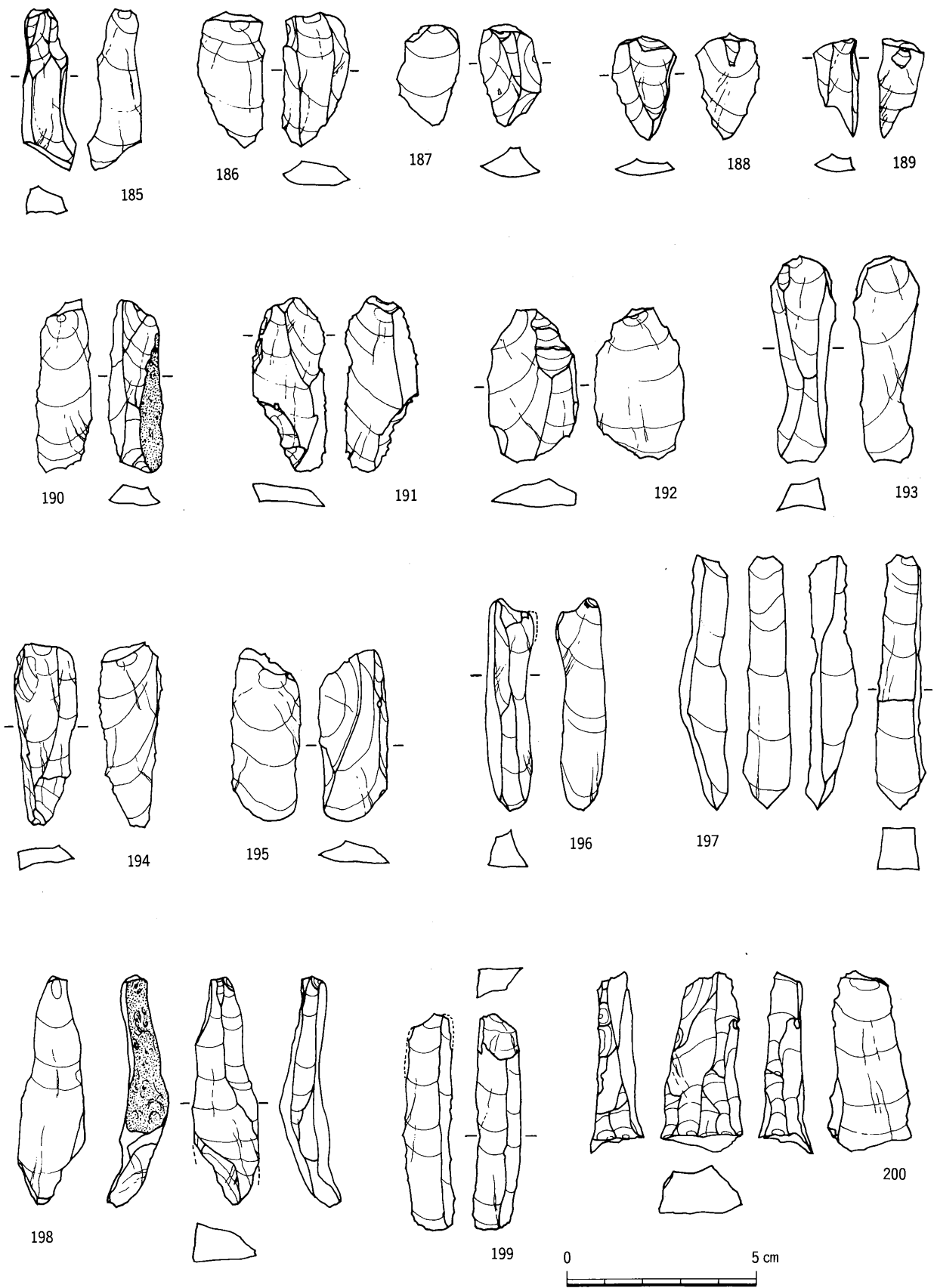
第 304 図 縦長剥片実測図 (11)



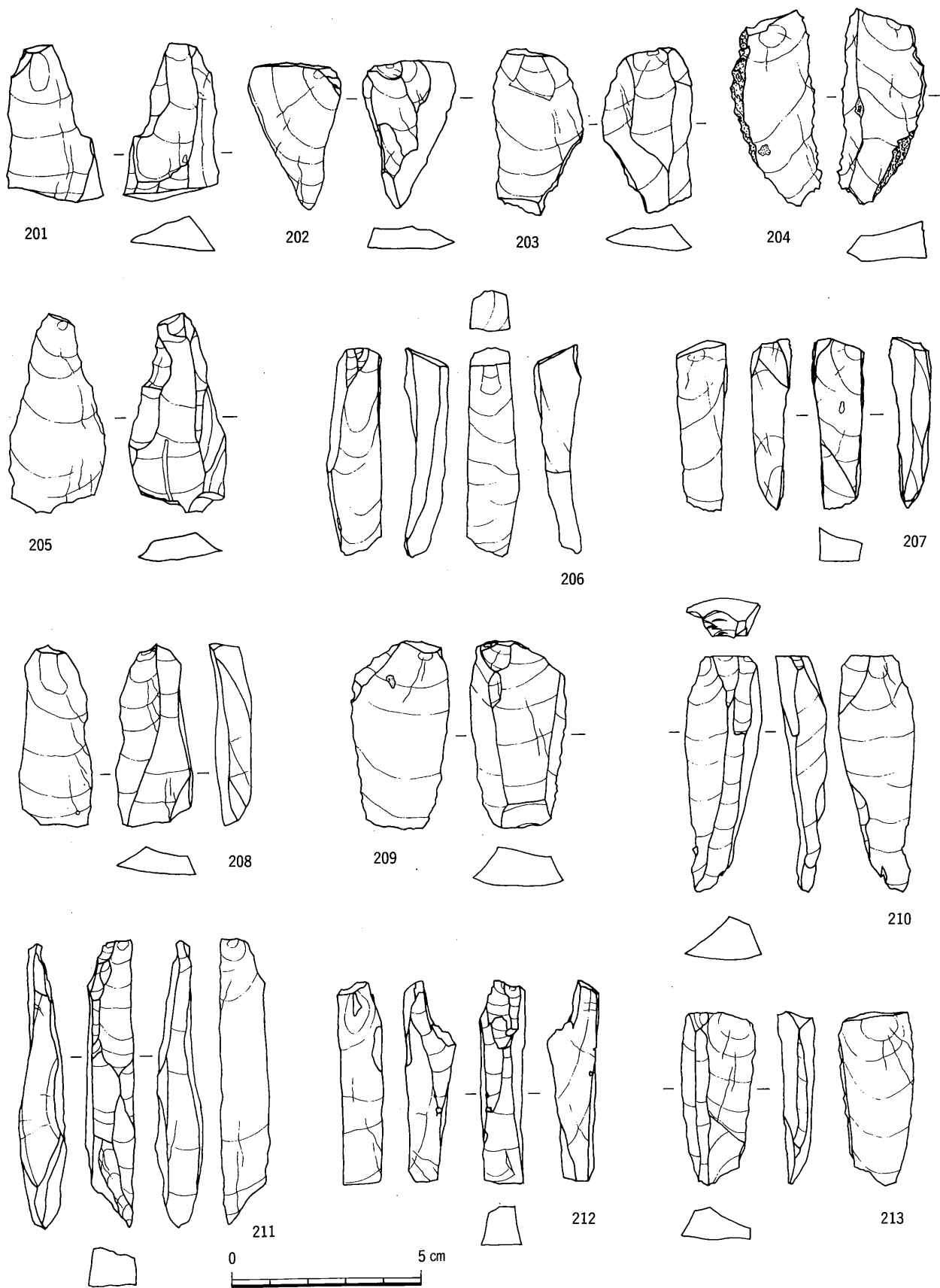
第 305 図 縦長剥片実測図 (12)



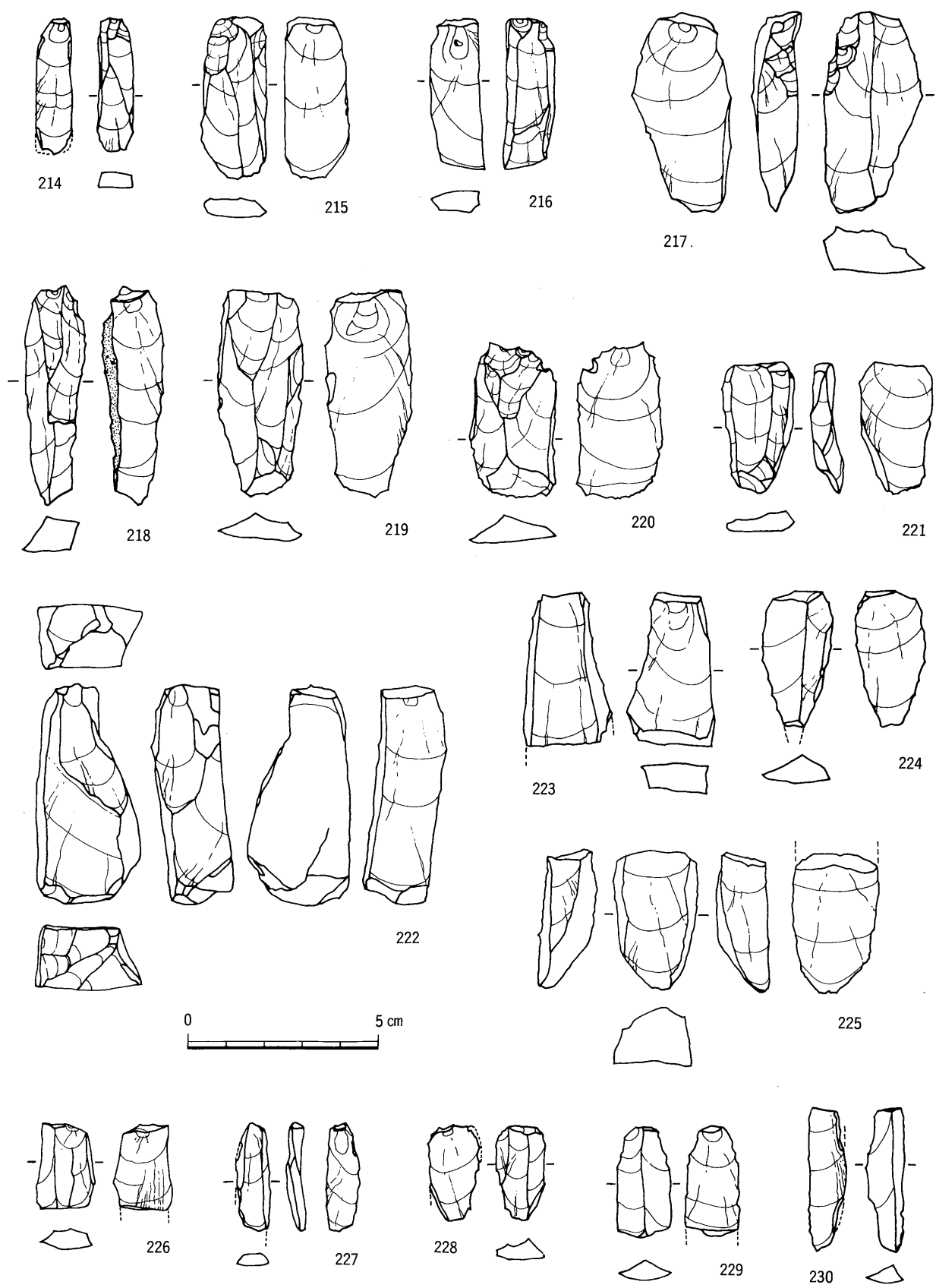
第 306 図 縦長剥片実測図 (13)



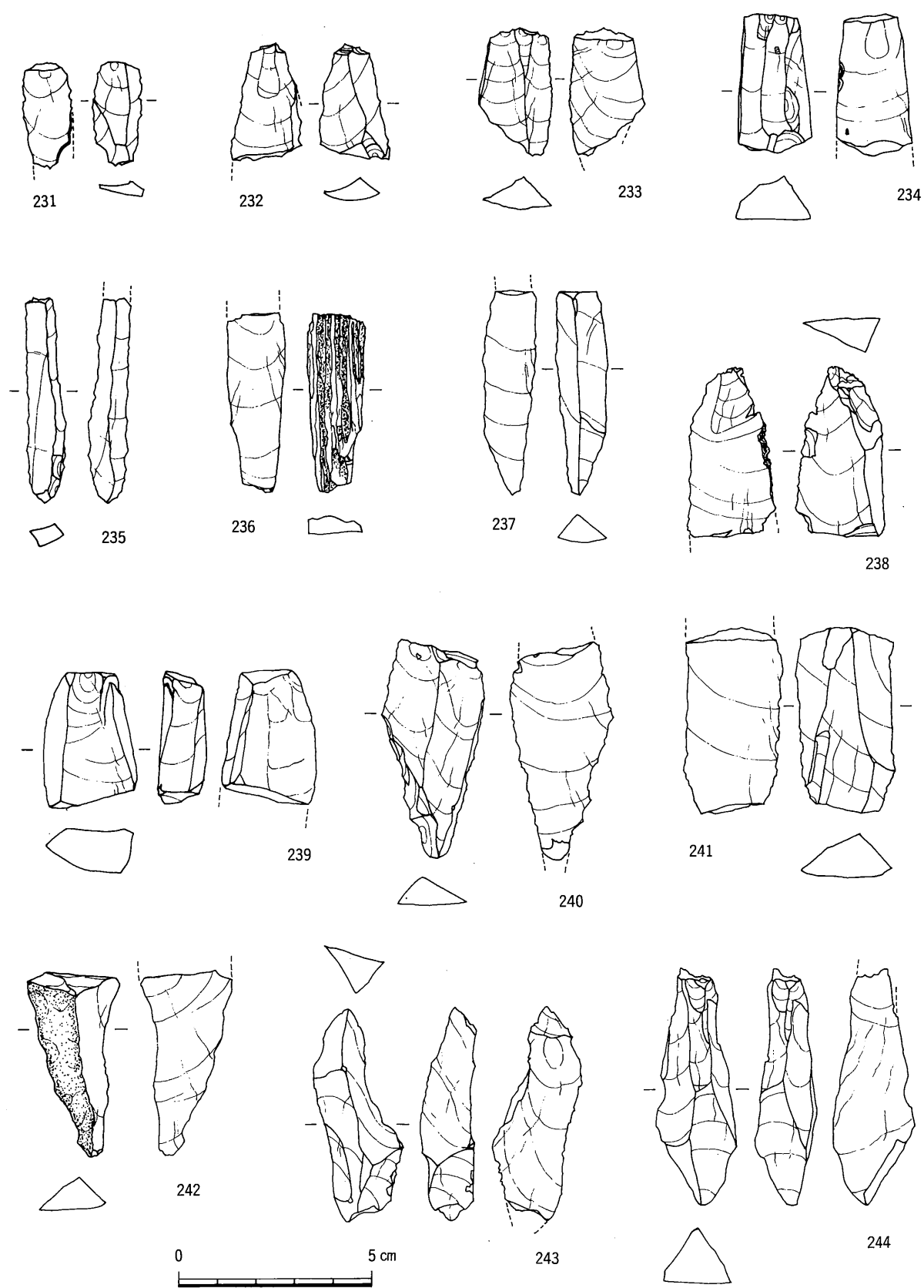
第 307 図 縦長剥片実測図 (14)



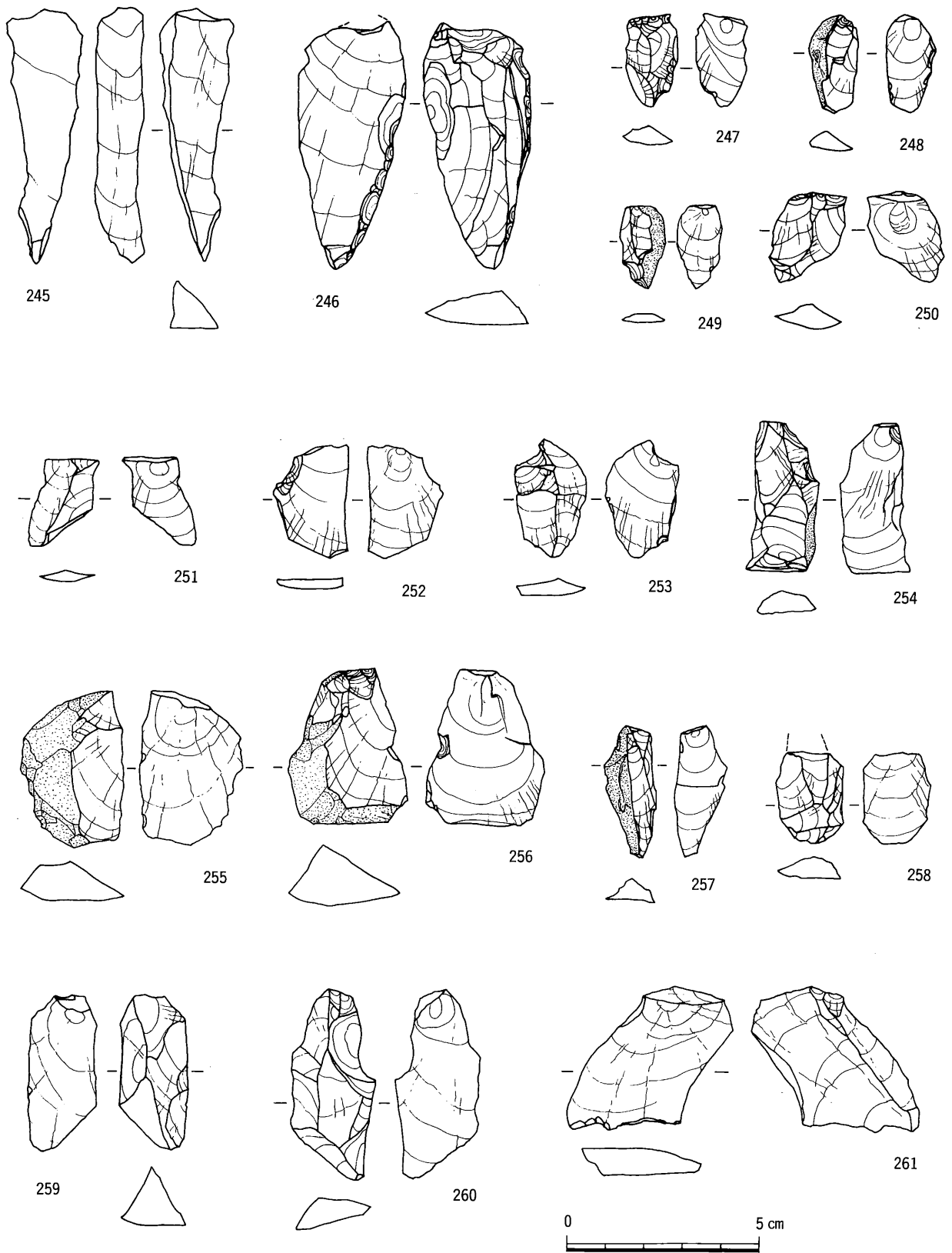
第 308 図 縦長剥片実測図 (15)



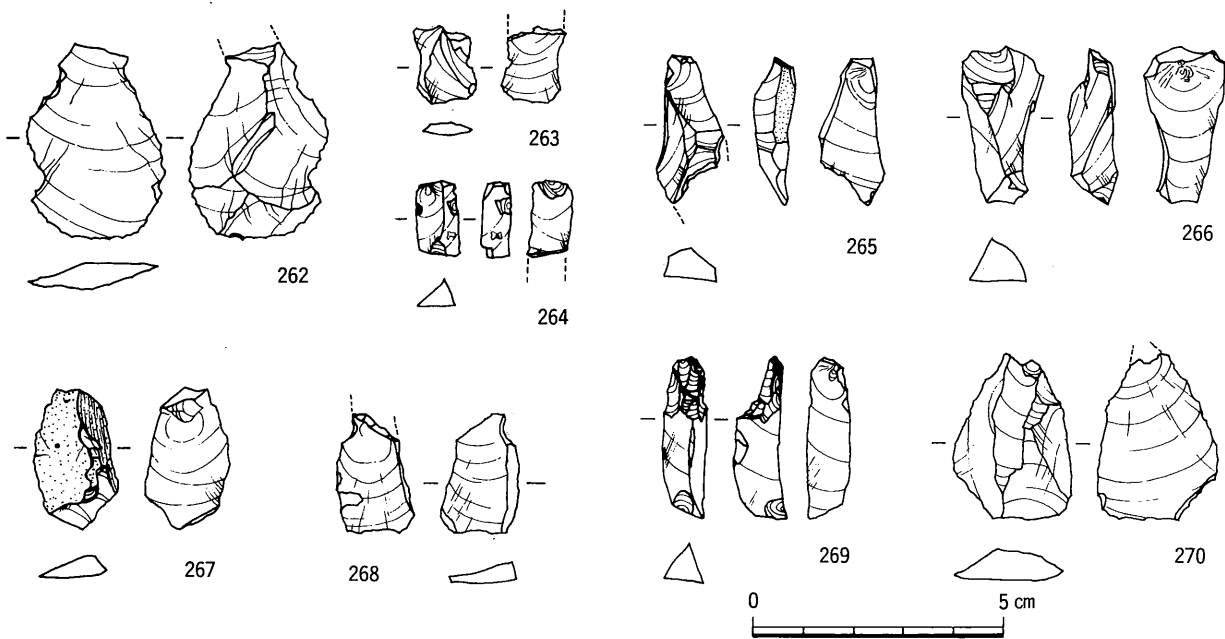
第 309 図 縦長剝片実測図 (16)



第 310 図 縦長剝片実測図 (17)



第 311 図 縦長剥片実測図 (18)



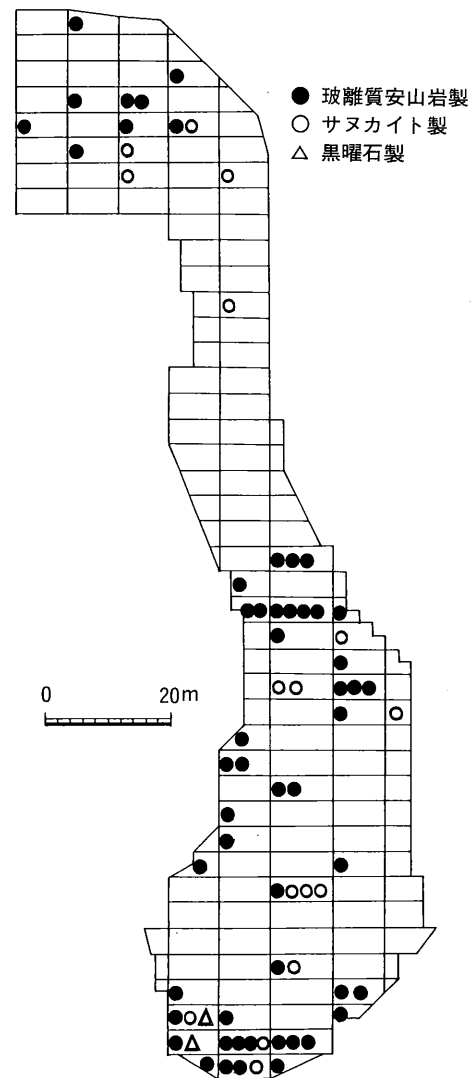
第 312 図 縦長剥片実測図 (19)

16. 細石核 (第313図～第325図)

72点出土した。玻璃質安山岩製が55点と最も多く、サヌカイト製が16点、黒曜石製が2点である。表採された1点(第316図17)を除いて出土状況を見ると、調査地区南部の1列～3列、中央部の16列～19列に特に多く、15点以上が出土している。ほかに、B12・A13-1付近、A38-3付近でも5～10点の出土があり、また、B8で4点、B21で3点が出土している。B8の4点のうち3点はサヌカイト製細石核であり、一方、黒曜石製細石核はA2-2・A3-2から各1点が出土した。後述するように、玻璃質安山岩と黒曜石は、細石核が集中する地点にそれ以外の遺物も集中する傾向があり、注目される(第37表)。

細石核は石材によって特徴があるので、石材ごとにみていくことにする。玻璃質安山岩製の細石核は出土が最も多く、多様である。

第313図1・2は角柱状をなす細石核で、小口部分から細石刃を剥離している。石核の両側面に自然面を残し、上面(打面)は大きな剥離面に一方の側面方向から調整を加えている。この2例は自然面の残存状態からみて、1原石から1石核を作ったか、あるいは原石を半截して細石核としたものと考えられ



第 37 表 細石核出土分布表

る。これをⅠ類とする。

5・8・12・45は角柱状ないし角錐状を呈し、小口部分から細石刃を剥離する石核である。5の一方の側面は打面側から丁寧な調整を施すが、他はすべて一方の側面に自然面を有し、他の側面と打面に素材作製時の古い分割面を残す。これをⅡA類とする。

10・11は一方の側面や打面に調整を施しているが、形態からⅡA類に含まれる可能性が強いものと思われる。なお、10は打面と作業面に転移が認められる。

4・7は角柱状ないし角錐状をなすが、ⅡA類と異なり、側面に自然面を持たない。打面と一方の側面は素材作製時の古い分割面からなり、調整はほとんど施さない。ⅡB類とする。

3・9・13・14・16・17・19は板状を呈し、一方の側面に大きな分割面を持つと共に他方の側面に自然面を残すもので、これをⅢA類とする。9・13は両端から細石刃の剥離を行っている。

18・21～26・29～31・33・35・36・38～41・44は板状を呈し、両側面に分割面をもつものである。石核の大きさに差があり、すべてを同一に捉えることはできないであろう。全体をⅢB類とするが、高さが2.6cmを越えるもの(ⅢB-1類)、2.2cm前後のもの(ⅢB-2類)、2cm以下のもの(ⅢB-3類)に分けることができる。このような石核の大きさの差は素材の大きさの差によるものと考えられるが、ただ、2.2cm前後のものについては、元来大きかったものが細石刃の剥離によって小さくなった可能性があり、両者の中間的なものと考えておきたい。18・21・35・41は両端から細石刃を剥離し、24・39は打面転移が認められる。ⅢB類とする。

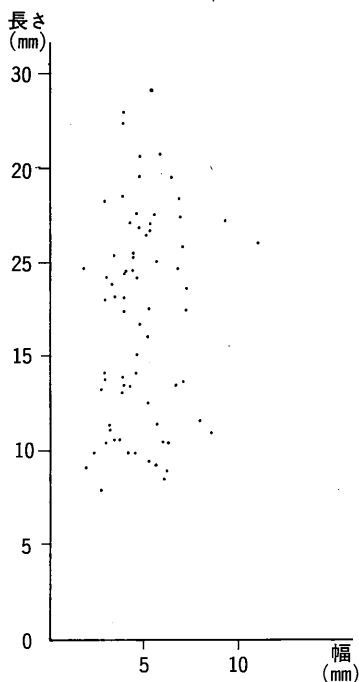
6・15・20・27・28・32・34・37・43・47～56は板状を呈するが、側面が複数の剥離面ないし調整面からなり、大きな分割面が一方の側面しか認められないか、両側面とも認められないものである。石核の高さ2.2cm前後のものも多く、ⅢB類に比べてやや小さい傾向を示す。ⅢC類とする。47・48・52・53・55・56など打面転移が多く認められる。56は細石刃と横長剥片の剥離が認められる珍しい例である。56右図上端の横長剥片の剥離痕は、上面の細石刃剥離より新しいものとみられ、細石刃文化期における横長剥片剥離技術の残存を示す資料とすることができる。

黒曜石製細石核(第321図57・58)は両者とも角柱状をしているが、長側面から細石刃を剥離しているので本来は板状であったと思われる。57は、作業面での剥離のほか、下方から加撃して石核の稜の部分でも剥離している。上端の打面は作業面側からの1回の剥離で形成され、下端は小さな打撃を多く加え、打面はなくなっている。58は作業面の上下からの剥離が認められる。上端の打面には横方向からの細かな調整が加えられ、石核側面には上下方向からの調整が行われている。

サヌカイト製細石核には、玻璃質安山岩製細石核と同じく角柱状ないし角錐状のものと板状のものがあるが、前者は少ない。また、板状の細石核は、板状素材の側面部に槌状剥離を施す彫器との区別が難しいものがある。

59・60の2点は角錐(柱)状細石核で、小口部分からの細石刃の剥離が認められる。打面及び側面に素材の分割面を残すことは玻璃質安山岩製の同種の細石核と同じであるが、原石の大きさの差のためか、自然面は認められない。59は2ヶ所から細石刃の剥離を行っているが、両者とも剥離は進んでいない。

61～74は板状の素材を用いたサヌカイト製細石核である。板状の素材を用いた縦長剥片石核と同様、両側面に素材を分割した際の大きな分割面を持ち、小口部分から細石刃を剥離してい



第 38 表 細石刃剥離痕の長幅比

る。また、側面調整や打面調整は少なく、剥離された剥片の大きさを除けば縦長剥片石核との基本的な差を指摘することが難しい。また、67は細石刃の剥離がほとんど行われておらず、彫器とすることもできるのではないかと考えられるがその区別は難しい。

一方、これらの細石核に残された細石刃剥離痕のうち、最も大きいものをみると、長さ0.8cm、幅0.27cmのものから長さ2.91cm、幅0.54cmまでの大きさを示すが、長さ0.8～1.4cmのものと、長さ1.7～2.6cmのものが多い(第38表)。

第323図75～第324図77は玻璃質安山岩の原石である。77は片面の一部の自然面を除去されているが、これを含めると別表で示したように7個の原石が出土した。重さ5.1g～89.5g、最大長1.8cm～5.9cmと一定しないが、重さでみると10g以下・50g前後・80g前後の3種類に分れ、長さでみると5cm前後と2cm前後の2種類となる。玻璃質安山岩製の石器・石核からみれば、原石がこの程度の大きさを大きく越えないであろうことは容易に首肯しえよう。

78は玻璃質安山岩製のブランクで全面にわたって自然面が除去されている。玻璃質安山岩製の横長剥片石核には、自然面を丁寧に除去したものがないこと、II B類など自然面を残さない細石核があることなどから、細石核のブランクと考えられる。

79～86は玻璃質安山岩製の細石核の素材及び細石刃剥離の初期の段階の細石核である。細石核の素材としては角柱(錐)状の剥片のほか、板状の剥片や任意の剥片まで利用できるが、後者は細石核の素材を得る目的で作られたかどうかを容易に判断できないので、ここでは細石核の素材となりうる角柱(錐)状の剥片を紹介する。

79は背面を自然面とする分厚い横長剥片で、小さくて平坦な打面を持つ。自然礫を加撃して打面とし、剥離したもので、自然礫分割の初期の剥片である。

80は、79のような剥片の主要剥離面の中央を加撃して横に切断し、さらに一方の小口部分を切断している。この小口面を細石刃の剥離面とすれば、玻璃質安山岩製細石核II A類となる。

81は自然礫の礫面を直接加撃して断面弓形の分厚な剥片をつくり、主要剥離面の中央部を打撃して縦に切断している。さらに、小口部分は礫面側から切断するが、斜めになっている。最初の分割面を打面とする細い槌状剥離が数条認められるので、すでに細石刃を剥離し始めたものとすべきかもしれない。

82も細石核の作業面となるべき小口面と、打面及び側面となるべき2面を分割した素材である。

83は分厚い板状の細石核である。下段中央図の自然面と上段図の下側剥離面に対応する剥離が施されており、細石刃剥離と打面調整になるのであろう。下段左図には自然面側から調整剥離が施されているが、羽佐島遺跡では細石核の側面調整は一般に打面側からなされているようなので、中央図の自然面が打面である可能性が強い。なお、83でも作業面が最もあとに分割によって作られている。

84～86は角柱(錐)状の細石核素材であるが、先述のものに比べて側面調整が多く施されて

いる。そのため、自然面のあり方も若干異なるが、側面及び上面（打面）に分割面を有する点は79～82と変わらない。なお、84の上面には、原石から分割した際の打点を残している。おそらく、79のように剥片が小さかったので半截せず、側面を落して1個の素材としたためであろう。なお、46は細石核の打面再生剥片である。

17. 細石刃（第326図～第330図）

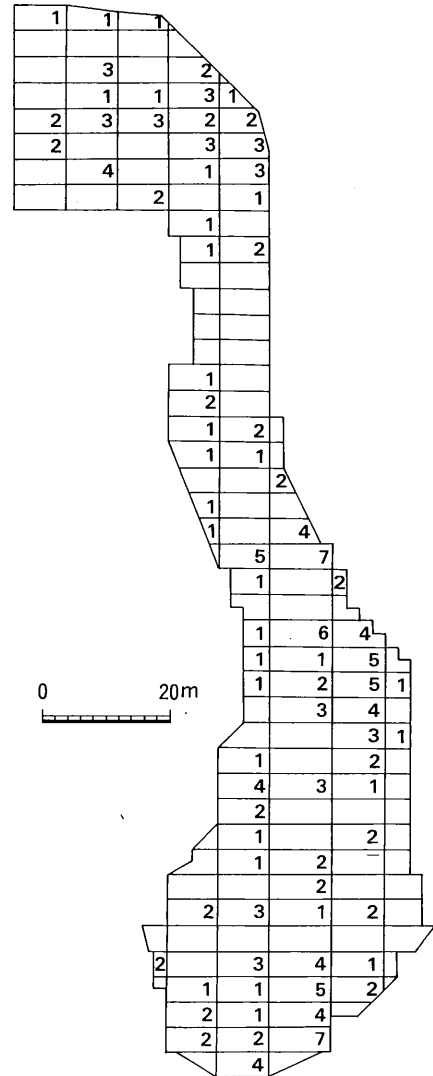
数点の表採品を除き、出土位置の明らかなものが188点出土した(第39表)。サヌカイト製が147点、玻璃質安山岩製が36点、黒曜石製が5点である。細石核は玻璃質安山岩製が47点で、22点のサヌカイト製の約2倍であるが、細石刃では逆にサヌカイト製が多く、玻璃質安山岩製の約4倍もの点数が出土している。

細石刃は、A29～A32列などの一部分を除いてほぼ全体から出土しているが、調査地区南部や中央部南側などに多く、B2周辺、C16-1周辺、B21周辺などには特に集中している。こうした細石刃の分布状況は、細石核の分布とほぼ一致する。

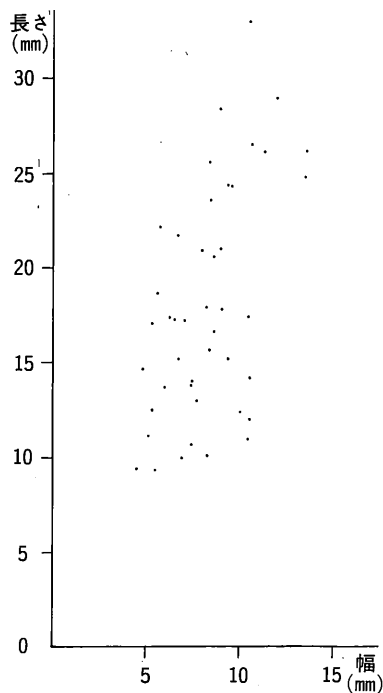
石材別にみると、玻璃質安山岩製細石刃は調査地区南端部とC16-1周辺に集中する傾向が大きく、調査地区北部からは細石核が9点出土しているにもかかわらずわずか2点しか出土していない。これに対してサヌカイト製細石刃は分布がやや広くなり、北部での出土も少なくない。また、サヌカイト製細石核の出土がみられなかった19～30列からも27点が出土している。黒曜石製細石刃はA2-1・A3-1・A5-1・C4-1から各1点ずつ出土しているが、黒曜石の細石核もA2-2・A3-2に1点ずつあって、これと近接した出土である。

図示した細石刃をみると長さ1～2.2cm、幅0.5～0.8cm、重さ0.1～0.4gまでのものがほとんどを占めるが、長さが2.5cm前後のもの、重さが1g以上のものも少数認められる。また、重さの分布は集中傾向が著しいが、長さは1.5～1.8cmのものが多いものの顕著な集中は認められない。これらの中には意図的に折断したと思われるものと破損したものが含まれるが、前者の場合（第329図95・97・110・113・117）でも長さがほぼ1cmを越える。

サヌカイト製と玻璃質安山岩製の細石刃を比較すると、サヌカイト製細石刃がわずかに大きい。折断や破損のみられないサヌカイト製細石刃は、長さ1.7cm前後、折断や破損のあるものは1.5～1.7cmに分布の中心があるが、玻璃質安山岩製細石刃では折断・破損のないものは、1.3cm



第39表 細石刃出土分布表



第 40 表 細石刃の長幅比

18. 叩き石 (第331図～第338図)

破片ともあわせて、叩き石の可能性のある石材は163点出土した。ただ、これらは純粋な旧石器時代の遺物包含層から出土したものではなく、しかも遺跡が海岸に近い低丘陵上に立地することから、類似の石材が叩き石以外の目的で弥生時代以降に搬入されなかったとはいえない。しかし、体部の端部に使用痕と思われる破損・敲打痕を持つものは叩き石と考えて良いであろう。叩き石の時期は旧石器時代を中心として、一部縄文時代、さらには弥生時代にまで及ぶかもしれない。

叩き石は発掘調査地区の全域から出土したが、特に多いのは調査地区北部であった。A36-2・A37-1・A38-1～A38-3・A39-1から各5点以上出土し、この付近に最も集中している。ちなみに、A35列以北から63点が出土しているが、これは全体の約38.7%にあたる。このほか、B7～B10付近や、調査区南端部にも多く、また、A5-2・C16-1から各4点、B13・A21-1・A33-2から各3点が出土している(第41表)。このような出土状況は、横長剥片石核とナイフ形石器などの出土傾向と類似点が認められるが、縦長剥片や縦長剥片石核とは異なる点が多い。

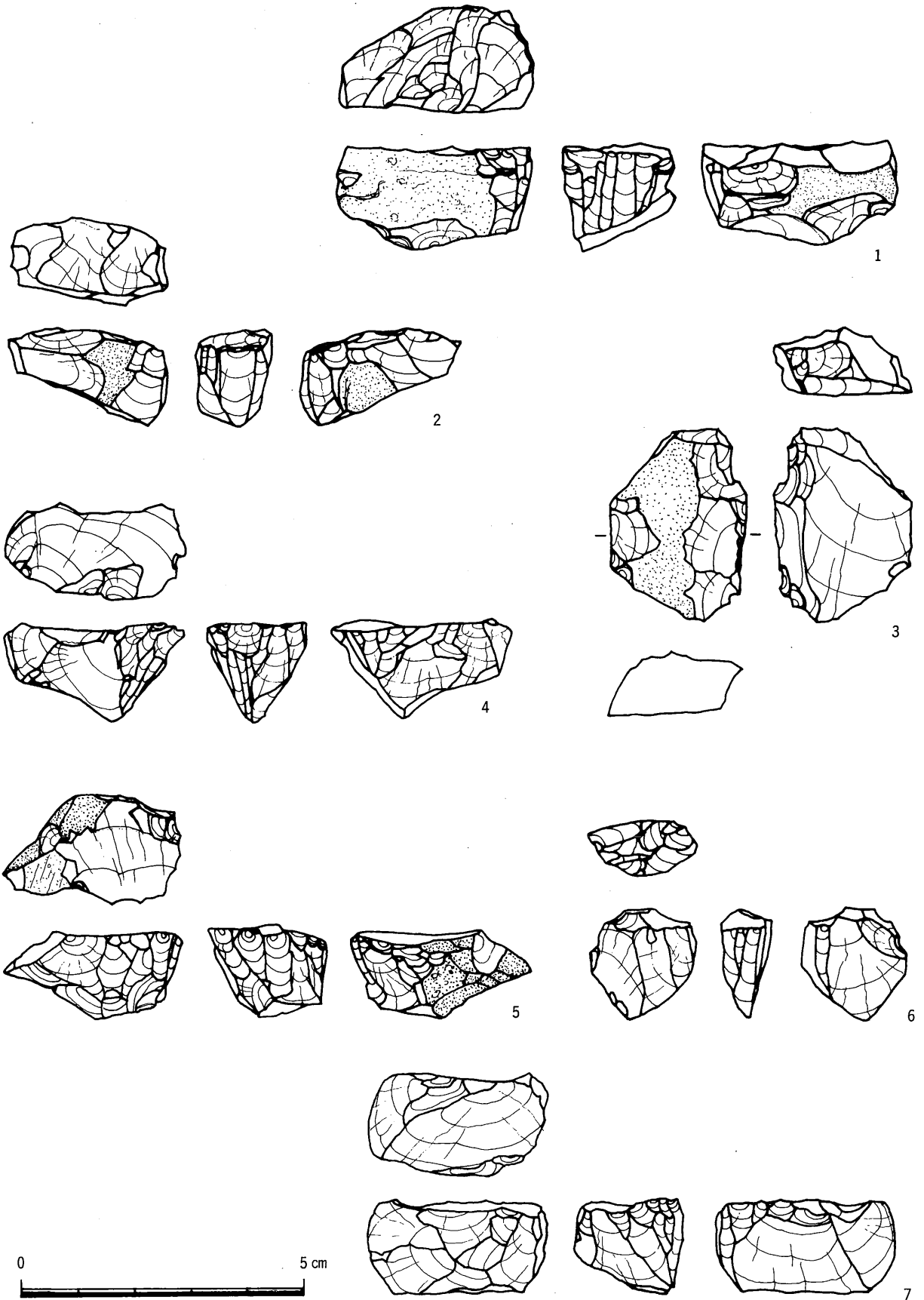
図示した61点の叩き石の石材は砂岩が21点で最も多く、全体の約1/3を占める。ついで讃岐岩質安山岩が14点であり、両者で半数を越える。これ以外の石材は多様であるが点数が少なく、讃岐岩質玄武岩2点、石英斑岩2点、閃緑岩2点、黒雲母花崗閃緑岩2点、黒雲母片岩1点、結晶片岩2点、緑色片岩2点、珪質頁岩2点、玢岩1点、不明10点などとなっている。

叩き石としたものは第335図39の1点を除いて棒状を呈する。39は球状で、使用痕もはっきりしない。また、10・11・14・21・47・54なども明らかな使用痕は認められず、叩き石でない可能性もある。使用痕と思われる小剥離や敲打痕は、一方の端部にのみ認められるものが10例に対して、両端に認められるものが7～9例あり、ほぼ等量の出土といえる。

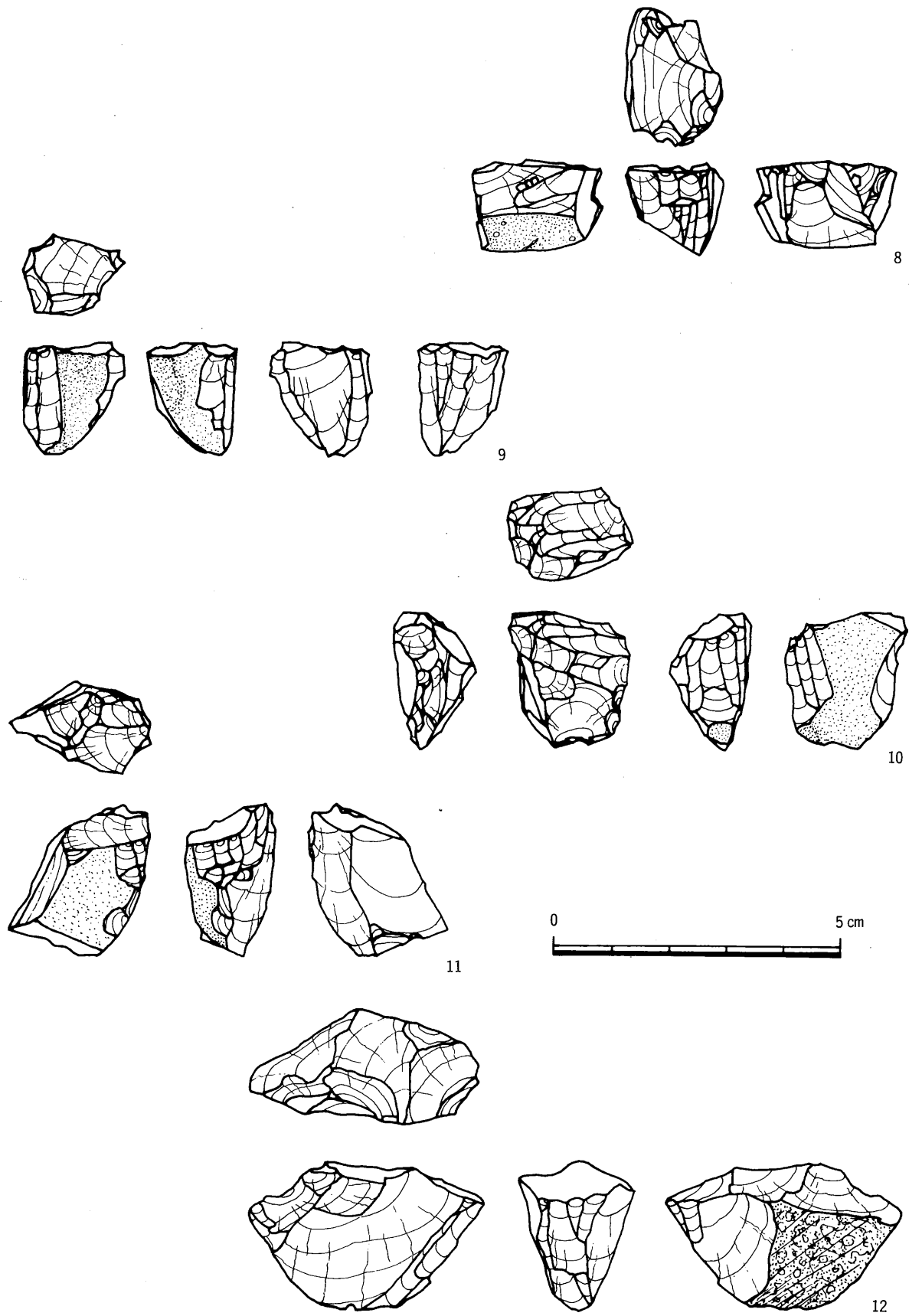
前後、折断・破損のあるものは1cm前後と1.3～1.6cm程度のものが多い。また、重さについてもサヌカイト製細石刃は0.2～0.4gのものが多いが、玻璃質安山岩製では0.4gに達するものはほとんどない。

一方、折断ないし破損のない細石刃の長さは、0.9～1.8cmのものと2～2.8cmの二者に分れるようであるが(第40表)、細石核の剥離痕の長さでも0.8～1.4cmのものと、1.7～2.6cmのもの2つのグループに分けることができる。(第38表)。

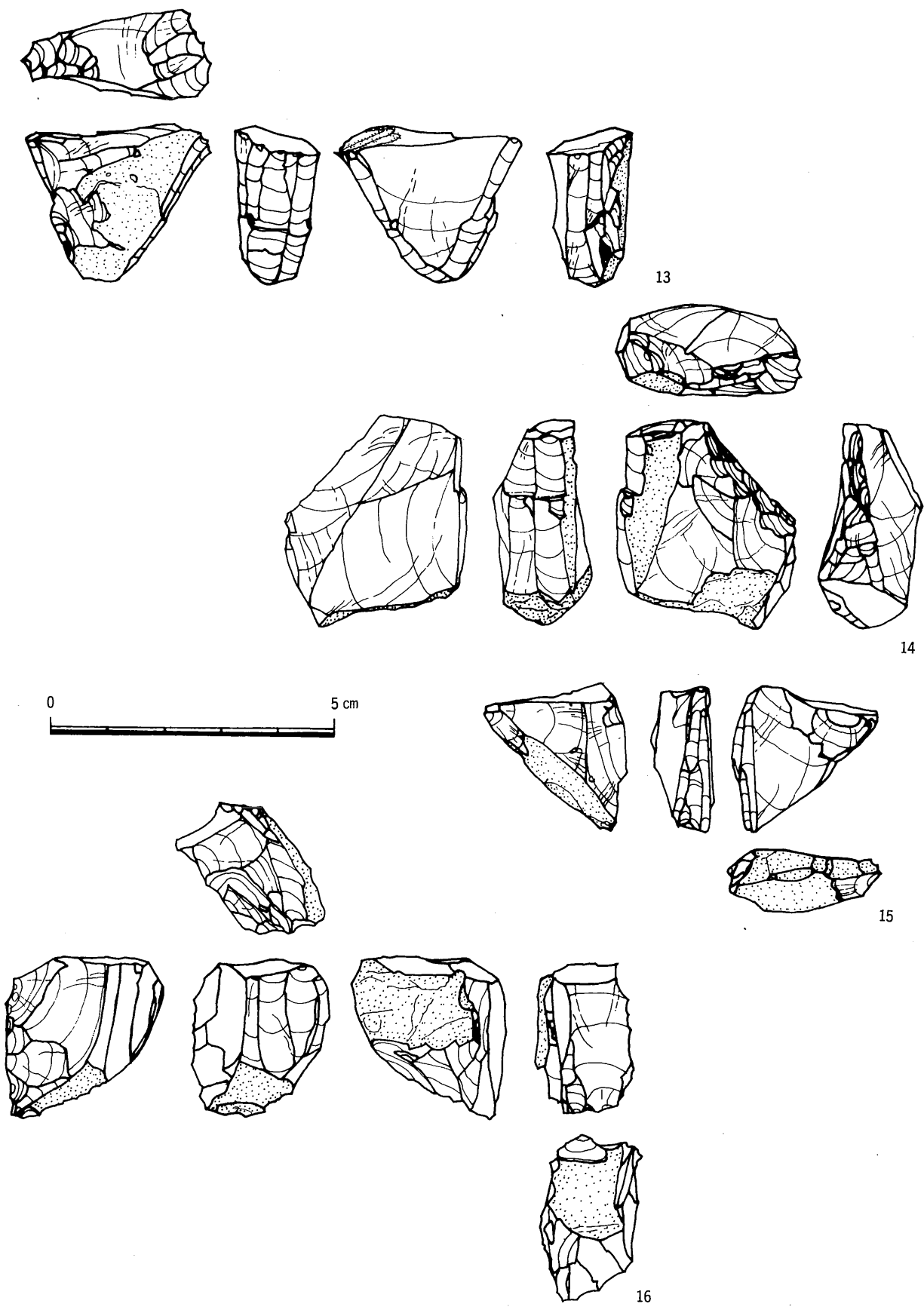
なお、細石刃の意図的な折断と破損の区別は難しいが、比較的観察の容易な玻璃質安山岩製細石刃の折れ口をみると、第329図95・97・110・113・117のいずれも加撃点は明らかでないものの、主要剥離面側を中心とするリングが認められ、確認できる折れ口のリングが一定であることから、これらは意図的な折断であると思われる。



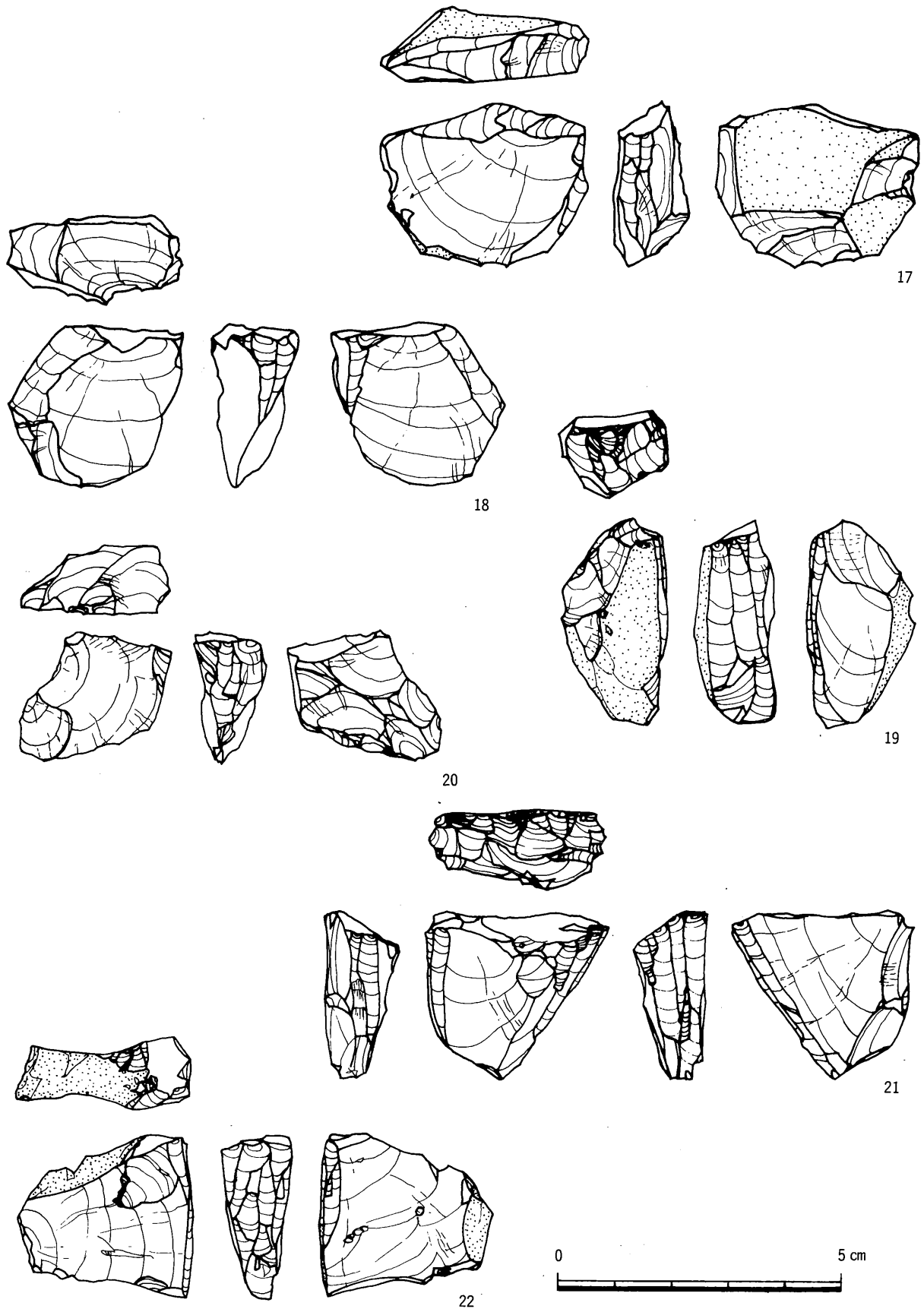
第 313 図 細石核実測図 (1)



第 314 図 細石核実測図 (2)



第 315 図 細石核実測図 (3)



第 316 図 細石核実測図 (4)